



# Solaris 9 インストールガイド

---

Sun Microsystems, Inc.  
4150 Network Circle  
Santa Clara, CA 95054  
U.S.A.

Part No: 817-1217-10  
2003 年 4 月

Copyright 2003 Sun Microsystems, Inc. 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されず、サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

Federal Acquisitions: Commercial Software—Government Users Subject to Standard License Terms and Conditions.

本製品に含まれる HG 明朝 L、HG-MincyoL-Sun、HG ゴシック B、および HG-GothicB-Sun は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。HG 平成明朝体 W3@X12 は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会からライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、docs.sun.com、AnswerBook、AnswerBook2、JumpStart、Solaris Web Start、Power Management、Sun ONE Application Server、Solaris Flash、Solaris Live Upgrade は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします)の商標もしくは登録商標です。

サンのロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

Wnn は、京都大学、株式会社アステック、オムロン株式会社で共同開発されたソフトウェアです。

Wnn6 は、オムロン株式会社、オムロンソフトウェア株式会社で共同開発されたソフトウェアです。© Copyright OMRON Co., Ltd. 1995-2000. All Rights Reserved. © Copyright OMRON SOFTWARE Co., Ltd. 1995-2002 All Rights Reserved.

「ATOK」は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。

「ATOK Server/ATOK12」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK Server/ATOK12」にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本製品に含まれる郵便番号辞書 (7 桁/5 桁) は郵政事業庁が公開したデータを元に制作された物です (一部データの加工を行なっています)。

本製品に含まれるフェイスマーク辞書は、株式会社ビレッジセンターの許諾のもと、同社が発行する『インターネット・パソコン通信フェイスマークガイド '98』に添付のものを使用しています。© 1997 ビレッジセンター

Unicode は、Unicode, Inc. の商標です。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

DiComboBox ウィジェットと DtSpinBox ウィジェットのプログラムおよびドキュメントは、Interleaf, Inc. から提供されたものです。(© 1993 Interleaf, Inc.)

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されず、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Solaris 9 Installation Guide

Part No: 817-0483-10

Revision A



030309@5533



# 目次

---

はじめに	17
<b>1 Solaris のインストールおよびアップグレードの計画</b>	<b>21</b>
<b>2 Solaris のインストールおよびアップグレードの計画の概要</b>	<b>23</b>
作業マップ: Solaris ソフトウェアのインストールまたはアップグレード	24
初期インストールかアップグレードか	25
初期インストール	25
アップグレード	25
システム要件	27
メモリー要件	28
Solaris 9 INSTALLATION CD を使用するための要件	28
ネットワークからインストールするか DVD または CD を使ってインストールするか	30
DVD メディアの使用	31
Sun ONE Application Server のインストール後の構成	31
x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更	31
x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) と PXE へのアクセス	32
<b>3 Solaris インストール方法の選択</b>	<b>33</b>
Solaris Web Start	33
Solaris suninstall プログラム	34
カスタム JumpStart	34
フラッシュインストール機能	35

	Solaris Live Upgrade の方法	36
	SPARC: ファクトリ JumpStart	36
<b>4</b>	<b>Solaris のインストールおよびアップグレードの準備</b>	<b>37</b>
<b>5</b>	<b>ディスク容量およびスワップ容量の割り当てに関する指針</b>	<b>39</b>
	ディスク容量の割り当て	39
	ディスク容量に関する一般的な計画と推奨事項	39
	ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量	40
	SPARC: スワップ領域の割り当て方法	41
<b>6</b>	<b>インストールやアップグレードの前に収集すべき情報</b>	<b>43</b>
	インストール用のチェックリスト	43
	インストール用のワークシート	44
	アップグレード用のチェックリスト	49
	アップグレード用のワークシート	50
<b>7</b>	<b>システム構成情報の事前設定</b>	<b>55</b>
	システム構成情報を事前設定することの利点	55
	システム構成情報の事前設定方法	56
	sysidcfg ファイルによる事前設定	57
	sysidcfg ファイルの構文規則	58
	sysidcfg ファイルキーワード	59
	▼ sysidcfg 構成ファイルを作成する方法	62
	ネームサービスによる事前設定	63
	▼ NIS を使ってロケールを事前設定する方法	64
	▼ NIS+ を使ってロケールを事前設定する方法	65
	SPARC: 電源管理情報の事前設定	66
<b>8</b>	<b>Solaris オペレーティング環境のアップグレード</b>	<b>69</b>
	アップグレード	69
	Solaris のアップグレード方法	70
	Solaris Live Upgrade の利用	71
	カスタム JumpStart によるアップグレード	72
	ディスク容量の再配置を使用するアップグレード	72
	アップグレード前のシステムのバックアップ	73

- 9 ネットワークインストールの準備 75
  
- 10 ネットワークインストールの準備 (概要) 77
  - ネットワークインストールの計画 77
    - ネットワークインストールに必要なサーバー 77
    - DHCP によるネットワークインストールパラメータの指定 79
  
- 11 DVD メディアを使用してネットワークからインストールするための準備 81
  - 作業マップ: DVD メディアを使用してネットワーク上でインストールするための準備 81
  - DVD メディアを用いたインストールサーバーの作成 82
    - ▼ SPARC または x86 DVD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法 83
    - ▼ x86: SPARC または x86 DVD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法 86
  - DVD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成 90
    - ▼ DVD イメージを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する方法 90
  - DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する 92
    - ▼ サーバーから `add_install_client` を実行してネットワークからインストールするシステムを追加する方法 92
  
- 12 CD メディアを使用してネットワークからインストールするための準備 97
  - 作業マップ: CD メディアを使用してネットワーク上でインストールするための準備 98
  - CD メディアによる SPARC インストールサーバーの作成 99
    - ▼ SPARC: SPARC CD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法 99
  - CD メディアによる x86 インストールサーバーの作成 104
    - ▼ x86: x86 CD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法 104
  - クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成 109
    - ▼ x86 CD メディアを使用して SPARC システムに x86 インストールサーバーを作成する方法 109
    - ▼ SPARC CD メディアを使用して x86 システムに SPARC インストールサーバーを作成する方法 115
  - CD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成 121
    - ▼ CD イメージを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する方法 121

CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する  
123

▼ サーバーから `add_install_client` を実行してネットワークからインストールするシステムを追加する方法 123

### 13 ネットワークからインストールするための準備 (コマンドリファレンス) 127

### 14 Solaris Web Start の使用 129

Solaris Web Start の実行方法 129

SPARC: Solaris Web Start プログラムによるインストールまたはアップグレード 130

SPARC: 作業マップ: Solaris Web Start インストールの実行 131

▼ SPARC: Solaris Web Start プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法 131

x86: Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード 135

x86: 作業マップ: Solaris Web Start インストールの実行 136

▼ x86: Solaris Web Start を使用してインストールまたはアップグレードする方法 136

Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード後に必要な作業 142

▼ アップグレード後にローカル変更を復元する方法 143

### 15 Solaris suninstall プログラムの使用 145

Solaris suninstall プログラム 145

SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード  
146

SPARC: 作業マップ: Solaris suninstall プログラム インストールの実行 146

▼ SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード 147

x86: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード  
149

x86: 作業マップ: suninstall プログラムを実行する 150

▼ x86: Solaris suninstall プログラムを使用してインストールまたはアップグレードするには 150

Solaris suninstall プログラムによるアップグレード後に必要な作業 155

▼ アップグレード後にローカル変更を復元する方法 156

16	フラッシュインストール機能	157
17	フラッシュの概要と計画	159
	フラッシュの概要	159
	初期インストールでクローンシステムにインストールする	159
	フラッシュ差分アーカイブを使用してクローンシステムを更新する	161
	フラッシュインストールの計画	164
	マスターシステムへの初期インストールの設計	164
	フラッシュアーカイブの作成の計画	167
	フラッシュアーカイブのインストールの計画	171
18	フラッシュアーカイブの作成	173
	作業マップ: フラッシュアーカイブを作成する	173
	マスターシステムへのインストール	174
	▼ 初期インストールでマスターシステムにインストールする方法	175
	カスタムスクリプトの作成	175
	▼ 作成前スクリプトの作成方法	176
	▼ 配置前スクリプトの作成方法	178
	▼ 配置後スクリプトの作成方法	178
	▼ 再起動スクリプトの作成方法	179
	フラッシュアーカイブの作成	180
	▼ 初期インストール用フラッシュアーカイブの作成方法	180
	▼ マスターイメージの更新と差分アーカイブの作成	185
19	フラッシュアーカイブのインストールと管理	189
	フラッシュアーカイブをインストールする方法	189
	フラッシュアーカイブの管理	190
	フラッシュアーカイブの分割	190
	フラッシュアーカイブの結合	191
	アーカイブからの情報の抽出	192
20	フラッシュに関するリファレンス情報	195
	フラッシュアーカイブセクションの説明	195
	フラッシュのキーワード	197
	一般的なキーワード	197
	識別セクションのキーワード	198

	ユーザー定義セクションのキーワード	202
	フラッシュ flar create コマンド	202
	flar create	202
<b>21</b>	<b>カスタム JumpStart インストール</b>	<b>207</b>
<b>22</b>	<b>カスタム JumpStart の概要</b>	<b>209</b>
	カスタム JumpStart とは	209
	JumpStart プログラムが Solaris ソフトウェアをインストールする方法	210
<b>23</b>	<b>カスタム JumpStart インストールの準備</b>	<b>215</b>
	作業マップ: カスタム JumpStart インストールの準備	216
	ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成	217
	▼ JumpStart ディレクトリをサーバー上に作成する方法	218
	▼ すべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする方法	220
	スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成	221
	▼ SPARC: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法	222
	▼ x86: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法	224
	rules ファイルの作成	227
	rules ファイルの構文	227
	▼ rules ファイルを作成する方法	228
	rules ファイルの例	229
	プロファイルの作成	230
	プロファイルの構文	231
	▼ プロファイルを作成する方法	231
	プロファイルの例	232
	プロファイルのテスト	235
	▼ 一時的な Solaris 9 環境を作成してプロファイル进行测试する方法	236
	▼ プロファイル进行测试する方法	237
	プロファイルテストの例	239
	rules ファイルの妥当性を検査する	239
	▼ rules ファイルの妥当性を検査する方法	240
<b>24</b>	<b>カスタム JumpStart オプション機能の使用</b>	<b>243</b>
	begin スクリプトの作成	243



	begin スクリプトに関する注意事項	244
	begin スクリプトによる動的プロファイルの作成	244
	finish スクリプトの作成	245
	finish スクリプトに関する注意事項	245
	▼ finish スクリプトでファイルを追加する方法	246
	finish スクリプトによるパッケージとパッチの追加	246
	finish スクリプトによるルート環境のカスタマイズ	248
	finish スクリプトによるシステムのルートパスワードの設定	248
	finish スクリプトを使用して Web Start インストールプログラムでソフトウェアをインストールする	250
	圧縮された構成ファイルの作成	250
	▼ 圧縮された構成ファイルを作成する方法	250
	圧縮された構成ファイルの例	251
	ディスク構成ファイルの作成	251
	▼ SPARC: ディスク構成ファイルの作成方法	252
	SPARC: ディスク構成ファイルの例	253
	▼ x86: ディスク構成ファイルを作成する方法	253
	x86: ディスク構成ファイルの例	255
	サイト固有のインストールプログラムの使用	256
<b>25</b>	<b>カスタムルールおよびプローブキーワードの作成</b>	<b>259</b>
	プローブキーワード	259
	custom_probes ファイルの作成	260
	custom_probes ファイルの構文	260
	custom_probes の関数名の構文	261
	▼ custom_probes ファイルを作成する方法	261
	custom_probes ファイルとキーワードの例	261
	custom_probes ファイルの妥当性検査	263
	▼ custom_probes ファイルを妥当性検査する方法	263
<b>26</b>	<b>カスタム JumpStart インストールの実行</b>	<b>265</b>
	SPARC: カスタム JumpStart インストールの実行	265
	SPARC: 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステム設定	265
	▼ カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法	267
	▼ SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法	268

- x86: カスタム JumpStart インストールの実行 270
  - x86: 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステムの設定 270
  - ▼ x86: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法 272
  
- 27 カスタム **JumpStart** によるインストール例 277
  - サイトの設定例 277
  - インストールサーバーの作成 279
  - x86: マーケティングシステム用のブートサーバーの作成 280
  - JumpStart ディレクトリの作成 281
  - JumpStart ディレクトリの共有 281
  - SPARC: エンジニアリンググループのプロファイル作成 281
  - x86: マーケティンググループのプロファイルの作成 282
  - rules ファイルの更新 282
  - rules ファイルの妥当性を検査する 283
  - SPARC: ネットワーク上でインストールするためのエンジニアリングシステムの設定 284
  - x86: ネットワーク上でインストールするためのマーケティングシステムの設定 284
  - SPARC: エンジニアリングシステムのブートと Solaris 9 ソフトウェアのインストール 285
  - x86: マーケティングシステムのブートと Solaris 9 ソフトウェアのインストール 286
  
- 28 カスタム **JumpStart** に関するリファレンス情報 287
  - ルールキーワードと値の説明 287
  - プロファイルキーワードと値 292
    - プロファイルキーワードのリスト 292
    - プロファイルキーワードの説明と例 293
  - カスタム JumpStart の環境変数 320
  - プローブキーワードと値 322
  
- 29 **Solaris Live Upgrade** (トピック) 325
  
- 30 **Solaris Live Upgrade** の概要 327
  - Solaris Live Upgrade の紹介 327
  - Solaris Live Upgrade の実行手順 328

<b>31</b>	<b>Solaris Live Upgrade の計画</b>	<b>341</b>
	Solaris Live Upgrade のシステム要件	341
	Solaris Live Upgrade のディスク容量の要件	342
	Solaris Live Upgrade によるパッケージやパッチの管理	342
	必要なパッケージ	343
	システムパッチレベルのチェック	344
	lucreate コマンドを用いたファイルシステムの作成のための指針	344
	ファイルシステムのスライスを選択するための指針	345
	ルート (/) ファイルシステムのスライスを選択するためのガイドライン	345
	ルート (/) のミラーとメタデバイスを選択するための指針	346
	swap ファイルシステムのスライスを選択するための指針	347
	共有可能なファイルシステムのスライスを選択するための指針	347
	リモートシステムからの Solaris Live Upgrade の使用	348
<b>32</b>	<b>Solaris Live Upgrade によるブート環境の作成</b>	<b>349</b>
	Solaris Live Upgrade インタフェースの概要	349
	Solaris Live Upgrade メニューの使用	350
	作業マップ: Solaris Live Upgrade のインストールとブート環境の作成	351
	Solaris Live Upgrade のインストール	351
	▼ Solaris Live Upgrade をインストールする方法	351
	Solaris Live Upgrade の起動と停止 (キャラクタインタフェース)	352
	▼ Solaris Live Upgrade メニューを起動する	352
	▼ Solaris Live Upgrade のメニューを終了するには	353
	新しいブート環境の作成	353
	▼ ブート環境を作成する (キャラクタインタフェース)	354
	▼ ブート環境を初めて作成する (コマンド行インタフェース)	359
	▼ ブート環境を作成しファイルシステムをマージする (コマンド行インタフェース)	361
	▼ ブート環境を作成しファイルシステムを分割する (コマンド行インタフェース)	363
	▼ ブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)	365
	▼ リストを使用してブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)	367
	▼ ブート環境を作成し共有可能ファイルシステムをコピーする (コマンド行インタフェース)	369
	▼ 別々のソースから単一のブート環境を作成 (コマンド行インタフェース)	370
	▼ フラッシュアーカイブ用ブート環境の作成 (コマンド行インタフェース)	371

<b>33 Solaris Live Upgrade を用いたアップグレード</b>	<b>373</b>
作業マップ: ブート環境のアップグレード	374
ブート環境のアップグレード	374
メタデバイスとボリュームのアップグレード	375
Solaris Live Upgrade によるパッケージやパッチの管理	376
▼ ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (キャラクタインタフェース)	377
▼ ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)	378
▼ 複数の CD を使用してオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)	378
▼ Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルを作成する	380
▼ Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルをテストする	382
▼ プロファイルを使用して Solaris Live Upgrade でアップグレードする (コマンド行インタフェース)	383
ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール	385
メタデバイスとボリュームのアップグレード	385
▼ ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール (キャラクタインタフェース)	386
▼ ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)	388
▼ プロファイルを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)	389
▼ プロファイルキーワードを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)	390
ブート環境のアクティブ化	391
▼ x86: (省略可能) アクティブ化の前にブート用フロッピーディスクを更新する	391
▼ ブート環境のアクティブ化 (キャラクタインタフェース)	392
▼ ブート環境をアクティブにする (コマンド行インタフェース)	393
▼ ブート環境をアクティブにしてファイルを同期させる (コマンド行インタフェース)	394
問題の解決: 元のブート環境へのフォールバック (コマンド行インタフェース)	395
▼ 新しいブート環境の作成に成功した場合のフォールバック	395
▼ SPARC: ブート環境のアクティブ化に失敗した場合のフォールバック	396
▼ SPARC: DVD、CD、または ネットワークインストールイメージを使って元のブート環境にフォールバックする	397
▼ x86: 別のディスクに存在するブート環境をフォールバックする	398
▼ x86: 同じディスクに存在するブート環境をフォールバックする	399

<b>34 Solaris Live Upgrade</b>	<b>ブート環境の管理</b>	<b>401</b>
	Solaris Live Upgrade 管理作業の概要	401
	すべてのブート環境のステータスの表示	402
	▼ すべてのブート環境のステータスを表示する (キャラクタインタフェース)	403
	▼ すべてのブート環境のステータスを表示する (コマンド行インタフェース)	403
	以前に構成されたブート環境の更新	404
	▼ 以前に構成されたブート環境を更新する (キャラクタインタフェース)	404
	▼ 以前に構成されたブート環境を更新する (コマンド行インタフェース)	405
	スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) の取り消し	406
	▼ スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) を取り消す (キャラクタインタフェース)	406
	▼ スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) を取り消す (コマンド行インタフェース)	406
	ブート環境の比較	406
	▼ ブート環境を比較する (キャラクタインタフェース)	407
	▼ ブート環境を比較する (コマンド行インタフェース)	407
	非アクティブブート環境の削除	408
	▼ 非アクティブブート環境を削除する (キャラクタインタフェース)	408
	▼ 非アクティブブート環境を削除する (コマンド行インタフェース)	409
	アクティブブート環境の名前の表示	409
	▼ アクティブブート環境の名前を表示する (キャラクタインタフェース)	409
	▼ アクティブブート環境の名前を表示する (コマンド行インタフェース)	410
	ブート環境の名前の変更	410
	▼ 非アクティブブート環境の名前を変更する (キャラクタインタフェース)	410
	▼ 非アクティブブート環境の名前を変更する (コマンド行インタフェース)	411
	ブート環境名に関連付ける説明の作成または変更	411
	▼ テキストを使用してブート環境名の説明を作成または変更する方法	411
	▼ ファイルを使用してブート環境名の説明を作成または変更する方法	412
	▼ テキストで記述された説明からブート環境名を確認する方法	412
	▼ ファイル内の説明からブート環境名を確認する方法	413
	▼ 名前からブート環境説明を確認する方法	413
	ブート環境の構成の表示	414
	▼ 非アクティブブート環境の構成を表示する (キャラクタインタフェース)	414
	▼ ブート環境の構成を表示する (コマンド行インタフェース)	414

- 35 **Solaris Live Upgrade** の使用例 417
  - Solaris Live Upgrade によるアップグレードの使用例 (コマンド行インタフェース) 417
    - アクティブブート環境で Live Upgrade をインストールする 417
    - ブート環境を作成する 418
    - 非アクティブブート環境をアップグレードする 418
    - ブート環境がブート可能か確認する 419
    - 非アクティブブート環境をアクティブにする 419
    - ソースブート環境へフォールバックする 419
  - Solaris Live Upgrade によるアップグレードの例 (キャラクタインタフェース) 420
    - アクティブブート環境で Live Upgrade をインストールする 420
    - ブート環境を作成する 421
    - 非アクティブブート環境をアップグレードする 423
    - 非アクティブブート環境をアクティブにする 424
  
- 36 **Solaris Live Upgrade** のコマンドに関するリファレンス情報 425
  
- 37 **Solaris** ソフトウェアに関するリファレンス情報 427
  
- 38 **Solaris 9** メディアの構成に関するリファレンス情報 429
  - SPARC: Solaris 9 メディア 429
  - SPARC: Solaris 9 メディアのディレクトリ構造 430
    - SPARC: Solaris 9 DVD (SPARC 版) のディレクトリ構造 431
    - SPARC: Solaris 9 INSTALLATION CD のディレクトリ構造 432
    - SPARC: Solaris 9 SOFTWARE CD (SPARC 版) のディレクトリ構造 433
    - SPARC: Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) のディレクトリ構造 434
  - x86: Solaris 9 メディア 436
  - x86: Solaris 9 メディアのディレクトリ構造 437
    - Solaris 9 DVD (x86 版) ディレクトリの構造 437
    - x86: Solaris 9 INSTALLATION CD のディレクトリ構造 439
    - x86: Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) のディレクトリ構造 439
    - x86: Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版) のディレクトリ構造 441

39	プラットフォーム名とプラットフォームグループに関するリファレンス情報	445
40	ロケールの値 (リファレンス)	447
A	問題発生時の解決方法	455
	ネットワークインストールの設定に関する問題	455
	システムのブートに関する問題	456
	メディアからのブート時のエラーメッセージ	456
	メディアからのブート時の一般的な問題	457
	ネットワークからのブート時のエラーメッセージ	460
	ネットワークからのブート時の一般的な問題	462
	Solaris 9 オペレーティング環境の初期インストール時の問題	464
	▼ x86: IDE ディスクの不良ブロックの検査	464
	Solaris 9 オペレーティング環境のアップグレード時の問題	466
	アップグレード時のエラーメッセージ	466
	アップグレード時の一般的な問題	467
	▼ 問題発生後にアップグレードを継続する方法	468
	Veritas VxVm の実行中に Solaris Live Upgrade を使用してアップグレードするとシステムパニックが発生する	468
	x86: 既存の Service パーティションが存在しないシステムでは、デフォルトで Service パーティションが作成されない	470
B	リモートからのインストールまたはアップグレード	473
	SPARC: Solaris Web Start を使用してリモート DVD-ROM または CD-ROM からインストールまたはアップグレードする	473
	▼ SPARC: リモート DVD-ROM または CD-ROM を使用してインストールまたはアップグレードを行う方法	474
C	その他の SVR4 パッケージ要件に関するリファレンス情報	477
	パッケージ化要件の概要	477
	カスタム JumpStart プログラムと Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境要件	478
	\$PKG_INSTALL_ROOT と \$BASEDIR の相違点の概要	479
	Solaris Live Upgrade 非アクティブブート環境の要件	480
	カスタム JumpStart プログラムのアップグレード要件	482

- D **Solaris Update** リリースへのアップグレード 485
  - Solaris Update リリースへのアップグレード 485
    - ▼ analyze\_patches スクリプトを実行する方法 486
    - ▼ バッチアナライザの出力の確認方法 487
  
- E **x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant** またはネットワークからのブート準備 (作業) 489
  - x86: ブートソフトウェアのフロッピーディスクへのコピー 489
    - ▼ x86: ブートソフトウェアをフロッピーディスクにコピーする方法 490
  - x86: PXE ネットワークブート 491
  
- F **Solaris 9 Updates** 493
  - Solaris 9 9/02 リリース 493
  - Solaris 9 12/02 リリース 493
  - Solaris 9 4/03 リリース 494
  
- 用語集 497
  
- 索引 509



## はじめに

---

本書『Solaris 9 インストールガイド』では、SPARC® および x86 アーキテクチャベースの、ネットワークに接続されたシステムとネットワークに接続されていないシステムの両方に、Solaris™ 9 オペレーティング環境をインストールおよびアップグレードする方法を説明します。

このマニュアルには、システムハードウェアや周辺装置を設定する方法は記載されていません。

---

注 - Solaris オペレーティング環境は、SPARC と x86 の 2 種類のハードウェア (プラットフォーム) で動作します。また、Solaris オペレーティング環境は、64 ビットと 32 ビットの 2 種類のアドレス空間で動作します。特別な章、節、注、リスト、図、表、例、またはコード例でない限り、このマニュアルの情報は両方のプラットフォームおよびアドレス空間に適用されます。

---

---

注 - このマニュアルでは、「x86」という用語は、Intel 32 ビット系列のマイクロプロセッサチップ、および AMD が提供する互換マイクロプロセッサチップを意味します。

---

---

## 対象読者

このマニュアルは、Solaris オペレーティング環境のインストールを担当するシステム管理者を対象としています。このマニュアルには、次の 2 種類の情報が含まれています。

- ネットワーク環境で複数の Solaris マシンを管理するエンタープライズシステム管理者向けの上級 Solaris インストール情報

- Solaris のインストールやアップグレードをときどき行うシステム管理者向けの基本 Solaris インストール情報

---

## 関連マニュアル

表 P-1 に、Solaris ソフトウェアをインストールする際に参考となる関連情報の一覧を示します。

表 P-1 関連情報

インフォメーション	説明
『Solaris のシステム管理 (基本編)』	システムファイルのバックアップ方法が解説されています。
『Solaris 9 4/03 ご使用にあたって』	Solaris リリースに関する、バグ、既知の問題、サポートが中止されたソフトウェア、パッチなどが解説されています。
SPARC: 『Solaris 9 Sun ハードウェアマニュアル』	サポート対象のハードウェアについて解説されています。
『Solaris 9 パッケージリスト』	Solaris 9 オペレーティング環境のパッケージの一覧と、その解説です。

---

## Sun のオンラインマニュアル

docs.sun.com では、Sun が提供しているオンラインマニュアルを参照することができます。マニュアルのタイトルや特定の主題などをキーワードとして、検索を行うこともできます。URL は、<http://docs.sun.com> です。

---

## 表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-2 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。  system%
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	system% <b>su</b> password:
AaBbCc123	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
[ ]	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。  この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% <b>grep</b> `^#define \ XV_VERSION_STRING'

コード例は次のように表示されます。

■ C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

■ C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

■ Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

■ Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[ ] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

---

## 一般規則

- このマニュアルでは、英語環境での画面イメージを使っています。このため、実際に日本語環境で表示される画面イメージとこのマニュアルで使っている画面イメージが異なる場合があります。本文中で画面イメージを説明する場合には、日本語のメニュー、ボタン名などの項目名と英語の項目名が、適宜併記されています。

## 第 1 章

---

# Solaris のインストールおよびアップグレードの計画

---

以下の章では、Solaris オペレーティング環境のインストールやアップグレードの計画について説明します。

第 2 章	インストールやアップグレードを行う前に決定すべき項目について説明します。
第 3 章	Solaris をインストールするさまざまな方法について詳しく説明します。インストール環境にとってどの方法が最適であるかを判断する際の参考になります。



## 第 2 章

---

# Solaris のインストールおよびアップグレードの計画の概要

---

この章では、Solaris オペレーティング環境のインストールやアップグレードを行う前に決定すべき項目について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 24 ページの「作業マップ: Solaris ソフトウェアのインストールまたはアップグレード」
- 25 ページの「初期インストールかアップグレードか」
- 27 ページの「システム要件」
- 30 ページの「ネットワークからインストールするか DVD または CD を使ってインストールするか」
- 31 ページの「DVD メディアの使用」
- 31 ページの「Sun ONE Application Server のインストール後の構成」
- 31 ページの「x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更」
- 32 ページの「x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) と PXE へのアクセス」

---

注 - このマニュアルでは「スライス」という用語を使用しますが、一部の Solaris のマニュアルとプログラムでは、スライスのことを「パーティション」と呼んでいる場合があります。混同を避けるため、このマニュアルでは、x86 版 Solaris でのみサポートされる fdisk パーティションと、スライスまたはパーティションと呼ばれる Solaris fdisk パーティション内の分割とを区別しています。

---

# 作業マップ: Solaris ソフトウェアのインストールまたはアップグレード

次の作業マップは、Solaris オペレーティング環境のインストールやアップグレードに必要な作業の概要を示したものです。インストールしようとする環境にとってもっとも効率的なインストールを行うためにどういった選択をすべきかを、この作業マップを参考にして判断してください。

表 2-1 作業マップ: Solaris ソフトウェアのインストールまたはアップグレード

作業	説明	参照先
初期インストールかアップグレードかを選択する	初期インストールまたはアップグレードのいずれかを選択します。	25 ページの「初期インストールかアップグレードか」
システム要件を検討する	インストールまたはアップグレードの最小要件をシステムが満たしているかどうかを判断します。	27 ページの「システム要件」
インストール方法を選択する	Solaris オペレーティング環境では、インストールやアップグレードをいくつかの方法で行うことができます。インストール環境に最も適した方法を選択してください。	第 3 章
ディスク容量およびスワップ領域の計画を立てて割り当てる	インストールする Solaris オペレーティング環境のコンポーネントに必要なディスク容量をシステムに割り当てます。システムに適したスワップ領域の配置を決定します。	第 5 章
インストール媒体を選択する	Solaris ソフトウェアのインストールは、ローカル媒体から行うこともネットワークから行うこともできます。インストール環境に最も適したインストール媒体を選択してください。	30 ページの「ネットワークからインストールするか DVD または CD を使ってインストールするか」
システム情報を収集する	チェックリストやワークシートを使って、インストールやアップグレードに必要なすべての情報を収集します。	第 6 章
(省略可能) システム構成情報を事前設定する	インストールやアップグレードの際に情報を入力する手間を省くために、システム構成情報を事前に設定しておくことができます。	第 7 章
(省略可能) Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする準備を行う	Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする場合は、インストールサーバーを作成し、必要に応じてブートサーバーを作成し、ネットワークからインストールできるようにシステムを設定します。	第 12 章



表 2-1 作業マップ: Solaris ソフトウェアのインストールまたはアップグレード (続き)

作業	説明	参照先
(アップグレードのみ) アップグレード前に必要な作業を行う	システムのバックアップをとり、アップグレード時にディスク容量の再配置が行われるかどうかを判断し、Solaris Update リリースによって上書きされる可能性があるパッチを検索します。	第 8 章
インストールまたはアップグレードを行う	選択した Solaris インストール方法を使って Solaris ソフトウェアのインストールまたはアップグレードを行います。	インストールの詳細な手順を説明している章

## 初期インストールかアップグレードか

まず、初期インストールを行うのかアップグレードを行うのかを選択する必要があります。アップグレードを選択する場合は、Solaris オペレーティング環境がすでにシステム上で動作している必要があります。

### 初期インストール

初期インストールでは、システムのディスクが Solaris オペレーティング環境の新しいバージョンで上書きされます。システム上で Solaris オペレーティング環境がまだ動作していない場合は、初期インストールを行う必要があります。

システム上で Solaris オペレーティング環境がすでに動作している場合でも、初期インストールを行うことができます。ローカルに行なった変更を維持したい場合は、インストールを行う前にローカル変更のバックアップをとり、インストールが終わった後にローカル変更を復元する必要があります。

初期インストールは、Solaris のどのインストール方法を使っても実行できます。Solaris のインストール方法については、第 3 章を参照してください。

### アップグレード

アップグレードでは、システムのディスクにある既存のファイルと Solaris オペレーティング環境の新しいバージョンがマージされます。アップグレードでは、既存の Solaris オペレーティング環境に対して行なった変更はできるだけ保存されます。

アップグレードできるシステムは、Solaris 2.6、Solaris 7、または Solaris 8 ソフトウェアが動作しているものです。システムで動作している Solaris のバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ uname -a
```

Solaris オペレーティング環境のアップグレードでは、次のインストール方法を使用できます。

---

注 – ディスクレスクライアントをアップグレードする場合は、`smoservice patch` コマンドを使用する必要があります。詳細は、『Solaris のシステム管理 (基本編)』または `smoservice (1M)` のマニュアルページを参照してください。

---

## Solaris のアップグレード方法

表 2-2 SPARC: Solaris のアップグレード方法

現在の Solaris オペレーティング環境	Solaris のアップグレード方法
Solaris 2.6、Solaris 7、Solaris 8、Solaris 9	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris™ Web Start プログラム</li><li>■ Solaris <code>suninstall</code> プログラム</li><li>■ カスタム JumpStart™</li><li>■ Solaris Live Upgrade</li></ul>

表 2-3 x86: Solaris のアップグレード方法

現在の Solaris オペレーティング環境	Solaris のアップグレード方法
Solaris 2.6	DVD メディアまたはネットインストールイメージからのインストール: <ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris Web Start プログラム</li><li>■ Solaris <code>suninstall</code> プログラム</li><li>■ カスタム JumpStart</li></ul> CD メディアからのインストール: <ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris <code>suninstall</code> プログラム</li><li>■ カスタム JumpStart</li></ul>
Solaris 7	DVD メディアまたはネットインストールイメージからのインストール: <ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris Web Start プログラム</li><li>■ Solaris <code>suninstall</code> プログラム</li><li>■ カスタム JumpStart</li><li>■ Solaris Live Upgrade</li></ul> CD メディアからのインストール: <ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris <code>suninstall</code> プログラム</li><li>■ カスタム JumpStart</li><li>■ Solaris Live Upgrade</li></ul>

表 2-3 x86: Solaris のアップグレード方法 (続き)

現在の Solaris オペレーティング環境	Solaris のアップグレード方法
Solaris 8、Solaris 9	DVD/CD メディアまたはネットインストールイメージからのインストール: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris Web Start プログラム</li> <li>■ Solaris suninstall プログラム</li> <li>■ カスタム JumpStart</li> <li>■ Solaris Live Upgrade</li> </ul>

注 – Solaris Live Upgrade を使用したアップグレードの制限については、341 ページの「Solaris Live Upgrade のシステム要件」を参照してください。

システムのソフトウェアグループを、アップグレード時に別のソフトウェアグループに変更することはできません。たとえば、システムにエンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループがインストールされている場合には、開発者システムサポートソフトウェアグループにアップグレードするオプションはありません。ただし、アップグレード中に、インストール済みのソフトウェアグループに属していないソフトウェアをシステムに追加することはできません。

すでに Solaris 9 オペレーティング環境を実行していて、システムに個別のパッチがインストールされている場合、Solaris 9 Update リリースへのアップグレードを行うと、パッチは次のようになります。

- Solaris 9 Update リリースの一部として組み込まれているパッチは自動的に再適用されます。これらのパッチをバックアウトすることはできません。
- システムにすでにインストールされているパッチのうち、Solaris 9 Update リリースに組み込まれていないパッチは削除されます。

パッチアナライザを使用すれば、Solaris 9 Update リリースにアップグレードしたときに、これらのパッチのうちどれが削除されるかを確認することができます。パッチアナライザの詳しい使い方については、485 ページの「Solaris Update リリースへのアップグレード」を参照してください。

## システム要件

Solaris オペレーティング環境のインストールやアップグレードに必要な要件をシステムが満たしているかどうかを確認してください。

## メモリー要件

Solaris オペレーティング環境をインストールまたはアップグレードするには、128M バイト以上のメモリーを用意することをお勧めします。

---

注 - オプションのインストール機能の中には、メモリーが十分でないとは有効にできないものもあります。たとえば、メモリーが十分に存在しないシステムに DVD からインストールする場合、Solaris Web Start インストールプログラムのグラフィカルユーザーインターフェースではなく、Solaris Web Start のコマンド行インターフェースを使用する必要があります。

---

## Solaris 9 INSTALLATION CD を使用するための要件

Solaris 9 INSTALLATION CD を使用してインストールまたはアップグレードを行う場合、SPARC スライスおよび x86 の fdisk パーティションに関連した特別な要件が存在します。DVD またはネットインストールイメージからインストールを行う場合、これらの要件を考慮する必要はありません。

表 2-4 Solaris 9 INSTALLATION CD の要件

プラットフォーム	要件
アップグレードに伴うスライス要件	Solaris 9 INSTALLATION CD と Solaris Web Start プログラムを使ってアップグレードを行うためには、ファイルが保存されていないスライスがディスク上になければなりません。望ましいスライスは swap スライスですが、/etc/vfstab にリストされている「アップグレード対象」のルートスライスのどれにも属していないスライスであれば、どのスライスでもかまいません。このスライスのサイズは少なくとも 512M バイト必要です。

表 2-4 Solaris 9 INSTALLATION CD の要件 (続き)

プラットフォーム	要件
x86 システムの fdisk パーティションの要件	<p>Solaris 9 INSTALLATION CD を使う場合は、Solaris Web Start プログラムはインストールまたはアップグレードのためにシステムディスク上に 2 つの fdisk パーティションを必要とします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris fdisk パーティション           <p>通常の Solaris fdisk パーティションです。システム上に Solaris fdisk パーティションがない場合は、その作成を求めるプロンプトが Solaris Web Start から出されます。</p> <p>注意: 既存の fdisk パーティションのサイズを変更すると、そのパーティションにあるすべてのデータが自動的に削除されます。Solaris fdisk パーティションを作成する場合は、データのバックアップをとってください。</p> </li> <li>■ x86BOOT fdisk パーティション           <p>x86 システムをミニルートから起動するための、10M バイトの fdisk パーティションです。ミニルートは、Solaris fdisk パーティションに新たに作成されるスワップスライスに置かれます。</p> <p>注意: x86BOOT fdisk パーティションを手動で作成しないでください。Solaris Web Start インストールプログラムは、Solaris fdisk パーティションを分割し、10M バイトの x86BOOT fdisk パーティションを作成します。このように x86BOOT fdisk パーティションの作成をインストールプログラムに任せることによって、既存の fdisk パーティションを変更してしまう危険が防止されます。</p> </li> </ul> <p>注 - Service パーティションを保持するシステムをインストールまたはアップグレードする場合、Solaris Web Start インストールプログラムは Service パーティションを保持したまま、Solaris および x86BOOT fdisk パーティションを作成します。Service パーティションの保持については、31 ページの「x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更」を参照してください。</p>
x86 システムのアップグレードに関する制限事項	<p>Solaris 9 INSTALLATION CD を使用する場合、Solaris Web Start プログラムを使用して Solaris 2.6 または Solaris 7 オペレーティング環境からアップグレードすることはできません。Solaris 9 INSTALLATION CD では、Solaris 2.6 または Solaris 7 リリースでは作成されなかった 10 M バイトの x86 ブートパーティションが別に必要です。DVD またはネットワークインストールイメージから Solaris Web Start プログラムを使用するか、Solaris suninstall プログラム またはカスタム JumpStart を使用して、アップグレードを行う必要があります。</p>

表 2-4 Solaris 9 INSTALLATION CD の要件 (続き)

プラットフォーム	要件
x86 システムの LBA 要件	<p>システムが 1024 シリンダの制限を超えてブートできない場合は、Solaris 9 INSTALLATION CD は使用しないでください。LBA (Logical block addressing) を利用すると、この制限を超えるマシンのブートや、複数の Solaris ディスクスライスに渡るブートが可能になります。システムの BIOS およびデフォルトブートディスクの SCSI ドライバが LBA をサポートする場合は、Solaris 9 INSTALLATION CD を使用してください。</p> <p>LBA がサポートされているかどうかを調べるには、次のコマンドを使用します。</p> <pre># prtconf -pv   grep -i lba</pre> <p>デフォルトブートディスクの BIOS および SCSI ドライバが LBA をサポートしている場合は、次のメッセージが出力されます。</p> <pre>lba-access-ok:</pre> <p>デフォルトブートディスクの SCSI ドライバが LBA をサポートしていない場合は、次のメッセージが出力されます。</p> <pre>no-bef-lba-access</pre> <p>BIOS およびデフォルトブートディスクの SCSI ドライバが LBA をサポートしない場合、Solaris 9 DVD またはネットワークインストールイメージを使用してインストールまたはアップグレードを実行します。</p>

## ネットワークからインストールするか DVD または CD を使ってインストールするか

DVD-ROM または CD-ROM ドライブにアクセスできるシステムへのインストールまたはアップグレードができるように、Solaris ソフトウェアは DVD または CD メディアで配布されます。

システムにローカルの DVD-ROM ドライブまたは CD-ROM ドライブがない場合や、Solaris ソフトウェアを複数のシステムにインストールする際に、それぞれのシステムに対してローカルドライブにディスクを挿入したくない場合は、リモートの DVD イメージまたは CD イメージからインストールするようにシステムを設定できます。

ネットワークからインストールする場合は、どの Solaris インストール方法でも使用できます。ただし、フラッシュインストール機能やカスタム JumpStart インストールを使ってネットワークからインストールを行うと、大規模の企業におけるインストールプロセスの一元化と自動化が可能になります。各インストール方法の詳細は、第 3 章を参照してください。

ネットワークから Solaris ソフトウェアをインストールする場合は、初期設定が必要です。ネットワークからインストールする場合の準備については、第 12 章を参照してください。

---

## DVD メディアの使用

DVD メディアを使用している場合、ok プロンプトからブートするように求められたときには、常に次のコマンドを入力してください。

```
ok boot cdrom
```

---

## Sun ONE Application Server のインストール後の構成

Sun™ ONE Application Server を使用している場合、Solaris オペレーティング環境のインストール後にサーバーを構成する必要があります。Application Server の構成に関する詳細は、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照してください。

---

## x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更

x86 版 Solaris 9 オペレーティング環境では、Solaris Web Start と suninstall インストールプログラムは、新しいデフォルトブートディスクパーティションレイアウトを使用して、Service パーティションを利用可能にします。システムに Service パーティションが含まれる場合、新しいデフォルトブートディスクパーティションレイアウトを使用して、このパーティションを保持できます。

---

注 - Service パーティションを含まないシステムに x86 版 Solaris 9 オペレーティング環境をインストールする場合、インストールプログラムは、デフォルトでは新たに Service パーティションを作成しません。システムに Service パーティションを作成する場合は、ハードウェアのマニュアルを参照してください。

---

デフォルトのブートディスクレイアウトには、次のパーティションが含まれます。

- 1 番目のパーティション – Service パーティション (システムの既存サイズ)
- 2 番目のパーティション – x86 ブートパーティション (約 11 M バイト)
- 3 番目のパーティション – Solaris オペレーティング環境パーティション (ブートディスクの残りの領域)

このデフォルトレイアウトを使用する場合は、インストールプログラムによりブートディスクレイアウトを選択するよう求められたら、「デフォルト」を選択してください。

---

## x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) と PXE へのアクセス

Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は、さまざまなハードウェア構成作業とブート作業を行うためのプログラムです。このプログラムを使用して、DVD、CD、ネットインストールイメージ、またはフロッピーディスク上のソフトウェアコピーからブートできます。Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) には、次の方法でアクセスします。

- Solaris 9 DVD、Solaris 9 INSTALLATION CD、または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD からブートする。この場合、システムの BIOS が DVD または CD からのブートをサポートしている必要があります。
- PXE (Preboot Execution Environment) を使用して Solaris Software のネットインストールイメージからブートする。PXE を使用すると、ブート用フロッピーディスクを使用せずにネットワークから直接システムをブートできます。システムは PXE をサポートするものでなければなりません。システムの BIOS 設定ツールまたはネットワークアダプタの構成設定ツールを使用して、PXE を使用するようにシステムを設定します。PXE ネットワークブート用にシステムを構成する方法については、491 ページの「x86: PXE ネットワークブート」を参照してください。
- フロッピーディスクからブートする。次の方法で、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ソフトウェアをフロッピーディスクにコピーできます。
  - 付録 E に記載された手順に従って、ソフトウェアを Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) からフロッピーディスクにコピーします。
  - [http://soldc.sun.com/support/drivers/dca\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dca_diskettes) の Solaris Developer Connection からソフトウェアをダウンロードして、フロッピーディスクにコピーします。



## 第 3 章

---

# Solaris インストール方法の選択

---

この章では、Solaris をインストールする方法について説明します。Solaris オペレーティング環境では、インストールやアップグレードをいくつかの方法で行うことができます。それぞれのインストール方法には、特定のインストール要件やインストール環境を意図したさまざまな機能があります。したがって、インストール環境に最も適した方法を選択してください。

- 33 ページの「Solaris Web Start」
- 34 ページの「Solaris suninstall プログラム」
- 34 ページの「カスタム JumpStart」
- 35 ページの「フラッシュインストール機能」
- 36 ページの「Solaris Live Upgrade の方法」
- 36 ページの「SPARC: ファクトリ JumpStart」

---

## Solaris Web Start

Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD に含まれる Solaris Web Start インストールプログラムは、グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) でも、コマンド行インターフェース (CLI) でも起動できます。Solaris Web Start では、Solaris ソフトウェアや追加ソフトウェアのインストールやアップグレードに必要な手順がステップごとに示されます。システム管理者は、デフォルトオプションを使ってインストールすることも、カスタマイズオプションを使って必要なソフトウェアだけをインストールすることもできます。

Solaris Web Start では、Solaris オペレーティング環境や UNIX の初心者であっても、インストールの際に先に進んだり前に戻って必要な変更を簡単に行うことができます。インストール作業は複数の画面に分かれており、各画面にはユーザーが選択できるようにデフォルトの値が表示されます。

Solaris Web Start プログラムでは情報を入力する必要があるため、ユーザーはインストールプログラムと対話方式で処理を進める必要があります。したがって、システムによってはインストールやアップグレードを行う際には、このインストール方法が最適であるとは限りません。多数のシステムを対象としたバッチインストールには、カスタム JumpStart かフラッシュインストール機能を使用してください。

詳細は、第 14 章を参照してください。

---

## Solaris suninstall プログラム

Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に含まれる Solaris suninstall プログラムは、コマンド行インタフェース (CLI) で動作します。Solaris suninstall プログラムでは、Solaris 9 ソフトウェアのインストールやアップグレードに必要な手順がステップごとに示されます。このインストール方法は、GUI を実行するのに十分なメモリーがなく、国際ロケールを使用している場合に便利です。

Solaris suninstall プログラムは、Solaris オペレーティング環境ソフトウェアをインストールするだけです。このプログラムは、サードパーティアップグレードやネットワーク上でダウンロードできるソフトウェアなどを認識できません。したがって、Solaris オペレーティング環境をインストールした後にサードパーティアプリケーションをインストールする必要があります。また、インストール時にはシステム構成情報を入力するように求められます。このため、複数のシステムにインストールする場合は、suninstall は最適とは言えません。サードパーティアプリケーションのインストールには Solaris Web Start プログラムを使用できます。多数のシステムを対象としたバッチインストールには、カスタム JumpStart かフラッシュインストール機能を使用してください。

詳細は、第 15 章を参照してください。

---

## カスタム JumpStart

カスタム JumpStart では、あらかじめ作成したプロファイルを使って、複数のシステムのインストールやアップグレードを自動的にかつ同時に行うことができます。プロファイルには、どのようにソフトウェアをインストールするかを定義します。さらに、インストール前とインストール後に実行する作業を、シェルスクリプトを使用して指定することができます。システムのインストールまたはアップグレードにどのプロファイルとスクリプトを使用するかを選択できます。カスタム JumpStart は、指定されたプロファイルとスクリプトに従ってシステムのインストールやアップグレードを行います。

Solaris オペレーティング環境とシェルに関する知識を持っていて、複数のシステムをインストールする必要がある場合には、カスタム JumpStart が最適であるかもしれません。

インストールするシステムが 2、3 台だけの場合には、このインストール方法が最適であるとは限りません。カスタム JumpStart インストールの準備に時間がかかるため、このインストール方法が時間の節約にならない可能性があるからです。

詳細は、第 23 章を参照してください。

---

## フラッシュインストール機能

フラッシュインストール機能では、マスターシステムにインストールする構成を使用して、多数のシステムにインストールすることができます。それには、マスターシステムのインストールと構成を行なったあとに、マスターシステムからフラッシュアーカイブを作成する必要があります。フラッシュアーカイブは、必要に応じていくつでも作成できます。それぞれのシステムにインストールする際に、使用するフラッシュアーカイブを選択します。このインストール方法では、同じソフトウェアと構成を持つ多数のシステムを効率的にインストールできます。

フラッシュアーカイブを使用しない Solaris インストール方法では、各 Solaris パッケージが個別にインストールされます。パッケージベースのインストールではパッケージごとにパッケージマップの更新が必要になるため、時間がかかります。フラッシュアーカイブによるインストールは、個々の Solaris パッケージをインストールする場合よりもずっと早く終わります。

どの Solaris インストール方法を使用する場合でも、フラッシュアーカイブの初期インストールを複製できます。Solaris Web Start と Solaris suninstall プログラムでは、インストールするフラッシュアーカイブを選択するように指示されます。カスタム JumpStart では、インストールするフラッシュアーカイブをプロファイルに指定します。Solaris Live Upgrade では、非アクティブブート環境にインストールするフラッシュアーカイブを指定します。

インストール済みのクローンシステムを更新する場合は、差分アーカイブを使用して変更をインストールできます。カスタム Jumpstart インストール方法で差分アーカイブを使用すると、2つのシステムイメージの相違部分のみを含むアーカイブをインストールできます。

複数のシステムに多くの異なる構成でインストールしたい場合には、システムごとにフラッシュアーカイブが必要になります。フラッシュアーカイブはファイルサイズが大きいため、大量のディスク容量が必要です。さらに、フラッシュアーカイブをいったん作成したら、アーカイブを変更することはできません。多数の異なるインストール構成が必要であったり、インストール構成を変更する柔軟性を残しておきたい

場合には、カスタム JumpStart インストールを使用することを検討してください。また、JumpStart finish スクリプトまたは組み込み済みのフラッシュ配置後スクリプトを使用して、システム固有のカスタマイズを実行することも可能です。

初期インストールや更新にあたってのアーカイブのインストールやスクリプトの使用を含む、フラッシュインストール機能の概要は、第 17 章を参照してください。

カスタム JumpStart を使用したアーカイブのインストール方法の詳細は、267 ページの「カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」を参照してください。

---

## Solaris Live Upgrade の方法

Solaris Live Upgrade ではアクティブブート環境が稼動している間に複製ブート環境のアップグレードが行え、稼動中の環境のダウンタイムをなくすることができます。Solaris Live Upgrade は、GUI または CLI のどちらでも行えます。まず、複製ブート環境を作成する必要があります。この作業が終わったところで、アクティブでないブート環境 (非アクティブブート環境) でのフラッシュアーカイブをアップグレードするか、あるいは非アクティブブート環境にフラッシュアーカイブをインストールできます。準備が整った時点で、この非アクティブブート環境をアクティブにします。次のリブート時には、この非アクティブブート環境がアクティブブート環境に切り替わります。何か問題が発生する場合は、本来のブート環境をアクティブにしてリブートするだけで元どおりに復元できます。

詳しい説明と操作方法については、第 29 章を参照してください。

---

## SPARC: ファクトリ JumpStart

ファクトリ JumpStart インストールでは、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD をドライブに挿入して、システムの電源を入れるだけで、新しい SPARC システムに Solaris ソフトウェアを自動的にインストールできます。その際、システムの機種とディスクサイズにもとづいてデフォルトのプロファイルが選択されます。システムにどのソフトウェアコンポーネントをインストールするかは、このプロファイルで決まります。システム構成情報を入力するように求められることはなく、インストールするソフトウェアを選択することはできません。

SPARC ベースの新しいシステムには、このインストール方法を使用する場合に必要な JumpStart ブートイメージがあらかじめインストールされています。古い SPARC ベースシステムの場合は、re-preinstall (1M) コマンドを使用すれば、JumpStart ブートイメージをシステムにインストールできます。x86 ベースのシステムでは、ファクトリ JumpStart インストールを使用することはできません。

## 第 4 章

---

# Solaris のインストールおよびアップグレードの準備

---

以下の章では、Solaris オペレーティング環境のインストールおよびアップグレードを行うための準備について説明します。

第 5 章	Solaris オペレーティング環境のインストールやアップグレードの際に必要なディスク容量を計画するための指針を示します。
第 6 章	Solaris のインストールを始める前にどのようなシステム情報を取得すべきかを説明します。
第 7 章	Solaris のインストールに必要なシステム構成情報を <code>sysidcfg</code> ファイルを使って事前設定する方法を説明します。
第 8 章	Solaris オペレーティング環境をアップグレードする前に必要な作業について説明します。



## 第 5 章

---

# ディスク容量およびスワップ容量の割り当てに関する指針

---

この章では、Solaris オペレーティング環境のインストールやアップグレードに伴うディスク容量の計画に関して一般的な指針を説明します。また、スワップ容量のデフォルトの割り当てについても説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 39 ページの「ディスク容量の割り当て」
- 41 ページの「SPARC: スワップ領域の割り当て方法」

---

## ディスク容量の割り当て

Solaris 9 ソフトウェアをインストールする前に、ディスク容量の計画をたてて、システムに十分なディスク容量があるかどうかを調べることができます。必要なディスク容量が事前にわかれば、Solaris 9 ソフトウェアを実際にインストールする前にディスクを増設しておくことができます。アップグレードを行う場合は、72 ページの「ディスク容量の再配置を使用するアップグレード」を参照してください。

## ディスク容量に関する一般的な計画と推奨事項

ディスク容量の計画のたて方は、ユーザーによって異なります。ディスク容量の計画にあたっては、次の一般的な事項を考慮に入れてください。

- 中国語、日本語、韓国語など、インストールする言語を追加するごとにディスク容量を増やします。
- 印刷やメールをサポートする場合は、/var ファイルシステムのディスク容量を増やします。
- クラッシュダンプ機能 `savecore (1M)` を使用する場合は、/var ファイルシステムの容量を物理メモリーの倍のサイズに設定します。

- サーバーがほかのシステム上のユーザーに対してホームディレクトリファイルシステムを提供する場合は、サーバーのディスク容量を増やします。ホームディレクトリは、通常デフォルトで /export ファイルシステムにあります。
- スワップ領域に 512M バイト以上を割り当てます。
- インストールする Solaris ソフトウェアグループ用にディスク容量を割り当てます。ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量は表 5-1 のとおりです。ディスク容量を計画する際には、選択したソフトウェアグループから個々のソフトウェアパッケージを個別に追加したり削除したりできることを覚えておいてください。
- 作成するファイルシステムの数を最小限に抑えます。デフォルトでは、ルート(/)とスワップ領域(/swap)だけが作成されます。OS サービスのためにディスク容量が割り当てられたときは、/export ディレクトリも作成されます。ファイルシステムを割り当てる場合には、将来の Solaris バージョンにアップグレードするときのために、現在必要な容量よりも 30% 多く割り当ててください。新しい Solaris リリースにアップグレードするたびに、直前のリリースに比べておおよそ 10% のディスク容量が追加が必要になります。ファイルシステムごとに 30% のディスク容量を追加しておくことによって、システムのスライスを切り直さなくても Solaris をアップグレードできます。
- 追加ソフトウェアやサードパーティソフトウェア用にディスク容量を増やします。

Solaris Live Upgrade を使用する場合は、342 ページの「Solaris Live Upgrade のディスク容量の要件」を参照してください。

## ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量

Solaris ソフトウェアグループは Solaris パッケージの集まりです。それぞれのソフトウェアグループには、異なる機能やハードウェアドライバのサポートが含まれています。したがって、システムでどの機能を実行するかを考慮して、インストールするソフトウェアグループを選択する必要があります。

- 「コアシステムサポート」ソフトウェアグループ – ネットワークに接続された Solaris システムの起動と実行に必要な最小限のコードが含まれています。
- 「エンドユーザーシステムサポート」ソフトウェアグループ – ネットワークに接続された Solaris システムと共通デスクトップ環境 (CDE) の起動と実行に必要な最小限のコードが含まれています。
- 「開発者システムサポート」ソフトウェアグループ – エンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループに、ソフトウェア開発のサポートが追加されたものです。ソフトウェア開発のサポートとして、ライブラリ、インクルードファイル、マニュアルページ、プログラミングツールなどが追加されています。ただし、コンパイラは含まれていません。
- 「全体ディストリビューション」ソフトウェアグループ – 開発者システムサポートソフトウェアグループに、サーバーに必要なソフトウェアが追加されたものです。
- 「全体ディストリビューションと OEM サポート」ソフトウェアグループ – 全体ディストリビューションソフトウェアグループに、ハードウェアドライバが追加されたものです。これには、インストール時にシステムに存在していないハードウェアのドライバも含まれます。



Solaris ソフトウェアのインストール時には、選択した Solaris ソフトウェアグループに対してパッケージを追加したり、削除したりすることができます。追加や削除するパッケージを選択する際には、ソフトウェアの依存関係や Solaris ソフトウェアがどのようにパッケージ化されているかを知っている必要があります。

次の表に、各 Solaris ソフトウェアグループごとに、推奨するディスク容量を示します。

---

注 – スワップ領域は、推奨ディスク容量に含まれています。

---

表 5-1 ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量

ソフトウェアグループ	推奨ディスク容量
全体ディストリビューションと OEM サポート	2.9G バイト
全体ディストリビューション	2.7G バイト
開発者システムサポート	2.4G バイト
エンドユーザーシステムサポート	2.0G バイト
コアシステムサポート	2.0G バイト

## SPARC: スワップ領域の割り当て方法

デフォルトでは、Solaris インストールプログラムは、利用可能な最初のディスクシリンダ (SPARC システムでは通常シリンダ 0) でスワップが開始されるようにスワップ領域を割り当てます。この配置により、デフォルトのディスクレイアウトでルート (/) ファイル システムに最大の容量を確保し、アップグレード時にルート (/) ファイル システムを拡張できます。インストールプログラムによるディスクスライスの自動レイアウトを選択し、スワップファイルのサイズを手作業で変更しなければ、Solaris インストールプログラムはデフォルトのスワップ領域 (512M バイト) を割り当てます。

将来スワップ領域を拡張することを考えている場合、次のいずれかの手順を実行してスワップスライスを配置することにより、別のディスクシリンダでスワップスライスを開始できます。

- Solaris Web Start および Solaris suninstall プログラムの場合、シリンダモードでディスクレイアウトをカスタマイズして、スワップスライスを目的の位置に手動で割り当てることができます。
- Solaris カスタム JumpStart インストールプログラムの場合、プロファイルファイル内でスワップスライスを割り当てることができます。Solaris カスタム JumpStart プロファイルファイルの詳細は、230 ページの「プロファイルの作成」を参照してください。

スワップ領域の概要については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』の「追加スワップ空間の構成 (手順)」を参照してください。

## 第 6 章

# インストールやアップグレードの前に 収集すべき情報

この章では、システムのインストールやアップグレードを行う前に収集すべきすべての情報が列挙されたチェックリストとワークシートについて説明します。

- 43 ページの「インストール用のチェックリスト」
- 44 ページの「インストール用のワークシート」
- 49 ページの「アップグレード用のチェックリスト」
- 50 ページの「アップグレード用のワークシート」

## インストール用のチェックリスト

Solaris オペレーティング環境をインストールするための準備では、次のチェックリストを使用します。

- tip (1) 接続を使用して Solaris ソフトウェアをシステムにインストールする場合は、ウィンドウ表示が少なくとも横 80 桁、縦 24 行あることを確認します。  
tip ウィンドウの現在の大きさを調べるには、`stty` コマンドを使用します。詳細については、`stty(1)` のマニュアルページを参照してください。
- システムがネットワークに接続されている場合は、Ethernet コネクタまたはそれに類似したネットワークアダプタがシステムに装着されていることを確認します。
- Solaris 9 INSTALLATION CD に入っている Solaris Web Start プログラムを使用してインストールする場合は、28 ページの「Solaris 9 INSTALLATION CD を使用するための要件」を参照してください。
- ディスク容量が十分あることを確認します。詳細は、第 5 章を参照してください。
- SPARC:DVD メディアを使用している場合、`ok` プロンプトからブートするように求められたときには、常に次のコマンドを入力してください。**`boot cdrom`**
- 『Solaris 9 4/03 ご使用にあたって』やベンダーのリリースノートを参照して、使用するソフトウェアが新しい Solaris リリースでもサポートされていることを確認します。

- 『Solaris 9 Sun ハードウェアマニュアル』を参照して、使用するハードウェアがサポートされていることを確認します。
- システムに添付されている資料を参照して、使用するシステムやデバイスが Solaris リリースでサポートされていることを確認します。

## インストール用のワークシート

Solaris オペレーティング環境のインストールに必要な情報を収集する際に、次のワークシートを使用します。ただし、ワークシートに記載されているすべての情報を収集する必要はありません。使用するシステムに関連する情報だけを収集してください。

注 - ネットワークに接続されないスタンドアロンシステムをインストールする場合は、\* のついた項目については無視してください。

表 6-1 インストール用ワークシート

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
ネットワーク	このシステムはネットワークに接続されていますか。	はい/いいえ
DHCP *	このシステムでは、DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使ってネットワークインタフェースを構成しますか。	はい/いいえ
ホスト名	このシステムのホスト名	
IP アドレス *	DHCP を使用しない場合は、このシステムの IP アドレスを指定します。 例: 129.200.9.1	
サブネット *	DHCP を使用しない場合、このシステムはサブネットの一部ですか。 「はい」の場合は、サブネットのネットマスクを指定します。 例: 255.255.0.0	はい/いいえ
IPv6 *	このマシンで IPv6 を使用可能にしますか。	はい/いいえ

表 6-1 インストール用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
Kerberos *	<p>このマシンに Kerberos セキュリティを構成しますか。</p> <p>「はい」の場合は、次の情報を収集します。</p> <p style="text-align: right;">デフォルトのレルム: 管理サーバー: 一次 KDC: (省略可能) 追加 KDC:</p>	はい/いいえ
ネームサービス *	このシステムではどのネームサービスを使用しますか。	NIS+/NIS/DNS/LDAP/使用しない
ドメイン名 *	このシステムでネームサービスを使用する場合は、システムが属するドメインの名前を指定します。	
NIS+ および NIS *	<p>ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムにネームサーバーの検索を任せますか。</p> <p>ネームサーバーを指定する場合は、次の情報を指定します。</p> <p style="text-align: right;">サーバーのホスト名: サーバーの IP アドレス:</p>	指定/検索
DNS *	<p>DNS サーバーの IP アドレスを指定します。DNS サーバーの IP アドレスを少なくとも 1 つ、最大 3 つまで指定します。</p> <p style="text-align: right;">サーバーの IP アドレス:</p> <p>DNS 検索を行うときに検索するドメインのリストを入力できます。</p> <p style="text-align: right;">検索ドメイン: 検索ドメイン: 検索ドメイン:</p>	

表 6-1 インストール用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
LDAP *	<p>LDAP プロファイルに関する次の情報を指定します。</p> <p style="text-align: center;">プロファイル名:</p> <p style="text-align: center;">プロファイルサーバーのホスト名:</p> <p>LDAP プロファイルでプロキシ資格レベルを指定した場合、この情報を収集します。</p> <p style="text-align: center;">プロキシバインドの識別名:</p> <p style="text-align: center;">プロキシバインドのパスワード:</p>	
デフォルトルート *	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定しますか、それとも Solaris Web Start インストールプログラムまたは Solaris suninstall プログラムに IP アドレスの検索を任せますか。</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間のトラフィック転送用のブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の番号です。</p> <p>次のうちから選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して /etc/defaultrouter ファイルが作成されます。システムをリポートすると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。</li> <li>■ ソフトウェアに IP アドレスを検出させることができます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris suninstall プログラムは、システムのリポート時に IP アドレスを検出します。</li> <li>■ Solaris Web Start インストールプログラムを使用して、デフォルトルートを検出できます。ただし、システムは、ICMP ルーター発見プロトコルを使用して自らを通知するルーターの存在するサブネット上になければなりません。</li> </ul> </li> <li>■ ルーターが存在しない場合、または今回はソフトウェアに IP アドレスを検出させない場合は、「なし」を選択します。リポート時に、ソフトウェアが自動的に IP アドレスの検出を試みます。</li> </ul> <p style="text-align: right;">ホスト IP アドレス:</p>	指定/検出/なし

表 6-1 インストール用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
時間帯	デフォルトの時間帯をどのように指定しますか。	地域 GMT との時間差 時間帯ファイル
ロケール	どの地域のサポートをインストールしますか。	
SPARC:電源管理 (電源管理システムをサポートする SPARC システムの場合のみ)	電源管理システムを使用しますか。 注 - 使用するシステムが Energy Star バージョン 3 以降に対応している場合、このプロンプトは表示されません。	はい/いいえ
プロキシサーバーの構成 * (Solaris Web Start の場合のみ)	インターネットに直接接続できますか、それともインターネットへのアクセスにプロキシサーバーを経由する必要がありますか。 プロキシサーバーを使用する場合は、次の情報を指定します。  プロキシサーバーのホスト名: ポート:	直接接続/プロキシサーバー
自動的なリポートまたは CD/DVD 取り出し	ソフトウェアをインストールした後に自動的にリポートしますか。 ソフトウェアをインストールした後に CD/DVD を自動的に取り出しますか。	はい/いいえ はい/いいえ
ソフトウェアグループ	どの Solaris ソフトウェアグループをインストールしますか。	全体ディストリビューションと OEM サポート 全体ディストリビューション 開発者システムサポート エンドユーザーシステムサポート コアシステムサポート
カスタムパッケージ選択	インストールする Solaris ソフトウェアグループに対してソフトウェアパッケージの追加や削除を行いますか。 注 - パッケージの追加や削除を行う場合には、ソフトウェアの依存関係や Solaris ソフトウェアがどのようにパッケージ化されているかを知っている必要があります。	

表 6-1 インストール用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
SPARC: 64 ビット	64 ビットアプリケーションのサポートをインストールしますか。	はい/いいえ
ディスクの選択	Solaris ソフトウェアをどのディスクにインストールしますか。  例: c0t0d0	
x86:fdisk によるパーティション分割	Solaris fdisk パーティションの作成、削除、または変更を行いますか。  ファイルシステムを配置するディスクには、Solaris fdisk パーティションが必要です。1つのシステムに作成できる x86 Boot パーティションは1つだけです。  システムが現在 Service パーティションを保持する場合、Solaris Web Start インストールプログラムはデフォルトで Service パーティションを保存します。Service パーティションを保存しない場合、fdisk パーティションをカスタマイズする必要があります。Service パーティションの保持については、31 ページの「x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更」を参照してください。  fdisk パーティションのカスタマイズのためにディスクを選択しますか。  fdisk パーティションをカスタマイズしますか。	はい/いいえ           はい/いいえ
データの保存	Solaris ソフトウェアをインストールするために選択したディスク上の既存のデータを保存しますか。	はい/いいえ
ファイルシステムの自動配置	ディスク上にあるファイルシステムを自動的に配置するために自動配置を使用しますか。  「はい」の場合は、どのファイルシステムを自動配置しますか。  例: /、/opt、/var  「いいえ」の場合は、手作業でファイルシステムを配置する必要があります。	はい/いいえ



表 6-1 インストール用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
リモートファイルシステムのマウント* (Solaris suninstall プログラムの場合のみ利用可能)	このシステムからほかのファイルシステムにあるソフトウェアにアクセスする必要があります。 必要な場合、リモートファイルシステムに関する次の情報を用意します。 サーバー: IP アドレス: リモートファイルシステム: ローカルマウントポイント:	はい/いいえ

## アップグレード用のチェックリスト

Solaris オペレーティング環境をアップグレードするための準備では、次のチェックリストを使用します。

- tip (1) 接続を使用してシステムの Solaris ソフトウェアをアップグレードする場合は、ウィンドウ表示が少なくとも横 80 桁、縦 24 行あることを確認します。  
tip ウィンドウの現在の大きさを調べるには、`stty` コマンドを使用します。詳細については、`stty (1)` のマニュアルページを参照してください。
- システムがネットワークに接続されている場合は、Ethernet コネクタまたはそれに類似したネットワークアダプタがシステムに装着されていることを確認します。
- Solaris 9 INSTALLATION CD に入っている Solaris Web Start プログラムを使用する場合は、ディスクに 512M バイトのスライスが存在することを確認します。詳細 (x86 システムの要件など) は、表 2-4 を参照してください。DVD またはインストールイメージからインストールを実行する場合は、これらの要件を無視できます。
- Solaris Live Upgrade を使用する場合は、新しいブート環境を作成してアップグレードするためのリソース要件を決定します。詳細は、第 31 章を参照してください。
- Solaris Live Upgrade と Solaris ボリュームマネージャを使用する場合は、ルートのみラーリングをオフにします。詳細は、345 ページの「ファイルシステムのスライスを選択するための指針」を参照してください。
- ディスク容量が十分あることを確認します。詳細は、第 5 章を参照してください。
- SPARC: DVD メディアを使用している場合、`ok` プロンプトからブートするように求められたときには、常に次のコマンドを入力してください。**`boot cdrom`**
- 『Solaris 9 ご使用にあたって』やベンダーのリリースノートを参照して、使用するソフトウェアが新しい Solaris リリースでもサポートされていることを確認します。

- 『Solaris 9 Sun ハードウェアマニュアル』を参照して、使用するハードウェアがサポートされていることを確認します。
- システムに添付されている資料を参照して、使用するシステムやデバイスが Solaris リリースでサポートされていることを確認します。
- ベンダーやサードパーティのソフトウェア資料を参照して、アップグレードに関するその他の情報を入手します。
- 使用可能なパッチで必要なパッチがあるかを確認します。最新のパッチリストは <http://sunsolve.sun.com> から入手できます。
- Prestoserve ソフトウェアがシステムに存在するかを確認します。init 0 コマンドを使ってシステムをシャットダウンしてからアップグレードプロセスを開始すると、データが失われることがあります。シャットダウンについての説明は、Prestoserve の資料を参照してください。
- x86: Linux オペレーティングシステムを使用している場合は、Solaris fdisk パーティションと Linux swap パーティションの識別子が同じ (0x82) になります。この問題を解決するには、次のいずれかを行う必要があります。
  - メモリーが十分にある場合は Linux swap パーティションをまったく使用しない。
  - Linux swap パーティションを別のドライブに置く。
  - 保存したい Linux データを記憶媒体にバックアップし、Solaris オペレーティング環境をインストールした後に、Linux をインストールし直す。




---

注意 – Solaris オペレーティング環境のインストール後に Linux をインストールする場合、Linux swap パーティション (実際には、Solaris fdisk パーティション) を swap ファイルとしてフォーマットするかどうかを Linux インストールプログラムから尋ねられたら、フォーマットしないを選択してください。

---

## アップグレード用のワークシート

Solaris オペレーティング環境のアップグレードに必要な情報を収集する際には、次のワークシートを使用します。ただし、ワークシートに記載されているすべての情報を収集する必要はありません。使用するシステムに関連する情報だけを収集してください。アップグレードをネットワークを使用して行う場合は、インストールプログラムが現在のシステム構成から情報を取得します。

ホスト名や IP アドレスのような、システムの基本的な識別情報は変更できません。インストールプログラムによってシステムの基本的な識別情報を入力するように求められる場合がありますが、元の値を入力する必要があります。Solaris Web Start プログラムを使用してアップグレードする場合は、そのような識別情報の値をどれか変更しようとするとアップグレードは失敗します。

注 – ネットワークに接続されないスタンドアロンシステムをインストールする場合は、\* のついた項目については無視してください。

表 6-2 アップグレード用ワークシート

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
ネットワーク	このシステムはネットワークに接続されていますか。	はい/いいえ
DHCP *	このシステムでは、DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使ってネットワークインタフェースを構成しますか。	はい/いいえ
ホスト名	このシステムのホスト名	
IP アドレス *	DHCP を使用しない場合は、このシステムの IP アドレスを指定します。 例: 129.200.9.1	
サブネット *	DHCP を使用しない場合、このシステムはサブネットの一部ですか。 「はい」の場合は、サブネットのネットマスクを指定します。 例: 255.255.0.0	はい/いいえ
IPv6 *	このマシンで IPv6 を使用可能にしますか。	はい/いいえ
Kerberos *	このマシンに Kerberos セキュリティを構成しますか。 「はい」の場合は、次の情報を収集します。 デフォルトのレルム: 管理サーバー: 一次 KDC: (省略可能) 追加 KDC:	はい/いいえ
ネームサービス *	このシステムではどのネームサービスを使用しますか。	NIS+/NIS/DNS/LDAP/使用しない
ドメイン名 *	このシステムでネームサービスを使用する場合は、システムが属するドメインの名前を指定します。	

表 6-2 アップグレード用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
NIS+ および NIS *	<p>ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムにネームサーバーの検索を任せますか。</p> <p>ネームサーバーを指定する場合は、次の情報を指定します。</p> <p style="text-align: right;">サーバーのホスト名:</p> <p style="text-align: right;">サーバーの IP アドレス:</p>	指定/検索
DNS *	<p>DNS サーバーの IP アドレスを指定します。DNS サーバーの IP アドレスを少なくとも 1 つ、最大 3 つまで指定します。</p> <p style="text-align: right;">サーバーの IP アドレス:</p> <p>DNS 検索を行うときに検索するドメインのリストを入力できます。</p> <p style="text-align: right;">検索ドメイン:</p>	
LDAP *	<p>LDAP プロファイルに関する次の情報を指定します。</p> <p style="text-align: right;">プロファイル名:</p> <p style="text-align: right;">プロファイルサーバーのホスト名:</p> <p style="text-align: right;">プロファイルサーバーの IP アドレス:</p> <p>LDAP プロファイルでプロキシ資格レベルを指定した場合、この情報を収集します。</p> <p style="text-align: right;">プロキシバインドの識別名:</p> <p style="text-align: right;">プロキシバインドのパスワード:</p>	

表 6-2 アップグレード用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
デフォルトルート*	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定しますか、それとも Solaris Web Start インストールプログラムまたは Solaris suninstall プログラムに IP アドレスの検索を任せますか。</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間のトラフィック転送用のブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の番号です。</p> <p>次のうちから選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して /etc/defaultrouter ファイルが作成されます。システムをリブートすると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。</li> <li>■ ソフトウェアに IP アドレスを検出させることができます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris suninstall プログラムは、システムのリブート時に IP アドレスを検出します。</li> <li>■ Solaris Web Start インストールプログラムを使用して、デフォルトルートを検出できます。ただし、システムは、ICMP ルーター発見プロトコルを使用して自らを通知するルーターの存在するサブネット上になければなりません。</li> </ul> </li> <li>■ ルーターが存在しない場合、または今回はソフトウェアに IP アドレスを検出させない場合は、「なし」を選択します。リブート時に、ソフトウェアが自動的に IP アドレスの検出を試みます。</li> </ul> <p style="text-align: right;">ホスト IP アドレス:</p>	指定/検索/なし
時間帯	デフォルトの時間帯をどのように指定しますか。	地域 GMT との時間差 時間帯ファイル
ロケール	どの地域のサポートをインストールしますか。	
SPARC:電源管理 (電源管理システムをサポートする SPARC システムの場合のみ)	<p>電源管理システムを使用しますか。</p> <p>注 - 使用するシステムが Energy Star バージョン 3 以降に対応している場合、このプロンプトは表示されません。</p>	はい/いいえ

表 6-2 アップグレード用ワークシート (続き)

アップグレードに必要な情報	説明/例	答を記入する
プロキシサーバーの構成 *  (Solaris Web Start の場合のみ)	インターネットに直接接続できますか、それともインターネットへのアクセスにプロキシサーバーを経由する必要がありますか。  プロキシサーバーを使用する場合は、次の情報を指定します。  プロキシサーバーのホスト名:  ポート:	直接接続/プロキシサーバー
自動的なリブートまたは CD/DVD 取り出し	ソフトウェアをインストールした後に自動的にリブートしますか。  ソフトウェアをインストールした後に CD/DVD を自動的に取り出しますか。	はい/いいえ  はい/いいえ
ディスク容量の再割り当て	ディスク上にあるファイルシステムを自動的に再配置するために自動配置を使用しますか。  「はい」の場合は、どのファイルシステムを自動配置しますか。  例: /、 /opt、 /var  「いいえ」の場合は、ファイルシステム構成用の情報を指定する必要があります。	はい/いいえ
SPARC: 64 ビット	64 ビットアプリケーションのサポートをインストールしますか。	はい/いいえ

## 第 7 章

---

# システム構成情報の事前設定

---

この章では、システム構成情報の事前設定について説明します。事前に設定を行うと、Solaris オペレーティング環境をインストールする際に、システム構成情報の入力を求めるプロンプトが表示されません。この章では、さらに、電源管理システム情報の事前設定についても説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 55 ページの「システム構成情報を事前設定することの利点」
- 56 ページの「システム構成情報の事前設定方法」
- 57 ページの「sysidcfg ファイルによる事前設定」
- 63 ページの「ネームサービスによる事前設定」
- 66 ページの「SPARC: 電源管理情報の事前設定」

---

## システム構成情報を事前設定することの利点

どのインストール方法でも、周辺機器、ホスト名、IP (インターネットプロトコル) アドレス、ネームサービスなどのシステム構成情報が必要です。インストールプログラムは、構成情報の入力を求める前に、まず `sysidcfg` ファイルの情報を調べ、次にネームサービスデータベースの情報を調べます。

Solaris Web Start プログラム、Solaris `suninstall` プログラム、およびカスタム JumpStart インストールプログラムは、事前設定されたシステム構成情報を検出すると、その情報の入力を求めることはありません。たとえば、複数のシステムに Solaris 9 ソフトウェアをインストールする場合、時間帯を `sysidcfg` ファイル中またはネームサービスデータベース中に指定しておくと、Solaris 9 ソフトウェアのインストール時に時間帯を入力する手間が省けます。

## システム構成情報の事前設定方法

システム構成情報を事前設定するには、2つの方法があります。システム構成情報は以下の場所に設定できます。

- `sysidcfg` ファイル (リモートシステム上またはフロッピーディスク)
- 自分のサイトで使用しているネームサービスデータベース

表 7-1 を使って、システム構成情報を事前設定するための方法を決定してください。

表 7-1 システム構成情報を事前設定するための方法

事前設定できるシステム構成情報	<code>sysidcfg</code> ファイルでの事前設定の可否	ネームサービスでの事前設定の可否
ネームサービス	可能	可能
ドメイン名	可能	不可
ネームサーバー	可能	不可
ネットワークインタフェース	可能	不可
ホスト名	可能 <sup>1</sup>	可能
IP アドレス	可能 <sup>1</sup>	可能
ネットマスク	可能	不可
DHCP	可能	不可
IPv6	可能	不可
デフォルトルーター	可能	不可
root パスワード	可能	不可
セキュリティポリシー	可能	不可
インストールプログラムとデスクトップで表示する言語 (ロケール)	可能	NIS または NIS+ の場合、可能 DNS または LDAP の場合、不可
端末タイプ	可能	不可
時間帯	可能	可能
日付と時刻	可能	可能
Web プロキシ <sup>2</sup>	不可	不可
x86: モニタータイプ	可能	不可



表 7-1 システム構成情報を事前設定するための方法 (続き)

事前設定できるシステム構成情報	sysidcfg ファイルでの事前設定の可否	ネームサービスでの事前設定の可否
x86: キーボード言語、キーボード配置	可能	不可
x86: グラフィックスカード、カラー深度、表示解像度、画面サイズ	可能	不可
x86: ポインティングデバイス、ボタン数、IRQ レベル	可能	不可
SPARC: 電源管理システム (autoshtutdown) <sup>3</sup>	不可	不可

1. この情報はシステムに固有なため、各システム用に異なる sysidcfg ファイルを作成するよりも、ネームサービスを編集してください。
2. Solaris Web Start のインストール時にこの情報を構成できますが、sysidcfg ファイルやネームサービスを使用せずに行う必要があります。
3. このシステム構成情報は、sysidcfg ファイルまたはネームサービスでは事前設定できません。詳細は、66 ページの「SPARC: 電源管理情報の事前設定」を参照してください。

## sysidcfg ファイルによる事前設定

sysidcfg ファイルに一連のキーワードを指定すると、システムを事前設定できます。表 7-2 は、これらのキーワードを示しています。

異なる構成情報を必要とするシステムごとに、固有の sysidcfg ファイルを作成する必要があります。すべてのシステムに同じ時間帯を割り当てる場合は、同じ sysidcfg ファイルを使用して、一連のシステムに時間帯を事前設定することができます。ただし、これらの各システムに異なる root (スーパーユーザー) パスワードを事前設定する場合は、各システムに固有の sysidcfg ファイルを作成する必要があります。

sysidcfg ファイルは、次のどちらかに置くことができます。

- NFS ファイルシステム – sysidcfg ファイルを共有 NFS ファイルシステムに置く場合は、ネットワークからインストールできるようにシステムを設定するときに、`add_install_client (1M)` コマンドの `-p` オプションで Solaris 9 ソフトウェアのインストール時に sysidcfg ファイルが検索される場所を指定する必要があります。
- UFS フロッピーディスクまたは PCFS フロッピーディスク – sysidcfg ファイルをフロッピーディスクのルート (/) ディレクトリに置きます。

---

注 - カスタム JumpStart インストールを実行していて、フロッピーディスク上の `sysidcfg` ファイルを使用したい場合は、プロファイルフロッピーディスク上に `sysidcfg` ファイルを置く必要があります。プロファイルフロッピーディスクを作成するには、221 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」を参照してください。

---

1つのディレクトリまたはフロッピーディスクには、1つの `sysidcfg` ファイルだけを入れることができます。複数の `sysidcfg` ファイルを作成する場合は、各ファイルを異なるディレクトリまたは異なるフロッピーディスクに置く必要があります。

## sysidcfg ファイルの構文規則

`sysidcfg` ファイルで使用するキーワードには、非依存型と依存型の2種類があります。依存型キーワードは、非依存型キーワード内でのみ固有であることが保証されています。依存型キーワードは、対応する非依存型キーワードによって識別される場合にのみ存在します。

次の例では、`name_service` が非依存型キーワードであり、`domain_name` と `name_server` が依存型キーワードです。

```
name_service=NIS {domain_name=marquee.central.sun.com
name_server=connor(129.152.112.3)}
```

---

構文規則	例
非依存型キーワードは任意の順序で指定可能	<pre>pointer=MS-S display=ati {size=15-inch}</pre>
キーワードは大文字と小文字のどちらでもよい	<pre>TIMEZONE=US/Central terminal=PC Console</pre>
関連する非依存型キーワードを結合するには、すべての依存型キーワードを中括弧 {} で囲む	<pre>name_service=NIS {domain_name=marquee.central.sun.com name_server=connor(129.152.112.3)}</pre>
値は単一引用符 (') または二重引用符 (") で囲んで指定可能	<pre>network_interface='none'</pre>

---

構文規則	例
キーワードは1回だけ指定可能。キーワードを複数回指定した場合は最初のキーワードだけが有効	<pre>network_interface=none network_interface=le0</pre>

## sysidcfg ファイルキーワード

表 7-2 に、sysidcfg ファイルで使用できるキーワードを示します。

表 7-2 sysidcfg キーワード

構成情報	キーワード	使用例または設定値
ネームサービス、ドメイン名、ネームサーバー	<pre>name_service=NIS, NIS+, DNS, LDAP, NONE</pre> <p>NIS と NIS+ 用オプション:  <pre>{domain_name=domain_name name_server=hostname(ip_address)}</pre></p> <p>DNS 用オプション:  <pre>{domain_name=domain_name name_server=ip_address,ip_address, ip_address (最大 3 個) search=domain_name, domain_name,domain_name, domain_name,domain_name,domain_name (最大 6 個、合計の長さが 250 文字以下)}</pre></p> <p>LDAP 用オプション:  <pre>{domain_name=domain_name profile=profile_name profile_server=ip_address proxy_dn="proxy_bind_dn" proxy_password=password}</pre></p>	<pre>name_service=NIS {domain_name=west.arp.com name_server=timber(129.221.2.1)}</pre> <pre>name_service=NIS+ {domain_name=west.arp.com. name_server=timber(129.221.2.1)}</pre> <pre>name_service=DNS {domain_name=west.arp.com name_server=10.0.1.10,10.0.1.20 search=arp.com,east.arp.com}</pre> <p>注 - name_service は 1 つの値だけを選択します。必要に応じて、domain_name と name_server キーワードのどちらか一方または両方を設定するか、あるいはどちらも含めません。どちらのキーワードも使用しない場合、中括弧 {} は省略します。</p> <pre>name_service=LDAP {domain_name=west.arp.com profile=default profile_server=129.221.2.1 proxy_dn="cn=proxyagent,ou=profile, dc=west,dc=arp,dc=com" proxy_password=password}</pre> <p>注 - proxy_dn および proxy_password キーワードは省略可能です。proxy_dn 値は、二重引用符で囲む必要があります。</p>

表 7-2 sysidcfg キーワード (続き)

構成情報	キーワード	使用例または設定値
ネットワークインタフェース、ホスト名、IP アドレス、ネットマスク、DHCP、IPv6	<p><code>network_interface=NONE</code>、<code>PRIMARY</code>、または <i>value</i></p> <p>DHCP を使用する場合、次のように指定する。<code>{dhcp protocol_ipv6=yes_or_no}</code></p> <p>DHCP を使用しない場合、次のように指定する。<code>{hostname=host_name default_route=ip_address</code> あるいは <code>NONE ip_address=ip_address netmask=netmask protocol_ipv6=yes_or_no}</code></p> <p>注 - DHCP を使用しない場合、<code>protocol_ipv6=yes</code> と <code>default_route</code> は指定する必要がありません。ただし、次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ JumpStart インストールの場合、この時点で <code>protocol_ipv6</code> を指定する必要があります。指定がないと、後で対話方式で入力を要求されます。</li> <li>■ <code>default_route</code> が指定されておらず、ICMP ルーター発見プロトコルを使用して検出できない場合、ルート (route) を選択するよう要求されます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ NONE は、ネットワーク接続をオフにします。</li> <li>■ PRIMARY は、システム上に存在するインタフェースの中で最初に稼動する非ループバックインタフェースです。順序は <code>ifconfig</code> の場合と同様に、稼動しているインタフェースが存在しない場合には、最初の非ループバックインタフェースが使用されることとなります。非ループバックインタフェースが見つからない場合は、システムは NON-NETWORKED に設定されます。</li> <li>■ <i>value</i> には、<code>le0</code> や <code>hme0</code> などのインタフェースを指定します。</li> </ul> <p><code>network_interface=primary {dhcp protocol_ipv6=yes}</code></p> <p><code>network_interface=le0 {hostname=feron default_route=129.146.88.1 ip_address=129.146.88.210 netmask=255.255.0.0 protocol_ipv6=no}</code></p> <p>注 - <code>network_interface</code> は、1 つの値だけを選択します。必要に応じて、<code>hostname</code>、<code>ip_address</code>、<code>netmask</code> キーワードのどれかを組み合わせて設定するか、あるいはどれも設定しません。どのキーワードも使用しない場合、中括弧 {} は省略します。</p>
root パスワード	<code>root_password=root_password</code>	<code>/etc/shadow</code> にある暗号化された文字列

表 7-2 sysidcfg キーワード (続き)

構成情報	キーワード	使用例または設定値
セキュリティポリシー	<p>security_policy=kerberos, NONE</p> <p>Kerberos 用オプション: {default_realm=FQDN admin_server=FQDN kdc=FQDN1, FQDN2, FQDN3}</p> <p>(FQDN は完全修飾ドメイン名です。)</p>	<p>security_policy=kerberos {default_realm=Yoursite.COM admin_server=krbadadmin.Yoursite.COM kdc=kdc1.Yoursite.COM, kdc2.Yoursite.COM}</p> <p>注 - 最大 3 つの鍵発行センター (KDC) をリスト できます。少なくとも 1 つは必須です。</p>
インストールプログラムとデスクトップで表示する言語	system_locale=locale	有効なロケール値が、/usr/lib/locale ディレクトリまたは第 40 章にあります。
端末タイプ	terminal=terminal_type	有効な端末値が /usr/share/lib/terminfo ディレクトリのサブディレクトリにあります。
時間帯	timezone=timezone	有効な時間帯値が /usr/share/lib/zoneinfo ディレクトリのサブディレクトリとファイルに あります。時間帯値は /usr/share/lib/zoneinfo ディレクトリから の相対パス名です。たとえば、米国の山岳部標準 時の時間帯値は US/Mountain です。日本の時間帯 値は Japan です。また、有効な Olson 時間帯も 指定できます。
日付と時刻	timeserver=localhost, hostname, ip_addr	localhost を指定した場合は、そのシステムの 時刻が正しいものと仮定し、時刻が設定されま す。ネームサービスを実行してなくて、あるシ ステムの hostname または ip_addr を指定した場 合は、そのシステムの時刻を使って時刻が設定さ れます。
x86: モニタータイ プ	monitor=monitor_type	インストールしたいシステム上で kdmconfig - d filename を実行すると、その出力が sysidcfg ファイルに追加されます。
x86: キーボード言 語、キーボード配 置	keyboard=keyboard_language {layout=value}	インストールしたいシステム上で kdmconfig - d filename を実行すると、その出力が sysidcfg ファイルに追加されます。
x86: グラフィック スカード、画面サ イズ、カラー深 度、表示解像度	display=graphics_card {size=screen_size depth=color_depth resolution=screen_resolution}	インストールしたいシステム上で kdmconfig - d filename を実行すると、その出力が sysidcfg ファイルに追加されます。
x86: ポインティ ングデバイス、ボタ ン数、IRQ レベル	pointer=pointing_device {nbuttons=number_buttons irq=value}	インストールしたいシステム上で kdmconfig - d filename を実行すると、その出力が sysidcfg ファイルに追加されます。

## ▼ sysidcfg 構成ファイルを作成する方法

1. テキストエディタを使って **sysidcfg** という名前のファイルを作成します。
2. 必要な **sysidcfg** のキーワードを入力します。
3. **sysidcfg** ファイルを保存します。

---

注 - 複数の **sysidcfg** ファイルを作成する場合は、それぞれのファイルを別々のディレクトリまたは別々のフロッピーディスクに保存する必要があります。

---

4. クライアントから次のファイルシステムまたはディレクトリを介して **sysidcfg** ファイルにアクセスできるようにします。
  - 共有 NFS ファイルシステム。ネットワークからインストールできるようにシステムを設定するには、`add_install_client(1M)` に `-p` オプションを指定します。
  - UFS フロッピーディスクまたは PCFS フロッピーディスクのルート (`/`) ディレクトリ

## SPARC: sysidcfg ファイルの例

一連の SPARC システムのための **sysidcfg** ファイルの例を次に示します。これらのシステムのホスト名、IP アドレス、およびネットマスクは、ネームサービスを編集することにより、すでに事前設定されています。このファイルにはすべてのシステム構成情報が事前設定されているので、カスタム **JumpStart** プロファイルを使ってカスタム **JumpStart** インストールを実行できます。

```
system_locale=en_US
timezone=US/Central
terminal=sun-cmd
timeserver=localhost
name_service=NIS {domain_name=marquee.central.sun.com
                  name_server=connor(129.152.112.3)}
root_password=m4QPOWNY
network_interface=le0 {hostname=feron
                       default_route=129.146.88.1
                       ip_address=129.146.88.210
                       netmask=255.255.0.0
                       protocol_ipv6=no}
security_policy=kerberos {default_realm=Yoursite.COM
                          admin_server=krbadmin.Yoursite.COM
                          kdc=kdc1.Yoursite.COM,
                          kdc2.Yoursite.COM}
```

## x86: sysidcfg ファイルの例

一連の x86 システムで、キーボード、グラフィックスカード、ポインティングデバイスがすべて同じ場合の `sysidcfg` ファイルの例を次に示します。これらのデバイス情報 (`keyboard`、`display`、`pointer`) は、`kdmconfig(1M) -d` コマンドを実行して取得したものです。この例では、Solaris インストールプログラムで使用される言語 (`system_locale`) を選択するプロンプトがインストール前に表示されます。

```
keyboard=ATKBD {layout=US-English}
display=ati {size=15-inch}
pointer=MS-S
timezone=US/Central
timeserver=connor
terminal=ibm-pc
name_service=NIS {domain_name=marquee.central.sun.com
                  name_server=connor(129.152.112.3)}
root_password=URFUni9
```

---

## ネームサービスによる事前設定

次の表は、システム構成情報を事前設定するために編集および入力を行う必要があるネームサービスデータベースの概要を示したものです。

事前設定するシステム情報	ネームサービスデータベース
ホスト名と IP アドレス	<code>hosts</code>
日付と時刻	<code>hosts</code> インストール対象のシステムに、日付と時刻を提供するホスト名に続けて <code>timehost</code> という別名を記述します。
時間帯	<code>timezone</code>
ネットマスク	<code>netmasks</code>

DNS や LDAP のネームサービスでは、システムのロケールを事前設定することはできません。NIS や NIS+ のネームサービスを使用する場合は、そのネームサービスの手順に従ってシステムのロケールを事前設定してください。

- 64 ページの「NIS を使ってロケールを事前設定する方法」
- 65 ページの「NIS+ を使ってロケールを事前設定する方法」

## ▼ NIS を使ってロケールを事前設定する方法

1. ネームサーバー上でスーパーユーザーになります。
2. `/var/yp/Makefile` ファイルを編集して、ロケールマップを追加します。
  - a. エントリの後に、以下を追加します。

```
locale.time: $(DIR)/locale
    -@if [ -f $(DIR)/locale ]; then \
        sed -e "/^#/d" -e s/#.*$$// $(DIR)/locale \
        | awk '{for (i = 2; i<=NF; i++) print $$i, $$0}' \
        | $(MAKEDEBM) - $(YPDBDIR)/$(DOM)/locale.byname; \
        touch locale.time; \
        echo "updated locale"; \
        if [ ! $(NOPUSH) ]; then \
            $(YPPUSH) locale.byname; \
            echo "pushed locale"; \
        else \
            : ; \
        fi \
    else \
        echo "couldn't find $(DIR)/locale"; \
    fi
```

- b. 文字列 **all:** を検索し、変数リストの最後に **locale** という語を挿入します。

```
all: passwd group hosts ethers networks rpc services protocols \
    netgroup bootparams aliases publickey netid netmasks c2secure \
    timezone auto.master auto.home locale
```

- c. ファイルの下の方にある同じようなエントリの後に、文字列 **locale:** **locale.time** を追加します。

```
passwd: passwd.time
group: group.time
hosts: hosts.time
ethers: ethers.time
networks: networks.time
rpc: rpc.time
services: services.time
protocols: protocols.time
netgroup: netgroup.time
bootparams: bootparams.time
aliases: aliases.time
publickey: publickey.time
netid: netid.time
passwd.adjunct: passwd.adjunct.time
group.adjunct: group.adjunct.time
netmasks: netmasks.time
timezone: timezone.time
auto.master: auto.master.time
auto.home: auto.home.time
locale: locale.time
```



d. ファイルを保存します。

3. `/etc/locale` というファイルを作成し、ドメインまたは特定のシステムに対して1つのエントリを作成します。

```
locale domain_name
```

または

```
locale system_name
```

---

注 – 使用できるロケール値のリストについては、第 40 章を参照。

---

たとえば次の行は、`worknet.com` ドメインに対してデフォルト言語として日本語を指定しています。

```
ja worknet.com
```

たとえば次の行は、`charlie` というシステムに対してデフォルトロケールとして `ja_JP.UTF-8` ロケールを指定しています。

```
ja_JP.UTF-8
```

---

注 – ロケールは、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に入っています。

---

4. マップを作成します。

```
# cd /var/yp; make
```

これでドメインまたは `locale` マップで個別に指定したシステムは、デフォルトのロケールを使用するように設定されました。ここで指定したデフォルトのロケールは、インストール時に使用されるとともに、システムのリブート後のデスクトップでも使用されます。

## ▼ NIS+ を使ってロケールを事前設定する方法

この手順は、NIS+ ドメインが設定されていると仮定しています。NIS+ ドメインの設定については、『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス: DNS、NIS、LDAP 編)』を参照してください。

1. ネームサーバーに、スーパーユーザーまたは `NIS+ admin` グループのユーザーとしてログインします。
2. `locale` テーブルを作成します。

```
# nistbladm -D access=og=rmcd,nw=r -c locale_tbl name=SI,nogw=  
locale=,nogw= comment=,nogw= locale.org_dir.'nisdefaults -d'
```

3. `locale` に必要なエントリを追加します。

```
# nistbladm -a name=name locale=locale comment=comment
locale.org_dir.`nisdefaults -d`
```

<i>name</i>	デフォルトのロケールを事前設定したいドメイン名または特定のシステム名。
<i>locale</i>	システムにインストールし、システムのリポート後にデスクトップ上で使用するロケール。使用できるロケール値のリストについては、第 40 章を参照。
<i>comment</i>	コメントフィールド。複数の単語を使ったコメントは、前後を二重引用符で囲むこと。

---

注 – ロケールは、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に入っています。

---

これでドメインまたは `locale` テーブルで個別に指定したシステムは、デフォルトロケールを使用するように設定されました。ここで指定したデフォルトロケールは、インストール時に使用されるとともに、システムのリポート後のデスクトップでも使用されます。

---

## SPARC: 電源管理情報の事前設定

Solaris の電源管理ソフトウェアを使用すると、システムが 30 分間アイドル状態になると自動的にシステム状態を保存し電源を切ることができます。EPA の省電力 (Energy Star) ガイドラインのバージョン 2 に準拠したシステム (sun4u システムなど) に Solaris 9 ソフトウェアをインストールするときは、デフォルトで電源管理ソフトウェアもインストールされます。Solaris Web Start のインストール時に、インストールプログラムは、電源管理ソフトウェアを有効にするか、無効にするかの指定を求めます。suninstall インストールプログラムは、インストールが完了し、システムがリポートした後で、電源管理ソフトウェアを有効にするか無効にするかを指定するよう求めます。

---

注 – 使用するシステムが Energy Star バージョン 3 以降に対応している場合、このプロンプトは表示されません。

---

対話式インストールを実行している場合は、電源管理情報を事前設定してプロンプトを回避する方法はありません。カスタム JumpStart インストールでは、**finish** スクリプトを使ってシステムに `/autoshtutdown` または `/noautoshtutdown` ファイルを作成することで、電源管理情報を事前設定できます。システムのリブート時に、`/autoshtutdown` は電源管理ソフトウェアを有効にし、`/noautoshtutdown` ファイルは電源管理ソフトウェアを無効にします。

たとえば、**finish** スクリプトに次の行を入れておくと電源管理ソフトウェアが有効になり、システムリブート後にプロンプトが表示されないようにすることができます。

```
touch /a/autoshtutdown
```

**finish** スクリプトの詳細は、245 ページの「**finish** スクリプトの作成」を参照してください。



## 第 8 章

---

# Solaris オペレーティング環境のアップグレード

---

この章では、Solaris オペレーティング環境をアップグレードする前に行う必要がある作業についての情報や手順を説明します。

- 69 ページの「アップグレード」
- 71 ページの「Solaris Live Upgrade の利用」
- 72 ページの「カスタム JumpStart によるアップグレード」
- 72 ページの「ディスク容量の再配置を使用するアップグレード」
- 73 ページの「アップグレード前のシステムのバックアップ」

---

## アップグレード

アップグレードでは、システムのディスクにある既存のファイルと Solaris オペレーティング環境の新しいバージョンがマージされます。アップグレードでは、既存の Solaris オペレーティング環境に対して行なった変更はできるだけ保存されます。

アップグレードできるシステムは、Solaris 2.6、Solaris 7、または Solaris 8 ソフトウェアが動作しているものです。システムで動作している Solaris のバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ uname -a
```

Solaris オペレーティング環境のアップグレードでは、次のインストール方法を使用できます。

---

注 – ディスクレスクライアントをアップグレードする場合は、`smosservice patch` コマンドを使用する必要があります。詳細は、『Solaris のシステム管理 (基本編)』または `smosservice(1M)` のマニュアルページを参照してください。

---

すでに Solaris 9 オペレーティング環境を実行していて、システムに個別のパッチがインストールされている場合、Solaris 9 Update リリースへのアップグレードを行うと、パッチは次のようになります。

- Solaris 9 Update リリースの一部として組み込まれているパッチは自動的に再適用されます。これらのパッチをバックアウトすることはできません。
- システムにすでにインストールされているパッチのうち、Solaris 9 Update リリースに組み込まれていないパッチは削除されます。

パッチアナライザを使用すれば、Solaris 9 Update リリースにアップグレードしたときに、これらのパッチのうちどれが削除されるかを確認することができます。パッチアナライザの詳しい使い方については、485 ページの「Solaris Update リリースへのアップグレード」を参照してください。

## Solaris のアップグレード方法

表 8-1 SPARC: Solaris のアップグレード方法

プラットフォーム	現在の Solaris オペレーティング環境	Solaris のアップグレード方法
SPARC システム	Solaris 2.6、Solaris 7、Solaris 8、Solaris 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris Web Start プログラム</li> <li>■ Solaris suninstall プログラム</li> <li>■ カスタム JumpStart</li> <li>■ Solaris Live Upgrade</li> </ul>

表 8-2 x86: Solaris のアップグレード方法

現在の Solaris オペレーティング環境	Solaris のアップグレード方法
Solaris 2.6	DVD メディアまたはネットインストールイメージからのインストール: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris Web Start プログラム</li> <li>■ Solaris suninstall プログラム</li> <li>■ カスタム JumpStart</li> </ul> CD メディアからのインストール: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris suninstall プログラム</li> <li>■ カスタム JumpStart</li> </ul>

表 8-2 x86: Solaris のアップグレード方法 (続き)

現在の Solaris オペレーティング環境	Solaris のアップグレード方法
Solaris 7	DVD メディアまたはネットインストールイメージからのインストール: ■ Solaris Web Start プログラム ■ Solaris suninstall プログラム ■ カスタム JumpStart ■ Solaris Live Upgrade  CD メディアからのインストール: ■ Solaris suninstall プログラム ■ カスタム JumpStart ■ Solaris Live Upgrade
Solaris 8, Solaris 9	DVD/CD メディアまたはネットインストールイメージからのインストール: ■ Solaris Web Start プログラム ■ Solaris suninstall プログラム ■ カスタム JumpStart ■ Solaris Live Upgrade

注 – Solaris Live Upgrade を使用したアップグレードの制限については、341 ページの「Solaris Live Upgrade のシステム要件」を参照してください。

システムのソフトウェアグループを、アップグレード時に別のソフトウェアグループに変更することはできません。たとえば、システムにエンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループがインストールされている場合には、開発者システムサポートソフトウェアグループにアップグレードするオプションはありません。ただし、アップグレード中に、インストール済みのソフトウェアグループに属していないソフトウェアをシステムに追加することはできます。

## Solaris Live Upgrade の利用

Solaris Live Upgrade を利用すると、複製された非アクティブオペレーティング環境をアップグレードすることによりオペレーティングシステムのダウンタイムを減らすことができます。

Solaris Live Upgrade の計画と実施の方法については、第 29 章を参照してください。

---

## カスタム JumpStart によるアップグレード

カスタム JumpStart インストールを使用してアップグレードを行う場合は、カスタム JumpStart プロファイルに `install_type upgrade` を指定する必要があります。

さらに、実際にアップグレードを行う前に、システムの現在のディスク構成およびシステムに現在インストールされているソフトウェアに対して、カスタム JumpStart プロファイルが目的どおりのことを実行しようとしているかを確認する必要があります。プロファイルをテストするには、アップグレードするシステムで `pfinstall -D` コマンドを使用します。ディスク構成ファイルを使用してアップグレード用プロファイルをテストすることはできません。アップグレード用プロファイルのテストについての詳細は、235 ページの「プロファイルのテスト」を参照してください。

JumpStart を使用する場合、フラッシュ 差分アーカイブを利用してクローンシステムを更新できます。フラッシュアーカイブの概要は、第 17 章を参照してください。

---

## ディスク容量の再配置を使用するアップグレード

Solaris Web Start のアップグレードオプション、Solaris `suninstall` プログラムおよびカスタム JumpStart プログラムにはディスクの容量を再配置する機能があります。アップグレードするのに十分な容量が現在のファイルシステムにない場合、ディスク容量を割り当て直すことができます。アップグレードに伴ってファイルシステムの容量を増やす必要があるのは、次のような場合です。

- 新しいリリースで、システムに現在インストールされている Solaris ソフトウェアグループに新たにソフトウェアが追加されている。特定のソフトウェアグループに含まれる新しいソフトウェアは、インストールの対象となるようにアップグレード時に自動的に選択される。
- 新しいリリースに、システム上の既存のソフトウェアよりもサイズが大きいソフトウェアが存在する。

自動再配置機能を使用すると、ファイルシステムに必要な容量を確保するようにディスク容量の再配置が行われます。自動再配置機能では、デフォルトの制約にもとづいて容量の再配置が試みられます。このため、この機能によって容量の再配置が行われない場合は、ファイルシステムの制約を変更する必要があります。



---

注 – 自動再配置機能には、ファイルシステムの容量を増やす能力はありません。自動再配置機能による容量の再配置では、変更の必要なファイルシステム上の必須ファイルのバックアップ、ファイルシステムの変更にもとづくディスクパーティションの再分割、およびバックアップファイルの復元がアップグレードの前に行われます。

---

- Solaris Web Start の自動配置機能がディスク容量をどのように再配置するかを決定できない場合は、Solaris suninstall プログラムまたはカスタム JumpStart プログラムを使用してアップグレードを行う必要があります。
- Solaris suninstall プログラムの自動配置機能が、ディスク容量をどのように再配置するかを決定できない場合は、移動または変更してもよいファイルシステムを指定してから再び自動配置機能を実行します。
- カスタム JumpStart によるアップグレードでアップグレード用プロファイルを作成する際に、ディスク容量が問題になることがあります。現在のファイルシステムに十分なディスク容量がない場合は、`backup_media` と `layout_constraint` キーワードを使用してディスク容量を再配置することができます。`backup_media` と `layout_constraint` キーワードの使用例については、例 23-5 を参照してください。

---

## アップグレード前のシステムのバックアップ

Solaris オペレーティング環境のアップグレードを行う前に既存システムのバックアップを行う必要があります。ファイルシステムをテープなどの取り外し可能媒体にコピーすれば、データの損失や損傷、破壊などを防止できます。システムのバックアップ手順についての詳細は、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。



## 第 9 章

---

# ネットワークインストールの準備

---

以下の章では、DVD メディアや CD メディアを利用するのではなくネットワークを使用して Solaris ソフトウェアをインストールする場合のシステム設定の方法を説明します。

第 10 章	インストールサーバーから Solaris ソフトウェアをインストールする方法の概要と計画について説明します。
第 11 章	DVD メディアからインストールサーバーに Solaris ソフトウェアをコピーする手順を説明します。
第 12 章	CD メディアからインストールサーバーに Solaris ソフトウェアをコピーする手順を説明します。
第 13 章	ネットワークインストールを設定するコマンドについて説明します。



## 第 10 章

---

# ネットワークインストールの準備 (概要)

---

この章では、DVD または CD メディアからではなくネットワークから Solaris ソフトウェアをインストールする場合にネットワークとシステムをどのように設定する必要があるかを説明します。

---

## ネットワークインストールの計画

この節では、ネットワークからインストールを行う前に認識しておくべき事柄を説明します。ネットワークインストールでは、Solaris 9 ディスクイメージにアクセスできる「インストールサーバー」というシステムから Solaris ソフトウェアをインストールできます。その場合には、まず Solaris 9 DVD または CD メディアの内容をインストールサーバーのハードディスクにコピーする必要があります。これで、任意の Solaris インストール方法を使用して Solaris ソフトウェアをネットワーク上でインストールできます。

## ネットワークインストールに必要なサーバー

ネットワーク上で Solaris オペレーティング環境をインストールするには、次のサーバーがネットワーク上に存在する必要があります。

- インストールサーバー – Solaris 9 ディスクイメージ (CD イメージまたは DVD イメージ) が格納された、ネットワークに接続されたシステム。このシステムからネットワーク上の別のシステムに Solaris 9 をインストールできます。インストールサーバーを作成するには、以下のメディアの 1 つからイメージをコピーします。
  - Solaris 9 DVD
  - Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD および Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD

Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 と Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD からイメージをコピーした後、インストール要件に応じて、Solaris 9 INSTALLATION と Solaris 9 LANGUAGES CD のイメージもコピーできます。

1 台のインストールサーバーで、異なる Solaris リリースや異なるプラットフォームに対して別々のディスクイメージを提供できます。それには、提供する複数のイメージをインストールサーバーのハードディスクにコピーする必要があります。たとえば、1 台のインストールサーバーに SPARC プラットフォームと x86 プラットフォームのディスクイメージを格納できます。

インストールサーバーの作成についての詳細は、次に示す節のどれかを参照してください。

- 83 ページの「SPARC または x86 DVD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法」
- 86 ページの「x86: SPARC または x86 DVD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法」
- 99 ページの「SPARC: SPARC CD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法」
- 109 ページの「クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成」
- ブートサーバー - オペレーティング環境をインストールするため、同一ネットワークサブネット上の複数のクライアントに対して、ブートに必要な情報を提供するサーバーシステム。ブートサーバーとインストールサーバーは、通常は同じシステムです。ただし、インストールされる Solaris 9 ソフトウェアのシステムがインストールサーバーとは異なるサブネット上に存在する場合で、DHCP を使用していないときは、そのサブネットにブートサーバーが必要です。

1 台のブートサーバーで、複数のリリースの Solaris ブートソフトウェア (異なるプラットフォームの Solaris 9 ブートソフトウェアも含む) を提供できます。たとえば、SPARC ブートサーバーは、SPARC システムに Solaris 8 と Solaris 9 のブートソフトウェアを提供できます。同時に x86 システムに Solaris 9 のブートソフトウェアを提供することもできます。

---

注 - DHCP を使用する場合は、ブートサーバーを個別に作成する必要はありません。詳細は、79 ページの「DHCP によるネットワークインストールパラメータの指定」を参照してください。

---

ブートサーバーの作成についての詳細は、次に示す節のいずれかを参照してください。

- 90 ページの「DVD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」
- 121 ページの「CD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」
- (省略可能) ネームサーバー - 分散ネットワークデータベース (DNS、NIS、NIS+、LDAP など) を管理するシステム。これには、同じネットワーク上のユーザーやほかのシステムの情報が含まれています。

ネームサーバーの作成方法については、『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス : DNS、NIS、LDAP 編)』を参照してください。

---

注 - インストールサーバーとネームサーバーは、同じシステムであっても別のシステムであってもかまいません。

---

図 10-1 は、ネットワークインストールに使用される一般的なサーバー構成を示したものです。

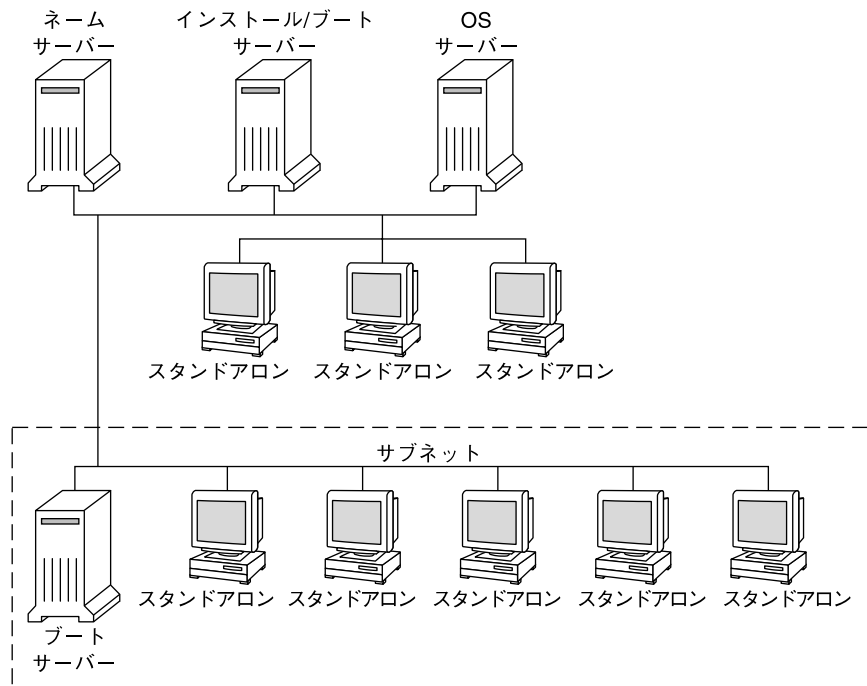


図 10-1 ネットワークインストールサーバー

## DHCP によるネットワークインストールパラメータの指定

DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) は、インストールに必要なネットワークパラメータを提供します。DHCP を使用する場合は、ブートサーバーを個別に作成する必要はありません。インストールサーバーの作成後、`add_install_client -d` コマンドを使用してネットワークにクライアントを追加します。`-d` オプションを指定すると、DHCP を使用してネットワーク経由で Solaris インストールできるようにクライアントシステムを設定できます。

インストールパラメータ用の DHCP オプションについては、『*Solaris* のシステム管理 (IP サービス)』の「DHCP サービスを使用した *Solaris* ネットワークインストールクライアントのサポート」を参照してください。



## 第 11 章

# DVD メディアを使用してネットワークからインストールするための準備

この章では、Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする準備として DVD メディアを使用してネットワークとシステムを設定する方法を説明します。ネットワークインストールを使用すると、Solaris 9 ディスクイメージにアクセスできるシステム (インストールサーバーと呼ばれる) から、ネットワーク上のほかのシステムに Solaris ソフトウェアをインストールできます。その場合には、まず Solaris 9 DVD メディアの内容をインストールサーバーのハードディスクにコピーする必要があります。これで、任意の Solaris インストール方法を使用して Solaris ソフトウェアをネットワーク上でインストールできます。この章の内容は次のとおりです。

- 81 ページの「作業マップ: DVD メディアを使用してネットワーク上でインストールするための準備」
- 82 ページの「DVD メディアを用いたインストールサーバーの作成」
- 90 ページの「DVD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」
- 92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」

## 作業マップ: DVD メディアを使用してネットワーク上でインストールするための準備

表 11-1 作業マップ: DVD メディアを使用するインストールサーバーの設定

作業	説明	参照先
インストールサーバーを作成する	<code>setup_install_server(1M)</code> コマンドを使用して Solaris 9 DVD をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。	82 ページの「DVD メディアを用いたインストールサーバーの作成」

表 11-1 作業マップ: DVD メディアを使用するインストールサーバーの設定 (続き)

作業	説明	参照先
(省略可能) ブートサーバーを作成する	インストールサーバーと異なるサブネットワーク上にあるシステムをネットワークからインストールする場合、システムをブートするためのブートサーバーをサブネットワーク上に作成する必要があります。ブートサーバーを設定するには、 <code>setup_install_server</code> コマンドを <code>-b</code> オプションを付けて実行します。DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使用する場合は、ブートサーバーは必要ありません。	90 ページの「DVD イメージを用いたサブネットワーク上のブートサーバーの作成」
ネットワークインストールするシステムを追加する	<code>add_install_client</code> コマンドを使用して、ネットワークからインストールする各システムを設定します。インストールする各システムには、ネットワーク上にあるインストールサーバー、ブートサーバー、および構成情報を認識させる必要があります。	92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」

## DVD メディアを用いたインストールサーバーの作成

インストールサーバーには、ネットワーク上でシステムをインストールするために必要なインストールイメージが含まれます。Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールするためには、インストールサーバーを作成する必要があります。ブートサーバーは必ずしも設定する必要はありません。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定している場合、あるいは、インストールサーバーとクライアントが同じサブネットワーク上にある場合、ブートサーバーは必要ありません。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネットワーク上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、サブネットワークごとに異なるブートサーバーを作成する必要があります。インストールサーバーはサブネットワークごとに作成できます。インストールサーバーにはより多くのディスク容量が必要です。

---

注 – Solaris DVD メディアを使用して Solaris 2.6 または 7 オペレーティング環境の稼働するシステム上でインストールサーバーを設定する場合、最初に次のパッチのいずれかを適用する必要があります。

- Solaris 2.6 オペレーティング環境 (SPARC 版) — Patch ID 107618-03
  - Solaris 2.6 オペレーティング環境 (Intel 版) — Patch ID 107619-03
  - Solaris 7 オペレーティング環境 (SPARC 版) — Patch ID 107259-03
  - Solaris 7 オペレーティング環境 (Intel 版) — Patch ID 107260-03
- 

## ▼ SPARC または x86 DVD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法

---

注 – SPARC: Solaris 2.3 以前にリリースされた SunOS バージョンを使用するシステムは使用できません。

---

---

注 – この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. インストールサーバーとして使用する **SPARC** システムでスーパーユーザーになります。

このシステムには DVD-ROM ドライブが必要です。さらに、システムは、このサイトのネットワークに接続されネームサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用する場合、システムはすでに NIS、NIS+、DNS、または LDAP のいずれかのサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。

2. **SPARC** システムのドライブに **Solaris 9 DVD** を挿入します。

3. **DVD** イメージをコピーするディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p install_dir_path
```

4. マウントされたディスクの **Tools** ディレクトリに移動します。

- **SPARC DVD** メディアの場合、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_9/Tools
```

- **x86 DVD** メディアの場合、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
```

上の例では、**cdrom0** は、Solaris オペレーティング環境の DVD メディアを含むドライブへのパスです。

5. ドライブ内の **DVD** イメージをインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./setup_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path* DVD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

---

注 - `setup_install_server` コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、`df -k1` コマンドを使用します。

---

6. 他のシステムがインストールサーバーをマウントできるように設定する必要があるかどうかを判断します。
  - インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。手順 10 に進みます。
  - インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、以下の手順を実行してください。
7. インストールサーバーのイメージへのパスが適切に共有されていることを確認します。

```
# share | grep install_dir_path
```

*install\_dir\_path* DVD イメージがコピーされているインストールイメージへのパスを指定します。

- インストールサーバーのディレクトリへのパスが表示される場合、かつ、`anon=0` がオプションに表示される場合、手順 10 に進みます。
  - インストールサーバーのディレクトリのパスが表示されないか、オプション内に `anon=0` と示されない場合は、次の作業へ進みます。
8. 次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加し、ブートサーバーからインストールサーバーが利用できるように設定します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" install_dir_path
```

9. インストールサーバーのディレクトリパスが正しく共有されているか確認します。

```
# ps -ef | grep nfsd
```

- `nfsd` デーモンが稼働していない場合は、このデーモンを起動してください。

```
# /etc/init.d/nfs.server start
```

- nfsd デーモンがすでに稼働している場合は、インストールサーバーを共有してください。

```
# shareall
```

10. ルート (/) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

11. Solaris 9 DVD を取り出します。

12. `setup_install_server` によって作成されたネットインストールイメージ上のミニルート (`/install_dir_path/Solaris_9/Tools/Boot`) にあるファイルにパッチを適用するか決定します。ブートイメージに問題がある場合は、ファイルにパッチを適用する必要があります。

- パッチを適用しない場合は、そのまま続きます。
- 適用する場合は、`patchadd -c` コマンドを使用して、ミニルートにあるファイルにパッチを適用します。



---

注意 - `patchadd -c` を使用する前には必ず、パッチの README を読むか、ご購入先におたずねください。

---

13. ブートサーバーを作成する必要があるかどうかを判断します。

- DHCP を使用しているか、あるいはインストール対象のシステムと同じサブネット上にインストールサーバーが存在する場合は、ブートサーバーを作成する必要はありません。92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」へ進みます。
- DHCP を使用しておらず、インストールサーバーとクライアントが別のサブネットに存在する場合は、ブートサーバーを作成する必要があります。90 ページの「DVD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」へ進みます。

例 11-1 SPARC: SPARC DVD による SPARC インストールサーバーの作成

次に、Solaris 9 DVD をインストールサーバーの `/export/home/s9dvdsparc` ディレクトリにコピーして、インストールサーバーを作成する方法を示します。

```
# mkdir -p /export/home/s9dvdsparc
# cd /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server /export/home/s9dvdsparc
```

別のブートサーバーが必要な場合、次の手順を追加します。

次のパスを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" /export/home/s9dvdsparc
```

例 11-1 SPARC: SPARC DVD による SPARC インストールサーバーの作成 (続き)

nfsd デーモンが稼働しているかどうかを確認します。nfsd デーモンが稼働していない場合、このデーモンを起動して共有します。

```
# ps -ef | grep nfsd
# /etc/init.d/nfs.server start
# shareall
# cd /
```

例 11-2 x86: x86 DVD を使用した SPARC インストールサーバーの作成

次に、インストールサーバーの /export/home/s9dvd86 ディレクトリに Solaris 9 DVD をコピーしてインストールサーバーを作成する方法を示します。

```
# mkdir -p /export/home/s9dvd86
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server /export/home/s9dvd86
```

次のパスを /etc/dfs/dfstab ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" /export/home/s9dvd86
```

nfsd デーモンが稼働しているかどうかを確認します。nfsd デーモンが稼働していない場合、このデーモンを起動して共有します。

```
# ps -ef | grep nfsd
# /etc/init.d/nfs.server start
# shareall
# cd /
```

## ▼ x86: SPARC または x86 DVD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法

---

注 - この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. インストールサーバーとして使用する **x86** システムでスーパーユーザーになります。このシステムには DVD-ROM ドライブが必要です。さらに、システムは、このサイトのネットワークに接続され名前サービスに登録されている必要があります。名前サービスを使用する場合、システムの名前サービスは、NIS、NIS+、DNS、LDAP のいずれかでなければなりません。名前サービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。
2. システムのドライブに **Solaris 9 DVD** を挿入します。

- ブートイメージをコピーするディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p install_dir_path
```

*install\_dir\_path* DVD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

- マウントされたディスクの **Tools** ディレクトリに移動します。

- x86 DVD メディアの場合、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/s2/Solaris_9/Tools
```

- SPARC DVD メディアの場合、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
```

上の例では、**cdrom0** は、Solaris オペレーティング環境の DVD メディアを含むドライブへのパスです。

- setup\_install\_server** コマンドを使用して、ドライブ内のディスクをインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./setup_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path* DVD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

---

注 - **setup\_install\_server** コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、**df -k1** コマンドを使用します。

---

- 他のシステムがインストールサーバーをマウントできるように設定する必要があるかどうかを判断します。

- インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。手順 10 に進みます。

- インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、以下の手順を実行してください。

- インストールサーバーのイメージへのパスが適切に共有されていることを確認します。

```
# share | grep install_dir_path
```

`install_dir_path` DVD イメージがコピーされているインストールイメージへのパスを指定します。

- インストールサーバーのディレクトリへのパスが表示されて、`anon=0` がオプションに表示される場合、手順 10 に進みます。
- インストールサーバーのディレクトリのパスが表示されないか、オプション内に `anon=0` と示されない場合は、次の作業へ進みます。

8. 次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加し、ブートサーバーからインストールサーバーが利用できるように設定します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" install_dir_path
```

9. インストールサーバーのディレクトリパスが正しく共有されているか確認します。

```
# ps -ef | grep nfsd
```

- `nfsd` デーモンが稼働していない場合は、このデーモンを起動してください。

```
# /etc/init.d/nfs.server start
```

- `nfsd` デーモンがすでに稼働している場合は、インストールサーバーを共有してください。

```
# shareall
```

10. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

11. Solaris 9 DVD を取り出します。

12. `setup_install_server` によって作成されたネットインストールイメージ上のミニルート (`Solaris_9/Tools/Boot`) にあるファイルにパッチを適用するか決定します。

- パッチを適用しない場合は、そのまま継続します。
- 適用する場合は、`patchadd -c` コマンドを使用して、ミニルートにあるファイルにパッチを適用します。

13. ブートサーバーを作成する必要があるかどうかを判断します。

- インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。
- インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、ブートサーバーを作成する必要があります。ブートサーバーの作成方法については、90 ページの「DVD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」を参照してください。



例 11-3 x86: x86 DVD を使用して x86 インストールサーバーを作成する

次に、インストールサーバーの /export/home/s9dvd86 ディレクトリに Solaris 9 DVD (x86 版) をコピーして x86 インストールサーバーを作成する方法を示します。

```
# mkdir -p /export/home/s9dvd86
# cd /cdrom/cdrom0/s2/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server /export/home/s9dvd86
```

次のパスを /etc/dfs/dfstab ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" /export/home/s9dvd86
```

nfsd デーモンが稼働しているかどうかを確認します。nfsd デーモンが稼働していない場合、このデーモンを起動して共有します。

```
# ps -ef | grep nfsd
# /etc/init.d/nfs.server start
# shareall
# cd /
```

例 11-4 SPARC DVD を使用して x86 インストールサーバーを作成する

次に、インストールサーバーの /export/home/s9dvdsparc ディレクトリに Solaris 9 DVD (SPARC 版) をコピーして x86 インストールサーバーを作成する方法を示します。

```
# mkdir -p /export/home/s9dvdsparc
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server /export/home/s9dvdsparc
```

次のパスを /etc/dfs/dfstab ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" /export/home/s9dvdsparc
```

nfsd デーモンが稼働しているかどうかを確認します。nfsd デーモンが稼働していない場合、このデーモンを起動して共有します。

```
# ps -ef | grep nfsd
# /etc/init.d/nfs.server start
# shareall
# cd /
```

---

## DVD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成

Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールするためには、インストールサーバーを作成する必要があります。ブートサーバーは必ずしも設定する必要はありません。ブートサーバーには、ネットワーク上でシステムをブートするために必要なブートソフトウェアが含まれています。一方、インストールサーバーは Solaris ソフトウェアのインストールを行います。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定している場合、あるいは、インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上にある場合、ブートサーバーは必要ありません。92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」へ進みます。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、サブネットごとに異なるブートサーバーを作成する必要があります。インストールサーバーはサブネットごとに作成できます。しかし、インストールサーバーはより多くのディスク容量を必要とします。

### ▼ DVD イメージを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する方法

1. サブネット内でブートサーバーとするシステムにログインして、スーパーユーザーになります。

システムはリモートの Solaris 9 ディスクイメージ (通常は、インストールサーバー) へのアクセス権を持っている必要があります。ネームサービスを使用する場合、システムはすでにネームサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。

2. インストールサーバーから **Solaris 9 DVD** をマウントします。

```
# mount -F nfs -o ro server_name:path /mnt
```

*server\_name:path*            インストールサーバー名とディスクイメージの絶対パスを指定します。

3. ブートイメージ用のディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p boot_dir_path
```

`boot_dir_path`                   ブートソフトウェアをコピーするディレクトリを指定します。

4. Solaris 9 DVD イメージ上の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /mnt/Solaris_9/Tools
```

5. ブートソフトウェアをブートサーバーにコピーします。

```
# ./setup_install_server -b boot_dir_path
```

`-b`                               システムをブートサーバーとして設定することを示します。

`boot_dir_path`                   ブートソフトウェアをコピーするディレクトリを指定します。

---

注 `-setup_install_server` コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアのディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、`df -k1` コマンドを使用します。

---

6. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

7. インストールイメージをマウント解除します。

```
# umount /mnt
```

以上の操作で、ネットワークからインストールするためにシステムを設定する用意が整いました。92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。

例 11-5 サブネット上にブートサーバーを作成する

次の例は、ブートサーバーをサブネット上に作成する方法を示したものです。これらのコマンドを実行すると、Solaris 9 DVD イメージのブートソフトウェアが `crystal` という名前のシステムのローカルディスク上の `/export/home/s9dvdsparc` にコピーされます。

```
# mount -F nfs -o ro crystal:/export/home/s9dvdsparc /mnt
# mkdir -p /export/home/s9dvdsparc
# cd /mnt/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server -b /export/home/s9dvdsparc
# cd /
# umount /mnt
```

---

## DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する

インストールサーバーとブートサーバー (必要な場合) を作成した後、ネットワークからインストールする各システムを設定する必要があります。インストールする各システムは、次の情報にアクセスする必要があります。

- インストールサーバー
- ブートサーバー (必要な場合)
- `sysidcfg` ファイル (`sysidcfg` ファイルを使用してシステム構成情報を事前設定する場合)
- ネームサーバー (ネームサービスを使用してシステム構成情報を事前設定する場合)
- プロファイルサーバー上の `JumpStart` ディレクトリにあるプロファイル (カスタム `JumpStart` インストールを使用する場合)

インストールサーバーとクライアントの設定には、`add_install_client` を使用して以下の作業を行ってください。次の手順の例も参照してください。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定している場合、例 11-6 を参照してください。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上にある場合、例 11-7 を参照してください。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上にない場合、かつ、DHCP を使用していない場合、例 11-8 を参照してください。

このコマンドで使用できるオプションについての詳細は、`add_install_client (1M)` のマニュアルページを参照してください。

### ▼ サーバーから `add_install_client` を実行してネットワークからインストールするシステムを追加する方法

ブートサーバーを使用する場合、インストールサーバーのインストールイメージを共有していること、および適切なデーモンを起動していることを確認します。「SPARC または x86 DVD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法」の手順 6 を参照してください。

1. インストールサーバーまたはブートサーバー上でスーパーユーザーになります。

2. NIS、NIS+、DNS、または LDAP のネームサービスを使用する場合、インストールするシステムについての次のような情報がネームサービスに追加されていることを確認します。

- ホスト名
- IP アドレス
- Ethernet アドレス

ネームサービスの詳細は、『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス : DNS、NIS、LDAP 編)』を参照してください。

3. インストールサーバーの Solaris 9 DVD イメージ上の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /install_dir_path/Solaris_9/Tools
```

*install\_dir\_path*                      Tools ディレクトリのパスを指定します。

4. ネットワークからインストールするシステムを設定します。

```
# ./add_install_client [-d] [-s install_server:install_dir_path] \  
[-c jumpstart_server:jumpstart_dir_path] [-p sysid_server:path] \  
[-t boot_image_path] client_name platform_group
```

- |  |   |
|--|---|
| <p>-d</p>  | <p>クライアントが DHCP を使用してネットワークインストールパラメータを取得することを指定します。</p> <p>x86 クライアントの場合、このオプションを指定し、PXE ネットワークブートを使用してネットワークからシステムをブートしてください。</p>   |
| <p>-s <i>install_server:install_dir_path</i></p>     | <p>インストールサーバーの名前とパスを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ <i>install_server</i> は、インストールサーバーのホスト名です。</li><li>■ <i>install_dir_path</i> は、Solaris 9 DVD イメージへの絶対パスです。</li></ul> |
| <p>-c <i>jumpstart_server:jumpstart_dir_path</i></p> | <p>カスタム JumpStart インストールの JumpStart ディレクトリを指定します。<i>jumpstart_server</i> には JumpStart ディレクトリがあるサーバーのホスト名を指定します。<i>jumpstart_dir_path</i> は、JumpStart ディレクトリへの絶対パスです。</p>                    |
| <p>-p <i>sysid_server:path</i></p>                   | <p>システムの構成情報を事前設定するための <i>sysidcfg</i> ファイルのパスを指定します。<i>sysid_server</i> は、このファイルを持っているサーバーの有効なホスト名または IP アドレスです。<i>path</i> は、<i>sysidcfg</i> ファイルが入っているディレクトリへの絶対パスです。</p>                |

<code>-t boot_image_path</code>	Solaris 9 ネットインストールイメージ、CD、または DVD 上の <code>Tools</code> ディレクトリにあるブートイメージ以外のブートイメージを使用したい場合、別のブートイメージへのパスを指定します。
<code>client_name</code>	ネットワークからインストールするシステムのホスト名を指定します。この名前はインストールサーバーのホスト名ではありません。
<code>platform_group</code>	インストールするシステムのプラットフォームグループを指定します。詳細は、第 39 章を参照してください。

**例 11-6 SPARC: DHCP を使用している場合の SPARC インストールサーバー上の SPARC インストールクライアントの追加方法 (DVD)**

次の例に、DHCP を使用してネットワーク上のインストールパラメータを設定しているときに、インストールクライアントを追加する方法を示します。インストールクライアントは、`basil` という名前の Ultra™ 5 システムです。ファイルシステム `/export/home/s9dvdsparc/Solaris_9/Tools` には `add_install_client` コマンドが入っています。

DHCP を使用してネットワークインストール用のインストールパラメータを設定する方法については、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の「DHCP サービスを使用するためのネットワークの準備 (作業マップ)」を参照してください。

```
sparc_install_server# cd /export/home/s9dvdsparc/Solaris_9/Tools
sparc_install_server# ./add_install_client -d basil sun4u
```

**例 11-7 インストールサーバーと同じサブネット上にあるインストールクライアントの追加方法 (DVD)**

次の例に、インストールサーバーと同じサブネット上にあるインストールクライアントを追加する方法を示します。インストールクライアントは、`basil` という名前の Ultra™ 5 システムです。ファイルシステム `/export/home/s9dvdsparc` には `add_install_client` コマンドが入っています。

```
install_server# cd /export/home/s9dvdsparc/Solaris_9/Tools
install_server# ./add_install_client basil sun4u
```

**例 11-8 ブートサーバーへのインストールクライアントの追加方法 (DVD)**

次の例に、ブートサーバーにインストールクライアントを追加する方法を示します。インストールクライアントは、`rose` という名前の Ultra™ 5 システムです。次のコマンドはブートサーバー上で実行します。-s オプションには、`/export/home/s9dvdsparc` に Solaris 9 DVD (SPARC 版) イメージを持っている `rosemary` という名前のインストールサーバーを指定しています。

```
boot_server# cd /export/home/s9dvdsparc/Solaris_9/Tools
boot_server# ./add_install_client -s rosemary:/export/home/s9dvdsparc rose sun4u
```

例 11-9 x86: DHCP を使用している場合の x86 インストールサーバー上の x86 インストールクライアントの追加方法 (DVD)

次の例に、DHCP を使用してネットワーク上のインストールパラメータを設定しているときに、x86 インストールクライアントを追加する方法を示します。-d オプションを指定すると、クライアントのネットワークインストールパラメータを構成する際に、DHCP プロトコルが使用されます。PXE ネットワークブートを使用する場合には、DHCP プロトコルを使用する必要があります。DHCP クラス名 SUNW.i86pc は、このコマンドが単一のクライアントだけでなく、ネットワーク上のすべての Solaris x86 クライアントに適用されることを意味します。-s オプションには、rosemary という名前のインストールサーバーからクライアントをインストールすることを指定します。このサーバーは、/export/boot/s9dvd86 に Solaris 9 DVD (x86 版) イメージを保持しています。

DHCP を使用してネットワークインストール用のインストールパラメータを設定する方法については、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の「DHCP サービスを使用するためのネットワークの準備 (作業マップ)」を参照してください。

```
x86_install_server# cd /export/boot/s9dvd86/Solaris_9/Tools
x86_install_server# ./add_install_client -d -s rosemary:/export/home/s9dvd86 \
SUNW.i86pc i86pc
```





## 第 12 章

---

# CD メディアを使用してネットワークからインストールするための準備

---

この章では、ネットワーク上で Solaris ソフトウェアをインストールする準備として CD メディアを使用してネットワークとシステムを設定する方法を説明します。ネットワークインストールを使用すると、Solaris 9 ディスクイメージにアクセスできるシステム (インストールサーバーと呼ばれる) から、ネットワーク上のほかのシステムに Solaris ソフトウェアをインストールできます。ユーザーは、まず CD メディアの内容をインストールサーバーのハードディスクにコピーする必要があります。これで、任意の Solaris インストール方法を使用して Solaris ソフトウェアをネットワーク上でインストールできます。この章の内容は次のとおりです。

- 98 ページの「作業マップ: CD メディアを使用してネットワーク上でインストールするための準備」
- 99 ページの「CD メディアによる SPARC インストールサーバーの作成」
- 104 ページの「CD メディアによる x86 インストールサーバーの作成」
- 109 ページの「クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成」
- 121 ページの「CD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」
- 123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」

## 作業マップ: CD メディアを使用して ネットワーク上でインストールするための 準備

表 12-1 作業マップ: CD メディアによるインストールサーバーの設定

作業	説明	参照先
インストールサーバーを作成する	<p><code>setup_install_server(1M)</code> コマンドを使用して Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。</p> <p>次に、<code>add_to_install_server(1M)</code> コマンドを使用して Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD と Solaris 9 LANGUAGES CD をインストールサーバーのハードディスクに追加します。</p> <p>さらに、<code>modify_install_server(1M)</code> コマンドを使用してネットワークインストールイメージに Solaris Web Start ユーザーインタフェースソフトウェアを追加します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 99 ページの「CD メディアによる SPARC インストールサーバーの作成」</li> <li>■ 104 ページの「x86: x86 CD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法」</li> <li>■ 109 ページの「クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成」</li> </ul>
(省略可能) ブートサーバーを作成する	<p>インストールサーバーと異なるサブネット上にあるシステムをネットワークからインストールする場合、システムをブートするためのブートサーバーをサブネット上に作成する必要があります。DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使用する場合は、ブートサーバーは必要ありません。</p>	121 ページの「CD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」
ネットワークインストールするシステムを追加する	<p><code>add_install_client</code> コマンドを使用して、ネットワークからインストールする各システムを設定します。インストールする各システムには、ネットワーク上にあるインストールサーバー、ブートサーバー、および構成情報を認識させる必要があります。</p>	123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」

---

## CD メディアによる SPARC インストールサーバーの作成

インストールサーバーには、ネットワーク上でシステムをインストールするために必要なインストールイメージが含まれます。Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールするためには、インストールサーバーを作成する必要があります。必ずしも個別のブートサーバーを設定する必要はありません。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定する場合や、インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在する場合は、個別のブートサーバーは不要です。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、サブネットごとに異なるブートサーバーを作成する必要があります。インストールサーバーはサブネットごとに作成できます。しかし、インストールサーバーはより多くのディスク容量を必要とします。

### ▼ SPARC: SPARC CD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法

ここでは、SPARC CD メディアを使用して SPARC インストールサーバーを作成する方法を説明します。

インストールサーバーとは異なるプラットフォームのメディアを使用してインストールサーバーを作成する場合 (SPARC システムで x86 CD メディアを使用する場合などは、109 ページの「クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成」を参照してください。

---

注 - この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. インストールサーバーとして使用するシステムでスーパーユーザーになります。このシステムには **CD-ROM** ドライブが必要です。  
さらに、システムは、このサイトのネットワークに接続されネームサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用する場合は、システムがすでに NIS、NIS+、DNS、LDAP のいずれかのネームサービスに登録されていなければなりません。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。
2. **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** をシステムのドライブに挿入します。

3. CD イメージ用のディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

4. マウントされたディスクの **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_9/Tools
```

上の例では、**cdrom0** は、Solaris オペレーティング環境の CD メディアを含むドライブへのパスです。

5. ドライブ内のイメージをインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./setup_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

---

注 - `setup_install_server` コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、`df -k1` コマンドを使用します。

---

6. 他のシステムがインストールサーバーをマウントできるように設定する必要があるかどうかを判断します。

- インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。手順 10 へ進みます。
- インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、以下の手順を実行してください。

7. インストールサーバーのインストールイメージのパスが適切に共有されているかを確認します。

```
# share | grep install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            ブートサーバーのインストールイメージのパスを指定します。

- インストールサーバーのディレクトリのパスが表示されてオプションに `anon=0` と示された場合は、手順 10 へ進みます。
- インストールサーバーのディレクトリのパスが表示されないか、オプション内に `anon=0` と示されない場合は、次の作業へ進みます。

8. 次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加し、ブートサーバーからインストールサーバーが利用できるように設定します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                   ブートサーバーのインストールイメージのパスを指定します。

9. インストールサーバーのディレクトリパスが正しく共有されているか確認します。

```
# ps -ef | grep nfsd
```

- `nfsd` デーモンが動作していない場合は、`nfsd` デーモンを起動します。

```
# /etc/init.d/nfs.server start
```

- `nfsd` デーモンがすでに稼働している場合は、インストールサーバーを共有してください。

```
# shareall
```

10. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

11. **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** を取り出します。

12. **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** をシステムの **CD-ROM** ドライブに挿入します。

13. マウントされた **CD** の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
```

14. **CD-ROM** ドライブ内の **CD** をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                   CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

15. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

16. **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** を取り出します。

17. **Solaris 9 LANGUAGES CD** をシステムの **CD-ROM** ドライブに挿入します。

18. マウントされた **CD** の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Tools
```

19. CD-ROM ドライブ内の CD をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

20. ルート (/) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

21. ユーザーが **Solaris Web Start** を使用してシステムをブートし、ネットワーク上で **Solaris 9** ソフトウェアをインストールできるように

- しない場合は、Solaris 9 LANGUAGES CD を取り出して手順 25 へ進みます。
- する場合は、Solaris 9 LANGUAGES CD を取り出して続きます。

22. **Solaris 9 INSTALLATION CD** をシステムの **CD-ROM** ドライブに挿入します。

23. マウントされた CD の **modify\_install\_server** を含むディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/s0
```

24. **Solaris Web Start** インタフェースソフトウェアをインストールサーバーにコピーします。

```
# ./modify_install_server -p install_dir_path installer_miniroot_path
```

*-p*                            既存イメージのミニルートを  
*install\_dir\_path/Solaris\_9/Tools/Boot.orig* に保存します。

*install\_dir\_path*            Solaris Web Start インストールをコピーするディレクトリを指定します。

*installer\_miniroot\_path*    Solaris Web Start インタフェースのコピー元となる CD 上のディレクトリを指定します。

25. **setup\_install\_server** によって作成されたネットインストールイメージ上のミニルート (*/install\_dir\_path/Solaris\_9/Tools/Boot*) にあるファイルにパッチを適用するか決定します。ブートイメージに問題がある場合は、ファイルにパッチを適用する必要があります。

- パッチを適用しない場合は、そのまま続きます。
- 適用する場合は、`patchadd -c` コマンドを使用して、ミニルートにあるファイルにパッチを適用します。



---

注意 - patchadd -C を使用する前には必ず、パッチの README を読むか、ご購入先におたずねください。

---

26. ブートサーバーを作成する必要があるかどうかを判断します。

- DHCP を使用しているか、あるいはインストール対象のシステムと同じサブネット上にインストールサーバーが存在する場合は、ブートサーバーを作成する必要はありません。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」へ進みます。
- DHCP を使用しておらず、インストールサーバーとクライアントが別のサブネットに存在する場合は、ブートサーバーを作成する必要があります。121 ページの「CD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」へ進みます。

例 12-1 SPARC: SPARC CD メディアによる SPARC インストールサーバーの作成

次の例は、インストールサーバーの /export/home/s9cdsparc ディレクトリに次の CD をコピーしてインストールサーバーを作成する方法を示しています。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版)
- Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版)

```
# mkdir -p /export/home/s9cdsparc
# cd /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server /export/home/s9cdsparc
```

- インストールサーバーが異なる場合、次の手順を追加します。

次のパスを /etc/dfs/dfstab ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" \
/export/home/s9cdsparc
```

nfsd デーモンが稼働しているかどうかを確認します。nfsd デーモンが稼働していない場合、このデーモンを起動して共有します。

```
# ps -ef | grep nfsd
# /etc/init.d/nfs.server start
# shareall
```

引き続き、次の手順を実行します。

- ブートサーバーが不要であるか、個別のブートサーバーを設定する手順を完了している場合は、作業を続行します。

```
# cd /
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
# ./add_to_install_server /export/home/s9cdsparc
# cd /
# cd /cdrom/cdrom0/Tools
# ./add_to_install_server /export/home/s9cdsparc
```

例 12-1 SPARC: SPARC CD メディアによる SPARC インストールサーバーの作成 (続き)

```
# cd /  
# cd /cdrom/cdrom0/s0  
# ./modify_install_server -p /export/home/s9cdsparc /cdrom/cdrom0/s0
```

この例では、各コマンドを実行する前に各 CD がドライブに挿入され、自動的にマウントされるものとします。各コマンドを実行すると、CD が取り出されます。

---

## CD メディアによる x86 インストールサーバーの作成

インストールサーバーには、ネットワーク上でシステムをインストールするために必要なインストールイメージが含まれます。Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールするためには、インストールサーバーを作成する必要があります。必ずしも個別のブートサーバーを設定する必要はありません。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定する場合や、インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在する場合は、個別のブートサーバーは不要です。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、サブネットごとに異なるブートサーバーを作成する必要があります。インストールサーバーはサブネットごとに作成できます。インストールサーバーにはより多くのディスク容量が必要です。

### ▼ x86: x86 CD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法

ここでは、x86 CD メディアを使用して x86 インストールサーバーを作成する方法を説明します。

インストールサーバーとは異なるプラットフォームのメディアを使用してインストールサーバーを作成する場合 (x86 システムで SPARC CD メディアを使用する場合など) は、109 ページの「クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成」を参照してください。

---

注 - この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---



1. インストールサーバーとして使用するシステムでスーパーユーザーになります。このシステムには **CD-ROM** ドライブが必要です。

さらに、システムは、このサイトのネットワークに接続され、ネームサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用する場合は、システムがすでに NIS、NIS+、DNS、LDAP のいずれかのネームサービスに登録されていなければなりません。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。

2. **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** をシステムのドライブに挿入します。

3. **CD** イメージ用のディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                    CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

4. マウントされたディスクの **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/s2/Solaris_9/Tools
```

上の例では、**cdrom0** は、Solaris オペレーティング環境の CD メディアを含むドライブへのパスです。

5. ドライブ内のイメージをインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./setup_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                    CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

---

注 - `setup_install_server` コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、`df -k1` コマンドを使用します。

---

6. 他のシステムがインストールサーバーをマウントできるように設定する必要があるかどうかを判断します。

- インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。手順 10へ進みます。
- インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、以下の手順を実行してください。

7. インストールサーバーのインストールイメージのパスが適切に共有されているかを確認します。

```
# share | grep install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                   ブートサーバーのインストールイメージのパスを指定します。

- インストールサーバーのディレクトリへのパスが表示されて、`anon=0` がオプションに表示される場合、手順 10 に進みます。
- インストールサーバーのディレクトリのパスが表示されないか、オプション内に `anon=0` と示されない場合は、次の作業へ進みます。

8. 次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加し、ブートサーバーからインストールサーバーが利用できるように設定します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                   ブートサーバーのインストールイメージのパスを指定します。

9. インストールサーバーのディレクトリパスが正しく共有されているか確認します。

```
# ps -ef | grep nfsd
```

- `nfsd` デーモンが稼働していない場合は、このデーモンを起動してください。

```
# /etc/init.d/nfs.server start
```

- `nfsd` デーモンがすでに稼働している場合は、インストールサーバーを共有してください。

```
# shareall
```

10. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

11. **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** を取り出します。

12. **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** をシステムの **CD-ROM** ドライブに挿入します。

13. マウントされた **CD** の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
```

14. **CD-ROM** ドライブ内の **CD** をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                   CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

15. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

16. **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** を取り出します。

17. Solaris 9 LANGUAGES CD をシステムの CD-ROM ドライブに挿入します。

18. マウントされた CD の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Tools
```

19. CD-ROM ドライブ内の CD をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

20. ルート (/) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

21. ユーザーが **Solaris Web Start** を使用してシステムをブートし、ネットワーク上で **Solaris 9** ソフトウェアをインストールできるように

- しない場合は、Solaris 9 LANGUAGES CD を取り出して手順 25 へ進みます。
- する場合は、Solaris 9 LANGUAGES CD を取り出して続きます。

22. Solaris 9 INSTALLATION CD をシステムの CD-ROM ドライブに挿入します。

23. マウントされた CD の **modify\_install\_server** を含むディレクトリに移動します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/s2
```

24. **Solaris Web Start** インタフェースソフトウェアをインストールサーバーにコピーします。

```
# ./modify_install_server -p install_dir_path installer_miniroot_path
```

-p                            既存イメージのミニルートを  
*install\_dir\_path/Solaris\_9/Tools/Boot.orig* に保存します。

*install\_dir\_path*            Solaris Web Start インストールをコピーするディレクトリを指定し  
ます。

*installer\_miniroot\_path*    Solaris Web Start インタフェースのコピー元となる CD 上のディレ  
クトリを指定します。

25. **setup\_install\_server** によって作成されたネットインストールイメージ上のミニルート (*/install\_dir\_path/Solaris\_9/Tools/Boot*) にあるファイルにパッチを適用するか決定します。ブートイメージに問題がある場合は、ファイルにパッチを適用する必要があります。

- パッチを適用しない場合は、このまま続きます。

- 適用する場合は、`patchadd -C` コマンドを使用して、ミニルートにあるファイルにパッチを適用します。



---

注意 - `patchadd -C` を使用する前には必ず、パッチの README を読むか、ご購入先におたずねください。

---

26. ブートサーバーを作成する必要があるかどうかを判断します。

- DHCP を使用しているか、あるいはインストール対象のシステムと同じサブネット上にインストールサーバーが存在する場合は、ブートサーバーを作成する必要はありません。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」へ進みます。
- DHCP を使用しておらず、インストールサーバーとクライアントが別のサブネットに存在する場合は、ブートサーバーを作成する必要があります。121 ページの「CD イメージを用いたサブネット上でのブートサーバーの作成」へ進みます。

例 12-2 x86: x86 CD メディアによる x86 インストールサーバーの作成

次の例は、インストールサーバーの `/export/home/s9cdx86` ディレクトリに次の CD をコピーしてインストールサーバーを作成する方法を示しています。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)
- Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)

```
# mkdir -p /export/home/s9cdx86
# cd /cdrom/cdrom0/s2/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server /export/home/s9cdx86
```

- インストールサーバーが異なる場合、次の手順を追加します。

次のパスを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 -d "install server directory" \
/export/home/s9cdx86
```

`nfsd` デーモンが稼働しているかどうかを確認します。`nfsd` デーモンが稼働していない場合、このデーモンを起動して共有します。

```
# ps -ef | grep nfsd
# /etc/init.d/nfs.server start
# shareall
```

引き続き、次の手順を実行します。

- ブートサーバーが不要であるか、個別のブートサーバーを設定する手順を完了している場合は、作業を続行します。

```
# cd /
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
# ./add_to_install_server /export/home/s9cdx86
```

例 12-2 x86: x86 CD メディアによる x86 インストールサーバーの作成 (続き)

```
# cd /
# cd /cdrom/cdrom0/Tools
# ./add_to_install_server /export/home/s9cdx86
# cd /
# cd /cdrom/cdrom0/s2
# ./modify_install_server -p /export/home/s9cdx86 /cdrom/cdrom0/s2
```

この例では、各コマンドを実行する前に各 CD がドライブに挿入され、自動的にマウントされるものとします。各コマンドを実行すると、CD が取り出されます。

---

## クロスプラットフォームの CD メディアを使用したインストールサーバーの作成

インストールサーバーとは異なるプラットフォームの CD を使用する必要がある場合、インストールサーバー上で CD を読み取ることができません。リモートシステムを使用して CD を読み取る必要があります。たとえば、SPARC インストールサーバーを設定している状態で x86 CD メディアを使用する場合、リモート x86 システムを使用して CD を読み取る必要があります。

### ▼ x86 CD メディアを使用して SPARC システムに x86 インストールサーバーを作成する方法

ここでは、x86 CD メディアを使用して SPARC システム上に x86 インストールサーバーを作成する手順を説明します。以下が必要になります。

- SPARC システム
- CD-ROM ドライブを備えた x86 システム
- リモート x86 システム用の CD セット
  - Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)
  - Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)
  - Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)
  - Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版)

---

注 - この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

コマンド入力例中の *SPARC system* はインストールサーバーとなる SPARC システムを、*remote-x86-system* は x86 CD メディアを使用するリモート x86 システムを表します。

1. リモート x86 システム上で、スーパーユーザーになります。

さらに、システムは、このサイトのネットワークに接続されネームサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用する場合、システムのネームサービスは、NIS、NIS+、DNS、LDAP のいずれかでなければなりません。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。

2. リモート x86 システム上で、システムのドライブに **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)** を挿入します。

3. リモート x86 システム上で、次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s2
```

4. リモート x86 システム上で、NFS デーモンを起動します。

```
remote-x86-system# /etc/init.d/nfs.server start
```

5. リモート x86 システム上で `share` コマンドを実行し、他のシステムが **CD** を利用可能であることを確認します。

```
remote-x86-system# share
- /cdrom/sol_9_x86/s0 ro,anon=0 " "
- /cdrom/sol_9_x86/s2 ro,anon=0 " "
```

上のサンプル出力では、`sol_9_x86` は、x86 版 Solaris 9 オペレーティング環境を指します。このテキスト文字列は、Solaris オペレーティング環境のバージョンによって異なります。

6. x86 インストールサーバーとして使用する **SPARC** システム上で、スーパーユーザーになります。

7. **SPARC** システム上で **x86 CD** にアクセスする際のマウントポイントとなる 2 つのディレクトリ (ミニルート用と製品用) を作成します。

```
SPARC-system# mkdir directory_name_s0
```

```
SPARC-system# mkdir directory_name_s2
```

`directory_name_s0`            スライス 0 からのミニルート用のマウントポイントとなるディレクトリの名前

`directory_name_s2`            スライス 2 からの製品用のマウントポイントとなるディレクトリの名前

8. **CD** がリモート x86 システム上で適切にエクスポートされていることを確認します。

```
SPARC-system# showmount -e remote-x86-system
export list for remote-x86-system:
/cdrom/sol_9_x86/s0 (everyone)
/cdrom/sol_9_x86/s2 (everyone)
```

9. SPARC システム上で、リモート x86 システムの CD イメージをマウントします。

```
SPARC-system# mount remote_x86_system_name:/cdrom/sol_9_x86/s0 directory_name_s0
```

```
SPARC-system# mount remote_x86_system_name:/cdrom/sol_9_x86/s2 directory_name_s2
```

10. SPARC システム上で、マウントされたディスクの **Tools** ディレクトリに移動します。

```
SPARC-system# cd /directory_name_s2/Solaris_9/Tools
```

11. SPARC システム上で、インストールサーバーのハードディスク内の、**setup\_install\_server** コマンドを使用して作成したディレクトリにドライブ内のディスクをコピーします。

```
SPARC-system# ./setup_install_server -t directory_name_s0 install_dir_path
```

-t	Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD の Tools ディレクトリ上のブートイメージ以外を使用する場合は、そのブートイメージのパスを指定します。
directory_name_s0	スライス 0 からのミニルート用のマウントポイントとなるディレクトリの名前です。
install_dir_path	ディスクイメージをコピーするディレクトリを指定します。空のディレクトリを指定してください。

---

注 - setup\_install\_server コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、df -k1 コマンドを使用します。

---

12. SPARC システム上で、トップディレクトリに移動します。

```
SPARC-system# cd /
```

13. SPARC システム上で、両方のディレクトリのマウントを解除します。

```
SPARC-system# umount directory_name_s0
```

```
SPARC-system# umount directory_name_s2
```

14. x86 システム上で、両方の CD-ROM スライスの共有を解除します。

```
remote x86 system# unshare /cdrom/sol_9_x86/s0
```

```
remote x86 system# unshare /cdrom/sol_9_x86/s2
```

15. x86 システム上で、**Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)** を取り出します。
16. **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)** を SPARC システムの **CD-ROM** ドライブに挿入します。
17. SPARC システム上で、マウントされた **CD** の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
SPARC-system# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
```

18. **CD** イメージをインストールサーバー上の *install\_dir\_path* にコピーします。

```
SPARC-system# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

19. **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)** を取り出します。
20. **Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)** を SPARC システムの **CD-ROM** ドライブに挿入し、**CD** をマウントします。
21. SPARC システム上で、マウントされた **CD** の **Tools** ディレクトリに移動します。

```
SPARC-system# cd /cdrom/cdrom0/Tools
```

22. SPARC システム上で、**CD** をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
SPARC-system# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*            CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

23. ユーザーが **Solaris Web Start** を使用してシステムをブートし、ネットワーク上で **Solaris 9** ソフトウェアをインストールできるように
  - しない場合は、**Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)** を取り出して手順 31 へ進みます。
  - する場合は、**Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)** を取り出して次の作業へ進みます。
24. リモート x86 システムの **CD-ROM** ドライブに **Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版)** を挿入します。
25. リモート x86 システム上で、次のエントリを **/etc/dfs/dfstab** ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s2
```



26. リモート x86 システム上で、NFS デーモンを起動します。

```
remote-x86-system# /etc/init.d/nfs.server start
```

27. リモート x86 システム上で、CD が他のシステムから利用可能であることを確認します。

```
remote-x86-system# share
- /cdrom/multi_sol_9_x86/s0 ro,anon=0 " "
- /cdrom/multi_sol_9_x86/s2 ro,anon=0 " "
```

28. SPARC システム上で、CD 上のスライスをマウントします。

```
SPARC-system# mount remote_x86_system_name:/cdrom/multi_sol_9_x86/s0 directory_name_s0
SPARC-system# mount remote_x86_system_name:/cdrom/multi_sol_9_x86/s2 directory_name_s2
```

29. SPARC システム上で、マウントされた CD の `modify_install_server` を含むディレクトリに移動します。

```
SPARC-system# cd directory_name_s2
```

30. Solaris Web Start インタフェースソフトウェアをインストールサーバーにコピーします。

```
SPARC-system# ./modify_install_server -p install_dir_path directory_name_s0
```

<code>-p</code>	既存イメージのミニルートを <code>install_dir_path/Solaris_9/Tools/Boot.orig</code> に保存します。
<code>install_dir_path</code>	Solaris Web Start インストールをコピーするディレクトリを指定します。
<code>directory_name_s0</code>	スライス 0 からのミニルート用のマウントポイントとなるディレクトリの名前です。

31. `setup_install_server` によって作成されたネットインストールイメージ上のミニルート (`Solaris_9/Tools/Boot`) にあるファイルにパッチを適用するか決定します。

- 適用しない場合は、次の手順に進みます。
- 適用する場合は、`patchadd -C` コマンドを使用して、ミニルートにあるファイルにパッチを適用します。



---

注意 - `patchadd -C` を使用する前には必ず、パッチの README を読むか、ご購入先におたずねください。

---

32. ブートサーバーを作成する必要があるかどうかを判断します。

- インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。
- インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、ブートサーバーを作成する必要があります。ブートサーバーを作成する方法については、121 ページの「CD イメージを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する方法」を参照してください。

例 12-3 x86 CD メディアを使用して SPARC システムに x86 インストールサーバーを作成する

次の例では、`rosemary` という名前の SPARC システム上に x86 インストールサーバーを作成する方法を示します。次の x86 CD が、`tadpole` という名前のリモート x86 システムから SPARC インストールサーバーの `/export/home/s9cdx86` ディレクトリにコピーされます。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)
- Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)
- Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (x86 版)

リモート x86 システムで、次のように入力します。

```
tadpole (remote-x86-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
tadpole (remote-x86-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s2
tadpole (remote-x86-system)# /etc/init.d/nfs.server start
```

SPARC システムで、次のように入力します。

```
rosemary (SPARC-system)# mkdir /x86S0
rosemary (SPARC-system)# mkdir /x86S2
rosemary (SPARC-system)# mount tadpole:/cdrom/sol_9_x86/s0 /x86S0
rosemary (SPARC-system)# mount tadpole:/cdrom/sol_9_x86/s0 /x86S2
rosemary (SPARC-system)# cd /x86S2/Solaris_9/Tools
rosemary (SPARC-system)# ./setup_install_server -t /x86S0 /export/home/s9cdx86
rosemary (SPARC-system)# cd /
rosemary (SPARC-system)# umount /x86S0
rosemary (SPARC-system)# umount /x86S2
```

```
tadpole (remote-x86-system) unshare /cdrom/cdrom0/s0
tadpole (remote-x86-system) unshare /cdrom/cdrom0/s2
```

```
rosemary (SPARC-system)# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
rosemary (SPARC-system)# ./add_to_install_server /export/home/s9cdx86
rosemary (SPARC-system)# cd /cdrom/cdrom0/Tools
rosemary (SPARC-system)# ./add_to_install_server /export/home/s9cdx86
```

リモート x86 システムで、次のように入力します。

```
tadpole (remote-x86-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
tadpole (remote-x86-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s2
tadpole (remote-x86-system)# /etc/init.d/nfs.server start
```

例 12-3 x86 CD メディアを使用して SPARC システムに x86 インストールサーバーを作成する (続き)

SPARC システムで、次のように入力します。

```
rosemary (SPARC-system)# mount remote_x86_system_name:/cdrom/sol_9_x86 /x86S0
rosemary (SPARC-system)# mount remote_x86_system_name:/cdrom/sol_9_x86 /x86S2
rosemary (SPARC-system)# cd /x86S2
rosemary (SPARC-system)# ./modify_install_server -p /export/home/s9cdx86 /x86S0
```

この例では、各コマンドを実行する前に各 CD がドライブに挿入され、自動的にマウントされるものとします。各コマンドの実行が終了すると、CD が取り出されます。

## ▼ SPARC CD メディアを使用して x86 システムに SPARC インストールサーバーを作成する方法

ここでは、SPARC CD メディアを使用して x86 システム上に SPARC インストールサーバーを作成する手順を説明します。以下が必要になります。

- x86 システム
- CD-ROM ドライブを備えた SPARC システム
- リモート SPARC システム用の CD セット
  - Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)
  - Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版)
  - Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版)
  - Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版)

---

注 - この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

コマンド入力例中の *x86-system* はインストールサーバーとなる x86 システムを、*remote SPARC system* は SPARC CD メディアを使用するリモート SPARC システムを表します。

1. リモート **SPARC** システム上で、スーパーユーザーになります。  
さらに、システムは、このサイトのネットワークに接続されネームサービスに登録されている必要があります。ネームサービスを使用する場合、システムのネームサービスは、NIS、NIS+、DNS、LDAP のいずれかでなければなりません。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。
2. リモート **SPARC** システム上で、システムのドライブに **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)** を挿入します。

3. リモート **SPARC** システム上で、次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s1
```

4. リモート **SPARC** システム上で、**NFS** デーモンを起動します。

```
remote-SPARC-system# /etc/init.d/nfs.server start
```

5. リモート **SPARC** システム上で `share` コマンドを実行し、他のシステムが **CD** を利用可能であることを確認します。

```
remote-SPARC-system# share
- /cdrom/cdrom0/s0 ro,anon=0 " "
- /cdrom/cdrom0/s1 ro,anon=0 " "
```

6. **SPARC** インストールサーバーとして使用する **x86** システム上で、スーパーユーザーになります。

7. **x86** システム上で **SPARC CD** にアクセスする際のマウントポイントとなる 2 つのディレクトリ (ミニルート用と製品用) を作成します。

```
x86-system# mkdir directory_name_s0
x86-system# mkdir directory_name_s1
```

<code>directory_name_s0</code>	スライス 0 からの製品用のマウントポイントとなるディレクトリ の名前
<code>directory_name_s1</code>	スライス 1 からのミニルート用のマウントポイントとなるディレ クトリ の名前

8. **CD** がリモート **x86** システム上で適切にエクスポートされていることを確認します。

```
x86-system# showmount -e remote-SPARC-system
export list for remote-SPARC-system:
/cdrom/sol_9_sparc/s0 (everyone)
/cdrom/sol_9_sparc/s1 (everyone)
```

9. **x86** システム上で、リモート **SPARC** システムの **CD** イメージをマウントします。

```
x86-system# mount remote_SPARC_system_name:/cdrom/cdrom0/s0 directory_name_s0
```

```
x86-system# mount remote_SPARC_system_name:/cdrom/cdrom0/s1 directory_name_s1
```

10. **x86** システム上で、マウントされたディスクの **Tools** ディレクトリに移動します。

```
x86-system# cd /directory_name_s0/Solaris_9/Tools
```

11. **x86** システム上で、インストールサーバーのハードディスク内の、`setup_install_server` コマンドを使用して作成したディレクトリにドライブ内のディスクをコピーします。

```
x86-system# ./setup_install_server -t directory_name_s1 install_dir_path
```

<code>-t</code>	Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD の Tools ディレクトリ上のブートイメージ以外を使用する場合は、そのブートイメージのパスを指定します。
<code>directory_name_s1</code>	スライス 1 からのミニルート用のマウントポイントとなるディレクトリの名前です。
<code>install_dir_path</code>	ディスクイメージをコピーするディレクトリを指定します。空のディレクトリを指定してください。

---

注 - `setup_install_server` コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、`df -k1` コマンドを使用します。

---

12. x86 システム上で、トップディレクトリに移動します。

```
x86-system# cd /
```

13. x86 システム上で、両方のディレクトリのマウントを解除します。

```
x86-system# umount directory_name_s0
```

```
x86-system# umount directory_name_s1
```

14. SPARC システム上で、両方の CD-ROM スライスの共有を解除します。

```
remote-SPARC-system# unshare /cdrom/cdrom0/s0
```

```
remote-SPARC-system# unshare /cdrom/cdrom0/s2
```

15. SPARC システム上で、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) を取り出します。

16. Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) を x86 システムの CD-ROM ドライブに挿入します。

17. x86 システム上で、マウントされた CD の Tools ディレクトリに移動します。

```
x86-system# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
```

18. x86 システム上で、CD をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
x86-system# ./add_to_install_server install_dir_path
```

<code>install_dir_path</code>	CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。
-------------------------------	----------------------------

19. Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) を取り出します。
20. x86 システム上で、Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) を x86 システムの CD-ROM ドライブに挿入し、CD をマウントします。
21. x86 システム上で、マウントされた CD の Tools ディレクトリに移動します。

```
x86-system# cd /cdrom/cdrom0/Tools
```

22. x86 システム上で、CD をインストールサーバーのハードディスクにコピーします。

```
x86-system# ./add_to_install_server install_dir_path
```

*install\_dir\_path*                    CD イメージをコピーするディレクトリを指定します。

23. ユーザーが Solaris Web Start を使用してシステムをブートし、ネットワーク上で Solaris 9 ソフトウェアをインストールできるように
  - しない場合は、Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) を取り出して手順 31 へ進みます。
  - する場合は、Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) を取り出して次の作業へ進みます。

24. リモート SPARC システムの CD-ROM ドライブに Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版) を挿入します。

25. リモート SPARC システム上で、次のエントリを `/etc/dfs/dfstab` ファイルに追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s1
```

26. リモート SPARC システム上で、NFS デーモンを起動します。

```
remote-SPARC-system# /etc/init.d/nfs.server start
```

27. リモート SPARC システム上で、CD が他のシステムから利用可能であることを確認します。

```
remote-SPARC-system# share
- /cdrom/multi_sol_9_x86/s0 ro,anon=0 " "
- /cdrom/multi_sol_9_x86/s1 ro,anon=0 " "
```

上のサンプル出力では、`multi_sol_9_x86` は、x86 版 Solaris 9 オペレーティング環境を指します。このテキスト文字列は、Solaris オペレーティング環境のバージョンによって異なります。

28. x86 システム上で、CD 上のスライスをマウントします。

```
x86-system# mount remote_SPARC_system_name:/cdrom/cdrom0/s0 directory_name_s0
x86-system# mount remote_SPARC_system_name:/cdrom/cdrom0/s1 directory_name_s1
```

29. x86 システム上で、マウントされた CD の `modify_install_server` を含むディレクトリに移動します。

```
x86-system# cd directory_name_s0
```

30. **Solaris Web Start** インタフェースソフトウェアをインストールサーバーにコピーします。

```
x86-system# ./modify_install_server -p install_dir_path directory_name_s1
```

<code>-p</code>	既存イメージのミニルートを <code>install_dir_path/Solaris_9/Tools/Boot.orig</code> に保存します。
<code>install_dir_path</code>	Solaris Web Start インストールをコピーするディレクトリを指定します。
<code>directory_name_s1</code>	スライス 1 からのミニルート用のマウントポイントとなるディレクトリの名前です。

31. `setup_install_server` によって作成されたネットインストールイメージ上のミニルート (`Solaris_9/Tools/Boot`) にあるファイルにパッチを適用するか決定します。

- 適用しない場合は、次の手順に進みます。
- 適用する場合は、`patchadd -c` コマンドを使用して、ミニルートにあるファイルにパッチを適用します。



---

注意 – `patchadd -c` を使用する前には必ず、パッチの README を読むか、ご購入先におたずねください。

---

32. ブートサーバーを作成する必要があるかどうかを判断します。

- インストールサーバーとクライアント (インストールしているシステム) が同じサブネット上にある場合、あるいは、DHCP を使用している場合、ブートサーバーを作成する必要はありません。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。
- インストールサーバーがインストールするシステムと同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、ブートサーバーを作成する必要があります。ブートサーバーを作成する方法については、121 ページの「CD イメージを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する方法」を参照してください。

例 12-4 SPARC CD メディアを使用して x86 システムに SPARC インストールサーバーを作成する

次の例では、richards という名前の x86 システム上に SPARC インストールサーバーを作成する方法を示します。次の SPARC CD が、simpson という名前のリモート SPARC システムから x86 インストールサーバーの `/export/home/s9cdsparc` ディレクトリにコピーされます。

例 12-4 SPARC CD メディアを使用して x86 システムに SPARC インストールサーバーを作成する (続き)

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版)
- Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版)
- Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版)

リモート SPARC システムで、次のように入力します。

```
simpson (remote-SPARC-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
simpson (remote-SPARC-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s1
simpson (remote-SPARC-system)# /etc/init.d/nfs.server start
```

x86 システムで、次のように入力します。

```
richards (x86-system)# mkdir /sparcS0
richards (x86-system)# mkdir /sparcS1
richards (x86-system)# mount simpson:/cdrom/cdrom0/s0 /sparcS0
richards (x86-system)# mount simpson:/cdrom/cdrom0/s1 /sparcS1
richards (x86-system)# cd /sparcS0/Solaris_9/Tools
richards (x86-system)# ./setup_install_server -t /sparcS0 /export/home/s9cdsparc
richards (x86-system)# cd /
richards (x86-system)# umount /sparcS0
richards (x86-system)# umount /sparcS1
```

リモート SPARC システムで、次のように入力します。

```
simpson (remote-SPARC-system) unshare /cdrom/cdrom0/s0
simpson (remote-SPARC-system) unshare /cdrom/cdrom0/s1
```

x86 システムで、次のように入力します。

```
richards (x86-system)# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tools
richards (x86-system)# ./add_to_install_server /export/home/s9cdsparc
richards (x86-system)# cd /cdrom/cdrom0/Tools
richards (x86-system)# ./add_to_install_server /export/home/s9cdsparc
```

リモート SPARC システムで、次のように入力します。

```
simpson (remote-SPARC-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
simpson (remote-SPARC-system)# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s1
simpson (remote-SPARC-system)# /etc/init.d/nfs.server start
```

x86 システムで、次のように入力します。

```
richards (x86-system)# mount remote_SPARC_system_name:/cdrom/cdrom0 /sparcS0
richards (x86-system)# mount remote_SPARC_system_name:/cdrom/cdrom0 /sparcS1
richards (x86-system)# cd /sparcS0
richards (x86-system)# ./modify_install_server -p /export/home/s9cdsparc /sparcS1
```

この例では、各コマンドを実行する前に各 CD がドライブに挿入され、自動的にマウントされるものとします。各コマンドの実行が終了すると、CD が取り出されます。



---

## CD イメージを用いたサブネット上での ブートサーバーの作成

Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールするためには、インストールサーバーを作成する必要があります。ブートサーバーは必ずしも設定する必要はありません。ブートサーバーには、ネットワーク上でシステムをブートするために必要なブートソフトウェアが含まれています。一方、インストールサーバーは Solaris ソフトウェアのインストールを行います。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定している場合、あるいは、インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上にある場合、ブートサーバーは必要ありません。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」へ進みます。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、サブネットごとに異なるブートサーバーを作成する必要があります。インストールサーバーはサブネットごとに作成できます。しかし、インストールサーバーはより多くのディスク容量を必要とします。

### ▼ CD イメージを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する方法

1. サブネット内でブートサーバーとするシステムにログインして、スーパーユーザーになります。

システムに CD-ROM ドライブが存在するか、あるいはリモートの Solaris 9 イメージ (通常、インストールサーバーに存在する) にアクセスできなければなりません。ネームサービスを使用する場合は、システムがすでにそのネームサービスに登録されていなければなりません。ネームサービスを使用しない場合は、サイトのポリシーに従ってシステムの情報を供給する必要があります。

2. インストールサーバーから **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** イメージをマウントします。

```
# mount -F nfs -o ro server_name:path /mnt
```

*server\_name:path*            インストールサーバー名とディスクイメージの絶対パスを指定します。

3. ブートイメージ用のディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p boot_dir_path
```

`boot_dir_path`                   ブートソフトウェアをコピーするディレクトリを指定します。

4. Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD イメージの **Tools** ディレクトリへ移動します。

```
# cd /mnt/Solaris_9/Tools
```

5. ブートソフトウェアをブートサーバーにコピーします。

```
# ./setup_install_server -b boot_dir_path
```

`-b`                               システムをブートサーバーとして設定することを示します。

`boot_dir_path`                   ブートソフトウェアをコピーするディレクトリを指定します。

---

注 - `setup_install_server` コマンドは、Solaris 9 ソフトウェアのディスクイメージをコピーする十分なディスク容量があるかどうかを調べます。利用できるディスク容量を調べるには、`df -k1` コマンドを使用します。

---

6. ルート (`/`) ディレクトリへ移動します。

```
# cd /
```

7. インストールイメージをマウント解除します。

```
# umount /mnt
```

以上の操作で、ネットワークからインストールするためにシステムを設定する用意が整いました。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。

例 12-5 CD メディアを使用してサブネット上にブートサーバーを作成する

次の例は、ブートサーバーをサブネット上に作成する方法を示したものです。次のコマンドを実行すると、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) イメージのブートソフトウェアがシステムのローカルディスク (`/export/install/boot`) にコピーされます。

```
# mount -F nfs -o ro crystal:/export/install/boot /mnt
# mkdir -p /export/install/boot
# cd /mnt/Solaris_9/Tools
# ./setup_install_server -b /export/install/boot
# cd /
# umount /mnt
```

この例では、コマンドを実行する前に各ディスクがドライブに挿入され、自動的にマウントされるものとします。コマンドを実行すると、ディスクが取り出されます。

---

## CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する

インストールサーバーとブートサーバー (必要な場合) を作成した後、ネットワークからインストールする各システムを設定する必要があります。インストールする各システムは、次の情報にアクセスできる必要があります。

- インストールサーバー
- ブートサーバー (必要な場合)
- `sysidcfg` ファイル (`sysidcfg` ファイルを使用してシステム構成情報を事前設定する場合)
- ネームサーバー (ネームサービスを使用してシステム構成情報を事前設定する場合)
- プロファイルサーバー上の JumpStart ディレクトリにあるプロファイル (カスタム JumpStart インストールを使用する場合)

インストールサーバーとクライアントの設定には、`add_install_client` を使用して以下の作業を実行してください。次の手順の例も参照してください。

- DHCP を使用してインストールパラメータを設定する場合は、例 12-6 を参照してください。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在する場合は、例 12-7 を参照してください。
- インストールサーバーとクライアントが同じサブネット上に存在せず、DHCP を使用していない場合は、例 12-8 を参照してください。

このコマンドで使用できるオプションについての詳細は、`add_install_client (1M)` のマニュアルページを参照してください。

### ▼ サーバーから `add_install_client` を実行してネットワークからインストールするシステムを追加する方法

ブートサーバーが存在する場合は、インストールサーバーのインストールイメージを共有しているか確認してください。手順 6 を参照してください。

1. インストールサーバーまたはブートサーバー上でスーパーユーザーになります。
2. NIS、NIS+、DNS、または LDAP ネームサービスを使用する場合は、インストール対象のシステムに関する次の情報がネームサービスに追加されているか確認します。
  - ホスト名

- IP アドレス

- Ethernet アドレス

ネームサービスの詳細は、『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス: DNS、NIS、LDAP 編)』を参照してください。

3. インストールサーバー上の **Solaris 9 CD** イメージの **Tools** ディレクトリに移動します。

```
# cd /install_dir_path/Solaris_9/Tools
```

*install\_dir\_path*                  Tools ディレクトリのパスを指定します。

4. ネットワークでインストールするためのシステムを設定します。

```
# ./add_install_client [-d] [-s install_server:install_dir_path] \  
[-c jumpstart_server:jumpstart_dir_path] [-p server:path] \  
[-t boot_image_path] client_name platform_group
```

-d	クライアントが DHCP を使用してネットワークインストールパラメータを取得することを指定します。  x86 クライアントの場合、このオプションを指定し、PXE ネットワークブートを使用してネットワークからシステムをブートしてください。
-s <i>install_server:install_dir_path</i>	インストールサーバーの名前とパスを指定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ <i>install_server</i> は、インストールサーバーのホスト名です。</li><li>■ <i>install_dir_path</i> は、Solaris 9 CD イメージの絶対パスです。</li></ul>
-c <i>jumpstart_server:jumpstart_dir_path</i>	カスタム JumpStart インストールの JumpStart ディレクトリを指定します。 <i>jumpstart_server</i> には JumpStart ディレクトリがあるサーバーのホスト名を指定します。 <i>jumpstart_dir_path</i> は、JumpStart ディレクトリへの絶対パスです。
-p <i>sysid_server:path</i>	システムの構成情報を事前設定するための <i>sysidcfg</i> ファイルのパスを指定します。 <i>sysid_server</i> は、このファイルを持っているサーバーの有効なホスト名または IP アドレスです。 <i>path</i> は、 <i>sysidcfg</i> ファイルを含むディレクトリの絶対パスです。
-t <i>boot_image_path</i>	Solaris 9 ネットインストールイメージ、CD、または DVD 上の Tools ディレクトリ内のものとは別のブートイメージを使用したい場合は、代わりとなるブートイメージのパスを指定します。

<i>client_name</i>	ネットワークからインストールするシステムのホスト名を指定します。この名前はインストールサーバーのホスト名ではありません。
<i>platform_group</i>	インストールするシステムのプラットフォームグループを指定します。プラットフォームグループの詳細は、第 39 章を参照してください。

**例 12-6 SPARC: DHCP を使用している場合の SPARC インストールサーバー上の SPARC インストールクライアントの追加方法 (CD)**

次の例に、DHCP を使用してネットワーク上でインストールパラメータを設定しているときに、インストールクライアントを追加する方法を示します。インストールクライアントは、*basil* という名前の Ultra™ 5 システムです。ファイルシステム `/export/home/s9cdsparc/Solaris_9/Tools` には、`add_install_client` コマンドが入っています。

DHCP を使用してネットワークインストール用のインストールパラメータを設定する方法については、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の「DHCP サービスを使用するためのネットワークの準備 (作業マップ)」を参照してください。

```
sparc_install_server# cd /export/home/s9cdsparc/Solaris_9/Tools
sparc_install_server# ./add_install_client -d basil sun4u
```

**例 12-7 サーバーと同じサブネット上にあるインストールクライアントの追加方法 (CD)**

次の例に、インストールサーバーと同じサブネット上にあるインストールクライアントを追加する方法を示します。インストールクライアントは、*basil* という名前の Ultra™ 5 システムです。ファイルシステム `/export/home/s9cdsparc/Solaris_9/Tools` には、`add_install_client` コマンドが入っています。

```
install_server# cd /export/home/s9cdsparc/Solaris_9/Tools
install_server# ./add_install_client basil sun4u
```

**例 12-8 ブートサーバーへのインストールクライアントの追加方法 (CD)**

次の例に、ブートサーバーにインストールクライアントを追加する方法を示します。インストールクライアントは、*rose* という名前の Ultra™ 5 システムです。次のコマンドはブートサーバー上で実行します。`-s` オプションには、`/export/home/s9cdsparc` に Solaris 9 CD イメージを持っている *rosemary* という名前のインストールサーバーを指定しています。

```
boot_server# cd /export/home/s9cdsparc/Solaris_9/Tools
boot_server# ./add_install_client -s rosemary:/export/home/s9cdsparc rose sun4u
```

**例 12-9 x86: DHCP を使用している場合の x86 インストールサーバー上の x86 インストールクライアントの追加方法 (CD)**

次の例に、DHCP を使用してネットワークのインストールパラメータを設定している場合に、x86 インストールクライアントをインストールサーバーに追加する方法を示します。`-d` オプションは、クライアントが構成に DHCP プロトコルを使用することを指定するために使用されます。PXE ネットワークブートを使用する場合には、

例 12-9 x86: DHCP を使用している場合の x86 インストールサーバー上の x86 インストールクライアントの追加方法 (CD) (続き)

DHCP プロトコルを使用する必要があります。DHCP クラス名 SUNW.i86pc は、このコマンドが単一のクライアントだけでなく、ネットワーク上のすべての Solaris x86 ブートクライアントに適用されることを意味します。-s オプションを使用して、rosemary という名前のインストールサーバーからクライアントをインストールすることを指定します。このサーバーは、/export/home/s9cdx86 に Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) イメージを保持しています。

DHCP を使用してネットワークインストール用のインストールパラメータを設定する方法については、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の「DHCP サービスを使用するためのネットワークの準備 (作業マップ)」を参照してください。

```
install server# cd /export/boot/Solaris_9/Tools
install server# ./add_install_client -d -s rosemary:/export/home/s9cdx86 SUNW.\
i86pc i86pc
```

## 第 13 章

# ネットワークからインストールするための準備 (コマンドリファレンス)

この章では、ネットワークインストールを設定するときに使用できるコマンドを示します。

表 13-1 ネットワークインストールコマンド

コマンド	プラットフォーム	説明
<code>add_install_client</code>	すべて	システムに関するネットワークインストール情報を、ネットワークからインストールサーバーまたはブートサーバーに追加するコマンド。詳細は、 <code>add_install_client(1M)</code> のマニュアルページを参照
<code>setup_install_server</code>	すべて	Solaris 9 DVD または CD をインストールサーバーのローカルディスクにコピーするか、ブートソフトウェアをブートサーバーにコピーするスクリプト。詳細は、 <code>setup_install_server(1M)</code> のマニュアルページを参照
<code>add_to_install_server</code> (CDメディアのみ)	すべて	CD 上のプロダクトツリー内の追加パッケージを、既存のインストールサーバー上のローカルディスクにコピーするスクリプト。詳細は、 <code>add_to_install_server(1M)</code> のマニュアルページを参照
<code>modify_install_server</code> (CDメディアのみ)	すべて	Solaris Web Start ユーザーインタフェースソフトウェアを、既存のインストールサーバーまたはブートサーバー上の Solaris 9 CD イメージに追加するスクリプト。ユーザーが Solaris Web Start によってシステムをブートし、Solaris 9 ソフトウェアをネットワークからインストールできるようにする。詳細は、 <code>modify_install_server(1M)</code> のマニュアルページを参照。RAM が 64M バイト以下のシステムは、Solaris Web Start プログラムを使用してインストールできません。

表 13-1 ネットワークインストールコマンド (続き)

コマンド	プラットフォーム	説明
mount	すべて	ファイルシステムをマウントできるようにし、マウントされたファイルシステム (Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE と Solaris 9 LANGUAGES CD 上のファイルシステムを含む) を表示するコマンド。詳細は、mount (1M) のマニュアルページを参照
showmount -e	すべて	リモートホスト上の共有ファイルシステムすべてをリスト表示するコマンド。詳細は、showmount (1M) のマニュアルページを参照
uname -i	すべて	システムのプラットフォーム名 SUNW,SPARCstation-5、i86pc などを調べるコマンド。Solaris ソフトウェアをインストールするには、システムのプラットフォーム名が必要になることがあります。詳細は、uname (1) のマニュアルページを参照
patchadd -C <i>net_install_image</i>	すべて	<p>setup_install_server で作成した DVD または CD のネットインストールイメージ上にあるミニルート (Solaris_9/Tools/Boot) にあるファイルにパッチを追加するコマンド。これにより、Solaris インストールコマンドと他のミニルート固有のコマンドにパッチを適用できる。<i>net_install_image</i> はネットワークインストールイメージの絶対パス名である。詳細は、patchadd (1M) のマニュアルページを参照</p> <p>注意 - patchadd -C を使用する前には必ず、パッチの Readme を読むか、ご購入先におたずねください。</p>
reset	SPARC	システムをリセットし、マシンを再起動するための Open Boot prom コマンド。また、ブート時に入出力割り込みに関するエラーメッセージが表示された場合は、L1 または STOP キーと A キーを同時に押し、その後 ok または >PROM プロンプトで reset と入力する。
banner	SPARC	モデル名、Ethernet アドレス、インストールされているメモリなどのシステム情報を表示する Open Boot prom コマンド。ok (>PROM) プロンプトでのみ使用可能。



## 第 14 章

---

# Solaris Web Start の使用

---

この章では、Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD に含まれている Solaris Web Start を使用して、Solaris ソフトウェアのインストールやアップグレードを行う方法について説明します。

---

注 – Solaris オペレーティング環境をインストールするシステムまたはドメインに直接接続された DVD-ROM ドライブまたは CD-ROM ドライブがない場合は、別のマシンに接続された DVD-ROM ドライブまたは CD-ROM ドライブを使用できます。詳細は、付録 B を参照してください。

---

この章の内容は、次のとおりです。

- 129 ページの「Solaris Web Start の実行方法」
- 130 ページの「SPARC: Solaris Web Start プログラムによるインストールまたはアップグレード」
- 135 ページの「x86: Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード」
- 142 ページの「Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード後に必要な作業」

---

## Solaris Web Start の実行方法

Solaris Web Start は、GUI または CLI を使って実行できます。x86 システムの場合、Solaris Web Start プログラムに Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が含まれています。

- GUI – ローカルまたはリモートの DVD-ROM ドライブか CD-ROM ドライブ、またはネットワーク接続、およびビデオアダプタ、キーボード、モニター、十分なメモリーが必要です。

- CLI – ローカルまたはリモートの DVD-ROM ドライブか CD-ROM ドライブ、またはネットワーク接続、およびキーボードとモニターが必要です。Solaris Web Start インストール CLI は、tip コマンドを使って実行できます。詳細は、tip(1) のマニュアルページを参照してください。

Solaris Web Start は、システムにビデオアダプタがあることを検出すると自動的に GUI を使用し、検出できないと CLI を使用します。操作手順や設定内容は、GUI も CLI もほとんど同じです。

---

## SPARC: Solaris Web Start プログラムによるインストールまたはアップグレード

Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版) に含まれている Solaris Web Start プログラムを使用して、Solaris オペレーティング環境をインストールまたはアップグレードできます。

---

注 – Solaris 9 INSTALLATION CD からインストールする場合は、28 ページの「Solaris 9 INSTALLATION CD を使用するための要件」で特殊な要件を確認してください。

---

以下のものが揃っているか確認します。

- DVD からインストールする場合は、Solaris 9 DVD (SPARC 版) を使用してください。
- CD からインストールする場合は、以下の CD を使用してください。
  - Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版)
  - Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)
  - Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) – 必要に応じて、インストールプログラムがこの CD をドライブに挿入するように要求します。
  - Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) – 特定地域の言語をサポートするために必要な場合、インストールプログラムがこの CD をドライブに挿入するように要求します。

# SPARC: 作業マップ: Solaris Web Start インストールの実行

表 14-1 作業マップ: Solaris Web Start インストールの実行

作業	説明	参照先
システム要件を確認する	Solaris Web Start を使用してインストールまたはアップグレードをするための要件をシステムが満たしていることを確認します。	27 ページの「システム要件」
必要な情報を収集する	チェックリストに従ってワークシートに記入しながら、Solaris ソフトウェアのインストールに必要なすべての情報を収集します。	第 6 章
(省略可能) システム構成情報を事前設定する	sysidcfg ファイルやネームサービスを使って、システムのインストール情報 (locale など) を事前設定することができます。これによって、インストール時にこの情報を入力しなくて済みます。	第 7 章
(アップグレードのみ) システムをアップグレードするための準備をする	システムのバックアップをとります。	『Solaris のシステム管理 (基本編)』
(省略可能) ネットワーク上でインストールするためのシステムを設定する	リモートの DVD または CD のネットインストールイメージをインストールする場合は、インストールサーバーまたはブートサーバーからシステムをブートしてインストールするように、システムを設定する必要があります。	第 12 章
インストールまたはアップグレードを行う	システムをブートし、プロンプトに従って Solaris ソフトウェアをインストールまたはアップグレードします。	131 ページの「SPARC: Solaris Web Start プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」
(アップグレードのみ) アップグレード後に必要な作業を行う	アップグレードで失われたローカル変更がある場合は、それを復元します。	143 ページの「アップグレード後にローカル変更を復元する方法」

## ▼ SPARC: Solaris Web Start プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法

1. **DVD-ROM** ドライブ、**CD-ROM** ドライブ、ネットイメージのどれを使用してソフトウェアをインストールするかを決定します。
  - DVD-ROM ドライブか CD-ROM ドライブを使用する場合は、Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版) を挿入します。
  - ネットインストールイメージを使用する場合は、インストールメディアが置かれているディレクトリに移動します。必要に応じ、ネットワーク管理者に場所を尋ねてください。ネットワークからのインストール方法の詳細は、第 11 章または第 12 章

を参照してください。

## 2. システムをブートします。

- 新しく購入したばかり (未使用) のシステムの場合は、システムの電源を入れます。
- 既存システムのインストールまたはアップグレードを行う場合は、システムをシャットダウンします。
  - ローカル DVD またはローカル CD からブートする場合は、次のように入力します。

```
ok boot cdrom [- nowin]
```
  - ネットワーク上のインストールサーバーからブートする場合は、次のように入力します。

```
ok boot net [- nowin]
```

`nowin`                                  Solaris Web Start を CLI モードで実行することを指定します。

Solaris Web Start インストールが始まります。

## 3. システム構成の質問に答えます。

- すべてのシステム構成情報が事前設定されている場合は、構成情報の入力はありません。
- システム構成情報の事前設定を行っていない場合は、44 ページの「インストール用のワークシート」または 50 ページの「アップグレード用のワークシート」を参照して、システム構成の質問に答えます。

GUI を使用している場合は、システム構成情報の確認が終わると、Solaris Web Start の Kiosk が起動し、「ようこそ (Welcome)」画面が表示されます。システムのメモリーが十分でない場合は、Kiosk は表示されません。



図 14-1 Solaris Web Start Kiosk メニュー

Kiosk メニューのリンクは、どれでもクリックできます。

---

注 - Kiosk によって画面が隠れてしまうことがあります。隠れている画面を表示するには、Kiosk メニューの「Kiosk を奥へ (Send Kiosk to Background)」をクリックします。

---

「インストーラ・オプション (Installer Questions)」画面が表示されます。

4. システムのリポートとディスクの取り出しを自動的に行うかどうかを決定します。  
「次へ (NEXT)」をクリックします。  
「媒体の指定 (Specify Media)」画面が表示されます。
5. インストールに使用するメディアを指定します。
  - フラッシュアーカイブをインストールする場合には、作業を続行します。
  - フラッシュアーカイブをインストールしない場合には、手順 6に進みます。

- a. プロンプトに従って次の情報を入力します。

選択されているメディア	プロンプト
DVD または CD	フラッシュアーカイブを含むディスクを挿入してください。
ネットワークファイルシステム	フラッシュアーカイブを含むネットワークファイルシステムのパスを指定してください。アーカイブのファイル名も指定できます。
HTTP	フラッシュアーカイブにアクセスするための URL とプロキシ情報を指定してください。
FTP	FTP サーバーと、フラッシュアーカイブのパスを指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要となるユーザーおよびパスワードの情報を指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要となるプロキシ情報を指定します。
ローカルテープ	フラッシュアーカイブを含むローカルテープデバイスとテープ上の位置を指定してください。

DVD、CD、または NFS サーバーに格納されたアーカイブのインストールを選択した場合は、「フラッシュアーカイブの選択 (Select Flash Archives)」画面が表示されます。

- b. ディスクまたは NFS サーバーに格納されたアーカイブについては、「フラッシュアーカイブの選択 (Select Flash Archives)」画面で、インストールするフラッシュアーカイブを選択します (1 つでも複数でも可)。
- c. 「フラッシュアーカイブの一覧 (Flash Archives Summary)」画面で選択されたアーカイブを確認し、「次へ (Next)」をクリックします。
- d. 「追加するフラッシュアーカイブ (Additional Flash Archives)」画面で、別のアーカイブを含む媒体を指定して、フラッシュアーカイブの追加インストールを実行できます。アーカイブをそれ以上インストールしない場合は、「なし - アーカイブの選択が完了しました (None)」を選択し、「次へ (Next)」をクリックしてインストールを継続します。手順 7 へ進みます。
6. 初期インストールまたはアップグレードのいずれかを選択します。  
システムがアップグレード可能かどうか判定されます。このためには、Solaris ルート(/) ファイルシステムがすでに存在していなければなりません。Solaris 9 INSTALLATION CD を使用してアップグレードする場合は、512M バイトのスライスが必要です。アップグレードが可能であることが確認されると、システムのアップグレードが開始されます。
7. 画面の指示に従って、Solaris ソフトウェアをインストールします。フラッシュアーカイブをインストールしていない場合、ソフトウェアの追加インストールを行うことも可能です。

Solaris Web Start インストールプログラムが Solaris ソフトウェアのインストールを終了すると、システムは自動的にリブートされるか、あるいはシステムのリブートを求める画面が表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

8. アップグレードを行った場合は、保存されなかったローカル変更があればそれを復元します。詳細は、143 ページの「アップグレード後にローカル変更を復元する方法」を参照してください。

---

## x86: Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード

Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD に含まれている Solaris Web Start を使用して、Solaris オペレーティング環境を x86 システムにインストールできます。

---

注 – Solaris 9 INSTALLATION CD からインストールする場合は、28 ページの「Solaris 9 INSTALLATION CD を使用するための要件」で特殊な要件を確認してください。

---

次のメディアを用意してください。

- DVD からインストールする場合は、Solaris 9 DVD (x86 版) を使用してください。
- CD メディアからインストールする場合は、以下の CD を使用してください。
  - Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版)
  - Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)
  - Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) – 必要に応じて、インストールプログラムがこの CD を挿入するように要求します。
  - Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版) – 特定地域の言語をサポートするために必要な場合、インストールプログラムがこの CD を挿入するように要求します。

## x86: 作業マップ: Solaris Web Start インストールの実行

表 14-2 x86: 作業マップ: Solaris Web Start インストールの実行

作業	説明	参照先
システム要件を確認する	Solaris Web Start を使用してインストールまたはアップグレードをするための要件をシステムが満たしていることを確認します。	27 ページの「システム要件」
必要な情報を収集する	チェックリストに従ってワークシートに記入しながら、Solaris ソフトウェアのインストールに必要なすべての情報を収集します。	第 6 章
(アップグレードのみ) システムをアップグレードするための準備をする	システムのバックアップをとります。	『Solaris のシステム管理 (基本編)』
(省略可能) ネットワーク上でインストールするためのシステムを設定する	リモートの Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) のネットインストールイメージからシステムをインストールするには、インストールサーバーまたはブートサーバーからブートとインストールを行うようにシステムを設定する必要があります。	第 12 章
インストールまたはアップグレードを行う	システムをブートし、プロンプトに従って Solaris ソフトウェアをインストールまたはアップグレードします。	136 ページの「x86: Solaris Web Start を使用してインストールまたはアップグレードする方法」
(アップグレードのみ) アップグレード後に必要な作業を行う	アップグレードで失われたローカル変更がある場合は、それを復元します。	143 ページの「アップグレード後にローカル変更を復元する方法」

### ▼ x86: Solaris Web Start を使用してインストールまたはアップグレードする方法

1. **DVD-ROM** ドライブ、**CD-ROM** ドライブ、ネットインストールイメージのどれを使用してソフトウェアをインストールするかを決定します。
  - DVD-ROM ドライブまたは CD-ROM ドライブを使用する場合は、Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版) を挿入します。
  - ネットインストールイメージを使用する場合は、インストールメディアが置かれているディレクトリに移動します。必要に応じて、ネットワーク管理者に場所をたずねてください。ネットワークからのインストール方法の詳細は、第 11 章または第 12 章を参照してください。
2. システムのブート方法を決定します。



- Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD からブートする場合は、そのディスクを挿入します。この場合、システムの BIOS が DVD または CD からのブートをサポートしている必要があります。
- ネットワークからブートする場合は、PXE (Preboot Execution Environment) ネットワークブートを使用してください。システムは PXE をサポートするものでなければなりません。システムの BIOS 設定ツールまたはネットワークアダプタの構成設定ツールを使用して、PXE が使用できるようにシステムを設定します。
- フロッピーディスクからブートする場合は、システムのコモドールディスクドライブに Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) のフロッピーディスクを挿入します。

---

注 – 次の方法で、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ソフトウェアをフロッピーディスクにコピーできます。

- 付録 E に記載された手順に従って、ソフトウェアを Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) からフロッピーディスクにコピーします。
  - [soldc.sun.com/support/drivers/dca\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dca_diskettes) の Solaris Developer Connection からソフトウェアをダウンロードして、フロッピーディスクにコピーします。
- 

3. システムを停止して電源を切り、再び電源を入れてシステムをブートします。メモリーテストとハードウェア検出が実行されます。画面が再表示されます。
4. 「Solaris Device Configuration Assistant」画面が表示されたら **F2** キーを押します。「Bus Enumeration」画面に次のメッセージが表示されます。

Determining bus types and gathering hardware configuration data ...

「Scanning Devices」画面が表示され、システムデバイスのスキャンが行われます。スキャンが終了すると、「Identified Devices」画面が表示されます。
5. 変更する必要があるか確認します。
  - 変更しない場合は、「Continue」を選択します。
  - 変更する場合は、「changes」を選択します。「Loading」画面が表示され、システムをブートするためにロードされるドライバの情報が表示されます。数秒後に「Boot Solaris」画面が表示されます。
6. 「Boot Solaris」画面で、「DVD」、「CD」、「Net」、または「Disk」を選択し、「Continue」を選択します。

デフォルトのブートディスクが、システムのインストールまたはアップグレードに必要な条件を満たしているかどうかを検査されます。

---

注 - Solaris 9 INSTALLATION CD を使用してインストールを行う場合、いくつかの要件を満たしている必要があります。これらの要件を満たすことができない場合、DVD または ネットインストールイメージから Solaris Web Start プログラムを使用するか、Solaris suninstall プログラムまたはカスタム JumpStart を使用してインストールしてください。要件は以下のとおりです。

- デフォルトブートディスクの BIOS および SCSI ドライバが、LBA (Logical Block Addressing) をサポートしている必要があります。
- デフォルトブートディスクに Solaris fdisk パーティションが存在しない場合、パーティションを作成するようにメッセージが表示されます。fdisk を実行して Solaris fdisk パーティションを作成するかどうかを尋ねられます。「はい(Yes)」と応答すると、fdisk ユーザーインターフェースが表示され、ディスク上に Solaris fdisk パーティションを手動で追加できます。「いいえ(No)」と応答すると、インストーラが終了します。
- デフォルトブートディスクに x86BOOT パーティションが存在しない場合は、Solaris Web Start プログラムが Solaris fdisk パーティションの一部を使用して作成してくれます。Solaris fdisk パーティション上にデータが存在していた場合、それらはすべて破棄されます。このパーティションを手動で作成することはできません。ディスクをフォーマットするかという問いに「はい(Yes)」と応答すると、Solaris fdisk パーティションからパーティションが作成されます。「いいえ(No)」と応答した場合、別のインストール方法を選択する必要があります。
- システム上の既存の Service パーティションを保持する場合、Solaris Web Start プログラムによりデフォルトブートディスク上の fdisk パーティションをカスタマイズするかどうか尋ねられたら、「デフォルト」を選択します。
- パーティションの作成、変更、削除は、後でフォーマットパネルを使用して行うことができます。ただし、Solaris fdisk パーティションと x86BOOT パーティションが作成されると、ディスクは凍結され、ディスクの編集は不可能になります。複数のディスクが存在する場合、それらのディスクを fdisk パネルで編集できます。

---

Solaris Web Start プログラムは、デフォルトブートディスクの各要件を確認し、見つからなかった構成情報を入力するようにユーザーに要求します。

7. システム構成の質問に答えます。

- すべてのシステム構成情報が事前設定されている場合は、手順 8へ進みます。
- システム構成情報の事前設定を行っていない場合は、44 ページの「インストール用のワークシート」または 50 ページの「アップグレード用のワークシート」を参照して、システム構成の質問に答えます。

数秒後に「The Solaris Installation Program」画面が表示されます。

8. 「The Solaris Installation Program」画面で「Continue」を選択します。

「kdmconfig - Introduction」画面が表示されます。

9. GUI を実行するだけの十分なメモリーがあるかどうかを確認します。

- メモリーが十分な場合は「Continue」を選択します。
- メモリーが十分でない場合は「Bypass」を選択し、CLI を表示させます。

「kdmconfig - View and Edit Window System Configuration」画面が表示されます。

kdmconfig ユーティリティは、ビデオドライバを検出できないと 640x480 VGA ドライバを選択します。640x480 VGA ドライバでは、Solaris Web Start GUI を表示できないため、Solaris Web Start CLI が使用されます。Solaris Web Start GUI を使用したい場合は、kdmconfig ユーティリティを使って適切なドライバを選択する必要があります。

10. (省略可能) 「kdmconfig – View and Edit Window System Configuration」画面の構成情報を確認し、必要な場合は変更します。
11. 構成情報の確認が終わったら、「No changes needed – Test/Save and Exit」を選択し、「Continue」を選択します。  
「kdmconfig Window System Configuration Test」画面が表示されます。
12. 「Continue」を選択します。  
画面が再表示され、「kdmconfig Window System Configuration Test palette and pattern」画面が表示されます。
13. ポインタを移動でき、パレット上に示されている色が正しく表示されていることを確認します。
  - 色が正しく表示されていない場合は、「No」をクリックします。可能な場合、キーボードのいずれかのキーを押すか、「kdmconfig Window System Configuration Test」画面が自動的に終了するのを待ちます。そして、一連の色が正しく表示され、ポインタを正しく移動できるまで、手順 10 から手順 13 を繰り返します。
  - 一連の色が正しく表示されている場合は、「Yes」をクリックします。  
「ようこそ (Welcome)」画面が表示されます。システムのメモリーが十分でない場合は、Kiosk は表示されません。



図 14-2 Solaris Web Start Kiosk メニュー

Kiosk メニューのリンクは、どれでもクリックできます。

---

注 - Kiosk によって画面が隠れてしまうことがあります。隠れている画面を表示するには、Kiosk メニューの「Kiosk を奥へ (Send Kiosk to Background)」をクリックします。

---

14. 構成に関する残りの質問が表示される場合は、それらに答えます。  
「インストーラ・オプション (Installer Questions)」画面が表示されます。
15. システムのリポートとディスクの取り出しを自動的に行うかどうかを決定します。  
「次へ (NEXT)」をクリックします。

---

注 – PXE を使用してネットワークからブートする場合、手動リブートを選択します。システムがその起動時にネットワークからブートしないように設定する必要があります。ネットワークブートを無効にするには、リブート時にシステムの BIOS 設定ツールかネットワークアダプタの構成設定ツールを使用してください。

---

「媒体の指定 (Specify Media)」画面が表示されます。

16. インストールに使用するメディアを指定します。

- フラッシュアーカイブをインストールする場合には、作業を続行します。
  - フラッシュアーカイブをインストールしない場合には、手順 17に進みます。
- a. プロンプトに従って次の情報を入力します。

選択された媒体	プロンプト
DVD または CD	フラッシュアーカイブを含むディスクを挿入してください。
ネットワークファイルシステム	フラッシュアーカイブを含むネットワークファイルシステムのパスを指定してください。アーカイブのファイル名も指定できます。
HTTP	フラッシュアーカイブにアクセスするための URL とプロキシ情報を指定してください。
FTP	FTP サーバーと、フラッシュアーカイブのパスを指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要となるユーザーおよびパスワードの情報を指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要となるプロキシ情報を指定します。
ローカルテープ	フラッシュアーカイブを含むローカルテープデバイスとテープ上の位置を指定してください。

DVD、CD、または NFS サーバーに格納されたアーカイブのインストールを選択した場合は、「フラッシュアーカイブの選択 (Select Flash Archives)」画面が表示されます。

- b. ディスクまたは NFS サーバーに格納されたアーカイブについては、「フラッシュアーカイブの選択 (Select Flash Archives)」画面で、インストールするフラッシュアーカイブを選択します (1 つでも複数でも可)。
- c. 「フラッシュアーカイブの一覧 (Flash Archives Summary)」画面で選択されたアーカイブを確認し、「次へ (Next)」をクリックします。
- d. 「追加するフラッシュアーカイブ (Additional Flash Archives)」画面で、別のアーカイブを含む媒体を指定して、フラッシュアーカイブの追加インストールを実行できます。アーカイブをそれ以上インストールしない場合は、「なし - アーカイブの選択が完了しました (None)」を選択し、「次へ (Next)」をクリックしてインス

トールを継続します。インストールが完了します。

Solaris Web Start インストールプログラムが Solaris ソフトウェアのインストールを終了すると、システムは自動的にリブートされるか、あるいはシステムのリブートを求める画面が表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

17. 初期インストールまたはアップグレードのいずれかを選択します。

システムがアップグレード可能かどうか判定されます。このためには、Solaris ルート(/) ファイルシステムがすでに存在していなければなりません。Solaris 9 INSTALLATION CD を使用してアップグレードする場合は、512M バイトのスライスが必要です。アップグレードが可能であることが確認されると、システムのアップグレードが開始されます。

---

注 – インストールの開始前にシステムに Service パーティションを復元した場合、Solaris オペレーティング環境をアップグレードできない可能性があります。

---

18. 画面に示される手順に従って、**Solaris** ソフトウェアと追加ソフトウェア (必要な場合) をシステムにインストールします。

Solaris ソフトウェアのインストールが終了すると、システムのリブートを求める画面が表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

19. アップグレードを実行した場合は、保存されなかったローカル変更があればそれを復元します。詳細は、143 ページの「アップグレード後にローカル変更を復元する方法」を参照してください。

---

## Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード後に必要な作業

Solaris オペレーティング環境のインストールまたはアップグレードを終了した後、必要に応じて次の作業を行う必要があります。

## ▼ アップグレード後にローカル変更を復元する方法

アップグレードを行うと、Solaris Web Start は既存システムに対して行なったローカルなソフトウェア変更と新しい Solaris ソフトウェアをマージします。ただし場合によっては、マージが行われなかったことがあります。したがって、システムのアップグレードが終了したら、保存されなかったローカル変更を復元しなければならない場合があります。



---

注意 – 保存されなかったローカル変更を復元しないと、システムがブートされないことがあります。

---

1. 次のファイルの内容を確認して、**Solaris Web Start** によって保存されなかったローカル変更を復元する必要があるかどうかを判断します。  
`/a/var/sadm/system/data/upgrade_cleanup`
2. 保存されなかったローカル変更があれば、復元します。
3. リポートします。

```
# reboot
```





## 第 15 章

---

# Solaris suninstall プログラムの使用

---

この章では、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に含まれている Solaris suninstall プログラムを使用して Solaris ソフトウェアをインストールまたはアップグレードする方法について説明します。

- 145 ページの「Solaris suninstall プログラム」
- 146 ページの「SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」
- 149 ページの「x86: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」
- 155 ページの「Solaris suninstall プログラムによるアップグレード後に必要な作業」

---

## Solaris suninstall プログラム

Solaris suninstall プログラムは CLI で実行できます。x86 システムの場合、Solaris suninstall プログラムに Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が含まれています。Solaris suninstall プログラムには、ローカルまたはリモートの CD-ROM ドライブまたはネットワーク接続、キーボード、およびモニターが必要です。Solaris suninstall プログラムは tip コマンドで実行できます。詳細は、tip (1) のマニュアルページを参照してください。

---

注 - テキストを操作するとき、Control-U を使用するとページを上に移動し、Control-D を使用するとページを下に移動します。

---

---

# SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード

Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に含まれている Solaris suninstall プログラムを使用して、Solaris オペレーティング環境を SPARC システムにインストールまたはアップグレードすることができます。Solaris suninstall プログラムでは、追加ソフトウェアをインストールすることはできません。

次の CD を用意してください。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) – 必要に応じて、インストールプログラムがこの CD をドライブに挿入するように要求します。
- Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) – 特定地域の言語をサポートするために必要な場合、インストールプログラムがこの CD をドライブに挿入するように要求します。

## SPARC: 作業マップ: Solaris suninstall プログラムインストールの実行

表 15-1 SPARC: 作業マップ: Solaris suninstall プログラムインストールの実行

作業	説明	参照先
必要な情報を収集する	チェックリストに従ってワークシートに記入しながら、Solaris ソフトウェアのインストールに必要なすべての情報を収集します。	第 6 章
(アップグレードのみ) システムをアップグレードするための準備をする	システムのバックアップをとります。	『Solaris のシステム管理 (基本編)』
(省略可能) システム構成情報を事前設定する	sysidcfg ファイルまたはネームサービスを使用して、システムのインストール情報 (locale など) を事前設定します。システム情報をあらかじめ設定すると、インストール時に情報入力を求めるプロンプトは表示されません。	第 7 章

表 15-1 SPARC: 作業マップ: Solaris suninstall プログラム インストールの実行 (続き)

作業	説明	参照先
(省略可能) ネットワーク上でインストールするためのシステムを設定する	リモートの Solaris 9 SOFTWARE CD (SPARC 版) イメージからシステムをインストールする場合、インストールサーバーまたはブートサーバーからブートおよびインストールするようにシステムを設定する必要があります。	第 12 章
インストールまたはアップグレードを行う	システムをブートし、プロンプトに従って Solaris ソフトウェアをインストールまたはアップグレードします。	147 ページの「SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」
(アップグレードのみ) アップグレード後に必要な作業を行う	アップグレードで失われたローカル変更がある場合は、それを復元します。	155 ページの「Solaris suninstall プログラムによるアップグレード後に必要な作業」

## ▼ SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード

1. **CD-ROM** ドライブとネットイメージのどちらを使用してソフトウェアをインストールするかを決定します。
  - CD-ROM ドライブを使用する場合、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) を挿入します。
  - ネットインストールイメージを使用する場合、次の例のように、インストールメディアが入っているディレクトリに移動します。必要に応じて、ネットワーク管理者に場所をたずねてください。次にコマンド例を示します。

```

% cd /net/install-svr/export/s9/sparc

```
2. システムをブートします。
  - 新しく購入したばかり (未使用) のシステムの場合は、システムの電源を入れます。
  - 既存システムのインストールまたはアップグレードを行う場合は、システムをシャットダウンします。
    - ローカル CD からブートする場合は、次のように入力します。

```

ok boot cdrom

```
    - ネットワーク上のインストールサーバーからブートする場合は、次のように入力します。

```

ok boot net

```

Solaris suninstall プログラムが始まります。
3. システム構成の質問に答えます。

すべてのシステム構成情報が事前設定されている場合は、構成情報の入力は求められません。

システム構成情報の事前設定を行っていない場合は、44 ページの「インストール用のワークシート」または 50 ページの「アップグレード用のワークシート」を参照して、システム構成の質問に答えます。

4. 画面に示される手順に従って、**Solaris** ソフトウェアをシステムにインストールします。
  - フラッシュアーカイブをインストールしない場合には、インストールを完了します。アップグレードを実行している場合、またはソフトウェアを追加インストールする場合には、手順 5に進みます。

Solaris ソフトウェアのインストールが終了すると、システムは自動的にリブートするか、または手動でリブートするようにプロンプトが表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

    - /var/sadm/system/logs
    - /var/sadm/install/logs
  - フラッシュアーカイブをインストールする場合には、作業を続行します。
    - a. 「フラッシュアーカイブの検索方法 (**Flash Archive Retrieval Method**)」画面で、フラッシュアーカイブのロケーションを選択します。

選択された媒体に応じて、Solaris 9 Solaris Web Start インストールが続行するためのプロンプトが表示されます。
    - b. プロンプトに従って次の情報を入力します。

選択された媒体	プロンプト
HTTP	フラッシュアーカイブのアクセスに必要な URL 情報とプロキシ情報を指定します。
FTP	FTP サーバーと、フラッシュアーカイブのパスを指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要なユーザーおよびパスワードの情報を指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要なプロキシ情報を指定します。
ネットワークファイルシステム	フラッシュアーカイブが置かれているネットワークファイルシステムのパスを指定します。アーカイブのファイル名も指定できます。
ローカルファイル	フラッシュアーカイブが置かれているローカルファイルシステムのパスを指定します。
ローカルテープ	フラッシュアーカイブが置かれているローカルテープデバイスとテープ上の位置を指定します。

選択された媒体	プロンプト
ローカルデバイス	フラッシュアーカイブが置かれているローカルデバイス、パス、ファイルシステムの種類を指定します。

- c. 「フラッシュアーカイブの選択 (**Flash Archive Selection**)」画面で、「新規 (**New**)」を選択すると、フラッシュアーカイブを追加インストールできます。アーカイブをそれ以上インストールしない場合は、インストールを完了させるために「継続 (**Continue**)」を選択します。

Solaris ソフトウェアのインストールが終了すると、システムは自動的にリブートするか、または手動でリブートするようにプロンプトが表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

5. アップグレードを行った場合は、保存されなかったローカル変更があればそれを復元します。詳細は、155 ページの「**Solaris suninstall** プログラムによるアップグレード後に必要な作業」を参照してください。
6. (省略可能) 追加のソフトウェアをインストールする方法は、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

## x86: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード

Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に含まれている Solaris suninstall プログラムを使用して、Solaris オペレーティング環境を x86 システムにインストールまたはアップグレードすることができます。Solaris suninstall プログラムでは、追加ソフトウェアをインストールすることはできません。

次の CD を用意してください。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) – 必要に応じて、インストールプログラムがこの CD を挿入するように要求します。
- Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版) – 特定地域の言語をサポートするために必要な場合、インストールプログラムがこの CD を挿入するように要求します。

## x86: 作業マップ: suninstall プログラムを実行する

表 15-2 x86: 作業マップ: 対話型インストールを実行する

作業	説明	参照先
必要な情報を収集する	チェックリストに従ってワークシートに記入しながら、Solaris ソフトウェアのインストールに必要なすべての情報を収集します。	第 6 章
(アップグレードのみ) システムをアップグレードするための準備をする	システムのバックアップをとります。	『Solaris のシステム管理 (基本編)』
(省略可能) システム構成情報を事前設定する	sysidcfg ファイルやネームサービスを使って、システムのインストール情報 (locale など) を事前設定することができます。これによって、インストール時にこの情報を入力するように求められなくなります。	第 7 章
(省略可能) ネットワーク上でインストールするためのシステムを設定する	リモートの Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) イメージをインストールする場合は、インストールサーバーまたはブートサーバーからシステムをブートしてインストールするように、システムを設定する必要があります。	第 12 章
インストールまたはアップグレードを行う	システムをブートし、プロンプトに従って Solaris ソフトウェアをインストールまたはアップグレードします。	150 ページの「x86: Solaris suninstall プログラムを使用してインストールまたはアップグレードするには」
(アップグレードのみ) アップグレード後に必要な作業を行う	アップグレードで失われたローカル変更がある場合は、それを復元します。	155 ページの「Solaris suninstall プログラムによるアップグレード後に必要な作業」

### ▼ x86: Solaris suninstall プログラムを使用してインストールまたはアップグレードするには

1. **CD-ROM** ドライブとネットイメージのどちらを使用してソフトウェアをインストールするかを決定します。

- CD-ROM ドライブを使用する場合、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) を挿入します。
- ネットイメージを使用する場合、インストールメディアが置かれているディレクトリへ移動します。必要に応じて、ネットワーク管理者に場所をたずねてください。次にコマンド例を示します。

```
% cd /net/install-svr/export/s9/x86
```

2. システムのブート方法を決定します。

- Solaris 9 INSTALLATION CD からブートする場合は、CD を挿入します。システムの BIOS は、CD からのブートをサポートするものでなければなりません。
- ネットワークからブートする場合は、PXE (Preboot Execution Environment) ネットワークブートを使用してください。システムは PXE をサポートするものでなければなりません。システムの BIOS 設定ツールまたはネットワークアダプタの構成設定ツールを使用して、PXE を使用するようにシステムを設定します。
- フロッピーディスクからブートする場合は、システムのコモドールディスクドライブに Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) のフロッピーディスクを挿入します。

---

**x86 のみ** – 次の方法で、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ソフトウェアをフロッピーディスクにコピーできます。

- 付録 E に記載された手順に従って、ソフトウェアを Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) からフロッピーディスクにコピーします。
  - [soldc.sun.com/support/drivers/dca\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dca_diskettes) の Solaris Developer Connection からソフトウェアをダウンロードして、フロッピーディスクにコピーします。
- 

3. システムをシャットダウンし電源を切ってから、また入れ直してシステムをブートします。

メモリーテストとハードウェア検出が実行されます。画面が再表示されます。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) および Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) を使用する場合は、次のメッセージが表示されます。

```
SunOS - x86 Platform Edition Primary Boot Subsystem, vsn 2.0
```

続いて、次のようなメッセージが表示されます。

```
SunOS Secondary Boot version 3.00
```

```
Solaris x86 Platform Edition Booting System
```

```
Running Configuration Assistant...
```

- PXE ネットワークブートを使用してネットワーク上でブートする場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Solaris network boot...
```

続いて、次のような情報が表示されます。

```
SunOS Secondary Boot version 3.00
```

Solaris x86 Platform Edition Booting System

Running Configuration Assistant...

- Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) を使用する場合、次のような情報が表示されます。

Solaris Boot Sector Version 1

続いて、次のようなメッセージが表示されます。

Solaris for x86 - FCS DCB Version 1.242

loading /solaris/boot.bin

画面が再表示され、次のようなメッセージが表示されます。

SunOS Secondary Boot version 3.00

Solaris x86 Platform Edition Booting System

Running Configuration Assistant...

4. 「Solaris Device Configuration Assistant」画面が表示されたら、「Continue」を選択します。

「Bus Enumeration」画面に次のメッセージが表示されます。

Determining bus types and gathering hardware configuration data ...

「Scanning Devices」画面が表示され、システムデバイスのスキャンが行われます。スキャンが終了すると、「Identified Devices」画面が表示されます。

5. 変更する必要があるか確認します。

- 変更しない場合は、「Continue」を選択します。
- 変更する場合は、「changes」を選択します。

「Loading」画面に、システムをブートするためにロードされたドライバに関するメッセージが表示されます。数秒後に「Boot Solaris」画面が表示されます。

6. 「Boot Solaris」画面で「CD」、「Net」、または「Disk」を選択し、「Continue」を選択します。

デフォルトのブートディスクが、システムのインストールまたはアップグレードに必要な条件を満たしているかどうかを検査されます。



---

注 – システムに既存の Service パーティションを保持する場合、「Create Solaris fdisk Partition」画面で適切なオプションを選択します。Service パーティションの保持については、31 ページの「x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更」を参照してください。

インストールの開始前にシステムに Service パーティションを復元した場合、Solaris オペレーティング環境をアップグレードできない可能性があります。

---

7. システム構成の質問に答えます。
  - すべてのシステム構成情報をあらかじめ構成してある場合は、手順 8へ進みます。
  - システム構成情報の事前設定を行っていない場合は、44 ページの「インストール用のワークシート」または 50 ページの「アップグレード用のワークシート」を参照して、システム構成の質問に答えます。数秒後に「The Solaris Installation Program」画面が表示されます。
8. 「Continue」を選択します。  
「kdmconfig - Introduction」画面が表示されます。
9. 「Continue」を選択します。  
「kdmconfig - View and Edit Window System Configuration」画面が表示されます。
10. (省略可能) 「kdmconfig - View and Edit Window System Configuration」画面の構成情報を確認し、必要な場合は変更します。
11. 構成情報の確認が終わったら、「No changes needed - Test/Save and Exit」を選択し、「Continue」を選択します。  
「kdmconfig Window System Configuration Test」画面が表示されます。
12. 「Continue」を選択します。  
画面が再表示され、「kdmconfig Window System Configuration Test palette and pattern」画面が表示されます。
13. ポインタを移動でき、パレット上に示されている色が正しく表示されていることを確認します。
  - 色が正しく表示されていない場合は、「No」をクリックします。可能な場合、キーボードのいずれかのキーを押すか、「kdmconfig Window System Configuration Test」画面が自動的に終了するのを待ちます。そして、一連の色が正しく表示され、ポインタを正しく移動できるまで、手順 10 から手順 13 を繰り返します。
  - 一連の色が正しく表示されている場合は、「Yes」をクリックします。  
Solaris suninstall プログラムが始まります。
14. システム構成に関する残りの質問が表示される場合は、それらに答えます。

- すべてのシステム構成情報が事前設定されている場合は、構成情報の入力は求められません。
- システム構成情報の事前設定を行っていない場合は、44 ページの「インストール用のワークシート」または 50 ページの「アップグレード用のワークシート」を参照して、システム構成の質問に答えます。

15. システムのリブートとディスクの取り出しを自動的に行うかを決定します。

---

注 - PXE を使用してネットワークからブートする場合、手動リブートを選択します。システムがその起動時にネットワークからブートしないように設定する必要があります。ネットワークブートを無効にするには、リブート時にシステムの BIOS 設定ツールかネットワークアダプタの構成設定ツールを使用してください。

---

16. 画面に示される手順に従って、**Solaris** ソフトウェアをシステムにインストールします。

- フラッシュアーカイブをインストールしない場合には、インストールを完了します。アップグレードを実行している場合、またはソフトウェアを追加インストールする場合には、手順 17に進みます。

Solaris ソフトウェアのインストールが終了すると、システムは自動的にリブートするか、または手動でリブートするようにプロンプトが表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

- フラッシュアーカイブをインストールする場合には、作業を続行します。

a. 「フラッシュアーカイブの検索方法 (**Flash Archive Retrieval Method**)」画面で、フラッシュアーカイブのロケーションを選択します。

選択された媒体に応じて、Solaris 9 Solaris Web Start インストールが続行するためのプロンプトが表示されます。

b. プロンプトに従って次の情報を入力します。

選択された媒体	プロンプト
HTTP	フラッシュアーカイブのアクセスに必要となる URL 情報とプロキシ情報を指定します。
FTP	FTP サーバーと、フラッシュアーカイブのパスを指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要となるユーザーおよびパスワードの情報を指定します。FTP サーバーへのアクセスに必要となるプロキシ情報を指定します。

選択された媒体	プロンプト
ネットワークファイルシステム	フラッシュアーカイブが置かれているネットワークファイルシステムのパスを指定します。アーカイブのファイル名も指定できます。
ローカルファイル	フラッシュアーカイブが置かれているローカルファイルシステムのパスを指定します。
ローカルテープ	フラッシュアーカイブが置かれているローカルテープデバイスとテープ上の位置を指定します。
ローカルデバイス	フラッシュアーカイブが置かれているローカルデバイス、パス、ファイルシステムの種類を指定します。

- c. 「フラッシュアーカイブの選択 (**Flash Archive Selection**)」画面で、「新規 (**New**)」を選択すると、フラッシュアーカイブを追加インストールできます。アーカイブをそれ以上インストールしない場合は、インストールを完了させるために「継続 (**Continue**)」を選択します。

Solaris ソフトウェアのインストールが終了すると、システムは自動的にリポートするか、または手動でリポートするようにプロンプトが表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

17. アップグレードを行った場合は、保存されなかったローカル変更があればそれを復元します。詳細は、155 ページの「**Solaris suninstall** プログラムによるアップグレード後に必要な作業」を参照してください。
18. (省略可能) 追加のソフトウェアをインストールする方法は、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

## Solaris suninstall プログラムによるアップグレード後に必要な作業

アップグレードを行うと、Solaris suninstall プログラムは、既存システムに対して行ったローカルなソフトウェア変更と新しい Solaris ソフトウェアをマージします。ただし場合によっては、マージが行われないことがあります。したがって、システムのアップグレードが終了したら、保存されなかったローカル変更を復元しなければならない場合があります。



---

注意 – 保存されなかったローカル変更を復元しないと、システムがブートされないことがあります。

---

## ▼ アップグレード後にローカル変更を復元する方法

1. 次のファイルの内容を確認して、**Solaris suninstall** プログラムによって保存されなかったローカル変更を復元する必要があるかどうかを判断します。

```
/a/var/sadm/system/data/upgrade_cleanup
```

2. 保存されなかったローカル変更があれば、復元します。
3. リブートします。

```
# reboot
```

## 第 16 章

# フラッシュインストール機能

---

ここでは、フラッシュアーカイブを作成する方法と、フラッシュアーカイブを使用して複数のシステムに Solaris オペレーティング環境をインストールする方法について説明します。

第 17 章	フラッシュ (Flash) アーカイブの作成とインストールの概要と計画について説明します。
第 18 章	フラッシュアーカイブの作成手順を説明します。
第 19 章	フラッシュアーカイブを使用してシステムをインストールする手順を説明します。また、アーカイブの管理方法についても説明します。
第 20 章	<code>flar create</code> コマンドの構文およびオプションについて説明します。また、フラッシュアーカイブ情報のキーワードについても説明します。



## 第 17 章

---

# フラッシュの概要と計画

---

この章では、フラッシュインストール機能の概要を述べるとともに、使用している環境におけるフラッシュインストールの計画に必要な情報を記載します。

- 159 ページの「フラッシュの概要」
- 164 ページの「フラッシュインストールの計画」

---

## フラッシュの概要

フラッシュインストール機能を利用すると、マスターシステムと呼ばれる Solaris オペレーティング環境のアーカイブをシステム上に作成し、このアーカイブをクローンシステムと呼ばれる多数のシステムに複製できます。システムの全ファイルを上書きするフラッシュ初期インストール、または 2 つのシステムイメージの差分のみを更新する更新用フラッシュアーカイブでクローンシステムを複製できます。差分更新では、指定されたファイルだけが変更されます。また、更新の対象は、以前のマスターイメージとの一貫性を保持するソフトウェアを含むシステムだけになります。

## 初期インストールでクローンシステムにインストールする

初期インストールでは、Solaris Web Start、カスタム JumpStart、Solaris Live Upgrade のいずれかを使用して、フラッシュアーカイブをマスターシステムにインストールできます。すべてのファイルが上書きされます。フラッシュインストール処理は、5 つの部分に分けられます。

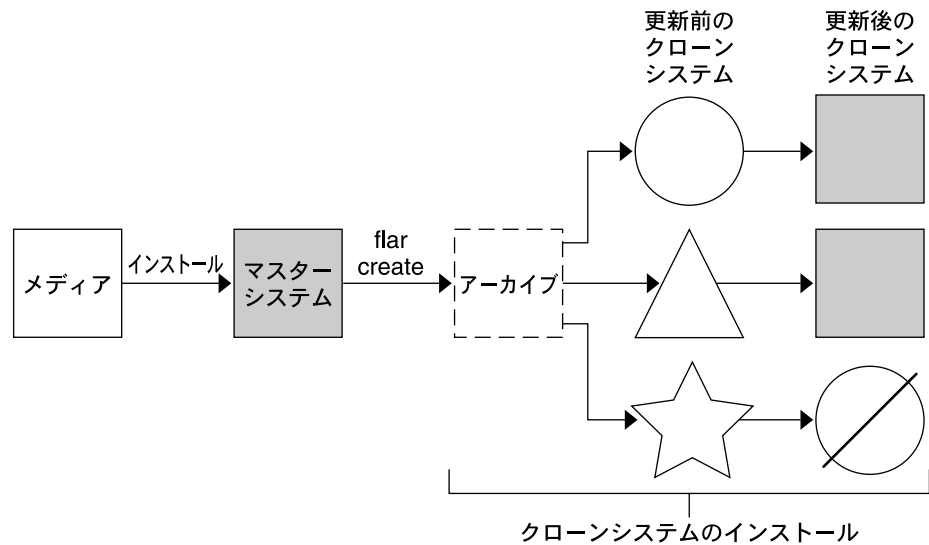
1. マスターシステムをインストールします。システムを 1 台選択し、Solaris の任意のインストール方法で Solaris オペレーティング環境およびその他のソフトウェアをインストールします。

2. (省略可能) カスタムスクリプトを用意して、インストールの前または後に、クローンシステムを再構成またはカスタマイズします。
3. フラッシュアーカイブを作成します。削除された不要なファイル以外は、フラッシュアーカイブにはマスターシステム上のすべてのファイルのコピーが含まれます。
4. フラッシュアーカイブをクローンシステムへインストールします。システムにフラッシュアーカイブをインストールすると、アーカイブのすべてのファイルがそのシステムにコピーされます。新しくインストールされたシステムのインストール構成は、オリジナルのマスターシステムと同じになります (このため、クローンシステムと呼ばれます)。スクリプトを使用してカスタマイズすることも可能です。
5. (省略可能) マスターイメージのコピーを保存します。差分アーカイブを作成する場合、マスターイメージが利用可能であり、クローンシステムにインストールされたイメージと同一でなければなりません。

手順については、174 ページの「マスターシステムへのインストール」を参照してください。

図 17-1 に、初期インストールでのクローンシステムのインストール方法を示します。すべてのファイルが上書きされます。





- 任意のオペレーティング環境が稼動しているシステム
- △ オペレーティング環境の存在しないシステム
- ☆ 異なったアーキテクチャのシステム
- ⊘ 更新の失敗

図 17-1 Solaris フラッシュの初期インストール

## フラッシュ差分アーカイブを使用してクローンシステムを更新する

保持しているクローンシステムを更新する場合、更新前のマスターイメージと更新後のマスターイメージとの差異のみを含む差分アーカイブを作成できます。差分アーカイブを使用してクローンシステムを更新する場合、差分アーカイブ内のファイルだけが変更されます。フラッシュのカスタム JumpStart インストール方法を使用して、クローンシステムに更新をインストールします。更新では、次の5つのプロセスを実行します。

1. マスターシステムで変更の準備を行います。変更を加える前に、マスターシステムで元のアーカイブの複製を作成する必要があります。

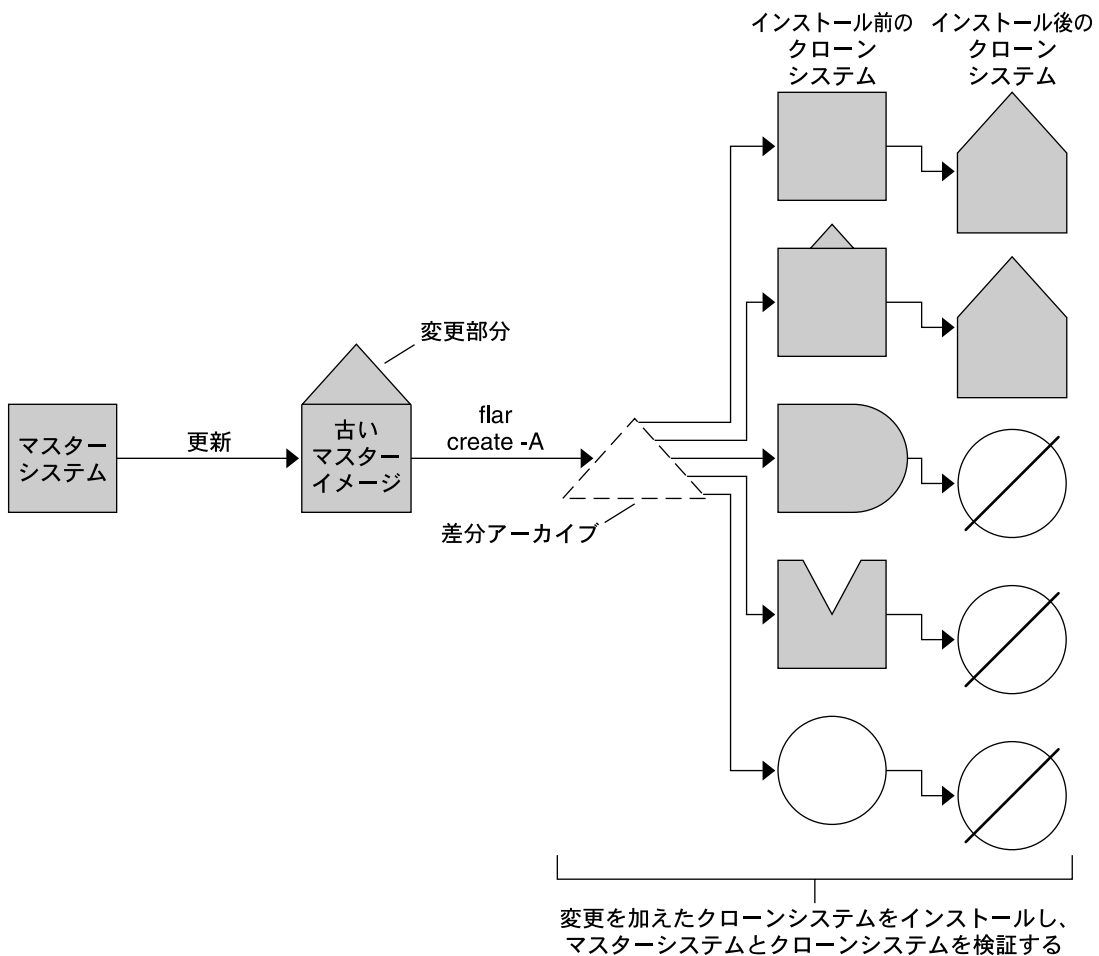
---

注 – マスターシステムで元のアーカイブの複製を作成していない場合、2つのシステムイメージの相違部分により、大規模な差分アーカイブが生成されることがあります。このため、差分アーカイブのインストールにかなりの時間がかかります。この場合、フルアーカイブを使用して初期インストールを実行してください。

---

2. (省略可能) カスタムスクリプトを準備して、インストールの前または後にクローンシステムの再構成またはカスタマイズを実行します。
3. 保存済みの更新前マスターイメージのコピーが存在するディレクトリをマウントします。この2番目のイメージは、2つのシステムイメージの比較に使用します。以下の方法で、イメージにアクセスします。
  - Solaris Live Upgrade ブート環境からマウントする
  - NFS 経由でクローンシステムからマウントする
  - `ufsrestore` コマンドを使用して、バックアップから復元する
4. `flar create` コマンドで `-A` オプションを指定して、差分アーカイブを作成します。
5. カスタム `JumpStart` を使用して、クローンシステムに差分アーカイブをインストールします。

図 17-2 に、差分アーカイブの作成およびインストール手順を示します。更新により、マスターイメージにいくらかの変更が加えられます。変更には、いくつかのファイルの追加、再構成、または削除のような単純なものもあれば、パッチの適用のような複雑なものもあります。更新されたマスターイメージは、更新前のマスターイメージと比較されます。2つのイメージの相違部分が、差分アーカイブになります。このアーカイブは、更新前のマスターイメージを現在使用している他のクローンシステムの更新にも使用できます。クローンシステムがすでに変更してあるか、更新前のマスターイメージを稼動していない場合、更新は失敗します。クローンシステムに多数の変更を加える場合には、いつでも初期インストールを実行できます。



- マスターと全く同一の複製
- ◤ わずかな変更を含むマスターの複製
- ◐ 付加されたファイルを含むマスターの複製
- ◒ いくつかのファイルを除いたマスターの複製
- 異なるマスターから作成されたものあるいは別にインストールされたもの
- ⊗ 更新の失敗

図 17-2 Solaris フラッシュによる更新

---

## フラッシュインストールの計画

フラッシュアーカイブの作成とインストールを行う前に、システムに Solaris オペレーティング環境をどのようにインストールするかについていくつか決定しておくべきことがあります。最初にシステムをインストールする場合、アーカイブ全体をインストールする必要があります。これが初期インストールとなります。アーカイブを使用してインストールを実行した後で、差分アーカイブを使用してシステムを更新できます。差分アーカイブでは、2つのアーカイブの相違部分のみがインストールされます。

## マスターシステムへの初期インストールの設計

フラッシュインストールの最初の作業は、各クローンシステムで行いたい構成と同じ構成でマスターシステムにインストールすることです。アーカイブは、任意の Solaris のインストール方法でマスターシステムにインストールできます。インストールは、Solaris オペレーティング環境のサブセットであっても完全なインストールであってもかまいません。このインストールの完了後、ソフトウェアの追加または削除、構成ファイルの変更を行います。

マスターシステムとクローンシステムとで、カーネルアーキテクチャを同じにする必要があります。たとえば、sun4u アーキテクチャのマスターシステムから作成されたアーカイブを使用できるのは、sun4u アーキテクチャのクローンをインストールする場合だけです。

各クローンシステムと全く同じ構成で、マスターシステムをインストールする必要があります。マスターシステムへのインストールの設計は、次の要素で決まります。

- クローンシステムにインストールするソフトウェア
- マスターシステムとクローンシステムに接続されている周辺装置
- マスターシステムとクローンシステムのアーキテクチャ

その後、システム上のソフトウェアをカスタマイズできます。168 ページの「アーカイブのファイルとディレクトリのカスタマイズ」を参照してください。マスターシステムは、クローンシステムの更新のために変更および設定が可能です。167 ページの「フラッシュアーカイブの作成の計画」を参照してください。

## マスターシステムのカスタマイズ

Solaris の任意のインストール方法でマスターシステムに Solaris オペレーティング環境をインストールした後、必要に応じてソフトウェアの追加や削除、およびシステム構成情報の変更を行います。

- ソフトウェアの削除 - クローンシステムにインストールする必要がないソフトウェアを削除することができます。マスターシステムにインストールされているソフトウェアのリストを表示するには、Solaris Product Registry を使用します。手順

の詳細は、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

- ソフトウェアの追加 - Solaris リリースに含まれるソフトウェアをインストールできます。また、Solaris オペレーティング環境の一部として提供されていないソフトウェアを追加することも可能です。マスターシステムにインストールされたすべてのソフトウェアはフラッシュアーカイブに含まれ、クローンシステムにインストールされます。
- 構成ファイルの変更 - マスターシステム上の構成ファイルを変更できます。たとえば、`/etc/inet/inetd.conf` ファイルを変更することにより、システムが実行するデーモンを制限できます。加えられた変更はすべてフラッシュアーカイブの一部として保存され、クローンシステムにインストールされます。

アーカイブの作成時に、さらにカスタマイズを行うことができます。たとえば、アーカイブに含める必要のない大規模なデータファイルを除外できます。この概要については、168 ページの「アーカイブのファイルとディレクトリのカスタマイズ」を参照してください。

クローンシステムを更新する場合、差分アーカイブを作成できます。167 ページの「フラッシュアーカイブの作成の計画」を参照してください。

## SPARC および x86 システム用のアーカイブの作成

フラッシュインストールを使用して SPARC システムと x86 システムの両方に Solaris ソフトウェアをインストールしたい場合は、それぞれのプラットフォーム用のフラッシュアーカイブを個別に作成する必要があります。SPARC システムにインストールするには、SPARC マスターシステムから作成されたフラッシュアーカイブを使用します。x86 マスターシステムにインストールするには、x86 マスターシステムから作成されたフラッシュアーカイブを使用します。

## SPARC: マスターシステムに存在しない周辺装置のサポート

マスターシステムにインストールするドライバの選択は、マスターシステムとクローンシステムの両方に取り付けられた周辺装置、およびインストールされたソフトウェアグループのタイプによって異なります。クローンシステムが、マスターシステムとは異なる周辺装置を保持している場合、アーカイブを作成する前に、マスターシステムに適切なドライバをインストールする必要があります。

---

注 - Solaris ソフトウェアをインストールする場合、いくつかのハードウェア固有のドライバは、システム上でサポートするハードウェアが検出された場合のみインストールされることがあります。

---

コアシステムサポート (Core) ソフトウェアグループ、エンドユーザーシステムサポート (End User) ソフトウェアグループ、開発者システムサポート (Developer) ソフトウェアグループ、または全体ディストリビューション (Entire) ソフトウェアグループ

をマスターシステムにインストールした場合、マスターシステムがサポートするのはインストール時にマスターシステムに接続されていた周辺装置だけです。マスターシステムに周辺装置が接続されていない場合でも、全体ディストリビューションとOEMサポート(Entire plus OEM) ソフトウェアグループをインストールすることにより、周辺装置のサポートをマスターシステムにインストールできます。システムに存在するハードウェアに関係なく、すべてのドライバがインストールされます。また、必要な周辺装置をサポートするパッケージを選択してインストールすることも可能です。

全体ディストリビューションとOEMサポート (Entire plus OEM) ソフトウェアグループ以外のソフトウェアグループをマスターシステムにインストールする場合は、クローンシステムにインストールする必要がある適切なドライバすべては保持していない可能性があります。たとえば、GX CG6 フレームバッファを持つマスターシステムに全体ディストリビューション (Entire) ソフトウェアグループをインストールした場合、GX CG6 フレームバッファードライバだけがインストールされます。インストールするクローンシステムすべてが GX CG6 フレームバッファを保持するか、フレームバッファを一切保持しない場合、この状況で問題は発生しません。

Elite 3D など、他のフレームバッファがインストールされたクローンシステムにアーカイブをインストールする場合、クローンシステムはフレームバッファサポートを保持しません。このため、全体ディストリビューションとOEMサポート (Entire plus OEM) ソフトウェアグループをインストールしてすべてのフレームバッファを含むアーカイブを作成するか、適切なフレームバッファードライバパッケージをマスターシステムに追加して該当するフレームバッファードライバをインストールする必要があります。

以下のいずれかの方法で、マスターシステムとは異なる周辺装置のサポートをクローンシステムにインストールできます。

- 全体ディストリビューションとOEMサポート(Entire plus OEM) ソフトウェアグループをインストールする – 全体ディストリビューションとOEMサポート(Entire plus OEM) ソフトウェアグループは、利用できる最大のソフトウェアグループです。このグループには、Solaris オペレーティング環境のすべてのパッケージが含まれています。マスターシステムにこのグループをインストールすると、マスターシステムには Solaris リリースに含まれるすべてのドライバが含まれることとなります。全体ディストリビューションとOEMサポート (Entire plus OEM) ソフトウェアグループをインストールしたマスターシステムから作成されるフラッシュアーカイブは、インストールした Solaris オペレーティング環境のリリースがサポートする周辺装置を持つクローンシステムで機能します。

全体ディストリビューションとOEMサポート (Entire plus OEM) ソフトウェアグループをマスターシステムにインストールすると、ほかの周辺装置構成との互換性を保つことができます。しかし、全体ディストリビューションとOEMサポート (Entire plus OEM) ソフトウェアグループには、1G バイトを超えるディスク容量が必要です。クローンシステムの中には、全体ディストリビューションとOEMサポート (Entire plus OEM) ソフトウェアグループのインストールに必要な容量を確保できないものもあるでしょう。

- パッケージを選択してインストールする: マスターシステムにインストールする際に、マスターシステムとクローンシステムに必要なパッケージを追加インストールできます。特定のパッケージを選択することにより、マスターシステムまたはク

ローンシステムに存在することが明らかな周辺装置のサポートだけをインストールすることができます。

## フラッシュアーカイブの作成の計画

マスターシステムからのアーカイブの作成または2つのシステムイメージからの差分アーカイブの作成が可能です。差分アーカイブでは、2つのイメージの相違部分のみがインストールされます。

### 初期インストールでマスターシステムからフラッシュアーカイブの作成を計画する

マスターシステムへのインストールの完了後、フラッシュインストールの次の作業として、フラッシュアーカイブを作成します。マスターシステム上のファイルは、さまざまな識別情報と共にフラッシュアーカイブにコピーされます。フラッシュアーカイブは、マルチユーザーモードまたはシングルユーザーモードでマスターシステムが稼働している間に作成できます。フラッシュアーカイブは、次のメディアのうちの1つからブートした後でも作成できます。

- Solaris 9 DVD
- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD
- Solaris 9 SOFTWARE と Solaris 9 LANGUAGES CD のイメージ

### フラッシュ差分アーカイブの作成を計画する

保持しているクローンシステムを更新する場合、更新前のマスターイメージと更新後のマスターイメージとの変更点のみを含む差分アーカイブを作成できます。クローンにインストールされた元のソフトウェアが稼働しているシステムをイメージの1つにできます。これを使用しない場合は、保存された更新前のマスターイメージのコピーにアクセスする必要があります。このイメージに該当する変更を適用して、更新を行います。アクセスするもう1つのイメージは、比較に使用します。2つのイメージの相違部分が、差分アーカイブになります。フラッシュのカスタム JumpStart インストール方法を使用して、クローンシステムに変更点をインストールします。差分アーカイブを使用してクローンシステムを更新すると、差分アーカイブ内に存在するファイルだけがクローンシステム上で変更されます。インストールの前または後に、スクリプトを使用してアーカイブをカスタマイズできます。再構成を行う場合、これは特に有効です。

次のいずれかの方法でアクセス可能にするため、初期インストールの実行後に更新前のマスターイメージを保存する必要があります。

- `lumount` コマンドを使用してディレクトリにマウントされる、Solaris Live Upgrade ブート環境。Solaris Live Upgrade ブート環境の詳細は、第 30 章を参照してください。

- ルートアクセス権を使用して NFS 経由でマウントされるクローンシステム
- `ufsdump` コマンドを使用して復元可能なシステムのバックアップ

手順については、185 ページの「マスターイメージの更新と差分アーカイブの作成」を参照してください。

## アーカイブのファイルとディレクトリのカスタマイズ

フラッシュアーカイブの作成時に、マスターシステムからコピーされるファイルやディレクトリの一部分をアーカイブから除外することができます。アーカイブからディレクトリを除外する際に、そのディレクトリ内にある特定のファイルやサブディレクトリを除外せずにアーカイブに含めることも可能です。たとえば、`/a/aa/bb/c` にあるすべてのファイルやディレクトリを除外するアーカイブを作成できます。このアーカイブを作るときに、`bb` サブディレクトリの内容だけを除外せずにアーカイブに含めることができます。これにより、アーカイブに含まれるのは `bb` サブディレクトリの内容だけになります。



**注意** - `flar create` のファイル除外オプションは、注意して使用してください。一部のディレクトリを除外する際、気づかずにシステム構成ファイルなどの他のファイルがアーカイブに残ってしまう場合があります。この場合、システムの整合性が損なわれるため、インストールが失敗してしまいます。ディレクトリやファイルの除外は、大規模なデータファイルなど、システムを破綻させることなく容易に削除可能なデータに対して行うのが最善です。

次の表に、ファイルやディレクトリの除外および追加用の `flar create` コマンドのオプションを示します。

指定方法	除外用のオプション	追加用のオプション
ディレクトリまたはファイルの名前を指定します。	<code>-x exclude_dir/filename</code>	<code>-y include_dir/filename</code>
対象のファイルやディレクトリのリストを含むファイルを使用します。	<code>-x list_filename</code> <code>-z list_filename</code>	<code>-f list_filename</code> <code>-z list_filename</code>

これらのオプションの詳細は、表 20-7 を参照してください。

アーカイブのカスタマイズ例については、181 ページの「例 — 初期インストール用アーカイブの作成」を参照してください。



## スクリプトを使用したアーカイブのカスタマイズ

マスターシステムへのソフトウェアのインストールが完了したら、作成、インストール、ポストインストール、および初回再起動時に特別なスクリプトを実行できます。これらのスクリプトを使用して、以下を実行できます。

- クローンシステム上でアプリケーションを構成します。一部の複雑でない構成に対して、カスタム JumpStart スクリプトを使用できます。より複雑な構成では、特別な構成ファイルの処理がマスターシステム上で、あるいはインストールの前後にクローンシステム上で必要な場合があります。
- クローンシステム上でのローカルなカスタマイズを保護します。ローカルのプリインストールおよびポストインストールスクリプトは、クローン上に存在し、ローカルのカスタマイズがフラッシュソフトウェアにより上書きされないように保護する働きをします。
- クローン不可のホスト依存データを識別して、アーカイブをホスト非依存にできます。ホスト非依存を有効にするには、この種のデータを変更するか、アーカイブから除外します。ホスト依存データの例は、ログファイルです。
- 作成時に、アーカイブ内でソフトウェアの整合性を確認します。
- クローンシステム上でインストールを検証します。

## カスタムスクリプト作成のガイドライン

再起動スクリプト以外のスクリプトを作成する場合、スクリプトがオペレーティング環境やシステムを破壊してしまうことがないように、以下のガイドラインに従ってください。これらのガイドラインに従うことで、Solaris Live Upgrade を使用して、オペレーティング環境インストール用の新規ブート環境が作成可能になります。新規ブート環境は、現行システムの稼働中にアーカイブを使用してインストールできます。

---

注 - これらのガイドラインは、デーモンの実行やルート (/) ファイルシステムへの他のタイプの変更を実行可能にする再起動スクリプトに適用されるものではありません。

---

- スクリプトは、稼働中のシステムに影響を与えてはいけません。現在稼働中のオペレーティング環境が、フラッシュアーカイブのインストール時に稼働しているオペレーティング環境ではない場合もあります。
- スクリプトで、いかなるデーモンプロセスも開始または停止させないでください。
- スクリプトで、オペレーティング環境に依存するコマンド ( ps, truss, uname など) の出力に依存しないでください。これらのコマンドは、稼働中のシステムに関する情報をレポートします。
- スクリプトで、いかなるシグナルも送信しないでください。さもないと、現在稼働中のプロセスが影響を受けます。
- スクリプトでは、シェルスクリプトの実行を円滑にする標準の UNIX コマンド (expr, cp, ls など) を使用できます。

Solaris Live Upgrade の概要については、第 30 章を参照してください。

## フラッシュアーカイブのセクション

フラッシュアーカイブには、次のセクションが含まれます。一部のセクションを使用して、アーカイブの識別やカスタマイズ、およびインストールの状態情報の表示を実行できます。各セクションの詳細は、第 20 章を参照してください。

表 17-1 フラッシュアーカイブのセクション

セクション名	情報提供のみ	説明
Cookie	X	最初のセクションには、ファイルをフラッシュアーカイブとして識別する cookie が含まれます。
識別		2 番目のセクションには、アーカイブについての識別情報を値を持つキーワードが含まれます。一部の識別情報は、アーカイブソフトウェアにより提供されます。その他の特定の識別情報は、flar create コマンドのオプションを使用して追加できます。
ユーザー定義		このセクションは、識別セクションの次に続きます。これらのセクションを定義および挿入して、アーカイブをカスタマイズできます。フラッシュアーカイブは、ユーザーが定義したセクションは処理しません。たとえば、このセクションには、アーカイブの説明や、アプリケーションの整合性をチェックするスクリプトなどを含めることができます。
マニフェスト	X	このセクションは、フラッシュ差分アーカイブに対して生成され、クローンシステムの検証に使用されます。マニフェストセクションには、クローンシステムに保持、追加または削除されるシステム上のファイルが一覧表示されます。このセクションは情報提供専用であり、内部形式でファイルをリスト表示します。スクリプトの記述には使用できません。
配置前、配置後、再起動	X	このセクションには、オペレーティング環境イメージのインストール前または後にフラッシュソフトウェアが使用する内部情報が含まれます。指定したスクリプトはすべて、このセクションに含まれます。
サマリー		このセクションには、アーカイブ作成に関するメッセージが含まれます。セクションには、配置前および配置後スクリプトのアクティビティも記録できます。このセクションに出力を送信するスクリプトを記述することにより、このセクション内でインストールの成功を確認できます。
アーカイブファイル	X	アーカイブファイルセクションには、マスターシステムから収集されたファイルが含まれます。

## 初期インストールでのアーカイブの作成時期

アーカイブは、システムができるだけ静的な状態である時に作成してください。

マスターシステムにソフトウェアをインストールした後でソフトウェアを構成する前にアーカイブを作成します。たとえば、Solaris Volume Manager は、ファイルシステム外部にメタ情報を格納します。起動ディスクをカプセル化およびミラー化してある場合、アーカイブは作成できません。アーカイブ作成ではファイルシステム外部のメタ情報にアクセスできないため、構成前にアーカイブを作成する必要があります。

## フラッシュアーカイブの保存先

フラッシュアーカイブを作成した後、そのアーカイブをマスターシステムのハードディスクまたはテープに保存できます。保存後は、任意のファイルシステムまたは媒体へそのアーカイブをコピーできます。

- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー
- HTTP サーバー
- FTP サーバー
- テープ
- CD、DVD
- フロッピーディスク
- インストールしたいクローンシステムのローカルドライブ

## アーカイブの圧縮

フラッシュアーカイブを作成する際は、`compress(1)` ユーティリティを使用して、そのアーカイブが圧縮ファイルとして保存されるように指定することができます。圧縮されたアーカイブはディスク容量が少なく済み、ネットワークを介してアーカイブをインストールする場合の負荷も減ります。

## フラッシュアーカイブのインストールの計画

フラッシュインストールの最後の作業は、クローンシステムへのフラッシュアーカイブのインストールです。

## フラッシュアーカイブのインストール方法の決定

クローンシステムへのフラッシュアーカイブのインストールには、次のインストール方法を使用できます。

Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD に含まれている Solaris Web Start では、以下の媒体に格納されているフラッシュアーカイブのインストールが可能です。

- ディスク (DVD または CD)
- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー

- HTTP サーバー
- FTP サーバー
- ローカルテープ

インストール方法の詳細は、130 ページの「SPARC: Solaris Web Start プログラムによるインストールまたはアップグレード」または 135 ページの「x86: Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード」を参照してください。

Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD に含まれている Solaris suninstall プログラムでは、以下の媒体に格納されているフラッシュアーカイブのインストールが可能です。

- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー
- HTTP サーバー
- FTP サーバー
- ローカルファイル
- ローカルテープ
- CD を含むローカルデバイス

インストール方法の詳細は、146 ページの「SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」または 149 ページの「x86: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」を参照してください。

カスタム JumpStart インストールプログラムでは、以下の媒体に格納されているフラッシュアーカイブのインストールが可能です。

- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー
- HTTP サーバー
- FTP サーバー
- ローカルテープ
- ローカルデバイス (DVD または CD)
- ローカルファイル

インストール方法の詳細は、267 ページの「カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」を参照してください。

Solaris Live Upgrade を利用すると、次の場所に保存されているフラッシュアーカイブをインストールできます。

- HTTP サーバー
- FTP サーバー
- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー
- ローカルファイル
- ローカルテープ
- ローカルデバイス (DVD または CD)

インストール方法の詳細は、385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」を参照してください。

## 第 18 章

# フラッシュアーカイブの作成

この章では、フラッシュアーカイブを作成する手順を説明します。手順には、マスターシステムにインストールし、その後そのマスターシステムからフラッシュアーカイブを作成する方法が含まれます。クローンシステムにアーカイブをインストール済みの場合、差分アーカイブを作成することも可能です。差分アーカイブの作成時に、更新前のマスターイメージと更新されたイメージの 2 つが比較されます。差分アーカイブでは、2 つのイメージの相違部分のみがインストールされます。さらに、アーカイブの再構成またはカスタマイズを実行するスクリプトの作成手順も示します。

- 173 ページの「作業マップ: フラッシュアーカイブを作成する」
- 174 ページの「マスターシステムへのインストール」
- 175 ページの「カスタムスクリプトの作成」
- 180 ページの「フラッシュアーカイブの作成」

## 作業マップ: フラッシュアーカイブを作成する

表 18-1 作業マップ: 初期インストールでインストールするフラッシュアーカイブを作成する

作業	説明	参照先
マスターマシンに選択したソフトウェア構成をインストールする	ニーズに合った構成を決定し、Solaris の任意のインストール方法を使用してマスターマシンにインストールします。	175 ページの「初期インストールでマスターシステムにインストールする方法」

表 18-1 作業マップ: 初期インストールでインストールするフラッシュアーカイブを作成する (続き)

作業	説明	参照先
(省略可能) カスタマイズスクリプトを作成する	次の作業を行うスクリプトの作成が必要かどうかを判断します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アーカイブをカスタマイズまたは再構成する</li> <li>■ クローンシステム上のローカルな変更を保護する</li> </ul>	175 ページの「カスタムスクリプトの作成」
フラッシュアーカイブを作成する	<code>flar create</code> コマンドを使用してアーカイブを作成します。	180 ページの「初期インストール用フラッシュアーカイブの作成方法」
(省略可能) アーカイブのコピーを保存する	将来、比較に使用するためにアーカイブのコピーを保存します。差分アーカイブを使用して、クローンシステムの更新が可能になります。	180 ページの「初期インストール用フラッシュアーカイブの作成方法」

表 18-2 作業マップ: フラッシュアーカイブを作成してクローンシステムを更新する

作業	説明	参照先
マスターイメージの準備を行う	パッケージを追加または削除したり、パッチをインストールして、更新前のマスターイメージに変更を加えます。	174 ページの「マスターシステムへのインストール」
(省略可能) カスタマイズスクリプトを作成する	次の作業を行うスクリプトの作成が必要かどうかを判断します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アーカイブをカスタマイズまたは再構成する</li> <li>■ クローンシステム上のローカルな変更を保護する</li> </ul>	175 ページの「カスタムスクリプトの作成」
フラッシュ差分アーカイブを作成する	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 更新前のマスターイメージをマウントします。</li> <li>2. <code>flar create</code> コマンドを使用して2つのイメージを比較し、差分アーカイブを作成します。</li> </ol>	185 ページの「マスターイメージの更新と差分アーカイブの作成」

## マスターシステムへのインストール

マスターシステムには、クローンシステムで行いたいソフトウェア構成と同じ構成でインストールします。クローンシステムに、初期インストールによりシステム上のすべてのファイルを上書きすることも、2つのイメージの相違部分のみを更新することも可能です。初期インストールでは、任意の Solaris インストール方法を使用してマスターシステムに Solaris オペレーティング環境をインストールします。

アーカイブをクローンシステムにインストール済みの場合、差分アーカイブを使用してシステムの変更部分を更新できます。元のイメージへの変更は、パッチのインストールやパッケージの追加および削除により実行されます。差分アーカイブでは、アーカイブ内で指定されたファイルだけが上書きされます。元のマスターイメージを更新して、差分アーカイブを作成する手順については、185 ページの「マスターイメージの更新と差分アーカイブの作成」を参照してください。

## ▼ 初期インストールでマスターシステムにインストールする方法

1. インストールしたいシステム構成を決定します。
2. **Solaris** のインストール方法のいずれかを使用して、マスターシステムに **Solaris** オペレーティング環境をインストールします。インストール方法の選択については、第 3 章を参照してください。
3. マスターシステムを次のいずれかの方法でカスタマイズします。
  - ソフトウェアを削除する
  - ソフトウェアを追加する
  - 構成ファイルを変更する
  - クローンシステム上にある周辺装置のためのサポートを追加する

カスタムスクリプトを作成するか、`flar create` コマンドを使用してアーカイブを作成できます。

- カスタムスクリプトの作成方法については、175 ページの「カスタムスクリプトの作成」を参照してください。
- アーカイブの作成方法については、180 ページの「フラッシュアーカイブの作成」を参照してください。

---

## カスタムスクリプトの作成

スクリプトを使用して、アーカイブをカスタマイズできます。カスタムスクリプトは、次の目的で使用します。

- 作成前スクリプトは、作成時にアーカイブの妥当性検査を行い、後でカスタマイズできるようにアーカイブ (特に差分アーカイブ) の準備を行います。このスクリプトを使用して、アーカイブ内にユーザー定義セクションを作成することもできます。
- 配置前スクリプトは、インストール時にアーカイブの妥当性検査を行い、後でカスタマイズできるようにアーカイブの準備を行います。
- 配置後スクリプトは、クローンシステム上で新規システムイメージの再構成を行います。

- 再起動スクリプトは、システムの再起動後に最終的な再構成処理を実行します。

スクリプト作成のガイドラインについては、169 ページの「カスタムスクリプト作成のガイドライン」を参照してください。

## ▼ 作成前スクリプトの作成方法

このスクリプトは、アーカイブの作成時に実行されます。このスクリプトには、さまざまな使用方法があります。

- ソフトウェアの内容および整合性を検証する。整合性に問題がある場合、スクリプトはアーカイブの作成に失敗する。
- クローンシステム上での将来のカスタマイズに備えてプロダクトの準備を行う。
- アーカイブの作成時に、他のインストールスクリプトを動的に登録する。
- フラッシュ作成サマリーファイルにメッセージを追加する。メッセージは短いものでなければならず、スクリプトが起動および終了したこと、およびその結果のみを記録するものでなければならない。結果は、サマリーセクション内で確認できる。

1. 作成前スクリプトを作成します。169 ページの「カスタムスクリプト作成のガイドライン」に記されているガイドラインに従います。
2. スクリプトを `/etc/flash/precreation` ディレクトリに保存します。

### 例 18-1 作成前スクリプトからの抜粋

以下の例は、作成前スクリプトからの抜粋です。

- サマリーセクションに開始時刻を記録するには、次の例を使用します。

```
echo "MyApp precreation script started">> $FLASHDIR/summary
```

- ソフトウェアの整合性をチェックするには、`flcheck` コマンドを使用します。このコマンドは、コマンド行では使用できません。このコマンドの構文は次のとおりです。

```
flcheck software component files and directories ...| -
```

たとえば、ファイルおよびディレクトリの妥当性検査を実行するには、次の例を使用します。

```
flcheck software component files and directories  
If Not in selection - refuse creation
```

```
echo "Myapp Integrity Damage">>$FlashDIR/summary
```

また、予期しない新規ファイルおよびディレクトリを保持し、アーカイブの作成が失敗しないようにするには、次の例を使用します。

```
flcheck software component files and directories  
If Not in selection include by force  
flinclude software component
```



例 18-1 作成前スクリプトからの抜粋 (続き)

- 配置スクリプトおよびデータを登録するには、次の例を使用します。

```
cp predeployment script $FLASHDIR/preinstall/proc.d
ln -s $FLASHDIR/preinstall/order.dS55.MyApp
cp postdeployment script $FLASHDIR/postinstall/proc.d
ln -s $FLASHDIR/postinstall/order.dS55.MyApp
```

- ユーザー定義セクションにアプリケーション固有のデータを保存するには、次の例を使用します。

```
cp custom section $FLASHDIR/custom_sections/MyApp
```

- サマリーセクションにインストールの成功を記録するには、次の例を使用します。

```
echo "product one flash preparation started.">>$FLASH_DIR/summary
...
echo "product one flash preparation finished successfully">>$FLASH_DIR/summary
```

例 18-2 作成前スクリプト

```
#!/bin/sh
echo "Test precreation script started">> $FLASH_DIR/summary
cat /opt/TestApp/critical_file_list | flcheck -
if [ $? != 0 ]; then
    echo "Test precreation script failure">> $FLASH_DIR/summary
    exit 1
fi
echo "Test precreation script started">> $FLASH_DIR/summary
/opt/TestApplication/license_cloning
$FLASH_DIR/predeployment/.TestApplicationLicenceTransfer \
$FLASH_DIR/custom_sections/TestApplicationLicenceCounter
echo "Test precreation script finished">> $FLASH_DIR/summary
exit 0
```

## 作成前スクリプトを使用してユーザー定義アーカイブセクションを作成する

作成前スクリプトを使用して、アーカイブ内にユーザー定義セクションを作成し、アプリケーションに関する特定の情報を提供できます。このセクションの目的は、アーカイブの保守です。スクリプトは、\$FLASH\_DIR/sections ディレクトリに配置する必要があります。フラッシュアーカイブは、ユーザー定義セクションを処理しません。たとえば、このセクションには、アーカイブの説明や、アプリケーションの整合性をチェックするスクリプトなどを含めることができます。

ユーザー定義セクションでは、次の書式を使用する必要があります。

- 行単位で作成する必要がある
- 復帰改行 (ASCII 0x0a) 文字で終了させる必要がある
- 個々の行の長さに制限はない
- base64 またはそれに類似したアルゴリズムを使用してバイナリデータにコード化する

## ▼ 配置前スクリプトの作成方法

このスクリプトは、アーカイブのインストール前に実行されます。スクリプトの目的がアーカイブの妥当性検査である場合、このスクリプトはアーカイブ内に保持されます。スクリプトの目的がクローンシステムのローカル構成を保存することである場合、このスクリプトはクローンシステム上に保持されます。このスクリプトは、将来のカスタマイズに必要なローカルデータの分析および収集も実行可能です。たとえば、クライアント固有の情報を、アーカイブから抽出されるファイルで上書きされる前に保存できます。この情報は、抽出後の最終段階で使用できます。

1. 配置前スクリプトを作成します。169 ページの「カスタムスクリプト作成のガイドライン」に記されているガイドラインに従います。
2. スクリプトを次のディレクトリのいずれかに保存します。
  - アーカイブの妥当性検査を実行するには、`/etc/flash/predeployment` ディレクトリに保存します。
  - 作成前スクリプトを使用して参照を行う場合、`$FLASH_DIR/preinstall` ディレクトリに保存します。
  - クローンシステム上の構成を保持する場合、JumpStart プロファイル内の `local_customization` キーワードに、クローンシステムに保存されているスクリプトへのパスを指定します。

### 例 18-3 配置前スクリプト

```
#!/bin/sh
$FLASH_DIR/TestApplication/check_hardware
if [ $? != 0 ]; then
    echo Unsupported hardware
    exit 1
fi
$FLASH_DIR/TestApplication/check_licence_key
if [ $? != 0 ]; then
    echo No license for this host
    exit 1
fi
$FLASH_DIR/TestApplication/deploy_license_key \
    $FLASH_DIR/TestApplication/.TestApplicationLicenceTransfer
$FLASH_DIR/TestApplication/save_data_files $FLASH_DIR/flash

exit 0
```

## ▼ 配置後スクリプトの作成方法

このスクリプトは、アーカイブ内またはクローンシステムのローカルディレクトリに格納され、インストール後に実行されます。スクリプトにより、クローンシステム上で新規システムイメージが再構成されます。スクリプトがアーカイブ内に格納されている場合、変更はすべてのクローンシステムに影響を及ぼします。スクリプトがク

ローンシステムのローカルディレクトリに格納されている場合、変更はそのクローンシステムにのみ影響します。たとえば、配置前スクリプトにより保存されたクライアント固有の情報をクローン環境に適用して、インストールを完了できます。

配置後スクリプトを使用して、アーカイブのインストール後にファイルを整理することも可能です。たとえば、`/var/adm`内のログファイルなどを削除できます。

---

注 - すべてのログファイルが、クリーンアップ用のスクリプトを必要とするわけではありません。`/var/tmp`内のログファイルはアーカイブの作成時に自動的に削除されます。

---

1. 配置後スクリプトを作成します。169 ページの「カスタムスクリプト作成のガイドライン」に記されているガイドラインに従います。
2. スクリプトを次のディレクトリのいずれかに保存します。
  - すべてのクローンシステムを操作するには、スクリプトを `/etc/flash/postdeployment` ディレクトリに保存します。
  - ローカルのクローンシステムのみを操作する場合は、JumpStart プロファイル内の `local_customization` キーワードに、クローンシステムに保存されているスクリプトへのパスを指定します。

#### 例 18-4 配置後スクリプト

```
#!/bin/sh
$FLASH_DIR/TestApplication/clone_reconfiguration
$FLASH_DIR/TestApplication/restore_data $FLASH_DIR/flash
```

## ▼ 再起動スクリプトの作成方法

このスクリプトはアーカイブ内に格納され、システムの再起動後に実行されます。このスクリプトにより、システムの再構成後の最終構成がすべて実行されます。

クローンシステムにフラッシュアーカイブをインストールしたあと、ホスト固有のファイルがいくつか削除され、クローンマシン用として作成し直されます。インストールプログラムは、`sys-unconfig(1M)` コマンドと `sysidtool(1M)` プログラムを使用して、ホスト固有のネットワーク構成ファイルを削除して再作成します。再作成されるファイルは、`/etc/hosts`、`/etc/defaultrouter`、`/etc/defaultdomain` などです。再起動スクリプトを使用することで、任意の最終的な再構成処理を実行できます。

1. 再起動スクリプトを作成します。
2. スクリプトを `/etc/flash/reboot` ディレクトリに保存します。

#### 例 18-5 再起動スクリプトの作成

```
#!/bin/sh
$FLASH_DIR/TestApplication/finalize_license
```

---

## フラッシュアーカイブの作成

クローンシステムのファイルすべてを上書きする初期インストール用アーカイブを作成することも、指定された変更部分のみを上書きする差分アーカイブを作成することもできます。差分アーカイブの詳細は、167 ページの「フラッシュ差分アーカイブの作成を計画する」を参照してください。

### ▼ 初期インストール用フラッシュアーカイブの作成方法

マスターシステムにインストールした後で、他のシステムへのインストールに使用するフラッシュアーカイブを作成します。

1. マスターシステムをブートし、できるだけ静的な状態で稼働させます。  
可能であれば、システムをシングルユーザーモードで実行してください。これが不可能な場合、アーカイブしたいアプリケーションおよび大量のオペレーティングシステムリソースを必要とするアプリケーションを停止します。  
フラッシュアーカイブの作成は、マルチユーザーモードまたはシングルユーザーモードで稼働しているマスターシステム上で、あるいは次に示すメディアの1つからブートさせたシステム上で行うことができます。
  - Solaris 9 DVD
  - Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD
  - Solaris 9 SOFTWARE のイメージ。CD メディアを使用している場合、イメージには必要に応じて Solaris 9 LANGUAGES CD が含まれます。
2. **flar create** コマンドを使用して、アーカイブを作成します。

```
# flar create -n name options path/filename
```

<i>name</i>	アーカイブに指定する名前です。指定する <i>name</i> は、 <code>content_name</code> キーワードの値になります。
<i>options</i>	詳細は、202 ページの「flar create」を参照してください。

*path* アーカイブファイルを保存するディレクトリへのパスです。パスを指定しない場合、`flar create` はアーカイブファイルを現在のディレクトリに保存します。

*filename* アーカイブファイルの名前です。

- アーカイブの作成が正常に完了すると、`flar create` コマンドは終了コード 0 を返します。
  - アーカイブの作成が失敗すると、`flar create` コマンドは 0 以外の終了コードを返します。
3. アーカイブのコピーを作成して保存します。将来、クローンシステムを差分アーカイブで更新するときに、このコピーを使用できます。

## 例 — 初期インストール用アーカイブの作成

ファイルシステムを複製する際、全く同じようにコピーすることも、カスタマイズしてディレクトリやファイルのいくつかを除外することもできます。異なるオプションを使用して、同じ結果を得ることも可能です。使用する環境に最も適したオプションを使用してください。

次の例に示すファイルシステムは、分かりやすくするために大幅に簡略化されています。これらの例では、マスターシステムのファイル構造は、`/var`、`/usr`、または `/opt` などのファイルシステム名の代わりに、次のようなファイル構造を使用します。

```
/aaa/bbb/ccc/ddd  
/aaa/bbb/fff  
/aaa/eee  
/ggg
```



---

**注意** – `flar create` のファイル除外オプションを指定する際は、注意が必要です。ディレクトリの一部を除外する際、システム構成ファイルなど、他のファイルが気づかずにアーカイブ内に残る場合があります。この場合、システムの整合性が損なわれるため、インストールが正常に行われません。ディレクトリやファイルの除外は、大規模なデータファイルなど、システムを破綻させることなく容易に削除可能なデータに対して行うのが最善です。

---

### 例 18-6 同一の複製アーカイブの作成

この例では、アーカイブの名前は `archive1` です。これは、マスターシステムそのものがコピーされ、その後圧縮されます。アーカイブはマスターシステムの全く同一な複製で、`archive1.flar` に格納されます。

```
# flar create -n archive1 -c archive1.flar
```

アーカイブのファイル構造を確認するには、以下のように入力します。

例 18-6 同一の複製アーカイブの作成 (続き)

```
# flar info -l archive1.flar
aaa
aaa/bbb
aaa/bbb/ccc
aaa/bbb/ccc/ddd
aaa/bbb/fff
aaa/eee
aaa/eee
ggg
```

例 18-7 アーカイブから除外するファイルとディレクトリおよびアーカイブに含めるファイルとディレクトリを指定してアーカイブを作成する

この例では、アーカイブの名前は archive2 です。これは、マスターシステムからコピーされますが、同一のコピーではありません。/aaa ディレクトリ以下の内容はアーカイブから除外されますが、/aaa/bbb/ccc の内容はアーカイブに含まれます。

```
# flar create -n archive2 -x /aaa -y /aaa/bbb/ccc archive2.flar
```

アーカイブのファイル構造を確認するには、以下のように入力します。除外されたディレクトリ (/aaa) であっても、コピーされたファイル (/aaa/bbb/ccc) が下位に存在する場合、そのディレクトリも表示されていますが、実際にアーカイブに含まれているのはコピーされたファイル (/aaa/bbb/ccc) だけです。

```
# flar info -l aaa
aaa
aaa/bbb/ccc
aaa/bbb/ccc/ddd
aaa/bbb
ggg
```

例 18-8 アーカイブから除外するファイルとディレクトリおよびアーカイブに含めるファイルとディレクトリをリストで指定してアーカイブを作成する

この例では、アーカイブの名前は archive5 です。これは、マスターシステムからコピーされますが、同一のコピーではありません。

exclude ファイルには、次のリストが含まれています。

```
/aaa
```

include ファイルには、次のリストが含まれています。

```
/aaa/bbb/ccc
```

/aaa ディレクトリ以下の内容はアーカイブから除外されますが、/aaa/bbb/ccc の内容はアーカイブに含まれます。

```
# flar create -n archive5 -X exclude -f include archive5.flar
```

例 18-8 アーカイブから除外するファイルとディレクトリおよびアーカイブに含めるファイルとディレクトリをリストで指定してアーカイブを作成する (続き)

アーカイブのファイル構造を確認するには、以下のように入力します。除外されたディレクトリ (/aaa) であっても、コピーされたファイル (/aaa/bbb/cc) が下位に存在する場合、そのディレクトリも表示されていますが、実際にアーカイブに含まれているのはコピーされたファイル (/aaa/bbb/cc) だけです。

```
# flar info -l archive5.flar
aaa
aaa/bbb/cc
aaa/bbb/cc/dd
aaa/bbb
ggg
```

例 18-9 アーカイブから除外するファイルとディレクトリをリストで指定し、アーカイブに含めるディレクトリを直接指定してアーカイブを作成する

オプション `-x`、`-y`、`-X`、および `-f` を組み合わせて使用できます。この例では、オプション `-x` および `-y` が組み合わせて使用されています。アーカイブの名前は、`archive5` です。これは、マスターシステムからコピーされますが、同一のコピーではありません。

`exclude` ファイルには、次のリストが含まれています。

```
/aaa
```

`-y` オプションにより、ディレクトリ `/aaa/bbb/cc` がアーカイブに含まれます。次のコマンドにより、アーカイブが生成されます。

```
# flar create -n archive5 -X exclude -y /aaa/bbb/cc archive5.flar
```

アーカイブのファイル構造を確認するには、以下のように入力します。除外されたディレクトリ (/aaa) であっても、コピーされたファイル (/aaa/bbb/cc) が下位に存在する場合、そのディレクトリも表示されていますが、実際にアーカイブに含まれているのはコピーされたファイル (/aaa/bbb/cc) だけです。

```
# flar info -l archive5.flar
aaa
aaa/bbb
aaa/bbb/cc
aaa/bbb/cc/dd
ggg
```

例 18-10 `-z` オプションを使用して、アーカイブから除外するファイルとディレクトリおよびアーカイブに含めるディレクトリをリストで指定してアーカイブを作成する

この例では、アーカイブの名前は `archive3` です。これは、マスターシステムからコピーされますが、同一のコピーではありません。選択するファイルおよびディレクトリが、`filter1` ファイルに含まれます。ファイル内では、ディレクトリにプラス記号 (+) またはマイナス (-) 記号が付けられ、アーカイブから除外するかアーカイブに含めるかが示されます。この例では、ディレクトリ `/aaa` に除外されることを示すマイナス記号が、サブディレクトリ `/aaa/bbb/cc` にアーカイブに含めることを示すプラス記号が付けられています。`filter1` ファイルには、次のリストが含まれています。

例 18-10 -z オプションを使用して、アーカイブから除外するファイルとディレクトリおよびアーカイブに含めるディレクトリをリストで指定してアーカイブを作成する (続き)

```
- /aaa  
+ /aaa/bbb/ccc
```

次のコマンドにより、アーカイブが生成されます。

```
# flar create -n archive3 -z filter1 archive3.flar
```

アーカイブのファイル構造を確認するには、以下のコマンドを入力します。除外されたディレクトリ (/aaa) であっても、コピーされたファイル (/aaa/bbb/ccc) が下位に存在する場合、そのディレクトリも表示されていますが、実際にアーカイブに含まれているのはコピーされたファイル (/aaa/bbb/ccc) だけです。

```
# flar info -l archive3.flar  
aaa  
aaa/bbb  
aaa/bbb/ccc  
aaa/bbb/ccc/ddd  
ggg
```

例 18-11 代替ブート環境からのアーカイブの作成

この例では、アーカイブの名前は archive4 です。これは、マスターシステムそのものがコピーされ、その後圧縮されます。アーカイブはマスターシステムの全く同一な複製で、archive4.flar に格納されます。-R オプションは、別のディレクトリツリーからアーカイブを作成する場合に使用します。

```
# flar create -n archive4 -c -R /x/yy/zz archive4.flar
```

例 18-12 アーカイブを作成して、アーカイブについて記述するキーワードを追加する

この例では、アーカイブの名前は archive3 です。このアーカイブは、マスターシステムそのものがコピーされ、その後圧縮されます。オプションで、アーカイブ識別セクションに説明を追加できます。この説明により、後でアーカイブを識別するのが容易になります。キーワード、およびその値と書式については、197 ページの「フラッシュのキーワード」を参照してください。

```
# flar create -n archive3 -i 20000131221409 -m pumbaa \  
-e "Solaris 8 Print Server" -a "Mighty Matt" -U "Internal Finance" \  
-T server archive3.flar
```

アーカイブの作成後に、詳細な説明を含む識別セクションにアクセスできます。識別セクションの例を、以下に示します。

```
section_begin=identification  
files_archived_method=cpio  
files_compressed_method=compress  
files_archived_size=259323342  
files_unarchived_size=591238111  
creation_date=20000131221409  
creation_master=pumbaa
```



例 18-12 アーカイブを作成して、アーカイブについて記述するキーワードを追加する  
(続き)

```
content_name=Finance Print Server
content_type=server
content_description=Solaris 8 Print Server
content_author=Mighty Matt
content_architectures=sun4u,sun4m
creation_node=pumbaa
creation_hardware_class=sun4u
creation_platform=SUNW,Sun-Fire
creation_processor=sparc
creation_release=5.9
creation_os_name=SunOS
creation_os_version=s81_49
x-department=Internal Finance
```

## ▼ マスターイメージの更新と差分アーカイブの作成

差分アーカイブを作成するには、更新前のマスターイメージと更新されたマスターイメージの2つが必要です。1つのイメージは、変更が加えられていないマスターイメージです。このイメージはどこかに保存されていてアクセスできる必要があります。2番目のイメージは、マイナーチェンジにより変更が加えられたマスターイメージです。このイメージのデフォルトの格納場所はルート (/) ファイルシステムですが、他の場所に格納された場合でもアクセスが可能です。2つのイメージが用意できたら、2つのイメージの差分だけを含む差分アーカイブを作成します。次に、更新前のマスターイメージを使用してインストールされたクローンシステムに差分アーカイブをインストールできます。

1. 変更を加えるマスターシステムを用意します。変更を加える前に、マスターシステムで元のアーカイブの複製を作成する必要があります。

---

注 – 更新前のマスターイメージのコピーが変更されないよう保護し、後でこのイメージをマウントできるようにしておく必要があります。

---

2. 次のいずれかの変更に合わせて、更新前のマスターイメージを更新します。
  - パッケージを削除する
  - パッケージまたはパッチを追加する
  - 構成ファイルを変更する
  - クローンシステム上にある周辺装置のサポートを追加する
3. (省略可能) カスタムスクリプトを作成します。175 ページの「カスタムスクリプトの作成」を参照してください。
4. 更新前のマスターイメージを、マウントポイントで参照できるようにします。

- 更新前のマスターイメージが非アクティブのブート環境に格納されている場合は、`lumount` コマンドを使用して参照可能にします。

```
# lumount BE_name mountpoint
```

<code>BE_name</code>	更新前のマスターイメージが格納されているブート環境の名前を指定します。
<code>mountpoint</code>	イメージの格納されたルート (/) ファイルシステムを指定します。

次の例では、非アクティブのブート環境の名前は `unchanged_master1` です。マウントポイントは、マスターシステム上の `/a` ディレクトリです。

```
# lumount unchanged_master1 /a
```

- イメージがクローンに格納されている場合、NFS を使用してクローンをマウントします。

- マスターシステム上で、クローンのルート (/) ファイルシステムを共有し、クローンシステム上でマスタールートのアクセス権を付与します。

```
# share -F nfs -o rw,root=master_system "/"
```

`master_system` は、マスターシステムの名前です。

- マスターシステム上で、クローンをマウントします。

```
# mount -F nfs clone_system:/ master_dir
```

<code>clone_system</code>	マウントするシステムの名前を指定します。
<code>master_dir</code>	更新前のマスターイメージが格納されているディレクトリを指定します。

- `ufsdump` コマンドを使用してイメージを保存した場合、`ufsrestore` コマンドを使用してコピーを取得します。これらのコマンドの使用方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』の「UFS バックアップおよび復元コマンド (参照情報)」を参照してください。

## 5. 差分アーカイブを作成します。

```
# flar create -n archive_name -A unchanged_master_image_dir\  
options path/filename
```

`archive_name` アーカイブに付ける名前を指定します。指定する `archive_name` は、`content_name` キーワード の値になります。名前は、アーカイブ識別セクションに記載されます。

<code>-A</code> <code>unchanged_master_image_dir</code>	新規システムイメージを <code>unchanged_master_image_dir</code> 引数で指定されたイメージと比較して、差分アーカイブを作成します。デフォルトでは、新規システムイメージはルート (/) ディレクトリに存在するものとみなします。 <code>-R</code> オプションを使用してデフォルトを変更できます。 <code>unchanged_master_image_dir</code> は、UFS、NFS、または <code>lumount</code> を使用して格納またはマウントされた更新前システムイメージの格納先ディレクトリです。
<code>options</code>	内容選択用のオプションを使用して、一部のファイルを含めることも除外することもできます。オプションの一覧は、202 ページの「 <code>flar create</code> 」を参照してください。
<code>path</code>	オプションの詳細は、202 ページの「 <code>flar create</code> 」を参照してください。
<code>filename</code>	アーカイブファイルを保存するディレクトリへのパスを指定します。パスを指定しない場合、 <code>flar create</code> によりアーカイブファイルを現在のディレクトリに保存します。
	アーカイブファイル名を指定します。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 差分アーカイブの作成が正常に完了すると、<code>flar create</code> コマンドは終了コード 0 を返します。</li> <li>■ 差分アーカイブの作成が失敗すると、<code>flar create</code> コマンドは 0 以外の終了コードを返します。</li> </ul>

## 例 — 差分アーカイブの作成

例 18-13 マスターシステム上の新規マスターイメージを使用して差分アーカイブを作成する

次の例では、更新前のマスターイメージのディレクトリの名前は `unchanged_master1` です。変更を含む新しいマスターイメージは、ルート (/) ディレクトリにおかれているものとします。新しいマスターイメージが更新前のマスターイメージと比較され、その後、生成された差分アーカイブが圧縮されます。差分アーカイブは、`diffarchive1.flar` ファイルに格納されます。アーカイブには、インストール時に削除、変更、または追加されるファイルが含まれます。

```
# flar create -n diffarchive1 -A /a/unchanged_master1 -c diffarchive1.flar
```

例 18-14 非アクティブブート環境に格納されたイメージを使用して差分アーカイブを作成する

次の例では、更新前のマスターイメージ `unchanged_master1` が非アクティブブート環境に格納されており、ブート環境をマウントすることによりアクセス可能になります。新しいマスターイメージは、ルート (/) ディレクトリにおかれているものとします。新しいマスターイメージが更新前のマスターイメージと比較され、その後、生成された差分アーカイブが圧縮されます。アーカイブは、`diffarchive4.flar` 内に格納されます。アーカイブには、インストール時に削除、変更、または追加されるファイルが含まれます。

```
# lumount unchanged_master1 /a
# flar create -n diffarchive4 -A /a -c diffarchive4.flar
```



## 第 19 章

---

# フラッシュアーカイブのインストールと管理

---

この章では、フラッシュアーカイブをクローンシステムにインストールする手順およびアーカイブを管理する手順を説明します。

- 189 ページの「フラッシュアーカイブをインストールする方法」
- 190 ページの「フラッシュアーカイブの管理」

---

## フラッシュアーカイブをインストールする方法

フラッシュアーカイブは、任意の Solaris インストール方法で、初期インストールできません。フラッシュ差分アーカイブをインストールするには、カスタム JumpStart を使用する必要があります。

- 初期インストールでフラッシュアーカイブをインストールするには、以下を参照してください。
  - Solaris Live Upgrade – 385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」を参照してください。
  - Solaris Web Start プログラム – 130 ページの「SPARC: Solaris Web Start プログラムによるインストールまたはアップグレード」または135 ページの「x86: Solaris Web Start によるインストールまたはアップグレード」を参照してください。
  - Solaris suninstall プログラム – 146 ページの「SPARC: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」または149 ページの「x86: Solaris suninstall プログラムによるインストールまたはアップグレード」を参照してください。
  - カスタム JumpStart インストールプログラム – 230 ページの「プロファイルの作成」および267 ページの「カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」を参照してください。

- フラッシュ差分アーカイブの更新方法については、以下を参照してください。  
カスタム JumpStart インストールプログラム - 230 ページの「プロファイルの作成」および267 ページの「カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」を参照してください。

---

## フラッシュアーカイブの管理

flar コマンドは、アーカイブの管理に使用します。1つのアーカイブを複数のセクションに分割できます。これらのセクションに対し変更、追加、または削除を実行してから結合して、アーカイブを作成できます。アーカイブに関する情報を取得することもできます。



---

注意 - アーカイブセクションは変更しないようにしてください。変更するとアーカイブの整合性に悪影響が及びます。

---

## フラッシュアーカイブの分割

アーカイブを複数のセクションに分割し、その一部を変更したり、新たなセクションを追加したり、セクションを削除したりできます。セクションの変更後に、セクションを結合して新規アーカイブを作成する必要があります。たとえば、ユーザー定義セクションの追加や、識別セクションの変更を実行できます。アーカイブセクションは変更しないようにしてください。変更するとアーカイブの整合性に悪影響が及びます。

flar split コマンドは、フラッシュアーカイブを複数のセクションに分割します。flar コマンドは、各セクションを、現在のディレクトリまたは指定されたディレクトリ内の別個のファイルにコピーします。ファイルには、セクション名からとった名前が付けられます。たとえば、Cookie セクションは、cookie と名付けられたファイルに保存されます。flar split コマンドでは、1つのセクションだけを保存するように指定できます。このコマンドの構文は次のとおりです。

```
flar split[-d dir] [-u section] [-f archive] [-S section] [-t [-p posn] [-b blocksize]]  
filename
```

---

-d dir

コピーするセクションを、現在のディレクトリからではなく dir から取得します。

---

---

<code>-u section</code>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ このオプションを使用した場合、<code>flar</code> は Cookie セクション、識別セクション、アーカイブセクション、および <code>section</code> セクションをコピーします。1つのセクション名を指定することも、あるいは空白で区切って複数のセクション名を指定することも可能です。</li> <li>■ このオプションを使用しない場合、<code>flar</code> は Cookie、識別、およびアーカイブセクションのみをコピーします。</li> </ul>
<code>-f archive</code>	アーカイブセクションを、 <code>archive</code> という名前のファイルに入れるのではなく、 <code>archive</code> というディレクトリに抽出します。
<code>-S section</code>	アーカイブから <code>section</code> と名付けられたセクションだけをコピーします。これは、ユーザー定義セクションです。

---

#### 例 19-1 アーカイブの分割

次の例では、`archive1.flar` が 3 つのファイルに分割されます。

- `cookie` – アーカイブの最初の行。アーカイブフォーマットのバージョンを示します。この識別子は変更しないでください。
- `identification` – 識別セクションのコピー。すべてのキーワードと値のペアを保持します。
- `archive` – `cpio` アーカイブ本体。このファイルは圧縮可能です。

```
# flar split archive1.flar
```

アーカイブの分割後に、識別セクションの変更またはユーザー定義セクションの追加を実行できます。その後、セクションを結合してアーカイブを再作成できます。

## フラッシュアーカイブの結合

アーカイブをセクションに分割した後で、セクションを結合して新規アーカイブを作成できます。

`flar combine` コマンドは、個別のセクションからフラッシュアーカイブを作成します。各セクションは、セクション名を名前に持つ個々のファイル内にあると見なされます。少なくとも、次の 3 つのファイルが存在する必要があります。

- `cookie` セクション (`cookie`)
- 識別セクション (`identification`)
- アーカイブファイルセクション (`archive`)

セクションを結合する際、以下の点に留意してください。

- archive がディレクトリである場合、flar は、結合されたアーカイブに含める前に、cpio を使用してディレクトリをアーカイブします。
- 識別セクションにアーカイブの圧縮が指定されている場合、flar は新しく結合されたアーカイブのコンテンツを圧縮します。
- どのセクションについても検証は何も行われません。特に、識別セクション内のどのフィールドについても、検証や更新は行われません。

```
flar combine [-d dir] [-u section] [-t [-p posn] [-b blocksize]] filename
```

-d dir	結合するセクションを、現在のディレクトリからではなく dir から取得します。
-u section	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ このオプションを使用した場合、flar は Cookie セクション、識別セクション、アーカイブセクション、および section セクションをコピーします。1つのセクション名を指定することも、あるいは空白で区切って複数のセクション名を指定することも可能です。</li> <li>■ このオプションを使用しない場合、flar は Cookie、識別、およびアーカイブセクションのみをコピーします。</li> </ul>

#### 例 19-2 フラッシュアーカイブの結合

この例では、Cookie セクション、識別セクション、アーカイブセクションが結合して、完成したアーカイブになります。アーカイブ名は newarchive.flar です。

```
# flar combine newarchive.flar
```

#### 例 19-3 フラッシュアーカイブの結合とユーザー定義セクションの追加

この例では、Cookie セクション、識別セクション、アーカイブファイルセクション、およびユーザー定義セクションが結合して、完成したアーカイブになります。アーカイブ名は newarchive.flar です。ユーザー定義セクションの内容は、現在のディレクトリ内の user\_defined という名前のファイルの中にあります。

```
# flar combine -u user_defined newarchive.flar
```

## アーカイブからの情報の抽出

flar info コマンドを使用して、作成済みのアーカイブに関する情報を取得します。このコマンドの構文は次のとおりです。

```
flar info [-l] [-k keyword] [-t [-p posn] [-b blocksize]] filename
```



---

<code>-k keyword</code>	キーワード <i>keyword</i> の値のみを返します。
<code>-l</code>	アーカイブセクション内のすべてのファイルをリスト表示します。

---

**例 19-4**

この例では、アーカイブ `archive3.flar` のファイル構造がチェックされます。

```
# flar info -l archive3.flar
aaa
aaa/bbb
aaa/bbb/ccc
aaa/bbb/ccc/ddd
aaa/eee
```



## 第 20 章

# フラッシュに関するリファレンス情報

この章では、フラッシュのセクション、キーワード、およびキーワード値について説明します。また、`flar create` コマンドのオプションについても説明します。

- 195 ページの「フラッシュアーカイブセクションの説明」
- 197 ページの「フラッシュのキーワード」
- 202 ページの「フラッシュ `flar create` コマンド」

## フラッシュアーカイブセクションの説明

各フラッシュアーカイブは、セクションにグループ化されます。一部のセクションは、フラッシュソフトウェアにより生成されるため、ユーザーが入力する必要はありません。一部のセクションは入力が必要であったり、情報追加が可能であったりします。以下の表で、各セクションについて説明します。

表 20-1 フラッシュアーカイブのセクション

セクション名	説明	アーカイブに必要	ユーザー入力が必要
Cookie セクション	最初のセクションには、ファイルをフラッシュアーカイブとして識別する <code>cookie</code> が含まれます。配置処理では、識別および検証に <code>cookie</code> を使用します。アーカイブを有効にするために、 <code>cookie</code> が必要です。	必須	省略可能

表 20-1 フラッシュアーカイブのセクション (続き)

セクション名	説明	アーカイブに必要	ユーザー入力が必要
識別セクション	<p>2 番目のセクションには、アーカイブを識別する情報を値とするキーワードが含まれます。ソフトウェアは、以下に示すような情報を生成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アーカイブの ID 番号</li> <li>■ アーカイブのメソッド (cpio など)</li> <li>■ 作成日 (デフォルト情報)</li> </ul> <p>フラッシュアーカイブの名前はユーザーが指定する必要があります。アーカイブについて指定できる情報には、次のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アーカイブの作者</li> <li>■ アーカイブの作成日</li> <li>■ アーカイブを作成したマスターシステムの名前</li> </ul> <p>アーカイブに関するキーワードのリストについては、198 ページの「識別セクションのキーワード」を参照してください。</p>	必須	内容は、ユーザーとソフトウェアの両方で生成されます。
マニフェストセクション	<p>クローンシステムの検証に使用されるフラッシュアーカイブのセクション。マニフェストセクションには、クローンシステムに保持、追加または削除されるシステム上のファイルの一覧が保持されます。インストールされるファイルが、このリストセットと一致しない場合、インストールは失敗します。このセクションは、情報提供専用です。このセクションは、ファイルを内部形式でリストするため、スクリプトの記述には使用できません。</p> <p>flar create -M オプションを使用して差分アーカイブを作成することにより、このセクションを省略できますが、アーカイブの検証が行われなくなるため、このセクションを省略することを推奨しません。</p>	省略可能	省略可能
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 配置前</li> <li>■ 配置後</li> <li>■ 再起動</li> </ul>	<p>このセクションには、オペレーティング環境イメージのインストール前または後にフラッシュソフトウェアが使用する内部情報が含まれます。指定したすべてのカスタマイズスクリプトが、このセクションに保存されます。</p>	必須	省略可能
サマリーセクション	<p>このセクションには、アーカイブ作成に関するメッセージが含まれます。また、配置前スクリプトのアクティビティが記録されます。</p>	必須	内容は、ユーザーとソフトウェアの両方で生成されます。
ユーザー定義セクション	<p>このセクションは、識別セクションの次に存在します。アーカイブには、ゼロ以上のユーザー定義セクションを含めることができます。これらのセクションは、アーカイブの抽出処理では処理されません。これらのセクションは別個に取り出され、内容の説明に使用されます。</p>	省略可能	必須

表 20-1 フラッシュアーカイブのセクション (続き)

セクション名	説明	アーカイブに必要	ユーザー入力が必要
アーカイブファイルセクション	アーカイブファイルセクションには、マスターシステムから収集されたファイルの内容がバイナリデータで書きこまれます。このセクションは、 <code>section_begin=archive</code> で始まりませんが、セクションの終了境界を示すものではありません。	必須	省略可能

## フラッシュのキーワード

フラッシュのキーワードは、カスタム `JumpStart` のキーワードと類似しています。どちらのキーワードも、インストール要素を定義します。各キーワードは、フラッシュソフトウェアによるクローンシステムへのソフトウェアのインストール方法の一部分を制御するコマンドです。

以下のガイドラインに従って、キーワードおよび値の書式を指定します。

- キーワードと値は1つの等号で区切られ、1行に1つのキーワードと1つの値を指定します。
- キーワードは、大文字と小文字を区別しません。
- 個々の行の長さに制限はありません。

## 一般的なキーワード

フラッシュアーカイブの各セクションは、`section_begin` と `section_end` キーワードで定義されます。たとえば、アーカイブファイルセクションには、値の異なる `section_begin` キーワードが含まれます。ユーザー定義アーカイブセクションは、`section_begin` と `section_end` キーワードで区切られます。各キーワードには、そのセクションに適した値が指定されます。`section_begin` と `section_end` キーワードの値を以下の表に示します。

表 20-2 `section_begin` と `section_end` キーワードの値

アーカイブのセクション	<code>section_begin</code> と <code>section_end</code> キーワードの値
Cookie セクション	<code>cookie</code> — このセクションは、 <code>section_begin</code> と <code>section_end</code> キーワードで区切られません。
識別セクション	<code>identification</code>
ユーザー定義セクション	<code>section_name section_name</code> キーワードの一例は、 <code>X-user_section_1</code> です。

表 20-2 section\_begin と section\_end キーワードの値 (続き)

アーカイブのセクション	section_begin と section_end キーワードの値
アーカイブファイルセクション	archive

## 識別セクションのキーワード

以下の表に、識別セクションで使用されるキーワードと、これらに定義可能な値を示します。

各セクションでは、表 20-3 に示したキーワードがセクションの区切りに使用されません。

表 20-3 識別セクションのキーワード: 一般的なキーワード

キーワード	値の定義	値	必須
section_begin section_end	これらのキーワードは、アーカイブ内のセクションの区切りに使用されます。使用は、識別セクションに限定されません。これらのキーワードの詳細は、197 ページの「一般的なキーワード」を参照してください。	テキスト	必須

以下のキーワードは、識別セクションで使用され、アーカイブファイルセクションの内容を説明します。

表 20-4 識別セクションのキーワード: アーカイブファイルセクションの内容

キーワード	値の定義	値	必須
archive_id (省略可能)	このキーワードは、アーカイブの内容を独自の方法で説明します。この値は、インストールソフトウェアにより、アーカイブインストール時のアーカイブの内容確認にのみ使用されます。キーワードが存在しない場合、整合性チェックは行われません。  たとえば、archive_id キーワードを FLASH-ARcHive-2.0 に設定できます。	テキスト	省略可能

表 20-4 識別セクションのキーワード: アーカイブファイルセクションの内容 (続き)

キーワード	値の定義	値	必須
<code>files_archived_method</code>	<p>このキーワードは、ファイルセクションで使用されるアーカイブ方法を記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ このキーワードが存在する場合、値は <code>cpio</code> になります。</li> <li>■ このキーワードが存在しない場合、ファイルセクションは、ASCII ヘッダーをもつ CPIO フォーマットと見なされます。このフォーマットは、<code>cpio -c</code> オプションです。</li> </ul> <p><code>files_compressed_method</code> が存在する場合、そこで指定された圧縮方法がこの <code>files_archived_method</code> キーワードで指定されたアーカイブ方法で作成されるアーカイブファイルに適用されます。</p>	テキスト	省略可能
<code>files_archived_size</code>	<p>このキーワード値は、アーカイブファイルセクションのサイズをバイトで表現した値です。</p>	数値	省略可能
<code>files_compress_method</code>	<p>このキーワードは、ファイルセクションで使用される圧縮アルゴリズムを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ キーワードが存在する場合、次のいずれかの値を指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>none</code> - アーカイブファイルセクションは圧縮されません</li> <li>■ <code>compress</code> - ファイルセクションは、<code>compress</code> コマンドを使用して圧縮されます。</li> </ul> </li> <li>■ このキーワードが存在しない場合、アーカイブファイルセクションは非圧縮と判断されます。</li> </ul> <p>このキーワードで指定された圧縮方法は、<code>files_archived_method</code> キーワードで指定されたアーカイブ方法で作成されるアーカイブファイルに適用されます。</p>	テキスト	省略可能
<code>files_unarchived_size</code>	<p>このキーワードは、抽出されたアーカイブの累積サイズをバイトで定義します。この値は、ファイルシステムのサイズ検証に使用されます。</p>	数値	省略可能

以下のキーワードは、アーカイブ全体に関する情報を提供します。通常、これらのキーワードは、アーカイブの選択および管理を支援する目的で使用されます。これらのキーワードはすべてオプションであり、各アーカイブの識別を容易にするために使用されます。これらのキーワードは、`flar create` コマンドのオプションの中で使用されます。具体例は、例 18-12を参照してください。

表 20-5 識別セクションのキーワード: ユーザーによるアーカイブの記述

キーワード	値の定義	値	必須
creation_date	<p>このキーワード値は、アーカイブの作成時刻を表すタイムスタンプのテキストです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ flar create コマンドに <code>-i</code> オプションを使用して、日付を作成できます。</li> <li>■ flar create コマンドを使用して作成日付を指定しない場合、デフォルトの日付がグリニッジ標準時 (GMT) で設定されます。</li> <li>■ 値は、ISO-8601 に準拠し、時間指示子なしの完全基本カレンダー形式で指定する必要があります (ISO-8601, §5.4.1(a))。書式は、<code>CCYYMMDDhhmmss</code> です。たとえば、<code>20000131221409</code> は、2000 年 1 月 31 日、22 時 14 分 09 秒を示します。</li> </ul>	テキスト	省略可能
creation_master	<p>このキーワード値には、アーカイブの作成に使用したマスターシステムの名前を指定します。flar create <code>-m</code> オプションを使用して、この値を指定できます。値を指定しない場合、<code>uname -n</code> コマンドから値が取得されます。</p>	テキスト	省略可能
content_name	<p>このキーワードにより、アーカイブが識別されます。この値は、flar create <code>-n</code> オプションから生成されます。この値を作成する際、以下のガイドラインに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 256 文字を超える長さの記述名を指定することはできません。</li> <li>■ 説明には、アーカイブの機能および目的を記述する必要があります。</li> </ul>	テキスト	必須
content_type	<p>このキーワード値により、アーカイブのカテゴリが指定されます。値の生成には、flar create <code>-T</code> オプションを使用します。</p>	テキスト	省略可能
content_description	<p>このキーワード値は、アーカイブの内容を示します。このキーワードの値の長さに制限はありません。この値の生成には、flar create <code>-E</code> オプションを使用します。</p>	テキスト	省略可能
content_author	<p>このキーワード値は、アーカイブの作成者を示します。この値の作成には、flar create <code>-a</code> オプションを使用します。作成者のフルネームと電子メールアドレスを含めることをお勧めします。</p>	テキスト	省略可能



表 20-5 識別セクションのキーワード: ユーザーによるアーカイブの記述 (続き)

キーワード	値の定義	値	必須
content_architectures	<p>このキーワード値は、アーカイブがサポートするカーネルアーキテクチャのリストで、コンマで区切られています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ このキーワードが存在する場合、インストールソフトウェアは、アーカイブがサポートするアーキテクチャのリストを参照して、クローンシステムのカーネルアーキテクチャを検証します。アーカイブがクローンシステムのカーネルアーキテクチャをサポートしていない場合、インストールは失敗します。</li> <li>■ キーワードが存在しない場合、インストールソフトウェアはクローンシステムのアーキテクチャを検証しません。</li> </ul>	テキストのリスト	省略可能

以下のキーワードも、アーカイブ全体の説明に使われます。デフォルトでは、値は、フラッシュアーカイブの作成時に `uname` で指定されます。ルートディレクトリが / ではないフラッシュアーカイブを作成すると、アーカイブソフトウェアにより、これらのキーワードに対して文字列 `UNKNOWN` が挿入されます。例外は、`creation_node`、`creation_release`、および `creation_os_name` キーワードです。

- `creation_node` では、ソフトウェアは `nodename` ファイルの内容を使用します。
- `creation_release` および `creation_os_name` では、ソフトウェアは root ディレクトリの `/var/sadm/system/admin/INST_RELEASE` の内容を使用しようとしています。ソフトウェアがこのファイルの読み込みに失敗した場合、値 `UNKNOWN` が割り当てられます。

これらのキーワードの値は設定方法に関係なく、上書きできません。

表 20-6 識別セクションのキーワード: ソフトウェアによるアーカイブの記述

キーワード	値
<code>creation_node</code>	<code>uname -n</code> から返される値
<code>creation_hardware_class</code>	<code>uname -m</code> から返される値
<code>creation_platform</code>	<code>uname -i</code> から返される値
<code>creation_processor</code>	<code>uname -p</code> から返される値
<code>creation_release</code>	<code>uname -r</code> から返される値
<code>creation_os_name</code>	<code>uname -s</code> から返される値
<code>creation_os_version</code>	<code>uname -v</code> から返される値

## ユーザー定義セクションのキーワード

フラッシュアーカイブで定義されるキーワードに加えて、他のキーワードを定義できます。フラッシュアーカイブはユーザー定義のキーワードを無視しますが、識別セクションを処理しユーザー定義のキーワードを使用するスクリプトまたはプログラムを提供できます。ユーザー定義キーワードを作成する際、以下の書式に従います。

- キーワード名を *x* で始めます。
- 改行、等号、NULL 文字以外の任意の文字を使用してキーワードを作成します。
- ユーザー定義キーワードの命名規則には、定義済みのキーワードに対して使用される、下線で区切る記述方法を推奨します。他によく使われる命名規則としては、Java パッケージの命名に類似したフェデレーテッド規則があります。

たとえば、`x-department` はユーザー定義のキーワードとして有効です。

オプションを使用して、識別セクションにユーザー定義キーワードを含める具体例は、例 18-12を参照してください。

---

## フラッシュ flar create コマンド

フラッシュ `flar create` コマンドを使用して、フラッシュアーカイブを作成できます。

### flar create

`flar create` コマンドは、マスターシステムからフラッシュアーカイブを作成するために使用します。このコマンドは、マスターシステムがマルチユーザーモードまたはシングルユーザーモードで稼働している時に使用できます。また、`flar create` は、マスターシステムが Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD からブートしている時、あるいは Solaris 9 SOFTWARE および Solaris 9 LANGUAGES CD のネットイメージからブートしている時にも使用できます。フラッシュアーカイブを作成する時は、マスターシステムはできるだけ静的な状態にしておく必要があります。このコマンドの構文は次のとおりです。

```
flar create -n archive_name [-R root] [-A unchanged_master_image_dir] [-S]
[-M] [-H] [-I] [-c] [-x exclude_dir/filename] [-y include_dir/filename] [-z
list_filename] [-X list_filename] [-t [-p posn] [-b blocksize] [-i date] [-m
master] [-u section ... [-d dir]] [-f [list_filename| -] [-F]] [-U key=val
...] [-a author] [-e descr| -E descr_file] [-T type] path/filename
```

このコマンド行の *path* は、アーカイブファイルを保存するディレクトリです。*filename* は、アーカイブファイルの名前です。パスを指定しない場合、`flar create` はアーカイブファイルを現在のディレクトリに保存します。

表 20-7 flar create のコマンド行オプション

オプション	説明
<b>必須オプション</b>	
-n <i>archive_name</i>	このオプションの値は、アーカイブの名前です。指定する <i>archive_name</i> は、 <i>content_name</i> キーワードの値になります。
<b>圧縮用のオプション</b>	
-c	compress(1) を使用してアーカイブを圧縮します。
<b>ディレクトリとサイズを指定するオプション</b>	
-R <i>root</i>	<i>root</i> のファイルシステムツリーからアーカイブを作成します。このオプションを指定しない場合、flar create は / ファイルシステムからアーカイブを作成します。
-S	アーカイブにサイズ情報を含めません。
-H	ハッシュ識別子を生成しません。
<b>差分アーカイブを作成するオプション</b>	
-A <i>unchanged_master_image_dir</i>	<p>新しいシステムイメージを <i>unchanged_master_image_dir</i> 引数で指定されたイメージと比較して、差分アーカイブを作成します。デフォルトでは、新しいシステムイメージはルート (/) です。-R オプションを使用してデフォルトを変更できます。<i>unchanged_master_image_dir</i> は、UFS、NFS、または lumount を使用して更新前のマスターシステムイメージが格納またはマウントされるディレクトリです。</p> <p>次に説明されている内容を選択するオプションを使用して、差分アーカイブに対するファイル選択を変更できます。</p>
-M	<p>マニフェストファイルを除外します。このオプションを使用すると、差分アーカイブに対する検証は行われません。差分アーカイブの作成時に、flar create はシステム内の変更されないファイル、変更されるファイル、アーカイブから削除されるファイルの長いリストを作成します。このリストは、アーカイブのマニフェストセクションに保存されます。差分アーカイブの配置時に、ソフトウェアはこのリストを使用してファイルごとにチェックを行い、クローンシステムの整合性が維持されることを保証します。このオプションを使用すると、このチェックが省略され、差分アーカイブ内のマニフェストセクションが使用するスペースを節約できます。ただし、インストール時に時間とディスク容量が節約できることと、整合性のチェックが実行されない影響とを比較考量する必要があります。検証が実行されなくなるため、このオプションの使用は推奨しません。</p>

表 20-7 flar create のコマンド行オプション (続き)

オプション	説明
内容を選択するオプション	
<p>注意 - flar create のファイル除外オプションは、注意して使用してください。一部のディレクトリを除外する際、気づかずにシステム構成ファイルなどの他のファイルがアーカイブに残ってしまう場合があります。この場合、システムの整合性が損なわれるため、インストールが失敗してしまいます。ディレクトリやファイルの除外は、大規模なデータファイルなど、システムを破綻させることなく容易に削除可能なデータに対して行うのが最善です。</p>	
-y <i>include_dir/filename</i>	<p>コマンド行で指定されたファイルおよびディレクトリをアーカイブに追加します。ディレクトリは除外するが、個々のサブディレクトリやファイルを含める場合、このオプションを使用します。</p> <p><i>include_dir/filename</i> には、含めるサブディレクトリやファイルの名前を指定します。</p>
-f <i>list_filename</i>	<p>リストからファイルおよびディレクトリをアーカイブに追加します。</p> <p><i>list_filename</i> は、リストを含むファイルのフルパスです。-F が指定されていない限り、ファイルの内容がファイルリストに追加されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <i>list_filename</i> ファイルでは、1 ファイルを 1 行で表す必要があります。</li> <li>■ -R <i>root</i> を使用してファイルシステムを指定する場合、各ファイルのパスは代替 <i>root</i> ディレクトリからの相対パスにするか、絶対パスにする必要があります。</li> <li>■ <i>filename</i> が「-」の場合、flar create は標準入力からファイルのリストを読み取ります。「-」を指定すると、アーカイブのサイズは計算されません。</li> </ul>
-F	<p>このオプションを指定すると、-f <i>list_filename</i> に示されるファイルだけを使って、アーカイブを作成します。このオプションを使用することで、-f <i>list_filename</i> は、アーカイブに含まれるファイルの絶対リストになります。</p>
-x <i>exclude_dir/filename</i>	<p>アーカイブからファイルおよびディレクトリを除外します。除外するファイルは、コマンド行で指定します。このオプションのインスタンスを複数使用して、複数のファイルまたはディレクトリを除外できます。</p> <p><i>exclude_dir/filename</i> には、除外するディレクトリやファイルの名前を指定します。</p>

表 20-7 flar create のコマンド行オプション (続き)

オプション	説明
-x <i>list_filename</i>	<p>アーカイブからリスト内のファイルまたはディレクトリを除外します。</p> <p><i>list_filename</i> は、リストを含むファイルのフルパスです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <i>list_filename</i> ファイルでは、1 ファイルを 1 行で表す必要があります。</li> <li>■ -R <i>root</i> を使用してファイルシステムを指定する場合、各ファイルのパスは代替 <i>root</i> ディレクトリからの相対パスにするか、絶対パスにする必要があります。</li> <li>■ <i>list_filename</i> が「-」の場合、<code>flar create</code> は標準入力からファイルのリストを読み取ります。「-」を指定すると、アーカイブのサイズは計算されません。</li> </ul>
-z <i>list_filename</i>	<p>アーカイブに対し、リスト内のファイルまたはディレクトリを除外または含めます。リスト内の各ファイルまたはディレクトリには、プラス「+」またはマイナス「-」記号を付けます。プラスはファイルやディレクトリを含めることを、マイナスはファイルやディレクトリを除外することを示します。</p> <p><i>list_filename</i> は、リストを含むファイルのフルパスです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <i>list_filename</i> ファイルでは、1 ファイルを 1 行で表す必要があります。</li> <li>■ -R <i>root</i> を使用してファイルシステムを指定する場合、各ファイルのパスは代替 <i>root</i> ディレクトリからの相対パスにするか、絶対パスにする必要があります。</li> </ul>
-I	<p>整合性チェックを無効にします。重要なシステムファイルをアーカイブから除外してしまうことを防ぐために、<code>flar create</code> は整合性チェックを実行します。このチェックにより、システムパッケージデータベースに登録されたすべてのファイルが検査され、そのいずれかが除外される場合、アーカイブの作成が停止します。このオプションを指定すると、この整合性チェックが無効になります。このため、-I オプションの使用は推奨しません。</p>
ユーザー定義のセクションで使用されるオプション	
-u <i>section</i>	<p><i>section</i> をユーザー定義のセクションとして含めます。ユーザー定義のセクションを複数含めるには、セクション名を空白で区切ったリストにします。</p>
-d <i>dir</i>	<p><i>dir</i> から、-u で指定したセクションを取り出します。</p>
テープアーカイブで使用されるオプション	
-t	<p>テープデバイス上にアーカイブを作成します。<i>filename</i> 引数は、テープデバイスの名前です。</p>

表 20-7 flar create のコマンド行オプション (続き)

オプション	説明
-p <i>posn</i>	-t オプションとの併用でのみ使用できます。flar create がアーカイブを格納するための、テープデバイス上の位置を指定します。このオプションを指定しない場合、flar create はテープの現在の位置にアーカイブを配置します。
-b <i>blocksize</i>	flar create がアーカイブの作成時に使用するブロックサイズを指定します。ブロックサイズを指定しない場合、flar create はデフォルトのブロックサイズ 64k を使用します。
アーカイブ識別のためのオプション	
以下のキーワードおよび値は、アーカイブの識別セクションに記載されます。	
-U <i>key=val</i>	識別セクションに、ユーザー定義のキーワードと値を含めます。
-i <i>date</i>	<i>date</i> は、creation_date キーワードの値として使用されます。 <i>date</i> を指定しない場合、flar create は現在のシステム日時を使用します。
-m <i>master</i>	<i>master</i> は、アーカイブを作成したマスターシステムの名前として使用されます。 <i>master</i> は、creation_master キーワードの値です。 <i>master</i> を指定しない場合、flar create は <code>uname -n</code> が出力するシステム名を使用します。
-e <i>descr</i>	<i>descr</i> は、content_description キーワードの値として使用されます。-E オプションを使用する場合はこのオプションを使用できません。
-E <i>descr_file</i>	<i>descr_file</i> ファイルから content_description キーワードの値を取得します。-e オプションを使用する場合はこのオプションを使用できません。
-a <i>author</i>	<i>author</i> は、識別セクション内の作成者名として使用されます。 <i>author</i> は content_author キーワードの値です。作成者を指定しない場合、flar create は識別セクションの content_author キーワードを含めません。
-T <i>type</i>	<i>type</i> は、content_type キーワードの値として使用されます。 <i>type</i> はユーザー定義のキーワードです。タイプを指定しない場合、flar create は content_type キーワードを含めません。

## 第 21 章

# カスタム JumpStart インストール

以下の章では、カスタム JumpStart インストールのための準備や実行手順について説明します。

第 22 章	カスタム JumpStart インストールの紹介と概要を示します。
第 23 章	各サイトでカスタム JumpStart インストールを使用して Solaris 9 ソフトウェアをインストールするために必要な準備の手順について説明します。
第 24 章	カスタム JumpStart インストールツールで実行するスクリプトを作成するときに使用できるオプション機能について説明します。
第 25 章	独自のカスタムルールとカスタムプロンプトキーワードを作成するための情報と手順を説明します。
第 26 章	SPARC システムまたは x86 システムでカスタム JumpStart インストールを実行する手順を説明します。これらの手順は、Solaris 9 ソフトウェアをインストールしようとするシステム上で実行してください。
第 27 章	カスタム JumpStart を使用して SPARC システムと x86 システムに Solaris ソフトウェアをインストールするための設定と実際のインストールを行う例を示します。
第 28 章	rules ファイル、プロファイル、begin スクリプト、および finish スクリプトで使用できるキーワードと値を示します。





## 第 22 章

---

# カスタム JumpStart の概要

---

この章では、カスタム JumpStart のインストール処理について紹介し、全体の概要を示します。

- 209 ページの「カスタム JumpStart とは」
- 210 ページの「JumpStart プログラムが Solaris ソフトウェアをインストールする方法」

---

## カスタム JumpStart とは

カスタム JumpStart では、あらかじめ作成したプロファイルを使って、複数のシステムのインストールやアップグレードを自動的にかつ同時に行うことができます。プロファイルには、どのようにソフトウェアをインストールするかを定義します。さらに、インストール前とインストール後に実行する作業を、シェルスクリプトを使用して指定することができます。システムのインストールまたはアップグレードにどのプロファイルとスクリプトを使用するかを選択すると、それらの選択にもとづいて処理が行われます。また、`sysidcfg` ファイルを使用して構成情報を指定することにより、カスタム JumpStart インストールを完全に自動化することも可能です。

以下に、1 例を挙げてカスタム JumpStart の処理を説明します。この事例では、システムは次のパラメータを指定して設定する必要があるとします。

- 100 台の新しいシステムに Solaris をインストールする。
- 100 台の新しい SPARC システムのうち 70 台はエンジニアリング部が所有し、そのシステムは「開発者」Solaris オペレーティング環境ソフトウェアグループでスタンドアロンシステムとしてインストールしなければならない。
- 残りの 30 台は x86 ベースのシステムで、マーケティング部が所有し、そのシステムは「エンドユーザー」Solaris オペレーティング環境ソフトウェアグループでスタンドアロンシステムとしてインストールしなければならない。

まず、システム管理者はシステムグループごとに rules ファイルとプロファイルを作成する必要があります。rules ファイルは、Solaris ソフトウェアをインストールするシステムグループごと(または1つのシステム)のルールが入ったテキストファイルです。各ルールは1つ以上のシステム属性にもとづいてシステムグループを識別し、各グループをプロファイルにリンクします。

プロファイルは、グループ内の各システムに Solaris ソフトウェアがどのようにインストールされるかを定義するテキストファイルです。rules ファイルとプロファイルは、JumpStart ディレクトリに置かれている必要があります。

この例の場合、システム管理者は2つの異なるルールで rules ファイルを作成します。1つはエンジニアリンググループ用のルールで、もう1つはマーケティンググループ用のルールです。ルールごとに、エンジニアリンググループとマーケティンググループを区別するために、システムのネットワーク番号が使用されます。

各ルールには、適切なプロファイルへのリンクも含まれています。たとえば、エンジニアリンググループ用のルールでは、エンジニアリンググループ用に作成した eng\_profile というプロファイルへのリンクを追加します。マーケティンググループ用のルールでは、マーケティンググループ用に作成した market\_profile というプロファイルへのリンクを追加します。

rules ファイルとプロファイルは、フロッピーディスクまたはサーバー上に保存できます。

- プロファイルフロッピーディスクは、カスタム JumpStart インストールを、ネットワークに接続されていないスタンドアロンシステムで実行するときが必要です。
- プロファイルサーバーは、カスタム JumpStart インストールを、サーバーにアクセスできるネットワークに接続されたシステムで実行するときを使用します。

rules ファイルとプロファイルを作成した後、check スクリプトを使用して、これらのファイルの妥当性を検査する必要があります。check スクリプトが正常に動作する場合、rules.ok ファイルが作成されます。rules.ok は rules ファイルの生成バージョンであり、JumpStart プログラムによって Solaris ソフトウェアのインストールに使用されます。

---

## JumpStart プログラムが Solaris ソフトウェアをインストールする方法

rules ファイルとプロファイルの検証が終わると、カスタム JumpStart インストールを開始できます。JumpStart プログラムは、rules.ok ファイルを読み取ります。続いて、Solaris ソフトウェアがインストールされるシステムに一致するシステム属性を持つ最初のルールを検索します。一致するルールが見つかったら、JumpStart プログラムはそのルール内に指定されているプロファイルを使用してシステムに Solaris ソフトウェアをインストールします。

図 22-1 は、ネットワークに接続されていないスタンドアロン型のシステムでカスタム JumpStart インストールがどのように行われるかを示しています。この例では、システム管理者は Pete のシステムでカスタム JumpStart インストールを開始しています。JumpStart プログラムは、システムのコピーディスクドライブに挿入されているコピーディスク上の rules ファイルにアクセスし、rule 2 をシステムに対応付けます。rule 2 には、JumpStart プログラムが Pete のプロファイルを使用して Solaris ソフトウェアをインストールするように指定されています。JumpStart プログラムは、Pete のプロファイルを読み取り、このプロファイル内に指定されている指示にもとづいて Solaris ソフトウェアをインストールします。

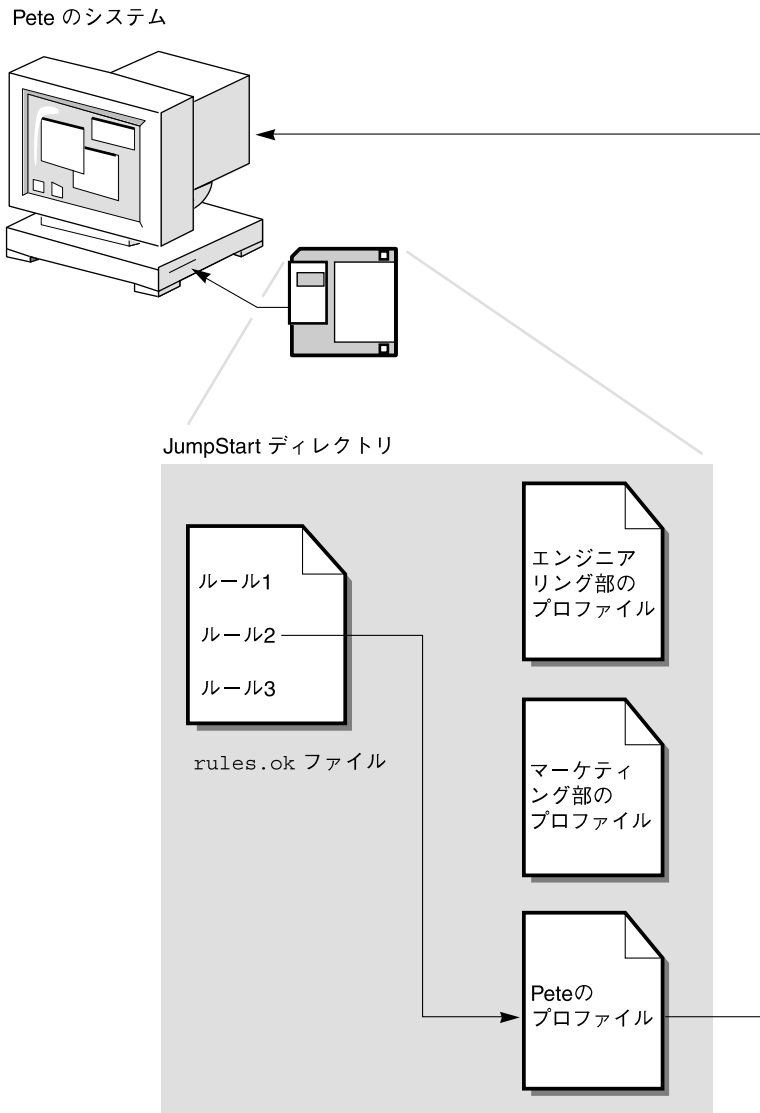


図 22-1 カスタム JumpStart インストールの動作: ネットワークに接続されていないシステムの例

図 22-2 は、ネットワーク上の複数のシステムが存在する場合にカスタム JumpStart インストールがどのように行われるかを示しています。すでに個別のプロファイルが設定され、1 台のサーバーにまとめて保存されています。システム管理者は、エンジニアリング部のシステムの中の 1 台でカスタム JumpStart インストールを開始します。JumpStart プログラムは、サーバー上の JumpStart/ ディレクトリに存在する rules ファイルにアクセスします。JumpStart プログラムは、エンジニアリング部のシ

システムを rule 1 に対応付けます。rule 1 には、JumpStart プログラムがエンジニアリング部のプロファイルを使用してSolaris ソフトウェアをインストールするように指定されています。JumpStart はエンジニアリング部のプロファイルを読み取り、このプロファイル内に指定されている指示にもとづいて Solaris ソフトウェアをインストールします。

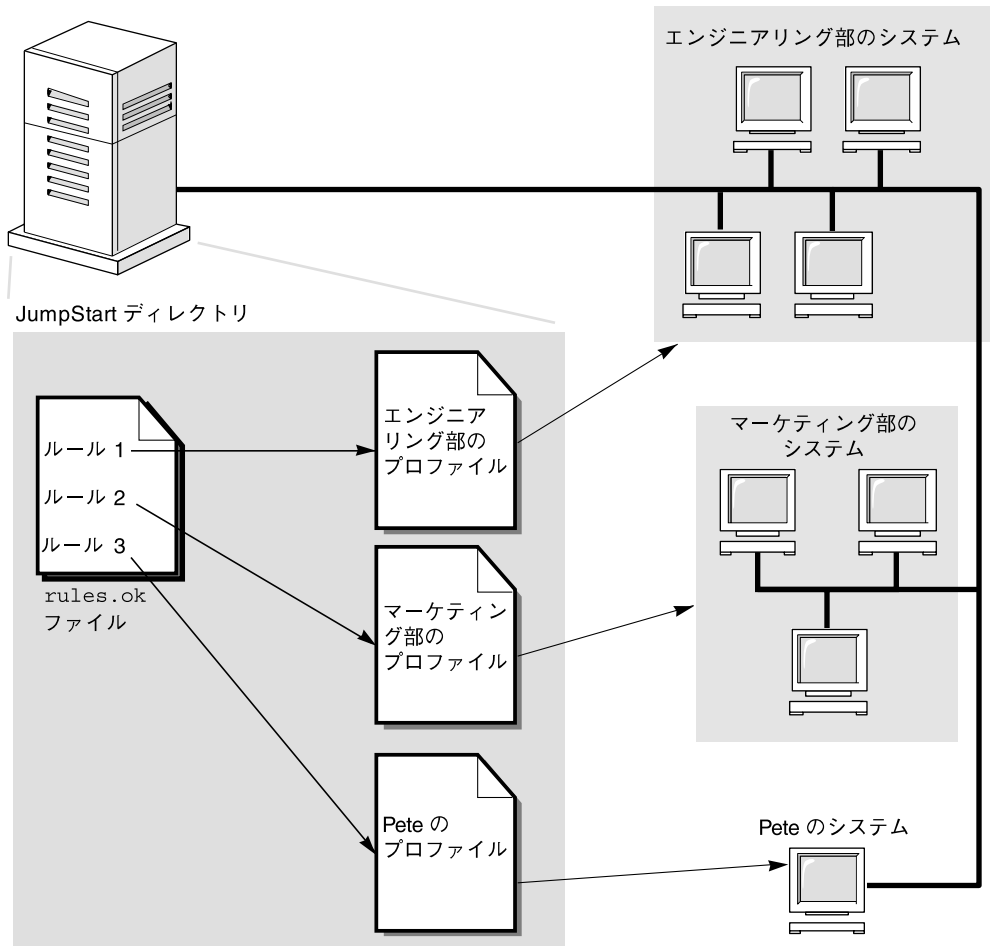


図 22-2 カスタム JumpStart インストールの動作: ネットワークに接続されているシステムの例

図 22-3 は、JumpStart プログラムがカスタム JumpStart ファイルを検索する順番を示しています。

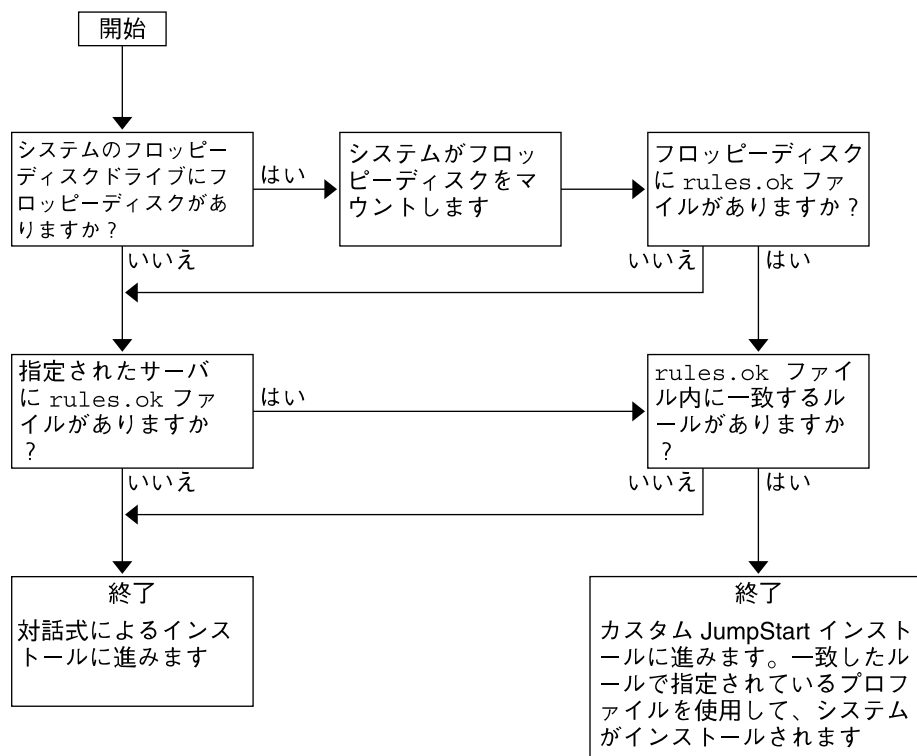


図 22-3 カスタム JumpStart インストール実行時の流れ

## 第 23 章

---

# カスタム JumpStart インストールの準備

---

この章では、カスタム JumpStart インストールを使用して、各サイトのシステムに Solaris 9 ソフトウェアをインストールするために必要な準備の手順について説明します。

- 216 ページの「作業マップ: カスタム JumpStart インストールの準備」
- 217 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」
- 221 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」
- 227 ページの「rules ファイルの作成」
- 230 ページの「プロファイルの作成」
- 235 ページの「プロファイルのテスト」
- 239 ページの「rules ファイルの妥当性を検査する」

## 作業マップ: カスタム JumpStart インストールの準備

表 23-1 作業マップ: カスタム JumpStart インストールの準備

作業	説明	参照先
旧バージョンの Solaris ソフトウェアがシステム上にインストールされている場合は、システムをアップグレードする方法を決定する	システムに以前の Solaris リリースがインストールされている場合は、システムをどのようにアップグレードするかを決める必要があります。システムアップグレードの前と後に実施すべき作業を明確にしておいてください。計画を立てることによって、プロファイル、begin スクリプト、finish スクリプトなどの作成が容易になります。	第 8 章
JumpStart ディレクトリを作成する	<p>サーバーの場合</p> <p>ネットワーク接続されたシステムに対してカスタマイズ JumpStart インストールを実行する場合は、プロファイルサーバーを作成する必要があります。プロファイルサーバーには、カスタム JumpStart ファイル用の JumpStart ディレクトリが入っています。</p> <p>フロッピーディスクの場合</p> <p>ネットワークに接続されていないシステムに対して JumpStart インストールを実行する場合は、プロファイルフロッピーディスクを作成する必要があります。プロファイルフロッピーディスクには、カスタム JumpStart ファイルが入っています。</p>	<p>217 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」</p> <p>221 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」</p>
ルールを rules ファイルに追加する	各システムグループまたは単一のシステムをどのようにインストールするか決定した後で、インストールする各グループに対してルールを作成します。各ルールは、1 つ以上のシステム属性に基づいてグループを識別し、それぞれのグループを 1 つのプロファイルにリンクします。	227 ページの「rules ファイルの作成」



表 23-1 作業マップ: カスタム JumpStart インストールの準備 (続き)

作業	説明	参照先
ルールごとにプロファイルを作成する	プロファイルは、どのように Solaris ソフトウェアをシステムにインストールするか (たとえば、どのソフトウェアグループをインストールするか) を定義するテキストファイルです。すべてのルールはプロファイルを指定して、ルールが一致したときにシステムがどのようにインストールされるかを定義します。通常は、ルールごとに異なるプロファイルを作成しますが、複数のルールで同じプロファイルを使用することも可能です。	230 ページの「プロファイルの作成」
(省略可能) プロファイルをテストする	プロファイルの作成後、pfinstall (1M) コマンドを使用すれば、プロファイルを使用してシステムをインストールまたはアップグレードする前に、プロファイルをテストできます。	235 ページの「プロファイルのテスト」
rules ファイルの妥当性を検査する	rules.ok ファイルは、rules ファイルから生成されたファイルで、JumpStart プログラムがプロファイルを使用してインストールするシステムを一致させるために使用されます。rules ファイルの妥当性を検査するには、check スクリプトを使用する必要があります。	239 ページの「rules ファイルの妥当性を検査する」

## ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成

ネットワーク上のシステム用にカスタム JumpStart インストールを設定する際は、サーバー上に JumpStart ディレクトリと呼ばれるディレクトリを作成する必要があります。JumpStart ディレクトリには、重要なカスタム JumpStart ファイル (rules ファイル、rules.ok ファイル、プロファイルなど) がすべて置かれます。JumpStart ディレクトリは、プロファイルサーバーのルート (/) ディレクトリに作成する必要があります。

JumpStart ディレクトリを持つサーバーは、「プロファイルサーバー」と呼びます。プロファイルサーバーは、インストールサーバーまたはブートサーバーと同じにすることも、あるいは全く異なるサーバーとすることもできます。プロファイルサーバーは、異なるプラットフォームのシステムにもカスタム JumpStart ファイルを提供できます。たとえば、x86 サーバーは、SPARC システムと x86 システムの両方に、カスタム JumpStart ファイルを提供できます。

---

注 - プロファイルサーバーの作成後、システムがそのサーバーにアクセスできるように設定する必要があります。詳細は、220 ページの「すべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする方法」を参照してください。

---

## ▼ JumpStart ディレクトリをサーバー上に作成する方法

---

注 - この手順では、システムがボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、Solaris 9 System Administrator Collection に含まれている『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. **JumpStart** ディレクトリを作成するサーバーに、スーパーユーザーとしてログインします。

2. サーバーに **JumpStart** ディレクトリを作成します。

```
# mkdir -m 755 jumpstart_dir_path
```

*jumpstart\_dir\_path* は、JumpStart ディレクトリの絶対パスです。

たとえば、次のコマンドは、ルートファイルシステムに *jumpstart* というディレクトリを作成し、アクセス権を 755 に設定します。

```
# mkdir -m 755 /jumpstart
```

3. **/etc/dfs/dfstab** ファイルを編集します。次のエントリを追加してください。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 jumpstart_dir_path
```

たとえば、次のエントリは **/jumpstart** ディレクトリを共有します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /jumpstart
```

4. **shareall** と入力して **Enter** を押します。

5. サンプルのカスタム **JumpStart** ファイルを **JumpStart** ディレクトリにコピーするかどうかを決定します。

- コピーしない場合は、手順 8 へ進みます。

- コピーする場合は、次の表を利用して次に行う作業を決定します。

例のコピー元	手順
プラットフォームに対応した Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD	サーバーの CD-ROM ドライブに、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD を挿入します。 ボリュームマネージャが自動的に CD をマウントします。
ローカルディスク上で使用されているプラットフォーム用の Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD	Solaris 9 DVD イメージまたは Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 イメージが配置されている場所にディレクトリを移動します。コマンド例を示します。 cd /export/install

6. サンプルのカスタム **JumpStart** ファイルを、プロファイルサーバーの **JumpStart** ディレクトリにコピーします。

```
# cp -r media_path/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* jumpstart_dir_path
```

<i>media_path</i>	ディスク上の CD、DVD、またはイメージのパス。
<i>jumpstart_dir_path</i>	カスタム JumpStart ファイルの例を配置する、プロファイルサーバー上のパス。

たとえば、次のコマンドは、jumpstart\_sample ディレクトリをプロファイルサーバー上の /jumpstart ディレクトリにコピーします。

- SPARC システムの場合:

```
cp -r /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* /jumpstart
```

- x86 システムの場合:

```
cp -r /cdrom/cdrom0/s2/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* /jumpstart
```

7. サンプル **JumpStart** ファイルを更新し、それらのファイルがサイトの環境内で動作するようにします。
8. **JumpStart** ディレクトリの所有者が **root** で、そのアクセス権が **755** に設定されていることを確認します。
9. ネットワーク上のシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるように設定します。  
詳細は、220 ページの「すべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする方法」を参照してください。

## ▼ すべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする方法

プロファイルサーバーを作成する際に、システムがカスタム JumpStart インストール中にプロファイルサーバーにアクセスできるようにする必要があります。このためには、次の方法があります。

- `add_install_client` コマンド – ネットワークインストールでシステムを追加するたびに、`add_install_client` コマンドの `-c` オプションを使用します。手順の詳細は 123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。
- `boot` コマンド – システムのブート時にプロファイルサーバー上の JumpStart ディレクトリの場所を指定します。カスタム JumpStart 構成ファイルは、圧縮して 1 つのファイルにする必要があります。続いて、NFS サーバー、HTTP サーバー、またはシステムがローカルにアクセスできるメディアに圧縮されたその構成ファイルを保存します。詳細は、250 ページの「圧縮された構成ファイルの作成」を参照してください。  
システムをブートしてカスタム JumpStart インストールを開始する場合は、この圧縮ファイルの場所を指定してください。詳細は、SPARC システムについては 268 ページの「SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」の手順 5 を、x86 システムについては 272 ページの「x86: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」の手順 8 をそれぞれ参照してください。
- `/etc/bootparams` ファイル – `/etc/bootparams` ファイルでワイルドカードを使用します。`etc/bootparams` ファイルにワイルドカードを追加するには、以下の手順に従ってください。

---

注 – 以下の手順は、JumpStart ディレクトリをフロッピーディスクに保存する場合と、システムのブート時にプロファイルサーバーの場所を指定する場合は不要です。

---

この手順は、ネットワークインストール情報が `/etc/bootparams` ファイルに格納されている場合だけ有効です。ネットワークインストール情報は、次の場所に格納することもできます。

- ネームサービスデータベース – ネットワークインストール情報がネームサービスの `bootparams` データベースに格納されている場合は、手順 3 に示すエントリを `bootparams` データベースに追加する必要があります。
- DHCP サーバー – ネットワークインストール情報が DHCP サーバーに格納されている場合は、`boot` コマンドを使用してカスタム JumpStart が DHCP サーバーを使用するように指定する必要があります。詳細は、SPARC システムについては 268 ページの「SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」の手順 5 を、x86 システムについては 272 ページの「x86: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」の手順 8 をそれぞれ参照してください。

1. インストールサーバーまたはブートサーバーにスーパーユーザーとしてログインします。
2. テキストエディタを使用して `/etc/bootparams` を開きます。
3. 次のエントリを追加します。

```
* install_config=server:jumpstart_dir_path
```

\* 全てのシステムにアクセスできるように指定するワイルドカード文字

*server* JumpStart ディレクトリがあるプロファイルサーバーのホスト名

*jumpstart\_dir\_path* JumpStart ディレクトリの絶対パス

たとえば、次のエントリはすべてのシステムが、`sherlock` というサーバーにある `/jumpstart` ディレクトリにアクセスできるようにします。

```
* install_config=sherlock:/jumpstart
```



---

注意 – この手順を使用した場合、インストールクライアントを起動したときに次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
WARNING: getfile: RPC failed: error 5: (RPC Timed out).
```

このエラーメッセージの詳細は、460 ページの「ネットワークからのブート時のエラーメッセージ」を参照してください。

---

これで、すべてのシステムはプロファイルサーバーにアクセスできるようになりました。

---

## スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成

JumpStart ディレクトリを含むフロッピーディスクは、プロファイルフロッピーディスクと呼ばれます。ネットワークに接続されていないシステムには、プロファイルサーバーへのアクセス権はありません。このため、システムがネットワークに接続されていない場合はフロッピーディスク上に JumpStart ディレクトリを作成する必要があります。プロファイルフロッピーディスクを作成するシステムには、フロッピーディスクドライブが必要です。

JumpStart ディレクトリには、重要なカスタム JumpStart ファイル (rules ファイル、rules.ok ファイル、プロファイルなど) がすべて置かれます。JumpStart ディレクトリは、プロファイルフロッピーディスクのルート (/) ディレクトリに作成する必要があります。

## ▼ SPARC: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法

---

注 – この手順では、システムでボリュームマネージャがすでに動作しているものとします。ボリュームマネージャを使用せずにフロッピーディスク、CD、および DVD を管理する方法の詳細は、Solaris 9 System Administrator Collection に含まれている『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. フロッピーディスクドライブを持つ **SPARC** システムに、スーパーユーザーとしてログインします。
2. 空のフロッピーディスクまたは上書き可能なディスクをフロッピーディスクドライブに挿入します。
3. フロッピーディスクをマウントします。

```
# volcheck
```

4. フロッピーディスクに **UNIX** ファイルシステム (**UFS**) が含まれているかどうかを確認します。

システム上のファイル /etc/mnttab の内容を調べ、次のようなエントリがないか確認します。

```
/vol/dev/diskette0/scrap /floppy/scrap ufs suid,rw,largefiles,dev=1740008 927147040
```

- このようなエントリが存在する場合は、手順 7 へ進みます。
- エントリが存在しない場合は、次の手順へ進みます。

5. フロッピーディスクをフォーマットします。



---

注意 – この手順によって、フロッピーディスク上のデータはすべて消去されます。

---

```
# fdformat -U
```

6. フロッピーディスクに **UFS** ファイルシステムを作成します。

```
# newfs /vol/dev/aliases/floppy0
```

7. サンプルのカスタム **JumpStart** ファイルを **JumpStart** ディレクトリにコピーするかどうかを決定します。
  - コピーしない場合は、手順 10 へ進みます。
  - コピーする場合は、次の表を利用して次に行う作業を決定します。

例のコピー元	手順
Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)	サーバーの CD-ROM ドライブに Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) を挿入します。  ボリュームマネージャが自動的に CD をマウントします。
ローカルディスク上の SPARC 版 Solaris 9 ソフトウェアの Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) イメージ	Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) イメージの場所にディレクトリを移動させます。コマンド例を示します。  <code>cd /export/install</code>

8. サンプルのカスタム **JumpStart** ファイルを、プロファイルフロッピーディスクの **JumpStart** ディレクトリにコピーします。

```
# cp -r media_path/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* jumpstart_dir_path
```

<i>media_path</i>	ディスク上の CD、DVD、またはイメージのパス。
<i>jumpstart_dir_path</i>	カスタム <b>JumpStart</b> のサンプルファイルを置くプロファイルフロッピーディスクのパス。

---

注 – すべてのカスタム **JumpStart** インストールファイルは、フロッピーディスクのルートディレクトリに置かれている必要があります。

---

たとえば、次のコマンドは、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD の `jumpstart_sample` の内容を、プロファイルフロッピーディスク `scrap` のルート (/) ディレクトリにコピーします。

```
cp -r /cdrom/sol_9_sparc/s0/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* /floppy/scrap
```

9. プロファイルフロッピーディスク上の **JumpStart** ファイルの例を更新して、サイトの環境内で動作するようにします。
10. **JumpStart** ディレクトリの所有者が `root` で、そのアクセス権が `755` に設定されていることを確認します。
11. フロッピーディスクを取り出します。

```
# eject floppy
```

これで、プロファイルフロッピーディスクの作成が完了しました。rules ファイルを更新して、プロファイルフロッピーディスクにプロファイルを作成して、カスタム JumpStart インストールを実行できます。処理を続けるには、227 ページの「rules ファイルの作成」へ進んでください。

## ▼ x86: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法

---

注 - この手順では、システムがボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにフロッピーディスク、CD、および DVD を管理する方法の詳細は、Solaris 9 System Administrator Collection に含まれている『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. フロッピーディスクドライブを持つ x86 システムにスーパーユーザーとしてログインします。
2. **Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版)** をフロッピーディスクドライブ (通常はドライブ **A**) に挿入します。このフロッピーディスクは、プロファイルフロッピーディスクとして使用します。

---

**x86 のみ** - ブートフロッピーディスクソフトウェアのアクセス

は、[http://soldc.sun.com/support/drivers/dcs\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dcs_diskettes) の「Solaris Developer Connection」からこのソフトウェアをフロッピーディスクにダウンロードしてコピーすることによって行えます。

---

3. フロッピーディスクをマウントします。

```
# volcheck
```

4. **Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助)** イメージをシステムのハードディスクにコピーします。

```
# dd if=/vol/dev/aliases/floppy0 of=boot_image
```

ここで *boot\_image* は、Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のイメージをコピーするファイル名を示します。絶対パス名を指定できます。

たとえば次のコマンドは、ブートフロッピーディスクを *boot\_save* ファイルにコピーします。

```
dd if=/vol/dev/aliases/floppy0 of=boot_save
```

5. 「ファイル・マネージャ (File Manager)」ウィンドウの「取り出し (Eject Disk)」をクリックするか、コマンド行に **eject floppy** と入力して、フロッピーディスクを



取り出します。

6. 「リムーバブルメディア・マネージャ (Removable Media Manager)」画面で「了解 (OK)」をクリックします。
7. **Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版)** を手動で取り出します。
8. 空のフロッピーディスクまたは上書き可能なディスクをフロッピーディスクドライブに挿入します。
9. フロッピーディスクをマウントします。  

```
# volcheck
```
10. フロッピーディスクをフォーマットします。



---

注意 – この手順によって、フロッピーディスク上のデータはすべて消去されます。

---

```
# fdformat -d -U
```

11. **Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助)** イメージを、システムのハードディスクからフォーマットしたフロッピーディスクにコピーします。  

```
# dd if=boot_image of=/vol/dev/aliases/floppy0
```

ここで *boot\_image* は、Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のイメージをコピーするファイル名を示します。絶対パス名を指定できます。
12. サンプルのカスタム **JumpStart** ファイルを **JumpStart** ディレクトリにコピーするかどうかを決定します。
  - コピーしない場合は、手順 15 へ進みます。
  - コピーする場合は、次の表を利用して次に行う作業を決定します。

例のコピー元	手順
Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)	サーバーの CD-ROM ドライブに、Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) を挿入します。 ボリュームマネージャが自動的に CD をマウントします。
ローカルディスク上の Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) のイメージ	Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) イメージが置かれたディレクトリに移動します。入力例を示します。 <pre>cd /export/install</pre>

13. サンプルのカスタム **JumpStart** ファイルを、プロファイルフロッピーディスクの **JumpStart** ディレクトリにコピーします。

```
# cp -r media_path/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* jumpstart_dir_path
```

<i>media_path</i>	ディスク上の CD、DVD、またはイメージのパス。
<i>jumpstart_dir_path</i>	カスタム JumpStart のサンプルファイルを置くプロファイルフロッピーディスクのパス。

---

注 – プロファイルフロッピーディスクを使用するときは、すべてのカスタム JumpStart インストールファイルは、フロッピーディスクのルートディレクトリに置かれている必要があります。

---

たとえば、次のコマンドは、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) の `jumpstart_sample` の内容を、プロファイルフロッピーディスク `scrap` のルート (/) ディレクトリにコピーします。

```
cp -r /cdrom/sol_9_x86/s2/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample/* /floppy/scrap
```

14. プロファイルフロッピーディスク上の **JumpStart** ファイルの例を更新して、サイトの環境内で動作するようにします。
15. **JumpStart** ディレクトリの所有者が **root** で、そのアクセス権が **755** に設定されていることを確認します。
16. 「ファイル・マネージャ (**File Manager**)」ウィンドウの「取り出し (**Eject Disk**)」をクリックするか、コマンド行に **eject floppy** と入力して、フロッピーディスクを取り出します。
17. 「リムーバブルメディア・マネージャ (**Removable Media Manager**)」画面で「了解 (**OK**)」をクリックします。
18. フロッピーディスクを手動で取り出します。

これで、プロファイルフロッピーディスクの作成が完了しました。rules ファイルを更新して、プロファイルフロッピーディスクにプロファイルを作成して、カスタム JumpStart インストールを実行できます。処理を続けるには、227 ページの「rules ファイルの作成」へ進んでください。

---

## rules ファイルの作成

rules ファイルは、Solaris オペレーティング環境のインストール先となる各システムグループのルールを含むテキストファイルです。各ルールは1つ以上のシステム属性にもとづいてシステムグループを識別し、各グループをプロファイルにリンクします。プロファイルは、グループ内の各システムに Solaris ソフトウェアをどのようにインストールするかを示したテキストファイルです。たとえば、次のルールは JumpStart プログラムが basic\_prof プロファイル内の情報を使用し、sun4u プラットフォームグループを持つすべてのシステムに対してインストールを実行することを示します。

```
karch sun4u - basic_prof -
```

rules ファイルを使用して、カスタム JumpStart インストールに必要な rules.ok ファイルを作成します。

---

注 - 221 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」または 217 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」の手順にしたがって JumpStart ディレクトリを設定した場合は、JumpStart ディレクトリに rules ファイルのサンプルがあります。rules ファイルのサンプルには、説明といくつかのルール例があります。サンプルの rules ファイルを利用する場合は、使用しないルール例は必ずコメントにしておいてください。

---

## rules ファイルの構文

rules ファイルは、次のように作成する必要があります。

- ファイルには rules という名前を割り当てる。
- ファイルには1つ以上のルールを含める。

rules ファイルには、次の要素を任意に含めることができます。

- コメント  
行の # 記号の後に含まれるテキストは、JumpStart によってコメントとして扱われます。行が # 記号で始まる場合は、行全体がコメントとして扱われます。
- 1行以上の空白行
- 1つまたは複数の複数行ルール  
1つのルールを新しい行に続けるには、Return キーを押す直前に、バックslash文字 (\) を含めます。

## ▼ rules ファイルを作成する方法

1. テキストエディタを使用して **rules** というテキストファイルを作成するか、あるいは作成済みの **JumpStart** ディレクトリからサンプル **rules** ファイルを開きます。
2. **Solaris** ソフトウェアのインストール先となるシステムグループごとに **1** つのルールを **rules** ファイルに追加します。  
rules ファイルのキーワードと値の一覧は、287 ページの「ルールキーワードと値の説明」を参照してください。  
rules ファイル内のルールは、次の構文に従っている必要があります。

```
[!]rule_keyword rule_value [&& [!]rule_keyword rule_value] ... begin profile finish
```

表 23-2 ルールの構文要素

要素	説明
!	ルールキーワードの前で使用し、否定を示す記号
<i>rule_keyword</i>	これは、ホスト名 (hostname) やメモリーサイズ (memsize) などの一般的なシステム属性を記述する事前定義された字句単位または語。 <i>rule_keyword</i> は、同じ属性を持つシステムを 1 つのプロファイルに対応させるためにルール値と共に使用される。ルールキーワードの一覧は、287 ページの「ルールキーワードと値の説明」を参照してください。
<i>rule_value</i>	対応するルールキーワードに特定のシステム属性を与える値。ルール値の一覧は、287 ページの「ルールキーワードと値の説明」を参照
&&	ルールキーワードとルール値のペアを同じルールで結合する (論理積をとる) ときに使用する記号。カスタム JumpStart インストール時に、システムがルール内のすべてのペアに一致しなければ、ルールの一致は成立しない
<i>begin</i>	インストール開始前に実行される Bourne シェルスクリプト名。 <i>begin</i> スクリプトがない場合、このフィールドにマイナス記号 (-) を指定する必要がある。 <i>begin</i> スクリプトはすべて、JumpStart ディレクトリになければならない。  <i>begin</i> スクリプトの作成方法の詳細は、243 ページの「 <i>begin</i> スクリプトの作成」を参照
<i>profile</i>	テキストファイル名。システムがルールに一致したとき Solaris ソフトウェアがシステムにどのようにインストールされるかを定義している。プロファイル内の情報は、プロファイルキーワードと、それらに対応するプロファイル値から構成される。すべてのプロファイルは JumpStart ディレクトリになければならない。  注 - プロファイルフィールドについては、別の使用方法もあります。詳細は、256 ページの「サイト固有のインストールプログラムの使用」と 244 ページの「 <i>begin</i> スクリプトによる動的プロファイルの作成」を参照してください。

表 23-2 ルールの構文要素 (続き)

要素	説明
<i>finish</i>	インストール終了後に実行される Bourne シェルスクリプト名。finish スクリプトがない場合、このフィールドにマイナス記号 (-) を指定する必要がある。finish スクリプトはすべて、JumpStart ディレクトリになければならない。  finish スクリプトの作成方法の詳細は、245 ページの「finish スクリプトの作成」を参照

各ルールには、少なくとも次の要素を含める必要があります。

- キーワード、値、および対応するプロファイル
- *begin* および *finish* フィールド内のマイナス記号 (-) (*begin* および *finish* スクリプトが指定されない場合)

3. **rules** ファイルを **JumpStart** ディレクトリに保存します。

4. **root** が **rules** ファイルを所有していて、そのアクセス権が **644** に設定されていることを確認します。

## rules ファイルの例

次のサンプルファイルは、rules ファイル内のルールをいくつか示しています。各行には、ルールキーワードとそのキーワードに有効な値があります。JumpStart プログラムは、rules ファイルを上から下へ走査します。

ルールキーワードと値を既知のシステムに対応付けることができた場合、JumpStart プログラムは **profile** フィールドに示されているプロファイルによって指定されている Solaris ソフトウェアをインストールします。

例 23-1 rule ファイル

```
# rule keywords and rule values      begin script      profile      finish script
# -----
hostname eng-11                      -              basic_prof   -
network 192.43.34.0 && !model \
'SUNW,SPARCstation-20'2              -              net_prof     -
model SUNW,SPARCstation-LX3         -              lx_prof      complete
network 193.144.2.0 && karch i86pc  setup4          x86_prof     done
memsize 64-128 && arch i3865         -              prog_prof    -
any6 -                               -              generic_prof -
```

1. このルールは、システムのホスト名が `eng-1` の場合に一致します。basic\_prof プロファイルは、ルールに一致するシステムに Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。
2. このルールは、システムがサブネットワーク 192.43.34.0 にあって、SPARCstation™ 20 (SUNW, SPARCstation-20) ではない場合に一致します。net\_prof プロファイルは、このルールに一致するシステムに Solaris ソフトウェアをインストールする

#### 例 23-1 rule ファイル (続き)

ために使用されます。このルールは、227 ページの「rules ファイルの構文」に説明されているルールラップの例も示しています。

3. このルールは、システムが SPARCstation LX である場合に一致します。lx\_prof プロファイルと complete 終了スクリプトは、このルールに一致するシステムに Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。
4. このルールは、システムが 193.144.2.0 にあって、x86 ベースのシステムである場合に一致します。setup 開始スクリプト、x86\_prof プロファイル、および done 終了スクリプトは、このルールに一致するシステムに Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。
5. このルールは、システムに 64 ~ 128M バイトのメモリーがあって、x86 システムである場合に一致します。prog\_prof プロファイルは、このルールに一致するシステムに Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。
6. このルールは、上記のルールに一致しなかったすべてのシステムに一致します。generic\_prof プロファイルは、このルールに一致するシステムに Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。any を使用する場合は、この値を常に rules ファイルの最後のファイルとして使用する必要があります。

---

## プロファイルの作成

プロファイルは、システムに Solaris ソフトウェアをインストールする方法を示したテキストファイルです。プロファイルには、インストール要素 (インストールするソフトウェアグループなど) を指定します。各ルールには、システムのインストール方法を示すプロファイルを指定します。プロファイルは、ルールごとに異なるものを作成しても、複数のルールに同じものを使用しても構いません。

プロファイルは、1 つまたは複数のプロファイルキーワードとそれらの値から構成されます。各プロファイルキーワードは、JumpStart プログラムがどのようにしてシステムに Solaris ソフトウェアをインストールするかを制御するコマンドです。たとえば、次のプロファイルキーワードと値は、JumpStart プログラムがシステムをサーバーとしてインクルードすることを指定しています。

```
system_type server
```

---

注 - 217 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」または 221 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」の手順を使用して JumpStart ディレクトリを作成した場合、プロファイルのサンプルが JumpStart ディレクトリにあります。

---

## プロファイルの構文

プロファイルには次の要素を含める必要があります。

- 最初のエントリが `install_type` プロファイルキーワードであること
- キーワードは1行に1つだけであること
- アップグレードされるシステムが、アップグレードできるルートファイルシステムを複数持っている場合は、`root_device` キーワード

プロファイルには以下の要素を含めることができます。

- コメント  
行の # 記号の後に含まれるテキストは、JumpStart によってコメントとして扱われます。行が # 記号で始まる場合は、行全体がコメントとして扱われます。
- 1行以上の空白行

## ▼ プロファイルを作成する方法

1. テキストエディタを使用してテキストファイルを作成し、わかりやすい名前を付けます。または、作成した **JumpStart** ディレクトリ内のサンプルプロファイルを開きます。

---

注 – プロファイルの名前は、システムに Solaris ソフトウェアをインストールするためにそのプロファイルをどのように使用するかを示すものにしてください。(例: `basic_install`、`eng_profile`、`user_profile`)。

---

2. プロファイルにプロファイルキーワードと値を追加します。  
プロファイルのキーワードと値の一覧は、292 ページの「プロファイルキーワードと値」を参照してください。

---

注 – プロファイルキーワードとプロファイル値には、大文字と小文字の区別がありません。

---

3. **JumpStart** ディレクトリにプロファイルを保存します。
4. プロファイルの所有者が `root` で、そのアクセス権が `644` に設定されていることを確認します。
5. (省略可能) プロファイルをテストします。  
プロファイルのテストに関する情報については、235 ページの「プロファイルのテスト」を参照してください。

## プロファイルの例

次のサンプルプロファイルは、さまざまなプロファイルキーワードとプロファイル値を使用して、Solaris ソフトウェアをシステムにどのようにインストールするかを指定する方法を示しています。292 ページの「プロファイルキーワードと値」には、プロファイルキーワードと値の説明を示してあります。

### 例 23-2 リモートファイルシステムのマウントとパッケージの追加および削除

```
# profile keywords      profile values
# -----
install_type           initial_install1
system_type            standalone2
partitioning           default3
filesys                any 512 swap # specify size of /swap
cluster                SUNWCprog4
package               SUNWman delete5
cluster                SUNWCacc
```

1. `install_type` キーワードは、すべてのプロファイルに必要です。
2. `system_type` キーワードは、システムをスタンドアロンシステムとしてインストールするように定義します。
3. ファイルシステムスライスは、インストールするソフトウェアごとに `default` 値を使用して決定されます。`swap` は 512M バイトに設定され、値 `any` に基づいてすべてのディスクにインストールされます。
4. 「開発者システムサポートソフトウェアグループ」(SUNWCprog) がシステムにインストールされます。
5. 標準のマニュアルページはネットワークのファイルサーバー (`s_ref`) からマウントされるため、マニュアルページパッケージはシステムにインストールされません。ただし、System Accounting ユーティリティが入ったパッケージはシステムにインストールされます。

### 例 23-3 ファイルシステムのインストール場所の指定

```
# profile keywords      profile values
# -----
install_type           initial_install
system_type            standalone
partitioning           explicit1
filesys                c0t0d0s0 auto /
filesys                c0t3d0s1 auto swap
filesys                any auto usr
cluster                SUNWCall2
```

1. `partitioning` の値が `explicit` であるため、ファイルシステムスライスは、`filesys` キーワードによって指定します。ルート (/) のサイズは、値 `auto` により選択したソフトウェア (値 `auto`) に基づいて自動的に設定されて `c0t0d0s0` にインストールされます。`swap` も同様に、必要なサイズに設定された上で `c0t3d0s1` 上にインストールされます。`usr` は、値 `any` により選択したソフト



例 23-3 ファイルシステムのインストール場所の指定 (続き)

ウェアに基づきインストールプログラムによってインストール先が決定されます。

2. Entire Solaris Software Group (SUNWCa11) がシステムにインストールされます。

例 23-4 x86: fdisk キーワードの使用法

```
# profile keywords      profile values
# -----
install_type           initial_install
system_type            standalone

fdisk                  c0t0d0 0x04 delete1
fdisk                  c0t0d0 solaris maxfree2
cluster                SUNWCa113
cluster                SUNWCacc delete4
```

1. タイプ DOSOS16 (04 16 進) の fdisk パーティションはすべて、c0t0d0 ディスクから削除されます。
2. Solaris fdisk パーティションが、c0t0d0 ディスク上の最大の連続空き領域に作成されます。
3. 全体ディストリビューションソフトウェアグループ (SUNWCa11) がシステムにインストールされます。
4. システムアカウントユーティリティ (SUNWCacc) は、システムにインストールされません。

例 23-5 アップグレード用ディスク容量の再配置

```
# profile keywords      profile values
# -----
install_type           upgrade1
root_device            c0t3d0s22
backup_media           remote_filesystem timber:/export/scratch3
layout_constraint      c0t3d0s2 changeable 1004
layout_constraint      c0t3d0s4 changeable
layout_constraint      c0t3d0s5 movable
package                SUNWbcp delete5
package                SUNWxwman add6
cluster                SUNWCacc add
locale                 de7
```

1. このプロファイルは、ディスク容量を再配置することによってシステムをアップグレードします。この例では、システム上のファイルシステムのいくつかにアップグレード用の容量が十分でないため、ディスク容量領域を再配置する必要があります。
2. c0t3d0s2 のルートファイルシステムがアップグレードされます。
3. リモートシステム timber が、ディスク容量の再配置中のデータのバックアップに使用されます。backup\_media キーワード値の詳細は、298 ページの「backup\_media プロファイルキーワード」を参照してください。
4. layout\_constraint キーワードは、アップグレードのためにディスク領域の再配置を行う時に自動レイアウトが以下のことを実施できることを示します。

例 23-5 アップグレード用ディスク容量の再配置 (続き)

- スライス 2 と 4 を変更する。これらのスライスはほかの場所へ移動が可能であり、サイズも変更できます。
  - スライス 5 を移動する。スライスをほかの場所へ移動することはできますが、そのサイズを変更することはできません。
5. バイナリ互換パッケージ (SUNWbcp) は、アップグレード後、システムにインストールされません。
  6. このコードは、X Window System のマニュアルページと、System Accounting ユーティリティがまだシステムにインストールされていない場合に、インストールされるようにするものです。すでにシステム上にあるすべてのパッケージが自動的にアップグレードされます。
  7. ドイツ語ローカライズパッケージがシステムにインストールされます。

例 23-6 HTTP サーバーから フラッシュアーカイブを取得する

次のプロファイル例は、カスタム JumpStart プログラムが HTTP サーバーからフラッシュアーカイブを取り出すことを示しています。

```
install_type flash_install1
archive_location http installserver /flasharchive/solaris9archive2
partitioning explicit3
filesys c0t1d0s0 4000 /
filesys c0t1d0s1 512 swap
filesys c0t1d0s7 free /export/home
```

1. このプロファイルにより、フラッシュアーカイブがクローンシステムにインストールされます。すべてのファイルは、初期インストールにより上書きされます。
2. フラッシュアーカイブは、HTTP サーバーから取得されます。
3. ファイルシステムスライスは、filesys キーワード (explicit 値) によって指定します。ルート (/) のサイズは選択したソフトウェアに基づいて設定され、c0t1d0s0 にインストールされます。swap は、必要なサイズに設定された上で c0t1d0s1 上にインストールされます。/export/home は、選択したソフトウェアに基づいて設定され、c0t1d0s7 にインストールされます。

例 23-7 NFS サーバーから フラッシュアーカイブを取得する

次のプロファイル例は、カスタム JumpStart プログラムが NFS サーバーからフラッシュアーカイブを取り出すことを示しています。flash\_update キーワードは、これが差分アーカイブであることを示します。差分アーカイブでは、2つのシステムイメージの相違部分のみがインストールされます。

```
install_type flash_update1
archive_location nfs installserver:/export/solaris/flasharchive/solaris9archive2
no_master_check3
root_device c0t0d0s64
```

1. このプロファイルは、フラッシュ差分アーカイブをクローンシステムにインストールします。アーカイブで指定されたファイルだけがインストールされます。

例 23-7 NFS サーバーから フラッシュアーカイブを取得する (続き)

2. フラッシュアーカイブは、NFS サーバーから取得されます。
3. クローンシステムは、有効なシステムイメージであるかどうかチェックされません。有効なシステムイメージが、元のマスターシステムを使用して構築されているはずです。
4. c0t0d0s6 上のルートファイルシステムが更新されることを意味しています。

---

## プロファイルのテスト

プロファイルを作成した後で、`pfinstall(1M)` コマンドを使用してプロファイル进行测试します。プロファイルのテストは、実際にプロファイルを使用してシステムのインストールまたはアップグレードを行う前に行なってください。プロファイルのテストは、ディスク容量を再配置するアップグレードプロファイルを作成する場合、特に有用です。

`pfinstall` が生成するインストール出力を調べることによって、意図するとおりにプロファイルが動作するかを簡単に調べることができます。たとえば、実際にシステムでアップグレードを行う前に、そのシステムが Solaris の新しいリリースにアップグレードするための十分なディスク容量を持っているかどうかをプロファイルで調べることができます。

`pfinstall` を利用すると、以下の要素に対してプロファイル进行测试できます。

- `pfinstall` を実行しているシステムのディスク構成
- その他のディスク構成。ディスクの構造 (ディスクのバイト/セクタ、フラグ、スライスなど) を示すディスク構成ファイルを使用します。ディスク構成ファイルの作成については、251 ページの「ディスク構成ファイルの作成」と 253 ページの「x86: ディスク構成ファイルを作成する方法」を参照してください。

---

注 - ディスク構成ファイルを使用して、システムのアップグレードに使用するプロファイル进行测试することはできません。代わりに、システムの実際のディスク構成およびシステムに現在インストールされているソフトウェアに対して、プロファイル进行测试する必要があります。

---

## ▼ 一時的な Solaris 9 環境を作成してプロファイル进行测试する方法

特定の Solaris リリースでプロファイルを正常かつ正確にテストするには、同じリリースの Solaris 環境内にあるプロファイル进行测试する必要があります。たとえば、Solaris 9 初期インストールプロファイル进行测试する場合は、Solaris 9 を実行しているシステムに対して `pfinstall` コマンドを実行する必要があります。

以下のどちらかの状況でプロファイル进行测试する場合は、一時的なインストール環境を作成する必要があります。

- 旧バージョンの Solaris ソフトウェアを使用しているシステム上で Solaris 9 のアップグレードプロファイル进行测试する場合。
- Solaris 9 の初期インストールプロファイル进行测试するための Solaris 9 システムをまだインストールしていない場合。

1. 次に示すメディアのいずれか 1 つのイメージからシステムをブートします。

- Solaris 9 DVD (SPARC 版)
- Solaris 9 DVD (x86 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)
- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)

---

注 - アップグレードプロファイル进行测试したい場合は、アップグレードするシステムをブートしてください。

---

2. システムを識別するための質問に答えます。

3. インストールプログラムを終了します。

- Solaris 9 DVD を使用している場合は、次のプロンプトに対して `!` を入力します。

```
Solaris Web Start will assist you in installing software for Solaris.  
<Press ENTER to continue> {"!" exits}
```

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD を使用している場合は、Solaris 9 オペレーティング環境をインストールするプログラムとして Solaris `suninstall` プログラムを選択します。表示される最初の画面で「Exit」を選択します。

4. このシェルから `pfinstall` コマンドを実行します。`pfinstall` コマンドの使用方法については、237 ページの「プロファイル进行测试する方法」の手順 7 を参照してください。

## ▼ プロファイルをテストする方法

1. プロファイルをテストするためのシステムを決定します。システムが、プロファイルを作成したシステムと同じプラットフォームタイプ (**SPARC** または **x86**) のシステムであることを確認してください。  
アップグレードプロファイルをテストする場合、アップグレードする実際のシステム上のプロファイルをテストしてください。
2. 次の表にもとづいて、次に行うことを決定します。

状態	手順
初期インストールプロファイルをテストする (Solaris 9 ソフトウェアが動作しているシステムがある場合)	そのシステムでスーパーユーザーになり、手順 5 へ進みます。
アップグレードプロファイルをテストする (初期インストールプロファイルをテストするための Solaris 9 が動作しているシステムがない場合)	一時的な Solaris 9 環境を作成し、プロファイル进行测试します。詳細は、236 ページの「一時的な Solaris 9 環境を作成してプロファイル进行测试する方法」を参照してください。続いて、手順 3 へ進みます。

3. 一時的なマウントポイントを作成します。

```
# mkdir /tmp/mnt
```

4. テストしたいプロファイル (1 つ以上) が入ったディレクトリをマウントします。

マウントするメディア	コマンド
リモート NFS ファイルシステムをマウントする (ネットワーク上のシステムの場合)	<code>mount -F nfs server_name:path /tmp/mnt</code>
SPARC:UFS フォーマットのフロッピーディスクをマウントする	<code>mount -F ufs /dev/diskette /tmp/mnt</code>
PCFS フォーマットのフロッピーディスクをマウントする	<code>mount -F pcfs /dev/diskette /tmp/mnt</code>

5. システムのメモリーサイズを指定してプロファイルをテストするには、**SYS\_MEMSIZE** に使用するメモリーサイズを **M** バイトで設定します。

```
# SYS_MEMSIZE=memory_size  
# export SYS_MEMSIZE
```

6. 手順 4 でディレクトリを

- マウントした場合は、/tmp/mnt にディレクトリを変更します。

```
# cd /tmp/mnt
```

- マウントしなかった場合は、プロファイルのある場所にディレクトリを変更します。通常は、JumpStart ディレクトリです。

```
# cd jumpstart_dir_path
```

## 7. **pfinstall (1M)** コマンドによってプロファイル进行测试します。

```
# /usr/sbin/install.d/pfinstall -D:-d disk_config_file [-c path] profile
```




---

注意 -d または -D オプションを指定してください。いずれかを指定しないと pfinstall は指定されたプロファイルを使用して Solaris 9 ソフトウェアをインストールします。その結果、システム上のデータがすべて上書きされます。

---

-D	pfinstall は、現在のシステムのディスク構成を使用してプロファイル进行测试します。アップグレードプロファイル进行测试する場合は、-D オプションを使用する必要があります。
-d <i>disk_config_file</i>	<p>pfinstall は、ディスク構成ファイル <i>disk_config_file</i> を使用してプロファイル进行测试します。pfinstall が動作しているディレクトリに <i>disk_config_file</i> が置かれていない場合は、パスを指定する必要があります。</p> <p>ディスク構成ファイルの作成方法については、251 ページの「ディスク構成ファイルの作成」を参照してください。</p> <p>注 - アップグレードプロファイル (<i>install_type</i> upgrade) で -d <i>disk_config_file</i> オプションを使用することはできません。常に、システムのディスク構成に対してアップグレードプロファイル进行测试する必要があります (つまり、-D オプションを使用する必要があります)。</p>
-c <i>path</i>	<p>Solaris 9 ソフトウェアイメージのパス。このオプションは、たとえば、システムでボリュームマネージャを使用して Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD を各自のプラットフォームにマウントする場合に使用します。</p> <p>注 - プラットフォーム対応の Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD イメージからブートした場合は、-c オプションは不要です。DVD または CD イメージは、ブート処理の一環として /cdrom 上にマウントされます。</p>
<i>profile</i>	テストするプロファイル名。 <i>profile</i> が pfinstall が実行されているディレクトリにない場合は、パスを指定する必要があります。

## プロファイルテストの例

次の例は、`pfinstall` を使用して `basic_prof` というプロファイル进行测试する方法を示しています。このテストは、Solaris 9 ソフトウェアがインストールされているシステム上のディスク構成に対して行われます。`basic_prof` プロファイルは、`/jumpstart` ディレクトリにあります。ボリュームマネージャを使用しているため、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) イメージへのパスが指定されています。

例 23-8 Solaris 9 システムによるプロファイルテスト

```
# cd /jumpstart
# /usr/sbin/install.d/pfinstall -D -c /cdrom/pathname basic_prof
```

次の例は、`pfinstall` を使用して Solaris 9 システム上の `basic_prof` というプロファイル进行测试する方法を示しています。`535_test` ディスク構成ファイルがテストされ、システムメモリーが 64M バイトあるか確認されます。また、この例で `pfinstall` は、`/export/install` ディレクトリにある Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) のイメージを使用します。

例 23-9 ディスク構成ファイルによるプロファイルテスト

```
# SYS_MEMSIZE=64
# export SYS_MEMSIZE
# /usr/sbin/install.d/pfinstall -d 535_test -c /export/install basic_prof
```

---

## rules ファイルの妥当性を検査する

`rules` ファイルとプロファイルは、`check` スクリプトを実行して、これらのファイルが正しく設定されていることを確認してからでないと使用できません。すべてのルールとプロファイルが有効な場合は、`rules.ok` ファイルが作成されます。このファイルは、カスタム JumpStart インストールソフトウェアがシステムをプロファイルと照合するために必要です。

表 23-3 に `check` スクリプトの動作を示します。

表 23-3 check スクリプトを使用した場合の動作

手順	説明
1	rules ファイルの構文検査を行う。  check は、ルールキーワードが正当かどうか、および各ルールに対して <i>begin</i> フィールド、 <i>class</i> フィールド、および <i>finish</i> フィールドが指定されているかどうかを確認する( <i>begin</i> および <i>finish</i> フィールドはファイル名でなくマイナス記号 (-) であることもある)。
2	rules ファイルにエラーがなければ、ルールに指定された各プロファイルの構文検査が行われる。
3	エラーがなければ、check スクリプトは rules ファイルから rules.ok ファイルを作成する。コメントと空白行をすべて削除し、すべてのルールを保持し、終わりに次のコメント行を追加する。  # version=2 checksum=num

## ▼ rules ファイルの妥当性を検査する方法

1. check スクリプトが **JumpStart** ディレクトリにあることを確認します。

---

注 – check スクリプトは、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD の Solaris\_9/Misc/jumpstart\_sample ディレクトリにあります。

---

2. **JumpStart** ディレクトリへ移動します。
3. check スクリプトを実行して **rules** ファイルの妥当性を検査します。

```
$ ./check [-p path -r file_name]
```

-p *path*

使用しているシステムの check スクリプトではなく Solaris 9 ソフトウェアイメージの check スクリプトを使用して rules を検証します。*path* は、ローカルディスク、マウントされた Solaris 9 DVD、または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD 上のイメージです。

システムが以前のバージョンの Solaris を実行している場合、このオプションを使用して、最新バージョンの check スクリプトを実行します。

-r *file\_name*

名前が rules 以外の rules ファイル名を指定します。このオプションを使用すると、rules ファイルに組み込む前にルールの妥当性を検査できます。



check スクリプトを実行すると、rules ファイルの有効性と各プロファイルの有効性の検査結果が表示されます。エラーが検出されないと、The custom JumpStart configuration is ok と表示されます。

4. **root** が **rules.ok** ファイルを所有していて、そのアクセス権が **644** に設定されていることを確認します。

rules ファイルの検証が完了したら、第 24 章でオプションのカスタム JumpStart 機能について参照してください。カスタム JumpStart インストールの実行については、第 26 章を参照してください。



## 第 24 章

---

# カスタム JumpStart オプション機能の使用

---

この章では、カスタム JumpStart インストールのオプション機能について説明します。

- 243 ページの「begin スクリプトの作成」
- 245 ページの「finish スクリプトの作成」
- 250 ページの「圧縮された構成ファイルの作成」
- 251 ページの「ディスク構成ファイルの作成」
- 256 ページの「サイト固有のインストールプログラムの使用」

---

注 - この章の手順は、カスタム JumpStart ファイルの提供に使用される SPARC サーバーと x86 サーバーの両方（「プロファイルサーバー」と呼ばれる）に利用できます。プロファイルサーバーは、異なるプラットフォームタイプのシステムにカスタム JumpStart ファイルを提供できます。たとえば、SPARC サーバーは、SPARC システムと x86 システムの両方に、カスタム JumpStart ファイルを提供できます。

---

---

## begin スクリプトの作成

「begin スクリプト」とは、ユーザーが定義する Bourne シェルスクリプトで、rules ファイル内で指定し、Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされる前に作業を実行します。begin スクリプトは、カスタム JumpStart インストールで Solaris をインストールするときのみ使用できます。

begin スクリプトは、次のような場合に使用してください。

- 動的プロファイルを作成する
- アップグレード前にファイルのバックアップをとる

## begin スクリプトに関する注意事項

- スクリプト内には、初期インストールまたはアップグレードインストール時に /a に対して行われるファイルシステムのマウントを妨げるような記述をしないでください。JumpStart プロファイルが /a にファイルシステムをマウントできない場合は、エラーが発生してインストールは失敗します。
- インストール時に、begin スクリプトの出力は /tmp/begin.log に格納されます。インストール完了後に、このログファイルは /var/sadm/system/logs/begin.log に出力先が変更されます。
- root が begin スクリプトを所有していて、そのアクセス権が 644 に設定されていることを確認します。
- begin スクリプト内では、カスタム JumpStart 環境変数を使用できます。環境変数の一覧は、320 ページの「カスタム JumpStart の環境変数」を参照してください。
- begin スクリプトは、JumpStart ディレクトリに保存してください。

## begin スクリプトによる動的プロファイルの作成

「動的プロファイル」とは、カスタム JumpStart インストール時に begin スクリプトが動的に作成するプロファイルです。動的プロファイルは、特定のシステムを1つのプロファイルに対応させる rules ファイルを設定できない場合に必要となります。たとえば、異なるハードウェア構成要素を持つ同一のシステムモジュール (異なるフレームバッファを持つシステムなど) には、動的プロファイルを使用する必要があります。

動的プロファイルを使用するルールの設定手順は次のとおりです。

- プロファイルの代わりに、プロファイルフィールドに等号 (=) を指定します。
- インストール対象のシステムに依存する動的プロファイルを作成する begin スクリプトを begin フィールドに指定します。

システムが、プロファイルフィールドに等号 (=) があるルールと一致すると、begin スクリプトは、システムに Solaris ソフトウェアをインストールするのに使用する動的プロファイルを作成します。

次に、毎回同じ動的プロファイルを作成する begin スクリプトの例を示します。もちろん、ルールの評価に応じて異なる動的プロファイルを生成する begin スクリプトも作成できます。

### 例 24-1 動的プロファイルを作成する begin スクリプト

```
#!/bin/sh
echo "install_type          initial_install"> ${SI_PROFILE}
echo "system_type          standalone">> ${SI_PROFILE}
echo "partitioning         default">> ${SI_PROFILE}
echo "cluster              SUNWCprog">> ${SI_PROFILE}
echo "package              SUNWman    delete">> ${SI_PROFILE}
echo "package              SUNWolman  delete">> ${SI_PROFILE}
```

例 24-1 動的プロファイルを作成する begin スクリプト (続き)

```
echo "package          SUNWxman    delete">> ${SI_PROFILE}
```

たとえば、begin スクリプトは、デフォルトで /tmp/install.input に設定されている動的プロファイル名に SI\_PROFILE 環境変数を使用する必要があります。

---

注 – begin スクリプトを動的プロファイルの作成に使用する場合は、スクリプトにエラーがないことを確認してください。動的プロファイルは、begin スクリプトが実行されてから作成されます。このため、check スクリプトで動的プロファイルの妥当性は検査されません。

---

## finish スクリプトの作成

「finish スクリプト」とは、ユーザーが定義する Bourne シェルスクリプトで、rules ファイル内で指定し、Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされた後、システムがリブートする前に作業を実行します。finish スクリプトは、カスタム JumpStart インストールで Solaris をインストールするときのみ使用できます。

finish スクリプトは、次のような作業に利用できます。

- ファイルの追加
- パッケージまたはパッチの追加
- ルート環境のカスタマイズ
- システムのルートパスワードの設定
- 追加ソフトウェアのインストール

## finish スクリプトに関する注意事項

- Solaris suninstall プログラムは、システムのファイルシステムを /a にマウントします。ファイルシステムは、システムがリブートするまで /a にマウントされています。したがって、/a にマウントされている新しくインストールされたファイルシステムの階層にファイルを追加、変更、または削除するように finish スクリプトを作成できます。
- インストール時に、finish スクリプトの出力は /tmp/finish.log に格納されます。インストール完了後に、このログファイルは /var/sadm/system/logs/finish.log に出力先が変更されます。
- finish スクリプトの所有者は root、アクセス権は 644 にしてください。
- finish スクリプト内では、カスタム JumpStart 環境変数を使用できます。環境変数の一覧は、320 ページの「カスタム JumpStart の環境変数」を参照してください。

- finish スクリプトは、JumpStart ディレクトリに保存してください。

## ▼ finish スクリプトでファイルを追加する方法

finish スクリプトにより、JumpStart ディレクトリにあるファイルをインストールされたシステムへ追加できます。これは、SI\_CONFIG\_DIR 変数で指定されるディレクトリ (デフォルトは /tmp/install\_config) に JumpStart ディレクトリがマウントされるためです。

---

注 - インストールされたシステムにすでに存在するファイルに、JumpStart ディレクトリからファイルをコピーして、ファイルを置換することもできます。

---

1. インストールされたシステムに追加するすべてのファイルを **JumpStart** ディレクトリにコピーします。
2. 新しくインストールされたファイルシステムの階層にコピーしたいファイルごとに、次の行を **finish** スクリプトに挿入します。

```
cp ${SI_CONFIG_DIR}/file_name /a/path_name
```

たとえば、自分のサイトのすべてのユーザーを対象に開発された特別なアプリケーション `site_prog` があると仮定します。site\_prog のコピーを JumpStart ディレクトリに置いた場合、finish スクリプト内の次の行は JumpStart ディレクトリからシステムの /usr/bin ディレクトリに site\_prog をコピーします。

```
cp ${SI_CONFIG_DIR}/site_prog /a/usr/bin
```

## finish スクリプトによるパッケージとパッチの追加

finish スクリプトを作成すると、Solaris ソフトウェアをシステムにインストールした後に、パッケージやパッチを自動的に追加できます。finish スクリプトを使用してパッケージを追加すると時間を節約できるだけでなく、サイトのさまざまなシステムにパッケージおよびパッチをインストールする上での整合性を維持できます。

pkgadd(1M) コマンドや patchadd(1M) コマンドを finish スクリプトで使用するとき、-R オプションを使用して、/a をルートパスとして指定する必要があります。

例 24-2 はパッケージを追加する finish スクリプトの例を示します。

例 24-2 finish スクリプトでパッケージを追加する

```
#!/bin/sh

BASE=/a
MNT=/a/mnt
ADMIN_FILE=/a/tmp/admin
```

例 24-2 finish スクリプトでパッケージを追加する (続き)

```
mkdir ${MNT}
mount -f nfs sherlock:/export/package ${MNT}1
cat>${ADMIN_FILE} <<DONT_ASK2
mail=root
instance=overwrite
partial=nocheck
runlevel=nocheck
idepend=nocheck
rdepend=nocheck
space=ask
setuid=nocheck
conflict=nocheck
action=nocheck
basedir=default
DONT_ASK

/usr/sbin/pkgadd -a ${ADMIN_FILE} -d ${MNT} -R ${BASE} SUNWxyz3
umount ${MNT}
rmdir ${MNT}
```

1. インストールするパッケージを含むサーバー上にディレクトリをマウントします。
2. 一時的なパッケージ管理ファイル `admin` を作成し、パッケージのインストール時に `pkgadd (1M)` コマンドがチェックも質問の表示も行わないようにします。この一時的なパッケージ管理ファイルは、パッケージの追加時に自動インストールを実施するために使用してください。
3. `-a` オプション (パッケージ管理ファイルを指定) と `-R` オプション (ルートパスを指定) を使用してパッケージを追加します。

---

注 - 以前は `finish` スクリプト環境では、`pkgadd` コマンドや `patchadd` コマンドとともに `chroot (1M)` コマンドが使用されていました。しかし、一部のパッケージやパッチには `-R` オプションが正しく動作しないものがあります。このような状況では、`chroot` コマンドを実行する前に `/a` ルートパスにダミーの `/etc/mnttab` ファイルを作成する必要があります。

`/etc/mnttab` ダミーファイルを作成するには、次の行を `finish` スクリプトに追加します。

```
cp /etc/mnttab /a/etc/mnttab
```

---

## finish スクリプトによるルート環境のカスタマイズ

finish スクリプトを使って、システムにインストールされたファイルをカスタマイズできます。たとえば、例 24-3 の finish スクリプトは、ルートディレクトリ内の .cshrc ファイルに情報を追加することによって、ルート環境をカスタマイズします。

例 24-3 finish スクリプトによるルート環境のカスタマイズ

```
#!/bin/sh
#
# Customize root's environment
#
echo "***adding customizations in /.cshrc"
test -f a/.cshrc || {
cat>> a/.cshrc <<EOF
set history=100 savehist=200 filec ignoreeof prompt="\$user@`uname -n`> "
alias cp cp -i
alias mv mv -i
alias rm rm -i
alias ls ls -FC
alias h history
alias c clear
unset autologout
EOF
}
```

## finish スクリプトによるシステムのルートパスワードの設定

Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされると、そのシステムはリブートします。ブートプロセス終了前に、システムはルートパスワードを入力するように求めてきます。パスワードを入力するまで、システムはブート処理を終了できません。

set\_root\_pw という finish スクリプトは、auto\_install\_sample ディレクトリに保存されます。この finish スクリプトは、プロンプトを表示することなく root パスワードを自動的に設定する方法を示します。このスクリプトを使えば、ルートパスワードの入力を待たずに、システムの最初のブートを終了できます。

例 24-4 finish スクリプトによるシステムのルートパスワードの設定

```
#!/bin/sh
#
#      @(#)set_root_pw 1.4 93/12/23 SMI
#
# This is an example Bourne shell script to be run after installation.
# It sets the system's root password to the entry defined in PASSWD.
# The encrypted password is obtained from an existing root password entry
# in /etc/shadow from an installed machine.
```



例 24-4 finish スクリプトによるシステムのルートパスワードの設定 (続き)

```
echo "setting password for root"

# set the root password
PASSWD=dKO5IBkSF42lw
#create a temporary input file1
cp /a/etc/shadow /a/etc/shadow.orig2

mv /a/etc/shadow /a/etc/shadow.orig
nawk -F: '{
    if ( $1 == "root" )3
        printf"%s:%s:%s:%s:%s:%s:%s:%s:%s\n", $1,passwd, $3, $4, $5, $6, $7, $8, $9
    else
        printf"%s:%s:%s:%s:%s:%s:%s:%s:%s\n", $1, $2, $3, $4, $5, $6, $7, $8, $9
}' passwd="$PASSWD" /a/etc/shadow.orig > /a/etc/shadow
#remove the temporary file
rm -f /a/etc/shadow.orig4
# set the flag so sysidroot won't prompt for the root password
sed -e 's/0 # root/1 # root/' ${SI_SYS_STATE}> /tmp/state.$$5
mv /tmp/state.$$ ${SI_SYS_STATE}
```

1. PASSWD 変数に、システムの /etc/shadow ファイルの既存のエントリから取得した暗号化されたルートパスワードを設定します。
2. /a/etc/shadow の一時入力ファイルを作成します。
3. \$PASSWD をパスワードフィールドとして使用して、新しくインストールしたシステム用の /etc/shadow ファイルにあるルートエントリを変更します。
4. 一時的な /a/etc/shadow ファイルを削除します。
5. 状態ファイルのエントリを 0 から 1 へ変更します。これによりユーザーはルートパスワードの入力を求められません。この状態ファイルには、SI\_SYS\_STATE 変数 (現在の値は /a/etc/.sysIDtool.state) を使用してアクセスします。この値の変更によってスクリプトで問題が発生することを防ぐには、必ず \$SI\_SYS\_STATE を使用してこのファイルを参照してください。ここに示されている sed コマンドでは、0 と 1 の後にタブ文字が入っています。

---

注 - finish スクリプトを使用してシステムのルートパスワードを設定した場合は、finish スクリプト内の暗号化されたパスワードからルートパスワードを解読されないように対策を講じてください。

---

## finish スクリプトを使用して Web Start インストールプログラムでソフトウェアをインストールする

finish スクリプトを使用すると、Solaris オペレーティング環境のインストールに続いてさらにソフトウェアをインストールできます。一部のソフトウェアプログラムは、インストール時に情報入力を求めるプロンプトを表示する Solaris Web Start プログラムでインストールできます。自動インストールを行うには、`-nodisplay` または `-noconsole` オプションを指定して Solaris Web Start プログラムを実行します。

表 24-1 Solaris Web Start オプション

オプション	説明
<code>-nodisplay</code>	GUI を使用せずにインストーラを実行します。 <code>-locales</code> オプションによってインストールが変更された場合を除き、デフォルトの製品インストールを使用してください。
<code>-noconsole</code>	対話形式のテキストコンソールデバイスを介さずにインストールを実行します。UNIX スクリプトで <code>-nodisplay</code> と共に使用すると便利です。

詳細は、`installer(1M)` のマニュアルページを参照してください。

## 圧縮された構成ファイルの作成

`add_install_client` コマンドを使用してカスタム JumpStart 構成ファイルの場所を指定する代わりに、システムのブート時に構成ファイルの場所を指定することができます。ただし、`boot` コマンドに指定できるファイル名は 1 つだけです。したがって、すべてのカスタム JumpStart 構成ファイルを 1 つのファイルに圧縮する必要があります。圧縮された構成ファイルの形式は、次のいずれかにしてください。

- `tar`
- `compress` で圧縮された `tar`
- `zip`
- `bzip` で圧縮された `tar`

### ▼ 圧縮された構成ファイルを作成する方法

1. プロファイルサーバー上の `JumpStart` ディレクトリに移動します。

```
# cd jumpstart_dir_path
```

2. 圧縮ツールを使って、すべてのカスタム **JumpStart** 構成ファイルを 1 つのファイルに圧縮します。

---

注 – 圧縮構成ファイルに相対パスを含めないでください。カスタム JumpStart 構成ファイルは、圧縮されたファイルと同じディレクトリに置かれている必要があります。

---

圧縮された構成ファイルには、次のファイルが含まれている必要があります。

- プロファイル
- rules
- rules.ok

圧縮された構成ファイルに、さらに `sysidcfg` ファイルを入れることもできます。

3. 圧縮された構成ファイルを **NFS** サーバー、**HTTP** サーバー、またはローカルハードディスク上に保存します。

## 圧縮された構成ファイルの例

次の例は、`tar` コマンドを使って、圧縮された構成ファイルを `config.tar` という名前で作成します。カスタム JumpStart 構成ファイルはすべて `/jumpstart` ディレクトリにあります。

例 24-5 圧縮された構成ファイルの作成

```
# cd /jumpstart
# tar -cvf config.tar *
a profile 1K
a rules 1K
a rules.ok 1K
a sysidcfg 1K
```

---

## ディスク構成ファイルの作成

この節では、単一ディスク構成ファイルまたは複数ディスク構成ファイルを作成する方法について説明します。ここで示す `sed` コマンドには、0 の後と 1 の後にタブ文字が入っています。`finish` スクリプトを使用してルートパスワードを設定した場合は、`finish` スクリプトの暗号化されたパスワードからルートパスワードを解読されないようにしてください。

## ▼ SPARC: ディスク構成ファイルの作成方法

1. テストするディスクを持つ **SPARC** システムを決定します。
2. スーパーユーザーになります。
3. 単一ディスク構成ファイルを作成するには、**prtvtoc (1M)** コマンドの出力をファイルに保存します。

```
# prtvtoc /dev/rdisk/device_name>disk_config_file
```

```
/dev/rdisk/device_name          システムのディスクのデバイス名。  
device_name は、cwtxdys2 または cxdys2 の  
形式にしてください。
```

```
disk_config_file                ディスク構成ファイルの名前
```

4. 複数のディスクに **Solaris** ソフトウェアをインストールするテストを
  - 実行しない場合は、ここで作業は終了です。
  - 実行する場合は、各ディスク構成ファイルを結合し、その出力を新しいファイルに保存します。

```
# cat disk_file1 disk_file2>multi_disk_config
```

新しいファイルは、次に示すように複数ディスク構成ファイルになります。

```
# cat 104_disk2 104_disk3 104_disk5>multi_disk_test
```

5. 前の手順で作成した複数のディスク構成ファイルにおいて、ディスクデバイス名のターゲット番号がそれぞれ
  - 固有である場合は、ここで作業は終了です。
  - 固有でない場合は、テキストエディタでファイルを開き、ターゲット番号を固有のものにします。

たとえば、次に示すように、異なるディスクデバイス名について同じターゲット番号 (t0) がファイルに含まれているとします。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

```
...
```

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

この場合は次のように、2 番目のターゲット番号を t2 に設定します。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

```
...
```

```
* /dev/rdisk/c0t2d0s2 partition map
```

## SPARC: ディスク構成ファイルの例

次の例では、104M バイトのディスクを持つ SPARC システムで、単一ディスク構成ファイル `04_test` を作成します。

例 24-6 SPARC: ディスク構成ファイルの作成

`prtvtoc` コマンドの出力を `04_test` という単一ディスク構成ファイルに保存します。

```
# prtvtoc /dev/rdisk/c0t3d0s2>04_test
```

`04_test` ファイルは、次のようになります。

```
* /dev/rdisk/c0t3d0s2 partition map
*
* Dimensions:
*   512 bytes/sector
*   72 sectors/track
*   14 tracks/cylinder
*   1008 sectors/cylinder
*   2038 cylinders*   2036 accessible cylinders
* Flags:
*   1: unmountable
*   10: read-only
*
*
* Partition  Tag  Flags      First      Sector      Last
* Partition  Tag  Flags      Sector    Count      Sector      Mount Directory
*   1         2    00          0        164304     164303     /
*   2         5    00          0       2052288     2052287
*   3         0    00     164304     823536     987839     /disk2/b298
*   5         0    00     987840     614880     1602719    /install/298/sparc/work
*   7         0    00     1602720     449568     2052287    /space
```

これで SPARC システム用のディスク構成ファイルの作成が終了しました。ディスク構成ファイルを使用してプロファイル进行测试する方法の詳細は、235 ページの「プロファイルのテスト」を参照してください。

## ▼ x86: ディスク構成ファイルを作成する方法

1. テストするディスクを持つ **x86** システムを決定します。
2. スーパーユーザーになります。
3. 単一ディスク構成ファイルを作成するには、**fdisk(1M)** コマンドの出力をファイルに保存します。

```
# fdisk -R -W disk_config_file -h /dev/rdisk/device_name
```

<i>disk_config_file</i>	ディスク構成ファイルの名前
<i>/dev/rdisk/device_name</i>	ディスク全体の <i>fdisk</i> レイアウトのデバイス名。 <i>device_name</i> は <i>cwtxdyp0</i> または <i>cxdyp0</i> 形式でなければなりません。

4. **prtvtoc (1M)** コマンドの出力をディスク構成ファイルに追加します。

```
# prtvtoc /dev/rdisk/device_name >>disk_config
```

<i>/dev/rdisk/device_name</i>	システムのディスクのデバイス名。 <i>device_name</i> は、 <i>cwtxdys2</i> または <i>cxdys2</i> の形式にしてください。
<i>disk_config</i>	ディスク構成ファイルの名前

5. 複数のディスクに **Solaris** ソフトウェアをインストールするテストを

- 実行しない場合は、ここで終了です。
- 実行する場合は、各ディスク構成ファイルを結合し、その出力を新しいファイルに保存します。

```
# cat disk_file1 disk_file2>multi_disk_config
```

新しいファイルは、次に示すように複数ディスク構成ファイルになります。

```
# cat 104_disk2 104_disk3 104_disk5>multi_disk_test
```

6. 前の手順で作成した複数のディスク構成ファイルにおいて、ディスクデバイス名のターゲット番号がそれぞれ

- 固有である場合は、ここで作業は終了です。
- 固有でない場合は、テキストエディタでファイルを開き、ターゲット番号を固有のものにします。

たとえば、次に示すように、異なるディスクデバイス名について同じターゲット番号 (*t0*) がファイルに含まれているとします。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
...
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

この場合は次のように、2番目のターゲット番号を *t2* に設定します。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
...
* /dev/rdisk/c0t2d0s2 partition map
```

## x86: ディスク構成ファイルの例

次の例では、500M バイトのディスクを持つ x86 システムで、単一ディスク構成ファイル 500\_test を作成します。

例 24-7 x86: ディスク構成ファイルの作成

最初に、fdisk コマンドの出力を 500\_test という名前のファイルに保存します。

```
# fdisk -R -W 500_test -h /dev/rdisk/c0t0d0p0
```

この 500\_test ファイルの内容は次のとおりです。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0p0 default fdisk table
* Dimensions:
*   512 bytes/sector
*   94 sectors/track
*   15 tracks/cylinder
*   1455 cylinders
*
* HBA Dimensions:
*   512 bytes/sector
*   94 sectors/track
*   15 tracks/cylinder
*   1455 cylinders
*
* systid:
* 1:  DOSOS12
* 2:  PCIXOS
* 4:  DOSOS16
* 5:  EXTDOS
* 6:  DOSBIG
* 86: DOSDATA
* 98: OTHEROS
* 99: UNIXOS
* 130: SUNIXOS
*
* Id  Act  Bhead Bsect   Bcyl  Ehead  Esect  Ecyl  Rsect  Numsect
130  128  44    3       0     46    30    1001 1410  2050140
```

次に、prtvtoc コマンドの出力を 500\_test ファイルに追加します。

```
# prtvtoc /dev/rdisk/c0t0d0s2>>500_test
```

これで 500\_test ファイルは、完全なディスク構成ファイルになりました。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0p0 default fdisk table
* Dimensions:
*   512 bytes/sector
*   94 sectors/track
*   15 tracks/cylinder
*   1455 cylinders
*
* HBA Dimensions:
*   512 bytes/sector
```

例 24-7 x86: ディスク構成ファイルの作成 (続き)

```
*      94 sectors/track
*      15 tracks/cylinder
*      1455 cylinders
*
* systid:
* 1:   DOSOS12
* 2:   PCIKOS
* 4:   DOSOS16
* 5:   EXTDOS
* 6:   DOSBIG
* 86:  DOSDATA
* 98:  OTHEROS
* 99:  UNIXOS
* 130: SUNIXOS
*
* Id  Act  Bhead  Bsect  Bcyl  Ehead  Esec  Ecyl  Rsect  Numsect
130  128  44    3     0    46    30   1001  1410  2050140
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
*
* Dimensions:
*      512 bytes/sector
*      94 sectors/track
*      15 tracks/cylinder
*      1110 sectors/cylinder
*      1454 cylinders
*      1452 accessible cylinders
*
* Flags:
* 1:  unmountable
* 10: read-only
*
* Partition  Tag  Flags      First      Sector      Last
*           Tag  Flags      Sector      Count      Sector  Mount Directory
*           2   5   01        1410    2045910    2047319
*           7   6   00        4230    2043090    2047319  /space
*           8   1   01           0        1410        1409
*           9   9   01        1410        2820        422987
```

これで x86 システム用のディスク構成ファイルの作成が終了しました。ディスク構成ファイルを使用してプロファイルをテストする方法の詳細は、235 ページの「プロファイルのテスト」を参照してください。

---

## サイト固有のインストールプログラムの使用

begin スクリプトと finish スクリプトを使用すると、独自のインストールプログラムにより Solaris ソフトウェアをインストールできます。



プロファイルフィールドにマイナス記号 (-) が指定されているときには、begin スクリプトと finish スクリプトが、プロファイルや Solaris suninstall プログラムの代わりに、システムのインストール方法を制御します。

たとえば次のルールに一致した場合は、begin スクリプト `x_install.beg` と finish スクリプト `x_install.fin` が、`clover` という名前のシステムに Solaris ソフトウェアをインストールします。

```
hostname clover x_install.beg - x_install.fin
```



## 第 25 章

# カスタムルールおよびプローブキーワードの作成

この章では、独自のカスタムルールとプローブキーワードを作成するための情報と手順を示します。

- 259 ページの「プローブキーワード」
- 260 ページの「custom\_probes ファイルの作成」
- 263 ページの「custom\_probes ファイルの妥当性検査」

## プローブキーワード

プローブキーワードを理解するには、まずルールキーワードが何であるかを思い出してください。ルールキーワードは、ホスト名 (hostname) やメモリーサイズ (memsize) などの一般的なシステム属性を記述する事前定義された字句単位または語です。ルールキーワードとそれに関連する値を使用すると、同じ属性を持つシステムをプロファイルに対応付けることができます。システム属性を対応させるこの方法では、グループ内の各システムに Solaris ソフトウェアをどのようにインストールするかが定義されます。

カスタム JumpStart の環境変数は、begin スクリプトおよび finish スクリプトで使用しますが、必要に応じて設定します。たとえば、すでにシステムにインストールされているオペレーティングシステムに関する情報を入手できるのは、installed ルールキーワードに続いて SI\_INSTALLED を使用する場合だけです。

場合によっては、システムの照合とプロファイルの実行以外の目的で、この同じ情報を begin および finish スクリプトで抽出する必要があります。プローブキーワードは、この解決方法となります。プローブキーワードは属性情報を抽出するので、照合条件を設定してプロファイルを実行する必要がなくなります。

プローブキーワードと値の一覧は、322 ページの「プローブキーワードと値」を参照してください。

---

## custom\_probes ファイルの作成

287 ページの「ルールキーワードと値の説明」と 322 ページの「プローブキーワードと値」で説明したルールおよびプローブキーワードでは不十分な場合は、`custom_probes` ファイルを作成して、独自のカスタムルールまたはプローブキーワードを定義できます。

`custom_probes` ファイルは、2 種類のタイプの関数を含む Bourne シェルスクリプトです。`custom_probes` ファイルは、`rules` ファイルを保存したのと同じ `JumpStart` ディレクトリに保存する必要があります。次に、`custom_probes` ファイルに定義できる 2 種類の関数を示します。

- **プローブ** – 必要な情報を収集するかあるいは実際の作業を実行し、定義された対応する `SI_` 環境変数を設定します。プローブ関数はプローブキーワードになります。
- **比較** – 対応するプローブ関数を呼び出してプローブ関数の出力を比較し、キーワードが一致する場合は 0、キーワードが一致しない場合は 1 を返します。比較関数はルールキーワードになります。

## custom\_probes ファイルの構文

`custom_probes` ファイルには、任意の有効な Bourne シェルコマンド、変数、またはアルゴリズムを含めることができます。

---

注 – `custom_probes` ファイルで単一の引数を必要とするプローブおよび比較関数を定義できます。`rules` ファイル内で対応するカスタムプローブキーワードを使用する場合、このキーワードの後に続く引数が (`$1` として) 解釈されます。

`rules` ファイル内で対応するカスタムルールキーワードを使用する場合、引数はこのキーワードの後から解釈され、次の `&&` または `begin` スクリプトのどちらか最初にきた方の前で解釈が終了します。

---

`custom_probes` ファイルは、次の要件を満たす必要があります。

- `custom_probes` という名前を使用する
- 所有者が `root` である
- 実行可能であり、アクセス権が 755 に設定されている
- 少なくとも 1 つのプローブ関数と対応する比較関数を含む

より明確で効果的な構成にするために、最初にすべてのプローブ関数をファイルの一番上に定義してから、比較関数を続けて定義してください。

## custom\_probes の関数名の構文

プローブ関数名は、probe\_ で始める必要があります。比較関数名は、cmp\_ で始める必要があります。

probe\_ で始まる関数は、新しいプローブキーワードを定義します。たとえば、関数 probe\_tcx は、新しいプローブキーワード tcx を定義します。cmp\_ で始まる関数は、新しいルールキーワードを定義します。たとえば、cmp\_tcx は、新しいルールキーワード tcx を定義します。

### ▼ custom\_probes ファイルを作成する方法

1. テキストエディタを使用して **Bourne** シェルスクリプトのテキストファイルを作成します。このファイルに **custom\_probes** という名前を付けます。
2. **custom\_probes** テキストファイルで、プローブ関数と比較関数を定義します。

---

注 - custom\_probes ファイルには、引数を必要とするプローブおよび比較関数を定義できます。rules ファイル内で対応するカスタムプローブキーワードを使用する場合、このキーワードの後に続く引数は順番に (\$1, \$2 などとして) 解釈されます。

rules ファイル内で対応するカスタムルールキーワードを使用する場合、引数はこのキーワードの後から解釈され、次の && または begin スクリプトのどちらか最初に来た方の前で解釈が終了します。

---

3. **custom\_probes** ファイルを **JumpStart** ディレクトリに保存します (**rules** ファイルと同じ)。
4. **root** が **rules** ファイルを所有していて、そのアクセス権が **644** に設定されていることを確認します。

### custom\_probes ファイルとキーワードの例

プローブ関数と比較関数の例は次のディレクトリにも入っています。

- Solaris ソフトウェアがインストールされたシステムの  
/usr/sbin/install.d/chkprobe
- Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD 上の  
/Solaris\_9/Tools/Boot/usr/sbin/install.d/chkprobe

次の custom\_probes ファイルには、TCX グラフィックスカードがあるかどうかをテストするプローブおよび比較関数が含まれます。

例 25-1 custom\_probes ファイル

```
#!/bin/sh
#
# custom_probe script to test for the presence of a TCX graphics card.
#
#
# PROBE FUNCTIONS
#
probe_tcx() {
    SI_TCX=`modinfo | grep tcx | nawk '{print $6}'`
    export SI_TCX
}

#
# COMPARISON FUNCTIONS
#
cmp_tcx() {
    probe_tcx

    if [ "X${SI_TCX}" = "X{1}" ]; then
        return 0
    else
        return 1
    fi
}
}
```

次のサンプル rules ファイルは、前の例で定義されているプローブキーワード (tcx) の使用方法を示しています。TCX グラフィックスカードがシステムにインストールされていて検出されると、profile\_tcx が実行されます。そうでない場合は、profile が実行されます。

---

注 - プローブキーワードは、rules ファイルの先頭または先頭近くに指定してください。これは、そのプローブキーワードに依存する可能性のあるほかのルールキーワードよりも前に読み取られて実行されるようにするためです。

---

例 25-2 rules ファイルで使用されるカスタムプローブキーワード

```
probe tcx
tcx    tcx    -    profile_tcx    -
any    any    -    profile        -
```

---

## custom\_probes ファイルの妥当性検査

プロファイル、rules、および custom\_probes ファイルを使用するには、これらのファイルの設定が正しいかどうかを check スクリプトを実行して検査する必要があります。すべてのプロファイル、ルール、およびプローブ関数と比較関数が正しく設定されている場合は、rules.ok ファイルと custom\_probes.ok ファイルが作成されます。表 25-1 は、check スクリプトの実行内容を説明しています。

表 25-1 check スクリプトを使用した場合の動作

手順	説明
1	check は、custom_probes ファイルを検索します。
2	このファイルが存在する場合、check は custom_probes ファイルから custom_probes.ok ファイルを作成し、すべてのコメントと空白行を削除し、すべての Bourne シェルコマンド、変数、およびアルゴリズムを保存し、次に check は次のコメント行をファイルの最後に追加します。  # version=2 checksum=num

### ▼ custom\_probes ファイルを妥当性検査する方法

1. check スクリプトが **JumpStart** ディレクトリにあることを確認します。

---

注 – check スクリプトは、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD の Solaris\_9/Misc/jumpstart\_sample ディレクトリにあります。

---

2. **JumpStart** ディレクトリに移動します。
3. check スクリプトを実行して、**rules** および **custom\_probes** ファイルの妥当性を検査します。

```
$ ./check [-p path -r file_name]
```

- p path**                    使用しているシステムの check スクリプトではなく、プラットフォームの Solaris 9 ソフトウェアイメージの check スクリプトを使用して、`custom_probes` ファイルを妥当性検査します。*path* は、ローカルディスクか、あるいはマウントされた Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD 上のイメージです。
- システムが以前のバージョンの Solaris を実行している場合、このオプションを使用して、最新バージョンの check スクリプトを実行します。
- r file\_name**                `custom_probes` 以外のファイル名を指定します。`-r` オプションを使用することで、一連の関数を `custom_probes` ファイル内にまとめる前にそれらの妥当性検査を実施できます。

check スクリプトを実行すると、`rules` ファイルと `custom_probes` ファイル、および各プロファイルの妥当性が表示されます。エラーが検出されないと、The custom JumpStart configuration is ok と表示され、JumpStart ディレクトリ内に `rules.ok` ファイルと `custom_probes.ok` ファイルが作成されます。

#### 4. `custom_probes.ok` ファイルが

- 実行可能な場合は、手順 5 へ進みます。
- 実行可能でない場合は、次のコマンドを入力します。

```
chmod +x custom_probes
```

#### 5. `root` が `custom_probes.ok` ファイルを所有し、そのアクセス権が 755 に設定されていることを確認してください。



## 第 26 章

---

# カスタム JumpStart インストールの実行

---

この章では、SPARC システムまたは x86 システムでカスタム JumpStart インストールを実行する手順を説明します。これらの手順は、Solaris 9 ソフトウェアをインストールしようとするシステム上で実行してください。

- 268 ページの「SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」
- 272 ページの「x86: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」

---

## SPARC: カスタム JumpStart インストールの実行

### SPARC: 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステム設定

カスタム JumpStart インストールの際に、JumpStart プログラムはインストール対象のシステムを `rules.ok` ファイル内のルールに対応付けます。この際、最初から順にルールが読み取られ、インストール中のシステムがルールに定義されたすべてのシステム属性に一致するかどうか検査されます。システムがルールと一致すると同時に、JumpStart プログラムによる `rules.ok` ファイルの読み取りが停止して、一致したルールのプロファイルに基づいてシステムのインストールが開始されます。

表 26-1 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステムの設定

作業	説明	参照先
システムがサポートされているかを確認する	ハードウェアのマニュアルで、Solaris 9 環境におけるシステムサポートを確認します。	『Solaris 9 Sun ハードウェア マニュアル』
Solaris ソフトウェアをインストールするための十分なディスク容量がシステムにあるかを確認する	Solaris ソフトウェアのインストールに求められる十分な容量があるかを確認します。	第 5 章
(省略可能) システム構成情報を事前設定する	sysidcfg ファイルまたはネームサービスを使用してシステムのインストール情報をあらかじめ設定できます。システム情報をあらかじめ設定すると、インストール時に情報入力を求めるプロンプトは表示されません。	第 7 章
カスタム JumpStart インストールを実行するようにシステムを準備する	rules ファイルとプロファイルファイルを作成して検証します。	第 23 章
(省略可能) カスタム JumpStart のオプション機能を準備する	begin スクリプト、finish スクリプトなどのオプション機能を使用する場合は、それらのスクリプトまたはファイルを用意します。	第 24 章 と 第 25 章
(省略可能) ネットワーク上でインストールするためのシステムを設定する	リモートの Solaris 9 DVD (SPARC 版) または Solaris 9 SOFTWARE CD (SPARC 版) イメージをインストールする場合は、インストールサーバーまたはブートサーバーからシステムをブートしてインストールするように、システムを設定する必要があります。	第 12 章
(省略可能) フラッシュアーカイブのインストール準備をする	フラッシュアーカイブをインストールする前に、特定の手順を実行する必要があります。	267 ページの「カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」
インストールまたはアップグレードを行う	システムをブートしてインストールまたはアップグレードを開始します。	268 ページの「SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」

## ▼ カスタム JumpStart インストールを使用して フラッシュアーカイブをインストールする方法

カスタム JumpStart を使用して、完全アーカイブまたは差分アーカイブをインストールできます。完全アーカイブまたは差分アーカイブについては、第 17 章を参照してください。

1. インストールサーバーで、カスタム **JumpStart** の **rules** ファイルを作成します。カスタム **JumpStart** ファイルの作成手順の詳細は、第 23 章を参照してください。
2. インストールサーバーで、カスタム **JumpStart** のプロファイルを作成します。フラッシュアーカイブのサンプルプロファイルについては、232 ページの「プロファイルの例」を参照してください。

---

注 – 第 23 章に記載されているカスタム JumpStart のプロファイルキーワードのリストの中で、フラッシュアーカイブをインストールする時に有効なキーワードは、以下のもののみです。

---

キーワード	初期インストール	更新
archive_location	有効	有効
fdisk (x86 のみ)	有効	有効
filesystem - filesystem プロファイルキーワードに値 auto は設定できません。	有効	
forced_deployment		有効
install_type — 必須	有効	有効
local_customization	有効	有効
no_content_check		有効
no_master_check		有効
root_device	有効	有効

- a. キーワード **install\_type** の値を次のいずれかに設定します。
  - 完全アーカイブインストールの場合、値を **flash\_install** に設定します。
  - 差分アーカイブインストールの場合、値を **flash\_update** に設定します。
- b. **archive\_location** プロファイルキーワードを使用して、フラッシュアーカイブへのパスを追加します。

archive\_location プロファイルキーワードの詳細は、293 ページの「archive\_location プロファイルキーワード」を参照してください。

- c. ファイルシステム構成を指定します。  
フラッシュアーカイブの抽出プロセスでは、パーティションの自動配置はサポートされません。
  - d. (省略可能) クローンシステムにフラッシュアーカイブを追加インストールしたい場合は、インストールしたいアーカイブごとに **archive\_location** 行を指定してください。
3. インストールサーバーで、フラッシュアーカイブを使ってインストールするクライアントを追加します。  
手順の詳細は、92 ページの「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」または 123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。
  4. クローンシステムへのカスタム **JumpStart** インストールを実行します。  
詳細は、268 ページの「SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」を参照してください。

## ▼ SPARC: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法

1. システムがネットワークに接続されている場合は、**Ethernet** コネクタまたはそれに類似したネットワークアダプタがシステムに装着されていることを確認します。
2. **tip (1)** ラインで接続されているシステムをインストールする場合は、ウィンドウ表示が横 **80** 桁、縦 **24** 行以上あることを確認します。  
tip ウィンドウの現在の大きさを調べるには、**stty (1)** コマンドを使用します。
3. システムの **DVD-ROM** または **CD-ROM** ドライブを使用して **Solaris 9** ソフトウェアをインストールする場合は、ドライブに **Solaris 9 DVD (SPARC 版)** または **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)** を挿入します。
4. プロファイルフロッピーディスクを使用する場合は、システムのプロッピーディスクドライブにそのフロッピーディスクを挿入します。
5. システムをブートします。
  - 新しく購入したばかり (未使用) のシステムの場合は、システムの電源を入れます。
  - 既存システムのインストールまたはアップグレードを行う場合は、システムをシャットダウンします。ok プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
ok boot cdrom:net - install [url:ask] [dhcp] [nowin]
```

cdrom	<p>CD または DVD からブートすることを指定します。</p> <p>システムの EEPROM が旧式のものである場合は、cdrom を sd (0,6,2) に置き換えてシステムの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからブートしてください。</p>
net	<p>ネットワーク上のインストールサーバーからブートすることを意味します。</p>
url	<p>カスタム JumpStart ファイルの場所を指定します。以下にあるファイルを URL で指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ローカルハードディスク <ul style="list-style-type: none"> <li>file://jumpstart_dir_path/compressed_config_file</li> </ul> </li> <li>■ ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー <ul style="list-style-type: none"> <li>nfs://server_name:IP_address/jumpstart_dir_path/compressed_config_file</li> </ul> </li> <li>■ HTTP サーバー <ul style="list-style-type: none"> <li>http://server_name:IP_address/jumpstart_dir_path/compressed_config_file&amp;proxy_info</li> </ul> </li> </ul> <p>sysidcfg ファイルを圧縮構成ファイルに含めた場合は、次の例に示すようにそのファイルを含むサーバーの IP アドレスを指定する必要があります。</p> <p>http://131.141.2.32/jumpstart/config.tar</p> <p>圧縮構成ファイルをファイアウォールで防御された HTTP サーバー上の圧縮構成ファイルに保存した場合は、ブート時に proxy 指示子を使用する必要があります (ファイルが配置されたサーバーの IP アドレスを指定する必要はない)。プロキシサーバーの IP アドレスは次のように指定します。</p> <p>http://www.shadow.com/jumpstart/config.tar&amp;proxy=131.141.6.151</p>
ask	<p>システムが起動し、ネットワークへの接続が完了すると、インストールプログラムから圧縮構成ファイルの場所を入力するプロンプトが表示されます。</p> <p>Return キーを押してこのプロンプトへの入力を行わないと、インストールプログラムはネットワークパラメータを対話的に構成し、圧縮構成ファイルの場所を尋ねるプロンプトを表示します。Return キーを押してこのプロンプトへの入力を行わないと、Solaris suninstall プログラムが開始されます。</p>
dhcp	<p>DHCP サーバーからシステムのブートに必要なネットワークインストール情報を取得します。</p> <p>dhcp を指定しないと、/etc/bootparams ファイル、またはネームサービスの bootparams データベースが使用されます。</p>
nowin	<p>X Window を起動しません。カスタム JumpStart インストールの実行には、X Window は必要ありません。このため、このオプションを指定すると、インストール時間を短縮できます。</p>

---

注 – SPARC: ハードウェアおよびシステムコンポーネントがシステムによって検査されて、SPARC システムがブートします。ブートには数分間かかります。

---

6. **sysidcfg** でシステム情報の事前構成を行わなかった場合は、プロンプトが表示された時点でシステム構成についての質問に答えます。

7. 画面の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

JumpStart プログラムが Solaris ソフトウェアのインストールを終了すると、システムが自動的にリブートします。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- /var/sadm/system/logs
- /var/sadm/install/logs

---

## x86: カスタム JumpStart インストールの実行

### x86: 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステムの設定

カスタム JumpStart インストールの際に、JumpStart プログラムはインストール対象のシステムを `rules.ok` ファイル内のルールに対応付けます。この際、最初から順にルールが読み取られ、インストール中のシステムがルールに定義されたすべてのシステム属性に一致するかどうか検査されます。システムがルールと一致すると同時に、JumpStart プログラムによる `rules.ok` ファイルの読み取りが停止して、一致したルールのプロファイルに基づいてシステムのインストールが開始されます。

表 26-2 x86: 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステムの設定

作業	説明	参照先
既存のオペレーティングシステムとユーザーデータを保存する必要があるかを決定する	システムにディスク全体を使用している既存のオペレーティングシステムがある場合は、そのシステムと Solaris 9 ソフトウェアを共存させるために既存のオペレーティングシステムを保存する必要があります。この決定により、システムのプロファイル内の <code>fdisk (1M)</code> キーワードをどのように指定するかが決まります。	304 ページの「x86: <code>fdisk</code> プロファイルキーワード」
システムがサポートされているかを確認する	ハードウェアのマニュアルで、Solaris 9 環境におけるシステムサポートを確認します。	ハードウェアのマニュアル
Solaris ソフトウェアをインストールするための十分なディスク容量がシステムにあるかを確認する	Solaris ソフトウェアのインストールに求められる十分な容量があるかを確認します。	第 5 章
(省略可能) システム構成情報を事前設定する	<code>sysidcfg</code> ファイルまたはネームサービスを使用してシステムのインストール情報をあらかじめ設定できます。システム情報をあらかじめ設定すると、インストール時に情報入力を求めるプロンプトは表示されません。	第 7 章
カスタム JumpStart インストールするようにシステムを準備する	<code>rules</code> ファイルとプロファイルファイルを作成して検証します。	第 23 章
(省略可能) カスタム JumpStart のオプション機能を準備する	<code>begin</code> スクリプト、 <code>finish</code> スクリプトなどの機能を使用する場合は、それらのスクリプトまたはファイルの準備を行います。	第 24 章 と 第 25 章

表 26-2 x86: 作業マップ: カスタム JumpStart インストールのためのシステムの設定 (続き)

作業	説明	参照先
(省略可能) ネットワーク上でインストールするためのシステムを設定する	リモートの Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) イメージをインストールする場合は、インストールサーバーまたはブートサーバーからシステムをブートしてインストールするように、システムを設定する必要があります。	第 12 章
インストールまたはアップグレードを行う	システムをブートしてインストールまたはアップグレードを開始します。	272 ページの「x86: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法」

## ▼ x86: カスタム JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする方法

1. システムがネットワークに接続されている場合は、**Ethernet** コネクタまたはそれに類似したネットワークアダプタがシステムに装着されていることを確認します。
2. **tip (1)** ラインで接続されているシステムをインストールする場合は、ウィンドウ表示が横 **80** 桁、縦 **24** 行以上あることを確認します。  
tip ウィンドウの現在の大きさを調べるには、`stty (1)` コマンドを使用します。
3. プロファイルフロッピーディスクを使用する場合は、システムのプロロッピーディスクドライブにそのフロッピーディスクを挿入します。

注 - プロファイルフロッピーディスクには、プロファイル情報に加え、Solaris 9 Device Configuration Assistant のコピーが入っています。PXE ネットワークブートを利用してネットワークを介してシステムをブートする場合は、フロッピーディスクからではなくネットワークからシステムがブートするようにシステムを構成する必要があります。

4. システムの **DVD-ROM** または **CD-ROM** ドライブを使用して **Solaris 9** ソフトウェアをインストールする場合は、ドライブに **Solaris 9 DVD (x86 版)** または **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)** を挿入します。
5. システムのブート方法を決定します。



- Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD からブートする場合は、そのディスクを挿入します。この場合、システムの BIOS が DVD または CD からのブートをサポートしている必要があります。
- ネットワークからブートする場合は、PXE (Preboot Execution Environment) ネットワークブートを使用してください。システムは PXE をサポートするものでなければなりません。システムの BIOS 設定ツールまたはネットワークアダプタの構成設定ツールを使用して、PXE が使用できるようにシステムを設定します。
- フロッピーディスクからブートする – 手順 3 でドライブに挿入したプロファイル フロッピーディスクを使用するか、あるいはシステムのフロッピーディスクドライブに Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) を挿入します。

---

**x86 のみ** – 次の方法で、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ソフトウェアをフロッピーディスクにコピーできます。

- 付録 E に記載された手順に従って、ソフトウェアを Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) からフロッピーディスクにコピーします。
  - [http://soldc.sun.com/support/drivers/dca\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dca_diskettes) の Solaris Developer Connection からソフトウェアをダウンロードして、フロッピーディスクにコピーします。
- 

6. システムの電源が入っていない場合は、電源を入れます。システムの電源が入っている場合は、システムをリブートします。

Device Configuration Assistant プログラムがシステムのデバイスを調べます。

7. 「**Boot Solaris**」画面が表示されたら、システムをブートするデバイス (「**DVD**」、「**CD**」、「**Net**」、または「**Disk**」) を選択します。
8. プロンプトで、次のどちらかを実行します。

```
Select the type of installation you want to perform:
```

```
 1 Solaris Interactive
 2 Custom JumpStart
```

```
Enter the number of your choice followed by the <ENTER> key.
```

```
If you enter anything else, or if you wait for 30 seconds,
an interactive installation will be started.
```

カスタム JumpStart 方式を選択するには、次のどちらかを行います。

---

注 – 30 秒以内に「2」またはブートコマンドを入力しないと、Solaris 9 対話式インストールプログラムが開始されます。コマンド行に任意のキーを入力することによって、このタイマーを止めることができます。

---

- 2を入力し、Enter キーを押します。
- カスタム JumpStart 構成ファイルの場所を指定するには、次のコマンドを入力します。

```
b install [url:ask] [dhcp] [nowin]
```

<i>url</i>	<p>カスタム JumpStart ファイルの場所を指定します。以下にあるファイルを URL で指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ローカルハードディスク</li> </ul> <pre>file://jumpstart_dir_path/compressed_config_file</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー</li> </ul> <pre>nfs://server_name:IP_address/jumpstart_dir_path/compressed_config_file</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ HTTP サーバー</li> </ul> <pre>http://server_name:IP_address/jumpstart_dir_path/ compressed_config_file&amp;proxy_info</pre> <p>sysidcfg ファイルを圧縮構成ファイルに含めた場合は、次の例に示すようにそのファイルを含むサーバーの IP アドレスを指定する必要があります。</p> <pre>http://131.141.2.32/jumpstart/config.tar</pre> <p>圧縮構成ファイルをファイアウォールで防御された HTTP サーバー上の圧縮構成ファイルに保存した場合は、ブート時に proxy 指示子を使用する必要があります (ファイルが配置されたサーバーの IP アドレスを指定する必要はない)。プロキシサーバーの IP アドレスは次のように指定します。</p> <pre>http://www.shadow.com/jumpstart/ config.tar&amp;proxy=131.141.6.151</pre>
<i>ask</i>	<p>システムが起動し、ネットワークへの接続が完了すると、インストールプログラムから圧縮構成ファイルの場所を入力するプロンプトが表示されます。</p> <p>Return キーを押してこのプロンプトへの入力を行わないと、インストールプログラムはネットワークパラメータを対話的に構成し、圧縮構成ファイルの場所を尋ねるプロンプトを表示します。Return キーを押してこのプロンプトへの入力を行わないと、Solaris suninstall プログラムが開始されます。</p>
<i>dhcp</i>	<p>DHCP サーバーからシステムのブートに必要なネットワークインストール情報を取得します。</p> <p>dhcp を指定しないと、/etc/bootparams ファイル、またはネームサービスの bootparams データベースが使用されます。</p>
<i>nowin</i>	<p>X Window を起動しません。カスタム JumpStart インストールの実行には、X Window は必要ありません。このため、このオプションを指定すると、インストール時間を短縮できます。</p>

9. **sysidcfg** でシステム情報の事前構成を行わなかった場合は、プロンプトが表示された時点でシステム構成についての質問に答えます。
10. 画面の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

JumpStart プログラムが Solaris ソフトウェアのインストールを終了すると、システムが自動的にリブートします。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

  - /var/sadm/system/logs
  - /var/sadm/install/logs



## 第 27 章

---

# カスタム JumpStart によるインストール例

---

この章では、カスタム JumpStart を使用して SPARC システムと x86 システムに Solaris ソフトウェアをインストールするための設定と実際のインストールを行う例を示します。

- 277 ページの「サイトの設定例」
- 279 ページの「インストールサーバーの作成」
- 280 ページの「x86: マーケティングシステム用のブートサーバーの作成」
- 281 ページの「JumpStart ディレクトリの作成」
- 281 ページの「JumpStart ディレクトリの共有」
- 281 ページの「SPARC: エンジニアリンググループのプロファイル作成」
- 282 ページの「x86: マーケティンググループのプロファイルの作成」
- 282 ページの「rules ファイルの更新」
- 283 ページの「rules ファイルの妥当性を検査する」
- 284 ページの「SPARC: ネットワーク上でインストールするためのエンジニアリングシステムの設定」
- 284 ページの「x86: ネットワーク上でインストールするためのマーケティングシステムの設定」
- 285 ページの「SPARC: エンジニアリングシステムのブートと Solaris 9 ソフトウェアのインストール」
- 286 ページの「x86: マーケティングシステムのブートと Solaris 9 ソフトウェアのインストール」

---

## サイトの設定例

この例で使用するサイトの設定を図 27-1 に示します。

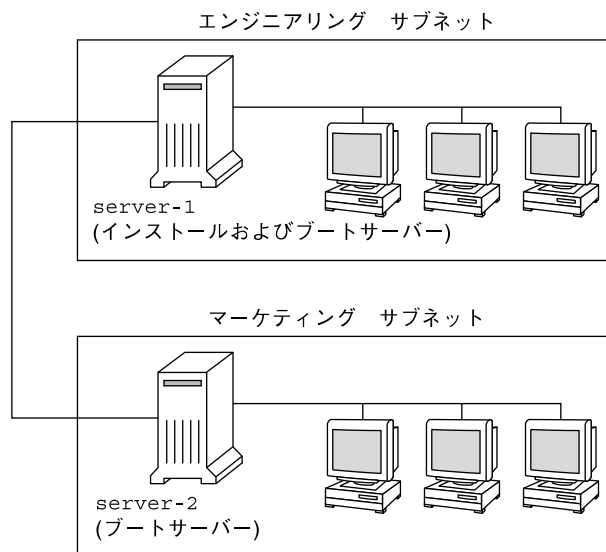


図 27-1 サイトの設定例

この例におけるサイトの状況は次のとおりです。

- SPARC:エンジニアリンググループは、グループ固有のサブネット上にあります。このグループでは、ソフトウェア開発用に SPARCstation™ システムを使用しています。
- x86:マーケティンググループも、グループ固有のサブネット上にあります。このグループでは、文書処理、表計算、およびその他のオフィスツールを実行するために x86 システムを使用しています。
- このサイトでは NIS を使用しています。システムの Ethernet アドレス、IP アドレス、およびホスト名は NIS マップに事前設定されています。サイトのサブネットマスク、日付と時刻、および地域の情報も NIS マップに事前設定されています。

---

注 - マーケティングシステムの周辺装置は、sysidcfg ファイルに事前設定されています。

---

- エンジニアリングシステムとマーケティングシステムの両方とも、Solaris 9 ソフトウェアをネットワーク上でインストールします。

---

## インストールサーバーの作成

これらのグループは Solaris ソフトウェアをネットワーク上でインストールする必要があるため、`server-1` を両方のグループのインストールサーバーにします。`server-1` ローカルディスク (`/export/install` ディレクトリ内) にイメージをコピーするには、`setup_install_server(1M)` コマンドを使用します。これらのイメージは、Solaris 9 SOFTWARE CD と Solaris 9 LANGUAGES CD、または Solaris 9 DVD からコピーしてください。

コピー先は、空のディレクトリ (これらの例では `sparc_9` と `x86_9`) でなければなりません。

### 例 27-1 SPARC: Solaris 9 CD のコピー

`server-1` の CD-ROM ドライブに Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/sparc_9
server-1# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/sparc_9
```

`server-1` の CD-ROM ドライブに Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/sparc_9
```

`server-1` の CD-ROM ドライブに Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/sparc_9
```

### 例 27-2 x86: Solaris 9 CD のコピー

`server-1` の CD-ROM ドライブに Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/x86_9
server-1# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/x86_9
```

`server-1` の CD-ROM ドライブに Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/x86_9
```

`server-1` の CD-ROM ドライブに Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

例 27-2 x86: Solaris 9 CD のコピー (続き)

```
server-1# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/x86_9
```

例 27-3 SPARC: Solaris 9 DVD のコピー

server-1 に接続されている DVD-ROM ドライブに Solaris 9 DVD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/sparc_9
server-1# cd /DVD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/sparc_9
```

例 27-4 x86: Solaris 9 DVD のコピー

server-1 に接続されている DVD-ROM ドライブに Solaris 9 DVD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/x86_9
server-1# cd /DVD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/x86_9
```

---

## x86: マーケティングシステム用のブートサーバーの作成

システムは、異なるサブネット上のインストールサーバーからはブートできません。したがって、server-2 をマーケティンググループのサブネット上のブートサーバーにします。setup\_install\_server(1M) コマンドを使用して Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) から server-2 ローカルディスクの /export/boot ディレクトリへブートソフトウェアをコピーします。

server-2 の CD-ROM ドライブに Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) を挿入する場合は、次のコマンドを入力してください。

```
server-2# cd /CD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-2# ./setup_install_server -b /export/boot
```

server-2 の DVD-ROM ドライブに Solaris 9 DVD (x86 版) を挿入する場合は、次のコマンドを入力してください。

```
server-2# cd /DVD_mount_point/Solaris_9/Tools
server-2# ./setup_install_server -b /export/boot
```

setup\_install\_server コマンドの -b は、setup\_install\_server が /export/boot というディレクトリにブート情報をコピーすることを指定します。



---

## JumpStart ディレクトリの作成

インストールサーバーとブートサーバーの設定が終了したところで、次は server-1 に JumpStart ディレクトリを作成します (ネットワーク上の任意のシステムを利用できます)。このディレクトリには、Solaris ソフトウェアのカスタム JumpStart インストールに必要なファイルが入っています。このディレクトリを設定するには、`/export/install` にコピーされている Solaris 9 DVD イメージまたは Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD イメージからサンプルディレクトリをコピーします。

```
server-1# mkdir /jumpstart
server-1# cp -r /export/install/sparc_9/Solaris_9/Misc/jumpstart_sample /jumpstart
```

---

## JumpStart ディレクトリの共有

ネットワーク上のシステムが `rules` ファイルやプロファイルにアクセスできるようにするために、`/jumpstart` ディレクトリを共有します。このためには、`/etc/dfs/dfstab` ファイルに次の行を追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /jumpstart
```

次に、コマンド行で `shareall` コマンドを使用します。

```
server-1# shareall
```

---

## SPARC: エンジニアリンググループのプロファイル作成

エンジニアリングシステムの場合、`eng_prof` ファイルを `/jumpstart` ディレクトリに作成します。`eng_prof` ファイルのエントリは次のようになっていて、エンジニアリンググループのシステムにインストールされる Solaris 9 ソフトウェアを定義しています。

```
install_type  initial_install1
system_type   standalone2
partitioning  default3
cluster       SUNWCprog4
fileys        any 512 swap5
```

1. アップグレードではなく、初期インストールによりインストールするよう指定します。

2. エンジニアリングシステムが、スタンドアロンシステムであることを指定します。
3. JumpStart ソフトウェアが、デフォルトのディスクパーティションを使用して、エンジニアリングシステムに Solaris をインストールするよう指定します。
4. 開発者システムサポートソフトウェアグループをインストールするように指定します。
5. エンジニアリンググループの各システムが、512M バイトのスワップ領域を持つよう指定します。

---

## x86: マーケティンググループのプロファイルの作成

マーケティングシステムの場合、marketing\_prof ファイルを /jumpstart ディレクトリに作成します。marketing\_prof ファイルのエントリは次のようになっています。マーケティンググループのシステムにインストールされる Solaris 9 ソフトウェアを定義しています。

```
install_type  initial_install1
system_type   standalone2
partitioning  default3
cluster       SUNWCuser4
package       SUNWaudio5
```

1. アップグレードではなく、初期インストールによりインストールするよう指定します。
2. マーケティングシステムが、スタンドアロンであることを指定します。
3. JumpStart ソフトウェアが、デフォルトのディスクパーティションを使用して、マーケティングシステムに Solaris をインストールするよう指定します。
4. エンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループをインストールするように指定します。
5. オーディオツールのデモソフトウェアパッケージを各システムに追加するよう指定します。

---

## rules ファイルの更新

次に、rules ファイルにルールを追加する必要があります。Solaris インストールプログラムは、カスタム JumpStart インストール中、これらのルールを使用して、各システムに正しいインストール (プロファイル) を選択します。

このサイトでは、各部署は独自のサブネットとネットワークアドレスを持っています。エンジニアリング部はサブネット 255.222.43.0 にあり、マーケティング部はサブネット 255.222.44.0 にあります。この情報を使用すれば、エンジニアリングシステムとマーケティングシステムのインストール方法を制御できます。/jumpstart ディレクトリ内の rules ファイルを編集して、サンプルのルールをすべて削除し、次の行をファイルに追加します。

```
network 255.222.43.0 - eng_prof -  
network 255.222.44.0 - marketing_prof -
```

これらのルールは、基本的に、255.222.43.0 ネットワーク上のシステムが eng\_prof プロファイルを使用してインストールされることと、255.222.44.0 ネットワーク上のシステムが marketing\_prof プロファイルを使用してインストールされることを示しています。

---

注 - サンプルのルールでは、どのシステムが eng\_prof または marketing\_prof を使用してインストールされるかをネットワークアドレスを使用して識別できます。この他にも、ホスト名、メモリーサイズ、またはモデルタイプをルールのキーワードとして使用できます。rules ファイルで使用できるキーワードのリストについては、表 28-1 を参照してください。

---

## rules ファイルの妥当性を検査する

rules ファイルとプロファイルを適切に設定した後は、check スクリプトを実行して、これらのファイルを確認します。

```
server-1# cd /jumpstart  
server-1# ./check
```

check スクリプトによってエラーが検出されない場合は、rules.ok ファイルが作成されます。

---

## SPARC: ネットワーク上でインストールするためのエンジニアリングシステムの設定

/jumpstart ディレクトリおよび必要なファイルを設定した後は、インストールサーバー (server-1) で `add_install_client` コマンドを使用して、インストールサーバーから Solaris 9 ソフトウェアをインストールできるようにエンジニアリングシステムを設定します。server-1 は、エンジニアリンググループのサブネットにとってはブートサーバーにも相当します。

```
server-1# cd /export/install/sparc_9/Solaris_9/Tools
server-1# ./add_install_client -c server-1:/jumpstart host-eng1 sun4u
server-1# ./add_install_client -c server-1:/jumpstart host-eng2 sun4u
```

`add_install_client` コマンドで使用されるオプションの意味は次のとおりです。

<code>-c</code>	サーバー (server-1) と JumpStart ディレクトリへのパス (/jumpstart) を指定する
<code>host-eng1</code>	エンジニアリンググループのシステム名
<code>host-eng2</code>	エンジニアリンググループの別のシステム名
<code>sun4u</code>	server-1 をインストールサーバーとして使用するシステムのアーキテクチャを指定する。Ultra 5 システムのプラットフォームグループ

---

## x86: ネットワーク上でインストールするためのマーケティングシステムの設定

次に、ブートサーバー (server-2) で `add_install_client` コマンドを使用します。このコマンドでマーケティングシステムに対してブートサーバーからブートし、インストールサーバー (server-1) から Solaris 9 ソフトウェアをインストールするように設定します。

```
server-2# cd /marketing/boot-dir/Solaris_9/Tools
server-2# ./add_install_client -s server-1:/export/install/x86_9 \
-c server-1:/jumpstart host-mkt1 i86pc
server-2# ./add_install_client -s server-1:/export/install/x86_9 \
-c server-1:/jumpstart host-mkt2 i86pc
server-2# ./add_install_client -d -s server-1:/export/install/x86_9 \
-c server-1:/jumpstart SUNW.i86pc i86pc
```

add\_install\_client コマンドで使用されるオプションの意味は次のとおりです。

-d	ネットワークインストールパラメータの取得にクライアントが DHCP を使用することを指定します。このオプションは PXE ネットワークブートを使用してネットワークからブートするクライアントには必ず指定します。PXE ネットワークブートを使用しないネットワークブートクライアントには、-d は省略できます。
-s	インストールサーバー (server-1) と Solaris 9 ソフトウェアへのパス (/export/install/x86_9) を指定します。
-c	インストールサーバー (server-1) と JumpStart ディレクトリへのパス (/jumpstart) を指定します。
host-mkt1	マーケティンググループのシステム名
host-mkt2	マーケティンググループの別のシステム名
SUNW.i86pc	すべての Solaris x86 クライアントの DHCP クラス名。1 回のコマンド実行ですべての Solaris x86 DHCP クライアントを構成したい場合は、このクラス名を使用してください。
i86pc	このブートサーバーを使用するシステムのプラットフォームグループを指定します。このプラットフォーム名は x86 システムを意味します。

---

## SPARC: エンジニアリングシステムのブートと Solaris 9 ソフトウェアのインストール

サーバーとファイルの設定が完了した後は、各システムの ok (PROM) プロンプトで次の boot コマンドを使用して、エンジニアリングシステムをブートできます。

```
ok boot net - install
```

システムは自動的に Solaris オペレーティング環境を エンジニアリンググループのシステムにインストールします。

---

## x86: マーケティングシステムのブートと Solaris 9 ソフトウェアのインストール

次に示す方法のどれか 1 つを使用してシステムをブートできます。

- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)
- Solaris 9 DVD (x86 版)
- ネットワーク (PXE ネットワークブートを使用)
- プロファイルフロッピーディスク
- Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版)

Solaris 9 はマーケティンググループのシステムに自動的にインストールされます。

## 第 28 章

# カスタム JumpStart に関するリファレンス情報

この章では、rules ファイル、プロファイル、および begin/finish スクリプトで使用できるキーワードと値のリストを示します。

- 287 ページの「ルールキーワードと値の説明」
- 292 ページの「プロファイルキーワードと値」
- 320 ページの「カスタム JumpStart の環境変数」
- 322 ページの「プローブキーワードと値」

## ルールキーワードと値の説明

表 28-1 で、rules ファイルで使用できるルールキーワードとルール値について説明します。rules ファイルの作成方法についての詳細は、227 ページの「rules ファイルの作成」を参照してください。

表 28-1 ルールキーワードとルール値の説明

キーワード	値	説明
any	マイナス記号 (-)	あらゆるものに一致することを意味する。
arch	<i>processor_type</i> <i>processor_type</i> に有効な値: <ul style="list-style-type: none"><li>■ SPARC: sparc</li><li>■ x86: i386</li></ul>	システムのプロセッサタイプを照合する。 システムのプロセッサタイプは、uname -p コマンドで調べることができる。

表 28-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

キーワード	値	説明
disksize	<p><i>actual_disk_name size_range</i></p> <p><i>actual_disk_name</i> - cxydz (c0t3d0 または c0d0 など) という形式のディスク名、または特別なワード「rootdisk」。rootdisk を使用する場合、照合するディスクは次の順番で決定される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SPARC: 事前にインストールされているブートイメージ (つまり、ファクトリ JumpStart でインストールされた新しい SPARC ベースのシステム) を持つディスク</li> <li>■ c0t3d0s0 ディスク (存在する場合)</li> <li>■ 最初に利用可能なディスク (カーネルのプロンプ順で検索される)</li> </ul> <p><i>size_range</i> - ディスクのサイズ。M バイト単位の範囲 (x-x) で指定する必要がある。</p>	<p>システムのディスクの名前とサイズを照合する (M バイト単位)。</p> <p>例: <i>processor_type</i> の有効な値</p> <p>この例では、JumpStart プログラムは c0t3d0 というシステムディスクの照合を試みる。このディスクは 250M から 300M バイトの情報を保持できる。</p> <p>例:</p> <pre>disksize rootdisk 750-1000</pre> <p>この例では、JumpStart プログラムはまず事前にインストールされたブートイメージが入ったシステムディスクを照合する。続いて c0t3d0s0 ディスク (存在する場合) を照合し、最後に、750M から 1G バイトの情報を保持できるディスクの中で利用可能な最初のディスクを照合する。</p> <p>注 - <i>size_range</i> を計算するときは、1M バイトが 1,048,576 バイトであることに注意してください。「535M バイト」ディスクと明記されているディスクでも、ディスク空間が 510M バイトしかない場合があります。535,000,000/1,048,576=510 により、JumpStart は「535M バイト」ディスクを実際には 510M バイトのディスクと見なしません。したがって、この「535M バイト」ディスクは 530-550 の <i>size_range</i> には一致しません。</p>
domainname	<i>actual_domain_name</i>	<p>システムのドメイン名を照合する。ドメイン名でネームサービスが情報を判別する方法を制御する。</p> <p>システムがインストール済みの場合、domainname コマンドによりシステムのドメイン名を表示できる。</p>
hostaddress	<i>actual_IP_address</i>	システムの IP アドレスを照合する。
hostname	<i>actual_host_name</i>	<p>システムのホスト名を照合する。</p> <p>システムがインストール済みの場合、uname -n コマンドによりシステムのホスト名を表示できる。</p>



表 28-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

キーワード	値	説明
installed	<p><i>slice version</i></p> <p><i>slice</i> — <i>cwtxdysz</i> 形式 (たとえば、<i>c0t3d0s5</i>) のディスクスライス名、または <i>any</i> か <i>rootdisk</i>。<i>any</i> を使用すると、システムに接続されたどのディスクも照合する (カーネルのプロープ順)。<i>rootdisk</i> を使用する場合、照合するディスクは次の順番で決定される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SPARC: 事前にインストールされているブートイメージ (つまり、ファクトリJumpStart でインストールされた新しい SPARC ベースのシステム) を持つディスク</li> <li>■ <i>c0t3d0s0</i> ディスク (存在する場合)</li> <li>■ 最初に利用可能なディスク (カーネルのプロープ順で検索される)</li> </ul> <p><i>version</i> — バージョン名、あるいは <i>any</i> または <i>upgrade</i>。<i>any</i> を使用すると、Solaris または SunOS リリースのどれとでも照合する。<i>upgrade</i> を使用すると、アップグレード可能な Solaris 2.1 以降の互換リリースのどれとでも照合する。</p> <p>Solaris リリースは検出されたが、バージョンを判断できないという場合は、返されるバージョンは SystemV になる。</p>	<p>Solaris ソフトウェアの特定バージョンに対応するルートファイルシステムが存在するディスクを照合する。</p> <p>例:</p> <pre>installed c0t3d0s1 Solaris_9</pre> <p>この例では、<i>c0t3d0s1</i> に Solaris 9 のルートファイルシステムを持つシステムを照合している。</p>
karch	<p><i>actual_platform_group</i></p> <p>有効な値は、<i>sun4m</i>、<i>sun4u</i>、<i>i86pc</i>、<i>prep</i>。システムおよび対応するプラットフォームグループのリストは、『Solaris 9 ハードウェアマニュアル』に記載されている。</p>	<p>システムのプラットフォームグループを照合する。</p> <p>システムがインストール済みの場合は、<i>arch -k</i> コマンドまたは <i>uname -m</i> コマンドにより、システムのプラットフォームグループを表示できる。</p>
memsize	<p><i>physical_mem</i></p> <p>値は M バイト単位の範囲 (<i>x-x</i>) または 1 つの M バイト値で指定する。</p>	<p>システムの物理メモリーサイズを照合する (M バイト単位)。</p> <p>例:</p> <pre>memsize 64-128</pre> <p>この例では、64M から 128M バイトの物理メモリーサイズを持つシステムと照合している。</p> <p>システムがインストール済みの場合は、<i>prtconf</i> コマンド (2 行目) によりシステムの物理メモリーサイズを表示できる。</p>

表 28-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

キーワード	値	説明
model	<i>actual_platform_name</i>	<p>システムのプラットフォーム名を照合する。有効なプラットフォーム名については、『Solaris 9 ハードウェアマニュアル』を参照してください。</p> <p>インストール済みのシステムのプラットフォーム名を見つけるには、<code>uname -i</code> コマンドか <code>prtconf</code> コマンド (5 行目) の出力を使用する。</p> <p>注 - <i>actual_platform_name</i> にスペースが含まれている場合は、スペースを下線 (<u>) で置き換える必要があります。</u></p> <p>例:</p> <p>SUNW,Sun_4_50</p>
network	<i>network_num</i>	<p>システムのネットワーク番号を照合する。これは JumpStart プログラムが、システムの IP アドレスとサブネットマスクの論理積をとって判別する。</p> <p>例:</p> <p>network 193.144.2.8</p> <p>この例では、IP アドレスが 193.144.2.8 のシステムを照合する (サブネットマスクが 255.255.255.0 の場合)</p>
osname	Solaris_x	<p>システムにすでにインストールされている Solaris のバージョンを照合する。</p> <p>例:</p> <p>osname Solaris_9</p> <p>この例では、JumpStart プログラムは Solaris 9 オペレーティング環境がすでにインストールされているシステムを照合する。</p>

表 28-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

キーワード	値	説明
probe	<i>probe_keyword</i>	<p>有効なプローブキーワードまたは有効なカスタムプローブキーワード</p> <p>例:</p> <pre>probe disks</pre> <p>この例は、システムのディスクサイズ (M バイト) をカーネルプローブ順に返します (例: SPARC システムでは <code>c0t3d0s1</code>、<code>c0t4d0s0</code>)。JumpStart プログラムは環境変数 <code>SI_DISKLIST</code>、<code>SI_DISKSIZE</code>、<code>SI_NUMDISKS</code>、および <code>SI_TOTALDISK</code> を設定します。</p> <p>注 - probe キーワードには、属性を照合せず、プロファイルを実行しないという特徴があります。このキーワードは、値を返すだけです。したがって、probe ルールキーワードで、begin スクリプト、プロファイル、および finish スクリプトは指定できません。</p> <p>有効なプラットフォーム名については、第 39 章を参照。</p>
totaldisk	<p><i>size_range</i></p> <p>値は M バイト単位の範囲 (x-x) で指定する必要があります。</p>	<p>システムのディスク空間の全体量 (M バイト単位) を照合する。ディスク空間の全体量には、システムに接続されている使用可能なディスクがすべて含まれる。</p> <p>例:</p> <pre>totaldisk 300-500</pre> <p>この例では、全体として 300M~500M バイトのディスク空間を持つシステムと照合している。</p> <p>注 - <i>size_range</i> を計算するときは、1M バイトが 1,048,576 バイトであることに注意してください。「535M バイト」ディスクと明記されているディスクでも、ディスク空間が 510M バイトしかない場合があります。535,000,000/1,048,576=510 により、JumpStart は「535M バイト」ディスクを実際には 510M バイトのディスクと見なします。したがって、この「535M バイト」ディスクは「530-550」の <i>size_range</i> には一致しません。</p>

## プロファイルキーワードと値

次の節では、プロファイルで使用できるプロファイルキーワードとプロファイル値を説明します。プロファイル作成の詳細は、230 ページの「プロファイルの作成」を参照してください。

## プロファイルキーワードのリスト

表 28-2 を使用すれば、どのキーワードがユーザーのインストールに適しているかを簡単に決定できます。プロファイルキーワードの説明で特に注記されていないかぎり、プロファイルキーワードは初期インストールオプションだけで使用できます。

表 28-2 プロファイルキーワード

プロファイルキーワード	インストール方法				
	スタンドアロンシステム (ネットワークに接続されていない)	スタンドアロンシステム (ネットワークに接続されている) または サーバー	OS サーバー	アップグレード	ディスク容量の再配置を使用するアップグレード
archive_location (フラッシュアーカイブをインストールする場合)	X	X			
backup_media					X
boot_device	X	X	X		
client_arch			X		
client_root			X		
client_swap			X		
cluster (ソフトウェアグループを追加する場合)	X	X	X		
cluster (クラスタを追加または削除する場合)	X	X	X	X	X
dontuse	X	X	X		
fdisk (x86 のみ)	X	X	X		
filesys (リモートファイルシステムをマウントする場合)		X	X		

表 28-2 プロファイルキーワード (続き)

プロファイルキーワード	インストール方法				
	スタンドアロンシステム (ネットワークに接続されていない)	スタンドアロンシステム (ネットワークに接続されている) またはサーバー	OS サーバー	アップグレード	ディスク容量の再配置を使用するアップグレード
filesys (ローカルファイルシステムを作成する場合)	X	X	X		
forced_deployment (フラッシュ差分アーカイブをインストールする場合)	X	X			
geo	X	X	X	X	X
install_type	X	X	X	X	X
isa_bits	X	X	X	X	X
layout_constraint					X
local_customization (フラッシュアーカイブをインストールする場合)	X	X			
locale	X	X	X	X	X
no_master_check (フラッシュ差分アーカイブをインストールする場合)	X	X			
no_content_check (フラッシュ差分アーカイブをインストールする場合)	X	X			
num_clients			X		
package	X	X	X	X	X
partitioning	X	X	X		
root_device	X	X	X	X	X
system_type	X	X	X		
usedisk	X	X	X		

## プロファイルキーワードの説明と例

### archive\_location プロファイルキーワード

archive\_location *retrieval\_type* *location*

*retrieval\_type* と *location* の値は、フラッシュアーカイブの格納場所によって異なります。*retrieval\_type* と *location* に使用できる値や、*archive\_location* キーワードの使用例については、次の各項を参照してください。

- 294 ページの「ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー」
- 294 ページの「HTTP サーバー」
- 296 ページの「FTP サーバー」
- 297 ページの「ローカルテープ」
- 297 ページの「ローカルデバイス」
- 298 ページの「ローカルファイル」

## ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー

アーカイブがネットワークファイルシステム (NFS) サーバーに格納されている場合は、*archive\_location* プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location nfs server_name:/path/filename retry n
```

<i>server_name</i>	アーカイブを格納するサーバーの名前です。
<i>path</i>	指定したサーバーから取得するアーカイブの場所です。このパスに \$HOST を含めると、フラッシュインストールユーティリティは \$HOST をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。
<i>filename</i>	フラッシュアーカイブファイルの名前です。
<i>retry n</i>	省略可能なキーワードです。 <i>n</i> は、フラッシュユーティリティがアーカイブのマウントを試みる最大回数です。

例:

```
archive_location nfs golden:/archives/usrarchive
```

```
archive_location nfs://golden/archives/usrarchive
```

## HTTP サーバー

アーカイブが HTTP サーバーに格納されている場合は、*archive\_location* プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location http://server_name:port path/filename optional_keywords
```

<i>server_name</i>	アーカイブを格納するサーバーの名前です。 <i>server_name</i> は、ポート番号でも、実行時に決定されるポート番号を持つ TCP サービスの名前でもかまいません。
--------------------	--

<i>port</i>	オプションのポートです。ポートを指定しない場合、フラッシュインストールユーティリティはデフォルトの HTTP ポート番号、80 を使用します。
<i>path</i>	指定したサーバーから取得するアーカイブの場所です。このパスに \$HOST を含めると、フラッシュインストールユーティリティは \$HOST をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。
<i>filename</i>	フラッシュアーカイブファイルの名前です。
<i>optional_keywords</i>	フラッシュアーカイブを HTTP サーバーから取得するときに指定できるオプションのキーワードです。

表 28-3 *optional\_keywords* で使用可能なオプションのキーワード

キーワード	値の定義
<i>auth basic user_name password</i>	<p>アーカイブがパスワード保護された HTTP サーバーに格納されている場合は、その HTTP サーバーへのアクセスに必要なユーザー名とパスワードをプロファイルに含める必要があります。</p> <p>注 - カスタム JumpStart で使用しようとするプロファイルにおいてこの認証方法を使用することは、リスクを伴います。これは、承認されていないユーザーが、パスワードが入ったプロファイルにアクセスできる可能性があるためです。</p>
<i>timeout min</i>	<p><i>timeout</i> キーワードには、HTTP サーバーからのデータ受信を待機する最長の時間を分単位で指定できます。この時間に達すると、接続が切断されて、再接続が行われ、タイムアウトが発生した地点から再開されます。<i>timeout</i> 値として 0 (ゼロ) を指定すると、何も起きないため再接続されません。</p> <p>タイムアウトによる再接続が発生すると、フラッシュインストールユーティリティはアーカイブを取得した最後の位置からインストールの再開を試みます。この位置でのインストールの再開が不可能な場合、アーカイブの初めから再度データの取得が行われ、タイムアウト前に取得されたデータは破棄されます。</p>
<i>proxy host:port</i>	<p><i>proxy</i> キーワードを使用して、プロキシホストとプロキシポートを指定できます。プロキシホストを使用すると、ファイアウォール越しにフラッシュアーカイブを取得できます。<i>proxy</i> キーワードを指定する場合は、プロキシポートを指定する必要があります。</p>

例:

```
archive_location http://silver/archives/usrarchive.flar timeout 5
```

*auth basic user\_name password* キーワードの例:

```
archive_location http://silver/archives/usrarchive.flar timeout 5 user1 secret
```

## FTP サーバー

アーカイブが FTP サーバーに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location ftp://user_name:password@server_name:port path/filename optional_keywords
```

<i>user_name:password</i>	プロファイルファイルにおいて、FTP サーバーにアクセスするために必要なユーザー名とパスワードです。
<i>server_name</i>	アーカイブを格納するサーバーの名前です。 <i>server_name</i> は、ポート番号でも、実行時に決定されるポート番号を持つ TCP サービスの名前でもかまいません。
<i>port</i>	オプションのポートです。ポートを指定しない場合、フラッシュインストールユーティリティはデフォルトの FTP ポート番号 21 を使用します。
<i>path</i>	指定したサーバーから取得するアーカイブの場所です。このパスに \$HOST を含めると、フラッシュインストールユーティリティは \$HOST をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。
<i>filename</i>	フラッシュアーカイブファイルの名前です。
<i>optional_keywords</i>	フラッシュアーカイブを FTP サーバーから取得するときに指定できるオプションのキーワードです。

表 28-4 `archive_location ftp` で使用可能なオプションのキーワード

キーワード	値の定義
<i>timeout min</i>	<p><code>timeout</code> キーワードには、FTP サーバーからのデータ受信を待機する最長の時間を分単位で指定できます。この時間に達すると、接続が切断されて、再接続が行われ、タイムアウトが発生した地点から再開されます。<code>timeout</code> 値として 0 (ゼロ) を指定すると、何も起きないため再接続されません。</p> <p>タイムアウトによる再接続が発生すると、フラッシュインストールユーティリティはアーカイブを取得した最後の位置からインストールの再開を試みます。この位置でのインストールの再開が不可能な場合、アーカイブの初めから再度データの取得が行われ、タイムアウト前に取得されたデータは破棄されます。</p>
<i>proxy host:port</i>	<p><code>proxy</code> キーワードを使用して、プロキシホストとプロキシポートを指定できます。プロキシホストを使用すると、ファイアウォール越しにフラッシュアーカイブを取得できます。<code>proxy</code> キーワードを指定する場合は、プロキシポートを指定する必要があります。</p>

例:

```
archive_location ftp://user1:secret@silver/archives/usrarchive.flar timeout 5
```



## ローカルテープ

アーカイブがテープに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location local_tape device position
```

<i>device</i>	フラッシュアーカイブを格納したテープドライブの名前です。デバイス名が正規のパスである場合は、フラッシュインストールユーティリティはデバイスノードへのパスからアーカイブを取得します。正規のパスでないデバイス名を指定した場合は、フラッシュインストールユーティリティはパスに <code>/dev/rmt/</code> を加えます。
<i>position</i>	アーカイブを保存したテープドライブ上の位置を示します。位置が指定されないと、フラッシュインストールユーティリティはテープドライブの現在の位置からアーカイブを取得します。 <i>position</i> を指定することにより、テープドライブ上でアーカイブの前に開始スクリプトまたは <code>sysidcfg</code> ファイルを配置できます。

例:

```
archive_location local_tape /dev/rmt/0n 5
```

```
archive_location local_tape 0n 5
```

## ローカルデバイス

ファイルシステム指向のランダムアクセスデバイス (フロッピーディスクや CD-ROM など) にフラッシュアーカイブを格納した場合は、ローカルデバイスからフラッシュアーカイブを取得できます。`archive_location` プロファイルキーワードには次の構文を使用します。

---

注 - ローカルテープ用の構文を使用すると、ストリーム指向のデバイス (テープなど) からアーカイブを取得できます。

---

```
archive_location local_device device path/filename file_system_type
```

<i>device</i>	フラッシュアーカイブを格納したドライブの名前です。デバイス名が正規のパスである場合は、デバイスは直接マウントされます。正規のパスでないデバイス名を指定すると、フラッシュインストールユーティリティはパスに <code>/dev/dsk/</code> を加えます。
<i>path</i>	フラッシュアーカイブへのパスです (指定したデバイス上のファイルシステムのルートからの相対的なパス)。このパスに <code>\$HOST</code> を含めると、フラッシュインストールユーティリティは <code>\$HOST</code> をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。

<i>filename</i>	フラッシュアーカイブファイルの名前です。
<i>file_system_type</i>	デバイス上のファイルシステムのタイプを指定します。ファイルシステムのタイプを指定しない場合、フラッシュインストールユーティリティは、UFS ファイルシステムのマウントを試みます。UFS のマウントに失敗すると、フラッシュインストールユーティリティは HSFS ファイルシステムのマウントを試みます。

例:

UFS ファイルシステムとしてフォーマットされているローカルハードディスクからアーカイブを取得するには、次のコマンドを使用します。

```
archive_location local_device c0t0d0s0 /archives/$HOST
```

HSFS ファイルシステムを持つローカル CD-ROM からアーカイブを取得するには、次のコマンドを使用します。

```
archive_location local_device c0t0d0s0 /archives/usrarchive
```

## ローカルファイル

クローンシステムをブートしたミニルートに格納したローカルファイルのアーカイブを取得できます。カスタム JumpStart インストールを実施する時に、CD-ROM または NFS ベースのミニルートからシステムをブートします。このミニルートからインストールソフトウェアがロードされ、実行されます。したがって、CD-ROM または NFS ベースのミニルートに格納したフラッシュアーカイブは、ローカルファイルとしてアクセスできます。archive\_location プロファイルキーワードには次の構文を使用します。

```
archive_location local_file path/filename
```

<i>path</i>	アーカイブの位置です。このパスは、システムを Solaris 9 INSTALLATION CD または Solaris 9 DVD からブートしている間、システムにローカルファイルとしてアクセスできるものでなければなりません。Solaris 9 INSTALLATION CD または Solaris 9 DVD からブートしている間は、システムは /net にアクセスできません。
<i>filename</i>	フラッシュアーカイブファイルの名前です。

例:

```
archive_location local_file /archives/usrarchive
```

## backup\_media プロファイルキーワード

```
backup_media type path
```

---

注 - backup\_media は、ディスク容量の再配置が必要なアップグレードオプションだけで使用できません。

---

backup\_media は、ディスク容量不足のためにアップグレード中にディスク容量の再配置が必要なファイルシステムのバックアップをとるために使用するメディアを定義します。バックアップ用に複数のテープまたはフロッピーディスクが必要な場合は、アップグレード中にテープまたはフロッピーディスクの挿入を求めるプロンプトが表示されます。

有効な <i>type</i> 値	有効な <i>path</i> 値	仕様
local_tape	/dev/rmt/ <i>n</i>	アップグレードされるシステムのローカルテープドライブを指定する。 <i>path</i> は、テープドライブのキャラクタ型 (raw) デバイスパスである必要がある。 <i>n</i> はテープドライブの番号
local_diskette	/dev/rdisketten	アップグレードされるシステムのローカルフロッピーディスクドライブを指定する。 <i>path</i> は、フロッピーディスクドライブのキャラクタ型 (raw) デバイスパスである必要がある。 <i>n</i> はフロッピーディスクドライブの番号  バックアップに使用するフロッピーディスクはフォーマットされていない
local_filesystem	/dev/dsk/cwtxdysz /file_system	アップグレードされるシステムのローカルファイルシステムを指定する。アップグレードで変更されるローカルファイルシステムは指定できない。 <i>path</i> は、ディスクスライスのブロックデバイスパスでもかまわない。たとえば、/dev/dsk/c wtx dys z 内の t x は必須ではない。あるいは、 <i>path</i> は /etc/vfstab ファイルによってマウントされたファイルシステムへの絶対パスでもかまわない
remote_filesystem	host: /file_system	リモートシステムの NFS ファイルシステムを指定する。 <i>path</i> は、リモートシステム ( <i>host</i> ) の名前または IP アドレスと、NFS ファイルシステム ( <i>file_system</i> ) への絶対パスを含まなければならない。NFS ファイルシステムは、読み取り権と書き込み権を持っている必要がある

有効な <i>type</i> 値	有効な <i>path</i> 値	仕様
<code>remote_system</code>	<code>user@host:/directory</code>	リモートシェル ( <code>rsh</code> ) で到達できるリモートシステム上のディレクトリを指定する。アップグレードされるシステムは、リモートシステムの <code>.rhosts</code> ファイル経由で、リモートシステムにアクセスできなければならない。 <i>path</i> は、リモートシステム ( <code>host</code> ) の名前と、そのディレクトリ ( <code>directory</code> ) への絶対パスを含まなければならない。ユーザーログイン ( <code>user</code> ) を指定しないと、スーパーユーザーとしてログインされる

例:

```
backup_media local_tape /dev/rmt/0

backup_media local_diskette /dev/rdiskette1

backup_media local_filesystem /dev/dsk/c0t3d0s4

backup_media local_filesystem /export

backup_media remote_filesystem system1:/export/temp

backup_media remote_system user1@system1:/export/temp
```

## boot\_device プロファイルキーワード

`boot_device device eeprom`

`boot_device` には、JumpStart がルート (/) ファイルシステムをインストールするデバイスと、システムのブートデバイスを指定します。

`boot_device` キーワードをプロファイルに指定しない場合、インストール中にデフォルトで次の `boot_device` キーワードが指定されます。 `boot_device any update`.

*device* – 以下の値のいずれかを使用して、ブートデバイスにするデバイスを指定します。

- SPARC: `cwtxdysz` または `cxdysz` – JumpStart プログラムがルート (/) ファイルシステムを格納するディスクスライス。たとえば、`c0t0d0s0`。
- x86: `cwtxdy` または `cxdy` – JumpStart プログラムがルート (/) ファイルシステムを格納するディスク。たとえば、`c0d0`。
- `existing` – JumpStart プログラムは、システムの既存のブートデバイスにルート (/) ファイルシステムを格納します。
- `any` – JumpStart プログラムは、ルート (/) ファイルシステムを配置する場所を選択します。システムの既存のブートデバイスを使用する場合もありますが、必要であれば異なるブートデバイスを選択します。

*eeprom* - システムの EEPROM を変更または保存する場合に選択します。

SPARC: システムの EEPROM を、指定したブートデバイスに変更または保存する場合に選択します。

x86: *preserve* 値を指定する必要があります。

- *update - JumpStart* プログラムは、インストールされるシステムが自動的に指定したブートデバイスからブートするように、システムの EEPROM をそのブートデバイスに変更します。
- *preserve* - システムの EEPROM 中のブートデバイス値は変更されません。システムの EEPROM を変更しないで新しいブートデバイスを指定した場合は、システムが新しいブートデバイスから自動的にブートするように、システムの EEPROM を手作業で変更する必要があります。

---

注 - SPARC: SPARC システムでは、システムの現在のブートデバイスを変更する場合、*eeprom* の値でもシステムの EEPROM を変更できます。これにより、システムは新しいブートデバイスから自動的にブートできます。

---

例:

```
boot_device c0t0d0s2 update
```

---

注 - *boot\_device* は、ルートファイルシステムを指定する *filesys* キーワードと *root\_device* キーワード (指定した場合) に一致する必要があります。

---

## client\_arch プロファイルキーワード

*client\_arch karch\_value ...*

*client\_arch* は、OS サーバーが、それ自体が使用するものとは異なるプラットフォームグループをサポートすることを定義します。*client\_arch* を指定しない場合、OS サーバーを使用するどのディスクレスクライアントも、サーバーと同じプラットフォームグループでなくてはなりません。OS サーバーがサポートしてほしいプラットフォームグループごとに指定する必要があります。

*karch\_value* に有効な値は、*sun4m*、*sun4u*、および *i86pc* です。プラットフォーム名と各種システムについての詳細は、『Solaris 9 ハードウェアマニュアル』を参照してください。

---

注 - *client\_arch* は、*system\_type* に *server* を指定したときだけ使用できます。

---

## client\_root プロファイルキーワード

`client_root root_size`

`client_root` は、各クライアント用に割り当てるルート領域の大きさ (`root_size`、M バイト単位) を定義します。サーバーのプロファイルに `client_root` を指定しないと、インストールソフトウェアは1つのクライアント当たり 15M バイトのルート領域を割り当てます。このクライアント用のルート領域の大きさは、`num_clients` キーワードを組み合わせて、`/export/root` ファイルシステム用に確保する領域の大きさを決定するときに使用されます。

---

注 - `client_root` は、`system_type` に `server` を指定したときだけ使用できません。

---

## client\_swap プロファイルキーワード

`client_swap swap_size`

プロファイル内の `client_swap` は、各ディスクレスクライアントに割り当てるスワップ領域の大きさ (`swap_size`、M バイト単位) を定義します。`client_swap` を指定しない場合、32M バイトのスワップ領域がデフォルトで割り当てられます。

例:

```
client_swap 64
```

この例は、各ディスクレスクライアントが 64M バイトのスワップ領域を持つことを定義します。

---

注 - `client_swap` は、`system_type` に `server` を指定したときだけ使用できません。

---

## スワップサイズを決定する方法

プロファイルがスワップのサイズを指定していない場合、JumpStart プログラムはシステムの物理メモリーに基づいてスワップ空間のサイズを決定します。表 28-5 に、カスタム JumpStart インストール中にスワップのサイズがどのように決定されるかを示します。

表 28-5 スワップのサイズの決定

物理メモリー (単位: M バイト)	スワップ領域 (単位: M バイト)
16-64	32

表 28-5 スワップのサイズの決定 (続き)

物理メモリー (単位: M バイト)	スワップ領域 (単位: M バイト)
64-128	64
128-512	128
512 を超える場合	256

JumpStart プログラムはスワップのサイズがスワップが作成されるディスクの 20% を超えないようにします。ただし、他のファイルシステムを配置した後に空き領域が残っている場合を除きます。空き領域が残っている場合、JumpStart プログラムは空き領域をスワップに割り当てて、可能であれば、表 28-5 に示す量を割り当てます。

注 - 物理メモリーとスワップ領域の合計は、32M バイト以上必要です。

## cluster プロファイルキーワード (ソフトウェアグループの追加)

`cluster group_name`

`cluster` は、どのソフトウェアグループをシステムに追加するかを指定します。各ソフトウェアグループの `group_name` 名は次のとおりです。

ソフトウェアグループ	group_name
コアシステムサポート	SUNWCreq
エンドユーザーシステムサポート	SUNWCuser
開発者システムサポート	SUNWCprog
全体ディストリビューション	SUNWCall
全体ディストリビューションと OEM サポート	SUNWCxall

1 つのプロファイルに指定できるソフトウェアグループの数は 1 つだけです。ソフトウェアグループは、ほかの `cluster` エントリおよび `package` エントリよりも前に指定する必要があります。プロファイル内の `cluster` でソフトウェアグループを指定しない場合、デフォルトによりエンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループ (SUNWCuser) がシステムにインストールされます。

## cluster プロファイルキーワード (クラスタの追加または削除)

```
cluster cluster_name add_delete_switch
```

---

注 - cluster (クラスタの追加または削除) は、初期インストールオプションとアップグレードオプションの両方で使用できます。

---

cluster は、システムにインストールされるソフトウェアグループにクラスタを追加または削除するかを指定します。

cluster\_name は SUNWCname 形式で指定します。インストールが終了したシステムで Admintool を起動し、「ブラウズ」メニューから「ソフトウェア」を選択すると、クラスタの詳細情報とクラスタ名を表示できます。

add\_delete\_switch は、オプション add または delete を示します。このオプションを使用すると、指定したクラスタを追加または削除できます。add\_delete\_switch を指定しないと、デフォルトによって add が使用されます。

次に、アップグレード時に cluster (クラスタの追加または削除) を使用した場合の動作を示します。

- すでにシステムにあるすべてのクラスタが自動的にアップグレードされます。
- cluster\_name add を指定したが、cluster\_name がシステムにインストールされていなかった場合、そのクラスタがインストールされます。
- cluster\_name delete を指定したが、cluster\_name がシステムにインストールされていた場合、アップグレードが開始される前にそのパッケージは削除されます。

## dontuse プロファイルキーワード

```
dontuse disk_name ...
```

partitioning default が指定されると、デフォルトではシステム上のすべての使用可能ディスクが使用されます。dontuse は、JumpStart プログラムに使用させないディスク (1 つ以上) を指定するために使用します。disk\_name は cxydz または cydz 形式 (たとえば、c0t0d0) で指定する必要があります。

---

注 - 1 つのプロファイルで、dontuse キーワードと usedisk キーワードを同時に指定することはできません。

---

## x86: fdisk プロファイルキーワード

```
fdisk disk_name type size
```



fdisk は、x86 システムで fdisk パーティションを設定する方法を定義します。fdisk は 2 回以上指定できます。次に、fdisk によって x86 システムのパーティション設定を行う際の動作を示します。

- fdisk キーワードを使って (*size* に delete か 0 を指定して) 削除しないかぎり、ディスク上のすべての fdisk パーティションが保存されます。また、*size* が all の場合は、既存のすべての fdisk パーティションが削除されます。
- ルート (/) ファイルシステムを含む Solaris fdisk パーティションは、そのディスク上でアクティブパーティションとして常に指定されます。

---

**x86 のみ** – システムは、デフォルトでアクティブパーティションから起動します。

---

- プロファイルで fdisk キーワードを指定しないと、インストール時にデフォルトで次の fdisk キーワードが指定されます。

```
fdisk all solaris maxfree
```

- fdisk エントリは、プロファイルに指定されている順序で処理されます。

*disk\_name* – 次の値を使用して、fdisk パーティションを作成または削除する場所を指定します。

- *cxydz* または *cydz* – 特定のディスク。たとえば、c0t3d0
- *rootdisk* – システムのルートディスク値を含む変数。318 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」で説明しているように、これは JumpStart プログラムで決定されます。
- *all* – 選択されたすべてのディスク

*type* – 次の値を使用し、指定したディスク上で作成または削除する fdisk パーティションのタイプを指定します。

- *solaris* – Solaris fdisk パーティション (SUNIXOS fdisk タイプ)
- *dosprimary* – 一次 DOS fdisk パーティションの別名 (データ DOS 用に拡張または予約されている fdisk パーティションの別名ではない)。*size* に値 delete を指定して fdisk パーティションを削除する場合、*dosprimary* は DOSHUGE、DOSOS12、および DOSOS16 fdisk タイプの別名になります。fdisk パーティションを作成する場合、*dosprimary* は DOSHUGE fdisk パーティションの別名になります。
- *DDD* – 整数で表す fdisk パーティション (有効な値は 1 から 255 までの整数)

---

**x86 のみ** – この値は *size* に delete を指定した場合のみ指定できます。

---

- *0xHH* – 16 進数で表す fdisk パーティション (有効な値は 01 から FF までの 16 進数)

---

**x86** のみ – この値は *size* に *delete* を指定した場合のみ指定できます。

---

いくつかの *fdisk* タイプの整数と 16 進数での表し方を次の表に示します。

<i>fdisk</i> タイプ	<i>DDD</i>	<i>HH</i>
DOSOS12	1	01
PCIXOS	2	02
DOSOS16	4	04
EXTDOS	5	05
DOSHUGE	6	06
DOSDATA	86	56
OTHEROS	98	62
UNIXOS	99	63

*size* - 次の中から 1 つを使用します。

- *DDD* - サイズが *DDD* (M バイト単位) の *fdisk* パーティションを、指定したディスク上に作成します。*DDD* は整数で指定する必要があります。JumpStart プログラムは、この数値を一番近いシリンダの境界に自動的に繰り上げます。値 0 を指定すると、*delete* を指定するのと同じになります。
- *all* - *fdisk* ディスク全体に 1 つのパーティションを作成します (既存の *fdisk* パーティションはすべて削除される)。

---

**x86** のみ – 値 *all* を指定できるのは、*type* が *solaris* の場合だけです。

---

- *maxfree* - 指定したディスク上の最も大きい連続する空き領域に *fdisk* パーティションを作成します。ディスク上にすでに指定した *type* の *fdisk* パーティションがあると、その既存の *fdisk* パーティションを使用します (新しい *fdisk* パーティションはディスク上に作成されません)。

---

**x86** のみ – ディスクには、空き領域と未使用の *fdisk* パーティションが 1 つ以上存在しなければなりません。領域が確保されないとインストールは失敗します。値 *maxfree* を指定できるのは、*type* が *solaris* または *dosprimary* の場合だけです。

---

- `delete` - 指定した `type` のすべての `fdisk` パーティションを指定したディスク上で削除します。

## filesystem プロファイルキーワード (リモートファイルシステムのマウント)

```
filesystem server:path server_address mount_pt_name [mount_options]
```

これらの値を指定して `filesystem` を使用すると、JumpStart プログラムはインストールされているシステムがそのブート時に自動的にリモートファイルシステムをマウントするように設定します。 `filesystem` は 2 回以上指定できます。

例:

```
filesystem sherlock:/export/home/user2 - /home
```

`server:` - リモートファイルシステムが存在するサーバー名 (後ろにコロンを付けます)

`path` - リモートファイルシステムのマウントポイント名 (例: `/usr`、`/export/home` など)

`server_address` - `server:path` で指定するサーバーの IP アドレス。ネットワーク上で実行されているネームサービスがない場合、この値 `server_address` を使用して、サーバーのホスト名と IP アドレスを登録している `/etc/hosts` ファイルを生成できます。サーバーの IP アドレスを指定しない場合は、マイナス記号 (-) を指定してください。たとえば、ネットワーク上で実行中のネームサービスがある場合、サーバーの IP アドレスを指定する必要がありません。

`mount_pt_name` - リモートファイルシステムをマウントするマウントポイント名

`mount_options` - 1 つ以上のマウントオプション (`mount (1M)` コマンドの `-o` オプションと同じ)。これらのマウントオプションは、指定された `mount_pt_name` の `/etc/vfstab` エントリに追加されます。

---

注 - 複数のマウントオプションを指定する場合は、マウントオプションはスペースではなくコンマで区切ってください。例: `ro,quota`

---

## filesystem プロファイルキーワード (ローカルファイルシステムの作成)

```
filesystem slice size [file_system optional_parameters]
```

これらの値を指定して `filesystem` を使用すると、JumpStart プログラムによりインストール時にローカルファイルシステムが作成されます。 `filesystem` は 2 回以上指定できます。

`slice` - 次の中から 1 つを指定します。

- `any` - JumpStart プロファイルは、ファイルシステムを任意のディスクに配置しません。

---

注 - `size` が `existing`、`all`、`free`、`start:size`、または `ignore` の場合は、`any` は指定できません。

---

- `cwtxdysz` または `cxdysz` - JumpStart プログラムがファイルシステムを配置するディスクスライス。たとえば、`c0t0d0s0` または `c0d0s0`。
- `rootdisk.sn` - システムのルートディスク値が含まれる変数。318 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」に示されているように、この値は JumpStart プログラムが決定します。拡張子 `sn` は、ディスク上の特定のスライスを示します。

`size` - 次の中から 1 つを使用します。

- `num` - ファイルシステムのサイズを `num` (M バイト単位) で設定します。
- `existing` - 既存のファイルシステムの現在のサイズを使用します。

---

注 - `existing` の値を使用すると、別の `mount_pt_name` として `file_system` を指定することによって、既存のスライス名を変更できます。

---

- `auto` - 選択したソフトウェアに応じて、ファイルシステムのサイズを自動的に決定します。
- `all` - 指定した `slice` は、そのファイルシステム用にディスク全体を使用します。この値を指定すると、指定したディスク上にはほかのファイルシステムは存在できません。
- `free` - ディスク上の残りの未使用領域をファイルシステム用に使用します。

---

注 - `filesys` の値として `free` を使用する場合は、`filesys` はプロファイルの最後のエントリにする必要があります。

---

- `start:size` - ファイルシステムを明示的にパーティションに分割します。`start` はスライスが始まるシリンダであり、`size` はそのスライスのシリンダ数です。

`file_system` - `slice` に `any` または `cwtxdysz` を指定しているときに、このオプション値を使用できます。この値を指定しないと `unnamed` がデフォルトで設定されますが、この場合 `optional_parameters` 値を指定できません。次のいずれかの値を使用します。

- `mount_pt_name` - ファイルシステムのマウントポイント名 (例: `/var`)。
- `swap` - 指定した `slice` をスワップとして使用します。

- `overlap` – 指定した `slice` をディスク領域 (VTOC 値は `V_BACKUP`) を表すものとして定義します。デフォルトでは、スライス 2 はディスク全体を表すオーバーラップスライスです。

---

注 – `size` に `existing`、`all`、または `start:size` を指定した場合だけ `overlap` を指定できます。

---

- `unnamed` – 指定した `slice` は `raw` スライスと定義されるので、`slice` にはマウントポイント名がありません。`file_system` を指定しないと、デフォルトで `unnamed` が設定されます。
- `ignore` – 指定した `slice` を使用しないか、JumpStart プログラムで認識しません。このオプションは、インストール時にディスク上の特定のファイルシステムを無視させるために使用できます。JumpStart プログラムは、同じディスク上に同じ名前で新しいファイルシステムを作成します。`ignore` は、`partitioning existing` を指定したときだけ使用できます。

`optional_parameters` – 次のいずれか 1 つを使用します。

- `preserve` – 指定した `slice` 上のファイルシステムを保存します。

---

注 – `size` に `existing`、`slice` に `cwtxdysz` を指定した場合だけ `preserve` を指定できます。

---

- `mount_options` – 1 つ以上のマウントオプション (`mount (1M)` コマンドの `-o` オプションと同じ)。これらのマウントオプションは、指定された `mount_pt_name` の `/etc/vfstab` エントリに追加されます。

---

注 – 複数のマウントオプションを指定する場合は、マウントオプションはスペースではなくコンマで区切ってください。例: `ro,quota`

---

## forced\_deployment プロファイルキーワード (フラッシュ差分アーカイブのインストール)

`forced_deployment`

`forced_deployment` を指定すると、クローンシステムがカスタム JumpStart の想定するシステムと異なる場合でもフラッシュ差分アーカイブを強制的にインストールします。



---

注意 - `forced_deployment` を使用すると、クローンシステムを期待される状態にするために、新規ファイルがすべて削除されます。ファイルを削除して良いかどうか判断できない場合には、デフォルトを使用してください。デフォルトでは、新規ファイルが削除されそうになると、インストールが停止します。

---

## geo プロファイルキーワード

`geo locale`

---

注 - `geo` は、初期インストールとアップグレードオプションの両方で使用できます。

---

`geo` は、システムにインストールする地域ロケールか、あるいはシステムのアップグレード時に追加する地域ロケールを指定します。`locale` に指定できる値は、次のとおりです。

---

値	説明
<code>N_Africa</code>	北アフリカ。エジプトを含む
<code>C_America</code>	中央アメリカ。コスタリカ、エルサルバドル、グアテマラ、メキシコ、ニカラグア、パナマを含む
<code>N_America</code>	北アメリカ。カナダ、アメリカ合衆国を含む
<code>S_America</code>	南アメリカ。アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、コロンビア、エクアドル、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラを含む
<code>Asia</code>	アジア。日本、韓国、中華人民共和国、台湾、タイを含む
<code>Ausi</code>	オーストラリア。オーストラリア、ニュージーランドを含む
<code>C_Europe</code>	中央ヨーロッパ。オーストリア、チェコ、ドイツ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキア、スイスを含む
<code>E_Europe</code>	東ヨーロッパ。アルバニア、ボスニア、ブルガリア、クロアチア、エストニア、ラトビア、リトアニア、マケドニア、ルーマニア、ロシア、セルビア、スロヴェニア、トルコを含む
<code>N_Europe</code>	北ヨーロッパ。デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、スウェーデンを含む
<code>S_Europe</code>	南ヨーロッパ。ギリシャ、イタリア、ポルトガル、スペインを含む
<code>W_Europe</code>	西ヨーロッパ。ベルギー、フランス、イギリス、アイルランド、オランダを含む

---

---

値	説明
M_East	中近東。イスラエルを含む

---

上記の各地域ロケールを構成するコンポーネントロケール値の完全なリストは、第 40 章に記載されています。

---

注 - システムに追加する必要がある各ロケールごとに、geo キーワードを指定します。

---

## install\_type プロファイルキーワード

*install\_type initial\_upgrade\_flash\_switch*

*install\_type* は、システムにおいて、(既存の Solaris オペレーティング環境を) 消去して、新しい Solaris オペレーティング環境をインストールするか、既存の Solaris オペレーティング環境をアップグレードするか、あるいは、フラッシュアーカイブをインストールするかを定義します。

---

注 - *install\_type* は必須であり、各プロファイル内で最初のプロファイルキーワードとして指定する必要があります。

---

*initial\_upgrade\_flash\_switch* には、次のオプションのうちの 1 つを使用する必要があります。

- *initial\_install* - Solaris オペレーティング環境を初期インストールすることを指定します。
- *upgrade* - Solaris オペレーティング環境をアップグレードすることを指定します。
- *flash\_install* - すべてのファイルを上書きする フラッシュアーカイブをインストールすることを指定します。
- *flash\_update* - 指定したファイルだけを上書きする フラッシュ差分アーカイブをインストールすることを指定します。

---

注 - プロファイルキーワードの中には、*initial\_install* オプションでしか使用できないものがあります。*upgrade* オプションでしか使用できないものもあります。また、*flash\_install* オプションでしか使用できないものがあります。

---

## isa\_bits プロファイルキーワード

*isa\_bits bit\_switch*

`isa_bits` は、64 ビットまたは 32 ビットの Solaris 9 パッケージをインストールするかどうかを指定します。

`bit_switch` は、オプション 64 または 32 を表します。これは、64 ビットまたは 32 ビットのどちらの Solaris 9 パッケージをインストールするかを指定するために使用します。このキーワードをプロファイルに設定しないと、JumpStart プログラムによって、次のものがインストールされます。

- UltraSPARC™ システムの場合は 64 ビットパッケージ
- それ以外のシステムの場合は 32 ビットパッケージ

---

注 - `isa_bits` キーワードを使用する場合は、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD または Solaris 9 DVD 上の `solaris_9/Misc/jumpstart_sample` ディレクトリの最新の `check` スクリプトを使用する必要があります。

---

## layout\_constraint プロファイルキーワード

`layout_constraint slice constraint [minimum_size]`

---

注 - `layout_constraint` は、ディスク容量の再配置が必要なアップグレードオプションだけで使用できます。

---

`layout_constraint` は、ファイルシステムがディスク容量不足のためにアップグレード中にディスク容量を再配置する必要がある場合に、制約付き自動配置がファイルシステムで行われることを示します。

`layout_constraint` キーワードを指定しないと、次のように配置されます。

- アップグレード用により多くの容量を必要とするファイルシステムは、`changeable` とマークされます。
- より多くの容量を必要とするファイルシステムと同じディスク上にあるファイルシステム (`/etc/vfstab` ファイルでマウントされる) も `changeable` とマークされません。
- 残りのファイルシステムは `fixed` とマークされます。これは、自動配置がこれらのファイルシステムを変更できないためです。

1 つ以上の `layout_constraint` キーワードを指定すると、次のように配置されます。

- アップグレード用により多くの容量を必要とするファイルシステムは、`changeable` とマークされます。
- `layout_constraint` キーワードを指定したファイルシステムは、指定した制約がマークされます。
- 残りのファイルシステムは、`fixed` とマークされます。



アップグレードにより多くの容量を必要とするファイルシステムの制約は変更できませんが (changeable とマークされなければならない)、このようなファイルシステムに layout\_constraint キーワードを使用すれば、その *minimum\_size* 値を変更できます。

---

注 – 自動配置がディスク容量の再配置を行う際には、より多くのファイルシステム、特にアップグレード用により多くの容量を必要とするファイルシステムと同じディスク上にあるファイルシステムを、changeable または movable であると選択します。

---

*slice* – これは、制約を指定するファイルシステムのディスクスライスです。システムのディスクスライスは *cwtxdysz* または *cxdysz* 形式で指定する必要があります。

*constraint* – 指定したファイルシステムに対して、次のいずれか 1 つの制約を選択します。

- *changeable* – 自動配置はファイルシステムをほかの場所に移動して、そのサイズを変更できます。この制約は、*/etc/vfstab* ファイルによってマウントされたファイルシステムにしか指定できません。*minimum\_size* 値を指定すれば、ファイルシステムのサイズを変更できます。

ファイルシステムを *changeable* とマークして、*minimum\_size* 値を指定しないと、そのファイルシステムの最小サイズは、必要な最小サイズより 10% 大きな値に設定されます。たとえば、ファイルシステムの最小サイズが 100M バイトの場合、変更されるサイズは 110M バイトになります。*minimum\_size* を指定した場合、残りの空き領域 (元のサイズから最小サイズを引いたもの) はほかのファイルシステム用に使用されます。

- *movable* – 自動配置はファイルシステムを (同じディスクまたは異なるディスク上の) ほかのスライスに移動できますが、サイズは変更しません。
- *available* – 自動配置は、ファイルシステムのすべての領域を使用して領域を割り当て直します。ファイルシステムのすべてのデータは失われます。この制約は、*/etc/vfstab* ファイルでマウントされないファイルシステムだけに指定できません。
- *collapse* – 自動配置は、指定したファイルシステムをその親ファイルシステムに移動して閉じこめます。このオプションは、アップグレードの一部としてシステム上のファイルシステム数を減らすために使用できます。たとえば、システムにファイルシステム */usr* と */usr/share* が存在する場合、*/usr/share* ファイルシステムを閉じ込めると、このファイルシステムは */usr* (その親) に移動します。この制約は、*/etc/vfstab* ファイルでマウントされるファイルシステムにしか指定できません。

*minimum\_size* – この値は、自動配置がディスク容量を再配置するときに、ファイルシステムに割り当てる最小サイズを指定します (基本的にファイルシステムのサイズを変更する)。まだ割り当てられていない領域が追加される場合、ファイルシステムのサイズは最終的にこの指定した値より大きくなる可能性があります。しかし、指定され

る値よりサイズが小さくなることはありません。 *minimum\_size* 値は省略可能です。このオプション値を使用できるのは、ファイルシステムを *changeable* とマークした場合だけです。最小サイズは、ファイルシステムの既存の内容に必要なサイズより小さい値には設定できません。

例:

```
layout_constraint c0t3d0s1 changeable 200
```

```
layout_constraint c0t3d0s4 movable
```

```
layout_constraint c0t3d1s3 available
```

```
layout_constraint c0t2d0s1 collapse
```

## local\_customization プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブのインストール)

```
local_customization local_directory
```

クローンシステムにフラッシュアーカイブをインストールする前に、カスタムスクリプトを作成して、クローンシステム上のローカル構成を保存できます。

*local\_customization* キーワードは、これらのスクリプトの格納先ディレクトリを示します。*local\_directory* は、クローンシステム上のスクリプトへのパスです。配置前および配置後スクリプトの詳細は、175 ページの「カスタムスクリプトの作成」を参照してください。

## locale プロファイルキーワード

```
locale locale_name
```

---

注 - *locale* は、初期インストールとアップグレードオプションの両方で使用できます。

---

*locale* は、指定した *locale\_name* に対して、どのロケールパッケージをインストール (アップグレードの場合は追加) するかを指定します。*locale\_name* 値は、*\$LANG* 環境変数で使用されるのと同じです。有効なロケールの値については、第 40 章を参照してください。

*local* キーワードを使用する場合は、次の点を考慮してください。

- デフォルトロケールを事前設定している場合は、そのロケールは自動的にインストールされます。English 言語パッケージはデフォルトでインストールされます。
- *locale* キーワードは、システムに追加するロケールごとに指定できます。

## no\_content\_check プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブのインストール)

no\_content\_check

フラッシュ差分アーカイブを使用してクローンシステムをインストールする場合、no\_content\_check キーワードを使用してファイルごとの検証を省略できます。ファイルごとの検証により、クローンシステムがマスターシステムの複製であることが保証されます。クローンシステムが元のマスターシステムの複製であることが確実にある場合を除き、このキーワードの使用は避けてください。



---

注意 - no\_content\_check を使用すると、クローンシステムを期待される状態にするために、新規ファイルがすべて削除されます。ファイルを削除して良いかどうか判断できない場合には、デフォルトを使用してください。デフォルトでは、新規ファイルが削除されそうになると、インストールが停止します。

---

## no\_master\_check プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブのインストール)

no\_content\_check

フラッシュ差分アーカイブを使用してクローンシステムをインストールする場合、no\_master\_check キーワードを使用して、クローンシステムが元のマスターシステムから構築されたものかどうかのチェックを省略できます。クローンシステムが元のマスターシステムの複製であることが確実にある場合を除き、このキーワードの使用は避けてください。フラッシュ差分アーカイブのインストールについては、267 ページの「カスタム JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」を参照してください。

## num\_clients プロファイルキーワード

num\_clients client\_num

サーバーがインストールされているときには、各ディスクレスクライアントのルート (/) と swap ファイルシステムにディスク空間が割り当てられます。num\_clients は、サーバーがサポートするディスクレスクライアント数 (client\_num) を定義します。num\_clients を指定しないと、デフォルトで5つのディスクレスクライアントが割り当てられます。

---

注 - num\_clients は、system\_type が server として指定されているときだけ使用できます。

---

## package プロファイルキーワード

`package package_name [add_delete_switch]`

---

注 - `package` は、初期インストールとアップグレードオプションの両方で使用できます。

---

`package` は、システムにインストールするソフトウェアグループにパッケージを追加または削除するかを指定します。

`package_name` は、`SUNWname` の形式で指定する必要があります。パッケージとその名前の詳細を表示するには、インストール済みシステムで `pkginfo -l` コマンドを使用します。

`add_delete_switch` は、`add` または `delete` オプションを表します。このオプションは、指定のパッケージを追加または削除するかを指定します。`add_delete_switch` を指定しないと、デフォルトによって `add` が使用されます。

---

注 - いくつかのパッケージは必須であり、削除できないものもあります。各国語対応パッケージを個々に追加または削除するとき、`package` プロファイルキーワードは使用できません。各国語対応パッケージを追加するには、`locale` プロファイルキーワードを使用します。

---

アップグレードに `package` を使用すると、次の処理が行われます。

- すでにシステム上にあるすべてのパッケージが自動的にアップグレードされます。
- `package_name add` を指定したが、`package_name` がシステムにインストールされていない場合は、そのパッケージがインストールされます。
- `package_name delete` を指定したが、`package_name` がシステムにインストールされていた場合、アップグレードが開始される前にそのパッケージは削除されます。
- `package_name delete` を指定したが、`package_name` がシステムにインストールされていない場合、インストールするように指定したクラスタの一部にそのパッケージが含まれていると、パッケージはインストールされません。

## partitioning プロファイルキーワード

`partitioning type`

`partitioning` は、インストール時にファイルシステム用にディスクをスライスに分割する方法を定義します。

`type` - 次の中から 1 つを指定します。

- `default` - `JumpStart` プログラムはディスクを選択して、指定したソフトウェアをインストールするファイルシステムを作成します。ただし、`filesys` キーワードで指定したファイルシステムを除きます。`rootdisk` が最初に選択され、指定したソフトウェアが `rootdisk` に収まらない場合は、さらに別のディスクが使用されます。
- `existing` - `JumpStart` プログラムは、システムのディスク上にある既存のファイルシステムを使用します。/`usr`、/`usr/openwin`、/`opt`、/`var` を除く、すべてのファイルシステムが保存されます。`JumpStart` プログラムは、ファイルシステムのスーパーブロックにある最後のマウントポイントフィールドを使用して、スライスがどのファイルシステムのマウントポイントを表しているかを判断します。

---

注 - `filesys` プロファイルキーワードと `partitioning existing` を組み合わせる場合、`size` は `existing` である必要があります。

---

- `explicit` - `JumpStart` プログラムは、ディスクを使用し、`filesys` キーワードで指定されるファイルシステムを作成します。`filesys` キーワードでルート (/) ファイルシステムだけを指定した場合、すべての Solaris ソフトウェアがルートファイルシステムにインストールされます。

---

注 - `explicit` プロファイル値を使用するときには、`filesys` プロファイルキーワードを使用して、使用するディスクと作成するファイルシステムを指定してください。

---

プロファイルで `partitioning` を指定しないと、デフォルトで `default` タイプのパーティションが使用されます。

## root\_device プロファイルキーワード

`root_device slice`

---

注 - `root_device` は、初期インストールとアップグレードオプションの両方で使用できます。

---

`root_device` は、システムのルートディスクを指定します。詳細は、318 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」を参照してください。

システムをアップグレードする場合、`root_device` は指定されるルート (/) ファイルシステムおよびその `/etc/vfstab` ファイルでマウントされるファイルシステムがアップグレードされることを示します。システム上で複数のルートファイルシステムがアップグレードできる場合は、`root_device` を指定する必要があります。`slice` は、`cwtxdysz` または `cxdysz` 形式で指定してください。

例:

```
root_device c0t0d0s2
```

root\_device キーワードを使用する場合は、次の点を考慮してください。

- 1つだけのディスクを持つシステムで root\_device を指定する場合、root\_device とディスクが一致する必要があります。また、ルートファイルシステムを指定する任意の filesys キーワードは、root\_device と一致する必要があります。
- ミラーをアップグレードする場合、root\_device に指定する値はミラーの一方である必要があります。他方のミラーは自動的にアップグレードされます。

## システムのルートディスクを決定する方法

システムのルートディスクは、ルート (/) ファイルシステムを含むシステム上のディスクです。プロファイル内では、JumpStart プログラムがシステムのルートディスクを設定するディスク名の代わりに、この rootdisk 変数を使用できます。表 28-6 に、JumpStart プログラムがインストール用にシステムのルートディスクを決定する方法を説明しています。

---

注 - システムのルートディスクサイズが確認されるのは、初期インストール時だけです。アップグレードの場合、システムのルートディスクは変更できません。

---

表 28-6 JumpStart がシステムのルートディスクを決定する方法 (初期インストールのみ)

手順	動作
1	プロファイル内で root_device キーワードが指定されている場合、JumpStart プログラムは rootdisk をルートデバイスに設定します。
2	プロファイル内で、rootdisk が設定されていなくて、boot_device キーワードが指定されている場合、JumpStart プログラムは rootdisk をブートデバイスに設定します。
3	プロファイル内で rootdisk が設定されていなくて、filesys cwtxdysz size / エントリが指定されている場合、JumpStart プログラムは rootdisk をエントリで指定されたディスクに設定します。
4	プロファイル内で、rootdisk が設定されていなくて、rootdisk.sn エントリが指定されている場合、JumpStart プログラムはシステムのディスクで、(カーネルのプローブ順で) 指定したスライス上の既存のルートファイルシステムを検索します。ディスクが見つかった場合、JumpStart プログラムは見つかったディスクに rootdisk を設定します。

表 28-6 JumpStart がシステムのルートディスクを決定する方法 (初期インストールのみ)  
(続き)

手順	動作
5	プロファイル内で、 <code>rootdisk</code> が設定されていなくて、 <code>partitioning existing</code> が指定されている場合、JumpStart プログラムはシステムのディスクで、(カーネルのブロード順で) 既存のルートファイルシステムを検索します。ルートファイルシステムが見つからなかった場合、あるいは複数のルートファイルシステムが見つかった場合は、エラーが発生します。ルートファイルシステムが見つかった場合、JumpStart プログラムは見つかったディスクに <code>rootdisk</code> を設定します。
6	プロファイル内で <code>rootdisk</code> が設定されていない場合、JumpStart プログラムは、ルートファイルシステムがインストールされるディスクに <code>rootdisk</code> を設定します。

## system\_type プロファイルキーワード

`system_type type_switch`

`system_type` は、インストールするシステムのタイプを定義します。

`type_switch` は、オプション `standalone` または `server` を表します。このオプションは、Solaris ソフトウェアをインストールするシステムのタイプを指定するために使用します。`system_type` をプロファイルに指定しないと、デフォルトによって `standalone` が使用されます。

## usedisk プロファイルキーワード

`usedisk disk_name ...`

`partitioning default` を指定すると、デフォルトではシステム上のすべての使用可能ディスクが使用されます。`usedisk` プロファイルキーワードには、JumpStart プログラムに使用させる 1 つ以上のディスクを指定します。`disk_name` は、`cxydz` または `cydz` 形式 (たとえば `c0t0d0` または `c0d0s0`) で指定する必要があります。

プロファイルで `usedisk` を指定すると、JumpStart プログラムは `usedisk` キーワードで指定したディスクだけを使用します。

---

注 - 同じプロファイルに `usedisk` キーワードと `dontuse` キーワードを同時に指定することはできません。

---

---

## カスタム JumpStart の環境変数

begin および finish スクリプトには、環境変数を使用できます。たとえば、begin スクリプトは、ディスクサイズ (SI\_DISKSIZE) を抽出し、実際のディスクサイズにもとづいてシステムに特定のパッケージをインストールするかどうかを決定できます。

システムについて収集された情報は、これらの環境変数に格納されます。これらの変数は、通常、rules ファイルに使用するルールキーワードと値によって設定するかどうかが決まります。

たとえば、システムにすでにインストールされているオペレーティングシステムについての情報は、installed キーワードの使用後 SI\_INSTALLED によってしか入手できません

表 28-7 は、これらの変数とその値を説明しています。

表 28-7 インストール環境変数

環境変数	値
CHECK_INPUT	JumpStart ディレクトリ内の rules ファイルへのパス。ファイルは /tmp/install_config/rules にマウントされます。
HOME	インストール時のスーパーユーザーのホームディレクトリ (/tmp/root)
PATH	インストール時のシェル検索パス (/sbin:/usr/sbin/install.d:/usr:/usr/sbin:/usr/bin)
SI_ARCH	インストールクライアントのハードウェアアーキテクチャー。この変数は、rules ファイルで arch キーワードを使用する場合に設定します。
SI_BEGIN	begin スクリプトを使用している場合はその名前
SI_CLASS	インストールクライアントをインストールするために使用されるプロファイルの名前
SI_CONFIG_DIR	JumpStart ディレクトリへのパス。ディレクトリは /tmp/install_config にマウントされます。
SI_CONFIG_FILE	JumpStart ディレクトリ内の rules ファイルへのパス。ファイルは /tmp/install_config/rules にマウントされます。
SI_CONFIG_PROG	rules ファイル
SI_CUSTOM_PROBES_FILE	custom_probes.ok ファイル。ここには、独自のルールキーワードやプローブキーワードを定義できます。custom_probes.ok ファイルを作成して使用すると、デフォルトのルールキーワードのリストを拡張できます (287 ページの「ルールキーワードと値の説明」を参照)。また、このファイルを使用すると、デフォルトのプローブキーワードのリストも拡張できます (322 ページの「プローブキーワードと値」を参照)。



表 28-7 インストール環境変数 (続き)

環境変数	値
SI_DISKLIST	コンマで区切られた、インストールクライアント上のディスク名のリスト。この変数は、rules ファイルで <code>disksize</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。SI_DISKLIST および SI_NUMDISKS 変数は、rootdisk に使用する物理ディスクを決定するために使用します (rootdisk については 318 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」を参照)。
SI_DISKSIZE	コンマで区切られた、インストールクライアント上のディスクサイズのリスト。この変数は、rules ファイルで <code>disksize</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_DOMAINNAME	ドメイン名。この変数は、rules ファイルで <code>domainname</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_FINISH	finish スクリプトを使用する場合はその名前
SI_HOSTADDRESS	インストールクライアントの IP アドレス
SI_HOSTID	インストールクライアントの Ethernet アドレス
SI_HOSTNAME	インストールクライアントのホスト名。この変数は、rules ファイルで <code>hostname</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_INSTALLED	特定のオペレーティングシステムが入っているディスクのデバイス名 (Solaris、SunOS、System V など)。この変数は、rules ファイルで <code>installed</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。SI_INST_OS と SI_INST_VER は、SI_INSTALLED の値を決定するために使用します。
SI_INST_OS	オペレーティングシステムの名前。SI_INST_OS と SI_INST_VER は、SI_INSTALLED の値を決定するために使用します。
SI_INST_VER	オペレーティングシステムのバージョン。SI_INST_OS と SI_INST_VER は、SI_INSTALLED の値を決定するために使用します。
SI_KARCH	インストールクライアントのカーネルアーキテクチャー。この変数は、rules ファイルで <code>karch</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_MEMSIZE	インストールクライアントの物理メモリーの量。この変数は、rules ファイルで <code>memsize</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_MODEL	インストールクライアントのモデル名。この変数は、rules ファイルで <code>model</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_NETWORK	インストールクライアントのネットワーク番号。この変数は、rules ファイルで <code>network</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SI_NUMDISKS	インストールクライアントのディスク数。この変数は、rules ファイルで <code>disksize</code> キーワードを使用して照合する場合に設定します。SI_NUMDISKS および SI_DISKLIST 変数は、rootdisk に使用する物理ディスクを決定するために使用します (rootdisk については 318 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」を参照)。

表 28-7 インストール環境変数 (続き)

環境変数	値
SI_OSNAME	Solaris 9 ソフトウェアイメージのオペレーティングシステムリリース。この変数は、たとえば、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD イメージ上のオペレーティングシステムのバージョンにもとづいてシステムに Solaris ソフトウェアをインストールする場合にスクリプト内に指定できます。
SI_PROFILE	マウントされた JumpStart ディレクトリ内のプロファイルへのパス。このパスは /tmp/install_config/profile_name です。派生プロファイルを作成する場合は、SI_PROFILE に /tmp/install.input ファイルが設定されます。
SI_ROOTDISK	論理名 rootdisk によって表されるディスクのデバイス名。この変数は、rules ファイルで disksize または installed キーワードを rootdisk に設定した場合に設定します。
SI_ROOTDISKSIZE	論理名 rootdisk によって表されるディスクのサイズ。この変数は、rules ファイルで disksize または installed キーワードを rootdisk に設定した場合に設定します。
SI_SYS_STATE	/a/etc/.sysIDtool.state ファイル。finish スクリプトにこのファイルを指定すれば、システムのレポート時に sysidroot プログラムからスーパーユーザーのパスワードを入力するように求めるプロンプトを表示しないようにすることができます。
SI_TOTALDISK	インストールクライアント上のディスク容量の合計。この変数は、rules ファイルで totaldisk キーワードを使用して照合する場合に設定します。
SHELL	インストール時のデフォルトシェル (/sbin/sh)
TERM	インストールクライアントの端末タイプ
TZ	NIS または NIS+ ネームサービスに指定されているデフォルトの時間帯

## プローブキーワードと値

表 28-8 は、各ルールキーワードと対応するプローブキーワードを説明しています。

注 - プrobeキーワードは、rules ファイルの最初、またはその近くに指定してください。

表 28-8 プロープキーワードの説明

ルールキーワード	対応するプロープキーワード	プロープキーワードの説明
any	なし	
arch	arch	カーネルアーキテクチャー (i386 または SPARC) を判断して SI_ARCH を設定します。
disksize	disks	システムのディスクサイズ (M バイト) をカーネルプロープ順 (c0t3d0s0、c0t3d0s1、c0t4d0s0) で返します。SI_DISKLIST、SI_DISKIZES、SI_NUMDISKS、および SI_TOTALDISK を設定します。
domainname	domainname	システムの NIS または NIS+ ドメイン名、あるいは空白を返して、SI_DOMAINNAME を設定します。domainname キーワードは domainname (1M) の出力を返します。
hostaddress	hostaddress	システムの IP アドレス (lo0 ではない ifconfig (1M) -a の出力にリストされた最初のアドレス) を返して、SI_HOSTADDRESS を設定します。
hostname	hostname	システムのホスト名 (uname (1) -n からの出力) を返して、SI_HOSTNAME を設定します。
installed	installed	システムにインストールされた Solaris オペレーティング環境のバージョン名を返して、SI_ROOTDISK と SI_INSTALLED を設定します。  Solaris リリースは検出されたが、バージョンを判断できないという場合は、返されるバージョンは SystemV になります。
karch	karch	システムのプラットフォームグループ (i86pc、sun4m、sun4 など) を返し、SI_KARCH を設定します。プラットフォーム一覧については、『Solaris 9 ハードウェアマニュアル』を参照してください。
memsize	memsize	システム上の物理メモリーのサイズ (M バイト) を返して、SI_MEMSIZE を設定します。
model	model	システムのプラットフォーム名を返して、SI_MODEL を設定します。プラットフォーム名のリストについては、『Solaris 9 ハードウェアマニュアル』を参照してください。
network	network	システムのネットワーク番号を返します。これは JumpStart プログラムがシステムの IP アドレスとサブネットマスクの論理和をとって判断します。システムの IP アドレスとサブネットマスクは、lo0 ではない ifconfig (1M) -a 出力にリストされた最初のアドレスから抽出されます。network キーワードは SI_NETWORK も設定します。
osname	osname	CD で検出された Solaris オペレーティング環境のバージョンおよびオペレーティングシステム名を返して、SI_OSNAME を設定します。  Solaris リリースは検出されたが、バージョンを判断できないという場合は、返されるバージョンは SystemV になります。
	rootdisk	システムのルートディスクの名前とサイズ (MB) を返して、SI_ROOTDISK を設定します。

表 28-8 プロープキーワードの説明 (続き)

ルールキーワード	対応するプロープ キーワード	プロープキーワードの説明
totaldisk	totaldisk	システム上のディスク領域の合計 (M バイト) を返して、SI_TOTALDISK を返します。ディスク容量の合計には、システムに接続された操作可能なディスクすべてが含まれます。

## 第 29 章

# Solaris Live Upgrade (トピック)

---

この章では、Solaris Live Upgrade を使って非アクティブ環境を作成し、ブート環境をアップグレードする方法について説明します。このブート環境は、アクティブブート環境に切り替えることができます。

第 30 章	Solaris Live Upgrade の概要情報を提供します。
第 31 章	ブート環境の作成に必要な情報を提供します。
第 32 章	Solaris Live Upgrade のインストール方法、メニューの使用方法、ブート環境の作成方法について説明します。
第 33 章	オペレーティングシステムのアップグレード方法、ブート環境にフラッシュアーカイブをインストールする方法、ブート環境をアクティブにする方法、アップグレード時に障害が発生した場合のスムーズな修復方法について説明します。
第 34 章	ブート環境の管理と状態使用の表示方法について説明します。
第 35 章	Solaris Live Upgrade の実例を提示します。
第 36 章	Solaris Live Upgrade コマンドの一覧を提示します。



## 第 30 章

---

# Solaris Live Upgrade の概要

---

この章では、Solaris Live Upgrade の実行手順について説明します。

---

注 - このマニュアルでは「スライス」という用語を使用しますが、一部の Solaris のマニュアルとプログラムでは、スライスのことを「パーティション」と呼んでいる場合があります。

---

---

## Solaris Live Upgrade の紹介

Solaris Live Upgrade を利用してオペレーティングシステムをアップグレードすると、従来アップグレードのために費やしていたサービス停止時間を大幅に短縮できます。このソフトウェアでは、現在動作しているブート環境を複製し、その複製元のブート環境を動作させたまま複製された環境をアップグレードできます。アップグレードする代わりに、フラッシュアーカイブをブート環境にインストールすることもできます。環境をアップグレードしても、フラッシュアーカイブをインストールしても、元のシステム構成は影響を受けずに支障なく機能します。これらの処理の後、システムをリポートすると、複製のブート環境がアクティブ化されて、アクティブなブート環境になります。何か問題が発生しても、対応できるようになっています。リポートするだけで元のブート環境に戻ることができるので、テストや評価処理のためのサービス停止時間を削減することができます。

Solaris Live Upgrade を使用すると、現在動作しているシステムに影響を与えずに、ブート環境のコピーを作成して、次のような作業を行うことができます。

- システムのアップグレード
- 新しいブート環境のディスク構成（ファイルシステムのタイプ、サイズ、および配置）の変更

- 異なるイメージを持つ複数のブート環境の保守。たとえば、現在のパッチを持つブート環境を作成して、同時に、Update リリースを持つブート環境を作成できます。

Solaris Live Upgrade を使用するには、システム管理についての基礎的な事柄を理解しておく必要があります。ファイルシステムの管理、マウント、ブート、スワップの管理など、システム管理作業に関する基本的な情報については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

## Solaris Live Upgrade の実行手順

次に、非アクティブなブート環境を作成して、この環境をアップグレードし、アクティブなブート環境になるように切り替えるために必要な作業の概要を示します。

### ブート環境の作成 (概要)

ブート環境を作成すると、クリティカルなファイルシステムをアクティブなブート環境から新しいブート環境にコピーできます。必要であれば、ディスクを編成し直して、ファイルシステムをカスタマイズし、クリティカルなファイルシステムを新しいブート環境にコピーします。

### ファイルシステムの概要

Solaris Live Upgrade では、クリティカルファイルシステムと共有可能ファイルシステムの 2 種類のファイルシステムを区別します。クリティカルなファイルシステムとは、Solaris オペレーティング環境に必須であり、アクティブなブート環境と非アクティブなブート環境の `vfstab` において別々のマウントポイントを持つファイルシステムのことです。たとえば、ルート (`/`)、`/usr`、`/var`、または `/opt` がクリティカルなファイルシステムの例です。これらのファイルシステムは常に、ソースブート環境から非アクティブなブート環境にコピーされます。クリティカルなファイルシステムのことを「共有不可能」と呼ぶこともあります。共有可能なファイルシステムとは、`/export` のように、アクティブなブート環境と非アクティブなブート環境の両方の `vfstab` において同じマウントポイントを持つユーザー定義ファイルのことです。したがって、アクティブなブート環境内の共有ファイルを更新すると、非アクティブなブート環境のデータも更新されます。新しいブート環境を作成するとき、共有可能なファイルシステムはデフォルトで共有されます。しかし、コピー先のスライスを指定した場合、そのファイルシステムは (共有されずに) コピーされます。共有可能なファイルシステムについての詳細は、347 ページの「共有可能なファイルシステムのスライスを選択するための指針」を参照してください。

スワップは、共有可能なファイルシステムの中でも特別なものです。他の共有可能なファイルシステムと同様に、すべてのスワップスライスはデフォルトで共有されます。しかし、スワップ用のディレクトリを指定した場合、スワップスライスは (共有されずに) コピーされます。このためには、キャラクタ型ユーザーインタフェースま



たはコマンド行を使用して、`lucreate (1M)` に `-m` オプションを指定して実行します。スワップスライスを分割したりマージしたりするには、現在のブート環境 (`-s` オプションを使用した場合はソースブート環境) 以外のブート環境では、スワップスライスは使用中であってはならないという制限があります。スワップスライスのファイルシステムの種類 (`swap`, `ufs` など)にかかわらず、スワップスライスはほかのブート環境で使用されている場合、ブート環境の作成は失敗します。スワップスライスは必須ではありません。スワップを構成し直す手順については、「ブート環境を作成する (キャラクタインタフェース)」の手順 9、または 365 ページの「ブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

---

注 - ブート環境のファイルシステムを作成する場合のルールは、Solaris オペレーティング環境のファイルシステムを作成する場合と同じです。Solaris Live Upgrade では、クリティカルなファイルシステムに無効な構成を作成してしまうことを回避できません。たとえば、`lucreate` コマンドを用いて、ルート (/) と `/kernel` を別々のファイルシステムに作成することができますが、このようにルート (/) を分割するのは誤りです。

---

## ファイルシステムのコピー

新しいブート環境を作成するには、クリティカルなファイルシステムを他のスライスにコピーする必要があります。新しいブート環境を作成する前には、ディスクを準備する必要がある場合もあります。ディスクをチェックして、適切にフォーマットされていることを確認します。

- スライスがファイルシステムをコピーできるだけの十分な大きさであることを確認します。
- ブート環境間でコピーするのではなく、共有したいディレクトリが入っているファイルシステムを確認します。ディレクトリを共有したい場合、そのディレクトリを固有のスライスに配置して新しいブート環境を作成する必要があります。こうすることにより、ディレクトリは、将来のブート環境と共有可能なファイルシステムになります。異なるファイルシステムを作成して共有する方法についての詳細は、347 ページの「共有可能なファイルシステムのスライスを選択するための指針」を参照してください。

新しいブート環境を作成するには、まず、クリティカルなファイルシステムをコピーできる未使用のスライスが存在することを確認します。スライスが使用できないかあるいは最小限の要件を満たしていない場合は、新しいスライスをフォーマットする必要があります。メニューからスライスをフォーマットする手順については、「ブート環境を作成する (キャラクタインタフェース)」の手順 6 を参照してください。

スライスを定義した後、ファイルシステムをディレクトリにコピーする前に、新しいブート環境上のファイルシステムを再構成できます。ファイルシステムを分割およびマージすることによって `vfstab` を簡単に編集でき、ファイルシステムを再構成することができます。ファイルシステムは、同じマウントポイントを指定して親ディレクトリにマージすることも、異なるマウントポイントを指定して親ディレクトリから分割することも可能です。

ファイルシステムを分割およびマージする手順については、次の節を参照してください。

- 「ブート環境を作成する (キャラクタインタフェース)」の手順7または手順8
- 363 ページの「ブート環境を作成しファイルシステムを分割する (コマンド行インタフェース)」
- 361 ページの「ブート環境を作成しファイルシステムをマージする (コマンド行インタフェース)」

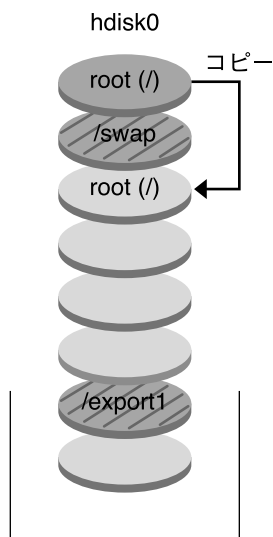
非アクティブブート環境でファイルシステムを構成した後、自動コピーを開始します。クリティカルなファイルシステムは、指定された宛先ディレクトリにコピーされます。共有可能なファイルシステムは (それらの一部をコピーするように指定しない限り)、コピーされずに共有されます。ファイルシステムをアーカイブから非アクティブなブート環境にコピーする時、ファイルは新しく定義されたディレクトリにコピーされるので、アクティブなブート環境は変更されません。新しいブート環境の作成手順については、353 ページの「新しいブート環境の作成」を参照してください。

次の図に、さまざまな方法で新しいブート環境を作成する例を示します。

- 図 30-1 に、クリティカルなファイルシステムのルート (/) を同じまたは別のディスク上のスライスにコピーして、新しいブート環境を作成する方法を示します。アクティブなブート環境は、既存のスライス上にルート (/) を持っています。新しいブート環境は、新しいスライス上にルート (/) の複製を持っています。ファイルシステム /swap および /export/home はアクティブなブート環境と非アクティブなブート環境で共有されます。

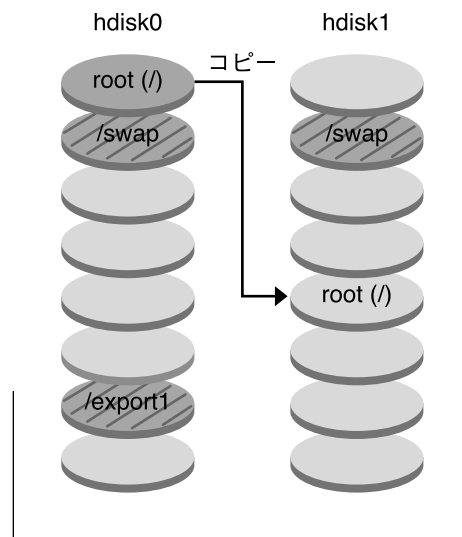
ブート環境の作成 - ルート(/) からルート(/) へのコピー

ハードディスク1台



アップグレード

ハードディスク2台



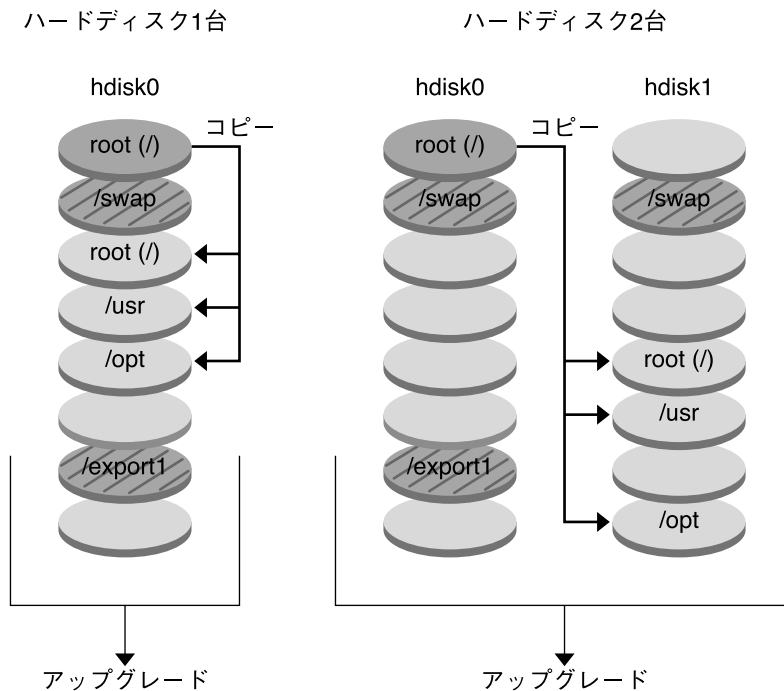
アップグレード

- 現在のリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- 非アクティブなリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- ▨ 共有ファイルシステム

図 30-1 非アクティブなブート環境の作成 — ルート (/) からルート (/) へのコピー

- 図 30-2 に、クリティカルなファイルシステムを同じまたは別のディスク上の複数のスライスに分割およびコピーして、新しいブート環境を作成する方法を示します。アクティブなブート環境は、既存のスライス上にルート (/) を持っています。このスライスでは、ルート (/) 内に、/usr、/var、および /opt ディレクトリがあります。新しいブート環境では、ルート (/) は分割され、/usr と /opt は別のスライスに配置されています。ファイルシステム /swap と /export/home は両方のブート環境で共有されます。

## ブート環境の作成 - ファイルシステムの分割

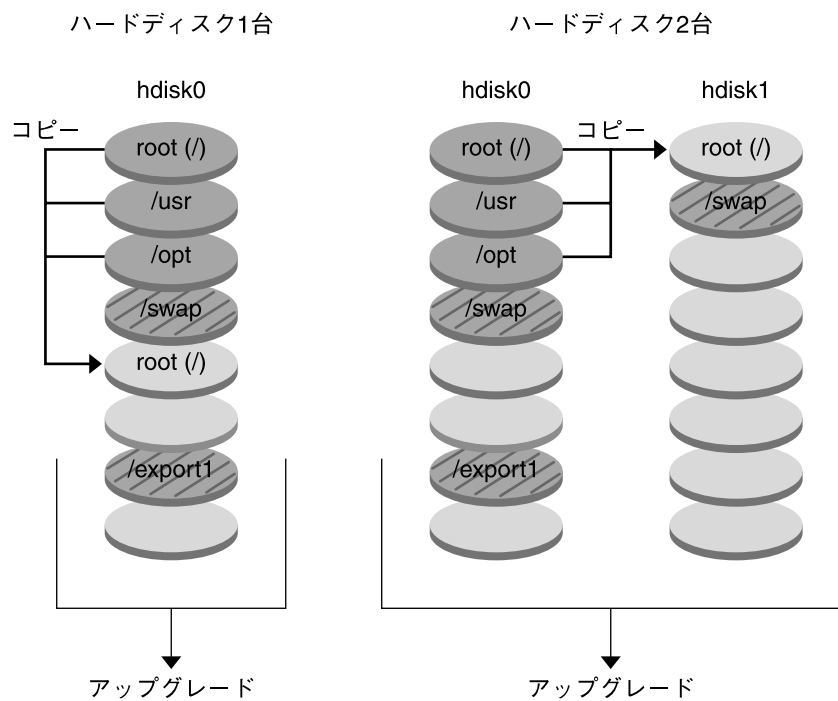


- 現在のリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート(/)
- 非アクティブなリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/) /usr /opt
- 共有ファイルシステム

図 30-2 非アクティブなブート環境の作成 — ファイルシステムの分割

- 図 30-3 に、クリティカルなファイルシステムをマージし、同じまたは別のディスク上のスライスにコピーして、新しいブート環境を作成する方法を示します。アクティブなブート環境では、ルート (/)、`/usr`、`/var`、および `/opt` がそれぞれ別のスライス上にあります。新しいブート環境では、`/usr` と `/opt` はルート (/) と同一のスライス上にマージされます。ファイルシステム `/swap` と `/export/home` は両方のブート環境で共有されます。

## ブート環境の作成 - ファイルシステムのマージ



- 現在のリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/) /usr /opt
- 非アクティブなリリース Y  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- ▨ 共有ファイルシステム

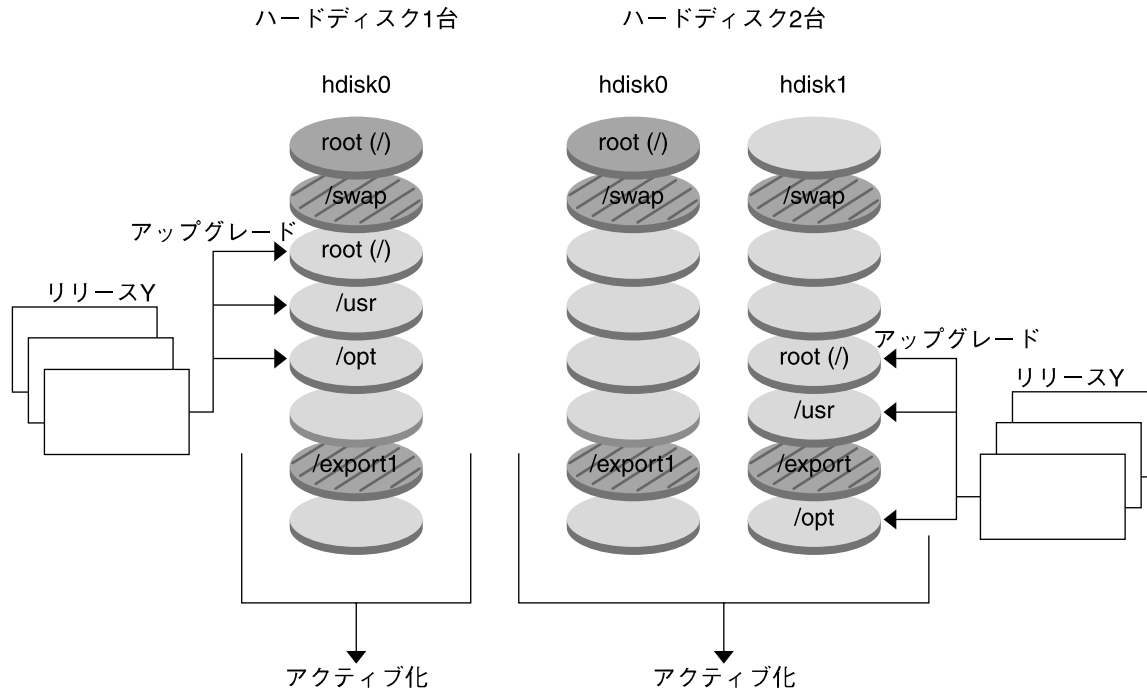
図 30-3 非アクティブなブート環境の作成 — ファイルシステムのマージ

## ブート環境のアップグレード (概要)

ブート環境を作成した後、アップグレードを行うまでそのブート環境は変更されません。ブート環境のアップグレードはいつでも実行できます。アップグレードを行っても、アクティブなブート環境内のファイルには影響ありません。準備が整った時点で、新しいリリースをアクティブにします。

図 30-4 に、非アクティブなブート環境のアップグレードの例を示します。ブート環境のアップグレード手順については、第 33 章を参照してください。

## ブート環境のアップグレード



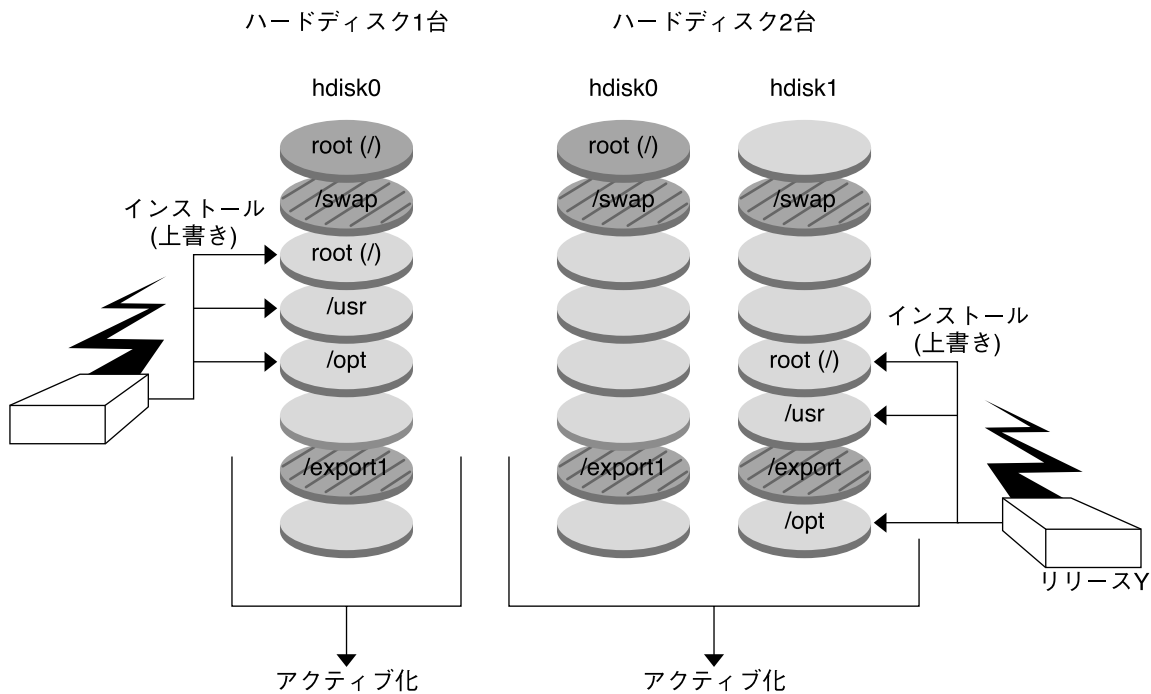
- 現在のリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- 非アクティブなリリース Y  
クリティカルなファイルシステムのルート (/) /usr /opt
- ▨ 共有ファイルシステム

図 30-4 非アクティブなブート環境のアップグレード

アップグレードする代わりに、フラッシュアーカイブをブート環境にインストールすることもできます。フラッシュインストール機能を利用すると、マスターシステムと呼ばれる Solaris オペレーティング環境のリファレンスインストールをシステム上に1つ作成します。続いて、クローンシステムと呼ばれる多数のシステム上にこのインストールを複製できます。この場合、非アクティブなブート環境はクローンシステムです。フラッシュインストール機能についての詳細は、第 16 章を参照してください。

フラッシュアーカイブをシステムにインストールするとき、初期インストールの場合と同じように、アーカイブは既存のブート環境にあるすべてのファイルを置き換えます。図 30-5 に、非アクティブなブート環境におけるフラッシュアーカイブのインストールを示します。フラッシュアーカイブのインストール手順については、385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」を参照してください。

### フラッシュアーカイブのインストール



- 現在のリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- 非アクティブなリリース Y  
クリティカルなファイルシステムのルート (/) /usr /opt
- ▨ 共有ファイルシステム

図 30-5 フラッシュアーカイブのインストール

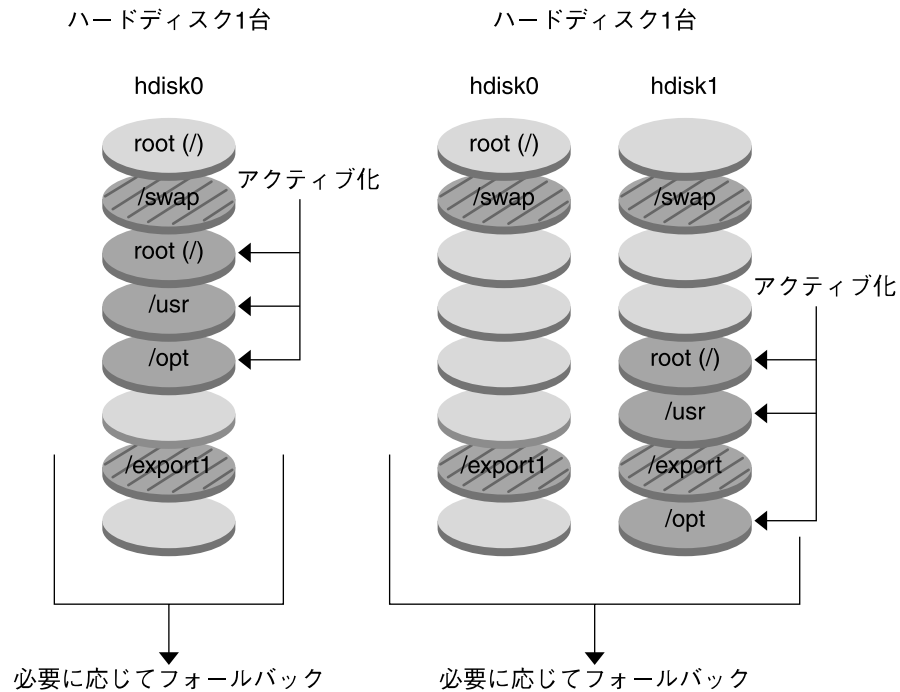
### ブート環境のアクティブ化 (概要)

新しいブート環境に切り換えてアクティブにする準備ができたなら、新しいブート環境をアクティブにしてリポートするだけです。新しいブート環境をアクティブにすると、そのブート環境はブート可能になります。新たに作成したブート環境を初めて起動するとき、ブート環境間でファイルの同期がとられます。ここでいう「同期」と

は、前にアクティブであったブート環境のあるシステムファイルやディレクトリを、ブートされているブート環境にコピーすることです。システムをリブートすると、非アクティブなブート環境にインストールした構成がアクティブになります。この時点で、元のブート環境は非アクティブブート環境となります。図 30-6 に、リブート後に非アクティブなブート環境からアクティブなブート環境に切り替わる様子を示します。ブート環境をアクティブにする手順については、391 ページの「ブート環境のアクティブ化」を参照してください。



## ブート環境のアクティブ化



- 現在のリリース Y  
クリティカルなファイルシステムのルート (/) /usr /opt
- 非アクティブなリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- ▨ 共有ファイルシステム

図 30-6 非アクティブなブート環境のアクティブ化

### 元のブート環境へのフォールバック (概要)

問題が発生する場合は、アクティブ化とリブートを行なって元のブート環境にすぐにフォールバックできます。フォールバックを実行する必要があるのは、新しいブート環境がブートできない場合、ブートできるが正常に稼動しない場合、あるいは、ブート結果に満足できない場合です。

元のブート環境をバックアップして復元するよりも、フォールバックの方がはるかに時間がかかりません。ブートに失敗した新しいブート環境は保存されるので、障害を解析できます。フォールバックを実行できるのは、`luactivate` を使用して新しいブート環境をアクティブにしたブート環境だけです。

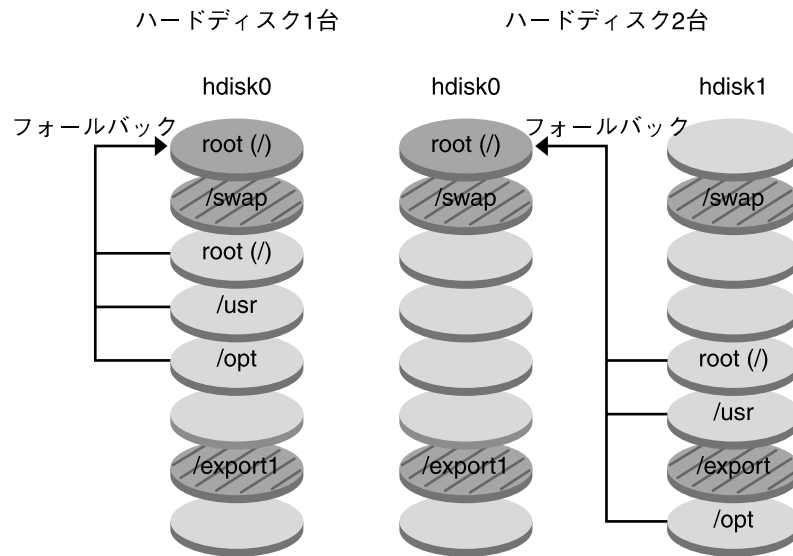
以前のブート環境にフォールバックするには、次の手順に従います。

- 新しいブート環境は正常にブートしたが、結果に満足できない場合、`luactivate` コマンドに以前のブート環境の名前を指定して実行し、リブートします。
- 新しいブート環境がブートしない場合、フォールバックしたいブート環境をシングルユーザーモードでブートし、`luactivate` コマンドを実行し、リブートします。
- シングルユーザーモードでブートできない場合、メディアまたはネットインストールイメージからブートして、フォールバックしたいブート環境上のルート (/) ファイルシステムをマウントし、`luactivate` コマンドを実行して、リブートします。

フォールバックの手順については、395 ページの「問題の解決: 元のブート環境へのフォールバック (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

図 30-7 に、リブートしてフォールバックしたときにブート環境が切り替わる様子を示します。

## 元のブート環境へのフォールバック



- 現在のリリース X  
クリティカルなファイルシステムのルート (/)
- 非アクティブなリリース Y  
クリティカルなファイルシステムのルート (/) /usr /opt
- ▨ 共有ファイルシステム

図 30-7 元のブート環境へのフォールバック

## ブート環境の保守 (概要)

ブート環境の名前変更や削除など、さまざまな保守作業も行うことができます。保守作業の手順については、第 34 章を参照してください。



## 第 31 章

---

# Solaris Live Upgrade の計画

---

この章では、Solaris Live Upgrade のインストールと使用を開始する前に考慮すべきガイドラインと要件を説明します。49 ページの「アップグレード用のチェックリスト」でアップグレード全般に関する情報も確認してください。この章の内容は次のとおりです。

- 341 ページの「Solaris Live Upgrade のシステム要件」
- 342 ページの「Solaris Live Upgrade のディスク容量の要件」
- 342 ページの「Solaris Live Upgrade によるパッケージやパッチの管理」
- 345 ページの「ファイルシステムのスライスを選択するための指針」
- 348 ページの「リモートシステムからの Solaris Live Upgrade の使用」

---

## Solaris Live Upgrade のシステム要件

- SPARC ベースのシステムの場合、Solaris 2.6、Solaris 7、または Solaris 8 オペレーティング環境を、Solaris 8 または Solaris 9 オペレーティング環境にアップグレードできます。
- x86 ベースのシステムの場合、Solaris 7 または Solaris 8 オペレーティング環境を、Solaris 8 または Solaris 9 オペレーティング環境にアップグレードできます。
- Solaris 7 オペレーティング環境にはアップグレードできません。
- 現在実行中のシステムにインストールした Solaris Live Upgrade が収められているリリースにアップグレードできます。たとえば、現在のオペレーティング環境のみに Solaris 9 リリースの Solaris Live Upgrade をインストールした場合、Solaris 9 リリースにのみアップグレード可能です。

Solaris Live Upgrade は Solaris 9 ソフトウェアに含まれていますが、Solaris 9 以前のリリースからアップグレードしたい場合は、現在のオペレーティング環境に Solaris Live Upgrade のパッケージをインストールする必要があります。Solaris Live Upgrade パッケージのインストールには、次のものを使用します。

- Solaris 9 DVD、Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD、またはネットインストールイメージ上にあるインストーラ。
- pkgadd コマンド。pkgadd コマンドを使用する場合、パッケージは SUNWlur、SUNW1uu の順番でインストールしてください。

Solaris Live Upgrade ソフトウェアのインストール方法については、351 ページの「Solaris Live Upgrade をインストールする方法」を参照してください。

---

## Solaris Live Upgrade のディスク容量の要件

アップグレードの一般的なディスク容量の要件に従います。第 5 章を参照してください。

ブート環境の作成に必要なファイルシステムのサイズを見積もるには、新しいブート環境の作成を開始してください。サイズが計算されたところで、処理を中断できます。

新しいブート環境上のディスクをブートデバイスとして使用する必要があります。システムの中には、ブートデバイスとして機能するディスクを限定するものがあります。ブート制限が適用されるかどうかを確認するには、各システムのマニュアルを参照してください。

---

## Solaris Live Upgrade によるパッケージやパッチの管理

以下の各節では、Solaris Live Upgrade に必要なパッケージを示し、推奨パッチ情報を提供します。Solaris Live Upgrade を使ってパッケージおよびパッチを追加する方法については、376 ページの「Solaris Live Upgrade によるパッケージやパッチの管理」を参照してください。



---

注意 – パッケージやパッチのアップグレード、追加、削除を行うためには、そのパッケージまたはパッチが SVR4 Advanced Packaging Guideline に準拠していなければなりません。サンのパッケージはこのガイドラインに準拠していますが、サードパーティベンダーのパッケージがこれに準拠しているとは限りません。非準拠のパッケージを追加しようとすると、パッケージ追加ソフトウェアの障害が発生するか、アクティブブート環境が改変されてしまう可能性があります。

Solaris Live Upgrade によるパッケージの追加や削除については、luupgrade (1M) のマニュアルページを参照してください。パッケージ化の要件については、付録 C を参照してください。

---

## 必要なパッケージ

次の表は、Solaris Live Upgrade を使用する上で必要なパッケージを示しています。この表で、現在のオペレーティング環境に必要なパッケージを確認してください。使用しているリリースに必要なパッケージがインストールされていない場合は、pkgadd コマンドを使用してそれらを追加してください。

表 31-1 Solaris Live Upgrade に必要なパッケージ

Solaris 2.6 リリース	Solaris 7 リリース	Solaris 8 リリース
SUNWadmap	SUNWadmap	SUNWadmap
SUNWadmfw	SUNWadm	SUNWadm
SUNWadm	SUNWlibC	SUNWlibC
SUNWmfrun		SUNWbzip
SUNWloc		
SUNWlibC		

### ▼ システム上のパッケージを確認するには

- システム上に存在するパッケージを表示するには、次のように入力します。

```
% pkginfo [package_name]
```

*package\_name*                      確認したいパッケージ名

## システムパッチレベルのチェック

Solaris Live Upgrade ソフトウェアは、複数の Solaris オペレーティング環境バージョンでインストールと実行ができるように設計されています。Solaris Live Upgrade の処理が正しく行われるようにするためには、各 OS バージョン用に提供されている最新の推奨パッチとセキュリティパッチを適用する必要があります。実行中の Solaris のリリースに適したパッチクラスタのリビジョンについては、<http://sunsolve.sun.com> を参照してください。

---

## lucreate コマンドを用いたファイルシステムの作成のための指針

lucreate コマンドに `-m` オプションを指定することにより、新しいブート環境に作成するファイルシステムとその数を指定できます。作成するファイルシステムの数だけ、このオプションを繰り返し指定する必要があります。たとえば、`-m` オプションを 1 回だけ使用した場合、すべてのファイルシステムが指定の場所に格納されます。元のブート環境のすべてのファイルシステムが、`-m` で指定されたファイルシステムにマージされます。`-m` オプションを 2 回使用すると、ファイルシステムが 2 つ作成されます。`-m` オプションを使ってファイルシステムを作成する場合、次の項目に留意してください。

- `-m` オプションを 1 個指定して、新しいブート環境のルート (`/`) ファイルシステムを作成する必要があります。`-m` オプションを指定しないで `lucreate` を実行すると、「Configuration」メニューが表示されます。「Configuration」メニューでは、新しいマウントポイントにファイルを変更して新しいブート環境をカスタマイズできます。
- 現在のブート環境にクリティカルファイルシステムがある場合、このファイルシステムは、`-m` オプションで指定しなくても新しく作成されたファイルシステムの上位 2 番目のファイルシステムにマージされます。
- 新しいブート環境には、`-m` オプションで指定されたファイルシステムだけが作成されます。現在のブート環境に複数のファイルシステムがあり、新しいブート環境にも同じ数のファイルシステムを作成したい場合は、ファイルシステムごとに 1 個ずつ `-m` オプションを指定します。たとえば、ルート (`/`) ファイルシステム、`/opt` ファイルシステム、`/var` ファイルシステムがある場合、これらを新しいブート環境に作成するには、それぞれに `-m` オプションを 1 個ずつ指定します。
- マウントポイントが重複しないようにしてください。たとえば、ルート (`/`) ファイルシステムを 2 つ作成することはできません。



---

## ファイルシステムのスライスを選択するための指針

ブート環境のファイルシステムを作成する場合の規則は、Solaris オペレーティング環境のファイルシステムを作成する場合と同じです。Solaris Live Upgrade では、クリティカルファイルシステムに無効な構成を作成できてしまいます。たとえば、lucreate コマンドを用いて、ルート (/) と /kernel を別々のファイルシステムに作成することも可能です。しかし、これは、無効な分割方式です。

ディスクスライスを作成するときは、スライスがオーバーラップしないように注意してください。スライスのオーバーラップがあると、新しいブート環境を作成したつもりでも、アクティブにした後ブートすることができません。こうしたオーバーラップは、ファイルシステムの破損の原因となります。

Solaris Live Upgrade を正しく機能させるには、アクティブブート環境の vfstab ファイルの内容が有効で、少なくとも ルート (/) のエントリが含まれている必要があります。

## ルート (/) ファイルシステムのスライスを選択するためのガイドライン

非アクティブブート環境を作成する場合は、ルート (/) ファイルシステムがコピーされるスライスを確認する必要があります。ルート (/) ファイルシステムのスライスを選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。スライスは、次の条件を満たしていなければなりません。

- システムをブートできるスライスである
- 推奨されている最小サイズ以上である
- Veritas VxVM ボリュームではない
- アクティブなルート (/) ファイルシステムとは異なる物理ディスクでも同じディスクでもかまわない
- sun4m システムの場合、ルート (/) ファイルシステムのサイズは最大で 2G バイトである

「Choices」メニューには、非アクティブブート環境の作成に使用できる空きスライスが表示されます。しかし、スライスの中には、Veritas VxVM ボリュームや Solaris ボリュームマネージャメタデバイスのように、未使用であるが「Choices」メニューに表示されないものがあります。

## ルート (/) のミラーとメタデバイスを選択するための指針

Solaris Live Upgrade は、Solaris ボリュームマネージャメタデバイスまたは Veritas ボリュームマネージャ VxVM ボリュームを使用しているシステム上で使用できます。ソースブート環境に含まれる物理ディスクスライス、Solaris ボリュームマネージャメタデバイス、Veritas ボリュームマネージャボリュームは自由に組み合わせることができます。新しいブート環境を作成する際は、物理ディスクスライスまたは Solaris ボリュームマネージャメタデバイスのどちらかをこの環境のルート (/) ファイルシステムとして選択できます。Solaris ボリュームマネージャメタデバイスを選択した場合は、単一のディスクまたは単一のディスクストライプ上のミラーを使って、このメタデバイスをストライプ化する必要があります。詳細については、metaroot (1M) のマニュアルページを参照してください。

Veritas VxFS ボリュームは、新しいブート環境のルート (/) ファイルシステムとして選択できません。ルート (/) ファイルシステム以外のファイルシステムとしてであれば、物理ディスクスライス、Solaris ボリュームマネージャメタデバイス、Veritas VxFS ボリュームのいずれかを使用できます。

表 31-2 は、ブート環境を作成するための有効なディスク構成について説明しています。メタデバイスを使用する場合とボリュームを使用する場合とでは、有効なディスク構成が異なります。

表 31-2 メタデバイスまたはボリュームの有効なスライス

製品	ソーススライス	ターゲットがルート (/) ファイルシステムのメタデバイスである場合	ターゲットがルート (/) ファイルシステムではなく、 <code>/usr</code> 、 <code>/var</code> 、 <code>/opt</code> のいずれかである場合
Solaris ボリュームマネージャ	ルート (/) ファイルシステムの場合、ソースはメタデバイスか物理スライス	ルート (/) ファイルシステムは単一ディスクを持つストライプか、単一ディスクストライプ上のミラーでなければならぬ	その他のファイルシステムは物理スライスでもメタデバイスでもよい
Veritas VxVM ボリュームマネージャ	ルート (/) ファイルシステムの場合、ソースはボリュームか物理スライス	ルート (/) ファイルシステムは VxVM ボリュームにはできない。ルート (/) は必ず物理スライス	その他のファイルシステムは物理スライスでもボリュームでもよい

新しいブート環境を作成する際、`lucreate -m` コマンドは、次の 3 種類のデバイスだけを認識します。

- 物理スライス (`/dev/dsk/cnumtnumdnumsnum`)
- Solaris ボリュームマネージャメタデバイス (`/dev/md/dsk/dnum`)
- Veritas VxFS ボリューム (`/dev/vx/dsk/volume_name`)

ブート環境でメタデバイスまたはボリュームを使用する場合、フラッシュアーカイブのアップグレードまたはインストール時に特別に注意すべき項目があります。詳細は、375 ページの「メタデバイスとボリュームのアップグレード」を参照してください。

---

注 – Veritas VxVM のアップグレードで問題が生じる場合は、468 ページの「Veritas VxVm の実行中に Solaris Live Upgrade を使用してアップグレードするとシステムパニックが発生する」を参照してください。

---

## swap ファイルシステムのスライスを選択するための指針

スワップスライスは、現在のブート環境 (-s オプションを使用する場合はソースブート環境) 以外のブート環境で使用することはできません。スワップスライスが他のブート環境によって使用されている場合、スワップスライスのファイルシステムの種類 (swap、ufs など) にかかわらず、ブート環境の作成は失敗します。

## 共有可能なファイルシステムのスライスを選択するための指針

Solaris Live Upgrade は、スライスの内容を指定の新しいブート環境のスライスにコピーします。容量とコピーにかかる時間を節約したい場合は、そのスライス上に複数のブート環境で共有できるだけの大きなファイルシステムを用意することもできます。ルート(/)、/var のようなオペレーティング環境に欠かせないクリティカルファイルシステムは必ずコピーしてください。/home などの非クリティカルファイルシステムは、複数のブート環境で共有できます。共有可能なファイルシステムは、ユーザーによって定義され、アクティブブート環境と新しいブート環境の両方の個々のスワップスライス上に存在していなければなりません。必要に応じて、複数の方法でディスクを再構成できます。

- 新しいブート環境を作成する前にディスクスライスを作成し直し、そのスライス上に共有可能なファイルシステムを配置することができます。たとえば、ルート(/)、/var、/home がすべて同じスライス上にある場合、ディスクを再構成して /home を固有のスライスに配置できます。デフォルトの設定では、新しいブート環境を作成すると、/home はアクティブブート環境と新しいブート環境で共有されます。
- ディレクトリを共有したい場合、そのディレクトリを固有のスライスに配置する必要があります。こうすることにより、ディレクトリは、そのほかのブート環境と共有可能なファイルシステムになります。lucreate -m コマンドを実行すると、新しいブート環境が作成され、ディレクトリを固有のスライスに配置することができます。しかし、この新しいファイルシステムはまだもとのブート環境と共有できません。再度 lucreate -m コマンドを実行して、もう 1 つ別のブート環境を作成す

る必要があります。この2つの新しいブート環境では、ディレクトリを共有できません。

たとえば、Solaris 8 から Solaris 9 にアップグレードし、両方のオペレーティング環境で /home を共有したい場合は、`lucreate -m` コマンドを実行して、/home 固有のスライス上に独立したファイルシステムとして配置し、Solaris 8 リリースを作成します。次に、再度 `lucreate -m` コマンドを実行し、そのブート環境を複製します。さらに、この複製ブート環境を Solaris 9 リリースへアップグレードします。/home は Solaris 8 リリースと Solaris 9 リリース間で共有されます。

共有可能なファイルシステムおよびクリティカルファイルシステムの概要については、328 ページの「ブート環境の作成 (概要)」を参照してください。

---

## リモートシステムからの Solaris Live Upgrade の使用

キャラクタインタフェースを `tip` 回線などを介してリモートで表示する場合は、必要に応じて `TERM` 環境変数を `VT220` に設定してください。また、共通デスクトップ環境 (CDE) を使用する場合は、`TERM` 変数の値を `xterm` ではなく `dtterm` に設定してください。

## 第 32 章

---

# Solaris Live Upgrade によるブート環境の作成

---

この章では、Solaris Live Upgrade のインストール、メニューの使用、およびブート環境の作成について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 349 ページの「Solaris Live Upgrade インタフェースの概要」
- 350 ページの「Solaris Live Upgrade メニューの使用」
- 351 ページの「作業マップ: Solaris Live Upgrade のインストールとブート環境の作成」
- 351 ページの「Solaris Live Upgrade のインストール」
- 352 ページの「Solaris Live Upgrade の起動と停止 (キャラクタインタフェース)」
- 353 ページの「新しいブート環境の作成」

---

## Solaris Live Upgrade インタフェースの概要

Solaris Live Upgrade は、キャラクタユーザーインタフェース (CUI) を介して使用することもコマンド行インタフェース (CLI) で使用することも可能です。操作内容と手順は、CUI の場合と CLI の場合とでほぼ同じです。以下の説明では、CUI と CLI の両方の場合について手順を示してあります。CUI では、Solaris Live Upgrade の一部の機能にアクセスできません。コマンド一覧については第 36 章を参照してください。また、コマンドの詳しい説明については各マニュアルページを参照してください。

日本語環境では CUI および CLI のメッセージは、翻訳されていません。

## Solaris Live Upgrade メニューの使用

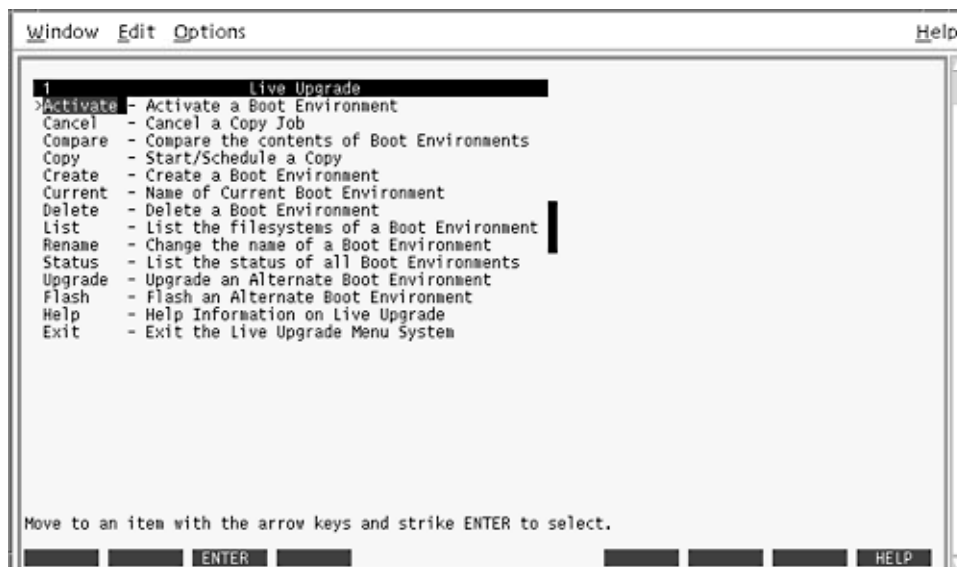


図 32-1 Solaris Live Upgrade のメインメニュー

Solaris Live Upgrade キャラクターユーザーインタフェースのメニュー間の移動には、矢印キーとファンクションキーを使用します。上下に移動する場合やフィールド内にカーソルを置く場合は、矢印キーを使用してください。処理を実行する場合は、ファンクションキーを使用してください。メニューの最下部には、キーボード上のファンクションキーを示す黒い矩形が表示されます。これらは、最初の矩形が F1、2 番目の矩形が F2 という順序で並んでいます。有効な矩形には、「Save」などの処理を示す語句が表示されています。「Configuration」メニューでは、矩形ではなくファンクションキーの番号と対応する動作が表示されます。

- F3 を使用すると、どのメニューの場合も作業の保存 (SAVE) が行われてそのメニューが終了します。
- F6 を使用すると、どのメニューにおいても作業が取り消され (CANCEL)、変更の保存が行われないままメニューが終了します。
- ほかのファンクションキーの動作は、メニューによって異なります。

以下に説明する作業において、ファンクションキーを押すように指示されています。キーボード上のキーが Solaris Live Upgrade メニュー上のファンクションキーと適切に対応していない場合は、Control-F および該当する番号を使用してください。

---

# 作業マップ: Solaris Live Upgrade のインストールとブート環境の作成

表 32-1 作業マップ: Solaris Live Upgrade の使用

作業	説明	参照先
Solaris Live Upgrade パッケージのインストール	Solaris 2.6、Solaris 7、または Solaris 8 オペレーティング環境にパッケージをインストールします。	351 ページの「Solaris Live Upgrade のインストール」
Solaris Live Upgrade の起動	Solaris Live Upgrade のメインメニューを起動します。	352 ページの「Solaris Live Upgrade の起動と停止 (キャラクタインタフェース)」
ブート環境の作成	非アクティブブート環境にファイルシステムをコピーして再構成します。	353 ページの「新しいブート環境の作成」

---

## Solaris Live Upgrade のインストール

Solaris 2.6、Solaris 7、または Solaris 8 オペレーティング環境からアップグレードする場合は、現在のオペレーティング環境に Solaris Live Upgrade パッケージをインストールする必要があります。

### ▼ Solaris Live Upgrade をインストールする方法

1. Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を挿入します。
2. インストーラを実行します。
  - Solaris 9 DVD を使用している場合は、インストーラのあるディレクトリに移動し、インストーラを実行します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tool/Installers
# ./liveupgrade20
```

Solaris Web Start インストーラが表示されます。
  - Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を使用している場合は、インストーラを実行します。

```
% ./installer
```

Solaris Web Start インストーラが表示されます。

3. 「インストール形式の選択 (Select Type of Install)」パネルで「カスタム (Custom)」をクリックします。
4. 「ロケールの選択 (Locale Selection)」パネルで、インストールする言語をクリックします。
5. インストールするソフトウェアを選択します。
  - DVD の場合、「コンポーネントの選択 (Component Selection)」パネルの「次へ (Next)」をクリックしてパッケージをインストールします。
  - CD の場合、「製品の選択 (Product Selection)」パネルの Solaris Live Upgrade の項目で「デフォルトインストール (Default Install)」をクリックします。
6. Solaris Web Start の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

---

## Solaris Live Upgrade の起動と停止 (キャラクタインタフェース)

Solaris Live Upgrade のメニュープログラムの起動と停止方法について説明します。

### ▼ Solaris Live Upgrade メニューを起動する

---

注 - キャラクタインタフェースを tip 回線などを介してリモートで表示する場合は、必要に応じて TERM 環境変数を VT220 に設定してください。また、共通デスクトップ環境 (CDE) を使用する場合は、TERM 変数の値を xterm ではなく dtterm に設定してください。

---

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/lu
```

Solaris Live Upgrade のメインメニューが表示されます。



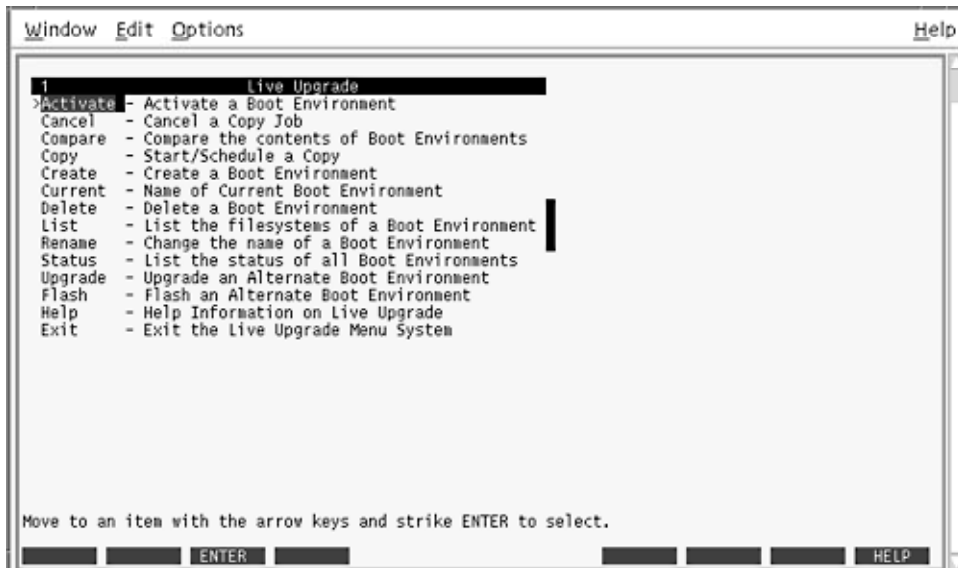


図 32-2 Solaris Live Upgrade のメインメニュー

## ▼ Solaris Live Upgrade のメニューを終了するには

- メインメニューの「Exit」を選択します。

---

## 新しいブート環境の作成

Solaris Live Upgrade は、メニューを介して使用することもコマンド行インタフェース (CLI) で使用することもできます。以下の説明では、両方のインタフェースについて手順を説明しています。これらの手順では、Solaris Live Upgrade の使用に関する詳しい説明は省略しています。コマンドの詳細については、第 36 章を参照してください。また、コマンド行インタフェースの詳細については、各マニュアルページを参照してください。

ブート環境を作成すると、アクティブブート環境から新しいブート環境にクリティカルファイルシステムをコピーできます。必要に応じてディスクを再編成し、ファイルシステムをカスタマイズして、クリティカルファイルシステムを新しいブート環境にコピーするには、「Create」メニュー、「Configuration」サブメニュー、lucreate コマンドを使用します。

ファイルシステムは、新しいブート環境にコピーする前にカスタマイズできます。このため、クリティカルファイルシステムディレクトリを親のディレクトリにマージすることも、親ディレクトリから分離することも可能になります。ユーザー定義の(共有可能)ファイルシステムは、デフォルトで複数のブート環境で共有されます。ただし、必要に応じて共有可能なファイルシステムをコピーすることもできます。スワップ(共有可能なファイルシステム)の分割やマージも可能です。クリティカルファイルシステムと共有可能ファイルシステムの概要については、328 ページの「ブート環境の作成(概要)」を参照してください。

この節では次の手順を説明します。

- 354 ページの「ブート環境を作成する(キャラクタインタフェース)」
- 359 ページの「ブート環境を初めて作成する(コマンド行インタフェース)」
- 361 ページの「ブート環境を作成しファイルシステムをマージする(コマンド行インタフェース)」
- 363 ページの「ブート環境を作成しファイルシステムを分割する(コマンド行インタフェース)」
- 365 ページの「ブート環境を作成しスワップを再構成する(コマンド行インタフェース)」
- 367 ページの「リストを使用してブート環境を作成しスワップを再構成する(コマンド行インタフェース)」
- 369 ページの「ブート環境を作成し共有可能ファイルシステムをコピーする(コマンド行インタフェース)」
- 370 ページの「別々のソースから単一のブート環境を作成(コマンド行インタフェース)」
- 371 ページの「フラッシュアーカイブ用ブート環境の作成(コマンド行インタフェース)」

## ▼ ブート環境を作成する(キャラクタインタフェース)

1. メインメニューから「**Create**」を選択します。  
「Create a Boot Environment」サブメニューが表示されます。
2. アクティブブート環境(必要に応じて)と新しいブート環境の名前を入力し、確定します。アクティブブート環境の名前の入力が必要なのは、最初にブート環境を作成するときだけです。

ブート環境名は英数字で 30 文字以内とします。使用できるのは英数文字だけで、マルチバイト文字を使用することはできません。

```
Name of Current Boot Environment:    solaris8
Name of New Boot Environment:       solaris9
```

3. **F3** を押して変更を保存します。  
「Configuration」メニューが表示されます。

Active Boot Environment - solaris8				
Mount Point	Device	FS Type	Size (MB)	% Used
/	c0t0d0s0	ufs	824	74
-	c0t0d0s1	swap	257	0

New Boot Environment - solaris9				
Mount Point	Device	FS Type	Size (MB)	Recommended Min Size (MB)
/		ufs		1025
-	c0t0d0s1	swap	257	3

Esc	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	^D	^X
HELP	CHOICE	SAVE	SLICE	PRINT	CANCEL	SCHEDULE	SPLIT	MERGE	CLR	OTHR

図 32-3 Solaris Live Upgrade の「Configuration」メニュー

「Configuration」メニューには次の項目があります。

- 元のブート環境は、画面の上部に表示されます。画面の下部には作成されたブート環境が表示されます。
- 「Device」フィールドには次の情報が含まれています。
  - ディスクデバイス名。/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum の形式で表示されます。
  - Solaris ボリュームマネージャのメタデバイス名。/dev/md/dsk/dnum の形式で表示されます。
  - Veritas ボリュームマネージャのボリューム名。/dev/vx/dsk/volume\_name の形式で表示されます。
  - クリティカルファイルシステムの選択領域は、クリティカルファイルシステムを選択するまで空白のままです。/usr、/var、/opt などのクリティカルファイルシステムは、分割可能です。ルート (/) ファイルシステムとマージすることもできます。
  - /export などの共有可能なファイルシステム (スワップ) は「Device」フィールドに表示されます。これらのファイルシステムは、ソースブート環境とターゲットブート環境の両方に同じマウントポイントを持っています。スワップはデフォルトで共有されますが、スワップスライスの分割とマージ (追加と削除) も行うことができます。  
クリティカルファイルシステムと共有可能なファイルシステムの概要は、328 ページの「ブート環境の作成 (概要)」を参照してください。
- 「FS\_Type」フィールドでは、ファイルシステムの種類を変更できます。ファイルシステムの種類は、次のいずれかになります。

- vxfs: Veritas ファイルシステムを示す
- swap: スワップファイルシステムを示す
- ufs: UFS ファイルシステムを示す

4. (省略可能) 以下の作業は、必要に応じて行うことができます。

- 画面上の情報を ASCII ファイルに出力するには F5 を押します。
- ファイルシステムのリストをスクロールするには、Control-X を押します。  
この操作で、アクティブブート環境のファイルシステムと新しいブート環境のファイルシステムを切り替えてスクロールできるようになります。
- 「Configuration」メニューを閉じるには、F6 を押します。
  - 「Configuration」メニューが表示されている場合は、変更が保存されず、ファイルシステムは修正されません。
  - 「Configuration」サブメニューが表示されている場合は、「Configuration」メニューに戻ります。

5. F2 を押して、利用できるスライスを選択します。

「Choices」メニューでは、カーソルが置かれているフィールドに、そのシステム上で利用できるスライスが表示されます。表示されるのは「Slice」フィールドと「file system FS\_Type」フィールドです。

- a. 矢印キーを使用してフィールド内にカーソルを置き、スライスまたはファイルシステムの種類を選択します。
  - 「Slice」フィールドにカーソルを置くと、すべての空きスライスが表示されます。ルート (/) の場合、「Choices」に表示されるのはルート (/) ファイルシステムの制限事項を満たす空きスライスだけです。345 ページの「ルート (/) ファイルシステムのスライスを選択するためのガイドライン」を参照してください。
  - 「FS\_Type」フィールドにカーソルを置くと、利用できるすべてのファイルシステムタイプが表示されます。
  - 現在のファイルシステムには、ボールド書体のスライスを選択できます。スライスのサイズは、ファイルシステムのサイズにアップグレード用に 30% を加えることによって概算できます。
  - ボールド書体ではないスライスは、そのファイルシステムをサポートするにはサイズが小さすぎることを意味します。ディスクスライスを作成し直す方法については、手順 6 を参照してください。
- b. Return キーを押してスライスを選択します。  
選択したスライスが「Slice」フィールドに表示されるか、あるいは「FS\_Type」フィールド内でファイルシステムの種類が変化します。

6. (省略可能) 空きスライスが最小要件を満たしていない場合は、F4 を押して任意の空きスライスを分割し直してください。

「Solaris Live Upgrade Slice Configuration」メニューが表示されます。

新しいスライスを作成できるように、`format` コマンドが実行されます。画面の指示に従って新しいスライスを作成してください。`format` コマンドについての詳細は、`format` のマニュアルページを参照してください。

矢印キーを使って、「Device」フィールドと「FS\_Type」フィールド間を移動できます。デバイスを選択すると、「Size (Mbytes)」フィールドに値が自動的に表示されます。

- a. デバイスを解放するには、**Control-D** を押します。  
以上の操作でスライスが利用できるようになり、「Choices」メニューに表示されます。
- b. **F3** を押して「**Configuration**」メニューに戻ります。

- 7. (省略可能) クリティカルファイルシステムを分割すると、そのファイルシステムは別々のマウントポイントに配置されます。ファイルシステムを分割するには、次の手順に従ってください。

(ファイルシステムのマージについては、手順 8 を参照してください。)

- a. 分割するファイルシステムを選択します。  
`/usr`、`/var`、`/opt` などのファイルシステムは、それらの親ディレクトリから分割できます。

---

注 – ブート環境のファイルシステムを作成する場合のルールは、Solaris オペレーティング環境のファイルシステムを作成する場合と同じです。Solaris Live Upgrade では、クリティカルなファイルシステムに無効な構成を作成してしまうことを回避できません。たとえば、`lucreate` コマンドを用いて、ルート (`/`) と `/kernel` を別々のファイルシステムに作成することができますが、このようにルート (`/`) を分割するのは誤りです。

---

- b. **F8** を押します。
- c. 新しいブート環境のファイルシステム名を入力します。例:

```
Enter the directory that will be a separate file system
on the new boot environment: /opt
```

新しいファイルシステムが検証されると、画面に新しい行が追加されます。

- d. **F3** を押して「**Configuration**」メニューに戻ります。  
「**Configuration**」メニューが表示されます。

- 8. (省略可能) マージを行うと、ファイルシステムは同じマウントポイントに配置されます。ファイルシステムをその親ディレクトリにマージするには、次の操作を行います。

(ファイルシステムの分割については、手順 7 を参照してください。)

- a. マージするファイルシステムを選択します。

/usr、/var、/optなどのファイルシステムをそれらの親ディレクトリにマージできます。

- b. **F9** を押します。

次の例のように、結合されるファイルシステムが表示されます。

```
/opt will be merged into /.
```

- c. **Return** キーを押します。

- d. **F3** を押して「**Configuration**」メニューに戻ります。

「**Configuration**」メニューが表示されます。

9. (省略可能) スワップスライスを追加するか削除するかを決定します。

- スワップスライスを分割して新しいスライスに配置したい場合は、手順 10 に進みます。
- スワップスライスを削除したい場合は、手順 11 に進みます。

10. (省略可能) スワップスライスを分割するには、次の手順に従います。

- a. 「**Device**」フィールドで、分割したいスワップスライスを選択します。

- b. **F8** を押します。

- c. プロンプトに対して、次のコマンドを入力します。

```
Enter the directory that will be a separate filesystem on
the new BE: swap
```

- d. **F2 (Choice)** を押します。

「**Choice**」メニューに、スワップに利用できるスライスが表示されます。

- e. スワップを配置するスライスを選択します。

そのスライスが「**Device**」フィールドに表示され、スワップの新しいスライスとなります。

11. (省略可能) スワップスライスを削除するには、次の手順に従います。

- a. 「**Device**」フィールドで、削除するスワップスライスを選択します。

- b. **F9** を押します。

- c. プロンプトが表示されたら「**y**」と入力します。

```
Slice /dev/dsk/c0t4d0s0 will not be swap partition.
Please confirm? [y, n]: y
```

このスワップスライスが削除されました。

12. 今すぐにブート環境を作成するか、後で作成するようにスケジュールするかを決定します。

- すぐに新しいブート環境を作成する場合は、F3 を押します。  
構成が保存され、構成画面が閉じます。このファイルシステムがコピーされ、ブート環境がブート可能になり、非アクティブブート環境が作成されます。  
ブート環境の作成には、システム構成に応じて、1 時間以上かかる場合があります。続いて、Solaris Live Upgrade メインメニューが表示されます。
- 後で作成されるようにスケジュールする場合は、次の例に示すように「y」と入力し、続いて開始時刻と電子メールアドレスを入力します。

```
Do you want to schedule the copy? y
Enter the time in 'at' format to schedule create: 8:15 PM
Enter the address to which the copy log should be mailed: someone@anywhere.com
```

処理の完了は、電子メールで通知されます。

時間の書式については、at (1) のマニュアルページを参照してください。

スケジュールできるのは一度に 1 つのジョブだけです。

作成が完了すると、非アクティブブート環境をアップグレードできるようになります。第 33 章を参照してください。

## ▼ ブート環境を初めて作成する (コマンド行インタフェース)

lucreate コマンドに -m オプションを指定することにより、新しいブート環境に作成するファイルシステムとその数を指定できます。作成するファイルシステムの数だけ、このオプションを繰り返し指定する必要があります。たとえば、-m オプションを 1 回だけ使用した場合、すべてのファイルシステムが指定の場所に格納されます。元のブート環境のすべてのファイルシステムが、-m で指定されたファイルシステムにマージされます。-m オプションを 2 回使用すると、ファイルシステムが 2 つ作成されます。-m オプションを使ってファイルシステムを作成する場合、次の項目に留意してください。

- -m オプションを 1 個指定して、新しいブート環境のルート (/) ファイルシステムを作成する必要があります。-m オプションを指定しないで lucreate を実行すると、「Configuration」メニューが表示されます。「Configuration」メニューでは、新しいマウントポイントにファイルを変更して新しいブート環境をカスタマイズできます。
- 現在のブート環境にクリティカルファイルシステムがある場合、このファイルシステムは、-m オプションで指定しなくても新しく作成されたファイルシステムの上位 2 番目のファイルシステムにマージされます。
- 新しいブート環境には、-m オプションで指定されたファイルシステムだけが作成されます。現在のブート環境に複数のファイルシステムがあり、新しいブート環境にも同じ数のファイルシステムを作成したい場合は、ファイルシステムごとに 1 個ずつ -m オプションを指定します。たとえば、ルート (/) ファイルシステム、/opt ファイルシステム、/var ファイルシステムがある場合、これらを新しい

ブート環境に作成するには、それぞれに `-m` オプションを 1 個ずつ指定します。

- マウントポイントが重複しないようにしてください。たとえば、ルート (`/`) ファイルシステムを 2 つ作成することはできません。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のように入力して新しいブート環境を作成します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -c BE_name \  
-m mountpoint:device:fs_type [-m mountpoint:device:fs_type] -n BE_name
```

`-A 'BE_description'` (省略可能) ブート環境名 (`BE_name`) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。

`-c BE_name` アクティブブート環境に名前 `BE_name` を割り当てます。このオプションが必要なのは、最初のブート環境を作成する場合だけです。`lucreate` を初めて実行する場合に `-c` を省略すると、アクティブブート環境の名前を入力するように求められます。最初のブート環境の作成後に `-c` オプションを使用すると、エラーメッセージが表示されます。

`-m`  
`mountpoint:device:fs_type`  
[-m...]  
新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。 `-m` に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。

- `mountpoint` には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す `-` (ハイフン) を指定できます。
- `device` フィールドには、次のどちらかを指定できます。
  - ディスクデバイスの名前。 `/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum` の形式で表されます。
  - Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。 `/dev/md/dsk/dnum` の形式で表されます。
  - Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。 `/dev/vx/dsk/volume_name` の形式で表されます。
  - キーワード `merged`。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。
- `fs_type` フィールドには、次のいずれかを指定できます。
  - `ufs`: UFS ファイルシステムを示す
  - `vxfs`: Veritas ファイルシステムを示す
  - `swap`: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (`-`) で表す

`-n BE_name` 作成するブート環境の名前。`BE_name` は、システム上で一意となるように指定する必要があります。



### 例 32-1 ブート環境を作成する (コマンド行)

この例では、アクティブブート環境の名前は `first_disk` です。 `-m` オプションはファイルシステムのマウントポイントを表します。ルート (`/`) ファイルシステムと `/usr` ファイルシステムが作成されます。新しいブート環境の名前は `second_disk` です。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、`second_disk` に対応しています。新しいブート環境 `second_disk` のスワップは、自動的にソースである `first_disk` から共有されます。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -c first_disk
-m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs -m /usr:/dev/dsk/c0t4d0s3:ufs \
-n second_disk
```

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。

## ▼ ブート環境を作成しファイルシステムをマージする (コマンド行インタフェース)

---

注 - `lucreate` コマンドに `-m` オプションを指定することにより、新しいブート環境に作成するファイルシステムとその数を指定できます。作成するファイルシステムの数だけ、このオプションを繰り返し指定する必要があります。たとえば、`-m` オプションを 1 回だけ使用した場合、すべてのファイルシステムが指定の場所に格納されます。元のブート環境のファイルシステムがすべて 1 つのファイルシステムにマージされます。`-m` オプションを 2 回使用すると、ファイルシステムが 2 つ作成されます。

---

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -m mountpoint:device:fs_type \
[-m mountpoint:device:fs_type] -m mountpoint:merged:fs_type -n BE_name
```

`-A BE_description` (省略可能) ブート環境名 (`BE_name`) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。

`-m` 新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。`-m` に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。

`mountpoint:device:fs_type`  
`[-m...]`

- `mountpoint` には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す `-` (ハイフン) を指定できます。
- `device` フィールドには、次のどちらかを指定できます。
  - ディスクデバイスの名前。  
`/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum` の形式で表されます。
  - Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。  
`/dev/md/dsk/dnum` の形式で表されます。
  - Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。  
`/dev/vx/dsk/volume_name` の形式で表されます。
  - キーワード `merged`。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。
- `fs_type` フィールドには、次のいずれかを指定できます。
  - `ufs`: UFS ファイルシステムを示す
  - `vxfs`: Veritas ファイルシステムを示す
  - `swap`: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (`-`) で表す

`-n BE_name` 作成するブート環境の名前。`BE_name` は、システム上で一意となるように指定する必要があります。

#### 例 32-2 ブート環境を作成しファイルシステムをマージする (コマンド行インタフェース)

この例の場合、現在のブート環境には、ルート (`/`) ファイルシステム、`/usr` ファイルシステム、`/opt` ファイルシステムがあります。`/opt` ファイルシステムは、親ファイルシステム `/usr` にマージされます。新しいブート環境の名前は `second_disk` です。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、`second_disk` に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -c first_disk \
-m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs -m /usr:/dev/dsk/c0t4d0s1:ufs \
-m /usr/opt:merged:ufs -n second_disk
```

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。

## ▼ ブート環境を作成しファイルシステムを分割する (コマンド行インタフェース)

---

注 – ブート環境のファイルシステムを作成する場合のルールは、Solaris オペレーティング環境のファイルシステムを作成する場合と同じです。Solaris Live Upgrade では、クリティカルなファイルシステムに無効な構成を作成してしまうことを回避できません。たとえば、lucreate コマンドを用いて、ルート (/) と /kernel を別々のファイルシステムに作成することができますが、このようにルート (/) を分割するのは誤りです。

---

1つのディレクトリを複数のマウントポイントに分割すると、ファイルシステム間でハードリンクが維持されなくなります。たとえば、/usr/stuff1/file が /usr/stuff2/file にハードリンクされている場合に /usr/stuff1 と /usr/stuff2 を別々のファイルシステムに分割すると、ファイル間のリンクは解除されず、lucreate から警告メッセージが表示され、解除されたハードリンクの代わりとなるシンボリックリンクが作成されます。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -m mountpoint:device:fs_type \  
[-m mountpoint:device:fs_type] -n new_BE
```

-A 'BE\_description' (省略可能) ブート環境名 (BE\_name) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。

-m *mountpoint:device:fs\_type* [-m...]

新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。-m に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。

- *mountpoint* には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す - (ハイフン) を指定できます。
- *device* フィールドには、次のどちらかを指定できます。
  - ディスクデバイスの名前。  
/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum の形式で表されます。
  - Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。  
/dev/md/dsk/dnum の形式で表されます。
  - Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。  
/dev/vx/dsk/volume\_name の形式で表されます。
  - キーワード merged。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。
- *fs\_type* フィールドには、次のいずれかを指定できます。
  - ufs: UFS ファイルシステムを示す
  - vxfs: Veritas ファイルシステムを示す
  - swap: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (-) で表す

-n *BE\_name*

作成するブート環境の名前。*BE\_name* は、システム上で一意となるように指定する必要があります。

**例 32-3** ブート環境を作成しファイルシステムを分割する (コマンド行インタフェース)

この例では、前述のコマンドによってルート (/) ファイルシステムを新しいブート環境内の複数のディスクスライスに分割しています。ここでは、/usr、/var、および /opt をすべてルート (/) に置いている次のソースブート環境を想定してください。

```
/dev/dsk/c0t0d0s0 /
```

新しいブート環境で、次に示すように別々のスライスにマウントすることによって、ファイルシステム /usr、/var、/opt を分割します。

```
/dev/dsk/c0t1d0s0 /
/dev/dsk/c0t1d0s1 /var
/dev/dsk/c0t1d0s7 /usr
/dev/dsk/c0t1d0s5 /opt
```

「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、ブート環境名 second\_disk に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -c first_disk \
-m /:/dev/dsk/c0t1d0s0:ufs -m /usr:/dev/dsk/c0t1d0s7:ufs \
-m /var:/dev/dsk/c0t1d0s1:ufs -m /opt:/dev/dsk/c0t1d0s5:ufs \
-n second_disk
```

例 32-3 ブート環境を作成しファイルシステムを分割する (コマンド行インタフェース)  
(続き)

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。

## ▼ ブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)

スワップスライスは、デフォルトでは複数のブート環境で共有されます。-m オプションでスワップを「指定しない」場合、現在のブート環境と新しいブート環境が同じスワップスライスを共有します。新しいブート環境のスワップを構成し直したい場合は、-m オプションを使用してそのブート環境に対してスワップスライスの追加または削除を行なってください。

---

注 - スワップスライスを分割したりマージしたりするには、現在のブート環境 (-s オプションを使用した場合はソースブート環境) 以外のブート環境では、スワップスライ스가使用中であってはならないという制限があります。ファイルシステムの種類 (スワップ、ufs など) にかかわらず、スワップスライスはほかのブート環境によって使用されている場合、ブート環境の作成は失敗します。

既存のスワップスライスをを使用してブート環境を作成した後、vfstab ファイルを編集することができます。

---

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -m mountpoint:device:fs_type \  
-m -:device:swap -n BE_name
```

-A 'BE\_description' (省略可能) ブート環境名 (BE\_name) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。

- m *mountpoint:device:fs\_type* [-m...]
- 新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。-m に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。
- *mountpoint* には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す - (ハイフン) を指定できます。
  - *device* フィールドには、次のどちらかを指定できます。
    - ディスクデバイスの名前。  
/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum の形式で表されます。
    - Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。  
/dev/md/dsk/dnum の形式で表されます。
    - Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。  
/dev/vx/dsk/volume\_name の形式で表されます。
    - キーワード merged。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。
  - *fs\_type* フィールドには、次のいずれかを指定できます。
    - ufs: UFS ファイルシステムを示す
    - vxfs: Veritas ファイルシステムを示す
    - swap: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (-) で表す
- n *BE\_name*
- 作成するブート環境の名前。*BE\_name* は、一意となるように指定する必要があります。

スワップが別のスライスまたはデバイスに移動し、新しいブート環境が作成されます。

#### 例 32-4 ブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)

この例の場合、現在のブート環境には、/dev/dsk/c0t0d0s0 にルート (/)、/dev/dsk/c0t0d0s1 にスワップがあります。新しいブート環境はルート (/) を /dev/dsk/c0t4d0s0 にコピーし、/dev/dsk/c0t0d0s1 と /dev/dsk/c0t4d0s1 の両方をスワップスライスとして使用します。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、ブート環境名 second\_disk に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -c first_disk \
-m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs -m -:/dev/dsk/c0t0d0s1:swap \
-m -:/dev/dsk/c0t4d0s1:swap -n second_disk
```

これらのスワップ割り当ては、second\_disk からブートが行われて初めて有効になります。スワップスライスが多数存在する場合は、-M オプションを使用してください。367 ページの「リストを使用してブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。

## ▼ リストを使用してブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)

スワップスライスが多数存在する場合は、スワップリストを作成してください。  
lucreate は、新しいブート環境のスワップスライスにこのリストを使用します。

---

注 – スワップスライスを分割したりマージしたりするには、現在のブート環境 (-s オプションを使用した場合はソースブート環境) 以外のブート環境では、スワップスライスが使用中であってはならないという制限があります。スワップスライスのファイルシステムの種類 (swap、ufs) などにかかわらず、スワップスライスが他のブート環境によって使用されている場合、ブート環境の作成は失敗します。

---

1. 新しいブート環境で使用されるスワップスライスのリストを作成します。このファイルの場所と名前はユーザーが決定できます。この例では、**/etc/lu/swapslices** ファイルにはデバイスとスライスが挙げられています。

```
 -: /dev/dsk/c0t3d0s2:swap
 -: /dev/dsk/c0t3d0s2:swap
 -: /dev/dsk/c0t4d0s2:swap
 -: /dev/dsk/c0t5d0s2:swap
 -: /dev/dsk/c1t3d0s2:swap
 -: /dev/dsk/c1t4d0s2:swap
 -: /dev/dsk/c1t5d0s2:swap
```

2. 次のコマンドを入力します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -m mountpoint:device:fs_type \  
          -M slice_list -n BE_name
```

-A 'BE\_description' (省略可能) ブート環境名 (BE\_name) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。

<p><code>-m</code>  <code>mountpoint:device:fs_type</code>  <code>[-m...]</code></p>	<p>新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。<code>-m</code>に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>mountpoint</code> には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す <code>-</code> (ハイフン) を指定できます。</li> <li>■ <code>device</code> フィールドには、次のどちらかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ディスクデバイスの名前。  <code>/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum</code> の形式で表されます。</li> <li>■ Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。  <code>/dev/md/dsk/dnum</code> の形式で表されます。</li> <li>■ Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。  <code>/dev/vx/dsk/volume_name</code> の形式で表されます。</li> <li>■ キーワード <code>merged</code>。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。</li> </ul> </li> <li>■ <code>fs_type</code> フィールドには、次のいずれかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>ufs</code>: UFS ファイルシステムを示す</li> <li>■ <code>vxfs</code>: Veritas ファイルシステムを示す</li> <li>■ <code>swap</code>: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (<code>-</code>) で表す</li> </ul> </li> </ul>
<p><code>-M slice_list</code></p>	<p>ファイル <code>slice_list</code> 中には、<code>-m</code> オプションのリストが記述されています。これらの引数は、<code>-m</code> に指定されている書式で指定してください。ハッシュ記号 (<code>#</code>) で始まるコメント行は無視されます。<code>-M</code> オプションは、ブート環境用のファイルシステムが多数存在する場合に便利です。<code>-m</code> オプションと <code>-M</code> オプションは一緒に使えます。たとえば、<code>slice_list</code> にスワップスライスを記録しておき、<code>-m</code> を使用して、ルート (<code>/</code>) スライスと <code>/usr</code> スライスを指定できます。</p> <p><code>-m</code> オプションと <code>-M</code> オプションでは、特定のマウントポイントについて複数のスライスを指定できます。これらのスライスを処理する場合、<code>lucreate</code> は利用不可能なスライスをスキップして利用できる最初のスライスを選択します。</p>
<p><code>-n BE_name</code></p>	<p>作成するブート環境の名前。<code>BE_name</code> は、一意となるように指定する必要があります。</p>

**例 32-5** リストを使用してブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)

この例では、新しいブート環境のスワップは、`/etc/lu/swapslices` ファイルに挙げられている一連のスライスです。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、`second_disk` に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -c first_disk \
-m /:/dev/dsk/c02t4d0s0:ufs -m /usr:/dev/dsk/c02t4d0s1:ufs \
-M /etc/lu/swapslices -n second_disk
```

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。



## ▼ ブート環境を作成し共有可能ファイルシステムをコピーする (コマンド行インタフェース)

新しいブート環境に共有可能ファイルシステムをコピーしたい場合は、`-m` オプションを使用してマウントポイントがコピーされるように指定してください。それ以外の場合、共有可能なファイルシステムはデフォルトで共有され、`vfstab` ファイルに指定された同じマウントポイントを使用します。共有可能ファイルシステムに対する更新は、両方の環境に適用されます。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. ブート環境を作成します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -m mountpoint:device:fs_type \  
[-m ]mountpoint:device:fs_type -n BE_name
```

<code>-A 'BE_description'</code>	(省略可能) ブート環境名 (BE_name) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。
<code>-m mountpoint:device:fs_type [-m...]</code>	<p>新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。<code>-m</code> に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ <code>mountpoint</code> には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す <code>-</code> (ハイフン) を指定できます。</li><li>■ <code>device</code> フィールドには、次のどちらかを指定できます。<ul style="list-style-type: none"><li>■ ディスクデバイスの名前。 <code>/dev/dsk/cnumdnumtnumsnun</code> の形式で表されます。</li><li>■ Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。 <code>/dev/md/dsk/dnum</code> の形式で表されます。</li><li>■ Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。 <code>/dev/vx/dsk/volume_name</code> の形式で表されます。</li><li>■ キーワード <code>merged</code>。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。</li></ul></li><li>■ <code>fs_type</code> フィールドには、次のいずれかを指定できます。<ul style="list-style-type: none"><li>■ <code>ufs</code>: UFS ファイルシステムを示す</li><li>■ <code>vxfs</code>: Veritas ファイルシステムを示す</li><li>■ <code>swap</code>: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (<code>-</code>) で表す</li></ul></li></ul>
<code>-n BE_name</code>	作成するブート環境の名前。 <code>BE_name</code> は、一意となるように指定する必要があります。

例 32-6 ブート環境を作成し共有可能ファイルシステムをコピーする (コマンド行インタフェース)

この例の場合、現在のブート環境には、ルート (/) ファイルシステムと /home ファイルシステムがあります。新しいブート環境では、ルート (/) ファイルシステムがルート (/) と /usr の 2 つのファイルシステムに分割されます。 /home ファイルシステムは新しいブート環境にコピーされます。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、ブート環境名 second\_disk に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -c first_disk \  
-m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs -m /usr:/dev/dsk/c0t4d0s3:ufs \  
-m /home:/dev/dsk/c0t4d0s4:ufs -n second_disk
```

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。

## ▼ 別々のソースから単一のブート環境を作成 (コマンド行インタフェース)

lucreate コマンドは、アクティブブート環境内のファイルシステムに基づいてブート環境を作成します。アクティブブート環境以外のブート環境に基づいてブート環境を作成する場合は、`-s` オプションを指定して lucreate を実行します。

---

注 - 新しいブート環境をアクティブにした後、フォールバックを行う必要がある場合は、ソースブート環境ではなく最後にアクティブだったブート環境に戻ります。

---

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. ブート環境を作成します。

```
# lucreate [-A 'BE_description'] -s source_BE_name  
-m mountpoint:device:fs_type -n BE_name
```

`-A 'BE_description'` (省略可能) ブート環境名 (BE\_name) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。

`-s source_BE_name` 新しいブート環境に対するソースブート環境を指定します。このソースはアクティブブート環境ではありません。

`-m` 新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。`-m` に引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。

`mountpoint:device:fs_type` `mountpoint` には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す `-` (ハイフン) を指定できます。

`[-m...]` `device` フィールドには、次のどちらかを指定できます。

- ディスクデバイスの名前。 `/dev/dsk/cnumdnumtnumsnum` の形式で表されます。
- Solaris ボリュームマネージャのメタデバイス名。  
`/dev/md/dsk/dnum` の形式で表されます。
- Veritas ボリュームマネージャのボリューム名。  
`/dev/vx/dsk/volume_name` の形式で表されます。
- キーワード `merged`。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。
- `fs_type` フィールドには、次のいずれかを指定できます。
  - `ufs`: UFS ファイルシステムを示す
  - `vxfs`: Veritas ファイルシステムを示す
  - `swap`: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン `-` で表す

`-n BE_name` 作成するブート環境の名前。`BE_name` は、システム上で一意となるように指定する必要があります。

#### 例 32-7 別々のソースから単一のブート環境を作成 (コマンド行インタフェース)

この例では、ソースブート環境 `third_disk` 内のルートファイルシステム (`/`) に基づいてブート環境を作成します。`Third_disk` はアクティブブート環境ではありません。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、ブート環境名 `second_disk` に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -s third_disk \
-m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs -n second_disk
```

新しいブート環境の作成が終わると、この環境をアップグレードしてアクティブにする (ブート可能な状態にする) ことができます。第 33 章を参照してください。

## ▼ フラッシュアーカイブ用ブート環境の作成 (コマンド行インタフェース)

`lucreate` コマンドは、アクティブブート環境内のファイルシステムに基づいてブート環境を作成します。`lucreate` コマンドに `-s` オプションを指定して実行すると、フラッシュアーカイブのインストールに利用できる空のブート環境を非常に短時間で作成できます。

1. スーパーユーザーとしてログインします。

## 2. 空のブート環境を作成します。

```
# lucreate -A 'BE_name' -s - \  
-m mountpoint:device:fs_type -n BE_name
```

-A 'BE_description'	(省略可能) ブート環境名 (BE_name) の説明を記述できます。記述の長さ、使用できる文字に制限はありません。
-s -	空のブート環境を作成します。
-m mountpoint:device:fs_type [-m...]	新しいブート環境のファイルシステム構成を指定します。-mに引数として指定されるファイルシステムは、同じディスク上のファイルシステムでも、複数のディスク上のファイルシステムでも構いません。このオプションは、作成したいファイルシステムの数だけ使用します。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ <i>mountpoint</i> には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップパーティションを示す - (ハイフン) を指定できます。</li><li>■ <i>device</i> フィールドには、次のどちらかを指定できます。<ul style="list-style-type: none"><li>■ ディスクデバイスの名前。/dev/dsk/c numcnumt numsnun の形式で表されます。</li><li>■ Solaris ポリウムマネージャのメタデバイス名。/dev/md/dsk/dnum の形式で表されます。</li><li>■ Veritas ポリウムマネージャのポリウム名。/dev/vx/dsk/volume_name の形式で表されます。</li><li>■ キーワード merged。指定されたマウントポイントのファイルシステムがその親とマージされることを示します。</li></ul></li><li>■ <i>fs_type</i> フィールドには、次のいずれかを指定できます。<ul style="list-style-type: none"><li>■ <i>ufs</i>: UFS ファイルシステムを示す</li><li>■ <i>vxfs</i>: Veritas ファイルシステムを示す</li><li>■ <i>swap</i>: スワップファイルシステムを示す。スワップマウントポイントはハイフン (-) で表す</li></ul></li></ul>
-n BE_name	作成するブート環境の名前。BE_name は、システム上で一意となるように指定する必要があります。

### 例 32-8 フラッシュアーカイブ用ブート環境の作成 (コマンド行インタフェース)

この例では、ファイルシステムを一切含まないブート環境を作成します。「Solaris 9 test Jan. 2001」という記述は、ブート環境名 `second_disk` に対応しています。

```
# lucreate -A 'Solaris 9 test Jan 2001' -s - \  
-m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs -n second_disk
```

空のブート環境の作成が完了したら、フラッシュアーカイブをインストールし、アクティブ (ブート可能な状態) にすることができます。第 33 章を参照してください。

## 第 33 章

---

# Solaris Live Upgrade を用いたアップグレード

---

この章では、Solaris Live Upgrade を使用して非アクティブブート環境のアップグレードとアクティブ化を行う方法について説明します。また、アクティブ化によって発生した問題を解決する方法についても説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 374 ページの「作業マップ: ブート環境のアップグレード」
- 374 ページの「ブート環境のアップグレード」
- 385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」
- 391 ページの「ブート環境のアクティブ化」
- 395 ページの「問題の解決: 元のブート環境へのフォールバック (コマンド行インタフェース)」

Solaris Live Upgrade は、メニューを介して使用することもコマンド行インタフェースで使用することもできます。以下の説明では、両方のインタフェースについて手順を説明しています。これらの手順では、Solaris Live Upgrade の使用に関する詳しい説明は省略しています。コマンドについての詳細は、第 36 章 を、コマンド行インタフェースについての詳細は各マニュアルページを参照してください。

---

# 作業マップ: ブート環境のアップグレード

表 33-1 作業マップ: Solaris Live Upgrade によるアップグレード

作業	説明	参照先
ブート環境のアップグレードまたはフラッシュアーカイブのインストール	<ul style="list-style-type: none"><li>■ オペレーティング環境イメージを使用して非アクティブブート環境をアップグレードします。</li><li>■ 非アクティブブート環境へフラッシュアーカイブをインストールします。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 374 ページの「ブート環境のアップグレード」</li><li>■ 385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」</li></ul>
非アクティブブート環境のアクティブ化	変更を有効にし、非アクティブブート環境をアクティブに切り替えます。	391 ページの「ブート環境のアクティブ化」
(任意) アクティブ化で問題が発生した場合のフォールバック	問題が発生する場合は元のブート環境をアクティブに戻します。	395 ページの「問題の解決: 元のブート環境へのフォールバック (コマンド行インタフェース)」

---

## ブート環境のアップグレード

「Upgrade」メニューまたは `luupgrade` コマンドを使用してブート環境をアップグレードします。この節では、以下の場所に置かれているファイルを使用して非アクティブブート環境をアップグレードする手順について説明します。

- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー
- ローカルファイル
- ローカルテープ
- ローカルデバイス (DVD または CD)

---

注 - インストールに複数の CD が必要な場合は、コマンド行インタフェースを使用してアップグレードする必要があります。378 ページの「複数の CD を使用してオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

---

最新のオペレーティング環境へアップグレードする間、アクティブブート環境への影響はありません。新しいファイルは非アクティブブート環境のクリティカルファイルシステムとマージされますが、共有可能ファイルシステムは変更されません。

アップグレードを行う代わりに、フラッシュアーカイブを作成して、非アクティブブート環境にアーカイブをインストールできます。それらの新しいファイルは非アクティブブート環境のクリティカルファイルシステムを上書きしますが、共有可能ファイルシステムは変更されません。385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」を参照してください。

## メタデバイスとボリュームのアップグレード

新しいブート環境にアップグレードを行ったりアーカイブを使ってインストールを行う場合、そのデバイスは物理スライスでなければなりません。Solaris ボリュームマネージャメタデバイスか Veritas ファイルシステム (VxFS) ボリュームにマウントされているファイルシステムがそのブート環境にあると、アップグレードまたはアーカイブのインストールは失敗します。そのようなブート環境でアップグレードやアーカイブのインストールを行う場合は、すべてのスライスが物理ディスクスライスになるようにブート環境を手動で変更する必要があります。lucreate コマンドを使って別のブート環境を作成することも、メタデバイスやボリュームを削除することもできます。

lucreate コマンドを使って別のブート環境を作成する場合は、ブート環境のコピーを物理ディスクスライスに格納します。たとえば、現在のブート環境のディスク構成が次のようなボリュームとスライスを含んでいるとします。

/	/dev/md/dsk/d10 にマウントされている
/usr	/dev/md/dsk/d20 にマウントされている
/var	/dev/dsk/c0t3d0s0 にマウントされている
空きスライス	c0t4d0s0
空きスライス	c0t4d0s3
空きスライス	c0t4d0s4

この場合、次の lucreate コマンドを使ってブート環境を物理ディスクスライスにコピーします。これで、ブート環境は、アップグレードやアーカイブを用いたインストールを行える状態になります。この例では、現在のブート環境の名前が currentBE、新しいブート環境の名前が nextBE であるとします。

```
# lucreate -s currentBE -n nextBE -m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs \  
-m /usr:/dev/dsk/c0t4d0s3:ufs -m /var:/dev/dsk/c0t4d0s4:ufs
```

これで、新しいブート環境に対してアップグレードやアーカイブを用いたインストールを行い、それをアクティブ化し、さらに手動で再ミラー化またはカプセル化することができます。

メタデバイスやボリュームを手動で削除する場合は、次のようにします。

- ブート環境を手動でマウントします。
- `/etc/vfstab` ファイルを編集して、すべてのメタデバイスやボリュームを物理ディスクスライスに変更します。
- Solaris ボリュームマネージャまたは Veritas ソフトウェアを使ってメタデバイスまたはボリュームを削除します。
- ブート環境をマウント解除します。

これで、ブート環境は、アップグレードやアーカイブを用いたインストールを行える状態になります。

## Solaris Live Upgrade によるパッケージやパッチの管理

Solaris Live Upgrade を使ってパッチやパッケージをシステムに追加することができます。マシンアップグレードの場合と同じように、Live Upgrade を使ってパッチをマシンに追加すると、システムのダウンタイムはリブートの時間だけですみます。luupgrade コマンドを使えば、パッチやパッケージをブート環境に直接追加できます。あるいは、パッチやパッケージをマスターシステムに適用し、そのシステムのフラッシュアーカイブを Live Upgrade でブート環境に適用することもできます。

パッチをブート環境に直接追加する場合は、新しいブート環境を作成してから、`-t` オプションを指定して luupgrade コマンドを実行します。パッケージをブート環境に追加する場合は、luupgrade コマンドに `-p` オプションを指定します。詳細は、luupgrade (1M) のマニュアルページを参照してください。

あるいは、新しいパッケージやパッチがすでに追加されているブート環境の完全なコピーを含むフラッシュアーカイブを Solaris Live Upgrade を使用してインストールすることもできます。この完全なブート環境または単一のリファレンスシステムをマスターシステムと呼びます。フラッシュアーカイブを作成するプロセスは、マスターシステムの作成から始まります。マスターシステムを作成したら、インストールしたいパッチやパッケージを追加します。そして、マスターシステムのフラッシュアーカイブを作成します。次に Solaris Live Upgrade を使ってこのアーカイブを新しいブート環境にインストールします。ブート環境は、必要に応じて何回でもコピーしたり、変更したり、配布したりすることができます。フラッシュアーカイブの作成方法については、第 18 章を参照してください。Solaris Live Upgrade を使ってフラッシュアーカイブをインストールする方法については、385 ページの「ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール」を参照してください。





注意 – Solaris Live Upgrade でパッケージやパッチのアップグレードや追加、削除を行うためには、パッケージやパッチが SVR4 パッケージ化ガイドラインに準拠していなければなりません。サンのパッケージはこのガイドラインに準拠していますが、サードパーティベンダーのパッケージがこれに準拠しているとは限りません。パッケージがガイドラインに準拠していないと、アップグレード時にパッケージ追加ソフトウェアに問題が発生したり、場合によっては、アクティブなブート環境が変更されたりすることがあります。

Solaris Live Upgrade によるパッケージの追加や削除については、luupgrade (1M) のマニュアルページを参照してください。パッケージ化の要件については、付録 C を参照してください。

## ▼ ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (キャラクタインタフェース)

この手順でアップグレードを行う場合は、1つの CD、DVD、または結合されたインストールイメージを使用する必要があります。複数の CD が必要なインストールでは378 ページの「複数の CD を使用してオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

1. **Solaris Live Upgrade** のメインメニューから「**Upgrade**」を選択します。「Upgrade」メニューが表示されます。
2. 新しいブート環境の名前を入力します。
3. **Solaris** インストールイメージが置かれている場所のパスを入力します。

インストールメディアの種類	説明
ネットワークファイルシステム	インストールイメージが置かれているネットワークファイルシステムのパスを指定します。
ローカルファイル	インストールイメージが置かれているローカルファイルシステムのパスを指定します。
ローカルテープ	インストールイメージが置かれているローカルテープデバイスとテープ上の位置を指定します。
ローカルデバイス、DVD、または CD	ローカルデバイスと、インストールイメージのパスを指定します。

- DVD または 1 つの CD を使用する場合は、次の例のように、そのディスクへのパスを入力します。

```
Package Media: /cdrom/solaris9/s0
```

- 1 つに結合されたイメージがネットワーク上に存在する場合は、次の例のようにそのネットワークファイルシステムのパスを入力します。

Package Media: `/net/installmachine/export/solaris9/os_image`

4. **F3** を押してアップグレードします。
5. アップグレードが完了すると、メインメニューが表示されます。

## ▼ ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)

この手順でアップグレードを行う場合は、1 つの CD、DVD、または結合されたインストールイメージを使用する必要があります。複数の CD が必要なインストールでは、378 ページの「複数の CD を使用してオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のように入力して、アップグレードするブート環境とインストールソフトウェアのパスを指定します。

```
# luupgrade -u -n BE_name -s os_image_path
```

<code>-u</code>	ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードします。
<code>-n BE_name</code>	アップグレード対象のブート環境の名前を指定します。
<code>-s os_image_path</code>	オペレーティングシステムイメージが置かれているディレクトリのパス名を指定します。

例 33-1 ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)

この例では、`second_disk` ブート環境をアップグレードします。

```
# luupgrade -u -n second_disk \  
-s /net/installmachine/export/solaris9/OS_image
```

## ▼ 複数の CD を使用してオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)

オペレーティングシステムイメージが複数の CD に入っている場合は、このアップグレード方法を使用してください。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のように入力して、アップグレードするブート環境とインストールソフトウェアのパスを指定します。

```
# luupgrade -u -n BE_name -s os_image_path
```

-u	ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードします。
-n BE_name	アップグレード対象のブート環境の名前を指定します。
-s os_image_path	オペレーティングシステムイメージが置かれているディレクトリのパス名を指定します。

3. 1 枚目の **CD** のインストーラ処理が完了したら、2 枚目の **CD** を挿入します。
4. この手順は前述のものと同じですが、**-u** オプションではなく **-i** オプションを使用します。メニューまたはテキストモードで、2 枚目の **CD** 上のインストーラを実行するように選択してください。

- 次のコマンドは、メニューを使用して 2 枚目の CD 上のインストーラを実行します。

```
# luupgrade -i -n BE_name -s os_image_path
```

- 次のコマンドは、テキストモードで 2 枚目の CD 上のインストーラを実行します。ユーザーに入力を求めるプロンプトは表示されません。

```
# luupgrade -i -n BE_name -s os_image_path -O '-nodisplay -noconsole'
```

-i	指定されたメディア上のインストールプログラムを探し、そのプログラムを実行します。インストーラプログラムは、 <b>-s</b> で指定します。
-n BE_name	アップグレード対象のブート環境の名前を指定します。
-s os_image_path	オペレーティングシステムイメージを含むディレクトリのパス名を指定します。
-O '-nodisplay -noconsole'	(任意) テキストモードで 2 枚目の CD 上のインストーラを実行します。ユーザーに入力を求めるプロンプトは表示されません。

このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。391 ページの「ブート環境のアクティブ化」を参照してください。

例 33-2 SPARC: 複数の CD によりオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース)

この例では、second\_disk ブート環境をアップグレードします。インストールイメージは、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 と Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD に入っています。-u オプションでは、CD セットのすべてのパッケージを格納するだけの領域があ

例 33-2 SPARC: 複数の CD によりオペレーティングシステムイメージをアップグレードする (コマンド行インタフェース) (続き)

るかどうかを判定します。-o オプションと -nodisplay および -noconsole オプションを指定すると、2 枚目の CD の読み取りの後にキャラクタユーザーインタフェースは表示されません。したがって、入力情報のプロンプトは表示されません。このインタフェースを表示する場合は、これらのオプションを省略します。

Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD を挿入し、次のように入力します。

```
# luupgrade -u -n second_disk -s /dev/cdrom/cdrom0/s0
```

Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を挿入し、次のように入力します。

```
# luupgrade -i -n second_disk -s /dev/cdrom/cdrom0 -o '-nodisplay \
-noconsole'
```

---

注 - ほかの CD がある場合は、luupgrade コマンドに -i オプションを指定してそれらの CD をインストールします。

---

## ▼ Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルを作成する

ここでは、Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルの作成方法について説明します。luupgrade コマンドに -j オプションを指定してこのプロファイルを使用し、非アクティブブート環境をアップグレードできます。

このプロファイルの使用方法については、次の 2 つのセクションを参照してください。

- プロファイルを使用したアップグレードについては、383 ページの「プロファイルを使用して Solaris Live Upgrade でアップグレードする (コマンド行インタフェース)」を参照してください。
- プロファイルを使用したフラッシュのインストールについては、389 ページの「プロファイルを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

1. テキストエディタを使用してテキストファイルを作成し、わかりやすい名前を付けます。プロファイルの名前は、システムに Solaris ソフトウェアをインストールするためにそのプロファイルをどのように使用するかを示すものにしてください。たとえば、このプロファイルに upgrade\_solaris9 という名前を付けます。
2. プロファイルにプロファイルキーワードと値を追加します。  
Solaris Live Upgrade プロファイルで使用できるのは、次のアップグレードキーワードだけです。

表 33-2 Live Upgrade プロファイルのキーワードと説明

キーワード	説明
(必須) <code>Install_type</code>	システムの既存の Solaris 環境をアップグレードするか、システムにフラッシュアーカイブをインストールするかを定義します。値は <code>upgrade</code> または <code>flash_install</code> です。
(省略可能) <code>archive_location</code>	指定された位置からフラッシュアーカイブを取得します。このキーワードで使用可能な値のリストについては、293 ページの「 <code>archive_location</code> プロファイルキーワード」を参照してください。
(省略可能) <code>cluster</code> (クラスタの追加または削除)	システムにインストールされるソフトウェアグループに対してクラスタを追加するか、または削除するかを指定します。このキーワードで使用可能な値のリストについては、303 ページの「 <code>cluster</code> プロファイルキーワード (ソフトウェアグループの追加)」を参照してください。
(省略可能) <code>geo</code>	システムにインストールする地域ロケールか、あるいはシステムのアップグレード時に追加する地域ロケールを指定します。このキーワードで使用可能な値のリストについては、310 ページの「 <code>geo</code> プロファイルキーワード」を参照してください。
(省略可能) <code>isa_bits</code>	64 ビットの Solaris 9 パッケージと 32 ビットの Solaris 9 パッケージのどちらをインストールするかを指定します。このキーワードで使用可能な値のリストについては、311 ページの「 <code>isa_bits</code> プロファイルキーワード」を参照してください。
(省略可能) <code>locale</code>	インストールまたはアップグレード時に追加するロケールパッケージを指定します。このキーワードで使用可能な値のリストについては、314 ページの「 <code>locale</code> プロファイルキーワード」を参照してください。
(省略可能) <code>package</code>	システムにインストールされるソフトウェアグループに対してパッケージを追加するか、または削除するかを指定します。このキーワードで使用可能な値のリストについては、316 ページの「 <code>package</code> プロファイルキーワード」を参照してください。

3. プロファイルをローカルシステムのディレクトリに保存します。

4. プロファイルの所有者が **root** で、そのアクセス権が **644** に設定されていることを確認します。
5. (省略可能) プロファイルをテストします。  
 プロファイルのテスト方法については、382 ページの「Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルをテストする」を参照してください。

例 33-3 Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルの作成

この例では、プロファイルはアップグレードパラメータを提供します。このプロファイルでは、Solaris Live Upgrade の `luupgrade` コマンドに `-u` および `-j` オプションを指定して、非アクティブなブート環境をアップグレードします。このプロファイルでは、パッケージおよびクラスタを追加します。地域ロケールおよび追加ロケールも、プロファイルに追加されます。プロファイルにロケールを追加する場合、ブート環境がディスク容量に余裕を持って作成されていることを確認してください。

```
# profile keywords      profile values
# -----
install_type           upgrade
package                SUNWxwman add
cluster                SUNWCacc add
geo                    C_Europe
locale                 zh_TW
locale                 zh_TW.BIG5
locale                 zh_TW.UTF-8
locale                 zh_HK.UTF-8
locale                 zh_HK.BIG5HK
locale                 zh
locale                 zh_CN.GB18030
locale                 zh_CN.GBK
locale                 zh_CN.UTF-8
```

## ▼ Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルをテストする

プロファイルを作成したら、`luupgrade` コマンドを使用してプロファイルをテストします。`luupgrade` が生成するインストール出力を調べることによって、意図したとおりにプロファイルが動作するかを簡単に調べることができます。

- プロファイルをテストする

```
# luupgrade -u -n BE_name -D -s os_image_path -j profile_path
```

---

`-u`

ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードします。

---

<code>-n BE_name</code>	アップグレード対象のブート環境の名前を指定します。
<code>-D</code>	luupgrade コマンドは、選択されたブート環境のディスク構成を使用して、 <code>-j</code> オプションと共に渡されたプロファイルオプションをテストします。
<code>-s os_image_path</code>	オペレーティングシステムイメージを含むディレクトリのパス名を指定します。このディレクトリはインストールメディア (DVD-ROM や CD-ROM など) 上でも NFS または UFS ディレクトリであってもかまいません。
<code>-j profile_path</code>	アップグレード用に構成されたプロファイルのパス。プロファイルは、ローカルマシンのディレクトリに存在する必要があります。

#### 例 33-4 Solaris Live Upgrade を使用したプロファイルのテスト

次の例では、`upgrade_solaris9` とい名前のプロファイルが、`s9ulb08` という名前の非アクティブブート環境でテストに成功します。

```
# luupgrade -u -n s9ulb08 -D -s /net/installsvr/export/s9ul/combined.s9s_ulwos \
-j /var/tmp/flash_profile
Validating the contents of the media /net/installsvr/export/s9ul/combined.s9s_ulwos.
The media is a standard Solaris media.
The media contains an operating system upgrade image.
The media contains Solaris version 9.
Locating upgrade profile template to use.
Locating the operating system upgrade program.
Checking for existence of previously scheduled Live Upgrade requests.
Creating upgrade profile for BE s9ulb08.
Determining packages to install or upgrade for BE s9ulb08.
Simulating the operating system upgrade of the BE s9ulb08.
The operating system upgrade simulation is complete.
INFORMATION: var/sadm/system/data/upgrade_cleanup contains a log of the
upgrade operation.
INFORMATION: var/sadm/system/data/upgrade_cleanup contains a log of
cleanup operations required.
The Solaris upgrade of the boot environment s9ulb08 is complete.
```

これで、プロファイルを使用して非アクティブブート環境をアップグレードできます。

## ▼ プロファイルを使用して Solaris Live Upgrade でアップグレードする (コマンド行インタフェース)

ここでは、プロファイルを使用したオペレーティング環境のアップグレード方法を、手順を追って説明します。

プロファイルを使用してフラッシュアーカイブをインストールする場合は、389 ページの「プロファイルを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

プロファイルにロケールを追加した場合、ブート環境がディスク容量に余裕を持って作成されていることを確認してください。

1. スーパーユーザーとしてログインします。

2. プロファイルを作成します。

Solaris Live Upgrade プロファイルで使用可能なアップグレードキーワードのリストについては、表 33-2を参照してください。

3. 次のコマンドを入力します。

```
# luupgrade -u -n BE_name -s os_image_path -j profile_path
```

-u	ブート環境のオペレーティングシステムイメージをアップグレードします。
-n BE_name	アップグレードするブート環境の名前を指定します。
-s os_image_path	オペレーティングシステムイメージを含むディレクトリのパス名を指定します。このディレクトリはインストールメディア (DVD-ROM や CD-ROM など) 上でも NFS または UFS ディレクトリであってもかまいません。
-j profile_path	プロファイルへのパス。プロファイルは、ローカルマシンのディレクトリに存在する必要があります。プロファイル作成についての詳細は、380 ページの「Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルを作成する」を参照してください。

このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。

例 33-5 カスタム JumpStart プロファイルを使用したブート環境のアップグレード (コマンド行インタフェース)

この例では、アーカイブは `second_disk` ブート環境にインストールされます。-j オプションを使用して、プロファイルにアクセスします。このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。プロファイルを作成する場合は、380 ページの「Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルを作成する」を参照してください。

```
# luupgrade -u -n second_disk \  
-s /net/installmachine/export/solarisX/OS_image \  
-j /var/tmp/profile
```



---

## ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール

この節では、以下の場所に格納されているフラッシュアーカイブを、Solaris Live Upgrade を使用してインストールする手順を説明します。

- HTTP サーバー
- FTP サーバー - このパスは、コマンド行だけから使用します。
- ネットワークファイルシステム (NFS) サーバー
- ローカルファイル
- ローカルテープ
- ローカルデバイス (DVD または CD)

---

注 - アーカイブ記憶域に関連するパスの構文例については、293 ページの「archive\_location プロファイルキーワード」を参照してください。

---

フラッシュアーカイブをインストールすると、新しいブート環境上に存在する共有ファイル以外のすべてのファイルが上書きされます。

フラッシュのインストール機能を使用するには、マスターシステムをインストールし、フラッシュアーカイブを作成しておく必要があります。フラッシュの詳細は、第 16 章を参照してください。

## メタデバイスとボリュームのアップグレード

新しいブート環境にアップグレードを行なったりフラッシュアーカイブを使ってインストールを行う場合、そのデバイスは物理スライスでなければなりません。Solaris ボリュームマネージャメタデバイスか Veritas ファイルシステム (VxFS) ボリュームにマウントされているファイルシステムがそのブート環境にあると、アップグレードまたはアーカイブのインストールは失敗します。そのようなブート環境でアップグレードやアーカイブのインストールを行う場合は、すべてのスライスが物理ディスクスライスになるようにブート環境を手動で変更する必要があります。lucreate コマンドを使って別のブート環境を作成することも、メタデバイスやボリュームを削除することもできます。

lucreate コマンドを使って別のブート環境を作成する場合は、ブート環境のコピーを物理ディスクスライスに格納します。たとえば、現在のブート環境のディスク構成が次のようになっているとします。

```

/                /dev/md/dsk/d10 にマウントされている
/usr             /dev/md/dsk/d20 にマウントされている
/var            /dev/dsk/c0t3d0s0 にマウントされている
空きスライス   c0t4d0s0
空きスライス   c0t4d0s3
空きスライス   c0t4d0s4

```

この場合、次の `lucreate` コマンドを使ってブート環境を物理ディスクスライスにコピーします。これで、ブート環境は、アップグレードやアーカイブを用いたインストールを行える状態になります。この例では、現在のブート環境の名前が `currentBE`、新しいブート環境の名前が `nextBE` であるとします。

```
# lucreate -s currentBE -n nextBE -m /:/dev/dsk/c0t4d0s0:ufs \
-m /usr:/dev/dsk/c0t4d0s3:ufs -m /var:/dev/dsk/c0t4d0s4:ufs
```

これで、新しいブート環境に対してアップグレードやアーカイブを用いたインストールを行い、それをアクティブ化し、さらに手動で再ミラー化またはカプセル化することができます。

メタデバイスやボリュームを手動で削除する場合は、次のようにします。

- ブート環境を手動でマウントします。
- `/etc/vfstab` ファイルを編集して、すべてのメタデバイスやボリュームを物理ディスクスライスに変更します。
- Solaris ボリュームマネージャまたは Veritas ソフトウェアを使ってメタデバイスまたはボリュームを削除します。
- ブート環境をマウント解除します。

これで、ブート環境は、アップグレードやアーカイブを用いたインストールを行える状態になります。

## ▼ ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール (キャラクタインタフェース)

1. **Solaris Live Upgrade** のメインメニューから「Flash」を選択します。  
「Flash an Inactive Boot Environment」メニューが表示されます。
2. フラッシュアーカイブをインストールするブート環境の名前と、インストールメディアの場所を入力します。

```
Name of Boot Environment: solaris_9
Package media: /net/install-svr/export/s9/latest
```

3. アーカイブを追加するために **F1** を押します。

「Archive Selection」サブメニューに、空のリスト、単一のアーカイブの名前、または複数のアーカイブの一覧が表示されます。

リストにアーカイブを追加することも、リストからアーカイブを削除することもできます。次に、空のリストの例を示します。

```
Location                - Retrieval Method
<No Archives added> - Select ADD to add archives
```

- 変更を加えずにリストをインストールする場合は、手順 4 へ進んでください。
- フラッシュアーカイブのリストが空であるか、あるいはインストールしたくないアーカイブが含まれている場合は、手順 a へ進みます。

a. アーカイブを追加または削除することができます。

- リストにアーカイブを追加する場合は F1 を押します。手順 b へ進みます。

「Select Retrieval Method」サブメニューが表示されます。

```
HTTP
NFS
Local File
Local Tape
Local Device
```

- リストからアーカイブを削除する場合は F2 を押します。手順 e へ進みます。

b. 「Select Retrieval Method」メニューで、フラッシュアーカイブの場所を選択します。

選択された媒体	プロンプト
HTTP	フラッシュアーカイブにアクセスするための URL とプロキシ情報を指定してください。
NFS	フラッシュアーカイブを含むネットワークファイルシステムのパスを指定してください。アーカイブのファイル名も指定できます。
ローカルファイル	フラッシュアーカイブを含むローカルファイルシステムのパスを指定してください。
ローカルテープ	フラッシュアーカイブを含むローカルテープデバイスとテープ上の位置を指定してください。
ローカルデバイス	フラッシュアーカイブを含むローカルデバイスとパス、ファイルシステムのタイプを指定してください。

次のような「Retrieval」サブメニューが表示されます。表示は選択されたメディアによって異なります。

```
NFS Location:
```

c. 次の例のように、アーカイブのパスを入力します。

NFS Location: `host:/path/to archive.flar`

- d. **F3** を押してリストにアーカイブを追加します。
  - e. インストールしたいアーカイブがリストに含まれた時点で **F6** を押して終了します。
4. **F3** を押して 1 つまたは複数のアーカイブをインストールします。  
フラッシュアーカイブがブート環境にインストールされます。ブート環境上のファイルは、共有可能ファイルを除きすべて上書きされます。  
このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。392 ページの「ブート環境のアクティブ化 (キャラクタインタフェース)」を参照してください。

## ▼ ブート環境へのフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# luupgrade -f -n BE_name -s os_image_path -a archive
```

<code>-f</code>	オペレーティングシステムをフラッシュアーカイブからインストールすることを示します。
<code>-n BE_name</code>	アーカイブを使用してインストールするブート環境の名前を指定します。
<code>-s os_image_path</code>	オペレーティングシステムイメージを含むディレクトリのパス名を指定します。このディレクトリはインストールメディア (DVD-ROM や CD-ROM など) 上でも NFS または UFS ディレクトリであつてもかまいません。
<code>-a archive</code>	フラッシュアーカイブへのパス (ローカルファイルシステムでそのアーカイブが利用できる場合)。-s オプションと -a オプションを使用して指定するオペレーティングシステムイメージのバージョンは、同じでなければなりません。

例 33-6 ブート環境へフラッシュアーカイブをインストールする (コマンド行インタフェース)

この例では、アーカイブは `second_disk` ブート環境にインストールされます。アーカイブはローカルシステムに存在します。-s および -a オプションで指定するオペレーティングシステムバージョンは、どちらも Solaris 9 リリースです。  
`second_disk` 上のファイルは、共有可能ファイルを除いてすべて上書きされます。

```
# luupgrade -f -n second_disk \  
-s /net/installmachine/export/solaris9/OS_image \  
-a /net/server/archive/solaris9
```

例 33-6 ブート環境へフラッシュアーカイブをインストールする (コマンド行インタフェース) (続き)

このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。

## ▼ プロファイルを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)

ここでは、プロファイルを使用してフラッシュアーカイブをインストールする手順を説明します。

プロファイルにロケールを追加した場合、ブート環境がディスク容量に余裕を持って作成されていることを確認してください。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. プロファイルを作成します。  
Solaris Live Upgrade プロファイルで使用可能なキーワードのリストについては、表 33-2を参照してください。
3. 次のコマンドを入力します。

```
# luupgrade -f -n BE_name -s os_image_path -j profile_path
```

-f	オペレーティングシステムをフラッシュアーカイブからインストールすることを示します。
-n BE_name	アップグレードするブート環境の名前を指定します。
-s os_image_path	オペレーティングシステムイメージを含むディレクトリのパス名を指定します。このディレクトリはインストールメディア (DVD-ROM や CD-ROM など) 上でも NFS または UFS ディレクトリであってもかまいません。
-j profile_path	フラッシュインストール用に構成されたプロファイルへのパス。プロファイルは、ローカルマシンのディレクトリに存在する必要があります。

このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。

例 33-7 プロファイルを使用してブート環境をアップグレードする (コマンド行インタフェース)

この例では、アーカイブは `second_disk` ブート環境にインストールされます。-j オプションを使用して、プロファイルにアクセスします。このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。プロファイルを作成する場合は、380 ページの「Solaris Live Upgrade で使用されるプロファイルを作成する」を参照してください。

例 33-7 プロファイルを使用してブート環境をアップグレードする (コマンド行インタフェース) (続き)

```
# luupgrade -f -n second_disk \  
-s /net/installmachine/export/solarisX/OS_image \  
-j /var/tmp/profile
```

## ▼ プロファイルキーワードを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)

ここでは、プロファイルファイルではなく、`archive_location` キーワードをコマンド行で使用して、フラッシュアーカイブをインストールする手順を説明します。プロファイルファイルを使用せずに、アーカイブを取得できます。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# luupgrade -f -n BE_name -s os_image_path -J 'profile'
```

<code>-f</code>	オペレーティングシステムをフラッシュアーカイブからアップグレードすることを示します。
<code>-n BE_name</code>	アップグレードするブート環境の名前を指定します。
<code>-s os_image_path</code>	オペレーティングシステムイメージを含むディレクトリのパス名を指定します。このディレクトリはインストールメディア (DVD-ROM や CD-ROM など) 上でも NFS または UFS ディレクトリであってもかまいません。
<code>-J 'profile'</code>	<code>archive_location</code> プロファイルキーワードを指定します。キーワードの値については、293 ページの「 <code>archive_location</code> プロファイルキーワード」を参照してください。

このようにして、ブート環境をアクティブにする準備が整います。

例 33-8 プロファイルキーワードを使用したフラッシュアーカイブのインストール (コマンド行インタフェース)

この例では、アーカイブは `second_disk` ブート環境にインストールされます。-J オプションと `archive_location` キーワードを使用して、アーカイブを取得します。`second_disk` 上のファイルは、共有可能ファイルを除いてすべて上書きされます。

```
# luupgrade -f -n second_disk \  
-s /net/installmachine/export/solarisX/OS_image \  
-J 'archive_location http://example.com/myflash.flar'
```

---

## ブート環境のアクティブ化

ブート環境をアクティブにすると、次のシステムリブートでブート可能になります。新しいアクティブブート環境で何か問題が発生する場合は、元のブート環境にすぐに戻すことができます。詳細は、395 ページの「問題の解決: 元のブート環境へのフォールバック (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

ブート環境を正常にアクティブにするためには、そのブート環境が以下の条件を満たしている必要があります。

- ブート環境のステータスは「complete」でなければなりません。ステータスを確認するには、402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」を参照してください。
- 現在のブート環境とは別のブート環境をアクティブにする場合は、`lumount (1M)` または `mount (1M)` を使用してそのブート環境のパーティションをマウントすることはできません。
- 比較処理で使用中のブート環境はアクティブにできません。406 ページの「ブート環境の比較」を参照してください。

---

スワップを再構成する場合は、非アクティブブート環境をブートする前に実行してください。デフォルトでは、すべてのブート環境が同じスワップデバイスを共有します。スワップを再構成する場合は、「新しいブート環境を作成する」、手順 9、または 365 ページの「ブート環境を作成しスワップを再構成する (コマンド行インタフェース)」を参照してください。

---

### ▼ x86: (省略可能) アクティブ化の前にブート用フロッピーディスクを更新する

システムのブートに Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) フロッピーディスクを使用しない場合は、この手順は省略できます。Device Configuration Assistant を使用してブートする場合は、ブート用フロッピーディスクを更新する必要があります。この手順では、既存のフロッピーディスクを上書きするか、あるいは新しいフロッピーディスクに書き込むことにより、使用中のリリースと一致するようにブート用フロッピーディスクを更新します。

1. **Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) フロッピーディスク** を挿入します。これは、上書きされる既存のフロッピーディスクまたは新しいフロッピーディスクのいずれかです。
2. このリリース用の最新のイメージに、ブートフロッピーディスクを更新します。
3. ブートフロッピーディスクを取り出します。

4. 次のコマンドを入力します。

```
volcheck
```

5. このフロッピーディスクに新しいブート環境の `boot/solaris/bootenv.rc` ファイルをコピーします。

```
cp /a/boot/solaris/bootenv.rc /floppy/floppy0/solaris/bootenv.rc
```

6. フロッピーディスク上の入力デバイスと出力デバイスをチェックして、それらが正しいことを確認します。正しくない場合はそれらを更新してください。

このようにして、新しいブート環境をアクティブにする準備が整います。

## ▼ ブート環境のアクティブ化 (キャラクタインタフェース)

新しく作成したブート環境で初めてブートする時に、Solaris Live Upgrade は新しいブート環境と以前のアクティブブート環境の同期をとります。アクティブなブート環境が、新しく作成したブート環境の元になったブート環境であるとは限りません。ここでいう「同期」とは、前にアクティブであったブート環境のあるシステムファイルやディレクトリを、ブートされているブート環境にコピーすることです。ただし、

「Do you want to force a Live Upgrade sync operations」という質問に対し **yes** を入力しない限り、この最初のブート時に同期化は行われません。

同期化を実行すると、Solaris Live Upgrade は、同期をとるファイルの間に矛盾がないかチェックします。新しいブート環境がブートされ、矛盾が検出されると、警告が出されます。この場合、ファイルの同期化は行われません。このような場合でも、アクティブ化は正常に終了することがあります。このような矛盾は、次の場合に発生することがあります。

- 現在のブート環境を新しいオペレーティングシステムにアップグレードする
- 非アクティブなブート環境を新しいオペレーティングシステムにアップグレードし、元のブート環境にあるファイルを変更する
- 両方のブート環境のシステムファイル (/etc/passwd など) を変更する

以前のアクティブブート環境で発生した変更がユーザーが気付いていない場合や、それらの変更を制御できない場合もあるため、このオプションを使用する際には十分注意してください。たとえば、現在のブート環境で Solaris 9 ソフトウェアを実行しているとします。この場合、Solaris 2.6 リリースをブートし、同期化を実行すると、2.6 リリースのファイルは変更されることがあります。ファイルはオペレーティング環境のリリースに依存しているため、Solaris 2.6 リリースのブートは失敗することがあります。Solaris 9 のファイルと Solaris 2.6 のファイルは互換性があるとは限らないからです。

1. Solaris Live Upgrade のメインメニューで「**Activate**」を選択します。
2. アクティブにするブート環境の名前を入力します。



```
Name of Boot Environment: solaris_9
Do you want to force a Live Upgrade sync operations: no
```

3. ファイルの同期化を実行することも、実行せずに処理を続けることもできます。
  - Return キーを押して継続します。

ブート環境の最初のブートでは、ファイルの同期化が自動的に行われます。
  - ファイルの同期化を実行できますが、この機能は慎重に使用してください。同期化するファイルに、それぞれのブート環境のオペレーティングシステムが対応していなければなりません。ファイルの同期化を実行する場合は、次のように入力します。

```
Do you want to force a Live Upgrade sync operations: yes
```

4. F3 を押して、アクティブ化の処理を開始します。
5. Return キーを押して継続します。

新しいブート環境は、次のリブート時にアクティブになります。
6. 非アクティブブート環境をリブートしてアクティブにします。

```
# init 6
```

## ▼ ブート環境をアクティブにする (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のように入力して、ブート環境をアクティブにします。

```
# /usr/sbin/luactivate BE_name
```

*BE\_name*                      アクティブにするブート環境の名前を指定します。

3. リブートします。

```
# init 6
```



---

注意 - リブートには `init` か `shutdown` コマンドを使用してください。 `reboot` や `halt`、`uadmin` コマンドを使用すると、ブート環境の切り替えは行われません。最後にアクティブであったブート環境が再びブートされます。

---

### 例 33-9 ブート環境をアクティブにする (コマンド行インタフェース)

この例では、次のリブート時に `second_disk` ブート環境がアクティブになります。

例 33-9 ブート環境をアクティブにする (コマンド行インタフェース) (続き)

```
# /usr/sbin/luactivate second_disk  
# init 6
```

## ▼ ブート環境をアクティブにしてファイルを同期させる (コマンド行インタフェース)

新しく作成したブート環境で初めてブートする時に、Solaris Live Upgrade は新しいブート環境と以前のアクティブブート環境の同期をとります。アクティブなブート環境が、新しく作成したブート環境の元になったブート環境であるとは限りません。ここでいう「同期」とは、前にアクティブであったブート環境のあるシステムファイルやディレクトリを、ブートされているブート環境にコピーすることです。この最初のブートの後で Solaris Live Upgrade がこの同期化を行うためには、luactivate に `-s` オプションを指定する必要があります。

`-s` オプションで同期化を実行すると、luactivate は、同期化に関連するファイルの間に矛盾がないかチェックします。新しいブート環境がブートされ、矛盾が検出されると、警告が出されます。この場合、ファイルの同期化は行われません。このような場合でも、アクティブ化は正常に終了することがあります。このような矛盾は、次の場合に発生することがあります。

- 現在のブート環境を新しいオペレーティングシステムにアップグレードする
- 非アクティブなブート環境を新しいオペレーティングシステムにアップグレードし、元のブート環境にあるファイルを変更する
- 両方のブート環境のシステムファイル (`/etc/passwd` など) を変更する

以前のアクティブブート環境で発生した変更ユーザーが気付いていない場合や、それらの変更を制御できない場合もあるため、このオプションを使用する際には十分注意してください。たとえば、現在のブート環境で Solaris 9 ソフトウェアを実行しているとします。この場合、Solaris 2.6 リリースをブートし、同期化を実行すると、2.6 リリースのファイルは変更されることがあります。ファイルはオペレーティング環境のリリースに依存しているため、Solaris 2.6 リリースのブートは失敗することがあります。Solaris 9 のファイルと Solaris 2.6 のファイルは互換性があるとは限らないからです。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のように入力して、ブート環境をアクティブにします。

```
# /usr/sbin/luactivate -s BE_name
```

`BE_name`                      アクティブにするブート環境の名前を指定します。

-s 最後にアクティブであったブート環境と新しいブート環境のファイルを同期化します。

-s オプションは、ブート環境の最初のアクティブ化の後でファイルを同期化するときを使用します。ブート環境の最初のアクティブ化ではファイル間の同期化が行われますが、それ以降のアクティブ化ではファイルの同期化は行われません。以前のアクティブブート環境で発生した変更がユーザーが気付いていない場合や、それらの変更を制御できない場合もあるため、このオプションを使用するには十分注意してください。

### 3. リブートします。

```
# init 6
```

例 33-10 ブート環境をアクティブにする (コマンド行インタフェース)

この例では、次のリブート時に `second_disk` ブート環境がアクティブになり、ファイルの同期がとられます。

```
# /usr/sbin/luactivate -s second_disk
# init 6
```

---

## 問題の解決: 元のブート環境へのフォールバック (コマンド行インタフェース)

アップグレードの後に障害が検出されたり、アップグレードされたコンポーネントにアプリケーションが対応できない場合は、次の手順のどれか (プラットフォームによって異なる) を使って元のブート環境にフォールバックアップする必要があります。SPARC ベースシステムの場合は、最初の手順として `luactivate` を実行して元のブート環境に戻します。この処理が失敗した場合は、2 目目の手順によって DVD-ROM、CD-ROM、またはネットイメージからブートしてください。x86 ベースシステムの場合は、`root (/)` ファイルシステムが同じ物理ディスクにマウントされているか、別の物理ディスクにマウントされているかに基づいて手順を選択します。

### ▼ 新しいブート環境の作成に成功した場合のフォールバック

新しいブート環境のアクティブ化に成功したが、その結果に満足できない場合は、この手順を使用します。

#### 1. スーパーユーザーとしてログインします。

2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/luactivate BE_name
```

*BE\_name*                    アクティブにするブート環境の名前を指定します。

3. リブートします。

```
# init 6
```

前の稼働ブート環境がアクティブブート環境になります。

## ▼ SPARC: ブート環境のアクティブ化に失敗した場合のフォールバック

- 新しいブート環境のブートに失敗した場合で、元のブート環境をシングルユーザーモードでブートできる場合は、この手順を使って元のブート環境にフォールバックします。
- メディアやネットインストールイメージからブートする場合は、397 ページの「SPARC: DVD、CD、または ネットワークインストールイメージを使って元のブート環境にフォールバックする」を参照してください。

1. **OK** プロンプトで、**Solaris 9 DVD**、**Solaris 9 INSTALLATION CD**、ネットワーク、またはローカルディスクからマシンをシングルユーザーモードで起動します。

```
OK boot cdrom -s
```

または、

```
OK boot net -s
```

または、

```
OK boot device_name -s
```

*device\_name*            システムをブートするデバイスの名前を指定します (たとえば、  
/dev/dsk/c0t0d0s0)。

2. 次のコマンドを入力します。

```
# /sbin/luactivate BE_name
```

*BE\_name*                    アクティブにするブート環境の名前を指定します。

- このコマンドを実行した結果プロンプトが表示されない場合は、397 ページの「SPARC: DVD、CD、または ネットワークインストールイメージを使って元のブート環境にフォールバックする」へ進みます。

- プロンプトが表示される場合は、次の手順に進んでください。

3. プロンプトに対して、次のコマンドを入力します。

```
Do you want to fallback to activate boot environment <disk name>
(yes or no)? yes
```

フォールバックによるアクティブ化が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

4. リブートします。

```
# init 6
```

前の稼働ブート環境がアクティブブート環境になります。

## ▼ SPARC: DVD、CD、または ネットワークインストールイメージを使って元のブート環境にフォールバックする

DVD、CD、またはネットワークインストールイメージからブートする場合は、この手順を使用します。この場合、以前のアクティブブート環境からルート (/) スライスをマウントする必要があります。その後で、ブート環境の切り替えを行う `luactivate` コマンドを実行してください。リブートすると、1つ前のアクティブブート環境が再び起動されます。

1. OK プロンプトで、**Solaris 9 DVD**、**Solaris 9 INSTALLATION CD**、ネットワーク、またはローカルディスクからマシンをシングルユーザーモードで起動します。

```
OK boot cdrom -s
```

または、

```
OK boot net -s
```

または、

```
OK boot device_name -s
```

*device\_name* オペレーティングシステムのコピーが格納されているディスクおよびスライスの名前を指定します (たとえば、`/dev/dsk/c0t0d0s0`)。

2. 必要に応じて、フォールバックブート環境のルート (/) が置かれているファイルシステムの完全性を確認します。

```
# fsck device_name
```

`device_name` フォールバックしたいブート環境のディスクデバイスにあるルート (/) ファイルシステムの名前を指定します。デバイス名の形式は、`/dev/dsk/cnumtnumdnumsnun` です。

3. アクティブブート環境のルート (/) スライスをディレクトリ (`/mnt` など) にマウントします。

```
# mount device_name /mnt
```

`device_name` フォールバックしたいブート環境のディスクデバイスにあるルート (/) ファイルシステムの名前を指定します。デバイス名の形式は、`/dev/dsk/cnumtnumdnumsnun` です。

4. アクティブブート環境のルート (/) スライスから、次のように入力します。

```
# /mnt/sbin/luactivate
```

前の稼働ブート環境がアクティブになり、結果が表示されます。

5. `/mnt` をマウント解除します。

```
# umount /mnt
```

6. リブートします。

```
# init 6
```

前の稼働ブート環境がアクティブブート環境になります。

## ▼ x86: 別のディスクに存在するブート環境をフォールバックする

新しいブート環境のブート中に障害に遭遇する場合があります。ブート環境のルート (/) ファイルシステムが別の物理ディスク上に存在する場合、次の手順を実行して元のブート環境にフォールバックします。

1. システムをリブートし、該当する **BIOS** メニューに入ります。
  - ブートデバイスが SCSI の場合は、SCSI コントローラのマニュアルを参照して SCSI BIOS へ入る方法を確認してください。
  - ブートデバイスがシステム BIOS で管理されている場合は、システム BIOS のマニュアルを参照してシステム BIOS へ入る方法を確認してください。
2. 該当する **BIOS** のマニュアルに従って、元のブート環境のブートデバイスに戻るようにブートデバイスを変更します。
3. **BIOS** の変更を保存します。
4. ブート処理を開始するために、**BIOS** メニューを閉じます。

5. **b -s** と入力して、シングルユーザー状態でマシンをブートします。

6. 次のコマンドを入力します。

```
# /sbin/luactivate
```

7. リブートします。

```
# init 6
```

## ▼ x86: 同じディスクに存在するブート環境をフォールバックする

ブート中に障害が発生する場合があります。ルート (/) ファイルシステムが同じ物理ディスク上に存在する場合、次の手順を実行して、元のブート環境にフォールバックします。この場合、以前のアクティブブート環境からルート (/) スライスをマウントする必要があります。その後で、ブート環境の切り替えを行う `luactivate` コマンドを実行してください。リブートすると、1つ前のアクティブブート環境が再び起動されます。

1. システムのブート方法を決定します。

- Solaris 9 DVD または Solaris 9 INSTALLATION CD からブートする場合は、そのディスクを挿入します。この場合、システムの BIOS が DVD または CD からのブートをサポートしている必要があります。
- ネットワークからブートする場合は、PXE (Preboot Execution Environment) ネットワークブートを使用してください。システムは PXE をサポートするものでなければなりません。システムの BIOS 設定ツールまたはネットワークアダプタの構成設定ツールを使用して、PXE を使用するようにシステムを設定します。
- フロッピーディスクからブートする場合は、システムのコピーディスクドライブに Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) のフロッピーディスクを挿入します。

---

**x86 のみ** – 次の方法で、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ソフトウェアをフロッピーディスクにコピーできます。

- 付録 E に記載された手順に従って、ソフトウェアを Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) からフロッピーディスクにコピーします。
  - [http://soldc.sun.com/support/drivers/dca\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dca_diskettes) の Solaris Developer Connection からソフトウェアをダウンロードして、フロッピーディスクにコピーします。
- 

画面の指示に従って進み、「Current Boot Parameters」メニューを表示します。

2. **b -s** と入力して、シングルユーザー状態でマシンをブートします。

3. 必要に応じて、フォールバックブート環境のルート (/) が置かれているファイルシステムの完全性を確認します。

```
# fsck mount_point
```

*mount\_point* 信頼性のあるルートファイルシステム

4. アクティブブート環境のルートスライスをディレクトリ (/mnt/sbin など) にマウントします。

```
# mount device_name /mnt/sbin
```

*device\_name* フォールバックしたいブート環境のディスクデバイスにあるルート (/) ファイルシステムの名前を指定します。デバイス名の形式は、/dev/dsk/cnumtnumdnumnum です。

5. アクティブブート環境のルートスライスから、次のように入力します。

```
# /mnt/sbin/luactivate
```

前の稼働ブート環境がアクティブになり、結果が示されます。

6. /mnt/sbin のマウントを解除します。

```
# umount device_name /mnt/sbin
```

*device\_name* フォールバックしたいブート環境のディスクデバイスにあるルート (/) ファイルシステムの名前を指定します。デバイス名の形式は、/dev/dsk/cnumtnumdnumnum です。

7. リブートします。

```
# init 6
```

前の稼働ブート環境がアクティブブート環境になります。



## 第 34 章

# Solaris Live Upgrade ブート環境の管理

この章では、ブート環境のファイルシステムを最新の状態に維持したり、ブート環境を削除するなど、さまざまな管理作業について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 401 ページの「Solaris Live Upgrade 管理作業の概要」
- 402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」
- 404 ページの「以前に構成されたブート環境の更新」
- 406 ページの「スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) の取り消し」
- 406 ページの「ブート環境の比較」
- 408 ページの「非アクティブブート環境の削除」
- 409 ページの「アクティブブート環境の名前の表示」
- 410 ページの「ブート環境の名前の変更」
- 411 ページの「ブート環境名に関連付ける説明の作成または変更」
- 414 ページの「ブート環境の構成の表示」

## Solaris Live Upgrade 管理作業の概要

表 34-1 Solaris Live Upgrade 管理作業の概要

作業	説明	参照先
(省略可能) ステータスの表示	■ ブート環境の状態 (アクティブ、アクティブ化の処理中、アクティブになるようにスケジュールされている、比較処理中) を表示します。	■ 402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」

表 34-1 Solaris Live Upgrade 管理作業の概要 (続き)

作業	説明	参照先
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ アクティブブート環境と非アクティブブート環境を比較します。</li> <li>■ アクティブブート環境の名前を表示します。</li> <li>■ ブート環境の構成を表示します。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 406 ページの「ブート環境の比較」</li> <li>■ 409 ページの「アクティブブート環境の名前の表示」</li> <li>■ 414 ページの「ブート環境の構成の表示」</li> </ul>
(省略可能) 非ブアクティブブート環境の更新	ファイルシステムの構成を変更することなく、アクティブブート環境からファイルシステムを再度コピーします。	404 ページの「以前に構成されたブート環境の更新」
(省略可能) その他の作業	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ブート環境を削除します。</li> <li>■ ブート環境の名前を変更します。</li> <li>■ ブート環境の名前に関連付ける説明を作成または変更します。</li> <li>■ スケジュールされているジョブを取り消します。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 408 ページの「非アクティブブート環境の削除」</li> <li>■ 410 ページの「ブート環境の名前の変更」</li> <li>■ 411 ページの「ブート環境名に関連付ける説明の作成または変更」</li> <li>■ 406 ページの「スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) の取り消し」</li> </ul>

## すべてのブート環境のステータスの表示

ブート環境についての情報を表示するには、「Status」メニューまたは `lustatus` コマンドを使用してください。ブート環境を指定しない場合は、システム上のすべてのブート環境のステータス情報が表示されます。

各ブート環境について、次の詳細情報が表示されます。

- `Be_name` – 各ブート環境の名前
- `Complete` – コピー処理、作成処理とも進行中ではなく、ブート環境をブートできる状態であることを示します。作成処理またはアップグレード処理が進行中であつたり失敗した場合などは、ステータスは未完了として示されます。たとえば、あるブート環境のコピー処理が進行中であるか、コピー処理がスケジュールされている場合は、そのブート環境は未完了とみなされます。
- `Active` – アクティブブート環境であるかどうかを示します。

- **ActiveOnReboot** – システムの次のリブート時にそのブート環境がアクティブになるかどうかを示します。
- **CopyStatus** – ブート環境の作成またはコピーの状態 (作成またはコピーがスケジューリングされている、アクティブ、またはアップグレード中) を示します。ステータスが **SCHEDULED** の場合、**Solaris Live Upgrade** のコピー、名前変更、アップグレードの各処理を行うことはできません。

## ▼ すべてのブート環境のステータスを表示する (キャラクタインタフェース)

- メインメニューから「**Status**」を選択します。  
次のような表が表示されます。

BE_name	Complete	Active	ActiveOnReboot	CopyStatus
disk_a_s7	yes	yes	yes	-
disk_b_s7database	yes	no	no	COPYING
disk_b_s8	no	no	no	-

注 – この例では、**disk\_b\_s8** は未完了の状態、**disk\_b\_s7database** は **CopyStatus** が **SCHEDULED** になっています。このためこれらの環境では、コピー、名前変更、アップグレードの各処理を行うことはできません。

## ▼ すべてのブート環境のステータスを表示する (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lustatus BE_name
```

*BE\_name*

ステータスを表示する非アクティブブート環境の名前を指定します。*BE\_name* を省略すると、**lustatus** によりシステム内のすべてのブート環境のステータスが表示されます。

この例では、すべてのブート環境のステータスが表示されます。

```
# lustatus
```

BE_name	Complete	Active	ActiveOnReboot	CopyStatus
disk_a_s7	yes	yes	yes	-

disk_b_S7database	yes	no	no	COPYING
disk_b_S8	no	no	no	-

---

注 - この例では、disk\_b\_S8 は未完了の状態のため、また、disk\_b\_S7database は Live Upgrade が実行中のため、コピー、名前の変更、およびアップグレードの処理はできません。

---

## 以前に構成されたブート環境の更新

「Copy」メニューまたは lumake コマンドを使用して、以前に構成されたブート環境の内容を更新できます。アクティブ (ソース) ブート環境のファイルシステムがターゲットブート環境にコピーされると、ターゲット上にあったデータは破棄されます。コピー元のブート環境のステータスは、「complete」である必要があります。ブート環境のステータスを確認する方法については、402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」を参照してください。

コピー作業は後で行われるようにスケジュールできます。スケジュールできるのは一度に 1 つのジョブだけです。スケジュールされたコピー処理を取り消す方法については、406 ページの「スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) の取り消し」を参照してください。

### ▼ 以前に構成されたブート環境を更新する (キャラクタインタフェース)

1. メインメニューから「Copy」を選択します。
2. 更新する非アクティブブート環境の名前を入力します。

```
Name of Target Boot Environment: solaris8
```

3. コピー処理を継続するか、または後でコピーが実行されるようにスケジュールします。
  - コピーを継続するには、Return キーを押します。  
以上の手順で、非アクティブブート環境が更新されます。
  - 後でコピーが実行されるようにスケジュールするには、「y」と入力し、時刻 (at コマンドの書式を使用) と、結果の送信先電子メールアドレスを指定します。

```
Do you want to schedule the copy? y
Enter the time in 'at' format to schedule copy: 8:15 PM
Enter the address to which the copy log should be mailed:
```

someone@anywhere.com

時間の書式については、at(1)のマニュアルページを参照してください。

以上の手順で、非アクティブブート環境が更新されます。

スケジュールされた処理を取り消す方法については、406ページの「スケジュールされた処理(作成/アップグレード/コピー)の取り消し」を参照してください。

## ▼ 以前に構成されたブート環境を更新する(コマンド行インタフェース)

この手順では、以前に作成されたブート環境上の古いファイルを上書きしてソースファイルをコピーします。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lumake -n BE_name [-s source_BE] [-t time] [-m email_address]
```

-n <i>BE_name</i>	ファイルシステムを書き換えるブート環境の名前を指定します。
-s <i>source_BE</i>	(省略可能) ターゲットブート環境にコピーするファイルシステムがあるソースブート環境の名前を指定します。このオプションを省略すると、lumakeは現在のブート環境をソースとして使用します。
-t <i>time</i>	(省略可能) 指定されたブート環境上のファイルを指定された時刻に上書きするバッチジョブを設定します。時刻は、at(1)のマニュアルページに指定されている書式で入力します。
-m <i>email_address</i>	(省略可能) コマンドが完了した時点で、ここで指定する電子メールアドレスにlumakeの出力を送ります。 <i>email_address</i> はチェックされません。このオプションは、-tと併用する必要があります。

### 例 34-1 以前に構成されたブート環境を更新する(コマンド行インタフェース)

この例では、*first\_disk*のファイルシステムが*second\_disk*にコピーされます。処理が完了した時点で、電子メールがjoe@anywhere.comに送信されます。

```
# lumake -n second_disk -s first_disk -m joe@anywhere.com
```

*first\_disk*上のファイルが*second\_disk*にコピーされ、通知の電子メールが送信されます。スケジュールされたコピー処理を取り消す方法については、406ページの「スケジュールされた処理(作成/アップグレード/コピー)の取り消し」を参照してください。

---

## スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) の取り消し

ブート環境のスケジュールされた処理 (作成、アップグレード、コピー) は、その処理の開始前に取り消すことができます。GUI では、「Create a Boot Environment」、「Upgrade a Boot Environment」、または「Copy a Boot Environment」メニューを使用して、特定の時間に処理が実行されるようにスケジュールすることができます。CLI では、`lumake` コマンドを使用して、処理をスケジュールできます。システムでスケジュールできるジョブは一度に 1 つだけです。

### ▼ スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) を取り消す (キャラクタインタフェース)

1. メインメニューから「**Cancel**」を選択します。
2. 取り消しが可能なブート環境の一覧を表示するには、**F2** を押します。
3. 取り消すブート環境を選択します。  
これで、指定されている時刻に処理は実行されなくなります。

### ▼ スケジュールされた処理 (作成/アップグレード/コピー) を取り消す (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lucancel
```

これで、指定されている時刻に処理は実行されなくなります。

---

## ブート環境の比較

アクティブブート環境とその他のブート環境の相違を確認するには、「**Compare**」メニューまたは `lucompare` コマンドを使用します。比較をするためには、非アクティブブート環境は完了状態で、コピー処理がスケジュールされていない必要があります。402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」を参照してください。

指定するブート環境には、`lumount` または `mount` を使用してマウントされたパーティションを含むことはできません。

## ▼ ブート環境を比較する (キャラクタインタフェース)

1. メインメニューから「**Compare**」を選択します。
2. 「**Compare to Original**」または「**Compare to an Active Boot Environment**」を選択します。
3. **F3** を押します。
4. 次に示すように、元の (アクティブ) ブート環境の名前、非アクティブブート環境の名前、およびファイルのパスを入力します。

```
Name of Parent: solaris8
Name of Child: solaris8-1
Full Pathname of the file to Store Output: /tmp/compare
```

5. **F3** を押してファイルに保存します。  
「**Compare**」メニューに以下の属性が表示されます。
  - 「モード」
  - 「リンクの数」
  - 「所有者」
  - 「グループ」
  - チェックサム - 指定されたブート環境内のファイルとこれに対応するアクティブブート環境内のファイルが、前述したすべてのフィールドにおいて一致する場合だけ、チェックサムを計算します。すべて一致するがチェックサムは異なるという場合には、異なるチェックサムが比較対象ファイルのエントリに付加されます。
  - 「サイズ」
  - いずれか一方のブート環境だけに存在するファイル
6. **F3** を押して「**Compare**」メニューに戻ります。

## ▼ ブート環境を比較する (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のいずれかのコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/lucompare -i infile
```

または

```
# /usr/sbin/lucompare -t -o outfile BE_name
```

-i <i>infile</i>	<i>infile</i> 中に指定されたファイルを比較します。比較するファイルは、絶対パスで指定する必要があります。ファイルのエントリがディレクトリである場合、比較はディレクトリに対して再帰的に行われます。このオプションまたは -t のいずれか一方を使用できません (両方は使用できません)。
-t	バイナリ以外のファイルだけを比較します。この比較では、ファイルごとに <code>file(1)</code> コマンドを使用してそのファイルがテキストファイルであるかを確認します。ユーザーは、このオプションまたは -i のいずれか一方を使用できます (両方は使用できません)。
-o <i>outfile</i>	相違についての出力を <i>outfile</i> にリダイレクトします。
<i>BE_name</i>	アクティブブート環境と比較するブート環境の名前を指定します。

例 34-2 ブート環境の比較 (コマンド行インタフェース)

この例では、`first_disk` ブート環境 (ソース) と `second_disk` ブート環境が比較され、結果がファイルに出力されます。

```
# /usr/sbin/lucompare -i /etc/lu/compare/ \  
-o /var/tmp/compare.out second_disk
```

---

## 非アクティブブート環境の削除

「Delete」メニューまたは `ludelete` を使用してください。アクティブブート環境および次のリブートでアクティブになるブート環境は、削除できません。削除するブート環境は完了状態でなければなりません。完了状態のブート環境とは、ステータスを変更する処理が終了している環境を指します。ブート環境のステータスを確認する方法については、402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」を参照してください。また、`lumount` を使用してファイルシステムをマウントしているブート環境も削除できません。

### ▼ 非アクティブブート環境を削除する (キャラクタインタフェース)

1. メインメニューから「Delete」を選択します。
2. 削除する非アクティブブート環境の名前を入力します。

```
Name of boot environment: solaris8
```



指定された非アクティブブート環境が削除されます。

## ▼ 非アクティブブート環境を削除する (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# ludelete BE_name
```

*BE\_name*                      削除する非アクティブブート環境の名前を指定します。

例 34-3 非アクティブブート環境の削除 (コマンド行インタフェース)

この例では、ブート環境 `second_disk` が削除されます。

```
# ludelete second_disk
```

---

## アクティブブート環境の名前の表示

現在動作しているブート環境の名前を表示するには、「Current」メニューまたは `lucurr` コマンドを使用してください。システム上に構成されたブート環境がない場合は、「No Boot Environments are defined」というメッセージが表示されます。`lucurr` で表示されるのは現在のブート環境の名前だけです。次のブート時にアクティブになるブート環境の名前は表示されません。ブート環境のステータスを確認する方法については、402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」を参照してください。

## ▼ アクティブブート環境の名前を表示する (キャラクタインタフェース)

- メインメニューから「Current」を選択します。  
アクティブブート環境の名前または「No Boot Environments are defined」というメッセージが表示されます。

## ▼ アクティブブート環境の名前を表示する (コマンド行インタフェース)

- 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/lucurr
```

例 34-4 アクティブブート環境の名前の表示 (コマンド行インタフェース)

この例では、現在のブート環境の名前が表示されます。

```
# /usr/sbin/lucurr  
solaris8
```

---

## ブート環境の名前の変更

ブート環境の名前の変更は、ブート環境の Solaris リリースを別のリリースにアップグレードする場合などに便利です。たとえば、オペレーティングシステムのアップグレード処理においてブート環境 solaris 7 を solaris 8 に変更できます。非アクティブブート環境の名前を変更する場合は、「Rename」メニューまたは `lurename` コマンドを使用してください。

新しい名前の設定は、以下の規則に従う必要があります。

- 長さが 30 文字を超えない
- 英数字または ASCII 文字 (UNIX シェルで特別な意味を持つ文字を除く) で構成されている。sh(1) の「クォート」の節を参照してください。
- シングルバイトの 8 ビット文字だけ含む
- システム上に 1 つしか存在しない

ブート環境の名前を変更するためには、そのステータスが「complete」である必要があります。ブート環境のステータスを確認する方法については、402 ページの「すべてのブート環境のステータスの表示」を参照してください。lmount または mount を使用してファイルをマウントしているブート環境の名前は、変更できません。

## ▼ 非アクティブブート環境の名前を変更する (キャラクターインタフェース)

1. メインメニューから「Rename」を選択します。
2. 名前を変更するブート環境を指定し、続いて新しい名前を入力します。
3. F3 を押して変更を保存します。

## ▼ 非アクティブブート環境の名前を変更する (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# luusername -e BE_name -n new_name
```

-e *BE\_name*                    変更する非アクティブブート環境の名前を指定します。

-n *new\_name*                   非アクティブブート環境の新しい名前を指定します。

この例では、`second_disk` が `third_disk` に変更されます。

```
# luusername -e second_disk -n third_disk
```

---

## ブート環境名に関連付ける説明の作成または変更

ブート環境名に説明を付けることができます。この説明によって名前が置き換わることはありません。ブート環境名は長さや文字に制限がありますが、この説明は長さや内容に制限がありません。シンプルなテキストでも、gif ファイルのような複雑なものでもかまいません。この説明は、次の時点で作成できます。

- ブート環境を作成する時点 (-A オプション指定で `lucreate` コマンドを使用する)
- ブート環境の作成後 (`ludesc` コマンドを使用する)

`lucreate` コマンドで -A オプションを使用する方法の詳細は、359 ページの「ブート環境を初めて作成する (コマンド行インタフェース)」を参照してください。ブート環境の作成後に説明を作成する方法については、以下の説明または `ludesc (1M)` のマニュアルページを参照してください。

## ▼ テキストを使用してブート環境名の説明を作成または変更する方法

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/ludesc -n BE_name 'BE_description'
```

`-n BE_name 'BE_description'`      ブート環境名と、その名前に関連付ける新しい説明を指定します。

例 34-5 テキストを使用してブート環境名に説明を加える

この例では、`second_disk` というブート環境に説明が加えられています。この説明は、単一引用符で囲まれたテキストで記述されます。

```
# /usr/sbin/ludesc -n second_disk 'Solaris 9 test build, January 2001.'
```

## ▼ ファイルを使用してブート環境名の説明を作成または変更する方法

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/ludesc -n BE_name -f file_name
```

`-n BE_name`      ブート環境名を指定します。

`-f`      ブート環境名に関連付ける説明が書かれているファイルを指定します。

`file_name`

例 34-6 ファイルを使用してブート環境名に説明を加える

この例では、`second_disk` というブート環境に説明が加えられています。説明は、`gif` ファイル内に入っています。

```
# /usr/sbin/ludesc -n second_disk -f rose.gif
```

## ▼ テキストで記述された説明からブート環境名を確認する方法

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/ludesc -A 'BE_description'
```

`-A 'BE_description'`      ブート環境名に関連付けられている説明を指定します。

例 34-7 説明からブート環境名を確認する

この例では、説明を指定して `-A` オプションを使用することでブート環境名 `second_disk` を確認しています。

例 34-7 説明からブート環境名を確認する (続き)

```
# /usr/sbin/ludesc -A 'Solaris 9 test build, January 2001.'  
second_disk
```

## ▼ ファイル内の説明からブート環境名を確認する方法

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/ludesc -f file_name
```

`-f file_name`                   ブート環境名に関連付けられている説明を含むファイルを指定します。

例 34-8 ファイル内の説明からブート環境名を確認する

この例では、`-f` オプションと、説明を含むファイルの名前を使用することでブート環境の名前 `second_disk` を確認しています。

```
# /usr/sbin/ludesc -f rose.gif  
second_disk
```

## ▼ 名前からブート環境説明を確認する方法

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/ludesc -n BE_name
```

`-n BE_name`                   ブート環境名を指定します。

例 34-9 ブート環境名から説明を確認する

この例では、ブート環境名を指定して `-n` オプションを使用することで説明を確認しています。

```
# /usr/sbin/ludesc -n second_disk  
Solaris 9 test build, January 2001
```

---

## ブート環境の構成の表示

ブート環境の構成を表示するには、「List」メニューまたは `lufslist` コマンドを使用してください。出力される情報は、各ブート環境マウントポイントのディスクスライス(ファイルシステム)、ファイルシステムの種類、およびファイルシステムサイズです。

### ▼ 非アクティブブート環境の構成を表示する (キャラクターインタフェース)

1. メインメニューから「List」を選択します。
2. 構成を表示したいブート環境の名前を入力します。

```
Name of Boot Environment: solaris8
```

3. **F3** を押します。  
次の例ではリストを表示しています。

Filesystem	fstype	size (Mb)	Mounted on
/dev/dsk/c0t0d0s1	swap	512.11	-
/dev/dsk/c0t4d0s3	ufs	3738.29	/
/dev/dsk/c0t4d0s4	ufs	510.24	/opt

4. **F6** を押して「List」メニューに戻ります。

### ▼ ブート環境の構成を表示する (コマンド行インタフェース)

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
# lufslist
```

```
BE_name          ファイルシステムの詳細を表示するブート環境の名前を指定します。
```

次の例ではリストを表示しています。

Filesystem	fstype	size (Mb)	Mounted on
/dev/dsk/c0t0d0s1	swap	512.11	-

```
/dev/dsk/c0t4d0s3    ufs          3738.29 /  
/dev/dsk/c0t4d0s4    ufs          510.24 /opt
```





## 第 35 章

# Solaris Live Upgrade の使用例

---

この章では、CUI (キャラクタユーザーインタフェース) または CLI (コマンド行インタフェース) を使用してブート環境の作成、アップグレード、およびアクティブ化を行う例を示します。また、本来のブート環境に戻す例も紹介します。

---

## Solaris Live Upgrade によるアップグレードの使用例 (コマンド行インタフェース)

この例では、Solaris 2.6 リリースを使用しているシステムで `lucreate` コマンドを使用して新しいブート環境を作成しています。この新しいブート環境は、`luupgrade` コマンドを使用して Solaris 9 にアップグレードされ、次に、`luactivate` コマンドによってアクティブ化されます。この節では、以前のブート環境にフォールバックする例も示します。

## アクティブブート環境で Live Upgrade をインストールする

1. Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を挿入します。
2. 使用しているメディアに合わせて操作を行います。
  - Solaris 9 DVD を使用している場合は、インストーラのあるディレクトリに移動し、インストーラを実行します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tool/Installers
# ./liveupgrade20
```

Solaris Web Start インストーラが表示されます。

- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を使用する場合は、インストーラを実行します。

```
% ./installer
```

Solaris Web Start インストーラが表示されます。

3. 「インストール形式の選択 (Select Type of Install)」パネルで「カスタム (Custom)」をクリックします。
4. 「ロケールの選択 (Locale Selection)」パネルで、インストールする言語をクリックします。
5. インストールするソフトウェアを選択します。
  - DVD の場合、「コンポーネントの選択 (Component Selection)」パネルの「次へ (Next)」をクリックしてパッケージをインストールします。
  - CD の場合、「製品の選択 (Product Selection)」パネルの Solaris Live Upgrade の項目で「デフォルトインストール (Default Install)」をクリックします。
6. Solaris Web Start の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

## ブート環境を作成する

-c オプションを使用して、ソースブート環境に c0t4d0s0 という名前を付けます。ソースブート環境の名前設定は、ブート環境を作成するためにシステム上で初めて Solaris Live Upgrade を使用する場合に必要となります。その後のブート環境作成では、-c オプションを使用する必要はありません。

新しいブート環境の名前は c0t15d0s0 です。-A オプションを用いて、このブート環境名に関連付けられる説明を作成します。

ルート / ファイルシステムを新しいブート環境にコピーし、ソースブート環境のスワップスライスは共有せずに、新しいスワップスライスを作成します。

```
# lucreate -A 'BE_description' -c c0t4d0s0 -m /:/dev/dsk/c0t15d0s0:ufs \
-m -:/dev/dsk/c0t15d0s1:swap -n c0t15d0s0
```

## 非アクティブブート環境をアップグレードする

非アクティブブート環境の名前は c0t15d0s0 です。アップグレードに使用されるオペレーティングシステムイメージはネットワークから取得します。

```
# luupgrade -n c0t15d0s0 -u -s /net/ins3-svr/export/s9/combined.s9s_wos
```

## ブート環境がブート可能か確認する

lustatus コマンドは、ブート環境の作成が完了したかどうか、およびそのブート環境がブート可能であるかを報告します。

```
# lustatus

BE_name                Complete  Active  ActiveOnReboot  CopyStatus
-----
c0t4d0s0                yes      yes     yes              -
c0t15d0s0               yes      no      no               -
```

## 非アクティブブート環境をアクティブにする

luactivate コマンドを使用して c0t15d0s0 ブート環境 をブート可能にします。続いてシステムをリブートします。これで c0t15d0s0 がアクティブブート環境になり、c0t4d0s0 ブート環境が非アクティブになります。

```
# luactivate c0t15d0s0
# init 6
```

## ソースブート環境へフォールバックする

新しいブート環境のアクティブ化の状況に応じて、次の3つの作業からいずれかを選択します。

- アクティブ化が正常に行われたが元のブート環境に戻りたいという場合は、419 ページの「ブート環境作成は正常に完了したが元のブート環境にフォールバックさせる場合」を参照してください。
- アクティブ化に失敗したが、元のブート環境からブート可能な場合は、420 ページの「SPARC: ブート環境のアクティブ化に失敗した場合のフォールバック」を参照してください。
- アクティブ化に失敗し、メディアまたはネットインストールイメージを使用して元のブート環境に戻る必要がある場合は、420 ページの「SPARC: DVD、CD、またはネットワークインストールイメージを使って元のブート環境にフォールバックする」を参照してください。

## ブート環境作成は正常に完了したが元のブート環境にフォールバックさせる場合

この例では、新しいブート環境のアクティブ化が正常に完了したにもかかわらず、元の c0t4d0s0 ブート環境をアクティブブート環境として復元しています。デバイス名は first\_disk です。

```
# /usr/sbin/luactivate first_disk
# init 6
```

## SPARC: ブート環境のアクティブ化に失敗した場合の フォールバック

この例では、新しいブート環境のブートに失敗しています。シングルユーザーモードで元のブート環境 c0t4d0s0 からブートさせるために、OK プロンプトを表示させる必要があります。

```
OK boot net -s
# /sbin/luactivate first_disk
Do you want to fallback to activate boot environment c0t4d0s0
(yes or no)? yes
# init 6
```

元のブート環境 c0t4d0s0 がアクティブブート環境になります。

## SPARC: DVD、CD、または ネットワークインストールイ メージを使って元のブート環境にフォールバックする

この例では、新しいブート環境のブートに失敗しています。元のブート環境からはブートできないためメディアまたはネットインストールイメージを使用する必要があります。デバイスは /dev/dsk/c0t4d0s0 です。元のブート環境 c0t4d0s0 がアクティブブート環境になります。

```
OK boot net -s
# fsck /dev/dsk/c0t4d0s0
# mount /dev/dsk/c0t4d0s0 /mnt
# /mnt/sbin/luactivate
# umount /mnt
# init 6
```

---

## Solaris Live Upgrade によるアップグ レードの例 (キャラクタインタフェース)

この例では、Solaris 2.6 リリースを使用しているシステム上に新しいブート環境を作成しています。Solaris 9 リリースにアップグレードし、アップグレードされたこのブート環境をアクティブにしています。

### アクティブブート環境で Live Upgrade をインス トールする

1. Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を挿入します。
2. インストーラを実行します。

- Solaris 9 DVD を使用している場合は、インストーラのあるディレクトリに移動し、インストーラを実行します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_9/Tool/Installers  
# ./liveupgrade20
```

Solaris Web Start インストーラが表示されます。

- Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD を使用している場合は、インストーラを実行します。

```
% ./installer
```

Solaris Web Start インストーラが表示されます。

3. 「インストール形式の選択 (Select Type of Install)」パネルで「カスタム (Custom)」をクリックします。
4. 「ロケールの選択 (Locale Selection)」パネルで、インストールする言語をクリックします。
5. インストールするソフトウェアを選択します。
  - DVD の場合、「コンポーネントの選択 (Component Selection)」パネルの「次へ (Next)」をクリックしてパッケージをインストールします。
  - CD の場合、「製品の選択 (Product Selection)」パネルの Solaris Live Upgrade の項目で「デフォルトインストール (Default Install)」をクリックします。
6. Solaris Web Start の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

## ブート環境を作成する

この例では、ソースブート環境の名前は c0t4d0s0 です。ルート / ファイルシステムを新しいブート環境にコピーし、ソースブート環境のスワップスライスは共有せずに、新しいスワップスライスを作成します。

1. キャラクタインタフェースを表示します。

```
# /usr/sbin/lu
```

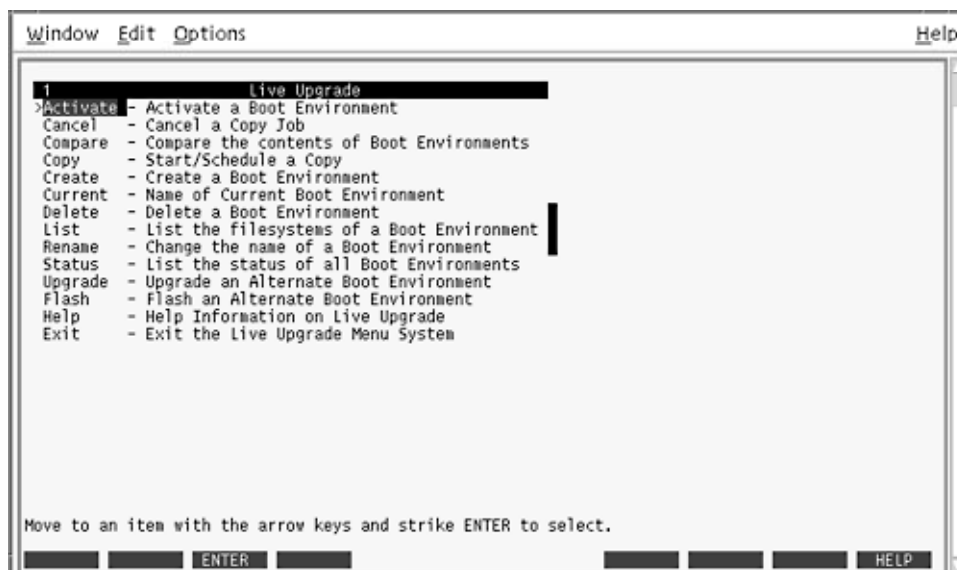


図 35-1 Solaris Live Upgrade のメインメニュー

2. メインメニューから「Create」を選択します。

Name of Current Boot Environment: **c0t4d0s0**

Name of New Boot Environment: **c0t15d0s0**

3. F3 を押します。

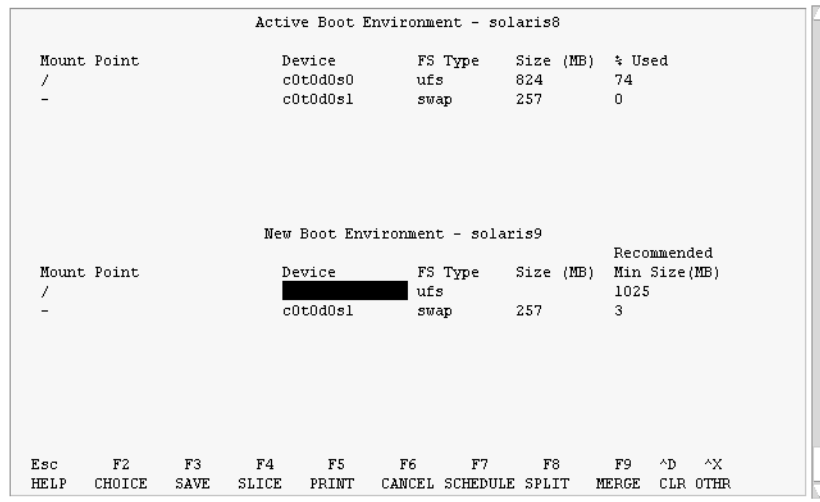


図 35-2 Solaris Live Upgrade の「Configuration」メニュー

4. 「Configuration」メニューで F2 を押して「Choices」メニューを表示します。
5. ディスク c0t15d0 からルート (/) 用としてスライス 0 を選択します。
6. 構成メニューで、分割するスワップスライスを選択して c0t15d0 上にスワップ用の新しいスライスを作成します。
7. F2 を押して「Choices」メニューを表示します。
8. 新しいスワップスライスとして、ディスク c0t15d0 からスライス 1 を選択します。
9. F3 を押して新しいブート環境を作成します。

## 非アクティブブート環境をアップグレードする

アップグレードのためにネットワークからオペレーティングシステムイメージを取得します。

1. メインメニューから「Upgrade」を選択します。

```
Name of New Boot Environment:  c0t15d0s0
Package Media: /net/ins3-svr/export/s9/combined.s9s_wos
```

2. F3 を押します。

## 非アクティブブート環境をアクティブにする

c0t15d0s0 ブート環境をブート可能にします。続いてシステムをリブートします。これで c0t15d0s0 がアクティブブート環境になり、c0t4d0s0 ブート環境が非アクティブになります。

1. メインメニューから「Activate」を選択します。

```
Name of Boot Environment: c0t15d0s0  
Do you want to force a Live Upgrade sync operations: no
```

2. F3 を押します。
3. Return キーを押します。
4. 次のコマンドを入力します。

```
# init 6
```

フォールバックが必要な場合は、前述の例のコマンド行による作業を行います。419 ページの「ソースブート環境へフォールバックする」を参照してください。



## 第 36 章

# Solaris Live Upgradeのコマンドに関するリファレンス情報

次の表に、メニューを使用せずにコマンド行で実行できるコマンドを示します。Solaris Live Upgrade には、次の表に示すすべてのコマンド行ユーティリティのマニュアルページが含まれています。

表 36-1 Solaris Live Upgrade のコマンド

作業	コマンド名
非アクティブブート環境をアクティブにする	luactivate (1M)
スケジュールされた処理 (コピーまたは作成) を取り消す	lucancel (1M)
アクティブブート環境を非アクティブブート環境と比較する	lucompare (1M)
非アクティブブート環境を更新するためにファイルシステムをコピーし直す	lucopy
ブート環境を作成する	lucreate (1M)
アクティブブート環境に名前を付ける	lucurr (1M)
ブート環境を削除する	ludelete (1M)
ブート環境の名前に記述を追加する	ludesc (1M)
各ブート環境の重要なファイルシステムを表示する	lufslist (1M)
ブート環境内のすべてのファイルシステムをマウントできる。このコマンドを使用すると、ブート環境がアクティブでない時にそのブート環境内のファイルを変更できる	lumount (1M)
ブート環境の名前を変更する	lurename (1M)
すべてのブート環境のステータスを表示する	lustatus (1M)

表 36-1 Solaris Live Upgrade のコマンド (続き)

作業	コマンド名
ブート環境に存在するすべてのファイルシステムのマウントを解除する。このコマンドを使用すると、ブート環境がアクティブでない時にそのブート環境内のファイルを変更できる	luumount (1M)
非アクティブブート環境上のオペレーティング環境をアップグレードするか、あるいは非アクティブブート環境上にフラッシュアーカイブをインストールする	luupgrade (1M)

## 第 37 章

---

# Solaris ソフトウェアに関するリファレンス情報

---

この節では、Solaris CD、ロケール、パッケージなどのリファレンス情報について説明します。

第 38 章	Solaris 9 のメディアキットに含まれる主な DVD と CD について説明します。
第 39 章	さまざまなハードウェアプラットフォームのプラットフォーム名とグループのリストを示します。
第 40 章	locale キーワードをプロファイルに設定したり、ロケールを事前設定したりするときに必要な値のリストを示します。



## 第 38 章

# Solaris 9 メディアの構成に関するリファレンス情報

この章では、Solaris 9 ソフトウェアのメディアキットに含まれる主な DVD メディアおよび CD メディアについて説明します。

## SPARC: Solaris 9 メディア

次の表に、Solaris 9 リリースの主な DVD メディアおよび CD メディアのリストを示します。製品には、英語、その他の言語、およびロケールソフトウェアの DVD メディアまたは CD メディアが入ったマルチリンガル版メディアキットが入っています。

表 38-1 SPARC: MULTILINGUAL DVD メディア

DVD タイトル	説明
Solaris 9 DVD (SPARC 版)	<p>次のものが入っています。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris 製品およびすべての部分ロケールをインストールするためのソフトウェア、ツール、および構成情報</li><li>■ サポートまたは未サポートのソフトウェアが入っている ExtraValue ソフトウェア</li><li>■ インストーラ</li><li>■ 一部のサードパーティパブリックドメインソフトウェアのソースコード</li><li>■ ローカライズされたインタフェースソフトウェアとドキュメント</li><li>■ 英語、ヨーロッパ言語、アジア言語 (日本語を含む) 用の Solaris マニュアルセット</li></ul> <p>ディレクトリ構造については 図 38-1 を参照してください。</p>

表 38-2 SPARC: MULTILINGUAL CD メディア

CD タイトル	説明
Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (SPARC 版)	Solaris ソフトウェアおよびすべての部分ロケールをインストールするスクリプトおよびローカライズされたインストーラが入っています。ディレクトリ構造については、図 38-2 を参照してください。
Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)	Solaris 製品のインストールに必要なソフトウェア、ツール、および構成情報が入っています。ディレクトリ構造については、図 38-3 を参照してください。
Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版)	次のものが入っています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 必要に応じてインストールするソフトウェア用のパッケージ。ソフトウェアごとにインストールするかどうかの指示が表示されます。</li> <li>■ サポートまたは未サポートのソフトウェアが入っている ExtraValue ソフトウェア</li> <li>■ インストーラ</li> <li>■ 一部のサードパーティパブリックドメインソフトウェアのソースコード</li> </ul> <p>ディレクトリ構造については、図 38-4 を参照してください。</p> <p>必要があれば、インストールプログラムによってこの CD を求めるプロンプトが表示されます。</p>
Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版)	ローカライズされたインタフェースソフトウェアとマニュアルが入っています。ディレクトリ構造については、図 38-5 を参照してください。
Solaris 9 DOCUMENTATION 1 of 2 CD	特定の地域の言語をサポートするために必要な場合、インストールプログラムによってこの CD を求めるプロンプトが表示されます。
Solaris 9 DOCUMENTATION 2 of 2 CD	英語およびヨーロッパ言語の Solaris マニュアルセットが入っています。
Solaris 9 DOCUMENTATION 2 of 2 CD	アジア言語 (日本語を含む) の Solaris マニュアルセットが入っています。

## SPARC: Solaris 9 メディアのディレクトリ構造

この節では、各 DVD と CD のディレクトリ構造について説明します。

## SPARC: Solaris 9 DVD (SPARC 版) のディレクトリ構造

Solaris 9 DVD (SPARC 版) のディレクトリ構造は以下のとおりです。

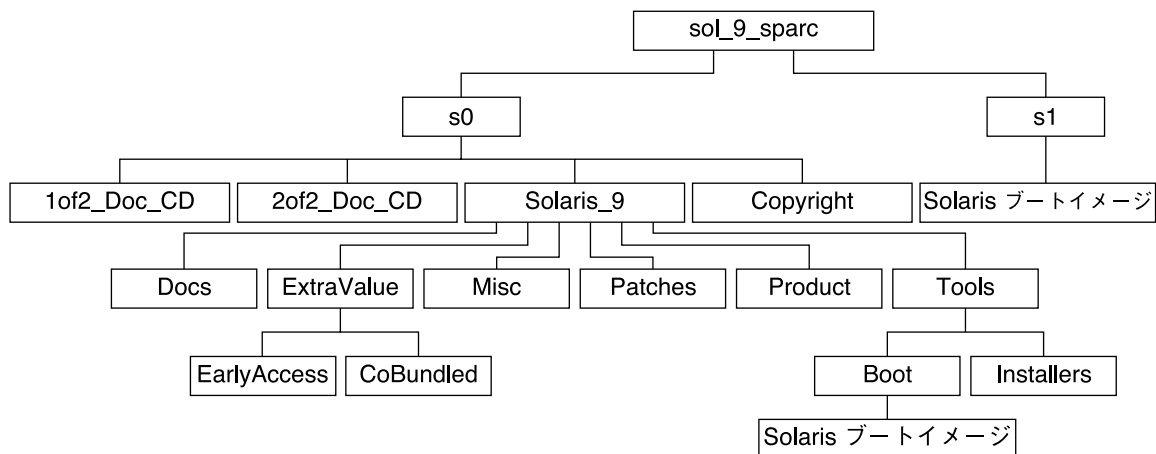


図 38-1 Solaris 9 DVD (SPARC 版)

- スライス 0 (s0) には、Copyright と Solaris\_9 ディレクトリが入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、Solaris 9 ソフトウェア製品のインストールに必要なツール、ソフトウェア、および構成情報が入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、次のディレクトリが含まれます。
  - ExtraValue - 次の 2 つのサブディレクトリが入っています。
    - CoBundled - Solaris オペレーティング環境には含まれないが、サポート対象の Solaris 製品 (Solaris Web Start Wizards SDK 3.0.1 および SunScreen 3.2)
    - EarlyAccess - サポート対象外の評価用ソフトウェア
  - Misc - JumpStart のソフトウェアとファイル (rules ファイル、check スクリプト、プロファイル、begin スクリプト、finish スクリプトなど) を含む jumpstart\_sample ディレクトリ
  - Patches - このリリースの時点で入手可能なすべての Solaris 9 パッチ
  - Product - Solaris 9 パッケージと制御ファイル
  - Tools - Solaris 9 インストールツール。次のものが入っています。
    - Boot サブディレクトリ - Solaris 9 ミニルートが入っています。
    - スクリプト add\_install\_client、dial、rm\_install\_client、および setup\_install\_server
    - Installers サブディレクトリ - Solaris Live Upgrade および Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) のインストールに使用するインストーラ およびサポートされる Java™ クラスファイルが入っています。Solaris Live

Upgrade は Solaris ソフトウェアをインストールするときに自動的にインストールされます。しかし、Solaris 9 より前のリリースから Solaris Live Upgrade を使用して Solaris 9 リリースにアップグレードするには、まず、これらのパッケージを現在の Solaris リリースにインストールする必要があります。Solaris Live Upgrade をインストールする方法については、351 ページの「Solaris Live Upgrade をインストールする方法」を参照してください。

- 1of2\_Doc\_CD – 英語およびヨーロッパ言語のマニュアル
- 2of2\_Doc\_CD – アジア言語のマニュアル
- スライス 1 (s1) には、Solaris 9 ミニルートが入っています。

## SPARC: Solaris 9 INSTALLATION CD のディレクトリ構造

次に、Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (SPARC 版) または Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版) のディレクトリ構造を示します。

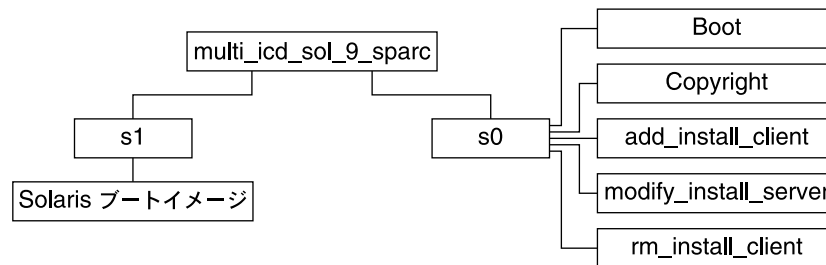


図 38-2 SPARC: Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (SPARC 版)

multi\_icd\_sol\_sparc ディレクトリには、Solaris ソフトウェアのインストール用スクリプト、および Solaris 9 ミニルート用の Boot サブディレクトリが入っています。ディレクトリおよびスクリプトには、次のものが入っています。

- スライス 0 (s0) には、Solaris ソフトウェアをインストールするスクリプトと、Solaris ミニルートが入っている Boot サブディレクトリが入っています。次のようなスクリプトが入っています。
  - add\_install\_client
  - modify\_install\_server
  - rm\_install\_client
- スライス 1 (s1) には、Solaris 9 ミニルートが入っています。



## SPARC: Solaris 9 SOFTWARE CD (SPARC 版) のディレクトリ構造

次に、Solaris 9 SOFTWARE CD (SPARC 版) のディレクトリ構造を示します。

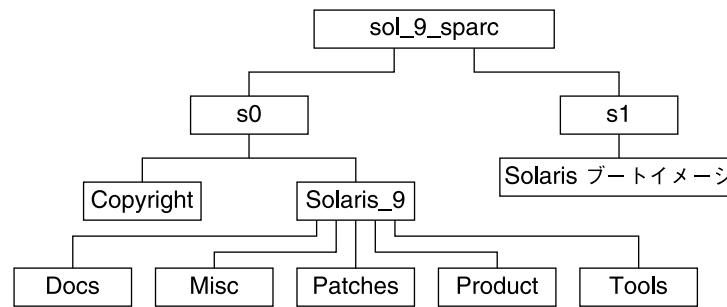


図 38-3 SPARC: Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版)

- スライス 0 (s0) には、Copyright と Solaris\_9 ディレクトリが入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、Solaris 9 ソフトウェア製品 (コアシステムサポート、エンドユーザーシステムサポートのソフトウェアグループなど) をインストールするために必要な最低限のツール、ソフトウェア、および構成情報が入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、次のディレクトリが含まれます。
  - Docs – 空のディレクトリ
  - Misc – JumpStart のソフトウェアとファイル (rules ファイル、check スクリプト、プロファイル、begin スクリプト、finish スクリプトなど) を含む jumpstart\_sample ディレクトリ
  - Patches – Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (SPARC 版) が作成された時点で入手可能なすべての Solaris 9 パッチ
  - Product – Solaris 9 パッケージと制御ファイル
  - Tools – Solaris 9 インストールツール (add\_install\_client、dial、rm\_install\_client、setup\_install\_server など)
- スライス 1 (s1) には、Solaris 9 ミニルートが入っています。

次の図に、Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) のディレクトリ構造を示します。

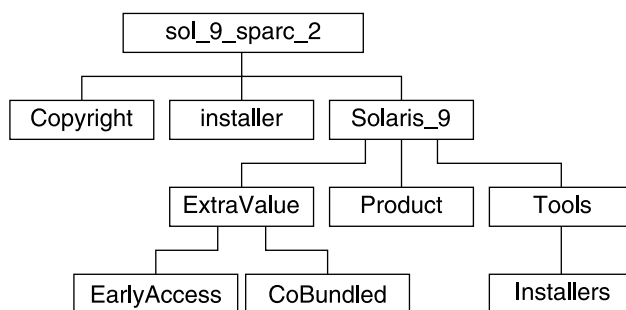


図 38-4 SPARC: Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版)

sol\_9\_sparc\_2 ディレクトリには、Copyright、Solaris Web Start installer、および Solaris\_9 ディレクトリが入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、次のものが入っています。

- ExtraValue – 次の 2 つのサブディレクトリが入っています。
  - CoBundled – Solaris オペレーティング環境には含まれないが、サポート対象の Solaris 製品
  - EarlyAccess – サポート対象外の評価用ソフトウェア
- Product – 開発者システムサポート、全体ディストリビューション、および全体ディストリビューションと OEM サポートのソフトウェアグループ用パッケージの一部
- Tools – Solaris 9 インストールツール。次のものが入っています。
  - add\_to\_install\_server スクリプト
  - Installers サブディレクトリ - Solaris Live Upgrade および Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (SPARC 版) のインストールに使用するインストーラおよびサポートされる Java クラスファイルが入っています。Solaris Live Upgrade は Solaris ソフトウェアをインストールするときに自動的にインストールされます。しかし、Solaris 9 より以前のリリースから Solaris Live Upgrade を使用して Solaris 9 リリースにアップグレードするには、まず、これらのパッケージを現在の Solaris リリースにインストールする必要があります。Solaris Live Upgrade をインストールする方法については、351 ページの「Solaris Live Upgrade をインストールする方法」を参照してください。

## SPARC: Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) のディレクトリ構造

次の図に、Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版) のディレクトリ構造を示します。

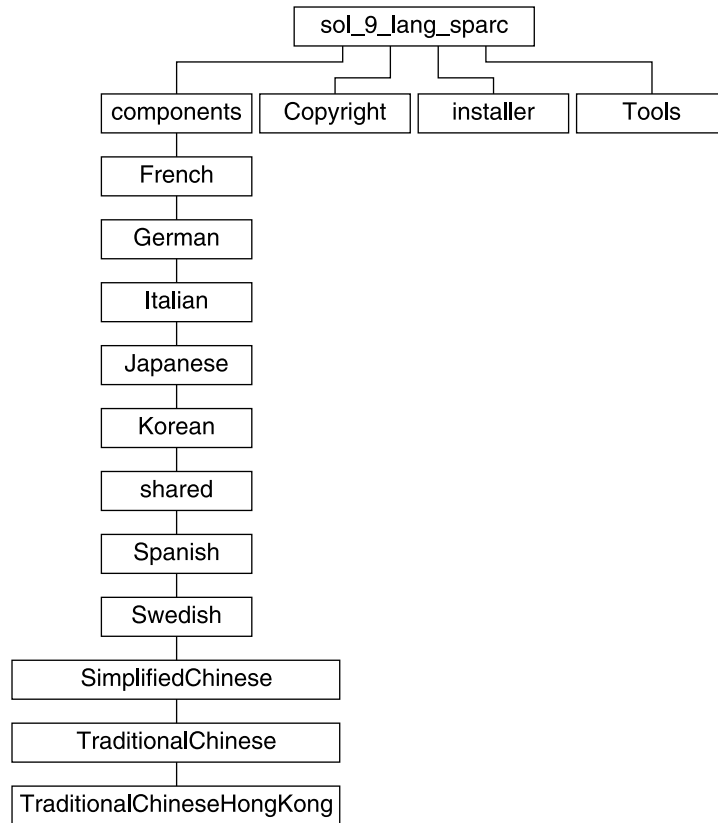


図 38-5 Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版)

sol\_9\_lang\_sparc ディレクトリには、Solaris の言語ソフトウェアとロケールソフトウェアをインストールする Solaris Web Start インストーラが入っています。

sol\_9\_lang\_sparc ディレクトリには次のディレクトリが入っています。

- components - ロケールパッケージ (簡体字中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、スペイン語、スウェーデン語、繁体字中国語、香港版繁体字中国語)、およびすべてのロケールで共有されるパッケージが入っています。
- Copyright - 著作権ページ
- installer - Solaris Web Start インストーラ
- Tools - 結合されたインストールイメージを作成するための add\_to\_install\_server スクリプト

ロケールソフトウェアについての詳細は、『国際化対応言語環境の利用ガイド』を参照してください。

## x86: Solaris 9 メディア

次に、Solaris 9 (x86 版) の主な DVD および CD メディアの内容を示します。製品には、英語、その他の言語、およびロケールソフトウェアの DVD メディアまたは CD メディアが入ったマルチリンガル版メディアキットが入っています。

表 38-3 x86: MULTILINGUAL DVD メディア

DVD タイトル	説明
Solaris 9 DVD (x86 版)	<p>次のものが入っています。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris 製品および部分ロケールをインストールするためのソフトウェア、ツール、および構成情報。これには、さまざまな構成作業とブート作業に使用する Solaris 9 Device Configuration Assistant が含まれます。</li><li>■ サポートまたは未サポートのソフトウェアが入っている ExtraValue ソフトウェア</li><li>■ インストーラ</li><li>■ 一部のサードパーティパブリックドメインソフトウェアのソースコード</li><li>■ ローカライズされたインタフェースソフトウェアとドキュメント</li><li>■ 英語、ヨーロッパ言語、アジア言語 (日本語を含む) 用の Solaris マニュアルセット</li></ul> <p>ディレクトリ構造については、図 38-6 を参照してください。</p>

表 38-4 x86: MULTILINGUAL CD メディア

CD タイトル	説明
Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (x86 版)	Solaris ソフトウェアおよびすべての部分ロケールをインストールするスクリプトおよびローカライズされたインストーラが入っています。これには、さまざまな構成作業とブート作業に使用する Solaris 9 Device Configuration Assistant が含まれます。ディレクトリ構造については、図 38-7 を参照してください。
Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)	Solaris 製品のインストールに必要なソフトウェア、ツール、および構成情報が入っています。これには、さまざまな構成作業とブート作業に使用する Solaris 9 Device Configuration Assistant が含まれます。ディレクトリ構造については、図 38-8 を参照してください。

表 38-4 x86: MULTILINGUAL CD メディア (続き)

CD タイトル	説明
Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)	<p>次のものが入っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 必要に応じてインストールするソフトウェア用のパッケージ。ソフトウェアごとにインストールするかどうかの指示が表示されます。</li> <li>■ サポートまたは未サポートのソフトウェアが入っている ExtraValue ソフトウェア</li> <li>■ インストーラ</li> <li>■ 一部のサードパーティパブリックドメインソフトウェアのソースコード</li> </ul> <p>ディレクトリ構造については、図 38-9 を参照してください。</p> <p>必要があれば、インストールプログラムによってこの CD を求めるプロンプトが表示されます。</p>
Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)	<p>ローカライズされたインタフェースソフトウェアとマニュアルが入っています。ディレクトリ構造については、図 38-10 を参照してください。</p> <p>特定の地域の言語をサポートするために必要な場合、インストールプログラムによってこの CD を求めるプロンプトが表示されます。</p>
Solaris 9 DOCUMENTATION 1 of 2 CD	<p>英語およびヨーロッパ言語の Solaris マニュアルセットが入っています。</p>
Solaris 9 DOCUMENTATION 2 of 2 CD	<p>アジア言語 (日本語を含む) の Solaris マニュアルセットが入っています。</p>

## x86: Solaris 9 メディアのディレクトリ構造

この節では、各 DVD と CD のディレクトリ構造について説明します。

### Solaris 9 DVD (x86 版) ディレクトリの構造

次に、Solaris 9 DVD (x86 版) のディレクトリ構造を示します。

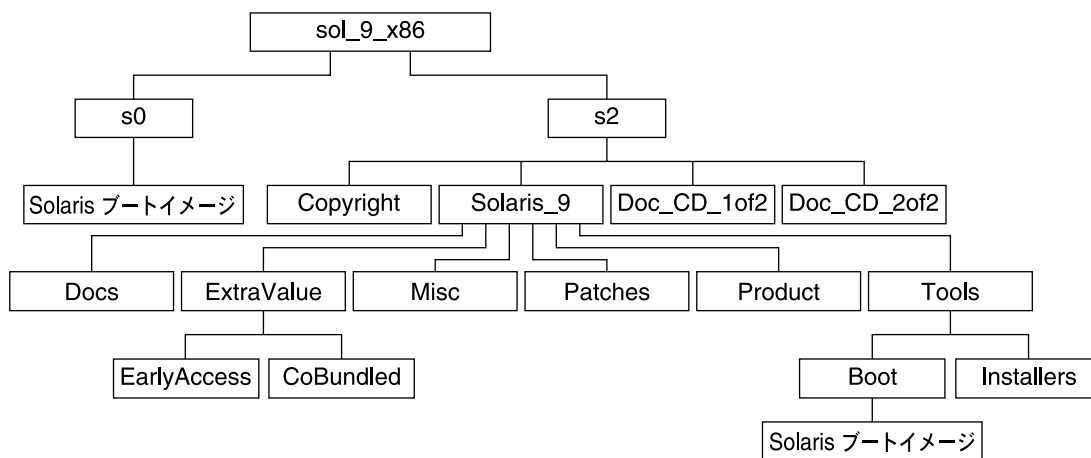


図 38-6 Solaris 9 DVD (x86 版)

- スライス 0 (s0) には、Solaris 9 ミニルートが入っています。
- スライス 2 (s2) には、Copyright と Solaris\_9 ディレクトリが入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、Solaris 9 ソフトウェア製品のインストールに必要なツール、ソフトウェア、および構成情報が入っています。スライス 2 には、次のディレクトリが入っています。
  - ExtraValue – 次の 2 つのサブディレクトリが入っています。
    - CoBundled – Solaris オペレーティング環境には含まれないが、サポート対象の Solaris 製品 (Solaris Web Start Wizards SDK 3.0.1 および SunScreen 3.2)
    - EarlyAccess – サポート対象外の評価用ソフトウェア
  - Misc – JumpStart のソフトウェアとファイル (rules ファイル、check スクリプト、プロファイル、begin スクリプト、finish スクリプトなど) を含む jumpstart\_sample ディレクトリ
  - Patches – このリリースの時点で入手可能なすべての Solaris 9 パッチ
  - Product – Solaris 9 パッケージと制御ファイル
  - Tools – Solaris 9 インストールツール。次のものが入っています。
    - Boot サブディレクトリ - Solaris 9 ミニルートが入っています。
    - スクリプト add\_install\_client、dial、rm\_install\_client、および setup\_install\_server
    - Installers サブディレクトリ - Solaris Live Upgrade および Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) のインストールに使用するインストーラおよびサポートされる Java クラスファイルが入っています。Solaris Live Upgrade は Solaris ソフトウェアをインストールするときに自動的にインストールされます。しかし、Solaris 9 より前のリリースから Solaris Live Upgrade を使用して Solaris 9 リリースにアップグレードするには、まず、これらのパッケージを現在の Solaris リリースにインストールする必要があります。Solaris Live Upgrade をインストールする方法については、

351 ページの「Solaris Live Upgrade をインストールする方法」を参照してください。

- d1\_image サブディレクトリ - フロッピーディスクにコピー可能な Solaris 9 Device Configuration Assistant ソフトウェアが入っています。
- 1of2\_Doc\_CD - 英語およびヨーロッパ言語のマニュアル
- 2of2\_Doc\_CD - アジア言語のマニュアル

## x86: Solaris 9 INSTALLATION CD のディレクトリ構造

次に、Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (x86 版) または Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版) のディレクトリ構造を示します。

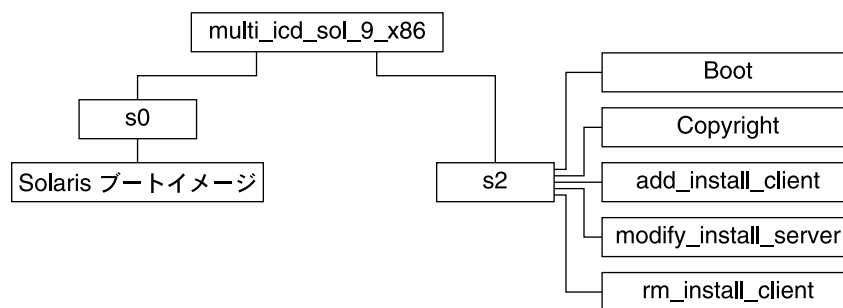


図 38-7 x86: Solaris 9 INSTALLATION (MULTILINGUAL) CD (x86 版)

multi\_icd\_sol\_9\_x86 ディレクトリには、Solaris ソフトウェアのインストール用スクリプト、および Solaris 9 ミニルート用の Boot サブディレクトリが入っています。ディレクトリおよびスクリプトには、次のものが入っています。

- スライス 0 (s0) には、Solaris 9 ミニルートが入っています。
- スライス 2 (s2) には、Solaris ソフトウェアをインストールするスクリプトと、Solaris ミニルートが入っている Boot サブディレクトリが入っています。次のようなスクリプトが入っています。
  - add\_install\_client
  - modify\_install\_server
  - rm\_install\_client

## x86: Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) のディレクトリ構造

次に、Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) のディレクトリ構造を示します。

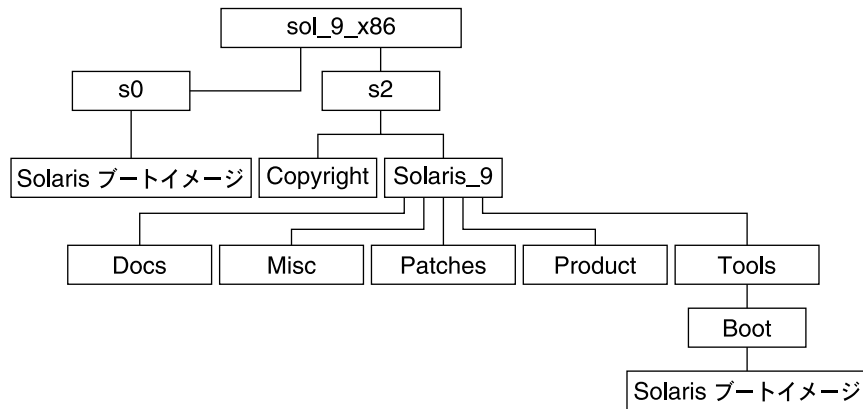


図 38-8 x86: Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版)

- スライス 0 (s0) には、Solaris 9 ミニルートが入っています。
- スライス 2 (s2) には、Copyright と Solaris\_9 ディレクトリが入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、Solaris 9 ソフトウェア製品 (コアシステムサポート、エンドユーザーシステムサポートのソフトウェアグループなど) をインストールするために必要な最低限のツール、ソフトウェア、および構成が入っています。Solaris\_9 ディレクトリには、次のディレクトリが含まれます。
  - Docs – 空のディレクトリ
  - Misc – JumpStart のソフトウェアとファイル (rules ファイル、check スクリプト、プロファイル、begin スクリプト、finish スクリプトなど) を含む jumpstart\_sample ディレクトリ
  - Patches – Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) の作成時点で入手可能なすべての Solaris 9 パッチ
  - Product – Solaris 9 パッケージと制御ファイル
  - Tools – Solaris 9 インストールツール (boot ミニルート、add\_install\_client、dial、rm\_install\_client、setup\_install\_server など)

次に、Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) のディレクトリ構造を示します。



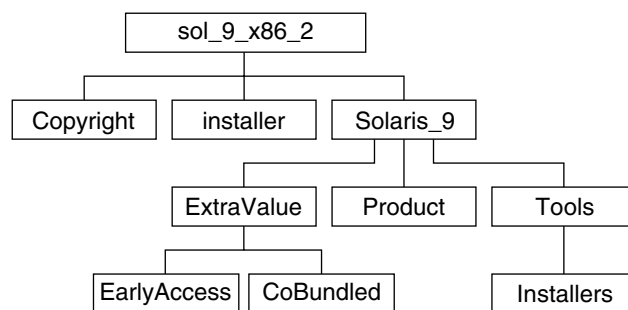


図 38-9 Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)

sol\_9\_x86\_2 ディレクトリには、Copyright、Solaris Web Start installer、および Solaris\_9 ディレクトリが入っています。Solaris\_9 ディレクトリには次のものが入っています。

- ExtraValue – 次の 2 つのサブディレクトリが入っています。
  - CoBundled – Solaris オペレーティング環境には含まれないが、サポート対象の Solaris 製品
  - EarlyAccess – サポート対象外の評価用ソフトウェア
- Product – 開発者システムサポート、全体ディストリビューションおよび全体ディストリビューションと OEM サポートのソフトウェアグループ用パッケージの一部
- Tools – このディレクトリには次のものが入っています。
  - add\_to\_install\_server スクリプト
  - Installer サブディレクトリ - Solaris Live Upgrade および Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) のインストールに使用するインストーラおよびサポートされる Java クラスファイルが入っています。Solaris Live Upgrade は Solaris ソフトウェアをインストールするときに自動的にインストールされません。しかし、Solaris 9 より前のリリースから Solaris Live Upgrade を使用して Solaris 9 リリースにアップグレードするには、まず、これらのパッケージを現在の Solaris リリースにインストールする必要があります。Solaris Live Upgrade をインストールする方法については、351 ページの「Solaris Live Upgrade をインストールする方法」を参照してください。
  - d1\_image サブディレクトリ - フロッピーディスクにコピー可能な Solaris 9 Device Configuration Assistant ソフトウェアが入っています。

## x86: Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版) のディレクトリ構造

次の図に、Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版) のディレクトリ構造を示します。

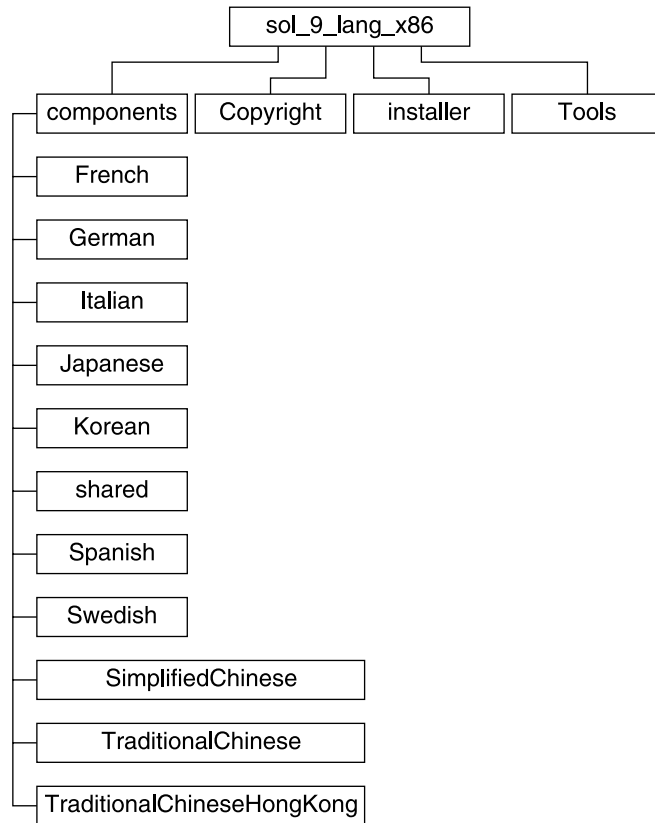


図 38-10 Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版)

sol\_9\_lang\_x86 ディレクトリには、Solaris の言語ソフトウェアとロケールソフトウェアをインストールする Solaris Web Start プログラムが入っています。デフォルトディレクトリに 9 つの言語をインストールすることも、あるいは特定の言語をインストールすることもできます。sol\_9\_lang\_x86 ディレクトリには、次のディレクトリが入っています。

- **components** – ロケールパッケージ (簡体字中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、スペイン語、スウェーデン語、繁体字中国語、香港版繁体字中国語)、およびすべてのロケールで共有されるパッケージが入っています。
- **Copyright** – 著作権ページ
- **installer** – Web Start インストーラ
- **Tools** – インストールサーバーを作成するための `add_to_install_server` スクリプト

ロケールソフトウェアについての詳細は、『国際化対応言語環境の利用ガイド』を参照してください。



## 第 39 章

# プラットフォーム名とプラットフォームグループに関するリファレンス情報

ネットワークシステムにクライアントを追加するときにはシステムアーキテクチャ (プラットフォームグループ) を、カスタム JumpStart インストール rules ファイルを作成するときにはプラットフォーム名を知っている必要があります。

プラットフォーム名とプラットフォームグループの例を下記の表に示します。SPARC システムの完全なリストについては、『Solaris 9 Sun ハードウェアマニュアル』を参照してください。

表 39-1 プラットフォーム名とプラットフォームグループの例

システム	プラットフォーム名	プラットフォームグループ
Ultra 5	SUNW, Ultra-5_10	sun4u
x86 ベース	i86pc	i86pc

注 - システムが動作している場合、システムのプラットフォーム名は `uname -i`、システムのプラットフォームグループは `uname -m` でそれぞれ調べることができます。



## 第 40 章

# ロケールの値 (リファレンス)

以下に、プロファイル内で `locale` キーワードを設定する場合や、ロケールを事前構成する場合に必要な値を示します。

「ロケール」によって、特定の言語と地域についてのオンライン情報を表示する方法が決定されます。1つの言語でも、日付と時間の表記、綴り、通貨など、地域によって異なるロケールが含まれます。ロケールの詳細は、『国際化対応言語環境の利用ガイド』を参照してください。

表 40-1 アジア

ロケール	ユーザーインタフェース	地域	コードセット	言語サポート
<code>hi_IN.UTF-8</code>	英語	インド	UTF-8 <sup>1</sup>	ヒンディ語 (UTF-8) Unicode 3.1
<code>ja</code>	日本語	日本	<code>eucJP</code> <sup>2</sup>	日本語 (EUC) JIS X 0201-1976 JIS X 0208-1990 JIS X 0212-1990
<code>ja_JP.eucJP</code>	日本語	日本	<code>eucJP</code>	日本語 (EUC) JIS X 0201-1976 JIS X 0208-1990 JIS X 0212-1990
<code>ja_JP.PCK</code>	日本語	日本	<code>PCK</code> <sup>3</sup>	日本語 (PC kanji)

UTF-8 は、ISO/IEC 10646-1:2000 および Unicode 3.1 で定義されている UTF-8 です。

`eucJP` は、日本語 EUC コードセットを示します。`ja_JP.eucJP` ロケールの仕様は UL\_OSF 日本語環境実装規約 Version 1.1 に準拠しており、`ja` ロケールは過去の Solaris リリースにおける従来の仕様に準拠しています。

`PCK` はシフト JIS (SJIS) とも呼ばれます。

表 40-1 アジア (続き)

ロケール	ユーザーインタ フェース	地域	コードセット	言語サポート
				JIS X 0201-1976
				JIS X 0208-1990
ja_JP.UTF-8	日本語	日本	UTF-8	日本語 (UTF-8) Unicode 3.1
ko_KR.EUC	韓国語	韓国	1001	韓国語 (EUC) KS X 1001
ko_KR.UTF-8	韓国語	韓国	UTF-8	韓国語 (UTF-8) Unicode 3.1
th_TH.UTF-8	英語	タイ	UTF-8	タイ語 (UTF-8) Unicode 3.1
th_TH.TIS620	英語	タイ	TIS620.2533	タイ語 TIS620.2533
zh_CN.EUC	簡体字 (中国語)	PRC	gb2312 <sup>4</sup>	簡体字中国語 (EUC) GB2312-1980
zh_CN.GBK	簡体字 (中国語)	PRC	GBK <sup>5</sup>	簡体字中国語 (GBK)
zh_CN.GB18030	簡体字 (中国語)	PRC	GB18030-2000	簡体字中国語 (GB18030-2000) GB18030-2000
zh_CN.UTF-8	簡体字 (中国語)	PRC	UTF-8	簡体字中国語 (UTF-8) Unicode 3.1
zh_HK.BIG5HK	繁体字 (中国語)	香港	Big5+HKSCS	繁体字中国語 (BIG5+HKSCS)
zh_HK.UTF-8	繁体字 (中国語)	香港	UTF-8	繁体字中国語 (UTF-8) Unicode 3.1
zh_TW.EUC	繁体字中国語	台湾	cns11643	繁体字中国語 (EUC) CNS 11643-1992
zh_TW.BIG5	繁体字 (中国語)	台湾	BIG5	繁体字中国語 (BIG5)
zh_TW.UTF-8	繁体字 (中国語)	台湾	UTF-8	繁体字中国語 (UTF-8) Unicode 3.1

gb2312 は、簡体字中国語 EUC コードセットを示します。これには GB 1988-80 および GB 2312-80 が含まれます。

GBK は GB 拡張を示します。すべての GB 2312-80 文字、ISO/IEC 10646-1 のすべての Unified Han 文字、および日本語のひらがな文字、カタカナ文字を含みます。また、中国語、日本語、韓国語の文字セット、および ISO/IEC 10646-1 の多くの文字も含みます。

表 40-2 オーストラレーシア

ロケール	ユーザーインタフェ ース	地域	コードセット	言語サポート
en_AU.ISO8859-1	英語	オーストラリア	ISO8859-1	英語 (オーストラリア)



表 40-2 オーストラレーシア (続き)

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
en_NZ.ISO8859-1	英語	ニュージーランド	ISO8859-1	英語 (ニュージーランド)

表 40-3 中央アメリカ

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
es_CR.ISO8859-1	スペイン語	コスタリカ	ISO8859-1	スペイン語 (コスタリカ)
es_GT.ISO8859-1	スペイン語	グアテマラ	ISO8859-1	スペイン語 (グアテマラ)
es_NI.ISO8859-1	スペイン語	ニカラグア	ISO8859-1	スペイン語 (ニカラグア)
es_PA.ISO8859-1	スペイン語	パナマ	ISO8859-1	スペイン語 (パナマ)
es_SV.ISO8859-1	スペイン語	エルサルバドル	ISO8859-1	スペイン語 (エルサルバドル)

表 40-4 中央ヨーロッパ

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
cs_CZ.ISO8859-2	英語	チェコ共和国	ISO8859-2	チェコ語 (チェコ)
de_AT.ISO8859-1	ドイツ語	オーストリア	ISO8859-1	ドイツ語 (オーストリア)
de_AT.ISO8859-15	ドイツ語	オーストリア	ISO8859-15	ドイツ語 (オーストリア、ISO8859-15 - Euro)
de_CH.ISO8859-1	ドイツ語	スイス	ISO8859-1	ドイツ語 (スイス)
de_DE.UTF-8	ドイツ語	ドイツ	UTF-8	ドイツ語 (ドイツ、Unicode 3.1)
de_DE.ISO8859-1	ドイツ語	ドイツ	ISO8859-1	ドイツ語 (ドイツ)
de_DE.ISO8859-15	ドイツ語	ドイツ	ISO8859-15	ドイツ語 (ドイツ、ISO8859-15 - Euro)
fr_CH.ISO8859-1	フランス語	スイス	ISO8859-1	フランス語 (スイス)
hu_HU.ISO8859-2	英語	ハンガリー	ISO8859-2	ハンガリー語 (ハンガリー)
pl_PL.ISO8859-2	英語	ポーランド	ISO8859-2	ポーランド語 (ポーランド)
pl_PL.UTF-8	英語	ポーランド	UTF-8	ポーランド語 (ポーランド、Unicode 3.1)

表 40-4 中央ヨーロッパ (続き)

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
sk_SK.ISO8859-2	英語	スロバキア	ISO8859-2	スロバキア語 (スロバキア)

表 40-5 東ヨーロッパ

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
bg_BG.ISO8859-5	英語	ブルガリア	ISO8859-5	ブルガリア語 (ブルガリア)
et_EE.ISO8859-15	英語	エストニア	ISO8859-15	エストニア語 (エストニア)
hr_HR.ISO8859-2	英語	クロアチア	ISO8859-2	クロアチア語 (クロアチア)
lt_LT.ISO8859-13	英語	リトアニア	ISO8859-13	リトアニア語 (リトアニア)
lv_LV.ISO8859-13	英語	ラトビア	ISO8859-13	ラトビア語 (ラトビア)
mk_MK.ISO8859-5	英語	マケドニア	ISO8859-5	マケドニア語 (マケドニア)
ro_RO.ISO8859-2	英語	ルーマニア	ISO8859-2	ルーマニア語 (ルーマニア)
ru_RU.KOI8-R	英語	ロシア	KOI8-R	ロシア語 (ロシア、KOI8-R)
ru_RU.ANSI1251	英語	ロシア	ansi-1251	ロシア語 (ロシア、ANSI 1251)
ru_RU.ISO8859-5	英語	ロシア	ISO8859-5	ロシア語 (ロシア)
ru_RU.UTF-8	英語	ロシア	UTF-8	ロシア語 (ロシア、Unicode 3.1)
sh_BA.ISO8859-2@bosnia	英語	ボスニア	ISO8859-2	ボスニア語 (ボスニア)
sl_SI.ISO8859-2	英語	スロベニア	ISO8859-2	スロベニア語 (スロベニア)
sq_AL.ISO8859-2	英語	アルバニア	ISO8859-2	アルバニア語 (アルバニア)
sr_YU.ISO8859-5	英語	セルビア	ISO8859-5	セルビア語 (セルビア)

表 40-5 東ヨーロッパ (続き)

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
tr_TR.ISO8859-9	英語	トルコ	ISO8859-9	トルコ語 (トルコ)
tr_TR.UTF-8	英語	トルコ	UTF-8	トルコ語 (トルコ、Unicode 3.1)

表 40-6 中東

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
He	英語	イスラエル	ISO8859-8	ヘブライ語 (イスラエル)

表 40-7 北アフリカ

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
ar_EG.UTF-8	英語	エジプト	UTF-8	アラビア語 (エジプト)
Ar	英語	エジプト	ISO8859-6	アラビア語 (エジプト)

表 40-8 北アメリカ

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
en_CA.ISO8859-1	英語	カナダ	ISO8859-1	英語 (カナダ)
en_US.ISO8859-1	英語	USA	ISO8859-1	英語 (U.S.A.)
en_US.ISO8859-15	英語	USA	ISO8859-15	英語 (U.S.A., ISO8859-15 - Euro)
en_US.UTF-8	英語	USA	UTF-8	英語 (U.S.A., Unicode 3.1)
fr_CA.ISO8859-1	フランス語	カナダ	ISO8859-1	フランス語 (カナダ)
es_MX.ISO8859-1	スペイン語	メキシコ	ISO8859-1	スペイン語 (メキシコ)

表 40-9 北ヨーロッパ

ロケール	ユーザーインターフェース	地域	コードセット	言語サポート
da_DK.ISO8859-1	英語	デンマーク	ISO8859-1	デンマーク語 (デンマーク)

表 40-9 北ヨーロッパ (続き)

ロケール	ユーザーインタ フェース	地域	コードセット	言語サポート
da_DK.ISO8859-15	英語	デンマーク	ISO8859-15	デンマーク語 (デンマーク、 ISO8859-15-Euro)
fi_FI.ISO8859-1	英語	フィンランド	ISO8859-1	フィンランド語 (Unicode 3.1)
fi_FI.ISO8859-15	英語	フィンランド	ISO8859-15	フィンランド語 (フィンラン ド、ISO8859-15-Euro)
fi_FI.UTF-8	英語	フィンランド	UTF-8	フィンランド語 (フィンラン ド)
is_IS.ISO8859-1	英語	アイスランド	ISO8859-1	アイスランド語 (アイスラン ド)
no_NO.ISO8859-1@bokmal	英語	ノルウェー	ISO8859-1	ノルウェー語 (ノルウェー - ブークモール語)
no_NO.ISO8859-1@nyorsk	英語	ノルウェー	ISO8859-1	ノルウェー語 (ノルウェー - ニーノシク語)
sv_SE.ISO8859-1	スウェーデ ン語	スウェーデン	ISO8859-1	スウェーデン語 (スウェーデ ン)
sv_SE.ISO8859-15	スウェーデ ン語	スウェーデン	ISO8859-15	スウェーデン語 (スウェーデ ン、ISO8859-15-Euro)
sv_SE.UTF-8	スウェーデ ン語	スウェーデン	UTF-8	スウェーデン語 (スウェーデ ン、Unicode 3.1)

表 40-10 南アメリカ

ロケール	ユーザーインタ フェース	地域	コードセット	言語サポート
es_AR.ISO8859-1	スペイン語	アルゼンチン	ISO8859-1	スペイン語 (アルゼンチン)
es_BO.ISO8859-1	スペイン語	ボリビア	ISO8859-1	スペイン語 (ボリビア)
es_CL.ISO8859-1	スペイン語	チリ	ISO8859-1	スペイン語 (チリ)
es_CO.ISO8859-1	スペイン語	コロンビア	ISO8859-1	スペイン語 (コロンビア)
es_EC.ISO8859-1	スペイン語	エクアドル	ISO8859-1	スペイン語 (エクアドル)
es_PE.ISO8859-1	スペイン語	ペルー	ISO8859-1	スペイン語 (ペルー)
es_PY.ISO8859-1	スペイン語	パラグアイ	ISO8859-1	スペイン語 (パラグアイ)
es_UY.ISO8859-1	スペイン語	ウルグアイ	ISO8859-1	スペイン語 (ウルグアイ)
es_VE.ISO8859-1	スペイン語	ベネズエラ	ISO8859-1	スペイン語 (ベネズエラ)

表 40-10 南アメリカ (続き)

ロケール	ユーザーインタ フェース	地域	コードセット	言語サポート
pt_BR.ISO8859-1	英語	ブラジル	ISO8859-1	ポルトガル語 (ブラジル)
pt_BR.UTF-8	英語	ブラジル	UTF-8	ポルトガル語 (ブラジル、 Unicode 3.1)

表 40-11 南ヨーロッパ

ロケール	ユーザーインタ フェース	地域	コードセット	言語サポート
ca_ES.ISO8859-1	英語	スペイン	ISO8859-1	カタロニア語 (スペイン)
ca_ES.ISO8859-15	英語	スペイン	ISO8859-15	カタロニア語 (スペイン、 ISO8859-15 - Euro)
el_GR.ISO8859-7	英語	ギリシャ	ISO8859-7	ギリシャ語 (ギリシャ)
es_ES.ISO8859-1	スペイン語	スペイン	ISO8859-1	スペイン語 (スペイン)
es_ES.ISO8859-15	スペイン語	スペイン	ISO8859-15	スペイン語 (スペイン、ISO- 8859-15 - Euro)
es_ES.UTF-8	スペイン語	スペイン	UTF-8	スペイン語 (スペイン、 Unicode 3.1)
it_IT.ISO8859-1	イタリア語	イタリア	ISO8859-1	イタリア語 (イタリア)
it_IT.ISO8859-15	イタリア語	イタリア	ISO8859-15	イタリア語 (イタリア、 ISO8859-15 - Euro)
it_IT.UTF-8	イタリア語	イタリア	UTF-8	イタリア語 (イタリア、 Unicode 3.1)
pt_PT.ISO8859-1	英語	ポルトガル	ISO8859-1	ポルトガル語 (ポルトガル)
pt_PT.ISO8859-15	英語	ポルトガル	ISO8859-15	ポルトガル語 (ポルトガル、 ISO8859-15 - Euro)

表 40-12 西ヨーロッパ

ロケール	ユーザーイン タフェース	地域	コードセット	言語サポート
en_GB.ISO8859-1	英語	イギリス	ISO8859-1	英語 (イギリス)
en_IE.ISO8859-1	英語	アイルランド	ISO8859-1	英語 (アイルランド)
fr_BE.ISO8859-1	フランス語	ベルギーのワロン 地域	ISO8859-1	フランス語 (ベルギーのワロ ン地域、Unicode 3.1)

表 40-12 西ヨーロッパ (続き)

ロケール	ユーザーインタフェース	地域	コードセット	言語サポート
fr_BE.UTF-8	フランス語	ベルギーのワロン地域	UTF-8	フランス語 (ベルギーのワロン地域、Unicode 3.1)
fr_FR.ISO8859-1	フランス語	フランス	ISO8859-1	フランス語 (フランス)
fr_FR.UTF-8	フランス語	フランス	UTF-8	フランス語 (フランス、Unicode 3.1)
nl_BE.ISO8859-1	英語	ベルギーのフラマン地域	ISO8859-1	ドイツ語 (ベルギーのフラマン地域)
nl_NL.ISO8859-1	英語	オランダ	ISO8859-1	ドイツ語 (オランダ)

## 付録 A

---

### 問題発生時の解決方法

---

この章では、Solaris 9 ソフトウェアのインストール時に発生する可能性のあるエラーメッセージと一般的な問題の一覧を示し、それぞれの問題の解決方法を示します。まず、次のリストを使用して、インストールプロセスのどこで問題が発生したか確認してください。

- 455 ページの「ネットワークインストールの設定に関する問題」
- 456 ページの「システムのブートに関する問題」
- 464 ページの「Solaris 9 オペレーティング環境の初期インストール時の問題」
- 466 ページの「Solaris 9 オペレーティング環境のアップグレード時の問題」

---

注 - この付録で「ブート可能なメディア」と記載されている場合、これはインストールプログラム (Solaris suninstall プログラム、Solaris Web Start プログラム、またはカスタム JumpStart) の 1 つを意味します。

---

---

### ネットワークインストールの設定に関する問題

Unknown client *host\_name*

原因: `add_install_client` コマンドの *host\_name* 引数は、ネームサービス内のホストでなければならない。

ホスト *host\_name* をネームサービスに追加し、`add_install_client` コマンドを実行し直してください。

---

# システムのブートに関する問題

## メディアからのブート時のエラーメッセージ

le0: No carrier - transceiver cable problem

原因: システムがネットワークに接続されていない。

対処方法: ネットワークに接続されていないシステムの場合は、このメッセージは無視してください。ネットワークに接続されているシステムの場合は、Ethernet が正しく接続されているかどうか確認してください。

The file just loaded does not appear to be executable

原因: ブート用の適切な媒体が見つからない。

対処方法: インストールサーバーからネットワークを介して Solaris 9 をインストールするように正しく設定されているか確認します。たとえば、設定時のシステムのプラットフォームグループの指定が正しいか確認します。

あるいは、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2、Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD、および Solaris 9 LANGUAGES CD のイメージをインストールサーバーにコピーしなかった場合は、インストールサーバー上の Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD がマウントされていて、アクセスできることを確認します。

boot: cannot open /kernel/unix (SPARC システムのみ)

原因: PROM の boot-file の値を明示的に /kernel/unix に指定したときに発生するエラー。

対処方法:

- PROM の boot-file の値を (無指定) に設定変更します。
- diag-switch が off と true に設定されているか確認します。

Can't boot from file/device

原因: インストールメディアがブート可能なメディアを見つけることができません。

対処方法: 次の条件が満たされているか確認します。

- DVD-ROM または CD-ROM ドライブがシステムに適切に取り付けられ、電源が入っている。
- Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD がドライブに挿入されている。
- ディスクに傷や埃が付いていない。



WARNING: clock gained xxx days -- CHECK AND RESET DATE! (SPARC システムのみ)

説明: これは参考情報です。

対処方法: メッセージは無視して、インストールを継続してください。

Not a UFS file system (x86 システムのみ)

原因: Solaris 9 ソフトウェアをインストールしたとき (Solaris suninstall プログラムまたはカスタム JumpStart を使って)、ブートドライブを選択しなかった。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) を使用するか、BIOS を編集してシステムをブートする必要がある。

対処方法:

- Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) をシステムのブートフロッピーディスクドライブ (通常はドライブ A) に挿入します。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) へのアクセスの詳細は、32 ページの「x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) と PXE へのアクセス」を参照してください。
- ブート可能なメディアを使用できない場合、BIOS を編集してブート可能にしてください。詳細は、BIOS のマニュアルを参照してください。

The Solaris Installer could not find a disk that meets the criteria found in the Install documentation. Please see the documentation for more info. (x86 システムのみ)

原因: Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版) からブートしようとした。システムが LBA をサポートしないため、Solaris 9 INSTALLATION CD を使用できない。

対処方法: CD のネットイメージ、DVD、または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) を使用してインストールします。

## メディアからのブート時の一般的な問題

システムがブートしない。

説明: 初めてカスタム JumpStart サーバーを設定する場合、エラーメッセージを返さないブート問題が発生することがあります。システムについての情報およびシステムがどのようにブートするかを調べるには、`-v` オプションを指定してブートコマンドを実行してください。`-v` オプションを使用すると、ブートコマンドは画面に詳しいデバッグ情報を表示します。

---

注 – このフラグを指定しなくてもメッセージは出力されますが、システムのログファイルが出力先となります。詳細は、`syslogd(1M)` を参照してください。

---

対処方法: SPARC システムの場合、`ok` プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
ok boot net -v - install
```

x86 システムの場合、インストールプログラムにより「Select type of installation」が表示されたら、次のコマンドを入力します。

```
b - -v install
```

Toshiba SD-M 1401 DVD-ROM が搭載されたシステムで DVD メディアからのブートが失敗する

使用しているシステムにファームウェアバージョン 1007 の Toshiba SD-M1401 DVD-ROM が搭載されている場合、システムは Solaris 9 DVD からブートできません。

対処方法: 111649-03 以降のパッチを適用して Toshiba SD-M1401 DVD-ROM ドライブのファームウェアを更新します。パッチ 111649-03 は、Solaris 9 Supplement CD に入っています。

ブート後にインストールが失敗する。(x86 システムのみ)

原因: Solaris 9 INSTALLATION CD からインストールする場合、Solaris 9 ルートスライスはディスクの最初の 1024 シリンダ内になければならない。

対処方法: デフォルトブートディスクの BIOS および SCSI ドライバが、LBA (Logical Block Addressing) をサポートしている必要があります。LBA により、1024 シリンダの制限を超えるマシンのブートや、複数の Solaris スライスにまたがるマシンのブートが可能になります。システムが LBA をサポートするかどうかを調べるには、表 2-4 を参照してください。システムが LBA をサポートしない場合、CD ではなく、ネットイメージからブートしてください。

メモリー増設用以外の PC カードを挿入すると、システムがハングまたはパニックを起こす。(x86 システムのみ)

原因: メモリー増設用以外の PC カードは、他のデバイスが使用するのと同じメモリーリソースを使用できません。

対処方法: この問題を解決するには、PC カードのマニュアルを参照してアドレス範囲を確認してください。

ブート前の段階で、Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) が、システムの IDE BIOS プライマリドライブを検出できなかった。(x86 システムのみ)

対処方法:

- 古いドライブを使用している場合、サポートされていないことがあります。ハードウェアのマニュアルを参照してください。
- リボンと電源ケーブルが正しく接続されているか確認します。ハードウェアのマニュアルで確認してください。
- 1 台のドライブだけがコントローラに接続されている場合、ジャンパを設定して、そのドライブをマスタードライブとして指定します。一部のドライブでは、単一マスター用のジャンパ設定が、スレーブといっしょに動作するマスター用のジャンパ設定と異なる場合があります。未使用のコネクタがケーブルの終端にあるときに発生する信号障害を抑制するために、ケーブルの終端にあ

るコネクタにドライブを接続します。

- 2台のドライブがコントローラに接続されている場合、1台目のドライブをマスター(またはスレーブといっしょに動作するマスター)としてジャンパ設定して、2台目のドライブをスレーブとしてジャンパ設定します。
- 1台目のドライブがハードディスクで、2台目のドライブがCD-ROMドライブの場合、ジャンパを設定して、そのドライブをスレーブドライブとして指定します。ドライブがケーブルのどのドライブコネクタに接続されていてもかまいません。
- 単一のコントローラ上の2つのドライブで問題が継続して発生する場合、一度に1つのドライブを接続して、各ドライブの動作を確認します。ドライブをマスターまたは単一マスターとしてジャンパ設定して、IDEリボンケーブルの終端にあるドライブコネクタを使用してドライブを接続します。各ドライブが動作することを確認して、次にドライブをもう一度マスターとスレーブの構成にジャンパ設定します。
- ドライブがディスクドライブの場合、BIOS設定画面を使用して、ドライブタイプ(シリンダ、ヘッド、セクターの数を示す)が正しく構成されていることを確認します。一部のBIOSソフトウェアは、ドライブタイプを自動的に検出する機能を持っています。
- ドライブがCD-ROMドライブの場合、BIOS設定画面を使用して、ドライブタイプをCD-ROMドライブとして構成します(BIOSソフトウェアがこの機能を持っている場合のみ)。
- ほとんどのシステムでは、MS-DOS CD-ROMドライバがインストールされている場合、IDEのCD-ROMドライブはMS-DOSでしか認識されません。別のドライブで試してみてください。

ブート前の段階で、Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版)が、システムのIDEディスクまたはCD-ROMドライブを検出できない。(x86 システムのみ)

対処方法:

- ディスクがBIOSで無効にされている場合は、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) フロッピーディスクを使用して、ハードディスクからブートします。Solaris 9 Device Configuration Assistant へのアクセスの詳細は、32 ページの「x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) と PXE へのアクセス」を参照してください。
- システムがディスクを持っていない場合は、ディスクレスクライアントにします。

システムがプロンプトを出す前にハングする。(x86 システムのみ)

対処方法: サポートされていないハードウェアです。ハードウェアのマニュアルを参照してください。

## ネットワークからのブート時のエラーメッセージ

WARNING: getfile: RPC failed: error 5 (RPC Timed out).

説明: インストールクライアントのブート要求に対して、ネットワーク上の複数のサーバーが応答したときに発生するエラー。インストールクライアントの接続先のブートサーバーが間違っているため、インストールは停止する。次の原因が考えられる。

原因: 1 このインストールクライアントが登録された `/etc/bootparams` ファイルが複数のサーバーに存在する。

対処方法: 1 ネットワーク上の複数のサーバーの `/etc/bootparams` ファイルにインストールクライアントが登録されていないか調べます。複数のサーバーに登録がされている場合は、インストールに使用するインストールサーバー（またはブートサーバー）以外のサーバーの `/etc/bootparams` ファイルから登録を削除します。

原因: 2 複数の `/tftpboot` または `/rplboot` ディレクトリにこのインストールクライアントが登録されている。

対処方法: 2 インストールクライアントが複数のサーバーの `/tftpboot` または `/rplboot` ディレクトリに登録されていないか調べます。複数のサーバーに登録されている場合は、インストールに使用するインストールサーバー（またはブートサーバー）以外のサーバーの `/tftpboot` または `/rplboot` ディレクトリから登録を削除します。

原因: 3 あるサーバーの `/etc/bootparams` ファイルにこのインストールクライアントのエントリがあり、別のサーバーの `/etc/bootparams` ファイルに、以下に示すようにすべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるように記述している。

```
* install_config=profile_server:path
```

このエラーは、NIS または NIS+ の `bootparams` テーブルにこのような行が存在していても発生する。

対処方法: 3 ネームサービスの `bootparams` マップまたはテーブルに `* install_config=` などのワイルドカードを使った登録がある場合は、その登録を削除し、削除したのと同じ行をブートサーバーの `/etc/bootparams` ファイルに追加します。

No network boot server. Unable to install the system. See installation instructions. (SPARC システムのみ)

原因: このエラーは、ネットワークからインストールしようとしているシステムで発生する。このシステムは、適切に設定されていない。

対処方法: ネットワークを介してインストールするようにシステムが適切に設定されているか確認します。123 ページの「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムを追加する」を参照してください。

prom\_panic: Could not mount file system(SPARC システムのみ)

原因: このエラーはネットワークから Solaris 9 をインストールしようとしてブートソフトウェアが次のものを見つけられない場合に発生します。

- Solaris 9 DVD またはインストールサーバー上の Solaris 9 DVD イメージコピー
- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD または インストールサーバー上の Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD イメージコピー

対処方法: インストール用のソフトウェアがマウントされ共有されるように設定してあることを確認します。

- インストールサーバーの DVD-ROM または CD-ROM ドライブから Solaris 9 をインストールする場合は、Solaris 9 DVD または Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD が CD-ROM ドライブに挿入されてマウントされていること、および /etc/dfs/dfstab ファイルで共有されるように設定してあることを確認します。
- インストールサーバーのディスク上にある Solaris 9 DVD イメージまたは Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD イメージのコピーからインストールする場合は、そのコピーのディレクトリパスが /etc/dfs/dfstab ファイル内で共有されていることを確認します。

setup\_install\_server(1M) のマニュアルページを参照してください。

Timeout waiting for ARP/RARP packet... (SPARC システムのみ)

原因: 1 クライアントはネットワークを介してブートしようとしているが、認識してくれるシステムを見つけることができない。

対処方法: 1 システムのホスト名が NIS または NIS+ のネームサービスに登録されていることを確認します。また、ブートサーバーの /etc/nsswitch.conf ファイル内の bootparams の検索順序を確認します。

たとえば、/etc/nsswitch.conf ファイル内にある次の行は、JumpStart または Solaris suninstall プログラムが最初に NIS マップから bootparams 情報を探すことを示しています。ここで情報が見つからない場合、JumpStart プログラムまたは Solaris suninstall プログラムはブートサーバーの /etc/bootparams ファイルを調べます。

```
bootparams: nis files
```

原因: 2 クライアントの Ethernet アドレスが不正である。

対処方法: 2 インストールサーバーの /etc/ethers ファイルに登録されているクライアントの Ethernet アドレスが正しいか調べます。

原因: 3 カスタム JumpStart インストールでは、特定のサーバーをインストールサーバーとして使用するようプラットフォームグループを add\_install\_client コマンドによって指定します。add\_install\_client を使用する際に不正な構成値を使用すると、この問題が発生します。たとえば、インストールしたいマシンが sun4u であるのに誤って sun4m と指定した場合などが考えられます。

対処方法: 3 正しい構成値を使用して `add_install_client` を実行し直します。

`ip: joining multicasts failed on tr0 - will use link layer broadcasts for multicast (x86 システムのみ)`

原因: トークンリングカードを使用してシステムをブートすると、このエラーメッセージが表示される。Ethernet のマルチキャストとトークンリングのマルチキャストの動作は異なる。ドライバはこのエラーメッセージを返して、マルチキャストアドレスが無効なことを知らせる。

対処方法: このエラーメッセージは無視してください。マルチキャストがうまく動作しなければ、IP は代わりにレイヤーブロードキャストを使用し、インストールは失敗しません。

`Requesting Internet address for Ethernet_Address (x86 システムのみ)`

原因: クライアントはネットワークを介してブートしようとしているが、認識してくれるシステムを見つけることができない。

対処方法: システムのホスト名がネームサービスに登録されていることを確認します。システムのホスト名が NIS または NIS+ のネームサービスに登録されているのに、システムがこのエラーメッセージを表示し続ける場合は、リブートしてください。

`RPC: Timed out No bootparams (whoami) server responding; still trying... (x86 システムのみ)`

原因: クライアントはネットワークからブートしようとしているが、インストールサーバー上の `/etc/bootparams` ファイルにエントリを持つシステムを見つけることができない。

対処方法: インストールサーバー上で `add_install_client` を実行します。これにより `/etc/bootparams` ファイルに適切なエントリが追加され、クライアントはネットワークからブートできます。

`Still trying to find a RPL server... (x86 システムのみ)`

原因: システムはネットワークからブートしようとしているが、サーバーではこのシステムをブートするように設定されていない。

対処方法: インストールサーバー上で、インストールするシステム用に `add_install_client` を実行します。 `add_install_client` コマンドは、必要なネットワークブートプログラムを含む `/rplboot` ディレクトリを設定します。

## ネットワークからのブート時の一般的な問題

システムはネットワークを介してブートされるが、指定したインストールサーバー以外のシステムからブートされる。

原因: このクライアントが登録された `/etc/bootparams` エントリと `/etc/ethers` エントリが別のシステム上に存在する。

対処方法: ネームサーバー上で、インストール中のシステムに対する /etc/bootparams エントリを更新します。このエントリは、次の構文に従う必要があります。

```
install_system root=boot_server:path install=install_server:path
```

また、サブネット内で複数のサーバーの bootparams ファイルにインストールクライアントが登録されていないか確認します。

インストールサーバーを設定して、ネットワークを介して Solaris 9 をインストールするようにシステムを構成しても、システムをブートできない。(SPARC システムのみ)

原因: tftpd がインストールサーバー上で動作していない可能性があります。

対処方法: tftpd デーモンがインストールサーバーで実行されていることを確認します。次のコマンドを入力します。

```
# ps -ef | grep tftpd
```

このコマンドを入力しても tftpd デーモンが実行されていることを示す行が表示されない場合は、/etc/inetd.conf ファイルを編集して、次に示す行からコメント文字 (#) を削除します。

```
# tftp dgram udp wait root /usr/sbin/in.tftpd in.tftpd \  
-s /tftpboot
```

この変更を行なった後、システムをリブートしてください。

ネットワークからインストールするため、インストールサーバーを設定してシステムを構成しても、システムをブートできない。(x86 システムのみ)

原因: rpld デーモンがインストールサーバー上で動作していない可能性があります。

対処方法: rpld デーモンがインストールサーバーで実行されていることを確認します。次のコマンドを入力します。

```
# ps -ef | grep rpld
```

このコマンドを入力しても、rpld デーモンが実行されていることを示す行が表示されない場合は、次のコマンドを実行します。

```
# /usr/sbin/rpld
```

この変更の実行後に、システムをリブートしてください。

---

## Solaris 9 オペレーティング環境の初期インストール時の問題

初期インストールが失敗する

対処方法: Solaris のインストールが失敗する場合、インストールを再実行する必要があります。インストールを再実行するには、Solaris 9 DVD、Solaris 9 INSTALLATION CD、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD、またはネットワークを利用してシステムをブートする必要があります。

Solaris ソフトウェアが部分的にインストールされたあとでは、このソフトウェアのインストールを解除することはできません。バックアップからシステムを復元するか、Solaris インストールの処理をもう一度行う必要があります。

```
/cdrom/Solaris_9/SUNWxxx/reloc.cpio: Broken pipe
```

説明: このエラーメッセージはインストールには影響しない。

対処方法: メッセージは無視して、インストールを継続してください。

WARNING: CHANGE DEFAULT BOOT DEVICE (x86 システムのみ)

原因: これは参考情報です。システムの BIOS に設定されているデフォルトブートデバイスが、ブート時に Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) フロッピーディスクを必要とするように設定されている可能性がある。

対処方法: インストールを続けてください。必要なら、Solaris ソフトウェアのインストール後に BIOS に指定したシステムのデフォルトブートデバイスを Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版) を必要としないデバイスに変更してください。

### ▼ x86: IDE ディスクの不良ブロックの検査

IDE ディスクドライブは、Solaris ソフトウェアがサポートするほかのドライブのように、不良ブロックを自動的に無効にしません。IDE ディスク上に Solaris 9 をインストールする前に、ディスクの検査を実行してください。IDE ディスクの検査を行うには、次の手順に従います。

1. シングルユーザーモードでインストールメディアをブートします。

```
# b -s
```

2. **format** プログラムを起動します。

```
# format
```

3. ディスク面の検査をする **IDE** ディスクドライブを指定します。



```
# cxdy
```

```
cx          コントローラ番号
```

```
dy          デバイス番号
```

4. **fdisk** パーティションが必要です。

- Solaris **fdisk** パーティションがすでに存在する場合は、手順 5 に進みます。
- Solaris **fdisk** パーティションが存在しない場合、**fdisk** コマンドを使用してディスク上に Solaris パーティションを作成します。

```
format> fdisk
```

5. 次のコマンドを入力します。

```
format> analyze
```

6. 次のコマンドを入力します。

```
analyze> config
```

ディスク検査の現在の設定が表示されます。

- a. 設定を変更する場合は、次のコマンドを入力します。

```
analyze> setup
```

7. 次のコマンドを入力します。

```
analyze> type_of_surface_analysis
```

```
type_of_surface_analysis      read、write、または compare を指定します。
```

**format** が不良ブロックを発見すると、それらの再マッピングを実行します。

8. 次のコマンドを入力します。

```
analyze> quit
```

9. 再マップするブロックを

- 指定しない場合は、手順 10 に進みます。
- 指定する場合は、次のコマンドを入力します。

```
format> repair
```

10. 次のコマンドを入力します。

```
quit
```

**format** プログラムが終了します。

11. マルチユーザーモードでメディアを再起動する場合は、次のコマンドを入力します。

ok b

---

## Solaris 9 オペレーティング環境のアップグレード時の問題

### アップグレード時のエラーメッセージ

No upgradable disks

原因: /etc/vfstab ファイルのスワップエントリが原因でアップグレードに失敗した。

対処方法: /etc/vfstab ファイルの以下の行をコメントにしてください。

- アップグレードしないディスク上のスワップファイルとスライスを指定している行
- 存在しないスワップファイルを指定している行
- 使用していないスワップスライスを指定している行

usr/bin/bzcat not found

原因: パッチクラスタが必要なために Solaris Live Upgrade が失敗している。

対処方法: Solaris Live Upgrade のインストールでパッチを使用する必要が生じました。 <http://sunsolve.sun.com> でパッチを入手してください。

Upgradable Solaris root devices were found, however, no suitable partitions to hold the Solaris install software were found. Upgrading using the Solaris Installer is not possible. It might be possible to upgrade using the Solaris Operating Environment 1 of 2 CDROM. (x86 システムのみ)

原因: 十分な領域が存在しないため、Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版) をアップグレードできない。

対処方法: アップグレードするには、512 M バイト以上のスワップスライスを作成するか、次のいずれかのアップグレード方法を使用します。

- Solaris 9 DVD の Solaris Web Start プログラムまたはネットインストールイメージ
- Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD (x86 版) の Solaris suninstall プログラム
- カスタム JumpStart

## アップグレード時の一般的な問題

システム上にアップグレード可能なバージョンの Solaris ソフトウェアが存在するにもかかわらず、アップグレードオプションが提供されない。

原因: 1 /var/sadm ディレクトリがシンボリックリンクであるか、別のファイルシステムからマウントされたディレクトリである。

対処方法: 1 /var/sadm ディレクトリをルート (/) または /var ファイルシステムに移動します。

原因: 2 /var/sadm/softinfo/INST\_RELEASE ファイルが存在しない。

対処方法: 2 以下の形式で INST\_RELEASE ファイルを作成します。

```
OS=Solaris
VERSION=x
REV=0
```

x システム上の Solaris ソフトウェアのバージョン

原因: 3 /var/sadm/softinfo に SUNWusr が存在しない。

対処方法: 3 初期インストールを行う必要があります。この Solaris ソフトウェアはアップグレードできません。

md ドライバの停止または初期化に失敗する

対処方法:

- ミラーでなければ、vsftab ファイル内でコメントアウトします。
- ミラーの場合は、ミラーを破棄してインストールし直します。

Solaris インストールプログラムがファイルシステムをマウントできないため、アップグレードに失敗する。

原因: アップグレード中、インストールプログラムは、システムの /etc/vfstab ファイルにリストされているすべてのファイルシステムを、アップグレードしようとしているルートファイルシステムにマウントしようとする。インストールプログラムがファイルシステムをマウントできない場合、失敗して終了する。

システムの /etc/vfstab ファイル内のすべてのファイルシステムがマウントできることを確認します。/etc/vfstab ファイル内のマウントできない、あるいは問題の原因になっている可能性があるファイルシステムは、すべてコメントにします。Solaris suninstall プログラムはアップグレード中、コメントにしたファイルシステムをマウントしません。アップグレードされるソフトウェアを含むシステムベースのファイルシステム (たとえば、/usr) は、コメントにできません。

アップグレードが失敗する

説明: システムにアップグレードに対応できるだけの十分なディスク容量がない。

原因: 第 5 章を参照してディスク容量に問題がないかを確認し、自動配置機能による領域の再配置を行わずに解決できるかどうかを調べます。

ミラー化されたルートのアップグレードに関連する問題

対処方法: Solaris ボリュームマネージャでミラー化されているルートを使用してアップグレードする際に問題が発生する場合は、『Solaris ボリュームマネージャの管理』の「ボリュームマネージャの障害追跡」を参照してください。

## ▼ 問題発生後にアップグレードを継続する方法

アップグレードに失敗し、システムをブートできない場合があります。このような状況は、電源の故障やネットワーク接続の障害などが発生した場合に起こる可能性があります、制御できない場合に発生します。

1. **Solaris 9 DVD、Solaris 9 INSTALLATION CD、Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD、**またはネットワークを利用してシステムをリブートします。

2. インストール用のアップグレードオプションを選択します。

Solaris `suninstall` プログラムは、システムが部分的にアップグレードされているか判断し、アップグレードを継続します。

## Veritas VxVm の実行中に Solaris Live Upgrade を使用してアップグレードするとシステムパニックが発生する

実行中の Veritas VxVM で Solaris Live Upgrade を用いてアップグレードを行う場合、以下の手順でアップグレードを行わないと、リブート時にシステムパニックが発生します。この問題は、パッケージが Solaris の最新のパッケージガイドラインに従っていない場合に発生します。

1. 非アクティブブート環境を作成します。353 ページの「新しいブート環境の作成」を参照してください。
2. 非アクティブブート環境をアップグレードする前に、非アクティブブート環境上の既存の **Veritas** ソフトウェアを無効にする必要があります。

- a. 非アクティブブート環境をマウントします。

```
# lumount inactive_boot_environment_name mount_point
```

次に例を示します。

```
# lumount solaris8 /.alt.12345
```

- b. 次の例のように、**vfstab** 上に存在するディレクトリに移動します。

```
# cd /.alt.12345/etc
```

- c. 次の例のように、非アクティブブート環境の **vfstab** ファイルをコピーします。

```
# cp vfstab vfstab.501
```

- d. 次の例のように、コピーされた **vfstab** 内のすべての **Veritas** ファイルシステムエントリをコメントにします。

```
# sed vfstab.novxfs> vfstab < '/vx\/dsk\/s\/^\/#\/g'
```

各行の最初の文字が # に変わり、その行がコメント行になります。このコメント行は、システムファイルのコメント行とは異なります。

- e. 次の例のように、変更した **vfstab** ファイルをコピーします。

```
# cp vfstab.novxfs vfstab
```

- f. 次の例のように、非アクティブブート環境のシステムファイルがあるディレクトリに移動します。

```
# cd /.alt.12345/etc
```

- g. 次の例のように、非アクティブブート環境のシステムファイルをコピーします。

```
# cp system system.501
```

- h. **drv/vx** を含むすべての **forceload:** エントリをコメントアウトします。

```
# sed '/forceload: drv\/vx\/s\/^\/*/' <system> system.novxfs
```

各行の最初の文字が \* に変わり、その行がコメント行になります。このコメント行は、**vfstab** ファイルのコメント行とは異なります。

- i. 次の例のように、非アクティブブート環境上の **install-db** ファイルがあるディレクトリに移動します。

```
# cd /.alt.12345/etc
```

- j. 次の例のように、**Veritas install-db** ファイルを作成します。

```
# touch vx/reconfig.d/state.d/install-db
```

- k. 非アクティブブート環境のマウントを解除します。

```
# luumount inactive_boot_environment_name mount_point
```

3. 非アクティブブート環境をアップグレードします。第 33 章を参照してください。

4. 非アクティブブート環境をアクティブにします。391 ページの「ブート環境のアクティブ化」を参照してください。

5. システムをシャットダウンします。

```
# init 0
```

6. 非アクティブブート環境をシングルユーザーモードでブートします。

```
OK boot -s
```

vxvm または VXVM を含むメッセージとエラーメッセージがいくつか表示されますが、これらは無視して構いません。非アクティブブート環境がアクティブになります。

7. Veritas をアップグレードします。

- a. 次の例のように、システムから Veritas VRTSvmsa パッケージを削除します。

```
# pkgrm VRTSvmsa
```

- b. Veritas パッケージがあるディレクトリに移動します。

```
# cd /location_of_Veritas_software
```

- c. システムに最新の Veritas パッケージを追加します。

```
#pkgadd -d `pwd` VRTSvxvm VRTSvmsa VRTSvmdoc VRTSvman VRTSvmdv
```

8. 元の **vfstab** とシステムファイルを復元します。

```
# cp /etc/vfstab.original /etc/vfstab
# cp /etc/system.original /etc/system
```

9. システムをリブートします。

```
# init 6
```

## x86: 既存の Service パーティションが存在しないシステムでは、デフォルトで Service パーティションが作成されない

Service パーティションの存在しないシステム上に Solaris 9 オペレーティング環境をインストールすると、インストールプログラムがデフォルトで Service パーティションを作成しない場合があります。Solaris のパーティションとして同じディスクに Service パーティションを作成する場合は、Solaris 9 オペレーティング環境をインストールする前に Service パーティションを再作成する必要があります。

Solaris 8 2/02 オペレーティング環境を Sun LX50 システムにインストールする場合、インストールプログラムが Service パーティションを保持しない可能性があります。Service パーティションを保持するように fdisk ブートパーティションレイアウトを手動で編集しなかった場合、インストールプログラムはインストール時に Service パーティションを削除します。

---

注 – Solaris 8 2/02 オペレーティング環境のインストール時に Service パーティションの保持を明示的に指定しなかった場合、Service パーティションの再作成および Solaris 9 オペレーティング環境へのアップグレードを実行できない可能性があります。

---

Solaris パーティションを含むディスクに Service パーティションを含めたい場合、次のいずれかの方法を選択してください。

- Solaris Web Start インストールプログラムを使用して、Solaris 9 INSTALLATION CD からインストールする場合、次の手順を実行します。

1. ディスクの内容を削除します。
2. インストールする前に、Sun LX50 Diagnostics CD を使用して Service パーティションを作成します。

Service パーティションの作成方法の詳細は、『*Sun LX50 Server User's Manual*』および <http://cobalt-knowledge.sun.com> の Sun LX50 の Knowledge Base を参照してください。

3. Solaris 9 INSTALLATION CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
4. Solaris 9 オペレーティング環境のインストールを開始します。

インストールプログラムが Service パーティションを検出すると、次のメッセージが表示されます。

デフォルトでは、ブートディスクの空いている領域に、x86 Boot パーティションと Solaris パーティションが配置されます。サービス fdisk パーティションが存在する場合は、デフォルトで保持されます。

継続するには次のいずれかを選択してください：

- 1) デフォルトのディスク配置を使用する
- 2) fdisk を実行し、ディスクを手動で編集する
- 3) 終了する

選択してください： [ ]

5. 「1」を入力して、デフォルトのレイアウトを使用します。

インストールプログラムにより、Service パーティションが保持され、x86 ブートパーティションと Solaris パーティションが作成されます。

---

注 – Solaris Web Start インストールプログラムにより、Solaris fdisk パーティションから 10 M バイト分の領域を確保して、x86 ブートパーティションが作成されます。このユーティリティを使用すると、既存の fdisk パーティションの変更を防ぐことができます。このパーティションは、手動で作成しないでください。

---

6. インストールが完了します。

- ネットワークインストールイメージからインストールするか、ネットワーク経由で Solaris 9 DVD からインストールする場合、次の手順を実行します。

1. ディスクの内容を削除します。
2. インストールする前に、Sun LX50 Diagnostics CD を使用して Service パーティションを作成します。

Service パーティションの作成方法の詳細は、『*Sun LX50 Server User's Manual*』および <http://cobalt-knowledge.sun.com> の Sun LX50 の Knowledge Base を参照してください。

3. ネットワークからシステムをブートします。  
「fdisk パーティションのカスタマイズ」画面が表示されます。
  4. 「デフォルト」をクリックし、デフォルトのブートディスクパーティションレイアウトを読み込みます。  
インストールプログラムにより、Service パーティションが保持され、x86 ブートパーティションと Solaris パーティションが作成されます。
- suninstall プログラムを使用して、Solaris 9 Software 1 of 2 CD またはブートサーバー上のネットワークインストールイメージからインストールを実行するには、次の手順を実行します。
1. ディスクの内容を削除します。
  2. インストールする前に、Sun LX50 Diagnostics CD を使用して Service パーティションを作成します。  
Service パーティションの作成方法の詳細は、『*Sun LX50 Server User's Manual*』および <http://cobalt-knowledge.sun.com> の Sun LX50 の Knowledge Base を参照してください。
  3. システムをブートします。  
インストールプログラムにより、Solaris パーティションの作成方法を選択するよう求められます。
  4. 「残りのディスクを使用して Solaris パーティションを配置します」を選択します。  
インストールプログラムにより、Service パーティションが保持され、Solaris パーティションが作成されます。
  5. インストールが完了します。



## 付録 B

---

# リモートからのインストールまたはアップグレード

---

この付録では、DVD-ROM ドライブまたは CD-ROM ドライブが直接接続されていないシステムまたはドメインに、Solaris Web Start を使って Solaris オペレーティング環境をインストールまたはアップグレードする方法について説明します。

---

注 - マルチドメインサーバーに Solaris オペレーティング環境をインストール、またはアップグレードする場合は、インストールプロセスを開始する前に、システムコントローラまたはシステムサービスプロセッサのマニュアルを参照してください。

---

---

## SPARC: Solaris Web Start を使用してリモート DVD-ROM または CD-ROM からインストールまたはアップグレードする

DVD-ROM または CD-ROM ドライブが直接接続されていないシステムまたはドメインサーバーに Solaris オペレーティング環境をインストールしたい場合は、ほかのシステムに接続されたドライブを使用することができます。この場合、両方のシステムが同じサブネット上に接続されている必要があります。インストール手順は次のとおりです。

## ▼ SPARC: リモート DVD-ROM または CD-ROM を使用してインストールまたはアップグレードを行う方法

---

注 - この手順では、システムでボリュームマネージャを実行していると仮定しています。ボリュームマネージャを使用せずにメディアを管理する方法については、『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

この手順では、DVD-ROM または CD-ROM が接続されているリモートシステムをリモートシステムと呼びます。そして、インストールするクライアントをクライアントシステムと呼びます。

1. **Solaris** オペレーティング環境が動作し、かつ **DVD-ROM** ドライブまたは **CD-ROM** ドライブを備えたシステムを特定します。

2. **DVD-ROM** ドライブまたは **CD-ROM** ドライブが存在するリモートシステムで、ドライブに **Solaris 9 DVD** または **Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版)** を挿入します。

ボリュームマネージャによってディスクがマウントされます。

3. リモートシステムで、**add\_install\_client** コマンドが含まれている **DVD** または **CD** のディレクトリに移ります。

- DVD メディアの場合は、次のように入力します。

```
remote system# cd /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_9/Tools
```

- CD メディアの場合は、次のように入力します。

```
remote system# cd /cdrom/cdrom0/s0
```

4. リモートシステムで、クライアントとしてインストールしたいシステムを追加します。

- DVD メディアの場合は、次のように入力します。

```
remote system# ./add_install_client \
client_system_name arch
```

- CD メディアの場合は、次のように入力します。

```
remote system# ./add_install_client -s remote_system_name: \
/cdrom/cdrom0/s0 client_system_name arch
```

*remote\_system\_name* DVD-ROM ドライブまたは CD-ROM ドライブを備えたシステムの名前

<i>client_system_name</i>	インストールしたいマシンの名前
<i>arch</i>	インストールしたいマシンのプラットフォームグループ (例: sun4u) インストールしたいシステム上で、 <code>uname -m</code> コマンドを実行するとプラットフォームグループが表示されます。

5. インストールしたいクライアントシステムをブートします。

```
client system: ok boot net
```

Solaris Web Start インストールが始まります。

6. 必要なら、説明に従ってシステム構成情報を入力します。

- DVD メディアを使用している場合は、画面の説明に従ってインストールを完了します。ここで作業は終了です。
- CD メディアを使用している場合は、マシンがリブートされ、Solaris インストールプログラムが始まります。「ようこそ (Welcome)」画面が表示された後、「ネットワーク接続性」画面で「ネットワークに接続 (Network File System)」を選択します。設定を続けると、「媒体の指定 (Specify Media)」画面が表示されます。手順 7 へ進みます。

7. 「媒体の指定 (Specify Media)」画面で、「次へ (Next)」をクリックします。

「ネットワークファイルシステムのパスの指定 (Specify Network Filesystem Path)」画面が表示され、テキストフィールドにインストールパスが示されます。

```
client_system_ip_address:/cdrom/cdrom0/s0
```

8. DVD または CD がマウントされているリモートシステムで、ディレクトリを / (**root**) に変更します。

```
remote system# cd /
```

9. リモートシステムで、共有されているスライスへのパスがあるかチェックします。

```
remote system# share
```

10. リモートシステムで、手順 9 で見つかったパスを使って **Solaris 9 DVD** または **Solaris 9 INSTALLATION CD** の共有を解除します。パスが 2 つのスライスを指している場合は、両方のスライスを **unshare** します。

```
remote system# unshare absolute_path
```

*absolute\_path*                      share コマンドで表示される絶対パスです。

この例では、スライス 0 と 1 の共有が解除されます。

```
remote system# unshare /cdrom/cdrom0/s0
```

```
remote system# unshare /cdrom/cdrom0/s1
```

11. **Solaris 9 INSTALLATION CD** を取り出します。

```
remote system# eject cdrom
```

12. リモートシステムの CD-ROM ドライブに **Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** を挿入します。
13. リモートシステムで、**Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** をエクスポートします。

```
remote system# share -F nfs -o ro,anon=0 /cdrom/cdrom0/s0
```

14. インストールするクライアントシステムで、「次へ (Next)」をクリックして **Solaris** のインストールを継続します。
15. **Solaris Web Start** が **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** を挿入するようプロンプトを表示したら、手順 9 から手順 14 までを行い、**Solaris 9 SOFTWARE 1 of 2 CD** の共有解除と **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** のエクスポートとインストールを行います。
16. **Solaris Web Start** が **Solaris 9 LANGUAGES CD** を挿入するようプロンプトを表示したら、手順 9 から手順 14 までを行い、**Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD** の共有解除と **Solaris 9 LANGUAGES CD** のエクスポートとインストールを行います。  
Solaris 9 LANGUAGES CD をエクスポートすると、CD-ROM がマウントされているシステム上にインストール画面が表示されます。Solaris 9 LANGUAGES CD をインストールする間は、このインストール画面は無視してください。Solaris 9 LANGUAGES CD のインストールが終了した後で、このインストール画面を閉じてください。

# その他の SVR4 パッケージ要件に関するリファレンス情報

---

この付録は、カスタム JumpStart プログラムや Solaris Live Upgrade を使ってパッケージ (特にサードパーティのパッケージ) のインストールや削除を行うシステム管理者のためのものです。パッケージが SVR4 パッケージ要件に準拠していれば、カスタム JumpStart インストールを非対話的に行うことができます。さらに、動作中の現在のシステムは変更されないため、Solaris Live Upgrade を使ってアップグレードを行うことができます。

---

## パッケージ化要件の概要

以下のドキュメントは、パッケージ化要件の背景を理解する助けになります。

- カスタム JumpStart プログラムや Solaris Live Upgrade が正しく動作するためには、パッケージが SVR4 パッケージ要件に準拠していなければなりません。『*Application Packaging Developer's Guide*』には、パッケージ化要件や用語の定義が記載されています。その中でも特に、「*Advanced Package Creation Techniques*」を参照してください。
- パッケージやユーザー管理ファイルの追加や削除に関する基本的な情報については、『*Solaris のシステム管理 (基本編)*』の「ソフトウェアの管理 (概要)」を参照してください。さらに、該当するマニュアルページも参照してください。
- この付録で参照するコマンドの詳細については、マニュアルページ `dircmp(1)`、`fssnap(1M)`、`ps(1)`、または `truss(1)` を参照してください。

表 C-1 に、Solaris Live Upgrade とカスタム JumpStart プログラムに適用される情報の参照先を示します。

表 C-1 要件情報

インストール方法	要件に関する参照先
Solaris Live Upgrade	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 『Application Packaging Developer's Guide』の SVR4 パッケージ要件</li> <li>■ 478 ページの「カスタム JumpStart プログラムと Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境要件」</li> <li>■ 480 ページの「Solaris Live Upgrade 非アクティブブート環境の要件」</li> </ul>
カスタム JumpStart プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 『Application Packaging Developer's Guide』の SVR4 パッケージ要件</li> <li>■ 478 ページの「カスタム JumpStart プログラムと Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境要件」</li> <li>■ 482 ページの「カスタム JumpStart プログラムのアップグレード要件」</li> </ul>

## カスタム JumpStart プログラムと Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境要件

非アクティブブート環境は、現在稼働中のシステムではなく、オペレーティング環境のコピーです。Live Upgrade やカスタム JumpStart プログラムで使用するパッケージは、次の要件に準拠していなければなりません。

- ユーザー入力なしでカスタム JumpStart インストールまたはアップグレードが可能である。
- 動作中の現在のシステムが変更されない。これは、Solaris Live Upgrade を使用する場合に必要です。

以下のリストに、非アクティブブート環境に適合するための要件を示します。

- オペレーティングシステムのインストールが成功するには、パッケージが非アクティブブート環境の指示子を認識して、それに従う必要があります。

パッケージの pkgmap ファイル (パッケージマップ) には、絶対パスを指定できません。これらのパスが存在する場合、そのファイルは、pkgadd コマンドの -R オプションとの相対パスに書き込まれます。絶対パスと相対 (再配置可能) パスが両方とも指定されているパッケージは、代替ルート (/) にもインストールできます。絶対ファイルであれ再配置可能ファイルであれ、その前には \$PKG\_INSTALL\_ROOT が付加されるため、pkgadd によるインストールでは、すべてのパスが正しく解釈されます。

- pkgadd -R オプションを使ってパッケージをインストールしたり、pkgrm -R オプションを使ってパッケージを削除する場合には、パッケージが、動作中のシステムを変更してはなりません。

さらに、pkgadd -R オプションを使ってパッケージをインストールしたり、pkgrm -R オプションを使ってパッケージを削除する場合には、パッケージに同梱のスク립トで、動作中のシステムを変更してはなりません。インストールスク립トを作成する場合には、そのスク립トで、\$PKG\_INSTALL\_ROOT 変数が前に付加されたディレクトリまたはファイルを参照する必要があります。パッケージでは、書き込むすべてのディレクトリやファイルの前に \$PKG\_INSTALL\_ROOT を付加する必要があります。さらに、パッケージでは、\$PKG\_INSTALL\_ROOT 接頭辞を付加せずにディレクトリを削除すべきではありません。表 C-2 に、スク립トの正しい構文を示します。

表 C-2 インストールスク립ト構文の例

スク립トタイプ	正しい構文	正しくない構文
Bourne シェル「if」ステートメントの一部	<pre>if [ -f \${PKG_INSTALL_ROOT}\ /etc/myproduct.conf ] ; then</pre>	<pre>if[ -f /etc/myproduct.conf ] ; \ then</pre>
ファイルの削除	<pre>/bin/rm -f \${PKG_INSTALL_ROOT}\ /etc/myproduct.conf</pre>	<pre>/bin/rm -f /etc/myproduct.conf</pre>
ファイルの変更	<pre>echo "test=no"&gt; \${PKG_INSTALL_ROOT}\ /etc/myproduct.conf</pre>	<pre>echo "test=no"&gt; \ /etc/myproduct.conf</pre>

## \$PKG\_INSTALL\_ROOT と \$BASEDIR の相違点の概要

\$PKG\_INSTALL\_ROOT は、パッケージを追加しようとするマシンのルート (/) ファイルシステムの場所です。この値は、pkgadd コマンドの -R 引数の後にセットされます。たとえば、次のコマンドを実行すると、パッケージのインストール時に \$PKG\_INSTALL\_ROOT の値は /a になります。

```
# pkgadd -R /a SUNWvxvm
```

\$BASEDIR は、再配置可能なパッケージオブジェクトがインストールされる「再配置可能」なベースディレクトリを指しています。ここにインストールされるのは、再配置可能オブジェクトだけです。再配置可能でないオブジェクト (pkgmap ファイルに「絶対」パスが指定されているオブジェクト) は、非アクティブブート環境の相対パスにインストールされます。\$BASEDIR との相対パスにはインストールされません。再配置可能なオブジェクトがないパッケージは、絶対パッケージ (非再配置可能) と呼ばれます。その場合、\$BASEDIR は未定義であるため、これをパッケージに添付されているスク립トで使用することはできません。

たとえば、パッケージの `pkgmap` ファイルに次のエントリがあるとします。

```
1 f none sbin/ls 0555 root sys 3541 12322 1002918510
1 f none /sbin/ls2 0555 root sys 3541 12322 2342423332
```

さらに、`pkginfo` ファイルには、`$BASEDIR` が次のように指定されているとします。

```
BASEDIR=/opt
```

このパッケージを次のコマンドでインストールすると、`ls` は、`/a/opt/sbin/ls` としてインストールされますが、`ls2` は、`/a/sbin/ls2` としてインストールされます。

```
# pkgadd -R /a SUNWtest
```

---

## Solaris Live Upgrade 非アクティブブート環境の要件

Solaris Live Upgrade を使用したり、新しいブート環境を作成する場合には、次の項目に従って問題の発生を防止してください。

- パッケージに添付されているスクリプトは、アクティブなオペレーティング環境から独立していなければなりません。パッケージに添付されているスクリプトには、パッケージのインストールや削除を行う際に特定の時点で行うアクションを定義します。事前に決められたプロシージャ名で作成できるスクリプトが4つあります (`preinstall`、`postinstall`、`preremove`、`postremove`)。これらのスクリプトは、現在のアクティブなオペレーティング環境から独立していなければなりません。これは、非アクティブブート環境が Solaris Live Upgrade によって切り替えられることがあり得るからです。
- これらのスクリプトはプロセスの開始や停止を行ったり、`ps` や `truss` などのコマンドの出力に依存してはなりません。`ps` や `truss` はオペレーティングシステムに依存し、動作中のシステムに関する情報を報告します。
- これらのスクリプトでは、`expr`、`cp`、`ls` などの標準的な UNIX コマンドや、シェルスクリプトの作成を容易にするその他のコマンドを自由に使用できます。ただし、非アクティブブート環境を変更する場合には、478 ページの「カスタム JumpStart プログラムと Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境要件」に述べる規則に従ってください。
- すべてのスクリプトは Bourne シェル (`/bin/sh`) で書き込む必要があります。`pkgadd` コマンドは、スクリプトの実行時にインタプリタとして Bourne シェルを使用します。
- パッケージに添付されているスクリプトでは、2.6 以降のリリースで追加されたコマンドを呼び出すことはできません。たとえば、スクリプトで `pgrep` コマンドを呼び出すことはできません。2.6 以降、多くのコマンドに新しい機能が追加





```
# TEMPDIR=/a; export TEMPDIR
# truss -t open /usr/sbin/pkgadd -R ${TEMPDIR} SUNWvsvm \
2>&1> /dev/null | grep -v O_RDONLY | grep -v \
'open("${TEMPDIR}
```

このセクションで示したコマンドの詳細は、`dircmp(1)`、`fssnap(1M)`、`ps(1)`、`truss(1)`、`pkgadd(1M)`、`pkgchk(1M)`、または `pkgrm(1M)` のマニュアルページを参照してください。

---

## カスタム JumpStart プログラムのアップグレード要件

パッケージがカスタム JumpStart プログラムの要件に準拠していれば、次に示す従来の Solaris インストールユーティリティを使ってパッケージの追加や削除を行うことができます。

- カスタム JumpStart プログラム
- Solaris `suninstall` プログラム
- Solaris Web Start インストール

さらに、カスタム JumpStart プログラムの要件に準拠したパッケージは Solaris アップグレードに入れることができます。カスタム JumpStart プログラムに準拠するには、パッケージは478 ページの「カスタム JumpStart プログラムと Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境要件」に説明されている非アクティブブート環境要件にも準拠する必要があります。

処理の途中でユーザー入力を求められないほうが、カスタム JumpStart プログラムを効果的に使用することができます。ユーザーの入力作業をなくすためには、`pkgadd` コマンドの `-a` オプションで使用する新しい管理ファイルを設定する必要があります。`-a` オプションは、デフォルトの管理ファイルの代わりにユーザー定義の管理ファイルを使用することを意味します。デフォルトのファイルを使用すると、情報の入力が必要になることがあります。管理ファイルを作成すれば、`pkgadd` でこのようなチェックを省略し、ユーザーの確認なしでパッケージをインストールすることができます。詳細は、マニュアルページ `admin(4)` または `pkgadd(1M)` を参照してください。

次の例で、`pkgadd` 管理ファイルの使い方を説明します。

- 管理ファイルを指定しないと、`pkgadd` は `/var/sadm/install/admin/default` を使用します。このファイルを使用すると、ユーザーの入力が必要になることがあります。

```
# pkgadd
```

- コマンド行に相対管理ファイルを指定すると、`pkgadd` は `/var/sadm/install/admin` からこのファイル名を探して使用します。この例では相対管理ファイルの名前が `nocheck` であるため、`pkgadd` は

`/var/sadm/install/admin/nocheck` を使用します。

```
# pkgadd -a nocheck
```

- 絶対パスでファイルを指定すると、`pkgadd` はこれを使用します。この例では、`pkgadd` は `/tmp` 内で `nocheck` 管理ファイルを検索します。

```
# pkgadd -a /tmp/nocheck
```

次に示すのは、`pkgadd` ユーティリティでユーザーの入力をほとんど必要としないインストール管理ファイルの例です。パッケージがシステムで利用可能な容量を超えた容量を必要としない限り、`pkgadd` ユーティリティはこのファイルを使用して、ユーザーに情報の入力を求めることなくインストールを実行します。

```
mail=  
instance=overwrite  
partial=nocheck  
runlevel=nocheck  
idepend=nocheck  
space=ask  
setuid=nocheck  
conflict=nocheck  
action=nocheck  
basedir=default
```



# Solaris Update リリースへのアップグレード

---

この付録では、Solaris オペレーティング環境の Update リリースにアップグレードする前にパッチをチェックする手順について説明します。

---

## Solaris Update リリースへのアップグレード

すでに Solaris 9 オペレーティング環境を実行していて、システムに個別のパッチがインストールされている場合、Solaris 9 Update リリースへのアップグレードを行うと、パッチは次のようになります。

- Solaris 9 Update リリースの一部として組み込まれているパッチは自動的に再適用されます。これらのパッチをバックアウトすることはできません。
- システムにすでにインストールされているパッチのうち、Solaris 9 リリースに組み込まれていないパッチは削除されます。

パッチアナライザを使用すれば、Solaris 9 Update リリースにアップグレードしたときに、これらのパッチのうちどれが削除されるかを確認することができます。パッチアナライザは次のような方法で使用できます。

- Solaris Web Start を使用してアップグレードする場合、「パッチの解析 (Patch Analyzer)」画面が表示されます。「はい (Yes)」を選択して解析を実行します。
- Solaris `suninstall` プログラムを使用してアップグレードする場合、「パッチの解析 (Patch Analysis)」画面で「解析 (Analyze)」を選択して解析を実行します。
- カスタム JumpStart インストールまたは Solaris Live Upgrade を使用してアップグレードする場合、`analyze_patches` スクリプトを実行して解析を実行します。詳細は、486 ページの「`analyze_patches` スクリプトを実行する方法」を参照してください。

パッチ解析結果の見方については、487 ページの「パッチアナライザの出力の確認方法」を参照してください。

## ▼ analyze\_patches スクリプトを実行する方法

---

注 – analyze\_patches スクリプトを実行するには、NFS またはローカルにマウントされたメディア上にあるスクリプトを使用して、インストールされた既存のシステム、および Solaris 9 DVD、Solaris 9 SOFTWARE CD、またはネットワーク上のイメージにアクセスする必要があります。

---

### 1. Misc ディレクトリに移動します。

- SPARC: イメージが、ローカルにマウントされた媒体上にある場合は、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/sol_9_Update_sparc/s0/Solaris_9/Misc
```

このコマンドにおいて、*Update* は実際の Update 識別子を表します (例: u1)。

- x86: イメージが、ローカルにマウントされた媒体上にある場合は、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/sol_9_Update_x86/s2/Solaris_9/Misc
```

このコマンドにおいて、*Update* は実際の Update 識別子を表します (例: u1)。

- イメージが NFS ファイルシステムにある場合は、次のように入力します。

```
# cd /NFS_mount_directory/Solaris_9/Misc
```

### 2. analyze\_patches スクリプトを実行します。

```
# ./analyze_patches [-R rootdir] [-N netdir] [-D databasedir]
```

-R *rootdir*                    *rootdir* には、インストールされているシステムのルートを指定します。デフォルトで / に設定されます。

-N *netdir*                    *netdir* は、インストールする OS イメージのルートへのパスです。デフォルトは /cdrom/cdrom0 です。*netdir* は、solaris\_9 ディレクトリを含むディレクトリへのパスです。patch\_analyzer を NFS マウントポイントから実行する場合は、このオプションが必要です。

-D *basedir*

スクリプトを OS イメージの Misc ディレクトリ以外のディレクトリから起動すると、パッチ解析に使用するデータベースを検索できません。したがって、-D オプションでこのデータベースへのパスを指定します。このデータベースがないと、スクリプトは正しく動作しません。このデータベースは、OS イメージの Solaris\_9/Misc/database にあります。

## ▼ パッチアナライザの出力の確認方法

解析を実行したら、次の手順で出力を検査します。

### 1. パッチアナライザの出力を確認します。

パッチアナライザからは、ほかのパッチによって削除、ダウングレード、置き換えられ削除されるパッチのリストが出力されます。パッチの置き換えは、パッチアップグレードと同等のものです。置き換えられるパッチは削除され、新しいパッチによってその修正が適用されます。次のようなメッセージが表示されます。

```
Patch 105644-03 will be removed.
```

```
Patch 105925 will be downgraded from -02 to -01.
```

```
Patch 105776-01 will be accumulated/obsoleted by patch 105181-05.
```

パッチアナライザからリストが出力されない場合は、システムにすでにインストールされているパッチに対する処理は何も行われません。

### 2. パッチの置き換えや削除が適切かどうかを判断します。

- 適切な場合は、システムをアップグレードします。
- 適切でない場合は、システムのアップグレードを中止します。

Update リリースでは、アップグレードのかわりに Solaris 9 Maintenance Update リリースを用いて、パッチだけをシステムに適用できます。

---

注 – Solaris 9 Maintenance Update は Web から入手できます。パッチの適用手順については、『Solaris 9 Maintenance Update ご使用にあたって』を参照してください。

---





## 付録 E

---

# x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant またはネットワークからのブート準備 (作業)

---

この付録の内容は次のとおりです。

- 489 ページの「x86: ブートソフトウェアのフロッピーディスクへのコピー」
- 491 ページの「x86: PXE ネットワークブート」

---

## x86: ブートソフトウェアのフロッピーディスクへのコピー

Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は、さまざまなハードウェア構成作業やブート作業を実行するためのプログラムです。Solaris 9 Device Configuration Assistant イメージは、Solaris 9 DVD (x86 版) または Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版) の Tools ディレクトリ内に存在します。次の手順を使用して、ブートイメージを 3.5 インチのフロッピーディスクにコピーしてください。

---

注 - DVD または CD メディアから直接ブートすることも、ネットイメージと PXE を使用してブートすることも可能です。これらのブート方法の詳細は、32 ページの「x86: Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) と PXE へのアクセス」を参照してください。

---

## ▼ x86: ブートソフトウェアをフロッピーディスクにコピーする方法

---

注 - この手順では、システムがボリュームマネージャを実行していると仮定していません。ボリュームマネージャを使用せずにフロッピーディスクおよび他のディスクを管理する方法の詳細は、Solaris 9 System Administrator Collection に含まれている『Solaris のシステム管理 (基本編)』を参照してください。

---

1. フロッピーディスクドライブを持つ x86 システムにスーパーユーザーとしてログインします。
2. DVD-ROM または CD-ROM ドライブを備えたシステムの場合、**Solaris 9 DVD (x86 版)** または **Solaris 9 SOFTWARE 2 of 2 CD (x86 版)** をドライブに挿入します。  
ボリュームマネージャによってディスクがマウントされます。
3. ブートイメージが入っているディレクトリに移動します。
  - DVD メディアの場合は、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/sol_9_x86/s2/Solaris_9/Tools
```
  - CD メディアの場合は、次のように入力します。

```
# cd /cdrom/sol_9_x86/Solaris_9/Tools
```
4. 空のフロッピーディスクまたは上書き可能なディスクをフロッピーディスクドライブに挿入します。
5. ボリュームマネージャに対し、新しいメディアをチェックするように指示します。

```
# volcheck
```
6. フロッピーディスクをフォーマットします。



---

注意 - この手順によって、フロッピーディスク上のすべてのデータは上書きされます。

---

```
# fdformat -d -U
```

7. ファイルをフロッピーディスクにコピーします。

```
# dd if=d1_image of=/vol/dev/aliases/floppy0 bs=36k
```
8. コマンド行で **eject floppy** と入力してから、手動でドライブからフロッピーディスクを取り出します。

---

## x86: PXE ネットワークブート

PXE ネットワークブートは、ダイレクトなネットワークブートです。クライアントシステム上に、ブートメディアがなくても構いません。PXE ネットワークブートは、x86 の PXE 仕様を実装しているデバイスでのみ動作します。システムが PXE ネットワークブートをサポートしているかどうかを判別するには、ハードウェアのマニュアルを参照してください。

Solaris ブートフロッピーディスクは、PXE 機能をサポートしていないシステムでも従来通り利用できます。ブートフロッピーディスクのイメージは、[http://soldc.sun.com/support/drivers/dca\\_diskettes](http://soldc.sun.com/support/drivers/dca_diskettes) から入手できます。

システム BIOS またはネットワークアダプタ BIOS のどちらか一方、またはその両方の BIOS 設定プログラムを使うことによって、クライアントシステム上で PXE ネットワークブートを使用できるようにします。いくつかのシステムでは、他のデバイスからのブートよりも先にネットワークブートが実行されるように、ブートデバイスの優先順位を調整する必要があります。各設定プログラムに関しては、製造業者のマニュアルを参照するか、またはブート中に表示される設定プログラムの指示を参照してください。

PXE 対応ネットワークアダプタの中には、ブート時にしばらく表示されるプロンプトに対して特定のキーを押すと、PXE ブートを実行する機能を持つものがあります。このような PXE 対応ネットワークアダプタは、PXE の設定を変更する必要がないので、通常はディスクドライブからブートを実行するシステムのインストールブートにおいて PXE を使用する場合に適しています。アダプタにこの機能がない場合は、システムのインストール後に行われるリブート時に、BIOS の設定で PXE を使用しないように設定してください。システムがディスクドライブからブートするようになります。

一部の初期バージョンの PXE ファームウェアでは、Solaris システムをブートすることができません。このようなファームウェアを使用する場合、システムがブートサーバーから PXE ネットワークブートストラッププログラムを読み込むことはできませんが、ブートストラップはパケットを転送しません。このような場合は、アダプタの PXE ファームウェアをアップグレードしてください。ファームウェアのアップグレードに関する情報は、アダプタの製造業者の web サイトから入手してください。詳細については、e1x1 (7D) および iprb (7D) のマニュアルページを参照してください。



# Solaris 9 Updates

---

この付録には、Solaris 9 以降この本に加えられた変更点を記述します。

---

## Solaris 9 9/02 リリース

バグの修正がいくつか追加されました。

---

## Solaris 9 12/02 リリース

次に、Solaris 9 12/02 リリースで追加された新機能および本書に加えられた変更点を示します。

- フラッシュのインストール機能を実行する際、利用可能ないくつかの処理およびサンプルが新たに追加されました。
- フラッシュアーカイブの作成に、`flar create` コマンドを使用できます。このコマンドに追加された新しいオプションを使用すると、アーカイブ作成時にアーカイブの内容をより柔軟に定義できます。1 つ以上のファイルやディレクトリを除外できるようになりました。除外されたディレクトリの中から、特定のサブディレクトリやファイルを残すこともできます。この機能は、複製する必要のない大規模なデータファイルを除外する場合に役立ちます。これらのオプションの使用方法については、168 ページの「アーカイブのファイルとディレクトリのカスタマイズ」を参照してください。
- アーカイブに関する情報の分割、マージ、および抽出を行うための新たな処理が追加されました。これらの処理の詳細については、190 ページの「フラッシュアーカイブの管理」を参照してください。

- Solaris インストールプログラムが LDAP Version 2 プロファイルをサポートするようになったため、プロキシ資格レベルを使用してシステムを構成できます。Solaris Web Start または Solaris suninstall プログラムの実行時に、LDAP プロキシのバインド識別名およびプロキシバインドパスワードを指定できます。どのインストール方法を採用する場合でも、sysidcfg ファイル内で proxy\_dn および proxy\_password キーワードを使用することにより、インストール前に LDAP を構成できます。これらのプロファイルを事前に構成する方法については、57 ページの「sysidcfg ファイルによる事前設定」を参照してください。
- Solaris Live Upgrade で使用可能な、次の処理およびサンプルが新たに追加されました。
  - プロファイルの作成
  - プロファイルのテスト
  - プロファイルを使用した、フラッシュアーカイブのアップグレードまたはインストール

詳細は、第 33 章を参照してください。

- 本書に、x86 システムに関連した手順および説明が含まれるようになりました。
- バグの修正がいくつか追加されました。

---

## Solaris 9 4/03 リリース

次に、Solaris 9 4/03 リリースで追加された新機能および本書に加えられた変更点を示します。

- フラッシュインストール機能により今回の Solaris リリースへの新しい機能強化が図られました。
  - フラッシュインストールは、小規模の変更でクローン システムをアップデートできるようになりました。クローン システムを小規模な変更でアップデートしたい場合、元のマスターイメージとアップデート後のマスターイメージとの変更点のみを含む差分アーカイブを作成できます。差分アーカイブを使用してクローンシステムをアップデートする場合、差分アーカイブで指定されたファイルだけが変更されます。インストールは、元のマスターイメージとの一貫性を保持するソフトウェアを含むクローンシステムに限定されます。カスタム JumpStart インストール方法を使用して、クローンシステムに差分アーカイブをインストールします。
  - 特別なスクリプトを利用してマスターやクローンの構成を行ったり、アーカイブの妥当性を検査できるようになりました。これらのスクリプトを使用して、次のタスクを実行できます。
    - クローンシステム上でアプリケーションを構成します。一部の複雑でない構成に対して、カスタム JumpStart スクリプトを使用できます。より複雑な構成の場合、マスターシステム上で、またはインストールの前か後にクローンシステム上で、特別な構成ファイル処理が必要な場合があります。また、

ローカルのプリインストールスクリプトおよびポストインストールスクリプトをクローンに配置して、フラッシュインストールによりローカルのカスタマイズが上書きされるのを防ぐこともできます。

- 複製不可のホスト依存データを識別して、フラッシュアーカイブをホスト非依存にできます。ホスト非依存にするには、この種のデータを変更するか、アーカイブから除外します。ホスト依存データの例は、ログファイルです。
  - 作成時に、アーカイブ内でソフトウェアの整合性を確認します。
  - クローンシステム上でインストールを検証します。
- Solaris 9 4/03 オペレーティング環境では、Solaris Web Start および `suninstall` インストールプログラムは、新しいデフォルトブートディスクパーティションレイアウトを使用して、x86 システム上の Service パーティションに対応します。システムに Service パーティションが含まれる場合、新しいデフォルトブートディスクパーティションレイアウトを使用して、このパーティションを保持できます。
- 詳細については、31 ページの「x86: デフォルトブートディスクパーティションレイアウトの変更」を参照してください。
- バグの修正がいくつか追加されました。





## 用語集

---

<b>begin</b> スクリプト	ユーザーが定義する Bourne シェルスクリプト。rules ファイル内で指定され、Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされる前に作業を実行する。このスクリプトは、カスタム JumpStart インストールでのみ使用できる。
<b>DHCP</b>	動的ホスト構成プロトコルは、アプリケーション層プロトコルであり、TCP/IP ネットワーク上の個々のコンピュータつまりクライアントが、中央管理を行なっている指定の DHCP サーバーから IP アドレスなどのネットワーク構成情報を抽出できるようにする。この機能は、大規模な IP ネットワークの保持、管理によるオーバーヘッドを削減する。
<b>disc</b>	磁気ディスク (disk) に対する光学式ディスク。CD (コンパクトディスク) 業界では共通の綴りを使用する。たとえば、CD-ROM や DVD-ROM は光学式ディスク。
<b>EISA</b>	拡張 ISA (Extended Industry Standard Architecture)。x86 ベースシステムで使用されるバスの 1 つ。EISA バス標準は、ISA バスシステムよりも「洗練された」規格と言える。取り付けられたデバイスが、システムに付属の「EISA コンフィギュレータ」プログラムを使用して構成されている場合、デバイスは自動的に検出される。「ISA」も参照。
<b>/etc</b>	重要なシステム構成ファイルや保守コマンドが収められているディレクトリ
<b>/export</b>	OS サーバー上のファイルシステムで、ネットワーク上のほかのシステムと共有される。たとえば、/export ファイルシステムには、ディスクレスクライアント用のルートファイルシステムとスワップ、それにネットワーク上のユーザーのホームディレクトリを収めることができる。ディスクレスクライアントは、起動と実行のために OS サーバー上の /export ファイルシステムに依存する。
<b>fdisk</b> パーティション	x86 ベースのシステム上にある特定のオペレーティングシステム専用のディスクドライブの論理パーティション。Solaris ソフトウェアをインストールするには、x86 システム上に 1 つ以上の Solaris 9 fdisk

パーティションを設定する必要がある。x86 ベースのシステムでは、1 台のディスクに最大 4 つの fdisk パーティションを作成できる。これらのパーティションは、個別のオペレーティングシステムをインストールして使用できる。各オペレーティングシステムは、独自の fdisk パーティション上に存在しなければならない。システムが所有できる Solaris fdisk パーティションの数は、1 台のディスクにつき 1 つに限られる。

**finish** スクリプト

ユーザーが定義する Bourne シェルスクリプト。rules ファイル内で指定され、Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされてから、システムがリブートされるまでの間に作業を実行する。このスクリプトは、カスタム JumpStart インストールで使用する。

**HTTP**

(Hypertext Transfer Protocol の略) リモートホストからハイパーテキストオブジェクトをフェッチするインターネットプロトコル。このプロトコルは TCP/IP にもとづいている。

**IPv6**

IPv6 は、現在のバージョン IPv4 (バージョン 4) から拡張されたインターネットプロトコル (IP) のバージョン (バージョン 6) である。定められた移行方法を使用して IPv6 を採用すると、現在の運用を中断する必要はない。また、IPv6 には、新しいインターネット機能用のプラットフォームも用意されている。

IPv6 の詳細は、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の「IPv6 (概要)」を参照。

**IP アドレス**

インターネットプロトコル (Internet Protocol, IP) アドレス。TCP/IP では、ネットワーク上の個々のホストを識別する 32 ビットの一意の数値。IP アドレスは、4 つの数をピリオドで区切った形式になる (例: 192.9.9.1)。通常、IP アドレスの各部分は 0~255 の番号であるが、最初の番号は 224 未満とし、最後の番号は 0 以外にする必要がある。

IP アドレスは論理的には、ネットワーク (市外局番のようなもの) とネットワーク上のシステム (電話番号のようなもの) の 2 つの部分に分割される。たとえば、クラス A の IP アドレスは「network.local.local.local」となり、クラス C の IP アドレスは「network.network.network.local」となる。

クラス	範囲 (xxx は 0 から 255 までの数字)	使用できる IP アドレス数
クラス A	1.xxx.xxx.xxx - 126.xxx.xxx.xxx	1,600 万以上
クラス B	128.0.xxx.xxx - 191.255.xxx.xxx	65,000 以上
クラス C	192.0.0.xxx - 223.255.255.xxx	256

<b>ISA</b>	Industry Standard Architecture の略。x86 システムのバスタイプの 1 つ。ISA バスシステムは「ダム (dumb)」タイプで、システムがデバイスを自動的に検出して構成できるようなメカニズムは提供していない。「EISA」も参照。
<b>JumpStart インストール</b>	インストール方法の 1 つ。出荷時にインストールされている JumpStart ソフトウェアを使用することによって、Solaris ソフトウェアをシステムに自動インストールできる。
<b>JumpStart ディレクトリ</b>	カスタム JumpStart インストールの実行に必要なファイルが含まれているディレクトリ。プロファイルフロッピーディスクを使用してインストールする場合は、フロッピーディスク上のルートディレクトリが JumpStart ディレクトリとなる。カスタム JumpStart インストール用にプロファイルサーバーを使用する場合、必要なカスタム JumpStart ファイルをすべて格納するサーバー上のディレクトリが JumpStart ディレクトリとなる。
<b>Kerberos</b>	強力な秘密鍵暗号方式を使用して、クライアントとサーバーが、セキュリティ保護されていないネットワーク接続で相互を認識できるようにするネットワーク認証プロトコル。
<b>LDAP</b>	Lightweight Directory Access Protocol。LDAP ネームサービスクライアントとサーバー間の通信に使用される標準の拡張可能なディレクトリアクセスプロトコル。
<b>NIS</b>	SunOS™ 4.0 (以上) のネットワーク情報サービス。ネットワーク上のシステムとユーザーに関する重要な情報が収められている分散型ネットワークデータベース。NIS データベースは、マスターサーバーとすべてのスレーブサーバーに格納されている。
<b>NIS+</b>	SunOS 5.0 (以上) のネットワーク情報サービス。NIS+ は、SunOS 4.0 (以上) のネットワーク情報サービスである NIS に代わるもの。
<b>/opt</b>	Sun 以外のソフトウェア製品や別製品のソフトウェア用のマウントポイントが収められているファイルシステム。
<b>OS サーバー</b>	ネットワーク上のシステムにサービスを提供するシステム。ディスクレスクライアントにサービスを提供するには、OS サーバーは、各ディスクレスクライアントごとに、ルートファイルシステムとスワップ領域 (/export/root、/export/swap) 用のディスク空間が必要である。
<b>rules.ok ファイル</b>	rules ファイルから生成されたファイル。カスタム JumpStart インストールソフトウェアは、rules.ok ファイルを使ってシステムとプロファイルを照合する。check スクリプトを使用して rules.ok ファイルを作成しなくてはならない。
<b>rules ファイル</b>	自動的にインストールしたいシステムの各グループまたは単一のシステムのルールを含んでいるテキストファイル。各ルールは 1 つ以上のシステム属性に基づいてシステムグループを識別する。rules ファイルは、各グループをプロファイルにリンクする。Solaris 9 ソフトウェアをどのようにしてグループ内の個々のシステムにインストール

	するかを定めたテキストファイル。ルールファイルは、カスタム JumpStart インストールで使用される。「プロファイル」も参照。
<b>Solaris 9 DVD または CD イメージ</b>	システムにインストールされる Solaris 9 ソフトウェア。Solaris 9 DVD や CD、または Solaris 9 DVD や CD イメージからコピーしたインストールサーバーのハードディスク上から利用できる。
<b>Solaris 9 suninstall プログラム</b>	システムを設定し、そのシステムに Solaris 9 ソフトウェアをインストールするために使用できるコマンド行インタフェース (CLI) で、メニューから選択可能な対話式のスクリプト。
<b>Solaris Live Upgrade</b>	アクティブブート環境が稼動している間に複製ブート環境のアップグレードを行うことにより、稼動中の環境のダウンタイムをなくすことを可能にするアップグレード方法。
<b>Solaris Web Start</b>	グラフィカルユーザーインタフェース (GUI) とコマンド行インタフェース (CLI) を備えたインストールプログラム。Solaris 9 ソフトウェアやサン以外のソフトウェアをインストールする方法が、ウィザードに手順ごとに示される。
<b>sysidcfg</b> ファイル	システムを事前設定する特殊な一連のシステム構成キーワードを指定するファイル。
<b>/usr</b>	スタンドアロンシステムまたはサーバー上のファイルシステム。標準 UNIX プログラムの多くが格納されている。ローカルコピーを保持する代わりに、大きな /usr ファイルシステムをサーバーと共有することにより、システム上で Solaris 9 ソフトウェアをインストールおよび実行するために必要なディスク容量を最小限に抑えることができる。
<b>/var</b>	システムの存続期間にわたって変更または増大が予想されるシステムファイルが格納されている (スタンドアロンシステム上の) ファイルシステムまたはディレクトリ。これらのファイルには、システムログ、vi ファイル、メールファイル、uucp ファイルなどがある。
<b>アーカイブ</b>	マスターシステムからコピーされたファイルの集合体。このファイルには、アーカイブの名前や作成した日付など、アーカイブの識別情報が含まれている。アーカイブをシステムにインストールすると、システムはマスターシステムとまったく同じ構成になる。  更新前のマスターイメージと更新されたマスターイメージの相違部分のみを含むフラッシュアーカイブを、差分アーカイブとして使用することも可能。差分アーカイブには、クローンシステムで保持、変更、または削除するファイルが含まれる。差分更新により、指定されたファイルだけが更新される。また、差分更新を使用可能なシステムは、更新前のマスターイメージとの整合性を保持するソフトウェアを含むシステムのみに限定される。
<b>アップグレード</b>	ファイルを既存のファイルとマージし、可能な場合には変更を保存するインストール。

Solaris オペレーティング環境のアップグレードでは、Solaris オペレーティング環境の新しいバージョンがシステムのディスク上の既存のファイルにマージされる。アップグレードでは、既存の Solaris オペレーティング環境に対して行なった変更は可能な限り保存される。

アップグレードオプション

Solaris Web Start プログラムと Solaris suninstall プログラムによって提示されるオプション。アップグレード時には、新しいバージョンの Solaris とディスク上の既存のファイルが結合される。前回 Solaris をインストールしてから加えられたローカルの変更内容は、できる限り残される。

インストールサーバー

インストール用に、Solaris 9 DVD または CD イメージをネットワーク上の他のシステムに提供するサーバー(「メディアサーバー」とも呼ばれる)。Solaris 9 DVD または CD イメージをサーバーのハードディスクにコピーすることによってインストールサーバーを作成できる。

エンドユーザーシステムサポート

コアシステムサポートソフトウェアグループのほかに、エンドユーザーに推奨するソフトウェアが収められているソフトウェアグループ。これには共通デスクトップ環境 (CDE) や DeskSet ソフトウェアが含まれる。

開発者システムサポート

エンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループのほかに、ソフトウェア開発用ライブラリ、インクルードファイル、マニュアルページ、およびプログラミングツールが収められているソフトウェアグループ

カスタム JumpStart

ユーザーが定義するプロファイルに基づいて、Solaris 9 ソフトウェアをシステムに自動的にインストールする方法。ユーザーやシステムの種類ごとに、カスタマイズされたプロファイルを作成できる。カスタム JumpStart インストールは、ユーザーが作成する JumpStart インストールである。

カスタムプロンプトファイル

rules ファイルと同じ JumpStart ディレクトリに存在しなければならないファイルで、プロンプトと比較という 2 つのタイプの関数を含む Bourne シェルスクリプト。プロンプト関数は作業を実行して、必要な情報を収集したり、定義に対応した SI\_ 環境変数を設定する。プロンプト関数は、プロンプトキーワードになる。比較関数は、対応するプロンプト関数を呼び出してプロンプト関数の出力を比較し、キーワードが一致する場合は 0、キーワードが一致しない場合は 1 を返す。比較関数はルールキーワードになる。「rules ファイル」を参照。

共有可能ファイルシステム

/export/home や /swap のようなユーザー定義のファイルシステム。Solaris Live Upgrade の使用時に、アクティブブート環境と非アクティブブート環境によって共有される。共有可能ファイルシステムは、アクティブブート環境の vfstab 内と非アクティブブート環境の vfstab 内に同じマウントポイントを持つ。このため、アクティブブート環境内の共有ファイルを更新すると、非アクティブブート環境のデータも更新される。共有可能ファイルシステムはデフォルトで共

	有されるが、ユーザーが宛先スライスを指定することもできる。この場合、そのファイルシステムがコピーされる。
クライアント	通信用のクライアントサーバーモデルでは、計算機能や大容量のメモリーといったサーバーの資源にリモートアクセスするプロセスがクライアントに相当する。
クラスタ	パッケージ (ソフトウェアモジュール) を論理的に集めたもの。Solaris 9 ソフトウェアは 4 つの「ソフトウェアグループ」に分割され、それぞれがクラスタと「パッケージ」から構成されている。
クリティカルファイルシステム	Solaris オペレーティング環境が必要とするファイルシステム。Solaris Live Upgrade を使用するとき、これらのファイルシステムは、アクティブブート環境と非アクティブブート環境それぞれの <code>vfstab</code> では独立したマウントポイントになる。 <code>root (/)</code> 、 <code>/usr</code> 、 <code>/var</code> 、 <code>/opt</code> などがクリティカルファイルシステムの例である。これらのファイルシステムは、必ずソースブート環境から非アクティブブート環境にコピーされる。
クローンシステム	フラッシュアーカイブを使用してインストールされたシステム。クローンシステムは、マスターシステムと同一のインストール構成になる。
コアソフトウェアグループ	システムで Solaris オペレーティング環境を起動して実行するのに必要な最小限のソフトウェアが収められているソフトウェアグループ。これには共通デスクトップ環境 (CDE) を実行するために必要ないくつかのネットワーク用ソフトウェアとドライバが含まれるが、CDE ソフトウェアは含まれない。
更新	システムにインストールを実行して同じタイプのソフトウェアを変更することまたはそのインストール自体。アップグレードとは異なり、更新によりシステムがダウングレードされる場合がある。初期インストールとは異なり、更新を実行するには同じタイプのソフトウェアがあらかじめインストールされていなければならない。
コマンド行	コマンドで始まる文字列。多くの場合、コマンドの後には引数 (オプション、ファイル名、式などの文字列) が続き、行末 (EOL) 文字で終わる。
サブネット	経路指定を簡単にするため、1 つの論理ネットワークを小さな物理ネットワークに分割する方式。
サブネットマスク	サブネットアドレス指定のため、インターネットアドレスからビットを選択するために使用されるビットマスク。マスクは 32 ビット。インターネットアドレスのネットワーク部分と、ローカル部分の 1 個以上のビットを選択する。
サーバー	資源を管理し、クライアントにサービスを提供するネットワークデバイス。
差分アーカイブ	更新前のマスターイメージと更新されたマスターイメージの相違部分のみを含むフラッシュアーカイブ。差分アーカイブには、クローンシ

	<p>システムで保持、変更、または削除するファイルが含まれる。差分更新により、指定されたファイルだけが更新される。また、差分更新を使用可能なシステムは、更新前のマスターイメージとの整合性を保持するソフトウェアを含むシステムのみに限定される。</p>
時間帯	<p>グリニッジ標準時間を基準に地球の表面を 24 の地域に経度分割したものの。</p>
初期インストール	<p>現在実行中のソフトウェアを上書きするか、空のディスクを初期化するインストール。</p> <p>Solaris オペレーティング環境の初期インストールでは、システムのディスクが Solaris オペレーティング環境の新しいバージョンで上書きされる。システム上で Solaris オペレーティング環境が稼動していない場合は、初期インストールを行う必要がある。</p>
初期インストールオプション	<p>Solaris Web Start プログラムおよび Solaris suninstall プログラムの実行時に提示される、新バージョンの Solaris でディスクを上書きするオプション。初期インストールオプションはアップグレード可能なシステムで表示される。初期インストールオプションを選択した場合、旧バージョンの Solaris ソフトウェア (ローカルの変更内容も含めて) が含まれるディスクでも上書きされる。</p>
ジョブ	<p>コンピュータシステムで実行されるユーザー定義の処理。</p>
スタンドアロン	<p>ほかのマシンからのサポートを一切必要としないコンピュータ。</p>
スライス	<p>ソフトウェアごとに分割される、ディスク領域の区分。</p>
スワップ領域	<p>再ロードが可能になるまでメモリー領域の内容を一時的に保持するスライスまたはファイル。/swap または swap ファイルシステムとも呼ばれる。</p>
全体ディストリビューション	<p>Solaris 9 のリリース全体が含まれているソフトウェアグループ。</p>
全体ディストリビューションと OEM サポート	<p>Solaris 9 のリリース全体と、OEM のための追加ハードウェアサポートを含むソフトウェアグループ。Solaris を SPARC 搭載サーバーシステムにインストールする場合は、このソフトウェアグループを推奨する。</p>
ソフトウェアグループ	<p>Solaris ソフトウェアの論理グループ (クラスとパッケージ)。Solaris のインストール時には、コアシステムサポート、エンドユーザーシステムサポート、開発者システムサポート、または全体ディストリビューションをインストールできる。また、SPARC システムのみ、全体ディストリビューションと OEM サポートもインストールできる。</p>
チェックサム	<p>一連のデータ項目を合計した結果。一連のデータ項目を検査するために使用される。データ項目は、数値でも、文字列でもよく、文字列の場合はチェックサム計算時に数値として扱われる。チェックサムの値から、2 つのデバイス間の情報交換が正しく行われたかを確認できる。</p>

ディスク	1 枚以上の磁性体の円盤から成るメディアであり、ファイルなどのデータを格納する同心トラックとセクターで構成される。「disc」も参照。
ディスク構成ファイル	ディスクの構造 (たとえば、バイト/セクター、フラグ、スライス) を表現するファイル。ディスク構成ファイルにより、単一システムから <code>pfinstall</code> を使用して、サイズの異なるディスクのプロファイル进行测试できる。
ディスクレスクライアント	ディスク記憶装置を持たないためサーバーに依存するクライアント。
電源管理システム	<p>システムの状態を自動的に保存し、30 分間アイドル状態が続くと電源を切断するソフトウェア。米国環境保護庁の省電力 (Energy Star) ガイドライン第 2 版に準拠したシステム (sun4u SPARC システムなど) に Solaris ソフトウェアをインストールすると、デフォルトで電源管理ソフトウェアがインストールされる。リブート後、電源管理ソフトウェアを有効にするかどうかを確認するメッセージが表示される。</p> <p>Energy Star ガイドラインでは、システムまたはモニターを使用していない場合は、自動的に「休眠状態」(30 ワット以下の消費) に入ることが要求される。</p>
動的プロファイル	カスタム JumpStart インストール時に、 <code>begin</code> スクリプトによって動的に作成されるプロファイル
ドメイン	インターネットのネーミング階層の一部。ドメインは管理ファイルを共有する、ローカルネットワーク上のシステムグループを表す。
ドメイン名	ローカルネットワーク上のシステムグループに割り当てられた名前であり、管理ファイルを共有する。ネットワーク情報サービス (NIS) のデータベースが正常に動作するためにはドメイン名が必要。ドメイン名は、ピリオドで区切られた一連の構成要素名から構成される (たとえば、 <code>tundra.mpk.ca.us</code> )。ピリオドで区切られた各構成要素名は右側に行くにしたがって、全体的な (リモートな) 管理権限領域を表す。
ネームサーバー	ネットワーク上のシステムに対してネームサービスを提供するサーバー。
ネームサービス	ネットワーク上の全システムに関する重要なシステム情報が収められている分散型ネットワークデータベース。ネットワーク上のシステムは、これを利用して相互通信を行う。ネームサービスを使用することによって、ネットワーク全域にわたるシステム情報を保守、管理、または取得できる。ネームサービスを使用しないと、各システムはローカルの <code>/etc</code> ファイルにシステム情報のコピーを保持しなければならない。Sun では LDAP、NIS、および NIS+ のネームサービスをサポートしている。
ネットワークインストール	CD-ROM または DVD-ROM ドライブがあるシステムから CD-ROM または DVD-ROM ドライブがないシステムにネットワークを介してソフ



	トウェアをインストールする方法。ネットワークインストールを行うには、「ネームサーバー」と「インストールサーバー」が必要。
ネットワークに接続されていないシステム	ネットワークに接続されていない、または他のシステムに依存しないシステム。
ネットワークに接続されているシステム	ハードウェアやソフトウェアを介して接続されているシステムのグループ (ホスト)。通信や情報の共有が可能。ローカルエリアネットワーク (LAN) と呼ばれる。システムをネットワークに接続するには、通常、1 台以上のサーバーが必要。
ハードリンク	ディスク上のファイルを参照するディレクトリエントリ。複数のハードリンクから同じ物理ファイルを参照することができる。
パッケージ	モジュール形式でのインストールを可能にするソフトウェアの集まり。Solaris 9 ソフトウェアは 4 つの「ソフトウェアグループ」に分割され、それぞれがクラスと「パッケージ」から構成されている。
パッチアナライザ	手作業でも、Solaris suninstall プログラムや Solaris Web Start プログラム内でも実行できるスクリプト。パッチアナライザは、システムを解析し、Solaris 9 Update へのアップグレードを行うことで削除されるパッチがどれであるかを判断する。
パネル	ウィンドウ、ダイアログボックス、アプレットの内容を編成するコンテナ。パネルでは、ユーザーの入力をまとめて受け取り確認することができる。ウィザードでパネルを使用することで、正しい順序で操作を行い、目的の作業を完了することができる。
ファイルサーバー	ネットワーク上のシステムに対して、ソフトウェアやファイルの記憶領域を提供するサーバー。
ファイルシステム	SunOS™ オペレーティングシステムでは、ユーザーがアクセスできるファイルおよびディレクトリから成るツリー構造のネットワークのこと。
ファンクションキー	F1、F2、F3 などの名前が付いた 10 個以上のキーボードキー。これらのキーにはそれぞれ特定の機能が割り当てられている。
ブート	メモリーにシステムソフトウェアを読み込んで起動すること。
ブート環境	Solaris オペレーティング環境を操作する上で重要な必須ファイルシステム (ディスクスライスおよびマウントポイント) の集まり。ディスクスライスは、同じ 1 つのディスク上に存在することも、分散された複数のディスク上に存在することもある。
	アクティブなブート環境とは、現在ブートしている環境を指す。単一のアクティブなブート環境からだけブートできる。アクティブでないブート環境とは、現在ブートしていないが、次のリブート時にアクティブ化できる状態にある環境のことを指す。
ブートサーバー	同じネットワークのサブネット上のクライアントシステムに、起動に必要なプログラムと情報を提供するサーバーシステム。インストールサーバーの存在するサブネットが、Solaris ソフトウェアをインストー

	<p>ルする必要があるシステムと異なる場合、ネットワークを介してインストールするにはブートサーバーが必要。</p>
フォーマット	<p>データを一定の構造にしたり、データを保存できるようにディスクをセクターに分割したりすること。</p>
フォールバック	<p>以前に動作していた環境に戻すこと。ブート環境のアクティブ化の処理中や、ブート対象として指定されたブート環境に問題または望ましくない動作が発生する場合にはフォールバックを行う。</p>
フラッシュ	<p>マスターシステムと呼ぶシステムからファイルのアーカイブを作成する Solaris インストール機能。このアーカイブを使ってほかのシステムのインストールを行うと、そのシステムの構成はマスターシステムと同じになる。「アーカイブ」も参照。</p>
プラットフォームグループ	<p>特定のソフトウェア用にベンダーが定義するハードウェアプラットフォームのグループ。たとえば i86pc や sun4c など。</p>
プラットフォーム名	<p>uname -i コマンドによって出力される情報。たとえば Ultra 60 のプラットフォーム名は、SUNW,Ultra-60。</p>
プローブキーワード	<p>インストールにカスタム JumpStart を使用する場合、システムに関する属性情報を抽出する構文要素。プローブキーワードでは、ルールに必要な一致条件の設定およびプロファイルの実行は必要ない。「ルール」も参照。</p>
プロファイル	<p>カスタム JumpStart を使用する場合に、Solaris ソフトウェアのインストール方法を定義するテキストファイル。たとえば、プロファイルでインストールするソフトウェアグループを定義する。各ルールは、そのルールが一致したときにシステムがインストールされる方法を定義してあるプロファイルを指定する。通常は、ルールごとに異なるプロファイルを作成するが、複数のルールで同じプロファイルを使用することも可能。「rules ファイル」を参照。</p>
プロファイルサーバー	<p>すべての重要なカスタム JumpStart ファイルを JumpStart ディレクトリに持つサーバー。</p>
プロファイルフロッピーディスク	<p>すべての重要なカスタム JumpStart ファイルを、そのルートディレクトリ (JumpStart ディレクトリ) に持つフロッピーディスク。</p>
ホスト名	<p>システムがネットワーク上のほかのシステムから識別される名前。この名前は、特定のドメイン (通常、これは1つの組織内にあることを意味する) 内にある全システム間で固有でなければならない。ホスト名は、文字、数字、マイナス符号 (-) を任意に組み合わせて作成できるが、先頭と末尾にマイナス符号は使用できない。</p>
ボリューム	<p>連結、ストライプ化、ミラー化、セットアップ用 RAID5 ボリューム、ロギング用物理デバイスによって単一の論理デバイスとしてアクセスされる物理スライスのグループ。作成されたボリュームは、スライスと同じように使用できる。ボリュームは、1台の物理デバイス上の正しい場所に論理ブロックアドレスをマップする。マップの種類は、個々のボリュームの構成によって決まる。</p>

	標準の UNIX 用語では、擬似デバイスまたは仮想デバイスとも呼ばれる。
ボリュームマネージャ	DVD-ROM、CD-ROM、およびフロッピーディスク上のデータへのアクセスを管理および実行するための手段を提供するプログラム。
メタデバイス	「ボリューム」を参照。
メディアサーバー	「インストールサーバー」を参照。
マウント	マウント要求を行うマシンのディスクまたはネットワーク上のリモートディスクから、ディレクトリにアクセスするプロセス。ファイルシステムをマウントするには、ローカルシステム上のマウントポイントと、マウントするファイルシステム名 (たとえば <code>/usr</code> ) が必要。
マウント解除	マシンに接続されたディスクまたはネットワーク上のリモートディスク上のディレクトリへのアクセスを解除するプロセス。
マウントポイント	リモートマシン上に存在するファイルシステムのマウント先となる、ワークステーション上のディレクトリ。
マスターシステム	フラッシュアーカイブを作成するシステム。このシステム構成がアーカイブに保存される。
マニフェストセクション	クローンシステムの検証に使用される フラッシュアーカイブのセクション。マニフェストセクションには、クローンシステムで保持、追加または削除されるシステム上のファイル一覧が保存される。このセクションは、情報提供専用。このセクションは、ファイル一覧を内部形式で保存するため、スクリプトの記述には使用できない。
ミニルート	起動可能な最小の Solaris ルートファイルシステム。ミニルートには、カーネルと、Solaris 環境をハードディスクにインストールするために必要な最小限のソフトウェアが含まれる。ミニルートは、初期インストールでマシンにコピーされるファイルシステム。
矢印キー	数値キーパッド上にある方向を示す 4 つのキーの 1 つ。
ユーティリティ	コンピュータを購入すると通常無料で提供される、標準プログラム。
/ (ルート)	複数の項目から成る階層構造において、ほかのすべての項目を子孫として持つ唯一の項目を指す。階層内において、ルート項目より上位の項目は存在しない。/ は、直接的または間接的にほかのすべてのディレクトリの元となるベースディレクトリ。ルートディレクトリには、カーネル、デバイスドライバ、システムの起動 (ブート) に使用されるプログラムなど、システムの稼働に不可欠なディレクトリやファイルが含まれている。
ルール	1 つ以上のシステム属性をプロファイルに割り当てる一連の値。ルールは、カスタム JumpStart インストールで使用される。
ロケール	同一の言語、風俗、慣習、文化などを共有する地理上または政治上の地域圏 (コミュニティ)。たとえば、米国英語のロケールは <code>en_US</code> 、英国英語のロケールは <code>en_UK</code> 。



# 索引

---

## 数字・記号

#

rules ファイル内の, 227  
プロファイル内の, 231

## A

add\_install\_client, 説明, 127

add\_install\_client コマンド

JumpStart ディレクトリのアクセス, 220

インストールサーバーの設定

CD メディアによる, 123

DVD メディアを使用する, 92

クロスプラットフォーム CD メディアの  
例, 125

例

DHCP (CD メディア), 125

DHCP による (CD メディア), 125

DHCP を使用する、DVD メディアを使用  
する, 94, 95

同じサブネット (CD メディア), 125

ブートサーバー、DVD メディア, 94

ブートサーバーの (CD メディア), 125

add\_install\_client コマンドの -s オプ  
ション, 285

add\_to\_install\_server, 説明, 127

AND ルールフィールド, 228

any

プローブキーワード

説明と値, 323

ルールキーワード, 287, 323

archive\_location キーワード, 294

arch プローブキーワード, 323

arch ルールキーワード, 287, 323

auto\_install\_sample ディレクトリ

check スクリプト, 240, 263

JumpStart ディレクトリへファイルをコピー  
, 223, 226

set\_root\_pw finish スクリプト, 248, 249

ファイルを JumpStart ディレクトリにコピー  
, 219

## B

backup\_media キーワード, 73, 299

banner コマンド, 128

begin.log ファイル, 244

begin スクリプト

アクセス権, 244

概要, 243

サイト固有のインストールプログラム, 257

動的プロファイルの作成, 244, 245

ルールフィールド, 228

begin ルールフィールドの説明, 228

boot: cannot open /kernel/unix メッセー  
ジ, 457

boot\_device キーワード, 300

bootparams ファイル

JumpStart ディレクトリへのアクセスを有効  
にする, 221

更新, 463

Bourne シェルスクリプト、ルールフィールド  
内の, 228

## C

cannot open /kernel/unix メッセージ, 457  
Can't boot from file/device メッセージ, 457  
CHANGE DEFAULT BOOT DEVICE メッセージ, 464  
check スクリプト  
  custom\_probes.ok ファイルの作成, 263  
  custom\_probes ファイルの妥当性検査, 263, 264  
  rules.ok ファイルの作成, 240  
  rules の妥当性検査, 240  
  rules ファイルの妥当性検査, 264  
  rules ファイルの妥当性検査, 239, 241  
  動的プロファイルと, 245  
  ルールの検査, 264  
check スクリプトの -r オプション, 264  
client\_arch キーワード, 301  
client\_name、説明, 125  
client\_root プロファイルキーワード, 302  
clock gained xxx days メッセージ, 457  
cluster プロファイルキーワード  
  説明と値, 303  
  例, 232  
CPU (プロセッサ)  
  プローブキーワード, 323  
  ルールキーワード, 287, 323  
.cshrc ファイル, 248  
custom\_probes.ok ファイル  
  作成, 263  
custom\_probes.ok ファイル, 作成, 263  
custom\_probes.ok ファイル  
  説明, 263  
custom\_probes ファイル  
  check による妥当性検査, 263  
  check を使用する妥当性検査, 264  
  custom\_probes のテスト, 264  
custom\_probes ファイル  
  名前の指定, 260  
  要件, 260  
-c オプション  
  add\_install\_client コマンド, 124, 284, 285  
  pfinstall コマンド, 238

## D

dd コマンド, 224  
default, partitioning, 317

Developer Solaris Software Group, プロファイルの例, 232  
dfstab ファイル, 218, 281  
DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) の事前設定, 56  
disksize ルールキーワード  
  説明と値, 288, 323  
disks プロブキーワード, 説明と値, 323  
domainname プロブキーワード, 323  
domainname ルールキーワード, 288, 323  
dontuse プロファイルキーワード, 304, 319  
-d オプション, add\_install\_client コマンド, 124

## E

eng\_profile の例, 281  
/etc/bootparams ファイル  
  JumpStart ディレクトリへのアクセスを有効にする, 221, 463  
/etc/dfs/dfstab ファイル, 218, 281  
/etc/locale ファイル, 65  
/etc/mnttab ファイル, 222  
existing partitioning の値, 317  
explicit partitioning の値, 317  
/export ファイルシステム, 40

## F

fdformat コマンド, 490  
fdformat コマンド, 222, 225  
fdisk コマンド, 253  
fdisk パーティション, 要件, 29  
fdisk プロファイルキーワード, 説明と値, 305  
fdisk プロファイルキーワード, 例, 232  
filesys キーワード, 307  
filesys プロファイルキーワード  
  説明と値, 307  
  例, 232  
finish.log ファイル, 245  
finish スクリプト  
  システムの root パスワードを設定する, 248  
  パッケージとパッチの追加, 246  
  ファイルの追加, 246  
  ルート環境のカスタマイズ, 248  
  ルールフィールド, 229  
finish ルールフィールドの説明, 229

flar create コマンド, 202

Flash

フラッシュを参照

## G

geo キーワード, 310

getfile: RPC failed: error 5: RPC Timed out

メッセージ, 221

## H

hostaddress プロープキーワード, 323

hostaddress ルールキーワード, 288, 323

hostname プロープキーワード, 説明と値, 323

hostname ルールキーワード

説明と値, 288, 323

例, 287

## I

IDE インタフェース

表面検査, 464

不良ブロックのマッピング, 464

install\_config コマンド, 221

install\_type キーワード, 311

install\_type プロファイルキーワード

プロファイルのテスト, 237, 239

要件, 231, 232

例, 232

installed プロープキーワード, 説明と値, 323

installed ルールキーワード

説明と値, 289, 323

IPv6 の事前設定, 56

IP アドレス

事前設定, 56

デフォルトルートの事前設定, 56

デフォルトルートの指定, 46, 53

プロープキーワード, 323

ルールキーワード, 288, 323

IRQ レベルの事前設定, 57

isa\_bits キーワード, 312

## J

JumpStart ディレクトリ

finish スクリプトによるファイルの追加, 246

rules ファイルの例, 227

アクセス権, 218, 222

共有, 218, 281

作成, 218, 221, 224, 281

x86 ベースシステム用のフロッピーディスク, 490

フロッピーディスクSPARC ベースシステム用, 222

ファイルのコピー, 246

インストールファイル, 219

ファイルをコピー

インストールファイル, 223, 226

JumpStart ディレクトリの共有, 281

## K

karch プロープキーワード, 323

karch ルールキーワード, 289, 323

Kerberos

構成情報, 45

事前設定, 56

## L

layout\_constraint キーワード, 73, 312

LBA, 30

le0: No carrier - transceiver cable problem

メッセージ, 457

Live Upgrade

Solaris Live Upgradeを参照

Live Upgrade ブート環境を比較する, 406

locale.org\_dir テーブルエントリの追加, 66

locale キーワード, 314

## M

Makefile ファイル, 64

marketing\_profile の例, 282

memsize プロープキーワード, 説明と値, 323

memsize ルールキーワード

説明と値, 289, 323

mnttab ファイル, 222

model プロンプトキーワード, 説明と値, 323  
model ルールキーワード  
説明と値, 290, 323  
modify\_install\_server, 説明, 127  
mount コマンド, 128

## N

netmask の事前設定, 56  
network プロンプトキーワード, 説明と値, 323  
network ルールキーワード  
説明と値, 290, 323  
nistbladm コマンド, 65, 66  
no\_master\_check キーワード, 315  
No carrier - transceiver cable problem メッセージ, 457  
Not a UFS filesystem メッセージ, 457  
num\_clients プロファイルキーワード, 315

## O

osname プロンプトキーワード, 323  
osname ルールキーワード, 290, 323

## P

package プロファイルキーワード, 説明と値, 316  
partitioning  
fdisk パーティション, 232  
fdisk パーティション, 305  
使用しないディスク, 304  
プロファイルキーワード, 316, 319  
ルートスライスの位置, 458  
例, 232  
partitioning キーワード, 316  
pfinstall コマンド, 72, 235  
Preboot Execution Environment (PXE), 32, 491  
probe ルールキーワード, 説明と値, 291  
profiles  
例  
フラッシュ, 234  
prtvtoc コマンド  
x86: ディスク構成ファイルの作成, 254  
SPARC: ディスク構成ファイルの作成, 252

PXE (Preboot Execution Environment), 32, 491  
-p オプション、check スクリプトの, 240, 264

## R

reset コマンド, 128  
root\_device キーワード, 317  
rootdisk  
fileys のスライス値, 308  
JumpStart で設定される値, 318  
定義, 318  
root パスワード, 事前設定, 56  
root パスワードを finish スクリプトで設定する, 248  
RPC failed: error 5: RPC Timed out メッセージ, 221  
RPC Timed out メッセージ, 221, 462  
rule\_keyword ルールフィールド, 228  
rule\_value ルールフィールド, 228  
rules, フィールドの説明, 229  
rules.ok ファイル  
作成, 239, 240  
説明, 239  
ルールの照合順序, 229, 265, 270  
rules ファイル  
check による妥当性検査, 241  
check を使用する妥当性検査  
動的プロファイルと, 245  
check を使った妥当性検査  
カスタム JumpStart の例, 283  
rules の妥当性検査, 240  
カスタム JumpStart の例, 282, 283  
構文, 228  
コメント, 227  
作成, 227  
説明, 227  
名前, 228  
名前の指定, 227  
複数行のルール, 227  
ルールの追加, 228  
例, 227  
-r オプション、check スクリプトの, 240



## S

- Service パーティション, インストール時に保持 (x86 システム), 31
- set\_root\_pw finish スクリプト, 248, 249
- setup\_install\_server, 説明, 127
- setup\_install\_server コマンドの -b オプション, 280
- shareall コマンド, 218, 281
- share コマンド, JumpStart ディレクトリの共有, 281
- showmount コマンド, 128
- SI\_CONFIG\_DIR 変数, 246
- SI\_PROFILE 環境変数, 245
- size
  - fdisk パーティション, 306
  - ローカルファイルシステム, 308
- slices
  - filesystem の値, 307
  - プロンプトキーワード, 323
  - ルールキーワード, 289
- Solaris 9 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (x86 版), アクセス, 32
- Solaris Live Upgrade
  - アップグレード障害の回復, 395
  - アップグレードの作業マップ, 374
  - インストール
    - フラッシュアーカイブ, 385
    - フラッシュアーカイブでプロファイルを使用, 389, 390
    - パッケージ, 351
  - 概要, 328
  - 起動, 352
  - コピー
    - 共有可能なファイルシステム, 369
  - コマンド, 425
  - 作成
    - ブート環境, 353
  - 処理を取り消す, 406
  - 停止, 352
  - ファイルシステムの構成, 355
  - ファイルシステムのスライス, 356
  - ファイルへ出力, 356
  - ブート環境のアクティブ化, 391
  - ブート環境のアップグレード, 374
  - ブート環境の構成の表示, 414
  - ブート環境の削除, 408
  - ブート環境の作成, 328
  - ブート環境の名前の表示, 409
- Solaris Live Upgrade (続き)
  - ブート環境の名前の変更, 410
  - ブート環境を比較する, 406
- Solaris suninstall プログラム, 実行方法, 145
- Solaris Web Start
  - インストールプログラム, 129
  - グラフィカルユーザーインターフェース (GUI), 129
  - コマンド行インターフェース (CLI), 130
  - 実行方法, 129
  - ほかのインストール方法との比較, 33
  - 要件
    - x86 システム上の LBA, 30
    - スワップサイズ, 28
- Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のコピー, 224
- Solaris Live Upgrade 処理を取り消す, 406
- Solaris Live Upgrade のコマンド, 425
- Solaris Live Upgrade ブート環境の名前を変更する, 410
- Solaris Live Upgrade 用にブート環境のアクティブ化、概要, 335
- Solaris Live Upgrade 用のブート環境のアクティブ化の失敗、概要, 337
- Solaris Live Upgrade 用のブート環境のブートの失敗、概要, 337
- Solaris 9 ソフトウェアグループ, 303, 304
  - アップグレード, 304
  - パッケージの指定, 316
  - プロファイルの例, 232
  - リリースまたはバージョン, 289, 323
  - installed プロンプトキーワード, 323
- Solaris 9 ソフトウェアのバージョン, installed ルールキーワード, 289
- Solaris 9 ソフトウェアのリリース
  - installed プロンプトキーワード, 323
  - installed ルールキーワード, 289, 323
  - osname プロンプトキーワード, 323
  - osname ルールキーワード, 290, 323
- Solaris ソフトウェア
  - リリースまたはバージョン, 290, 323
- Solaris ソフトウェアのバージョン
  - installed プロンプトキーワード, 323
  - installed ルールキーワード, 323
  - osname プロンプトキーワード, 323
  - osname ルールキーワード, 290, 323
- stty コマンド, 43, 49, 268, 272

SUNWCall グループ, 303  
SUNWCprog グループ, 303  
SUNWCreq グループ, 303  
SUNWCuser グループ, 303  
SUNWCXall グループ, 303  
swap ファイルシステム  
    サイズの決定, 302  
    メモリーのサイズと, 302  
sysidcfg ファイル, ガイドラインと要件, 57  
sysidcfg ファイル, キーワード, 59  
sysidcfg ファイル  
    構文, 58  
    作成方法, 62  
system\_type プロファイルキーワード  
    説明と値, 319  
    例, 232

## T

tftpd デーモン, 463  
timed out RPC エラー, 462  
tip ライン接続とカスタム JumpStart インストール, 268, 272  
totaldisk プロブキーワード, 324  
totaldisk ルールキーワード, 291, 324  
transceiver cable problem メッセージ, 457

## U

UFS, 222  
uname コマンド, 128  
Unknown client error メッセージ, 455  
upgrade\_log ファイル, 135, 142, 148, 149, 154, 155  
usedisk プロファイルキーワード, 説明と値, 319  
/usr/sbin/rpld コマンド, 463

## V

/var/sadm/install\_data/upgrade\_log ファイル, 148, 149, 154, 155  
/var/sadm/system/logs/begin.log ファイル, 244

/var/sadm/system/logs/finish.log  
    ファイル, 245  
/var/yp/Makefile, 64  
/var/yp/make コマンド, 65  
volcheck コマンド, 222, 224, 225

## W

WARNING: CHANGE DEFAULT BOOT DEVICE, 464  
WARNING: clock gained xxx days メッセージ, 457  
Web プロキシの事前設定, 56

## あ

アーカイブ  
    クローンシステムも参照  
    スクリプトも参照  
    フラッシュも参照  
    差分アーカイブも参照  
    flar create コマンド, 202  
    JumpStart プロファイルの例, 234  
    アーカイブの作成  
        差分, 185  
        初期インストール, 180  
        説明, 165  
        例, 181, 187  
    圧縮, 171  
    インストール  
        インストール方法, 171, 189  
        カスタム JumpStart, 267  
        説明, 159  
    インストールの計画, 171  
    カスタマイズ  
        スクリプトの使用, 169  
        説明, 168  
    管理, 190  
    キーワード  
        section\_begin と section\_end, 197  
        識別セクション, 198  
        説明, 197  
        ユーザー定義, 202  
    クローンの更新  
        説明, 161  
    情報の取得, 192

アーカイブ (続き)  
セクション  
アーカイブ cookie、説明, 195  
アーカイブ識別、説明, 196  
アーカイブファイル、説明, 197  
作成, 177  
サマリー、説明, 196  
説明, 170, 195  
マニフェスト、説明, 196  
ユーザー定義、説明, 196  
ほかのインストール方法との比較, 35  
アクセス権  
begin スクリプト, 244  
finish スクリプト, 245  
JumpStart ディレクトリ, 218, 222  
新しい行に続ける、rules ファイル内で, 227  
アップグレード  
Solaris Live Upgrade による, 374  
Solaris Live Upgrade による、概要, 333  
Solaris Update リリースへ, 485  
カスタム JumpStart による, 72  
クリーンアップ, 143, 156  
作業の概要, 24  
システム要件, 27  
初期インストールとの比較, 25, 71  
ディスク容量の再配置, 72  
ディスク容量の推奨, 39  
方法, 26, 71  
方法の比較, 33  
アップグレードインストール  
Solaris Live Upgrade のためのアップグレード障害の回復, 395  
アップグレードの失敗, 467  
カスタム JumpStart インストール, 265  
プロファイルキーワード, 304, 311, 316  
ログファイル, 135, 142, 148, 149, 154, 155  
アップグレード障害, Solaris Live Upgrade による回復, 395  
アップグレードの失敗  
リブート時の問題, 468  
リブートの問題, 467  
アップグレードのための準備  
アップグレードする前に必要な情報, 50  
システムの準備, 49  
アンパサンド (&&) ルールフィールド, 228

い  
インストール  
フラッシュアーカイブ、説明, 159  
アップグレードとの比較, 25  
作業の概要, 24  
システム要件, 27  
ディスク容量の推奨, 39  
方法の比較, 33  
インストールサーバー  
CD メディアによる作成, 99, 105  
CD メディアによる作成、例, 103, 108  
CD メディアによるネットワークインストール設定, 123  
DVD による作成, 86  
DVD メディアを使用する作成, 83  
DVD メディアを使用する作成の例, 85  
DVD メディアを使用するネットワークインストールのための設定, 92  
DVD を使用する作成の例, 86, 89  
クロスプラットフォーム CD メディアを使用して作成, 113, 119  
クロスプラットフォーム CD メディアを使用して作成、例, 114, 119  
クロスプラットフォームメディアを使用して作成, 109  
サブネット上の, 85, 88, 103, 108, 114, 119  
適切なシステムの種類, 77  
インストールの準備  
カスタム JumpStart インストール, 214  
システム構成情報の事前設定  
方法, 56  
利点, 55  
インストールのための準備  
インストールする前に必要な情報, 44  
システムの準備, 43  
え  
エンドユーザーシステムサポート, 303  
エンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループ  
サイズ, 41  
説明, 40

か  
開始  
  check スクリプト, 240, 241  
開発者システムサポート, 303  
開発者システムサポートソフトウェアグループ  
  サイズ, 41  
  説明, 40  
カスタマイズ  
  アーカイブに対するスクリプトの使用, 169  
  フラッシュアーカイブ, 164  
カスタム JumpStart インストール, 265  
  フラッシュプロファイルの例, 234  
  tip ライン接続, 268, 272  
  いつアップグレードするか, 72  
  オプション機能, 243, 245, 257  
    begin スクリプト, 245  
    finish スクリプト, 249  
  概要, 213  
  準備, 214, 241  
  説明, 214  
  のインストール方法との比較, 34  
  ブートとインストール, 265  
  例, 210, 213, 277, 278, 280, 281, 282, 283, 284,  
    285, 286  
    check スクリプト, 283  
    JumpStart ディレクトリ, 281  
画面サイズの事前設定, 57  
カラー深度の事前設定, 57  
代替りのインストールプログラム, 257  
!(感嘆符) ルールフィールド, 228  
感嘆符 (!) ルールフィールド, 228

き  
キーボード言語、配置の事前設定, 57  
キーワード  
  sysidcfg ファイル, 59  
  カスタム JumpStart  
    フラッシュアーカイブ, 294  
    フラッシュアーカイブ, 197  
    プローブ, 259  
起動  
  rpld デーモン, 463  
  tftpd デーモン, 463  
共有、JumpStart ディレクトリの, 218  
共有可能なファイルシステム、定義, 328

共有コマンド、JumpStart ディレクトリの共  
有, 218

く  
クラスタのプロファイルキーワード  
  説明と値, 304, 381  
グラフィックスカードの事前設定, 57  
クリティカルなファイルシステム、定義, 328  
クローンシステム  
  アーカイブも参照  
  説明, 159  
クローンシステムのインストール  
  更新, 161  
  初期インストール, 159  
クローンシステムの更新, 説明, 161

け  
計画  
  Live Upgrade のシステム要件, 341  
  Solaris Live Upgrade, 341  
  インストール方法の比較, 33  
  作業の概要, 24  
  システム要件, 27  
  初期インストールとアップグレードの比  
    較, 25  
  ディスク容量, 39  
  ネットワークからインストール, 30  
  フラッシュインストール, 164  
検査  
  rules ファイルの妥当性検査, 240  
  プロファイル, 72, 237  
検証, プロファイル, 237

こ  
コアシステムサポート, 303  
  サイズ, 41  
  説明, 40  
構成  
  Solaris Live Upgrade のファイルシステ  
    ム, 355  
  ディスク構成ファイルの作成, 251

- コピー
  - JumpStart インストールファイル, 219, 223, 226
  - JumpStart ディレクトリファイル, 246
  - Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助), 224
  - Solaris Live Upgrade のファイルシステム, 404
- コメント
  - rules ファイル内の, 227
  - プロファイル内の, 231
- さ
- サーバー
  - CD メディアによるネットワークインストールの設定
    - スタンドアロンインストール, 123
  - DVD メディアを使用するネットワークインストールの設定
    - スタンドアロンインストール, 92
  - JumpStart ディレクトリの作成, 218
  - ネットワークインストールの要件, 77
  - ルート領域, 302
- 再起動スクリプト, 作成, 179
- サイズ
  - tip ウィンドウの大きさ, 268, 272
  - スワップ空間
    - 最大サイズ, 302
    - プロファイルの例, 214
  - スワップ領域
    - Solaris Web Start 用の最小サイズ, 28
    - ディスクレスクライアント, 302
  - ハードディスク, 84, 87, 100, 105, 111, 117, 122, 288, 291, 323, 324
    - プロンプトキーワード, 323
    - ルート領域, 302
  - メモリー, 289, 323
- 再設定する、入出力割り込みの後にディスプレイと端末を, 128
- サイト固有のインストールプログラム, 257
- 削除
  - Live Upgrade ブート環境, 408
  - クラスタ、アップグレード時の, 304
  - ソフトウェアグループからパッケージを, 316
- 作成
  - CD メディアによるインストールサーバーの, 99, 105
  - CD メディアを使用してインストールサーバーを, 98
    - custom\_probes.ok ファイル, 263
    - custom\_probes.ok ファイル, 263
    - DVD メディアを使用するインストールサーバー, 83
    - DVD メディアを使用するインストールサーバーの, 81
    - DVD メディアを使用するサブネット上でのブートサーバーの, 90
    - /etc/locale ファイル, 65
    - フラッシュアーカイブ計画, 167
  - JumpStart ディレクトリ, 218
  - Live Upgrade のブート環境, 328, 353
  - rules.ok ファイル, 263
  - rules.ok ファイル, 239, 240
  - rules ファイル, 227
  - sysidcfg ファイル, 62
  - UFS, 222
  - インストールサーバー, 86
  - クロスプラットフォーム CD メディアを使用したインストールサーバー, 113, 119
  - サブネット上でブートサーバーを
    - CD メディアを使用して, 121
  - サブネット上にブートサーバーを
    - 作業、CD メディア, 98
  - サブネット上のブートサーバー
    - 作業、DVD メディア, 82
  - ディスク構成ファイル, 251
  - フラッシュアーカイブ
    - カスタマイズ, 168
    - 作業, 180
    - 説明, 165
  - プロファイル, 244
    - 説明, 230
  - ローカルファイルシステムの, 307
  - 作成前スクリプト, 作成, 176
  - サブネット
    - CD メディアによるブートサーバー作成, 121
    - DVD メディアを使用するブートサーバーの作成, 90
    - インストールサーバー, 88, 113, 119
  - 差分アーカイブ
    - 計画, 167

差分アーカイブ (続き)

作成, 185

説明, 161

## し

時間帯の事前設定, 56

システム構成情報の事前設定

NIS+ によるロケール, 65

NIS による言語またはロケール, 64

電源管理, 66

ネームサービスによる, 57, 63

方法の選択, 56

利点, 55

システム情報の表示, 128

事前設定、システム構成情報の、sysidcfg ファイルを使用する, 57

出力ファイル

begin スクリプトログ, 244

finish スクリプトログ, 245

アップグレードログ, 135, 142, 148, 149, 154, 155

準備、Solaris 9 をインストールする、カスタム

JumpStart インストール, 241

照合

rootdisk の値, 318

動的プロファイル, 244

ルールでの順序, 229

ルールの順序, 265, 270

## す

スクリプト

begin スクリプト, 243, 245, 257

finish スクリプト, 245, 249, 257

フラッシュアーカイブ

ガイドライン, 169

カスタマイズ, 169

再起動, 179

作成, 175, 179

配置前の作成, 178

ルールフィールド内の Bourne シェルスクリプト, 228

スタンドアロンシステム

カスタム JumpStart インストールの例, 210

プロファイルの例, 232

ステータス、ブート環境を表示する, 402

スライス, 232

Live Upgrade のガイドライン, 345

Live Upgrade のためにファイルシステムをカスタマイズ, 356

プロファイルの例, 232

ルートスライスの位置, 458

ルールキーワード, 323

スワップファイルシステム

Solaris Live Upgrade の概要, 329

カスタマイズ

Live Upgrade 用 (キャラクタインタフェース), 358

Live Upgrade 用 (コマンド行), 365

スワップの割り当て, 41

ディスクレスクライアントのスワップ領域, 302

プロファイルの例, 214

## せ

セキュリティ

root パスワード, 248, 249

セキュリティポリシー、事前設定, 56

全体ディストリビューション, 303

全体ディストリビューションソフトウェアグループ

サイズ, 41

説明, 40

全体ディストリビューションと OEM サポート, 303

全体ディストリビューションと OEM サポートソフトウェアグループ

サイズ, 41

説明, 40

## そ

ソフトウェアグループ

アップグレード, 27, 71, 304

サイズ, 41

説明, 41

パッケージの指定, 316

プロファイルの, 303, 304

プロファイルの例, 232

## た

対話式インストールプログラム, ほかのインストール方法との比較, 34

### 妥当性検査

custom\_probes ファイル

check を使用する, 264

テスト, 264

rules ファイル, 240

check の使用, 239, 241, 264

カスタム JumpStart の例, 283

動的プロファイルと, 245

端末タイプの事前設定, 56

## つ

### 追加

finish スクリプトによりパッケージとパッチを, 246

finish スクリプトによりファイルを, 246

locale.org\_dir テーブルエントリ, 66

rules ファイルにルールを, 228

インストールサーバー構成

CD メディアによる, 123

インストールサーバーの構成

DVD メディアを使用する, 92

クラスタ、アップグレード時の, 304

ソフトウェアグループ内のパッケージ, 316

データレスクライアント

DVD メディアを使用する, 92

データレスクライアントを

CD メディアを使用して, 123

ネットワーク上でシステムを, 82, 98

パッケージをソフトウェアグループから, 381

## て

ディスク構成ファイル

作成

SPARC システム, 252

x86 システム, 253

説明, 235, 252

ディスク容量

計画, 39

ソフトウェアグループの要件, 41

ディスクレスクライアント

スワップ領域, 302

プラットフォーム, 301

ディレクトリ

JumpStart, 218, 220, 221, 222, 227, 246, 281

インストールファイルのコピー, 219

インストールファイルをコピー, 223, 226

ディレクトリの共有, 218, 281

変更, 240, 263

ローカルディスク上の Solaris 9 x86

Platform Edition ソフトウェアのイメージへ, 225

ローカルディスク上の Solaris 9 SPARC

Platform Edition ソフトウェアのイメージ, 223

ローカルディスク上の Solaris 9 ソフト

ウェアのイメージに, 219

ディレクトリの変更

ローカルディスク上のソフトウェアイメージ, 223

ローカルディスクの Solaris 9 x86 Platform Edition ソフトウェアのイメージへ, 225

デーモン, 463

テスト

custom\_probes ファイルの妥当性検査

check の使用, 263

custom\_probes のテスト, 264

rules ファイルの妥当性検査

check の使用, 264

rules ファイルの妥当性検査

check の使用, 239, 241

カスタム JumpStart の例, 283

動的プロファイルと, 245

プロファイル, 235, 239, 383

デフォルト

partitioning

使用しないディスク, 304

ディスクの指定, 319

SI\_CONFIG\_DIR 変数, 246

インストールされるソフトウェアグループ, 303

動的プロファイル名, 245

電源管理, 57, 66

## と

動的プロファイル, 244, 245

トークンリングカードでのブートエラー, 462  
ドメイン  
    プローブキーワード, 323  
    ルールキーワード, 288, 323  
ドメイン名の事前設定, 56  
トラブルシューティング, インストールの一般的な問題, 458

## な

名前/名前の指定  
    rules ファイル, 227  
    ソフトウェアグループ, 304  
名前/名前の割り当て, ホスト名, 125  
名前/命名  
    ホスト名, 288, 323  
名前の指定  
    custom\_probes ファイル, 260  
    システムプラットフォーム名, 128  
名前の割り当て  
    rules ファイル, 228  
    システムのモデル名, 290, 323  
    動的プロファイル名, 245

## ね

ネームサーバーの事前設定, 56  
ネームサービス, 事前設定, 56  
ネットワークインストール  
    DHCP を使用, 80  
    DVD メディアを使用する, 82, 90  
    PXE の使用, 32, 491  
    クロスプラットフォームメディアの使用, 109  
    準備, 77  
    説明, 77  
    要件, 77  
ネットワークインタフェースの事前設定, 56  
ネットワーク上でのインストール  
    CD メディアによる, 99, 104, 121  
ネットワーク上のインストール, カスタム  
    JumpStart インストール, 213  
ネットワーク番号, 290, 323

## は

ハードディスク  
    fdisk パーティションの要件, 29  
    IDE ドライブの表面検査, 464  
partitioning  
    partitioning default の指定, 319  
    partitioning デフォルトに含められない, 304  
    プロファイルキーワード, 316  
    例, 232  
rootdisk の値, 318  
サイズ, 84, 87, 100, 105, 111, 117, 122, 288, 291, 323, 324  
    プローブキーワード, 323  
    ルート領域, 302  
スワップ空間  
    最大サイズ, 302  
    プロファイルの例, 214, 232  
スワップ領域  
    Solaris Web Start に必要な容量の要件, 28  
    スワップの割り当て, 41  
    ディスクレスクライアント, 302  
マウント, 307  
配置後スクリプト, 作成, 179  
配置前スクリプト  
    作成, 178  
    説明, 196  
パス  
    check スクリプト, 240, 263  
パスワード、root の, 248, 249  
バックスラッシュ、rules ファイル内の, 227  
パッケージ  
    chroot により追加, 247  
    finish スクリプトによる追加, 246  
    Live Upgrade で追加、概要, 376  
    管理ファイル, 243  
    要件  
        JumpStart プログラムや Solaris Live Upgrade を使用する場合, 477  
        Solaris Live Upgrade の非アクティブブート環境, 480  
        Solaris Live Upgrade 用の非アクティブブート環境, 478  
パッチ  
    chroot により追加, 247  
    finish スクリプトによる追加, 246  
    Live Upgrade で追加、概要, 376  
パッチアナライザ, 485



## ひ

日付の事前設定, 56

### 表示

Live Upgrade ブート環境の名前, 409

tip ライン接続とカスタム JumpStart インストール, 268, 272

共有ファイルシステム, 128

システム情報, 128

プラットフォーム名, 128

マウントされたファイルシステム, 128

表示解像度の事前設定, 57

表面検査、IDE ドライブの, 464

## ふ

### ファイルとファイルシステム

begin スクリプト出力, 244

finish スクリプト出力, 245

Live Upgrade におけるファイルシステムの共有、概要, 347

Live Upgrade の概要, 328

Live Upgrade のカスタマイズ, 355

Solaris Live Upgrade の概要, 329

UFS の作成, 222

共有ファイルシステムの表示, 128

コピー, 224, 246

JumpStart インストールファイル, 219, 223, 226

Solaris Live Upgrade の共有可能なファイルシステム, 369

マウントされたファイルシステムの表示, 128

リモートファイルシステムのマウント, 307

ローカルファイルシステムの作成, 307

ファクトリ JumpStart, ほかのインストール方法との比較, 36

### ブートサーバー

DVD を使用してサブネット上に作成, 88

DVD を使用する例, 91

サブネット上で CD メディアを使用して作成, 121

サブネット上での作成

DVD メディアを使用する, 90

説明, 78

ネットワークインストールの要件, 78

ブート、システムの、端末とディスプレイを再設定する, 128

ブートディスクパーティションレイアウト、新規デフォルト (x86 システム), 31

複数行のルール、rules ファイル内の, 227

### フラッシュ

#### インストール

Live Upgrade ブート環境, 385

Solaris suninstall プログラム、SPARC, 148

Solaris suninstall プログラム、x86, 154

Solaris Web Start、SPARC, 133

Solaris Web Start、x86, 141

#### キーワード

カスタム JumpStart, 294

説明, 159

フラッシュアーカイブの結合, 191

フラッシュアーカイブの分割, 190

### プラットフォーム

インストールサーバーの設定, 125

システム属性とプロファイルの一致, 265, 270

システム属性とプロファイルの照合, 229

システムのモデル名, 290, 323

ディスクレスクライアント, 301

名前の決定, 128

プローブキーワード, 323

ルールキーワード, 289, 323

不良ブロック, 464

### プローブキーワード

arch, 323

disks, 323

domainname, 323

hostaddress, 323

hostname, 323

installed, 323

karch, 323

memsize, 323

model, 323

network, 323

osname, 323

totaldisk, 324

プローブキーワードs, rootdisk, 323

### プロセッサ

プローブキーワード, 323

ルールキーワード, 287, 323

### フロッピーディスク

JumpStart ディレクトリ, 221

JumpStart ディレクトリのアクセス, 220

## フロッピーディスク (続き)

Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のコピー, 224

フォーマット, 222, 225, 490

フロッピーディスクのフォーマット, 222

## プロファイル

検査, 72, 237

コメント, 231

作成, 230

システムの照合, 229, 265, 270

説明, 230

テスト, 239

動的プロファイル, 244, 245

名前の指定, 231, 380

要件, 227, 231

ルールフィールド, 228

例, 232, 281, 282

フラッシュ, 234

プロファイルキーワード, 292

archive\_location, 294

backup\_media, 299

boot\_device, 300

client\_arch, 301

client\_root, 302

cluster

説明と値, 303

例, 232

dontuse

usedisk と, 319

説明と値, 304

fdisk

説明と値, 305

fdisk

例, 232

filesystem

説明と値, 307

リモートファイルシステム, 307

例, 232

ローカルファイルシステム, 307

forced\_deployment

説明と値, 309

geo

説明と値, 310

install\_type, 231

説明と値, 311

要件, 232

例, 232

## プロファイルキーワード (続き)

isa\_bits

説明と値, 312

layout\_constraint

説明と値, 312

local\_customization

説明と値, 314

locale

説明と値, 314

no\_master\_check

説明と値, 315

num\_clients, 315

package

説明と値, 316

partitioning

使用しないディスク, 304

説明と値, 316

ディスクの指定, 319

例, 232

root\_device, 317

system\_type

説明と値, 319

例, 232

usedisk

説明と値, 319

大文字と小文字の区別, 292

クラスタ

説明と値, 304, 381

プロファイルキーワード>プロファイルキーワード, client\_swap, 302

プロファイルフィールドの = (等号記号), 244

プロファイルフィールドの等号記号 (=), 244

## へ

変更、ディレクトリの

JumpStart ディレクトリへ, 240, 263

ローカルディスク上の Solaris 9 ソフト

ウェアのイメージに, 219

変数

SI\_CONFIG\_DIR, 246

SI\_PROFILE, 245

SYS\_MEMSIZE, 237

編成

Solaris 9 DVD (SPARC 版), 431

Solaris 9 DVD (x86 版), 437

## 編成 (続き)

- Solaris 9 INSTALLATION CD (SPARC 版)  
, 432
- Solaris 9 INSTALLATION CD (x86 版), 439
- Solaris 9 LANGUAGES CD (SPARC 版)  
, 434
- Solaris 9 LANGUAGES CD (x86 版), 441
- Solaris 9 SOFTWARE CD (SPARC 版)  
CD, 433
- Solaris 9 SOFTWARE CD (x86 版) CD, 439

## ほ

- ポインティングデバイスの事前設定, 57
- ホスト名の事前設定, 56
- ボリュームマネージャ  
コピー, 222, 224, 225

## ま

- マイクロプロセッサ  
プローブキーワード, 323
- ルールキーワード, 287, 323
- マウント  
begin スクリプトの注意事項, 244
- Solaris 9 インストールによる, 245
- マウントされたファイルシステムの表  
示, 128
- リモートファイルシステム, 307
- マスターシステム  
アーカイブも参照
- インストールのカスタマイズ, 164
- インストール方法, 175
- 周辺装置, 165
- 説明, 164
- マッピング、IDE ドライブの不良ブロック, 464

## め

- メモリー  
スワップ空間のサイズと, 302
- プローブキーワード, 323
- ルールキーワード, 289, 323

## も

- モニタータイプの事前設定, 56
- 問題の解決  
一般的なインストールの問題, 462
- 間違ったサーバーからのブート, 462

## ゆ

- ユーザー定義セクション  
フラッシュアーカイブ  
作成, 177

## よ

- 要件  
custom\_probes ファイル, 260
- fdisk パーティション, 29
- Live Upgrade の使用, 341
- Solaris Web Start の使用, 28, 30
- スワップ領域, 28
- ディスク容量, 39
- ネットワークインストール  
サーバー, 77
- プロファイル, 227, 231
- メモリー, 28

## り

- リモートファイルシステム, マウント, 307

## る

- ルート (/) ファイルシステム  
JumpStart で設定される値, 318
- 非アクティブブート環境のパッケージ要  
件, 478
- ルート (/) ファイルシステム, プロファイルの  
例, 214
- ルート環境を finish スクリプトでカスタマイズ  
する, 248
- ルートスライスの位置, 458
- ルール  
rootdisk 照合ルール, 318
- 構文, 228

## ルール (続き)

- 照合順序, 229, 265, 270
- 妥当性の検査, 240, 264
- 動的プロファイル, 244, 245
- フィールドの説明, 228
- 複数行のルール, 227
- 例, 229

## ルールキーワード, 287

- any, 287, 323
- arch, 287, 323
- disksize, 288, 323
- domainname, 288, 323
- hostaddress, 288, 323
- hostname, 287, 288, 323
- installed, 289, 323
- karch, 289, 323
- memsize, 289, 323
- model, 290, 323
- network, 290, 323
- osname, 290, 323
- probe, 291
- totaldisk, 291, 324

## ろ

### ログファイル

- begin スクリプト出力, 244
- finish スクリプト出力, 245
- アップグレードインストーラ, 135, 142, 148, 149, 154, 155

### ロケールファイル, 65

- 論理積ルールフィールド, 228